

諏訪ノ木Ⅵ遺跡

渋川都市計画道路3.3.1号中村上郷線街路事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集

2006

群馬県渋川土木事務所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

諏訪ノ木Ⅵ遺跡

渋川都市計画道路3.3.1号中村上郷線街路事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集

2006

群馬県渋川土木事務所
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



1区 谷部排滓場から出土した椀形鍛冶滓と羽口

谷部排滓場からは3,723点もの鉄関連遺物が出土した。出土した鉄関連遺物は鍛冶に関わるもので、椀形鍛冶滓2,188点、鍛冶滓519点、粘土質溶解物246点、羽口322点などである。写真はその一部を撮影したものである。



羽口付き楕形鍛冶滓 1区谷部排滓場出土 (No.69)

羽口が付着した楕形鍛冶滓が出土した。この遺物は、これまで明らかではなかった古代の鍛冶炉で使用された羽口の挿入角度を推定できる貴重な資料である。羽口の上には軽石がのせられており、羽口と軽石はガラス質の滓で付着している（上の写真）。下の写真2枚は軽石と羽口の半分を接合せずに撮影したものである。



炉床土付き椀形鍛冶滓 1区谷部排滓場出土 (No.68)

椀形鍛冶滓が鍛冶炉全体に広がる形状で、滓の周辺に炉床土から炉壁下部(左側)までが付着している。椀形鍛冶滓と鍛冶炉の関係が推測できる好資料である。



鉄鏝 2区13号(右)、14号住居出土(左)



鉄鏝 3区5号住居出土



鉄斧 2区4号住居出土

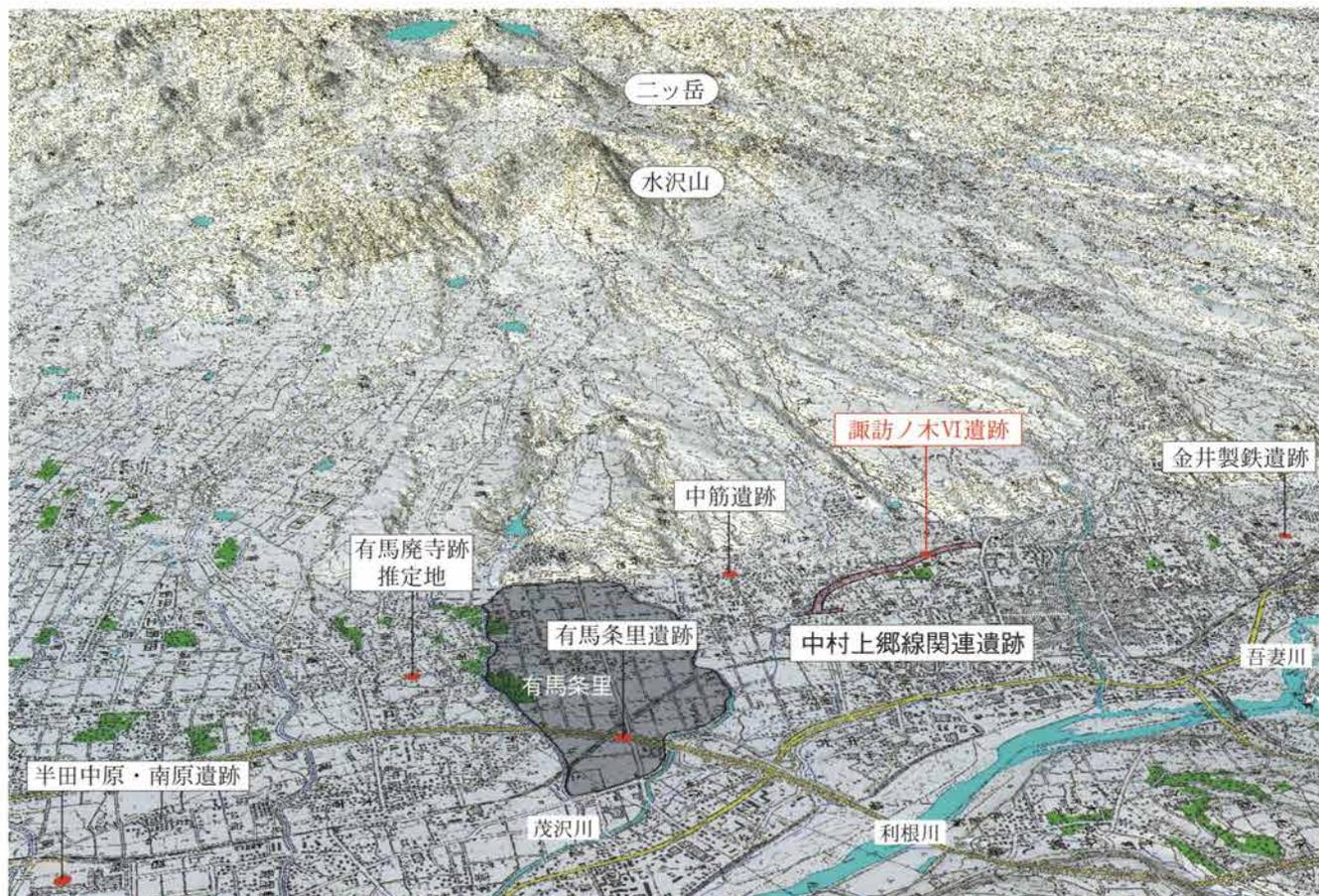


鉄製紡錘車 2区7号住居出土



諏訪ノ木VI遺跡周辺（南東から）

写真中央上下方向の調査区が中村上郷線関連遺跡である。中央やや下の学校が浜川市立豊秋小学校。豊秋小学校左（西）の調査区が諏訪ノ木V遺跡で、そのすぐ上（北）に諏訪ノ木VI遺跡がある。



諏訪ノ木VI遺跡周辺（鳥瞰図）

序

諏訪ノ木Ⅵ遺跡は、群馬県渋川市中心部の石原町に所在し、渋川都市計画道路3.3.1号 中村上郷線街路事業に伴い、群馬県土木部（現 県土整備局）の委託を受け群馬県教育委員会の調整のもと、平成13年6月から平成15年3月に発掘調査がおこなわれました。

本路線は延長2,690m、基本幅員27mの都市計画道路であり、関越自動車道渋川インターチェンジから市街地を迂回して伊香保方面に連絡するとともに、市街地の環状道路の役割も有する重要路線であります。この工事工程にあわせ、県土木部・県教育委員会・渋川市・事業団による協議の結果、埋蔵文化財の発掘調査に着手することになりました。

調査の結果、縄文時代から近世に至る多くの遺構・遺物が発見されました。特に奈良・平安時代の鉄生産に関わる資料などは貴重な発見といえます。

調査に続き、平成16年度には整理作業を実施し、ここに報告書の刊行と成りました。

遺跡の発掘調査から本報告書の刊行に至るまでは、群馬県渋川土木事務所、群馬県教育委員会、渋川市教育委員会をはじめとする諸機関並びに地元関係者の皆様に大変なご尽力を賜りました。ここに心から感謝申し上げますとともに、本報告書や調査資料が広く歴史の究明に活用されますことを念願し、序といたします。

平成18年2月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 高橋 勇 夫

例 言

1 本報告書は、渋川都市計画道路3.3.1号中村上郷線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施された「諏訪ノ木Ⅵ遺跡」の報告である。石原東遺跡A～C・E・F区、諏訪ノ木遺跡、諏訪ノ木Ⅱ～Ⅳ遺跡は渋川市教育委員会、石原東遺跡D区、諏訪ノ木Ⅴ遺跡、高源地東Ⅰ遺跡は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で発掘調査を行っている。

2 本書に所収の遺跡名と発掘調査地の所在は、以下のとおりである。

諏訪ノ木Ⅵ（すわのきろく）遺跡

群馬県渋川市石原

3 事業主体 群馬県渋川土木事務所

4 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

5 発掘調査の実施期間と調査面積は、以下の通りである。

諏訪ノ木Ⅵ遺跡 平成13年6月7日～15年3月31日 面積 6,360m²

6 調査組織は以下のとおりである。

平成13年度

理事長 小野宇三郎 常務理事 赤山容造（事務担当） 吉田 豊（総務担当）

管理部長 住谷 進 調査研究部長 能登 健 総務課長 大島信夫 調査研究第3課長 中東耕志

事務担当 笠原秀樹、小山建夫、須田朋子、吉田有光、森下弘美、片岡徳雄

調査担当 間庭 稔、平方篤行

嘱託員 川道 亨

平成14年度

理事長 小野宇三郎 常務理事 吉田 豊 事務局長 神保侑史

管理部長 萩原利通 調査研究部長 巾 隆之 総務課長 植原恒夫 調査研究第2課長 小山友孝

事務担当 小山建夫、高橋房雄、須田朋子、吉田有光、森下弘美、田中賢一

調査担当 間庭 稔、笹澤泰史

7 整理作業・報告書作成期間は以下のとおりである。

平成16年10月1日～平成17年度9月30日

8 整理組織は以下のとおりである。

平成16年度

理事長 小野宇三郎 常務理事 住谷永一 事務局長 神保侑史

管理部長 矢崎俊夫 調査研究部長 右島和夫 総務課長 丸岡道雄 資料整理課長 相京建史

事務担当 竹内 宏、高橋房雄、須田朋子、吉田有光、栗原幸代、佐藤聖行、阿久沢玄洋

整理担当 笹澤泰史

整理作業 長沼久美子（嘱託）、狩野芳子、藤井文江、狩野なつ子、鈴木春美

平成17年度

理事長 小野宇三郎 高橋勇夫 常務理事 木村裕紀 事務局長 津金沢吉茂

管理部長 矢崎俊夫 調査研究部長 西田健彦 資料整理部長 中東耕志 総務課長 宮前結城雄

事務担当 竹内 宏、石井 清、須田朋子、吉田有光、今泉大作、栗原幸代、清水秀紀、佐藤聖行

整理担当 笹澤泰史

整理作業 長沼久美子（嘱託）、小久保トシ子、渡辺八千代、狩野なつ子、飯野美和子

9 本書作成の担当者は次のとおりである。

編集・執筆	笹澤泰史
遺物観察	石器類は岩崎泰一、桜井美枝、縄文土器は山口逸弘、施釉陶器・土師器・須恵器類は綿貫邦男、神谷佳明、小島敦子、桜岡正信、陶磁器類は大江正行、大西雅広、鉄生産関連遺物は穴澤義功氏（たたら研究会）、鉄鏃は杉山秀宏氏（群馬県立歴史博物館）の協力を得た。
口絵写真撮影	小川忠博
遺物写真撮影	佐藤元彦
人骨・獣骨写真撮影	楢崎修一郎
遺構写真撮影	現場担当者 航空写真は技研測量設計株式会社と株式会社測研が行った。
測量	技研測量設計株式会社（委託）
保存処理	関 邦一、土橋まり子、小材浩一、津久井桂一
遺物機械実測	富沢スミ江、田所順子、伊東博子、岸 弘子、廣津真希子
木器実測	小池 縁、田中のぶ子、大野容子、佐々木茂美、森田智子
石器実測	技研測量設計株式会社

10 当遺跡の内容をより詳細に浮き彫りにする意図で、次の各位に資料の分析や測定を依頼した。

石材同定	飯島静男（群馬地質研究会）
人骨・歯の鑑定	楢崎修一郎
鉄関連遺物の金属学的考察	九州テクノリサーチ 大沢正巳・鈴木瑞穂
樹種同定	株式会社 パレオラボ

11 発掘調査及び出土遺物整理にあたっては、次の諸氏、諸機関にご教示、ご協力を賜った。（敬称略）

渋川市教育委員会・穴澤義功・荒木勇次・大塚昌彦・小林良光・桜井和哉

12 出土遺物・図面・写真・記録などの資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管してある。

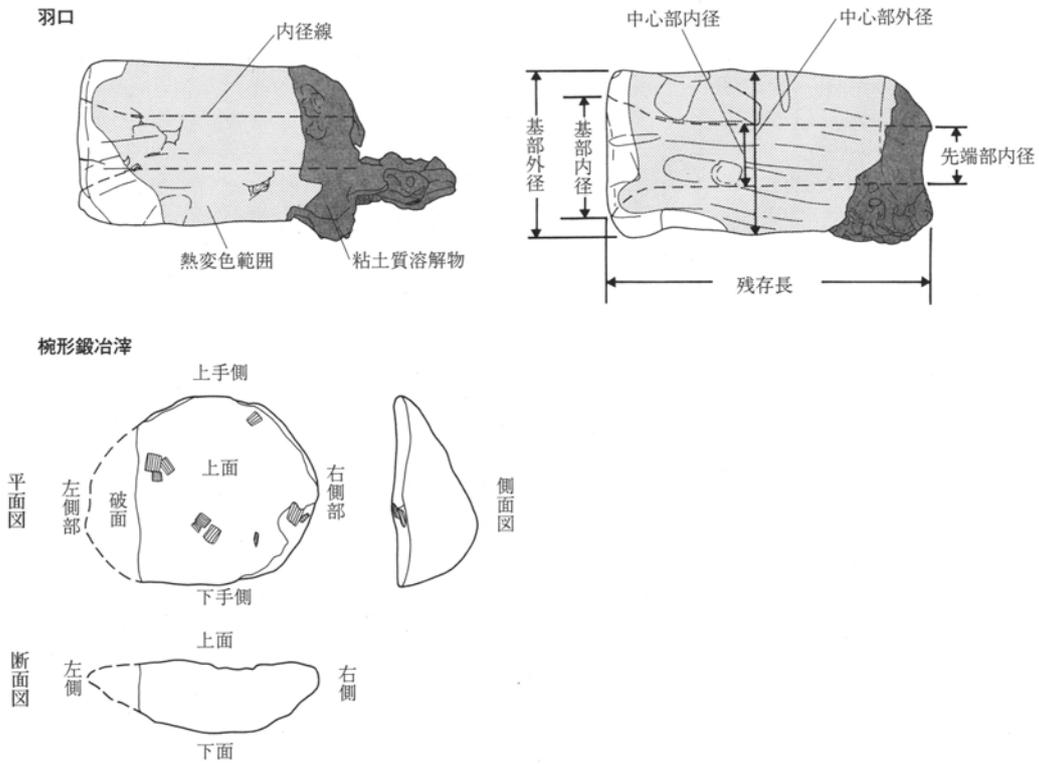
凡 例

- 1 本書中の遺構番号は、発掘調査時に付したものをそのまま使用している。
- 2 本書の挿図縮尺は、以下を基本とする。
 - 竪穴住居…………… 1/30、1/60
 - 掘立柱建物…………… 1/40、1/80
 - 土坑・井戸…………… 1/40
 - 溝…………… 1/100
 - 土器…………… 1/2、1/3、1/4、1/6
 - 石器…………… 1/1、1/3、1/6、1/8
 - 鉄関連遺物…………… 1/2、1/3
 - 銭貨…………… 1/1
 - 付図（全体図）…………… 1/250
 - (2) 遺構図の方位記号は国家座標の北を表している。座標系は国家座標第Ⅸ系である。ここで使用している国家座標は、2000年以前の旧座標である。
 - (3) 住居の方位は、炉の付設された住居では住居の長軸線、竈が付設された住居では竈が付設された壁、あるいは竈が付設されたと推定される壁に直行する軸線の、真北からの角度とした。
 - (4) 遺物番号は本文、挿図、表と一致する。
 - (5) 竪穴住居跡住居の面積は、1/20図上でプランメーターにより住居の壁の内側を3回測定し、計測平均値を採った。
 - (6) 色調については、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、新版標準土色帖（平成6年）によった。
 - (7) 本文中の遺構の位置は、国家座標Ⅸ系を用いたグリッドで表した。国家座標Ⅸ系を5m方眼に区切り、X、Y軸の交点下3桁をグリッド名とした。462-136は、X軸=+54,462、Y軸=-74,136を指す。
- 3 本文中で使用したテフラの記号と噴出年代は以下の通りである。
 - 浅間B軽石 (As-B) ……………1108 (天仁元) 年 榛名ニッ岳伊香保テフラ (Hr-FP) …………… 6世紀中葉
 - 榛名ニッ岳洪川テフラ (Hr-FA) …………… 6世紀初頭 浅間C軽石 (As-C) …………… 4世紀初頭As-C軽石の噴出年代については、3世紀に遡る可能性が指摘されている（若狭 徹「群馬の弥生時代が終わるとき」『人が動く・土器が動く 古墳が成立する頃の土器の交流』かみつけの里博物館 1998）。
- 4 土層注記の粒径区分はウェントワース法の基準によるが、テフラの分類はその分類基準による。
- 5 鉄関連遺物については、穴澤義功氏の指導の下で、磁石（強力磁石TAJIMA PUP-M、特定の標準磁石）と特殊金属探知器による分類と、肉眼観察による考古学的な分類を行った。遺物の観察は穴澤氏の御教授を得た。鉄関連遺物の観察表の主な項目の見方は以下の通りである。詳しくは、穴澤義功による2001『製鉄遺跡発掘調査の視点と方法』（奈良国立文化財研究所・発掘技術者専門研修「生産遺跡調査過程」資料）及び2005「鉄関連遺物の発掘調査から遺物整理・分析資料抽出への指針案」『鉄関連遺物の分析評価に関する研究報告』（日本鉄鋼協会社会鉄鋼工学部会）を参照していただきたい。
 - (1) 磁着度 鉄関連遺物分類用の特定の「標準磁石」を用いて、資料との反応の程度を数値化したもの。数値が大きいほど、磁石との反応が強い。
 - (2) メタル度 特殊金属探知器により金属の量を分類したもの。銹化 (△)、H (○)、M (◎)、L

(●)、特し (☆) の順で金属部分が多いことを示す。

(3) 破面数 資料の破面 (欠損した面) の数。

6 鉄関連遺物の計測位置及び各部位名称用例は以下の通りである。



7 本書の挿図指示は次のとおりである。



目 次

序

例言・凡例

目 次

挿図版目次

第1章 調査の経過

- [1] 調査に至る経緯 1
- [2] 調査の経過 2
- [3] 調査の方法 2

第2章 遺跡の立地と環境

- [1] 位置と地理的環境 5
- [2] 歴史的環境 7

第3章 基本層序 12

第4章 遺構と遺物

- [1] 竪穴住居 13
- [2] 鍛冶関連遺構 85
- [3] 土坑 155
- [4] 土坑墓 166
- [5] 溝 169
- [6] 柱穴列 170
- [7] Hr-FA下面 171
- [8] 遺構外出土遺物 173

第5章 自然科学分析

- [1] 諏訪ノ木VI遺跡出土鍛冶関連分析対象遺物の考古学的観察 187
- [2] 諏訪ノ木VI遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査
九州テクノリサーチ 大沢正巳・鈴木瑞穂 213
- [3] 諏訪ノ木VI遺跡出土人骨 榑崎修一郎 261

第6章 調査の成果

- 諏訪ノ木VI遺跡とその周辺の鉄生産 笹澤泰史 265

写真図版・写真図版目次

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置	1
第2図	中村上郷線関連遺跡	3
第3図	調査区割図	4
第4図	遺跡周辺の地形図	6
第5図	周辺の遺跡	10
第6図	基本土層模式図	12
第7図	2区1号住居平面・断面図	13
第8図	2区1号住居竈平面・断面図、出土遺物図	14
第9図	2区2号住居平面・断面図	15
第10図	2区2号住居竈平面・断面図、出土遺物図	16
第11図	2区3号住居・竈平面・断面図、出土遺物図	17
第12図	2区4号住居平面・断面図	19
第13図	2区4号住居掘り方・竈平面・断面図	20
第14図	2区4号住居出土遺物図(1)	21
第15図	2区4号住居出土遺物図(2)	22
第16図	2区5号住居・掘り方平面・断面図	24
第17図	2区5号住居竈平面・断面図、出土遺物図	25
第18図	2区7号住居平面・断面図	25
第19図	2区7号住居掘り方平面図、出土遺物図	26
第20図	2区8号住居・掘り方平面・断面図	27
第21図	2区8号住居竈平面・断面図、出土遺物図	28
第22図	2区10号住居・掘り方平面・断面図	30
第23図	2区10号住居竈平面・断面図、出土遺物図	31
第24図	2区11号住居平面・断面図	32
第25図	2区12号住居平面・断面図、出土遺物図(1)	32
第26図	2区12号住居掘り方平面・断面図、出土遺物図(2)	33
第27図	2区13号住居平面・断面図	34
第28図	2区13号住居竈平面・断面図、出土遺物図(1)	35
第29図	2区13号住居出土遺物図(2)	36
第30図	2区14号住居・掘り方・竈平面・断面図	37
第31図	2区14号住居出土遺物図	38
第32図	2区16号住居平面・断面図	39
第33図	2区16号住居掘り方平面・断面図、出土遺物図	40
第34図	2区17号住居・掘り方・竈平面・断面図	41
第35図	2区17号住居出土遺物図	42
第36図	2区19号住居・掘り方平面・断面図	43
第37図	2区19号住居竈平面・断面図、出土遺物図(1)	44
第38図	2区19号住居出土遺物図(2)	45
第39図	2区20号住居・竈平面・断面図	46
第40図	2区20号住居掘り方・竈平面・断面図、出土遺物図	47
第41図	2区21号住居・竈平面・断面図	48
第42図	2区21号住居掘り方・竈平面・断面図、出土遺物図	49
第43図	2区22号住居・掘り方平面・断面図	50
第44図	2区22号住居竈平面・断面図、出土遺物図(1)	51
第45図	2区22号住居出土遺物図(2)	52
第46図	2区23号住居平面・断面図	53
第47図	2区23号住居掘り方・竈平面・断面図、出土遺物図	54
第48図	2区24号住居平面・断面図	55
第49図	2区24号住居掘り方・竈平面・断面図、出土遺物図	56
第50図	2区25号住居・掘り方平面・断面図、出土遺物図	57
第51図	2区26号住居・掘り方平面・断面図	58
第52図	2区26号住居出土遺物図	59
第53図	2区27号住居平面・断面図	59
第54図	2区27号住居掘り方・竈平面・断面図	60
第55図	2区27号住居出土遺物図	61
第56図	2区28号住居平面・断面図	61
第57図	2区28号住居出土遺物図	62
第58図	2区29号住居・掘り方・竈平面・断面図、出土遺物図(1)	63
第59図	2区29号住居出土遺物図(2)	64
第60図	2区32号住居平面・断面図	65
第61図	2区32号住居掘り方平面・断面図、出土遺物図	66
第62図	2区33号住居平面・断面図	66
第63図	2区33号住居掘り方・竈平面・断面図、出土遺物図	67
第64図	2区34号住居平面・断面図、出土遺物図(1)	68
第65図	2区34号住居出土遺物図(2)	69
第66図	3区1号住居・竈平面・断面図	69
第67図	3区1号住居掘り方平面・断面図、出土遺物図(1)	70
第68図	3区1号住居出土遺物図(2)	71
第69図	3区2号住居・掘り方平面・断面図、出土遺物図	72
第70図	3区2号住居竈平面・断面図	73
第71図	3区3号住居・掘り方・竈平面・断面図	74
第72図	3区3号住居出土遺物図	75
第73図	3区4号住居平面・断面図	76
第74図	3区4号住居掘り方・竈平面・断面図、出土遺物図(1)	77
第75図	3区4号住居出土遺物図(2)	78
第76図	3区5号住居平面・断面図	79
第77図	3区5号住居掘り方平面・断面図、出土遺物図(1)	80
第78図	3区5号住居出土遺物図(2)	81
第79図	3区5号住居出土遺物図(3)	82
第80図	2区1号竪穴状遺構出土遺物図(1)	83
第81図	2区1号竪穴状遺構平面・断面図、出土遺物図(2)	84
第82図	鍛冶関連遺構全体図	87
第83図	1号鍛冶炉平面・断面図	89
第84図	1区谷部排滓場 鉄関連遺物構成図	90
第85図	1区1号鍛冶炉出土遺物図(1)	91
第86図	1区1号鍛冶炉出土遺物図(2)	92
第87図	1区2号鍛冶炉・掘り方平面・断面図	94
第88図	1区2号鍛冶炉出土遺物図	95
第89図	1区1～3号土坑平面・断面図	97
第90図	1区4号土坑平面・断面図	97
第91図	1区2・3号土坑出土遺物図(1)	98
第92図	1区2・3号土坑出土遺物図(2)	99
第93図	1区4号土坑出土遺物図	99
第94図	1区谷部排滓場遺物分布図	110
第95図	1区谷部排滓場 断面図	111
第96図	1区谷部排滓場 鉄関連遺物構成図	112
第97図	1区谷部排滓場 鉄関連遺物構成図	113
第98図	1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図(1)	114
第99図	1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図(2)	115
第100図	1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図(3)	116
第101図	1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図(4)	117
第102図	1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図(5)	118
第103図	1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図(6)	119
第104図	1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図(7)	120
第105図	1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図(8)	121
第106図	1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図(9)	122
第107図	1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図(10)	123
第108図	1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図(11)	124
第109図	1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図(12)	125
第110図	1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図(13)	126
第111図	1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図(14)	127
第112図	1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図(15)	128
第113図	1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図(16)	129
第114図	1区谷部排滓場出土 木器(1)	130
第115図	1区谷部排滓場出土 木器(2)	131
第116図	1区谷部排滓場出土 土器	132
第117図	2区66号土坑平面・断面図、出土遺物図	155
第118図	2区67・68号土坑平面・断面図、出土遺物図	156
第119図	2区1～4号土坑平面・断面図	158
第120図	2区5～13号土坑平面・断面図	159
第121図	2区14～21号土坑平面・断面図	160
第122図	3区1～3・2区22～25号土坑平面・断面図	161
第123図	2区26～30号土坑平面・断面図	162
第124図	2区31～39号土坑平面・断面図	163
第125図	2区40～48号土坑平面・断面図	164
第126図	2区49～57号土坑平面・断面図、出土遺物図	165
第127図	2区58～61・3区4・5号土坑平面・断面図	166
第128図	2区62号土坑(墓)平面・断面図、出土遺物図	167
第129図	2区63～65号土坑(墓)平面・断面図、出土遺物図	168
第130図	2区1号溝平面・断面図	169
第131図	柱穴列 平面・断面図	170
第132図	2区Hr-FA下面	171
第133図	3区Hr-FA下面	172
第134図	遺構外出土遺物図(1)	173
第135図	遺構外出土遺物図(2)	174
第136図	遺構外出土遺物図(3)	175
第137図	遺構外出土遺物図(4)	176
第138図	遺構外出土遺物図(5)	177
第139図	遺構外出土遺物図(6)	178
第140図	遺構外出土遺物図(7)	179
第141図	遺構外出土遺物図(8)	180

第1章 調査の経過

[1] 調査に至る経緯

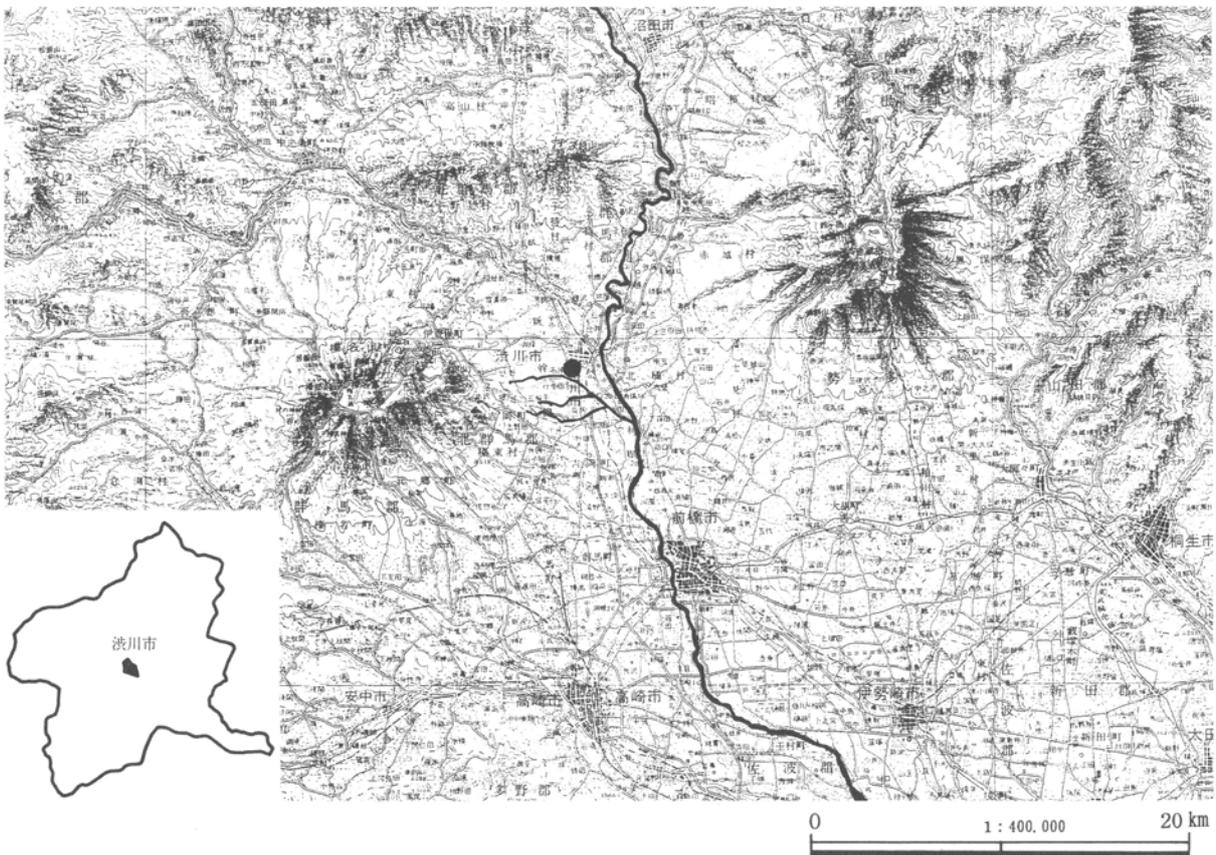
本路線は昭和39年12月28日に都市計画決定（最終の都市計画変更は平成7年1月13日）された。延長2,690m、基本幅員27mの都市計画道路であり、関越自動車道の渋川伊香保インターチェンジ（国道17号）付近を起点とし主要地方道渋川吾妻線のバイパスも担っている。渋川伊香保インターチェンジから市街地を迂回して伊香保方面に連絡するとともに、市街地の環状道路の役割も有する重要路線である。

国道17号から主要地方道高崎渋川線までの区間（L=990m）については道路局事業により整備が進められ、平成5年度には暫定2車線で供用開始された。また、都市計画道路渋川駅前通り線から主要地方道渋川吾妻線の現況道路までの区間は街路事業で整備済みである。そこで、未整備区間である主要地方道高崎渋川線から都市計画道路渋川駅前通り線の

間（L=1,240m）について平成4年度に新規事業採択を受けた。

平成11年5月、路線が渋川市の市道と交差する区域の試掘調査依頼が県教育委員会文化財保護課（現文化課）にあり、付近に土器片が散布すること及び周知の遺跡（諏訪ノ木遺跡）の範囲にあること等から、本調査が必要であると判断された。

平成11年6月16日に、県教育委員会と渋川市当局と協議し、渋川市都市計画課では市道との交差点区域のみ市教育委員会が対応することで合意した。平成11年6月28日に渋川土木事務所企画管理課と協議を行ない、平成12年度から石原東遺跡D区、諏訪ノ木V遺跡の本調査を実施することに決定された。諏訪ノ木VI遺跡の本調査は、石原東遺跡D区、諏訪ノ木V遺跡に続き、平成13年6月から実施された。



第1図 遺跡の位置（国土地理院1/200,000「宇都宮・長野」使用）

[2] 発掘調査の経過

渋川都市計画道路3.3.1号中村上郷線街路事業に伴う発掘調査は、平成12年4月より路線南に位置する石原東遺跡D区・諏訪ノ木V遺跡から着手した。ここで報告する諏訪ノ木VI遺跡は、諏訪ノ木V遺跡北に位置し、平成13年6月7日から発掘調査が行われた。発掘調査は平成15年3月31日までの20ヶ月行われた。

平成13年度

本遺跡の範囲は、南側に接する諏訪ノ木V遺跡3区北側の水路より、渋川市役所南側の市道までである。調査区域を横切る水路と現道により調査区を3区に分割し、南から1区、2区、3区とした。用地買収の状況や残土置き場の関係から、1区東側と2区南側を調査した。

1区東側では鍛冶炉1基（1号鍛冶炉の東半分）、2区南側では縄文時代から中・近世の遺物、奈良・平安時代の竪穴住居15軒、中世の土坑墓などが検出された。

調査対象地にはHr-FAが30~60cmと厚く堆積しており、直下は後の攪乱を受けていない。Hr-FA下の面は、火山災害当時そのままを保存した所謂旧地表面であるが、調査の結果、居住・生産・墓域などを示す明確な遺構は検出されなかった。

平成14年度

諏訪ノ木VI遺跡発掘調査2年次にあたる平成14年度は、1区西側、2区北側、3区を調査した。

1区西側では鍛冶炉2基（1号鍛冶炉の西半分と2号鍛冶炉）・土坑・排滓場、2区北側では縄文時代から中・近世の遺物、奈良・平安時代の竪穴住居19軒、3区では縄文時代から中・近世の遺物、奈良・平安時代の竪穴住居5軒などが検出された。

1区西の排滓谷からは、3,723点を超える椀形鍛冶滓や羽口などの鍛冶関連遺物が出土した。平成13年度の谷地東側のトレンチ調査で、遺物が出土しな

かったことから1区の西側に集中している可能性も考えられる。

調査対象地にはHr-FAが30~60cmと厚く堆積しているが、平成13年度と同様に、Hr-FA直下に明確な遺構は検出されなかった。

[3] 調査の方法

本報告分の調査対象地区は、6,360㎡である。

- (1) 表土掘削には、調査の効率化を図るために、掘削機械を使用した。
- (2) 調査対象区は、調査区域を横切る現道により、設定した。
- (3) 国家座標第Ⅸ系を基準に5mグリッドを設定した。東南角の交点下3桁をグリッド名称として呼称した。

ここで使用している国家座標は、2000年以前の旧座標である。

- (4) 遺構名称は種別ごと・区ごとに、通し番号を付した。遺物の取り上げに際しては、遺構単位を基本とし、原位置をとどめる物については、その都度番号を付し、図面上に記録した。
- (5) 遺構等の測量には平板測量を用い、1/20縮尺図を原則とした。
- (6) 写真撮影には35mm版の白黒フィルムとカラースライドフィルム及び6×7版白黒フィルムを使用した。また撮影対象によって高所作業車を使用した。
- (7) 出土遺物の取り上げに際しては完形・大破片については図化等を行ったが、小破片については埋没土層ごとに一括して取り上げた。
また、出土した遺物は、発掘調査期間内に水洗い・注記までおこなった。
- (8) 本遺跡の調査では自然科学分析をおこない、第5章に掲載した。



第2図 中村上郷線関連遺跡



第3図 調査区割図 (1/1,000)

第2章 遺跡の立地と環境

[1] 位置と地理的環境

(1) 位置

本遺跡は、渋川市の中心部であるJR上越線渋川駅の南西約1kmに所在する。遺跡地は榛名山東麓に位置し、東約1.5kmに利根川を臨む。

本遺跡からは、東に赤城山、北に子持山・小野子山、西に榛名山などの山々を見渡せる。

標高は約220mである。

(2) 地理的環境

本遺跡は、榛名山東麓に聳える水沢山から連なる山麓山地帯の先端部に位置する。この山麓地形は利根川に向かって流れる中小の河川により解析され、放射状に伸びる尾根列を形成している。この尾根列は標高280~300mで終焉し、50~100mの比高差をもって下り、なだらかな緩斜面へと移行する。

本遺跡は、この緩斜面の一つである唐沢川周辺に形成された扇状地状の地形の上に位置している。扇状地状の地形は、豊秋団地付近を要に半円形に広がり、中筋・西の町・番場・手川・西浦・諏訪ノ木・豊秋等が、この扇状地状緩斜面の地域にあたる。『渋川市誌 第一巻 自然編』によると、本遺跡地周辺の扇状地状の地形は、現在の水沢山周辺の山体が崩壊し、土砂が堆積したことによって形成されたもので、その土層を唐沢泥流堆積物と呼称している。

本遺跡と同じ渋川都市計画道路3.3.1号中村上郷線街路事業に伴い発掘調査された諏訪ノ木V遺跡では、この唐沢泥流堆積物と思われる土層の直上から縄文時代草創期の石器群が検出された。唐沢泥流上層から浅間・板鼻黄色軽石(As-YP、約1.3~1.4万年前)が確認されていないことから、As-YP以降、縄文時代草創期以前に唐沢泥流堆積物が形成された可能性が高いことがわかってきた。

また、本遺跡周辺では、榛名山二ツ岳の二度にわたる大噴火により形成された厚い火山性堆積物

(Hr-FA 6世紀初頭、Hr-FP 6世紀中葉)が見られる。

本遺跡で確認されたHr-FAは30~60cmと厚く、直下は後の攪乱を受けていない。一方Hr-FPは薄く、谷地に数センチ堆積するのみであった。本遺跡はHr-FPの降下の軸を僅かに外れるため(第4図参照)、その堆積は二ツ岳に近いにもかかわらず、驚くほど少ない。

本遺跡北2kmの吾妻川右岸には、金井製鉄遺跡が、所在する。金井製鉄遺跡は、8世紀中頃に比定される砂鉄を原料とする半地下式堅形炉や地下式穴窯の炭窯などが検出された遺跡である。

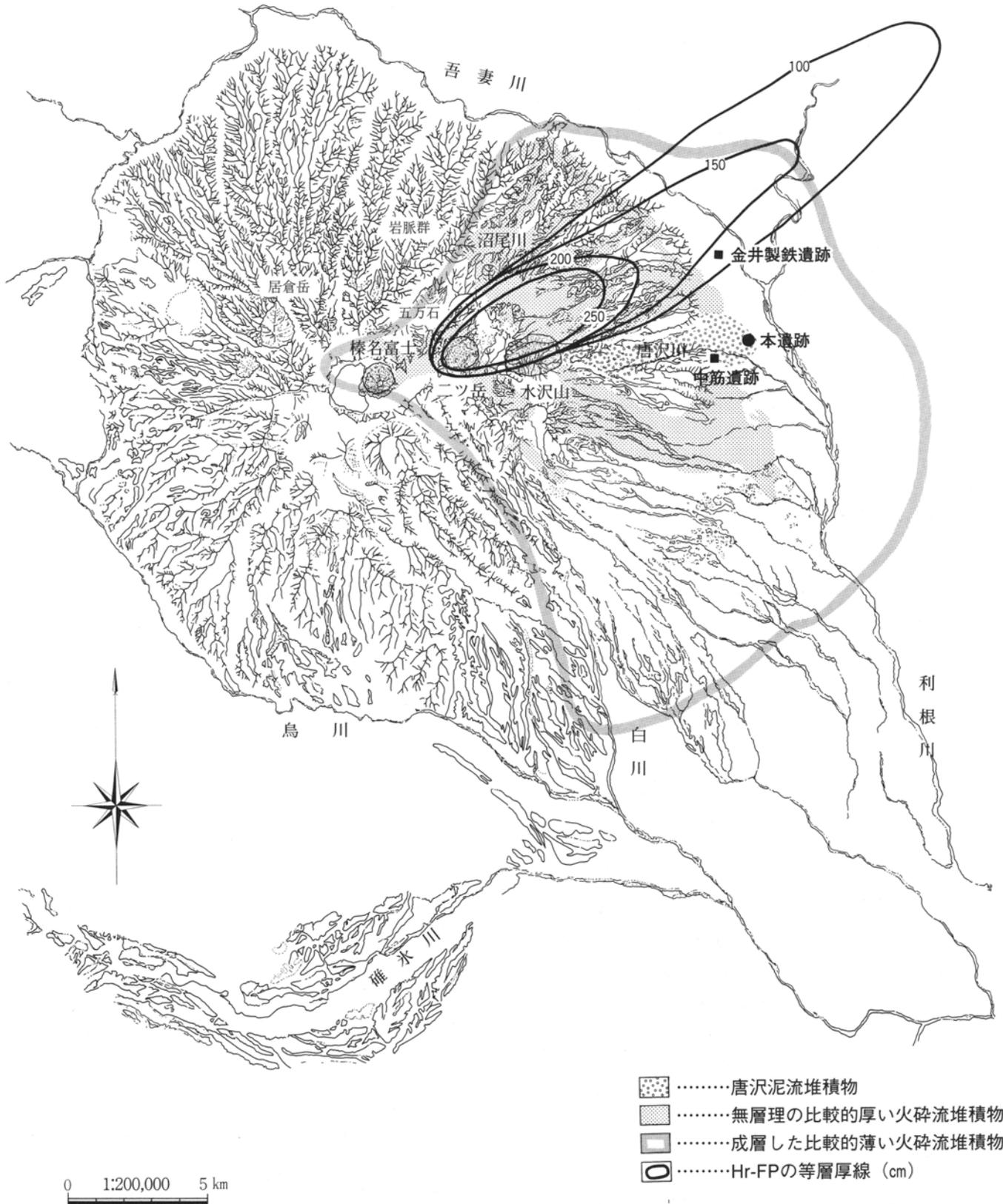
本遺跡や金井製鉄遺跡のある榛名山東麓には、山麓を解析する小河川が数多く見られ、小河川や、それらが吾妻川などに流れ込む合流地点には、多くの砂鉄の堆積が見られる。こうした砂鉄が鉄生産の原料と考えられ、これまで検討されてきている⁽¹⁾。吾妻川の砂鉄は、酸化チタンが4.0~5.3%と低め⁽²⁾であると同時に、Total Feも52~56%あり、富鉄とは言えないまでも鉄生産の原料砂鉄として優れたものである⁽³⁾。

註

- (1)1975「製鉄原料(砂鉄、木炭、粘土)と鉄滓の科学的分析および結果の考察」『金井製鉄遺跡』(渋川市教委)など。
- (2)砂鉄は日本全国に存在し、酸化チタンを多く含有することを特色とし、1.0~17.0%程度で変動している。酸化チタンの高い含有は、流動性を阻害するので、鉄生産の原料に向かないとのことである。
- (3)Hr-FA・Hr-FPの降下範囲を解析した小河川から、酸化チタンの割合が低い良質な砂鉄が採取出来ることから、古墳時代の噴火と鉄生産に適した砂鉄との関連を視野に入れる必要がある。今後の分析例の増加に注目したい。

引用・参考文献

- 1975『金井製鉄遺跡発掘調査報告書』渋川市教育委員会
 1990『群馬県史 通史編1』
 1993『渋川市誌 第一巻 自然編』
 1993『渋川市誌 第二巻 通史編上』
 2005『石原東遺跡D区・諏訪ノ木V遺跡』群埋文



第4図 遺跡周辺の地形図

※「群馬県史」通史編1図19・21、「渋川市史」自然編第3章図3、竹本弘幸1999「北関東北西部地域における第四紀古環境変遷と火山活動」図5-7より作成

[2] 歴史的環境

旧石器時代 現在までのところ、渋川市内の旧石器時代の遺跡は、行幸田山遺跡だけである。行幸田山遺跡は、本遺跡から南約1.5kmの丘陵状の地形に位置する。①浅間・板鼻褐色軽石群（As-Bp、1.6～2万年前位）中、②浅間—白糸軽石層（1.5万年前）下、③ローム最上層中の3層それぞれから石器が数点出土した。

縄文時代 現在までのところ、渋川市内の縄文時代草創期の遺跡は、諏訪ノ木V遺跡だけである。諏訪ノ木V遺跡は、本遺跡南に接する。約150点の石器・剥片が出土し、完形に近い尖頭器が多く、珪質頁岩の接合資料があることが特徴的である。石器群に伴う土器は出土しなかった。

本遺跡周辺の早期遺跡に、諏訪ノ木V・空沢・行幸田山遺跡があるが、明確な遺構はない。諏訪ノ木V遺跡では、早期押型文、三戸式、田戸下層式、早期前半と考えられる縄文施文・撚糸文施文・無文土器、空沢遺跡、行幸田山遺跡では数点の押型文土器、尖底土器が出土している。

本遺跡周辺の前期遺跡に、諏訪ノ木V・神宮寺西・後田東・中筋・空沢・堀込・半田南原遺跡などがある。前期になると遺跡数は増加し遺構も多く見られる。半田南原遺跡は最も広く調査されており、自然堤防の台地上に小規模の集落が営まれていたことが判明している。本遺跡に近い空沢遺跡からは、黒浜式期の住居が1軒検出され、諏訪ノ木V遺跡からは、花積下層式・関山式・黒浜式・諸磯式の土器が出土した。

本遺跡周辺の中期遺跡に行幸田山・空沢・諏訪ノ木V遺跡などがある。遺跡地にほど近い空沢遺跡では、中期勝坂式が1軒、加曾利E2式から後期称名寺式にかけての集落が54軒検出された。さらに空沢遺跡では、加曾利E4式から称名寺式期といった後期にかかる過渡期の敷石住居とそれに伴う弧状列石が検出された。諏訪ノ木V遺跡では中期焼町類型・加曾利E式・後期称名寺式・堀之内式・加曾利B式

の土器等が出土した。本遺跡周辺で、確実に晩期とされる遺跡はない。

弥生時代 縄文時代から弥生時代の過渡期のものとして南大塚遺跡があげられる。南大塚遺跡は、本遺跡から北西約5.5kmに位置する。前期の遺跡は東日本を見ても非常に少なく、南大塚遺跡の発見は貴重である。3基の土坑から、壺や甕などが約10点出土し、集団墓地遺跡であると考えられている。

中期前半の土器は、群馬県の土器編年で岩櫃式と呼ばれている。縄文の影響が土器に残るものの縄文土器が共伴することはなくなり、弥生土器として確立するのがこの時期である。本遺跡周辺では行幸田山遺跡においてこの型式の土器が確認できる。諏訪ノ木V遺跡3区包含層からは、弥生時代前期に比定される可能性がある土器が出土した。

後期になると、有馬廃寺遺跡・中筋遺跡・有馬遺跡・有馬条里遺跡・後田東遺跡・神宮寺西遺跡など、現在の行幸田・有馬田圃を中心に遺跡が展開する。この地域の一部は条里以前、沼地であったことが発掘調査によって明らかになっている。後期の集落はこの沼地を取り巻く小高い丘陵状の地形から見つかった。

本遺跡南に接する諏訪ノ木V遺跡では、弥生時代前期・中期・後期樽式の土器が出土した。

古墳時代 本遺跡地周辺の前期の遺跡に中筋遺跡・有馬条里遺跡がある。中筋遺跡では、S字状口縁台付甕を主体とした古式土師器が大量に投棄された遺構や、古墳1基、土坑墓1基が確認された。中筋遺跡は墓域としての性格が強い。また、有馬条里遺跡では大規模な集落や畠が検出されている。

中期の遺跡に中筋遺跡がある。中筋遺跡は、5世紀末から6世紀初頭の二ツ岳の噴火（Hr-FA）に伴う火砕流で被災した集落遺跡で、火山灰で覆われていたために良好な状態で遺構が残存していた。遺構は、堅穴住居4軒、平地式建物6軒、畠、祭祀遺構、垣根、溝区画、古墳等が検出された。一般の集落内に堅穴住居と平地式住居が同時に存在することや、複数の堅穴住居が一つの周堤帯を共有することなど

第2章 遺跡の立地と環境

当時の集落形態や暮らしを究明する豊富な資料が提供された^①。本遺跡や諏訪ノ木V遺跡の発掘調査では、Hr-FA直下から遺構は検出されなかった。当時の土地利用については今後の検討を要する。

後期の遺跡に黒井峯遺跡がある。黒井峯遺跡は6世紀中頃の二ツ岳の噴火で噴出した大量の軽石(Hr-FP)によって埋没した集落遺跡である。軽石層の中に建物の壁、崩れかけた屋根、柴垣などが立ったまま確認され、軽石下の旧地表面からは、道、屋外作業場、畠、小区画水田など様々な遺構が見つかり、古墳時代後期の集落の様子が明らかになった^②。本遺跡の調査ではHr-FPは、窪地には堆積するものの多く残存せず、旧地表面を明瞭にするに到らなかった。Hr-FP降下以降は、諏訪ノ木・諏訪ノ木V遺跡、石原東古墳群などで見られるように、本遺跡周辺は墓域になる。昭和55年渋川市教育委員会によって調査された諏訪ノ木遺跡では横穴式石室をもつ古墳が検出された。遺物は調査以前に採集されており、鉄製の直刀1振と玉類が大量に出土したということである。諏訪ノ木V遺跡の発掘調査ではこの古墳の周堀の東部分と、これに付随すると思われる小石塚を検出した。

奈良・平安時代 本遺跡地が所在する地域は、奈良・平安時代には上野国群馬郡に属しており、「和名類聚抄」によると群馬郡には、長野、井出、小野、八木、上郊、畦切、島名、群馬、桃井、有馬、利刈、駅家、白衣の13郷が設置されており、遺跡地は有馬郷に属すると推定される。

本遺跡南1.5kmに有馬廃寺跡と呼ばれる遺跡がある。遺跡地周辺は、以前から古瓦である布目瓦の出土地として知られていた。昭和61年の調査では寺院跡として認められる遺構は確認できなかったが、出土する瓦が上野国分寺の瓦と同形態であることがわかった。国分寺系瓦の出土から、県内では境町の十三宝塚遺跡などが、同時期の寺院跡があったのではないかと考えられている。これらの遺跡は官衙かその影響が強い寺院跡であった可能性が指摘されている。有馬廃寺の北には有馬条里遺跡がある。昭和57

年～59年にかけて行われた発掘調査では条里制に関わる遺構は検出されなかったが、この地域に残っていた水田区画が条里制の区画を踏襲するものであると推定されている。有馬郷の中心地は有馬廃寺周辺部の可能性が高いと考えられており、本遺跡は中心地から北に離れた場所にある。

本遺跡に近い石原東遺跡D区・空沢遺跡では墨書土器が出土した。石原東遺跡D区では「茂」(類推含む)76点、「益」4点、「上」2点、「天」「真」「山」「中尾」「中」「尾」「合」「百」「周」1点などの208点、空沢遺跡では「本」・「若」などの墨書土器が出土した。「茂」は、「茂」と判読できるが、石原東遺跡D区の南には茂沢という地名や、そこに流れる茂沢川の「茂」という文字があり、墨書土器に記された文字と地名との関連が注目される。石原東遺跡D1区の墨書土器196点の出土は伊勢崎市上植木光仙房遺跡出土の213点に次ぎ県内第2位の出土である。石原東遺跡D区の墨書土器は、約22,000点の土師器、須恵器、灰釉・緑釉などの施釉陶器、木器に伴って出土した。遺物の大部分が供膳具で、甕などの煮炊具は僅かである。施釉陶器は、547点と豊富で、京都洛北産の緑釉陶器3点や黒笹14号窯式期の灰釉陶器16点も含まれる。木器は曲物・挽物などの容器がほとんどで、農具や建築部材が見られない。遺物群は9世紀前半から10世紀前半の150年間に比定される。

古代有馬郷周辺の鉄生産関連遺跡に、金井製鉄遺跡、中筋遺跡、有馬条里遺跡、空沢遺跡、石原東遺跡、諏訪ノ木V遺跡などがある。

金井製鉄遺跡は、本遺跡の北2kmに所在し、榛名山の裾野、吾妻川右岸の河岸段丘上に位置する。金井製鉄遺跡では、昭和48年の渋川市教育委員会の発掘調査により製錬炉1基・炭窯8基が検出された。製錬炉は長軸90cm、短軸55cmで、壁55cmが残存する半地下式豎形炉である。当初九世紀末に比定されていたが、現在では八世紀中頃まで遡ると考えられている。遺物は羽口、須恵器椀・甕、土師器甕、鍛冶滓、砂鉄がある。製錬炉が検出されたほか

に、鍛冶工程の羽口や滓が出土していることから、製錬から鍛冶工程まで行われていたと考えることができる。金井製鉄遺跡は、1975年に県指定遺跡になった。

中筋遺跡は、本遺跡南500mに所在し、唐沢泥流堆積物により形成された扇状地状の地形上に位置する。中筋遺跡では、平成5年の渋川市教育委員会による第5、7次発掘調査で連房式鍛冶工房跡が1棟検出された。検出された連房式鍛冶工房跡は6×10mの竪穴状の掘り込みに、東西2列に10基ほどの炉が配置される構造である。同様の連房式鍛冶工房は、同じ上野国群馬郡内の国府周辺に比定される鳥羽遺跡でも検出されている。鳥羽遺跡では5棟の連房式鍛冶工房跡が検出され、1棟の規模は平面6×18m以上の竪穴状の掘り込みに、東西2列に鍛冶炉が配置されているものもある。鳥羽遺跡の連房式鍛冶工房は、中筋遺跡の連房式鍛冶工房と短軸がほぼ同規模で、鍛冶炉の配列などに類似点が見られることから、その関連が注目される。

有馬条里遺跡では、製錬炉3基、鍛冶関連の土坑が検出された。10世紀後半以降に比定される鉄生産関連遺構は、製錬工程から鍛冶工程まで一連の工程が追え、羽口、椀形鍛冶滓、鉄塊系遺物、製錬滓などの遺物が出土している。

空沢遺跡では、9世紀後半に比定される鍛冶工房2軒が検出された。羽口などの遺物が出土した。

石原東遺跡では10世紀後半に比定される鍛冶工房が検出された。羽口や鉄製品などの遺物が出土した。

諏訪ノ木V遺跡では、9世紀中頃に比定される鍛冶工房1軒、10世紀後半に比定される鍛冶工房2軒などが検出された。遺構からは鉄製紡錘車、刀子、砥石、椀形鍛冶滓などが出土した。

その他、半田中原・南原、半田薬師遺跡などで、羽口や椀形鍛冶滓などの鉄生産関連遺物が竪穴住居の埋土などから出土しており、周辺で鍛冶が行われていた可能性を示している。

本遺跡1区谷部排滓場では、発掘調査の結果、

3,723点の精錬工程を主体とする鍛冶関連遺物が出土し、金井製鉄遺跡や中筋遺跡との関連が注目される。詳しくは、第6章 調査の成果「諏訪ノ木VI遺跡とその周辺の鉄生産」を参照していただきたい。

鎌倉時代以降 本遺跡に隣接する諏訪ノ木II遺跡、諏訪ノ木V遺跡では、中世とされる掘立柱建物群が検出された。2遺跡の掘立柱建物群は一連のものである可能性が高く、諏訪ノ木V遺跡の庇付きの大形掘立柱建物が、中心的な建物である可能性が高い。諏訪ノ木II遺跡の掘立柱建物は、出土した土師質土器皿の年代などから、14世紀後半～15世紀に比定されている。

石原東遺跡D区では五輪塔などの石塔類、土坑墓などが検出された。隣接する空沢遺跡では中世とされる瓦や永楽通宝が伴う土坑墓が検出されている。

註

- (1) 大塚昌彦1999「中筋遺跡」『群馬県遺跡大辞典』（群埋文）より引用。
- (2) 石井克己1999「黒井峯遺跡」『群馬県遺跡大辞典』（群埋文）より引用。

引用・参考文献

- 1981『諏訪ノ木遺跡』渋川市教育委員会
 1990『群馬県史 通史編1』
 1993『渋川市誌 第二巻 通史編上』
 1994『石原東遺跡(Ⅱ)』渋川市教育委員会
 1995『石原東遺跡(Ⅲ)』渋川市教育委員会
 1997『石原東古墳群』渋川市教育委員会
 2000『諏訪ノ木II遺跡』渋川市教育委員会
 2001『石原東遺跡F区』渋川市教育委員会
 2001『石原東遺跡E区』渋川市教育委員会
 2005『石原東遺跡D区・諏訪ノ木V遺跡』群埋文

第2章 遺跡の立地と環境

第1表 周辺遺跡

No	遺跡名	主な文献	No	遺跡名	主な文献
1	諏訪ノ木VI遺跡	本報告	50	金井前原遺跡	1989『市内遺跡Ⅱ』 渋川市教委
2	石原東遺跡D区	2005『石原東遺跡D区・諏訪ノ木V遺跡』群埋文	51	金井製鉄遺跡	1975『金井製鉄遺跡』 渋川市教委
3	諏訪ノ木V遺跡	2005『石原東遺跡D区・諏訪ノ木V遺跡』群埋文	52	金井原遺跡	1993『市内遺跡Ⅵ』 渋川市教委
4	高源地東I遺跡	2006刊行予定『高源地東I遺跡』群埋文	53	虚空蔵塚古墳	1993『渋川市誌第2巻(通史編)』
5	石原東遺跡A～F区	2001『石原東遺跡F区』他 渋川市教委	54	坂之下遺跡	1988『坂之下遺跡』 渋川市教委
6	諏訪ノ木遺跡	1981『諏訪ノ木遺跡』 渋川市教委	55	坂下古墳群	1971『北群馬・渋川の歴史』他
7	諏訪ノ木Ⅱ遺跡	2000『諏訪ノ木Ⅱ遺跡』 渋川市教委	56	東町関下遺跡	1998『東町関下遺跡』群埋文
8	諏訪ノ木Ⅲ遺跡	2001『諏訪ノ木Ⅲ遺跡』 渋川市教委	57	東町古墳群	1971『北群馬・渋川の歴史』他
9	諏訪ノ木Ⅳ遺跡	2001『諏訪ノ木Ⅳ遺跡』 渋川市教委	58	延暦塚古墳	1972『群馬県遺跡台帳両毛編』群馬県教委
10	諏訪ノ木Ⅶ遺跡	2003『諏訪ノ木Ⅶ遺跡』 渋川市教委	59	大崎古墳群	1993『渋川市誌第2巻(通史編)』
11	諏訪ノ木Ⅷ遺跡	2004『諏訪ノ木Ⅷ遺跡』 渋川市教委	60	北町遺跡	1996『北町遺跡・田ノ保遺跡』北橋村教委
12	諏訪ノ木Ⅸ遺跡	2004『諏訪ノ木Ⅸ遺跡』 渋川市教委	61	分郷八崎遺跡	1996『分郷八崎遺跡』北橋村教委
13	見立溜井・見立大久保遺跡	1985『見立溜井・見立大久保遺跡』赤城村教委	62	田ノ保遺跡	1996『北町遺跡・田ノ保遺跡』北橋村教委
14	弁天塚古墳	1995『赤城村内遺跡Ⅰ』赤城村教委	63	石原清水田遺跡	1997『石原清水田遺跡』 渋川市教委
15	戸波坂遺跡		64	石原久保貝道A	1993『市内遺跡Ⅵ』 渋川市教委
16	諏訪西遺跡	1986『諏訪西遺跡』群埋文	65	石原久保貝道B	1993『市内遺跡Ⅵ』 渋川市教委
17	中畦遺跡	1986『中畦遺跡』群埋文	66	田中遺跡	1997『田中遺跡』 渋川市教委
18	三原田城遺跡	1987『三原田城遺跡』群埋文	67	石原東古墳群	1997『石原東古墳群』 渋川市教委
19	房谷戸遺跡Ⅰ、Ⅱ	1987『房谷戸遺跡Ⅰ』他 群埋文	68	中村日焼田遺跡	1993『中村日焼田・中村久保田遺跡』 渋川市教委
20	房谷戸遺跡Ⅲ	1995『房谷戸遺跡Ⅲ』北橋村教委	69	中村久保田遺跡	1993『中村日焼田・中村久保田遺跡』 渋川市教委
21	樽遺跡	杉原荘介1939「樽遺跡調査概報」『考古学』	70	中村遺跡	1986『中村遺跡』 渋川市教委
22	三原田遺跡	1980『三原田遺跡Ⅰ』他 群馬県企業局	71	石原手川遺跡	1988『市内遺跡Ⅰ』 渋川市教委他
23	白井北中道遺跡(道の駅)	2000『白井北中道遺跡(道の駅地点)』群埋文	72	西浦遺跡	1986『西浦遺跡』 渋川市教委
24	白井遺跡群	1994『白井遺跡群』他 群埋文	73	伊勢森南遺跡	1989『市内遺跡Ⅱ』 渋川市教委
25	白井大宮遺跡	1993『白井大宮遺跡』群埋文	74	空沢遺跡	1978『空沢遺跡』 渋川市教委
26	白井大宮Ⅱ遺跡	2002『白井大宮Ⅱ遺跡』群埋文	75	行幸田寺後遺跡	1993『市内遺跡Ⅵ』 渋川市教委
27	白井丸岩遺跡	1994『白井遺跡群』他 群埋文	76	中筋遺跡	1987『中筋遺跡』 渋川市教委他
28	吹屋瓜田遺跡	1997『吹屋瓜田遺跡』群埋文	77	行幸田宮ノ前遺跡	1993『渋川市誌第2巻(通史編)』
29	鯉沢瓜田遺跡	2000『鯉沢瓜田遺跡』子持村教委	78	行幸田畑中遺跡	1992『市内遺跡Ⅴ』他 渋川市教委
30	白井城跡	1987『子持村誌(上巻)』	79	有馬後田東遺跡	1993『市内遺跡Ⅵ』 渋川市教委
31	金比羅山	白井城内。円墳?	80	有馬条里遺跡	1983『有馬条里遺跡』 渋川市教委 1989『有馬条里遺跡Ⅰ、Ⅱ』他 群埋文
32	不動塚古墳	1971『群馬県遺跡台帳』県教委	81	八木原沖田遺跡Ⅲ	1993『八木原沖田遺跡Ⅲ』 渋川市教委
33	白井宿	1987『子持村誌(上巻)』	82	神宮寺西遺跡	1988『神宮寺西遺跡』 渋川市教委
34	金比羅塚	長尾村16号。円墳。	83	行幸田南原遺跡	1994『行幸田南原遺跡』 渋川市教委
35	加藤塚古墳	1987『子持村誌(上巻)』	84	行幸田山遺跡	1987『行幸田山遺跡』 渋川市教委
36	白井城南郭遺跡	1987『子持村誌(上巻)』	85	若宮遺跡	1998『若宮遺跡』 渋川市教委
37	白井南中道遺跡	1993『白井遺跡群』他 群埋文	86	有馬遺跡Ⅱ	1990『有馬遺跡Ⅱ』群埋文
38	白井古墳群	1993『白井大宮遺跡』群埋文	87	有馬久宮間戸遺跡	1997『有馬久宮間戸遺跡』 渋川市教委
39	二位屋城跡	山崎一1972『群馬の古城址の研究』	88	有馬小貝戸遺跡	1997『有馬小貝戸遺跡』 渋川市教委
40	白井二位屋遺跡(ターミナル地点)	1994『白井遺跡群』他 群埋文	89	有馬廃寺跡	1988『有馬廃寺跡』 渋川市教委
41	白井二位屋遺跡	1994『白井遺跡群』他 群埋文	90	有馬城ノ上遺跡	1993『渋川市誌第2巻(通史編)』
42	白井尖野遺跡	1994『白井遺跡群』他 群埋文	91	有馬堂山古墳群	1993『渋川市誌第2巻(通史編)』
43	落合Ⅰ号墳		92	小倉庚甲塚遺跡	1992『小倉庚甲塚遺跡』吉岡町教委
44	西ノ平遺跡	1996『西ノ平遺跡』北橋村教委	93	平石遺跡	1988『平石遺跡』吉岡町教委
45	田尻遺跡	1990『八崎の寄居・田尻遺跡』北橋村教委	94	半田剣城遺跡	1989『市内遺跡Ⅱ』 渋川市教委
46	東浦遺跡		95	半田薬師遺跡	1995『半田薬師遺跡』 渋川市教委
47	金井古墳	1956『渋川金井古墳調査概報』『コイノス』	96	半田中原・南原遺跡	1994『半田中原・南原遺跡』 渋川市教委
48	金井下新田遺跡			有馬条里	1983『有馬条里遺跡』 渋川市教委 1993『渋川市誌第2巻(通史編)』
49	金井前原古墳	1993『渋川市誌第2巻(通史編)』			



第5図 周辺の遺跡

第3章 基本層序

発掘調査で確認された遺構の時期を検討する上で、それがどのような面で確認されたかが重要な手がかりとなる。その点で本遺跡の周辺には榛名山・浅間山の火山活動による噴出物の堆積が見られ、地学と考古学の両者の研究によって、それらの形成された時期がほぼ明らかにされている。ここでは本文中の多数の断面図相互間の関連を理解しやすくするために、以下の7層に土層を分ける。

第I層：現表土。20～80cmほどの堆積が見られる。

第II層：榛名二ッ岳伊香保テフラ（Hr-FP）。本遺跡では、溝や谷地など窪んでいる部分にのみ残存。6世紀中ごろ。

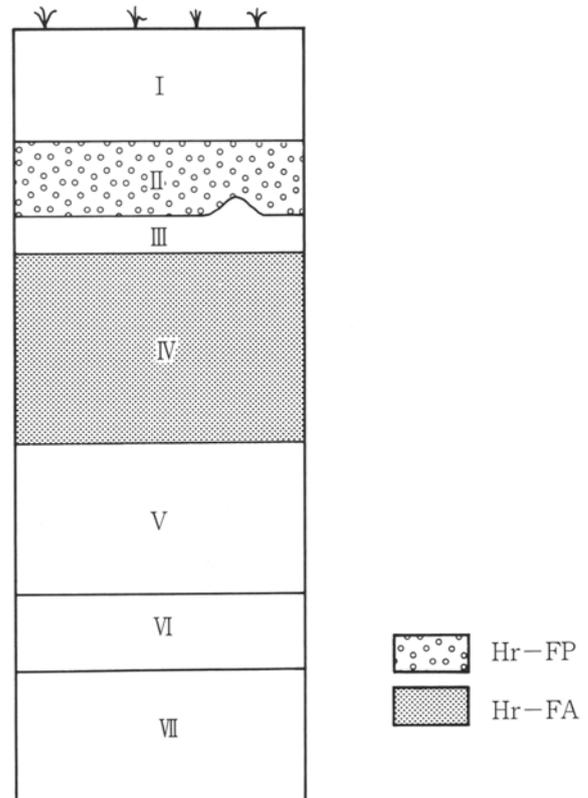
第III層：黒色～黒褐色土層。本遺跡では谷地のみ残存。

第IV層：榛名二ッ岳渋川テフラ（Hr-FA）。石原東遺跡D1区では火山泥流堆積物を挟み約120cm。従来のテフラ区分に従うとS-1～S-5、S-7～S-10が確認できる。本遺跡では30～120cm堆積。平坦部で数層、凹地で10層程度に細分できる。6世紀初頭。

第V層：黒色土層。白色軽石粒、橙色粒混入。平坦部で20cm程度。凹部で20～100cm。諏訪ノ木V遺跡の調査で縄文時代早期押型文、三戸式、田戸下層式、早期前半と考えられる縄文施文、撚糸文施文、無文土器、前期花積下層式、関山式、黒浜式、諸磯式、中期焼町類型、加曾利E式、後期称名寺式、堀之内式、加曾利B式、弥生時代前期、中期前半の可能性のある土器の出土を確認した。

第VI層：暗褐色土層。地山との漸移層。谷地に堆積する。小礫を含む。諏訪ノ木V遺跡ではV層と同様な遺物の出土が認められた。V層と層位による時期差は確認できなかった。

第VII層：黄褐色土層。大小の礫が混入する。礫は拳大～径2mを超えるものまで多量に混入。水沢山山体崩落に由来する「唐沢泥流堆積物⁽¹⁾」か。諏訪ノ木V遺跡2区VII層上から縄文草創期の石器が出土した。



第6図 基本土層模式図

- 第I層 表土。耕作土。層厚地点により異なるが、概ね20～80cmである。
- 第II層 榛名二ッ岳伊香保テフラ（Hr-FP）。層厚地点により異なるが、概ね15～30cmである。
- 第III層 黒色～黒褐色土層。層厚地点により異なるが、概ね5cmである。
- 第IV層 榛名二ッ岳渋川テフラ（Hr-FA）。層厚地点により異なるが、概ね30～120cmである。
- 第V層 黒色土層。層厚地点により異なるが、概ね平坦部で20cm。凹部で20～100cmである。
- 第VI層 暗褐色土層。唐沢泥流堆積物（地山）との漸移層。層厚地点により異なるが、概ね20～30cmである。
- 第VII層 黄褐色土層（地山）。唐沢泥流堆積物か。

註

(1) 1987『渋川市誌 第一巻 自然編』、本報告1章[1]参照。

引用・参考文献

1981『諏訪ノ木遺跡』渋川市教育委員会
1987『渋川市誌 第一巻 自然編』

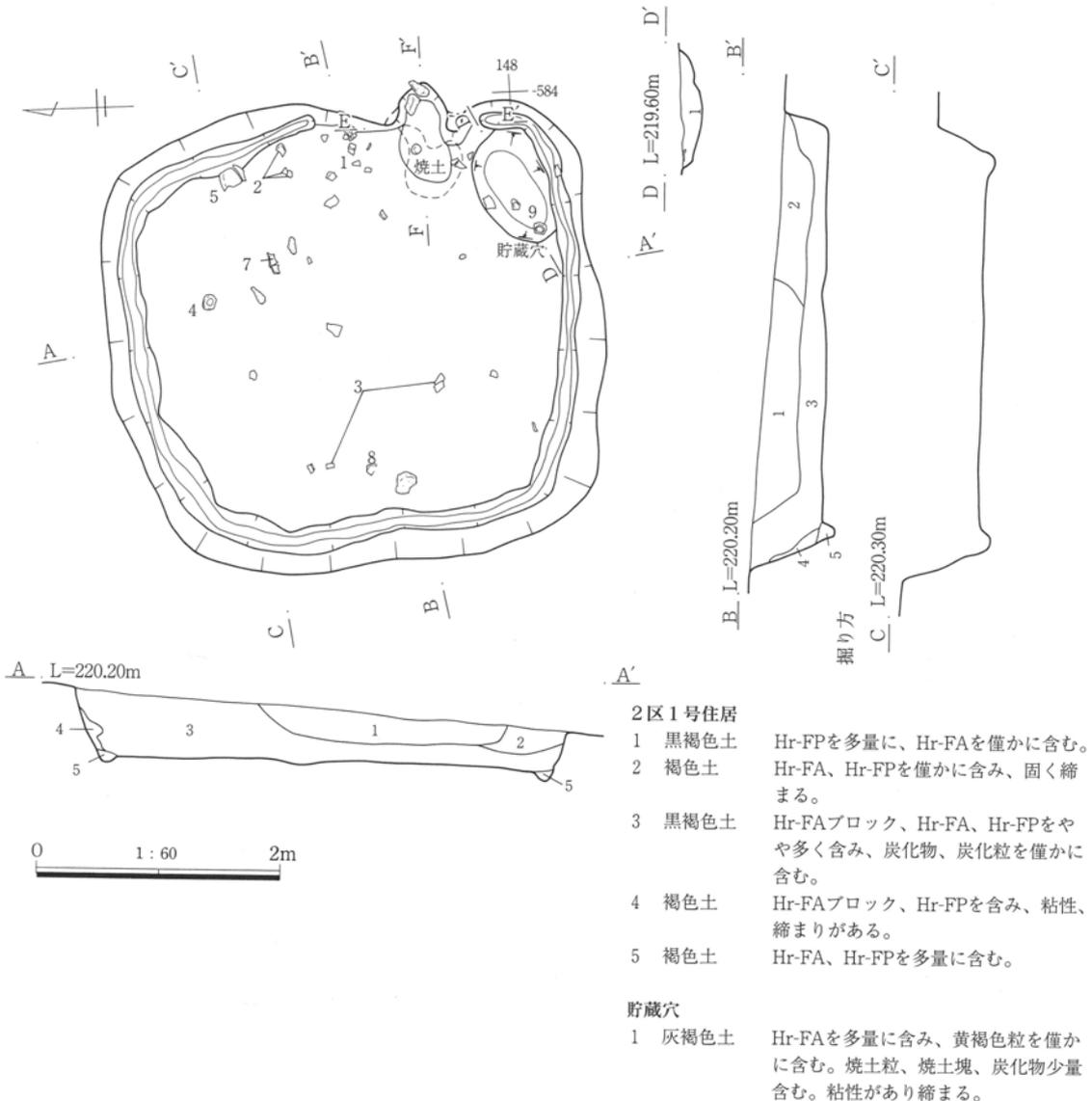
第4章 遺構と遺物

[1] 竪穴住居

2区1号住居 (第7・8図、PL2・30)

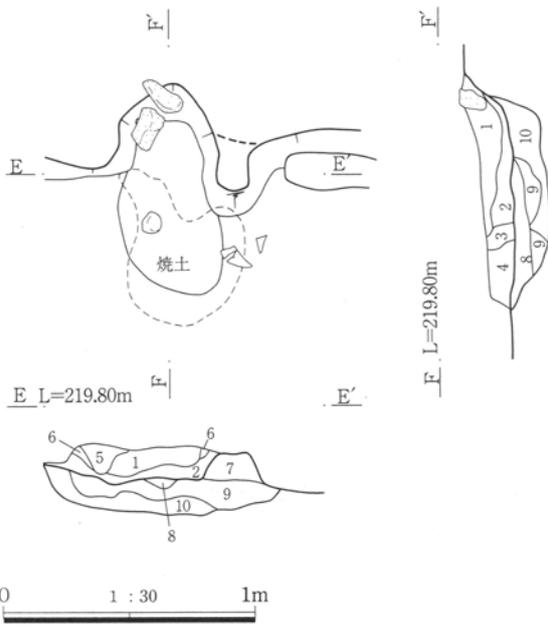
位置 148-584 方位 N-90°-E 形状 長軸4.05m・短軸3.82mで長軸を南北にもつ方形である。面積 11.38m² 壁高 50cm 重複 なし 床面掘り方面から厚さ12cmの埋め土を施して平坦な面を造る。壁溝 幅10~15cm・深さ約10cm前後で全周。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。長軸62cm・短軸16cm・深さ

95cmの楕円形を呈す。竈 東壁の南側に設置。燃烧部は幅42cm・奥行き30cm。支脚は検出されなかった。竈燃烧部手前には焼土面が広がる。遺物 竈左手の床直から土師器坏、床直から土師器甕、貯蔵穴から短頸壺が出土した。実測可能な遺物が9個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より8世紀第1四半期に比定される。掘り方埋土不明。



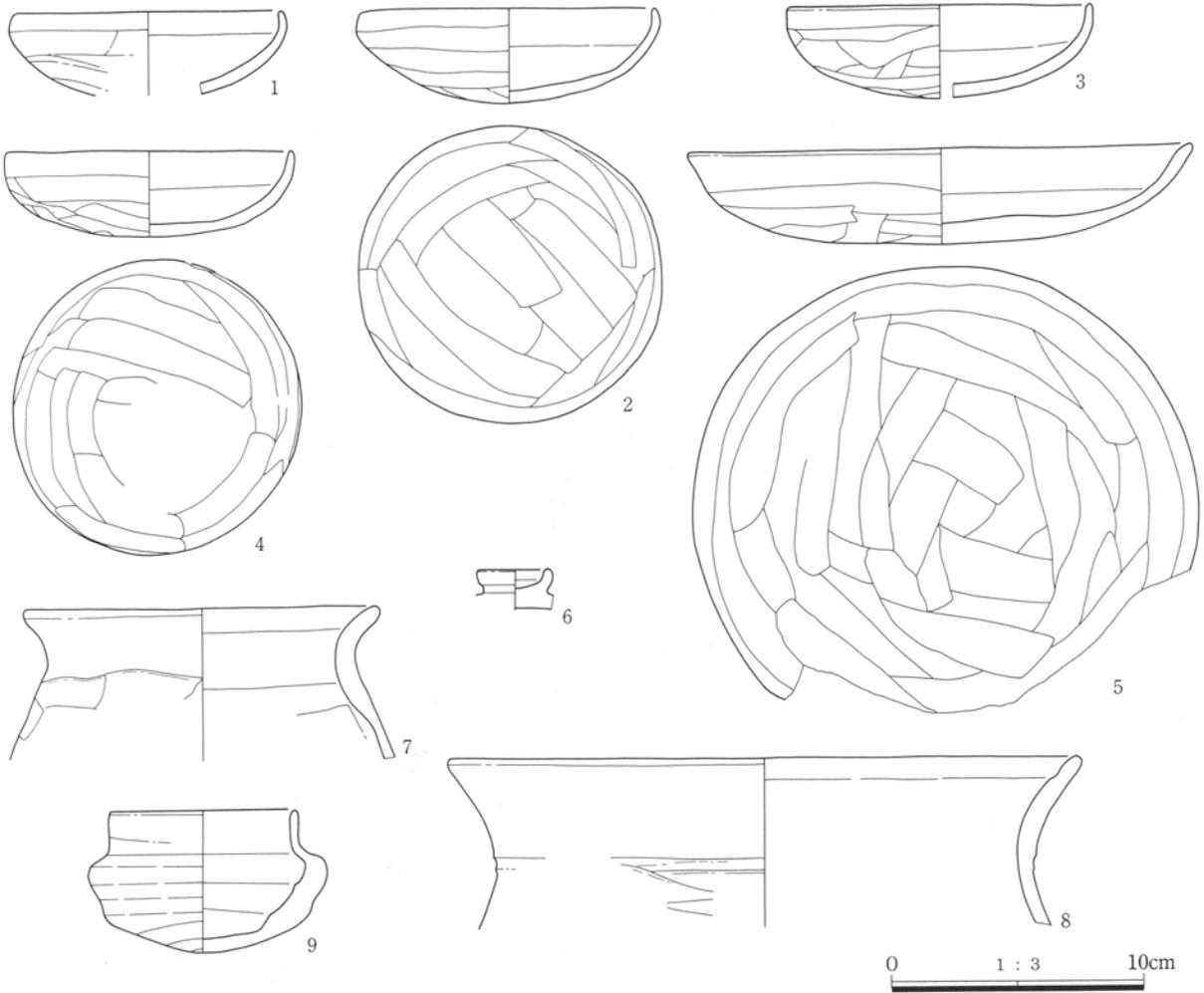
第7図 2区1号住居平面・断面図

第4章 遺構と遺物



竈

- | | |
|--------|---------------------------------------|
| 1 暗褐色土 | 焼土、軽石を少量含む。緻密な堆積の土層。 |
| 2 暗褐色土 | Hr-FAが混入する土層。堆積は緻密である。 |
| 3 黒褐色土 | Hr-FA、軽石を少量含む。 |
| 4 暗褐色土 | 軽石を少量含む。緻密な堆積の土層。 |
| 5 暗褐色土 | 軽石、小礫を含む。やや堆積の脆い土層。 |
| 6 暗褐色土 | Hr-FAが多量に混入する土層。 |
| 7 黒褐色土 | Hr-FA主体。 |
| 8 灰褐色土 | Hr-FA、Hr-FPを少量含み、焼土粒、炭化物を含む。粘性あり、締まる。 |
| 9 黄褐色土 | Hr-FA、Hr-FPを少量含む。 |
| 10 黒色土 | Hr-FAを含む。 |



第8図 2区1号住居竈 平面・断面図、出土遺物図

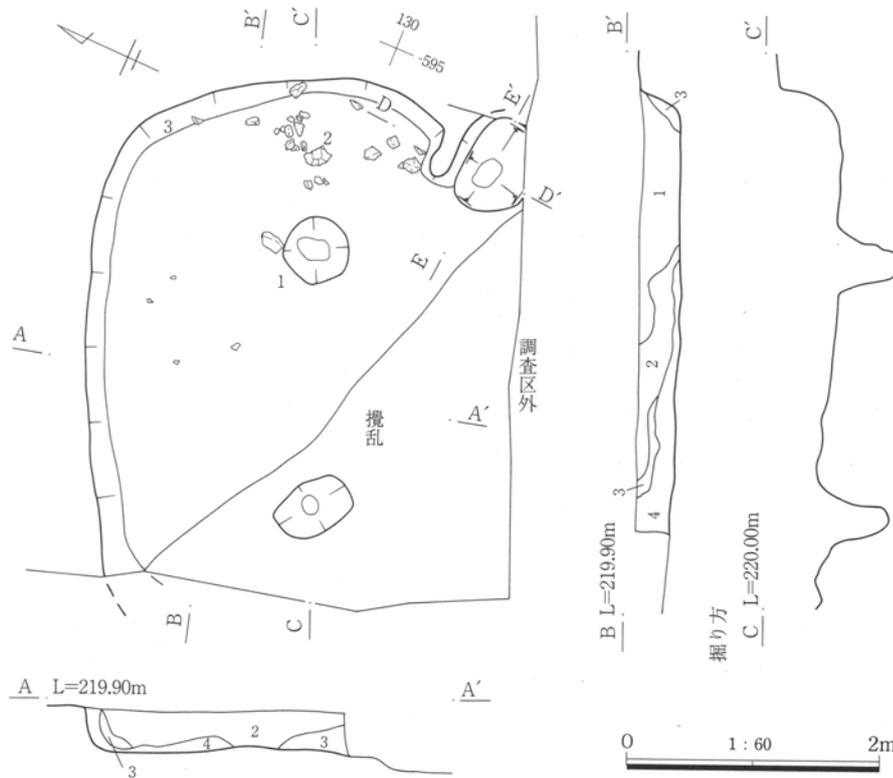
2区1号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第8図 PL-30	土師器 坏	+13 口~体部1/5	□(10.4) 高3.3 底-	①砂粒 ②良好 ③明褐色	口縁部上半が横ナデ。下半~底部はヘラ削り。
2	第8図 PL-30	土師器 坏	床直 ほぼ完形	□11.6 高3.7 底-	①砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上半が横ナデ。底部はヘラ削り。
3	第8図 PL-30	土師器 坏	+37 1/2	□12.0 高3.6 底-	①砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上半が横ナデ。底部はヘラ削り。
4	第8図 PL-30	土師器 坏	+11 ほぼ完形	□11.2 高3.4 底-	①砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上半が横ナデ。底部はヘラ削り。
5	第8図 PL-30	土師器 坏	床直 3/4	□19.9 高3.8 底-	①砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上半が横ナデ。底部はヘラ削り。
6	第8図 PL-30	須恵器 蓋	埋土 摘部	楕径3.0 高1.5 底-	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形。
7	第8図 PL-30	土師器 甕	床直 口~肩部1/3	□(14.0) 高6.1 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部横位のヘラ削り。内面ナデ。
8	第8図 PL-30	土師器 甕	床直 口縁部1/8	□(25.0) 高6.8 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部横位のヘラ削り。
9	第8図 PL-30	須恵器 短頸壺	貯蔵穴 4/5	□(15.0) 高5.6 底5.6	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形。底部ヘラ削り。

2区2号住居 (第9・10図、P L2・30)

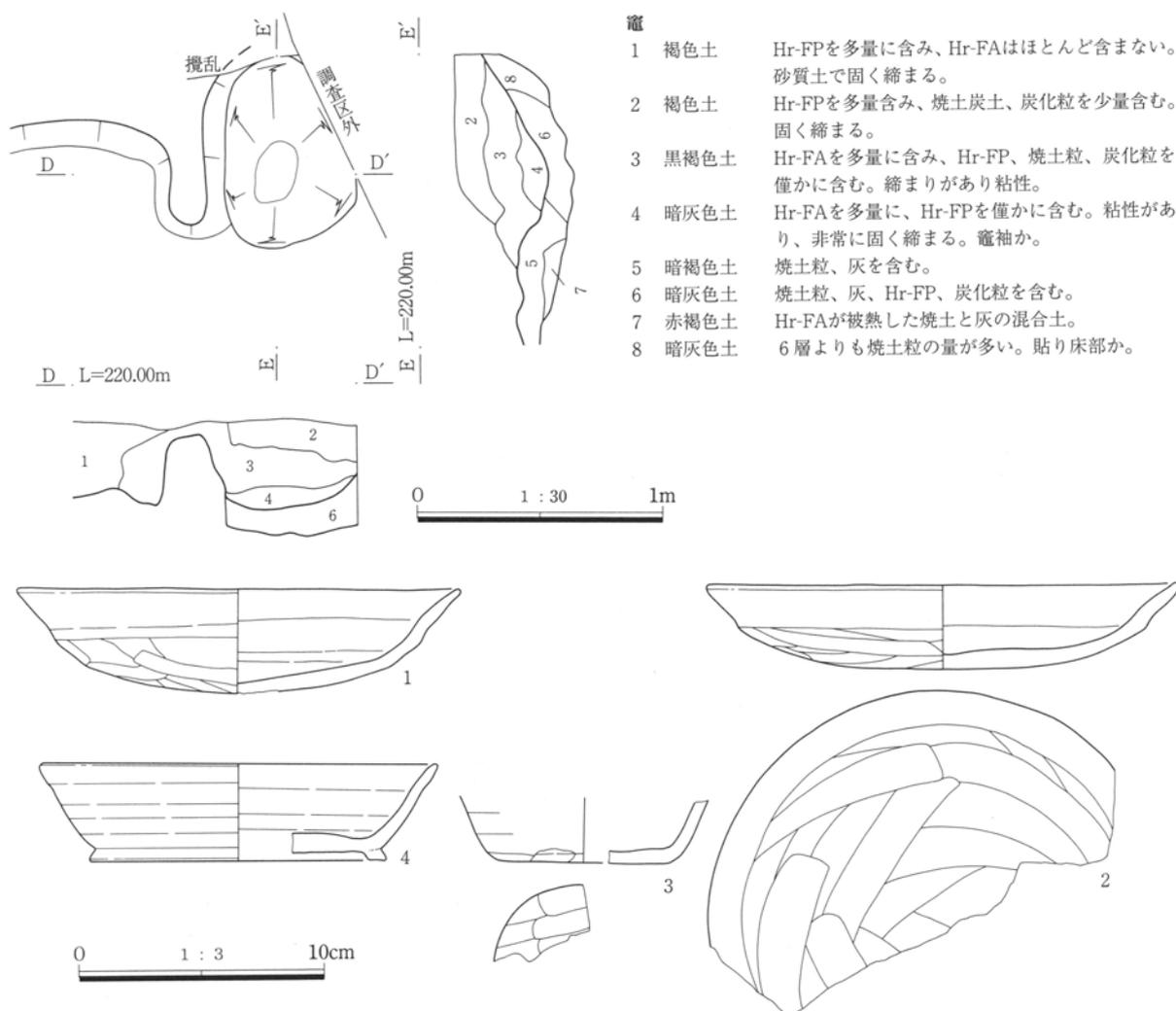
位置 130-595 方位 E-5°-N 形状 長軸 (4.06) m・短軸 (3.40) mで長軸を南北にもつ方形である。住居南側と西側が調査区外のため、全景を確認することができなかった。面積 (11.10) m² 壁高 40cm。重複 なし 床面 掘り方面から厚さ 30cmの埋め土を施して平坦な面を造る。壁溝

確認できなかった。柱穴 直径50cm・深さ65cmの円形を1基、長径65cm・短径40cm・深さ60cmの楕円形を1基検出した。貯蔵穴 確認できなかった。竈 東壁に設置。燃烧部は幅52cm・奥行き62cm。遺物 床直から土師器坏が出土した。所見 本住居の時期は、出土遺物より8世紀前半に比定される。掘り方埋土不明。



第9図 2区2号住居平面・断面図

第4章 遺構と遺物



第10図 2区2号住居竈平面・断面図、出土遺物図

2区2号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第10図 PL-30	土師器 坏	+7 1/2	□(18.0) 高4.0 底-	①砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上半が横ナデ。下半～底部はヘラ削り。
2	第10図 PL-30	土師器 坏	床直 1/2	□(19.1) 高3.4 底-	①砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上半が横ナデ。底部はヘラ削り。
3	第10図 PL-30	須恵器 坏	+25 体～底1/7	□- 高2.6残 底(7.0)	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形。底部切り離し技法はヘラ削りで不明。
4	第10図 PL-30	須恵器 高台付坏	埋土 1/8	□(16.1) 高4.0 底(11.5) 高台(12.0)	①細砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。高台は貼付。

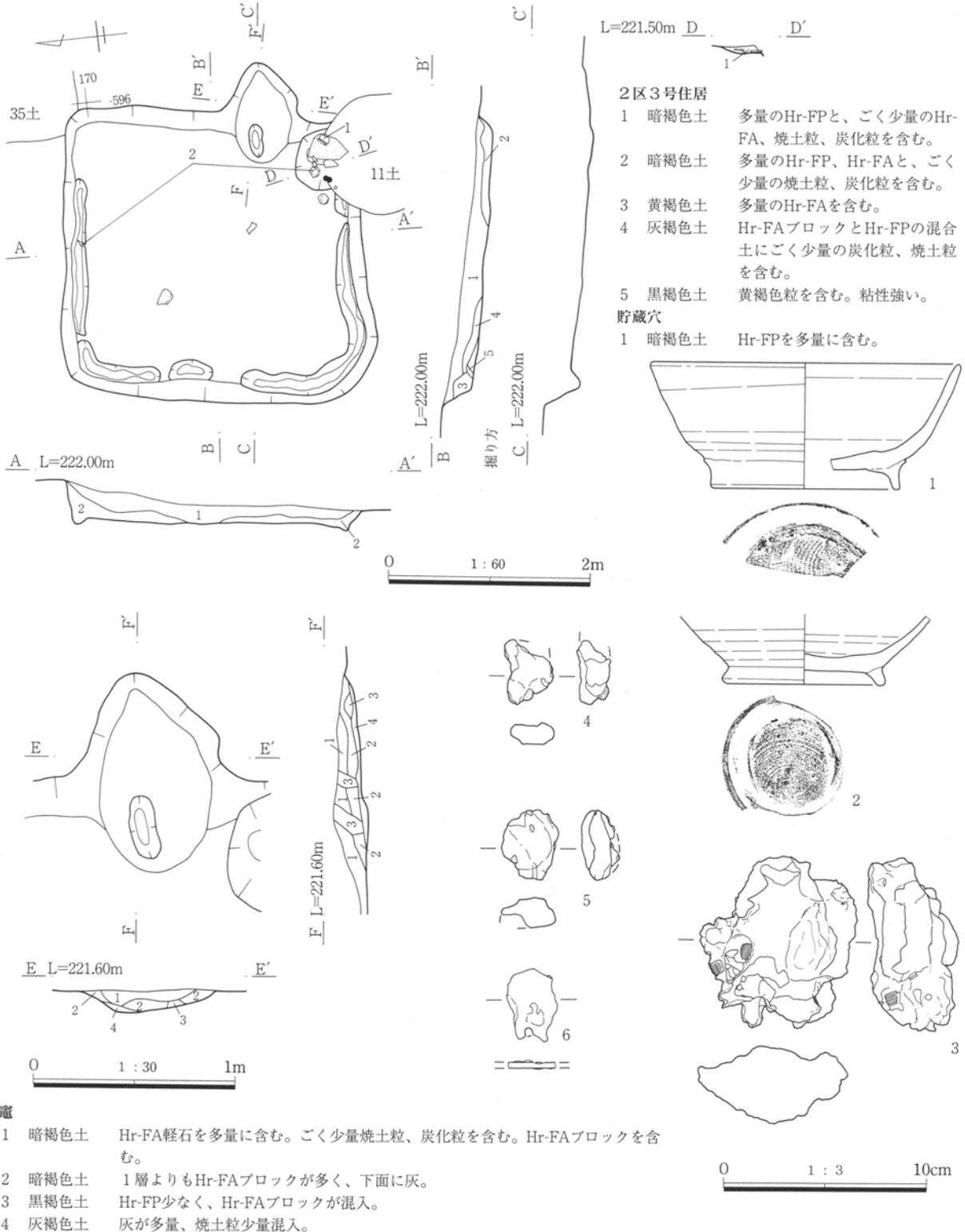
2区3号住居 (第11図、P L 2・30)

位置 170-596 方位 E-7°-S 形状 長軸3.10m・短軸2.87mで長軸を東西にもつ方形である。面積 6.92m² 壁高 24cm 重複 11号土坑と重複。3号住居が、11号土坑に切られる調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ15cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘り方面はほぼ平坦である。床面は凹

凸なく、平坦で整っている。壁溝 幅15～20cm・深さ約5～10cmで全周。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。長軸62cm・短軸55cm・深さ9cmの楕円形を呈す。貯蔵穴としては浅く、不鮮明である。竈 東壁の南側に設置。燃焼部は幅51cm・奥行き68cm。支脚は検出されなかった。遺物 貯蔵穴から須恵器碗、埋

土から椀形鍛冶滓、鍛冶滓、小札の可能性のある鉄製品が出土した。所見 規模が小さく、整った方形をした竪穴住居である。椀形鍛冶滓、鍛冶滓、鉄製品の出土があるが、全て埋土からの出土である。

鍛冶炉、鉄床石等の施設が検出されなかったこともあり、鍛冶工房というよりは、周辺の鍛冶工房から、遺物が混入した可能性が高い。出土遺物より9世紀第2～3四半期に比定される。掘り方埋土不明。



第11図 2区3号住居・竈 平面・断面図、出土遺物図

第4章 遺構と遺物

2区3号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第11図 PL-30	須恵器 椀	貯蔵穴 1/4	口(15.2) 高6.2 底(8.6)	①砂粒②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
2	第11図 PL-30	須恵器 椀	貯蔵穴 体~底1/2	口 - 高3.5残 底7.5 高台(8.0)	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
3	第11図 PL-30	椀形鍛冶滓 (中、含鉄)	①222.2 ②3 ③H(○)	埋土 長8.5 幅7.7 厚4.5	平面、不整多角形をした中型の椀形鍛冶滓。ほぼ完形品。上面は浅く窪み、側部は凹凸が激しい。左半分は中間層に隙間を持つ。滓は緻密。	
4	第11図 PL-30	鍛冶滓 (含鉄)	①10.2 ②5 ③H(○)	埋土 長3.2 幅2.4 厚1.7	扁平な鍛冶滓片。右側部から上手側の側部が破面。上面は平坦で下面は浅い椀形。中核部に含鉄部が広がる。	
5	第11図 PL-30	鍛冶滓 (含鉄)	①17.1 ②5 ③L(●)	埋土 長3.5 幅2.7 厚1.9	酸化土砂に囲まれた含鉄の鍛冶滓。放射割れが激しく、分解してしまった滓を接合している。薄板状の外観を持ち、内部の錆化が進む。	
6	第11図 PL-30	鉄製品(鍛 造品)薄板 状滓 孔付	①1.87 ②3 ③M(◎)	埋土 長2.4 幅1.6 厚0.2	下手側の側部に径2mm程の穿孔部を持つ薄板状の鉄製品破片。右側部のみが生きている可能性を持ち、他は全周に渡り破面となる。小札の破片の可能性も残る。	

①重量(g)②磁着度③メタル度

2区4号住居 (第12~15図、P L 3・30~32)

位置 154-583 方位 E-8°-N 形状 長軸5.8m・短軸4.82mで長軸を南北にもつ長方形である。面積 22.29m² 壁高 56cm 重複 なし 床面 掘り方面から厚さ9cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘り方面には土坑状の掘り込みが数基ある。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 確認できなかった。柱穴 住居床面検出時には確認されなかったが、掘り方面調査中に4基検出した。柱穴は貼床の下から検出されたことから、床を貼り替える前の柱穴と思われる。床面では、S1~S4が平坦面を上に向けて貼床内に埋め込められており、柱穴に代わり、住居の上屋を支えていた可能性が高い。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。長径75cm・短径68cm・深さ27cmの楕円形を呈す。竈 東壁の中央に設置。燃燒部は幅79cm・奥行40cm。燃燒部中央に支脚が設置されていた可能性がある窪みが検出された。遺物 床直から土師器坏、甕、須恵器坏、椀、緑釉陶器椀、灰釉陶器皿、椀形鍛冶滓、鉄床石、粒状滓、鍛造剥片などの鉄生産関連遺物、貯蔵穴から須恵器坏、土師器甕が出土した。鉄生産関連遺物は、椀形鍛冶滓、鍛冶滓、再結合滓、砥石などが出土した。再結合滓には薄手の鍛造剥片や粒状滓が付着している。鉄斧、刀子、錐といった鉄製品

も出土した。実測可能な遺物が37個体ある。

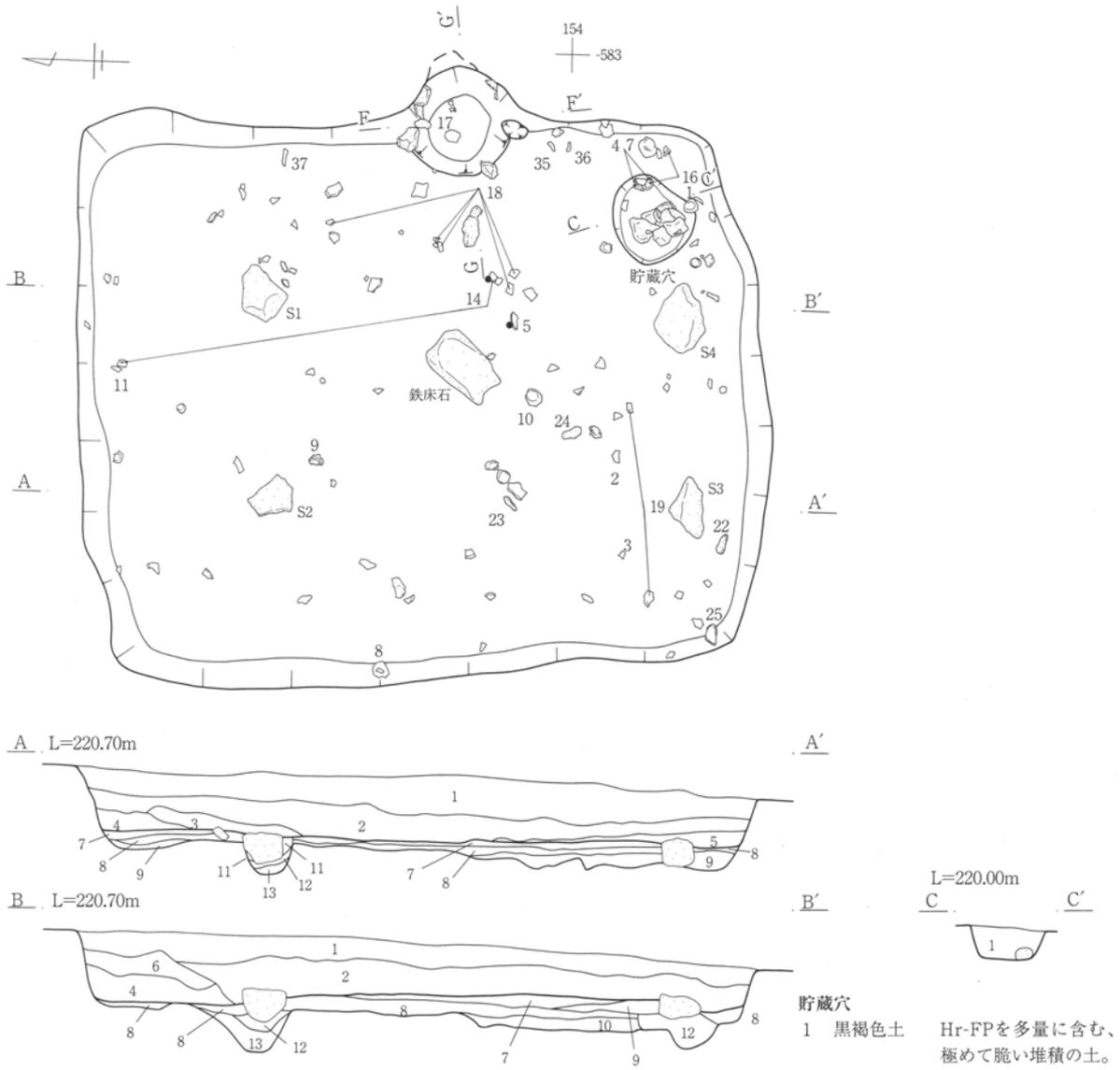
2区4号住居出土 粒状滓計測値

類	大きさ	出土総重量	1個の重量	個体数	割合
1	4.1mm以上	3.214 g	0.1108 g	29	3.2%
2	3.1~4.0mm	1.825 g	0.0829 g	22	2.4%
3	2.1~3.0mm	6.024 g	0.0265 g	227	25.0%
4	2.0mm以下	1.855 g	0.0052 g	661	69.4%

2区4号住居出土 鍛造剥片計測値

類	大きさ	厚さ	平均厚さ	出土総重量	1個の重量	個体数	割合
1	4.1mm以上	0.2~2.7mm	1.13mm	15.01 g	0.0397 g	378	0.1%
2	3.1~4.0mm	0.2~1.2mm	0.68mm	18.24 g	0.0158 g	1,154	0.4%
3	2.1~3.0mm	0.2~0.4mm	0.34mm	21.70 g	0.0053 g	4,097	1.5%
4	1.1~2.0mm	0.1~0.3mm	0.20mm	86.31 g	0.0024 g	35,962	13.0%
5	1mm以下	0.05~0.25mm	0.17mm	148.39 g	0.00063 g	235,539	85.0%

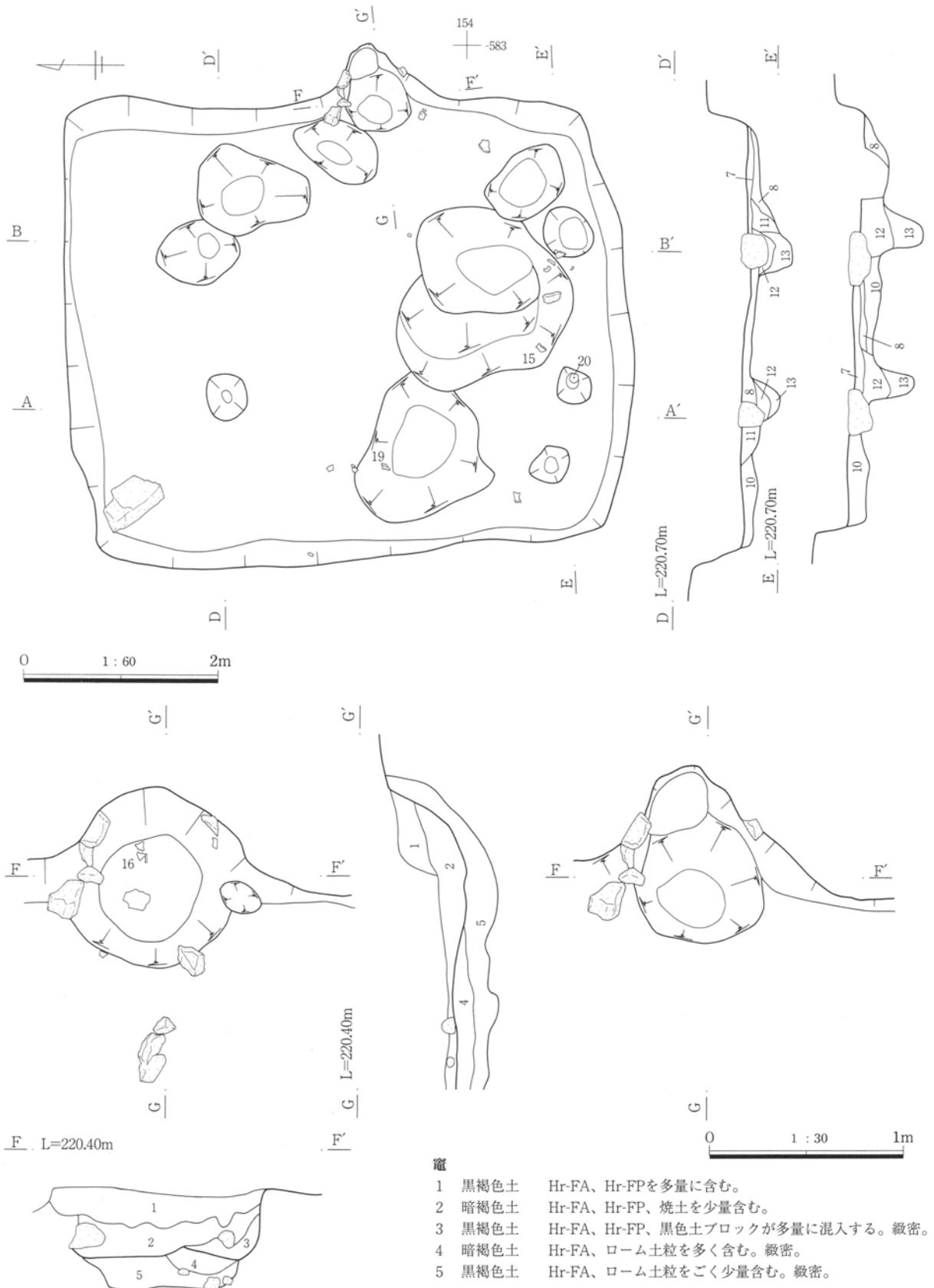
所見 明確な鍛冶炉は検出されなかったものの、中央に鉄床石を敷く鍛冶工房の可能性が高い。砥石、薄手の鍛造剥片の出土から、工房内では鉄器製作までの段階を行っていたと考えられる。本住居の時期は、出土遺物より9世紀後半に比定される。



2区4号住居

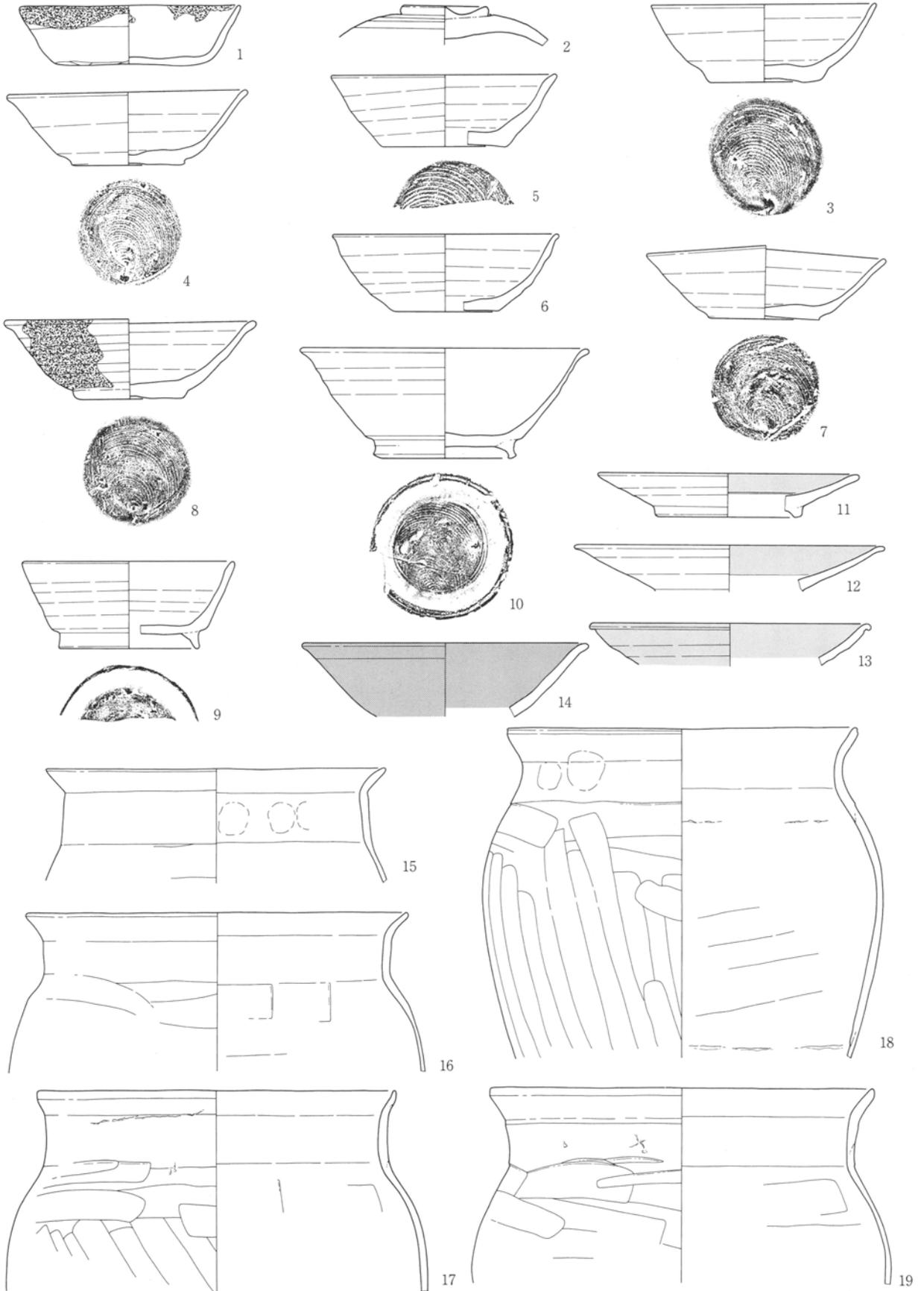
- | | | |
|----|------|---|
| 1 | 黒褐色土 | Hr-FP、小礫（直径1～5cm）を多く、Hr-FAを少量含む。緻密な堆積の土層。 |
| 2 | 黒褐色土 | Hr-FA、黒色土粒（地山）を含み、緻密な堆積の土層。 |
| 3 | 黒褐色土 | Hr-FAブロック、地山黒色土ブロックを多量に含む。 |
| 4 | 黒褐色土 | 白色軽石を多量に含む、Hr-FAを少量含む。やや緻密な堆積。 |
| 5 | 黒褐色土 | Hr-FA、Hr-FAブロックを多量に含む。 |
| 6 | 暗褐色土 | Hr-FPを多量に含む、Hr-FAを少量含む。 |
| 7 | 黒褐色土 | Hr-FPを含む黒褐色土。 |
| 8 | 黒褐色土 | Hr-FPを少量含む、黄色土を少量含む。 |
| 9 | 黒色土 | Hr-FP、Hr-FAを含む緻密な堆積の土層。 |
| 10 | 黒褐色土 | Hr-FPを多量に、小礫（直径5～10cm）を少量含む。 |
| 11 | 黒色土 | Hr-FPを多量に含む。緻密。 |
| 12 | 黒褐色土 | Hr-FAを含む。粘性あり、緻密。 |
| 13 | 黒色土 | Hr-FAブロックを含む。 |

第12図 2区4号住居平面・断面図



第13図 2区4号住居掘り方・竈 平面・断面図

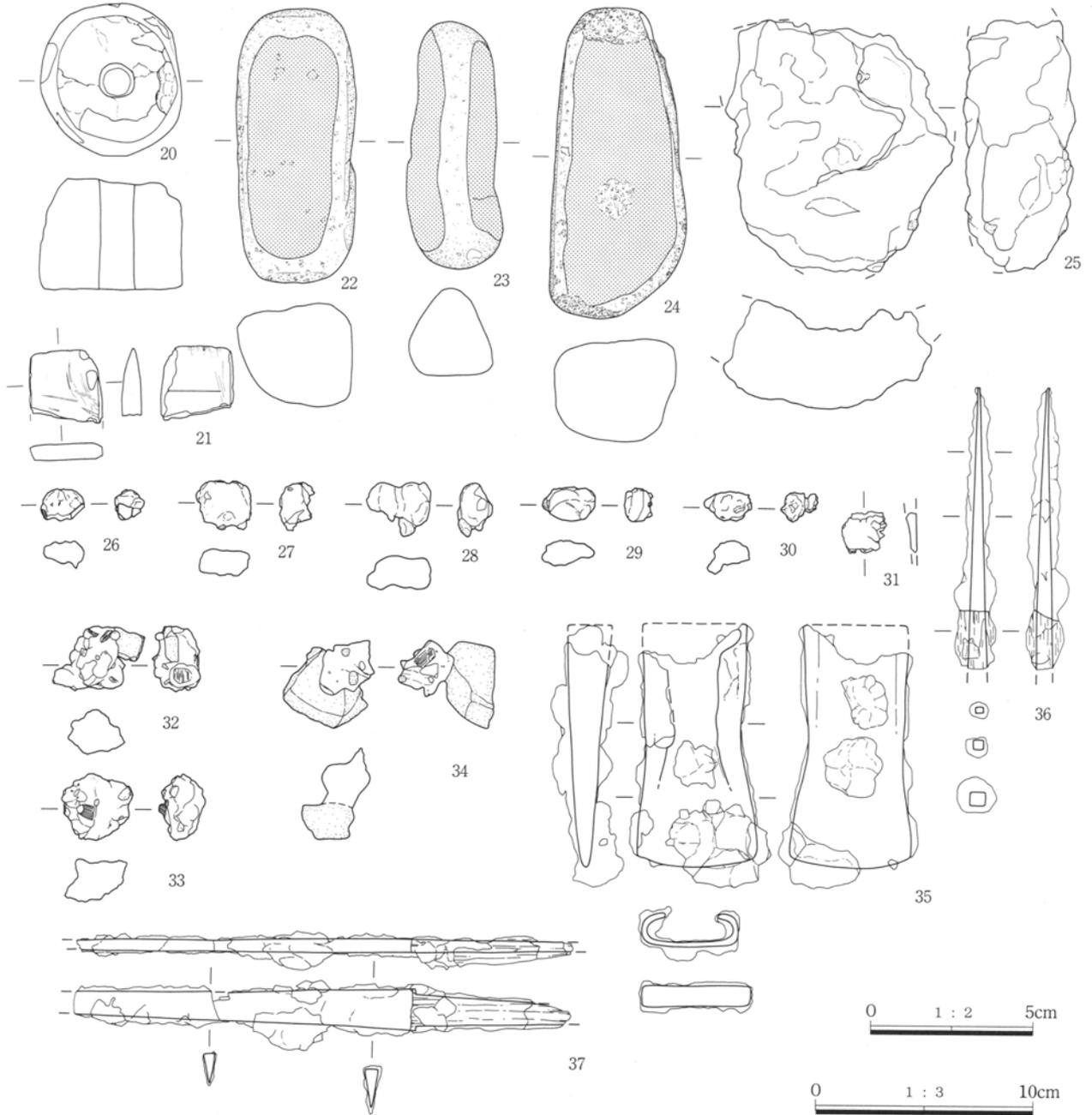
[1] 竖穴住居



第14图 2区4号住居出土遗物图(1)

0 1:3 10cm

第4章 遺構と遺物



第15図 2区4号住居出土遺物図(2)

2区4号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第14図 PL-30	土師器 坏	床直 完形	口11.6 高3.1 底-	①砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部横ナデ。底部はヘラ削り。油煙。
2	第14図 PL-30	須恵器 蓋	+22 1/2	口- 高2.1残 摘4.6	①砂粒②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。摘みは貼付。天井部回転ヘラ削り。
3	第14図 PL-30	須恵器 坏	床直 1/3	口(12.0) 高4.2 底6.0	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
4	第14図 PL-30	須恵器 坏	貯蔵穴 ほぼ完形	口12.6 高3.9 底5.8	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
5	第14図 PL-30	須恵器 坏	床直 1/3	口(12.0) 高3.8 底(6.6)	①砂粒②酸化焰 ぎみ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
6	第14図 PL-30	須恵器 坏	埋土 1/4	口(12.0) 高4.1 底(5.6)	①砂粒②酸化焰 ぎみ③黄灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。

[1] 竪穴住居

7	第14図 PL-30	須恵器 坏	床直 完形	口12.7 高3.9 底5.9	①粗砂粒②還元 焰③暗灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。内外面に火 禱。
8	第14図 PL-30	須恵器 坏	+17 4/5	口13.0 高4.2 底5.6	①砂粒②酸化焰 ぎみ③褐灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。体部外面に 黒色の付着物あり。
9	第14図 PL-31	須恵器 碗	床直 1/3	口(11.3) 高4.6 底(7.3) 高台(7.5)	①細砂粒②還元 焰③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。 高台は貼付。
10	第14図 PL-31	須恵器 碗	埋土 1/3	口15.4 高5.8 底7.4 高台7.6	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
11	第14図 PL-31	灰釉陶器 皿	床直 1/4	口(13.8) 高2.3残 底(7.8) 高台(7.7)	①細砂粒②還元 焰③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。高台は貼付。施釉方法は漬け掛 け。釉調は緑色をおびた灰色。大原2号窯式期。内面に重 ね焼き痕あり。
12	第14図 PL-31	灰釉陶器 皿	埋土 口~体部1/8	口(16.4) 高2.4残 底(5.4) 高台-	①細砂粒②還元 焰③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。施釉方法は刷毛塗り、釉調は緑 色をおびた灰色。光ヶ丘1号窯式期。
13	第14図 PL-31	灰釉陶器 碗	埋土 口縁部片	口(15.0) 高1.9残 底- 高台-	①細砂粒②還元 焰③灰白色	ロクロ成形。釉調は透明感のない灰色。光ヶ丘1号窯式期。
14	第14図 PL-31	緑釉陶器 碗	床直 口縁部片	口(15.2) 高4.0残 底- 高台-	①細砂粒②還元 焰③淡黄色	京都産。ロクロ成形、外面ヘラ削り。9世紀後半から10世紀 初頭。
15	第14図 PL-31	土師器 甕	+18 口縁部片	口(18.0) 高6.0残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。頸部内 面に指頭痕あり。
16	第14図 PL-31	土師器 甕	貯蔵穴 1/4	口(20.6) 高8.5残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
17	第14図 PL-31	土師器 甕	埋土 口~肩部片	口(19.2) 高(10.7) 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい赤橙色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
18	第14図 PL-31	土師器 甕	床直 口~胴部1/3	口(18.6) 高17.5残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい褐色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
19	第14図 PL-31	土師器 甕	+18 口~胴部1/4	口(20.4) 高10.3残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい褐色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
20	第15図 PL-31	石製品 紡錘車	+20 ほぼ完形	長7.1 幅6.6 厚5.1 重110.0g	二ツ岳石 (石材)	広面平坦に整形。側面粗い擦痕あり。狭面平坦に整形後広面 平坦に整形。側面一部欠損。欠損後も使用か。
21	第15図 PL-31	石製品 砥石	埋土	長3.4 幅3.4 厚9.0 重13.0g	砥沢石 (石材)	4面磨ぎ面。2面に刃物痕あり。
22	第15図 PL-31	棒状礫	床直	長12.5 幅5.6 厚4.8 重570.5g	アブライト (石材)	摩耗痕あり。
23	第15図 PL-31	棒状礫	埋土	長11.4 幅4.5 厚4.0 重289.9g	デイスait (石材)	摩耗痕あり。
24	第15図 PL-31	棒状礫	埋土	長14.4 幅6.2 厚4.7 重598.3g	デイスait (石材)	摩耗痕、打痕あり。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
25	第15図 PL-31	腕形鍛冶滓 (特大、含 鉄)	①791.7 ②3 ③L(●)	床直 長11.6 幅15.0 厚5.2	平面、不整形円形をした特大の腕形鍛冶滓。上下面が生きており、上手側の 側部とそれに接した左右の側部が生きている。上面の中央部が2cm弱窪む。含 鉄部は下手側の下半主体。上面右上手側には2cm大の塊状の含鉄部を持つ。	
26	第15図 PL-31	鍛冶滓 (含鉄)	①3.9 ②4 ③錆化(△)	埋土 長1.5 幅2.0 厚1.3	小塊状の含鉄の鍛冶滓。右下手側の肩部に浅い工具痕を残す。外周部は鍛造 剥片や滓片を含む酸化土砂に覆われている。	
27	第15図 PL-31	鍛冶滓 (含鉄)	①9.8 ②5 ③錆化(△)	埋土 長2.3 幅2.6 厚1.6	前者とやや似た扁平な含鉄の鍛冶滓。側面から下面は腕形がみ。上手側部は 放射割れが強い。表面には鍛造剥片や滓片を含む酸化土砂が固着する。完形 の滓で、鍛冶素材の表面が滓化したものか。	
28	第15図 PL-31	鍛冶滓 (含鉄)	①10.9 ②5 ③錆化(△)	埋土 長2.5 幅2.9 厚1.6	やや横長で扁平な含鉄の鍛冶滓。表面には鍛造剥片や鍛冶滓片を含む酸化土 砂が固着する。鍛造剥片の一つは0.1mmの厚さを持ち薄手である。含鉄部は 右寄りの中核部。	
29	第15図 PL-31	鍛冶滓 (含鉄)	①4.6 ②2 ③錆化(△)	埋土 長1.6 幅2.5 厚1.3	やや扁平な小塊状の鍛冶滓。上半部が滓部で、下半の突出部は再結合滓とな る。上半部には筋状のひび割れが生じている。	
30	第15図 PL-31	鍛冶滓 (含鉄)	①3.9 ②3 ③錆化(△)	埋土 長1.4 幅2.2 厚1.7	極小の含鉄の鍛冶滓。表面は再結合滓主体で、下面には扁平な滓片が突出す る。含鉄部は上半部主体。	
31	第15図 PL-31	工具付着滓	①3.1 ②1 ③なし	埋土 長1.9 幅2.0 厚0.5	やや密度の低い工具付着滓の破片。上面は緩やかな弧状の工具痕で、僅かに 光沢を持つ。下面は平坦な接地痕。滓の流動性は良くないが、微細な垂れが 生じている。	
32	第15図 PL-31	再結合滓	①17.6 ②4 ③なし	埋土 長3.0 幅4.2 厚2.2	多量の鍛造剥片が目立つ再結合滓の破片。上手側の側部には鉄床石の破片を かみこむ。鉄床石は表面のはね。鍛造剥片は光沢のあるものが目立ち、厚い ものは0.45mm。薄いものは0.15の厚みを持つ。1.3mm大の粒状滓も含まれている。	

第4章 遺構と遺物

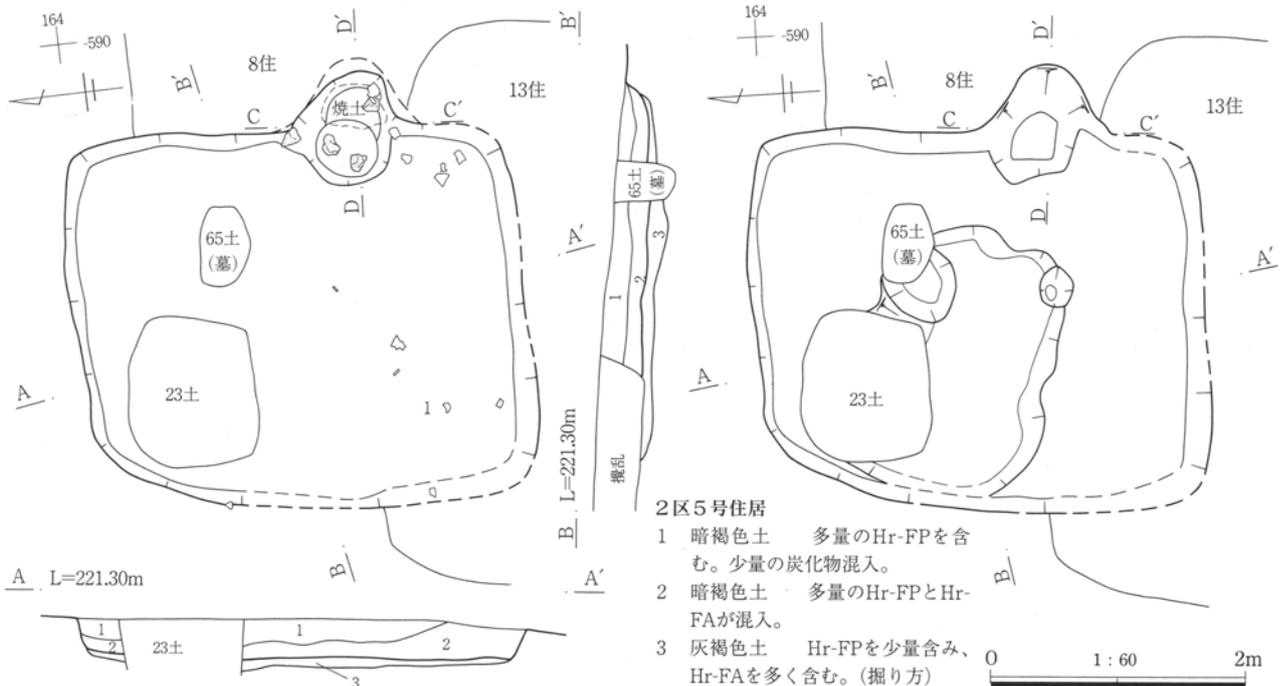
33	第15図 PL-31	再結合滓	① 16.0 ② 3 ③ なし	埋土 長 3.0 幅 3.3 厚 2.1	扁平な塊状の再結合滓。多量の鍛造剥片や滓片に加えて粉炭も含まれている。僅かに放射割れあり。鍛造剥片は光沢のあるものとなじものが混在する。
34	第15図 PL-31	再結合滓	① 40.9 ② 4 ③ 錆化(△)	埋土 長 4.4 幅 4.2 厚 4.2	下面に安山岩質の小礫が固着する再結合滓。青光りする粉末状の鍛造剥片に加えて、粒状の滓や鍛冶滓が再結合する。中核部に含鉄部を持ち、放射割れあり。
35	第15図 PL-32	鉄製品 (鍛造品) 小型袋状 鉄斧	① 79.9 ② 5 ③ 特L(☆)	床直 長 8.2 幅 4.3 厚 1.7	袋部の端部が欠けた小型の袋状鉄斧。刃部は撥形に開き、先端部は弧状の平面形を持つ。袋部の横断形は長楕円形。右側部側が本来の長さを示す。除去できない酸化土砂が部分的に瘤状に残る。刃部はメタルの残存が良好。
36	第15図 PL-32	鉄製品 (鍛造品) 錐	① 10.4 ② 3 ③ 錆化(△)	+ 16 長 8.6 幅 1.2 厚 1.1	かすかに帯状の貴金具の痕跡を残し、茎側が欠落する錐。貴具に覆われていたためか、基部に帯状の木部を残す。先端側は方形断面で、茎部側は隅丸長方形の断面形を持つ。
37	第15図 PL-32	鉄製品 (鍛造品) 刀子	① 24.4 ② 4 ③ L(●)	+ 18 長 15.2 幅 1.2 厚 0.4	3片に割れている刀子破片。両側で茎部分には木部が全周に残る。先端部側は欠落する。刃部が直線状で研ぎ減りは少ない。

①重量(g)②磁着度③メタル度

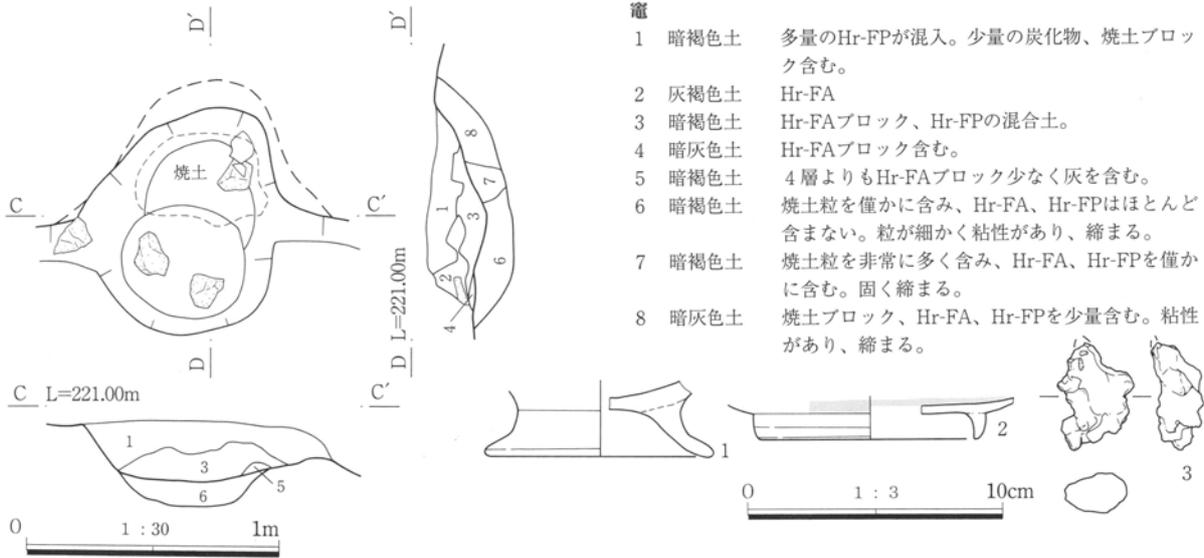
2区5号住居 (第16・17図、P L 3・32)

位置 164-590 方位 E-21°-S 形状 長軸3.58m・短軸3.00mで長軸を南北にもつ長方形である。面積 8.66m² 壁高 34cm 重複 8、13、14号住居、23号土坑、65号土坑(墓)と重複。5号住居が、8、13、14号住居を切り、23号土坑、65号土坑(墓)に切られる調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ8cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘り方面は中央西よりが大きく窪む。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。竈 東壁の南側に設置。燃焼部は幅68cm・

奥行き38cm。燃焼部から、竈構築材に用いられていたと思われる礫が出土した。竈内や竈壁面からHr-FAブロックが多く検出され、それらは竈構築材として用いられたものであると考えられる。遺物埋土から灰釉陶器碗、鍛冶滓、床面に近いところから足高高台の須恵器碗が出土した。実測可能な遺物が3個体ある。所見 鍛冶に関わる遺物は鍛冶滓1点であることから、本遺構が鍛冶工房であるというよりは、周辺の鍛冶工房から、遺物が混入した可能性が高い。床面に近いところから足高高台の須恵器碗が出土したことから、本遺構は10世紀後半に比定される。



第16図 2区5号住居・掘り方 平面・断面図



第17図 2区5号住居竈平面・断面図、出土遺物図

2区5号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第17図 PL-32	須恵器 椀	+9 高台部1/2	口 - 高3.0残 底(6.9) 高台(9.0)	①砂粒②酸化焙 ③にぶい黄橙色	足高高台の脚部。
2	第17図 PL-32	灰釉陶器 椀	埋土 底部片	口 - 高1.6残 底(9.0) 高台(8.5)	①細砂粒②還元 焙③灰白色	ロクロ成形。高台は貼付。施釉方法は刷毛塗り、釉調は緑色をおびた灰色。光ケ丘1号窯式期。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
3	第17図 PL-32	鍛冶滓 (含鉄)	① 19.5 ② 3 ③ 錆化(△)	埋土 長4.2 幅3.0 厚2.0	極小の鍛冶滓片。上面は緩やかに窪み、右上手側の側部が破面となる。側面は不規則で断面形は楕形を示す。含鉄部は左側部下半。	

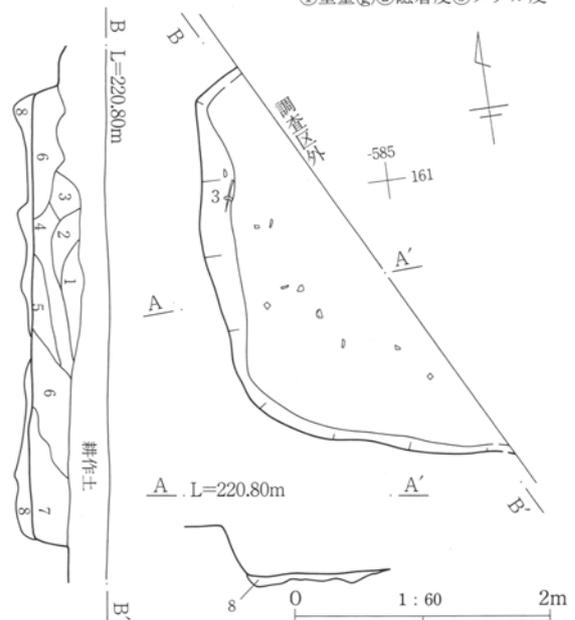
①重量(g)②磁着度③メタル度

2区7号住居 (第18・19図、P L 3・4・32)

位置 161-585 方位 測定不可能 形状 本遺構の大部分が調査区外にあるため、形状は不明である。
面積 測定不可能 壁高 37cm 重複 なし 床面 掘り方面から厚さ5cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘り方面では住居壁際が掘られている。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 確認できなかつた。柱穴 確認できなかつた。貯蔵穴 確認できなかつた。竈 確認できなかつた。
遺物 床直から鉄製紡錘車、埋土から須恵器坏、土師器小型甕が出土した。所見 本住居は、出土遺物より9世紀後半に比定される。

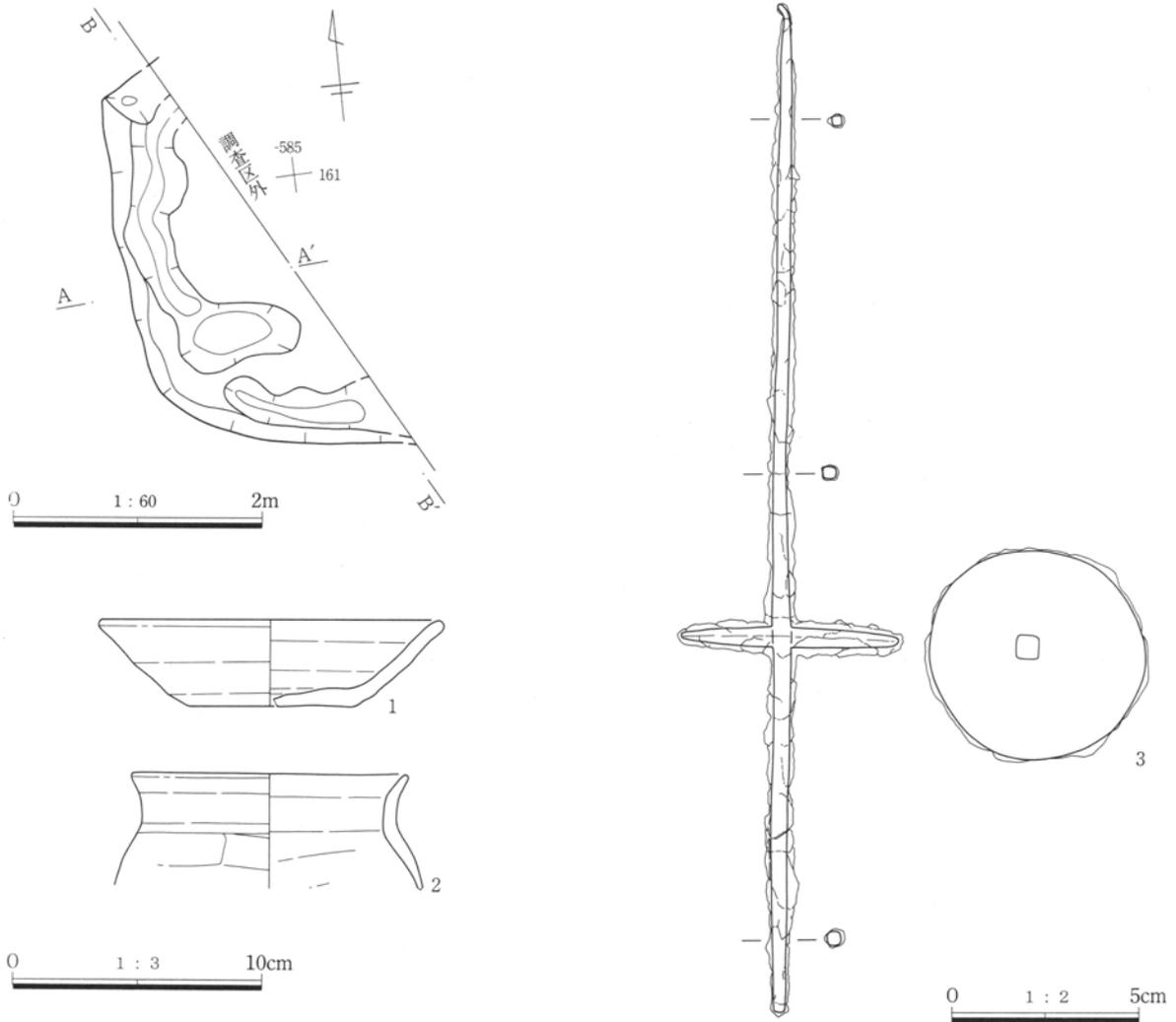
2区7号住居

- 1 黒褐色土 Hr-FAを少量、Hr-FPを僅かに含む。固く締まる。
- 2 褐色土 黄褐色粒を多く含み、Hr-FA、Hr-FPはほとんど含まない。
- 3 褐色土 2層と基本的に共通するが、黄褐色粒を多く含む。
- 4 暗褐色土 2層より暗く、Hr-FAブロックを多く含み、黄褐色粒を少量含む。やや粘性がある。締まり弱い。
- 5 褐色土 Hr-FAを多く含み、Hr-FPを僅かに含む。炭化粒を僅かに含む。
- 6 褐色土 Hr-FAブロック、Hr-FPとも多く含み、粘性があり、固く締まる。
- 7 暗黒色土 Hr-FAブロック、Hr-FPとも多く含み、炭化物を含む。締まり弱い。
- 8 黒褐色土 Hr-FA、Hr-FPを僅かに含む。固く締まる。(掘り方)



第18図 2区7号住居平面・断面図

第4章 遺構と遺物



第19図 2区7号住居掘り方平面図、出土遺物図

2区7号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第19図 PL-32	須恵器 坏	埋土 1/7	口(13.8) 高 3.5 底(6.8)	①粗砂粒②還元 焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。外面火樺あり。
2	第19図 PL-32	土師器 小型甕	埋土 口~胴部1/8	口(11.0)高 4.5残 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部は横位のヘラ削り。内面はヘラナデ。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
3	第19図 PL-32	鉄製品 (鍛造品) 紡錘車	① 59.7 ② 4 ③ 錆化(△)	床直 長軸 27.2 円盤 6.0	ほぼ完形の鉄製紡錘車。軸部は途中で二次的に欠けている。軸部は丸棒状で上方に向かって細身となる。上端部はへ字状に折り曲げられており、軸部側にかけてかすかに繊維痕が周回する。円盤部は正円で、中央からやや外側に寄って軸部が貫通している。円盤部は軸に対して下半の1/3程に装着されている。円盤部には繊維痕なし。	

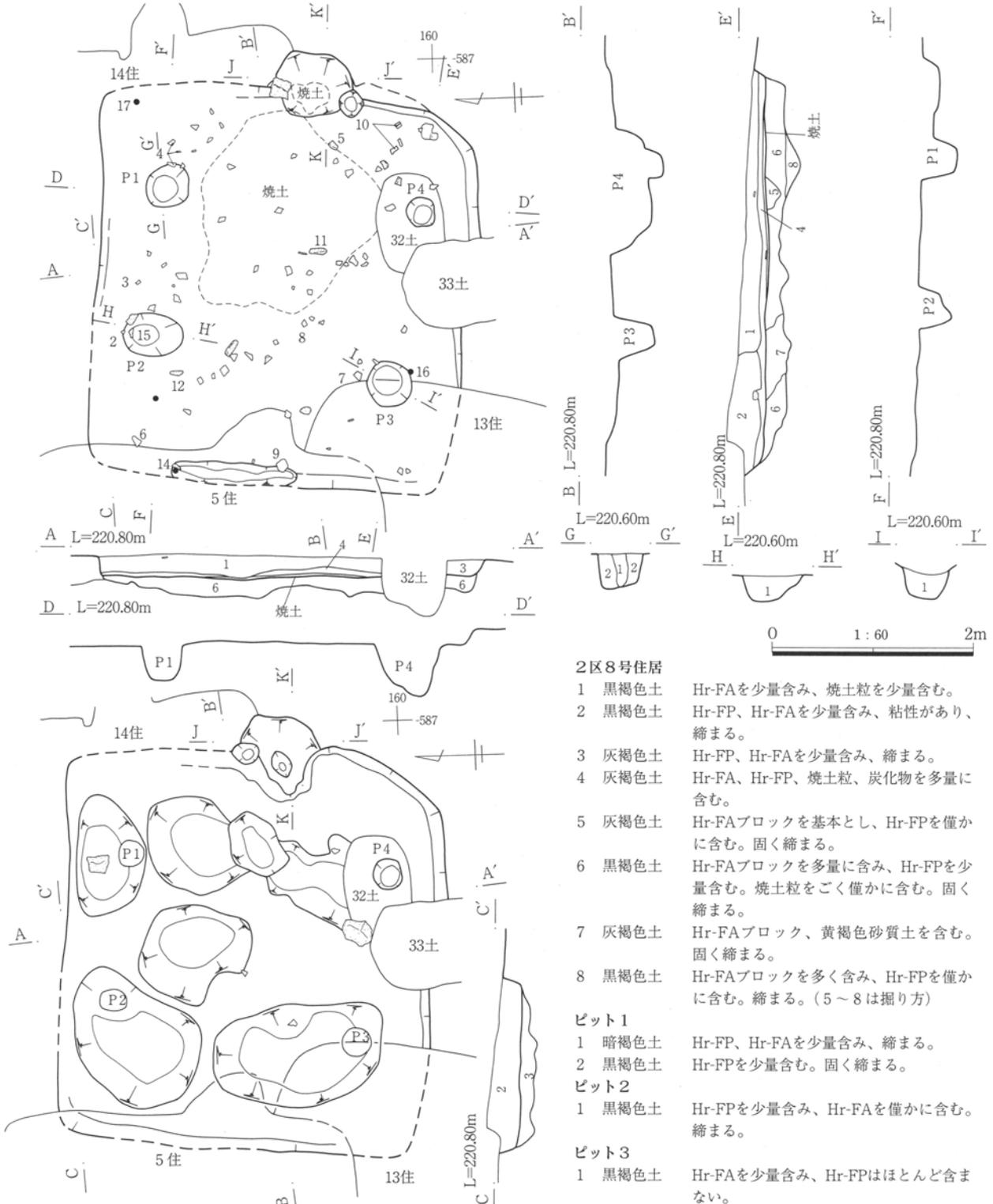
①重量(g)②磁着度③メタル度

2区8号住居 (第20・21図、P L 4・32)
位置 160-587 方位 E-0° 形状 長軸3.90m・
短軸3.78mで長軸を東西にもつ方形である。面積
13.78m² 壁高 34cm 重複 5、13、14号住居、
32、33号土坑と重複。8号住居が、13、14号住居を
切り、5号住居、32、33号土坑に切られる調査所見

を得た。床面 掘り方面から厚さ20cmの埋め土
を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で
整っている。住居中央東よりに灰・焼土の広がり
が確認された。掘り方面では、土坑状の掘り込みが数
基確認された。壁溝 確認できなかった。柱穴
床面から掘り込まれた柱穴を住居のほぼ対角線上に

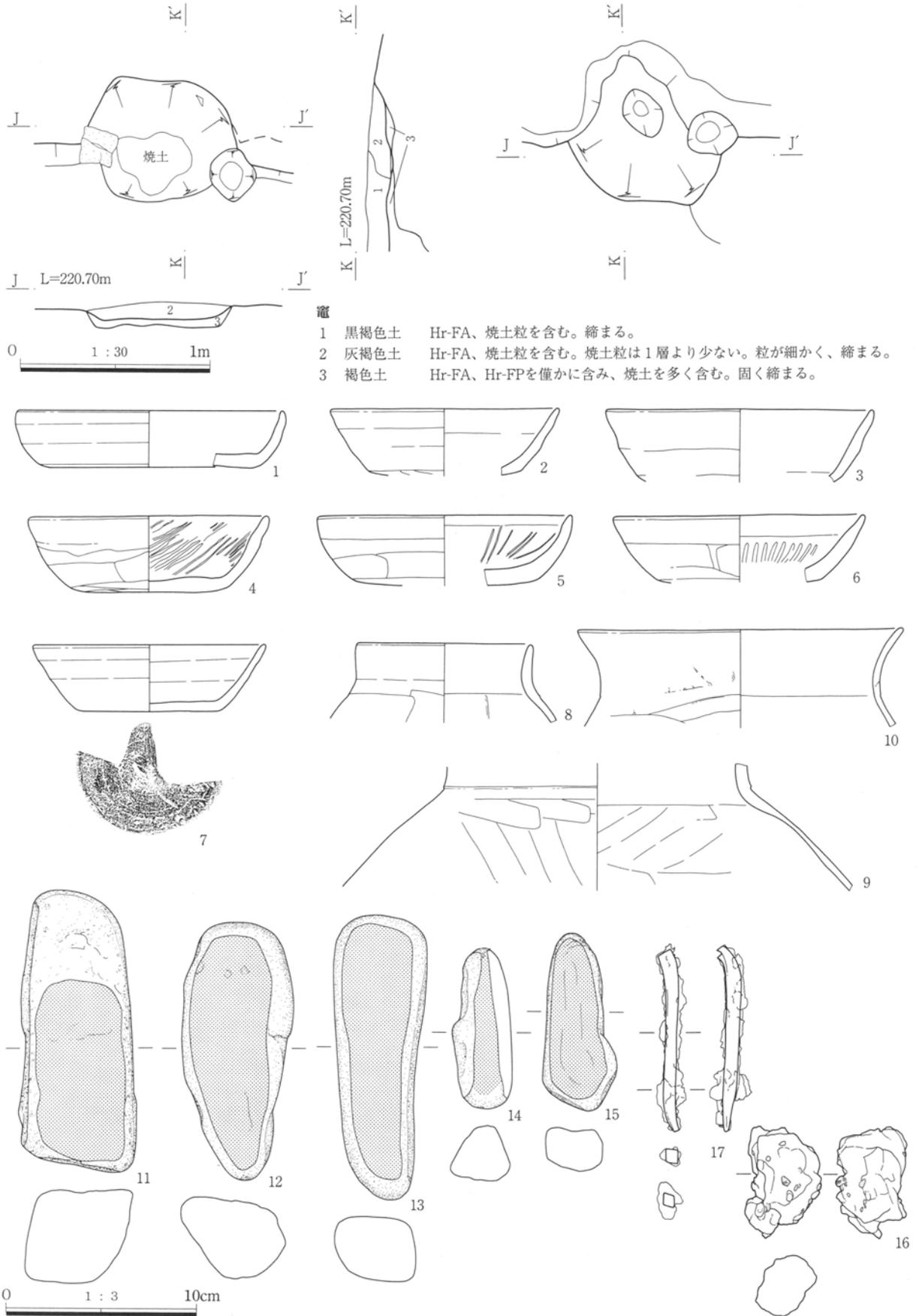
4基確認した。貯蔵穴 確認できなかった。竈 東壁の中央に設置。燃烧部は幅50cm・奥行き38cmで確認された。遺物 床直から須恵器坏、土師器甕、棒状の鉄製品が出土した。椀形鍛冶滓など鍛冶関連の遺物が数点出土した。実測可能な遺物が17個体ある。所見 椀形鍛冶滓、鉄製品などの鍛冶関

連遺物が出土した。また、住居床面中央東よりに灰・焼土が広がり、中央付近に炉があった可能性も考えられる。明確な遺構は検出されなかったものの、鍛冶工房である可能性も考えられる。本住居は、出土遺物より8世紀後半に比定される。



第20図 2区8号住居・掘り方 平面・断面図

第4章 遺構と遺物



竈

- 1 黒褐色土 Hr-FA、焼土粒を含む。締まる。
- 2 灰褐色土 Hr-FA、焼土粒を含む。焼土粒は1層より少ない。粒が細かく、締まる。
- 3 褐色土 Hr-FA、Hr-FPを僅かに含み、焼土を多く含む。固く締まる。

第21図 2区8号住居竈平面・断面図、出土遺物図

2区8号住居出土遺物観察表

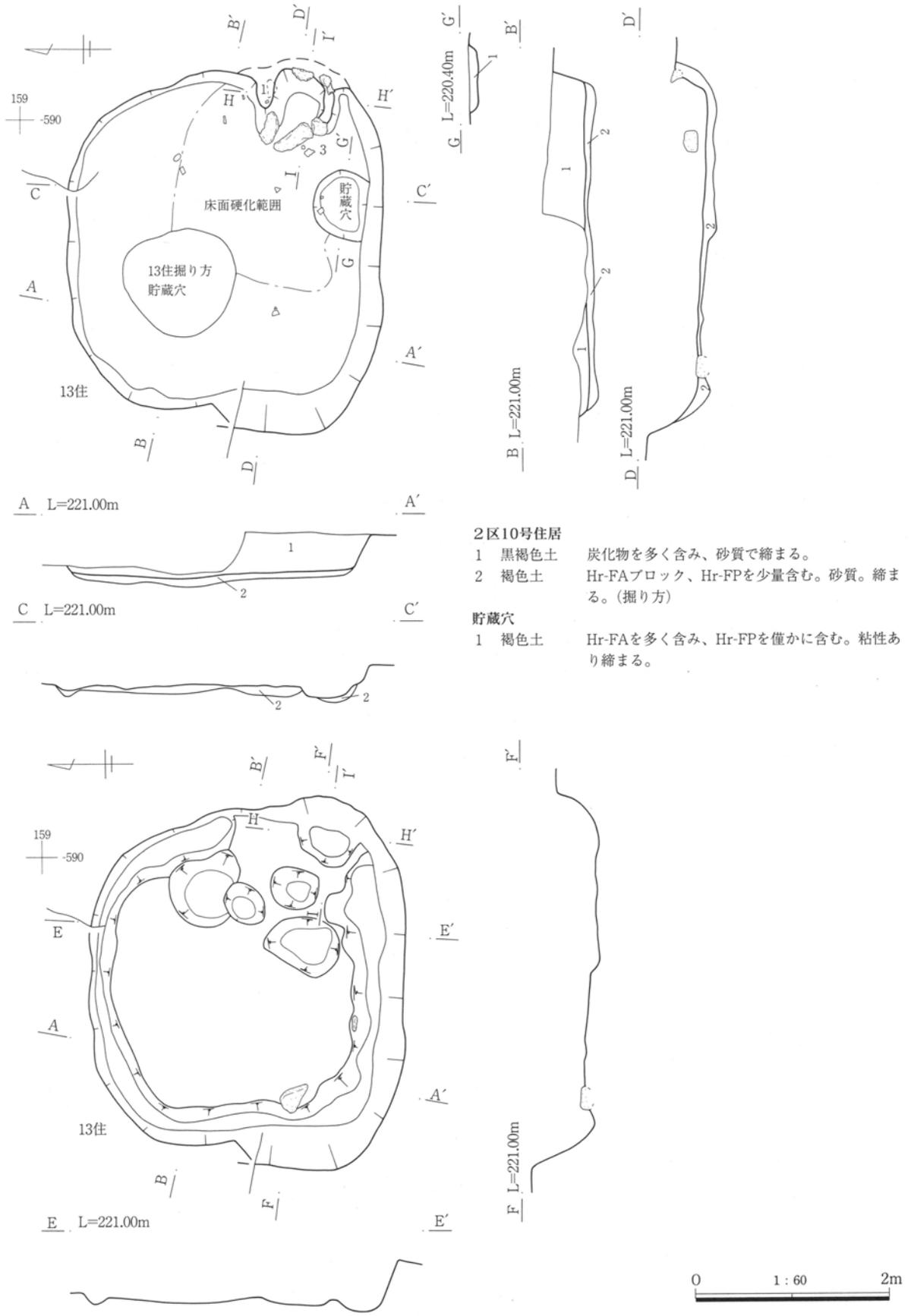
No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第21図 PL-32	須恵器 坏	埋土 1/6	口(13.7) 高3.1 底(9.0)	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。
2	第21図 PL-32	土師器 坏	+25 1/8	口(12.0) 高3.5残 底-	①砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上半が横ナデ。外面下半～底部ヘラ削り。
3	第21図 PL-32	土師器 坏	+22 1/4	口(14.0) 高3.8残 底-	①砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上半が横ナデ。外面下半～底部ヘラ削り。
4	第21図 PL-32	土師器 坏	+9 1/3	口(12.6) 高4.0 底(8.5)	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。外面下半～底部ヘラ削り。内面は斜放射状暗文。
5	第21図 PL-32	土師器 坏	+11 1/5	口(13.4) 高3.7 底(9.4)	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。外面下半～底部ヘラ削り。内面は斜放射状暗文。
6	第21図 PL-32	土師器 坏	+24 1/6	口13.2 高3.3 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。外面下半～底部ヘラ削り。内面は斜放射状暗文。
7	第21図 PL-32	須恵器 坏	床直 3/4	口(12.2) 高3.6 底(7.1)	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。自然軸あり。
8	第21図 PL-32	土師器 小型甕	+14 口～胴部1/6	口(9.0) 高4.1残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部は横位のヘラ削り。内面はヘラナデ。
9	第21図 PL-32	土師器 甕	床直 頸～胴上部片	口- 高6.7残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
10	第21図 PL-32	土師器 甕	床直 口縁部1/6	口(17.0) 高5.0残 底-	①砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部は横位のヘラ削り。内面はヘラナデ。
11	第21図 PL-32	棒状礫	+13	長14.9 幅6.2 厚4.9 重757.0g	ひん岩 (石材)	摩耗痕あり。
12	第21図 PL-32	棒状礫	+12	長13.5 幅5.9 厚4.3 重435.0g	溶結凝灰岩 (石材)	摩耗痕あり。
13	第21図 PL-32	棒状礫	埋土	長14.8 幅4.9 厚3.4 重422.0g	ひん岩 (石材)	摩耗痕あり。
14	第21図 PL-32	棒状礫	+16	長8.5 幅3.1 厚2.9 重106.0g	粗粒輝石安山岩 (石材)	摩耗痕あり。
15	第21図 PL-32	棒状礫	+28	長9.3 幅3.9 厚2.3 重120.0g	粗粒輝石安山岩 (石材)	摩耗痕あり。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
16	第21図 PL-32	腕形鍛冶滓 (小、含鉄)	①75.4 ②5 ③錆化(△)	+17 長6.0 幅4.0 厚3.7	やや厚みを持った小型の腕形鍛冶滓破片。上下面は生きており、側部は全面破面の可能性が高い。本来は中型の腕形鍛冶滓か。滓は密度が低く、含鉄部は左側部下半を中心にやや分散する。	
17	第21図 PL-32	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明	①7.4 ②3 ③L(●)	床直 長6.4 幅0.5 厚0.5	緩やかなS字状にうねった棒状不明品。長軸の両端部で断面形状は異なっている。上手側は方形ぎみの断面で、中間部分より下手側が、菱形から薄い菱形となる。釘の未製品または失敗品の可能性あり。	

①重量(g)②磁着度③メタル度

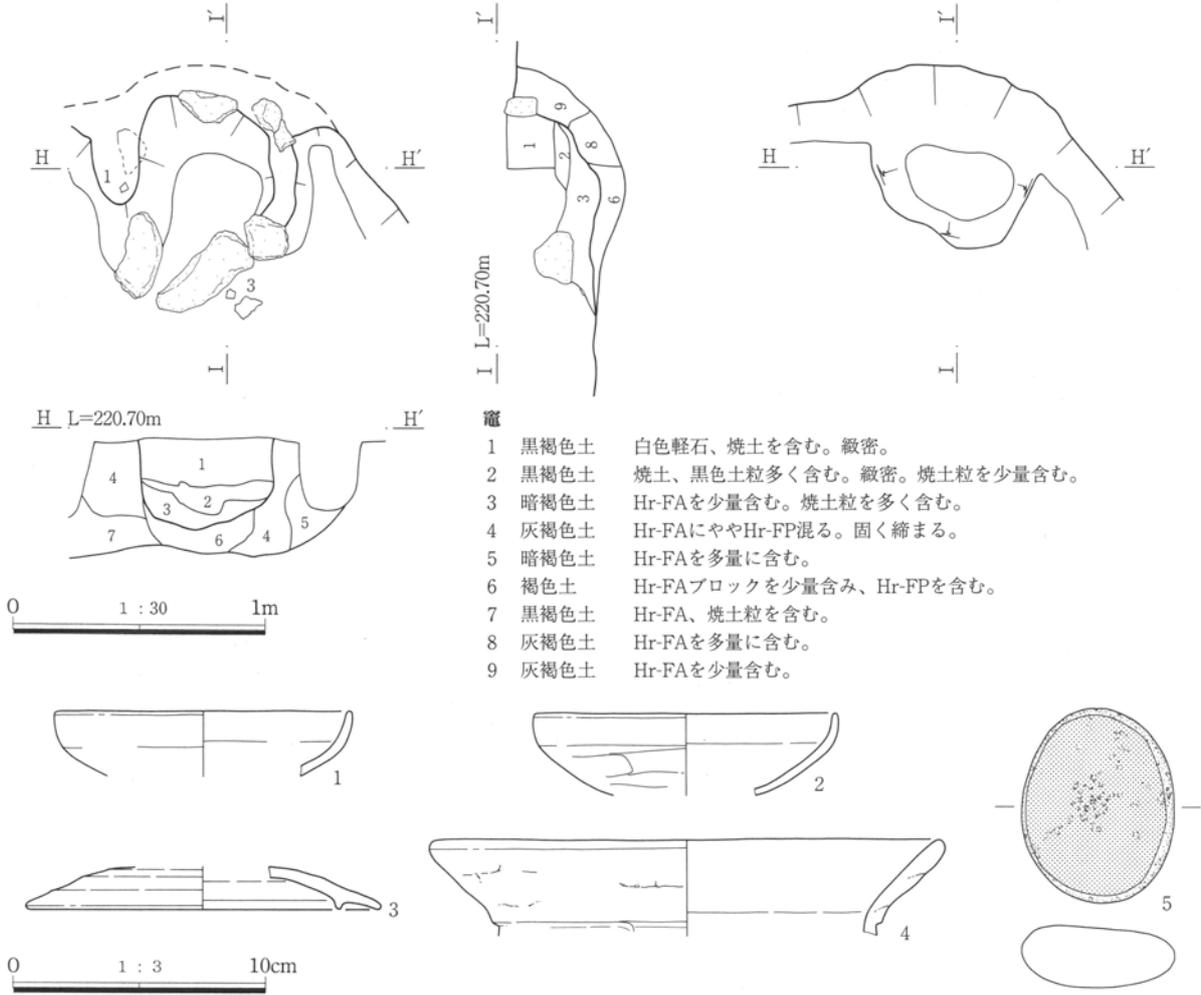
2区10号住居 (第22・23、P L 4・32)

位置 159-590 方位 E-8°S 形状 長軸3.70m・短軸3.28mで長軸を東西にもつ方形である。面積41.8m² 壁高 49cm 重複 13号住居と重複。10号住居が、13号住居に切られる調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ8cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。竈前の床面が特に硬化していた。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南壁沿東側に設置。長径75cm・短径54cm・

深さ10cmの楕円形を呈す。竈 東壁の中央に設置。燃烧部は幅38cm・奥行き55cmで確認された。袖部、天井部などの竈構築材として使用されたと思われる二ツ岳石が検出された。遺物 床直から土師器坏、須恵器蓋、竈から土師器坏が出土した。実測可能な遺物が5個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より7世紀末から8世紀初頭に比定される。



第22図 2区10号住居・掘り方 平面・断面図



第23図 2区10号住居竪穴平面・断面図、出土遺物図

2区10号住居出土遺物観察表

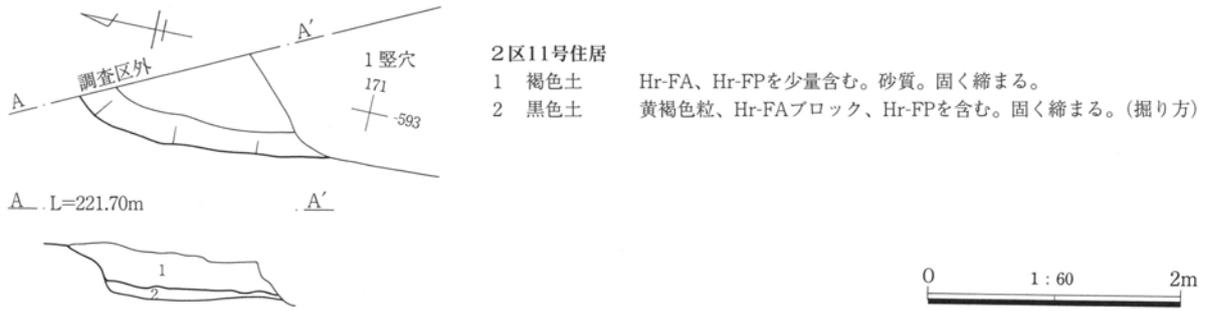
No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第23図 PL-32	土師器 坏	竪穴 口～体部片	口(12.0)高3.0残 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部上半が横ナデ。外面下半～底部へラ削り。
2	第23図 PL-32	土師器 坏	埋土 口～体部片	口(11.7)高2.6残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい黄褐色	口縁部上半が横ナデ。外面下半～底部へラ削り。
3	第23図 PL-32	須恵器 蓋	床直 口縁部片	口(14.0)高1.8残 底-	①砂粒②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。
4	第23図 PL-32	土師器 甕	埋土 口縁部片	口(20.3)高3.9残 底-	①砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はへラ削り。内面はへラナデ。
5	第23図 PL-32	円盤	床直	長7.7 幅6.0 厚2.5 重158.0g	デイスait (石材)	摩耗痕あり。

2区11号住居 (第24図、P L15)

位置 171-593 方位 測定不可能 形状 遺構のほとんどが調査区外のため確認できなかった。面積 測定不可能 壁高 38cm 重複 1号竪穴状遺構と重複。11号住居が1号竪穴状遺構に切られる調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ9cmの埋め土を施して平坦な面を造る。壁溝 確認で

きなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。竪穴 確認できなかった。遺物 なし 所見 本遺構の時期は、10世紀後半に比定される1号竪穴状遺構に切られる調査所見から、それ以前に構築された遺構であると考えられる。

第4章 遺構と遺物

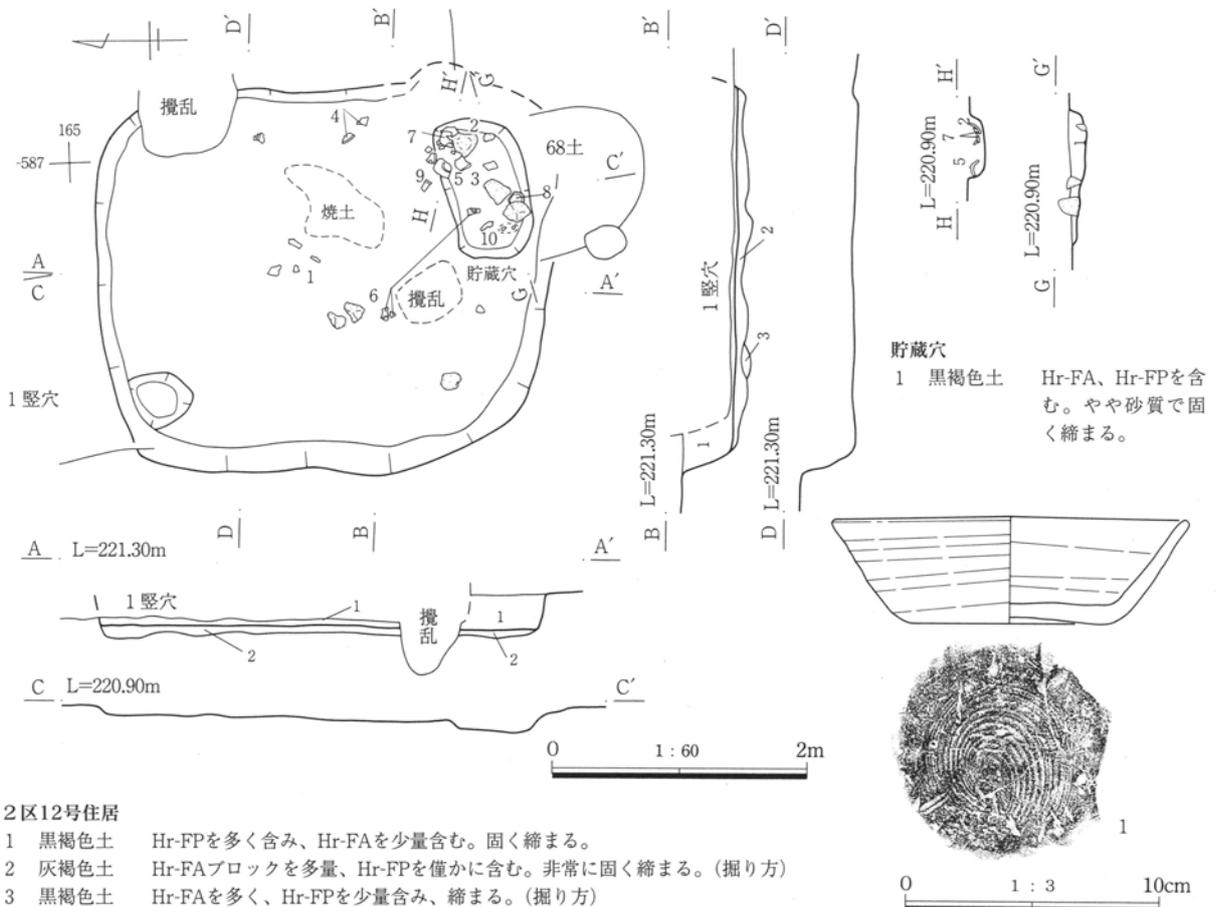


第24図 2区11号住居平面・断面図

2区12号住居 (第25・26図、P L 5・33)

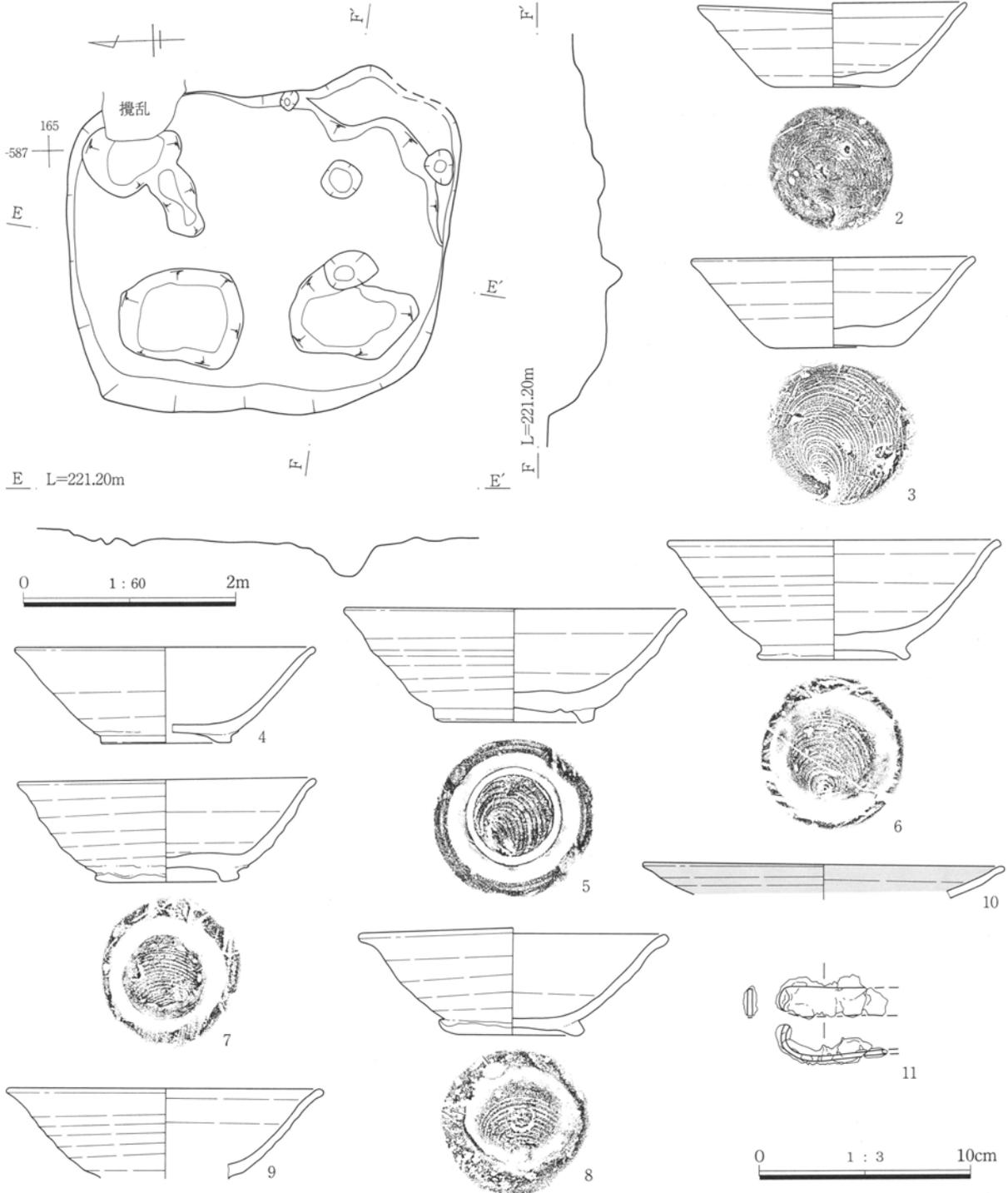
位置 165-587 方位 E-0° 形状 長軸3.57m・短軸3.05mで長軸を南北にもつ長方形である。面積 8.56㎡ 壁高 43cm 重複 1号堅穴状遺構と68号土坑と重複。12号住居が、1号堅穴状遺構と68号土坑に切られる調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ10cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。掘り方面で床下土坑が検出された。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。長軸116cm・短軸66cm・深さ13cmの隅丸長方形を呈す。竈 確認できなかった。掘り方面調査時に竈と思われる掘り込みを確認した。遺物 床直から須恵器坏、椀、貯蔵穴から須恵器坏、椀、灰釉陶器皿、埋土から鉄製品が出土した。実測可能な遺物は11個体である。所見 本住居の時期は、出土遺物より9世紀後半に比定される。

た。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。長軸116cm・短軸66cm・深さ13cmの隅丸長方形を呈す。竈 確認できなかった。掘り方面調査時に竈と思われる掘り込みを確認した。遺物 床直から須恵器坏、椀、貯蔵穴から須恵器坏、椀、灰釉陶器皿、埋土から鉄製品が出土した。実測可能な遺物は11個体である。所見 本住居の時期は、出土遺物より9世紀後半に比定される。



第25図 2区12号住居平面・断面図、出土遺物図(1)

[1] 竪穴住居



第26図 2区12号住居掘り方平面・断面図、出土遺物図(2)

2区12号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第25図 PL-33	須恵器 坏	床直 1/2	口(13.7) 高4.2 底8	①砂粒②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
2	第26図 PL-33	須恵器 坏	貯蔵穴 1/2強	口(12.7) 高4.0 底5.8	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
3	第26図 PL-33	須恵器 坏	貯蔵穴 1/2	口(13.4) 高4.2 底6.6	①砂粒②酸化焰 ぎみ③灰黄色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
4	第26図 PL-33	須恵器 椀	床直 1/3	口(14.2) 高4.6 底(6.2) 高台(6.2)	①砂粒②酸化焰 ぎみ③浅黄色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
5	第26図 PL-33	須恵器 椀	貯蔵穴 2/3	口(16.2) 高5.4 底7.5 高台7.5	①砂粒②酸化焰 ぎみ③灰黄色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
6	第26図 PL-33	須恵器 椀	貯蔵穴 1/2	口(15.4) 高5.7 底6.8 高台7.2	①砂粒②酸化焰 ぎみ③ぶい橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。

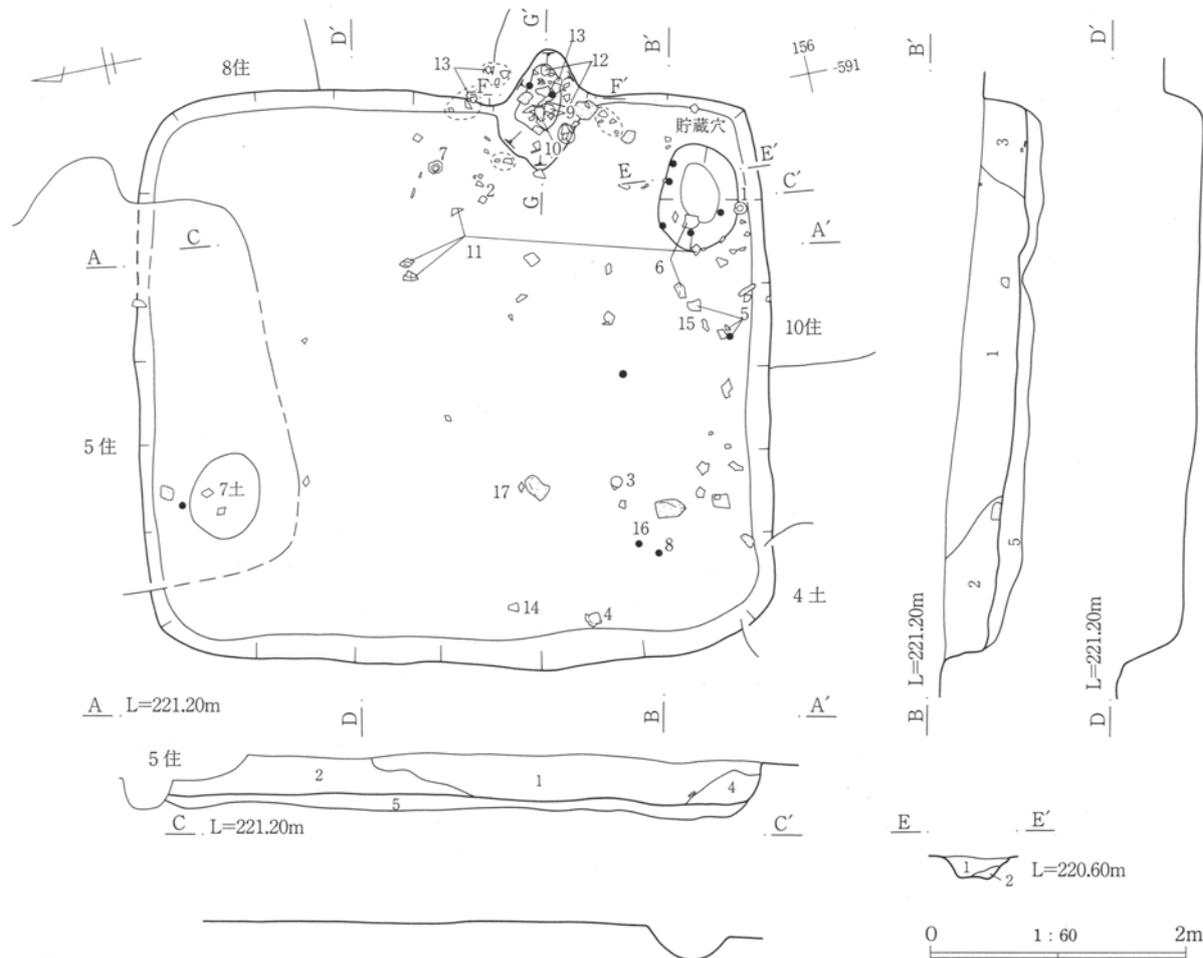
7	第26図 PL-33	須恵器 椀	貯蔵穴 3/5	口(14.0) 高 4.9 底 6.6 高台 6.8	①砂粒②酸化焙 ぎみ③灰黄色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
8	第26図 PL-33	須恵器 椀	貯蔵穴 2/3	口(14.7) 高 5.1 底 6.3 高台 6.8	①砂粒②酸化焙 ぎみ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
9	第26図 PL-33	須恵器 椀	貯蔵穴 口～体部1/4	口(15.0) 高 4.3残 底 - 高台 -	①砂粒②酸化焙 ぎみ③にぶい褐色	ロクロ成形、右回り回転。
10	第26図 PL-33	灰釉陶器 皿	貯蔵穴 口縁部片	口(17.0) 高 1.5残 底 -	①細砂粒②還元 焙③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。釉調は透明感のある緑色をおびた灰色。施釉方法は漬け掛け。大原2号窯式期。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
11	第26図 PL-33	鉄製品 (鍛造品) 毛ぬき(曲げ)	① 2.8 ② 2 ③ 錆化(△)	埋土 長 3.5 幅 1.0 厚 0.13	刀の吊り手金具の可能性もあるが、毛抜きの可能性が高い。頭部をいったん絞った上で、径2mm以下の細い鉄輪を装着している。体部下端は欠落し破面となっている。	

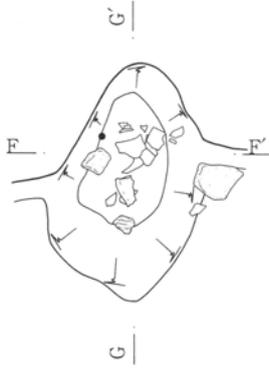
①重量(g)②磁着度③メタル度

2区13号住居 (第27～29図、P L 4・5・33・34)

位置 156-591 方位 E-15°-S 形状 長軸4.95m・短軸4.50mで長軸を南北にもつ方形である。面積 18.82m² 壁高 38cm 重複 5、8、10号住居、4、7号土坑と重複。13号住居が、5号住居、4、7号土坑に切られ、8、10号住居を切って構築する調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ12cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。長軸82cm・短軸62cm・深さ

16cmの楕円形を呈す。竈 東壁の南側に設置。燃烧部は幅34cm・奥行き40cmで確認された。袖部などの竈構築材として使用されたと思われる二ツ岳石が検出された。遺物 竈から土師器甕、床直から須恵器坏、椀、砥石、椀形鍛冶滓などが出土した。実測可能な遺物が17個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より9世紀第2から第4四半期に比定される。椀形鍛冶滓、砥石など鍛冶関連の遺物が住居南西の床直でまとまって出土し、鍛冶工房の可能性も考えられる。





2区13号住居

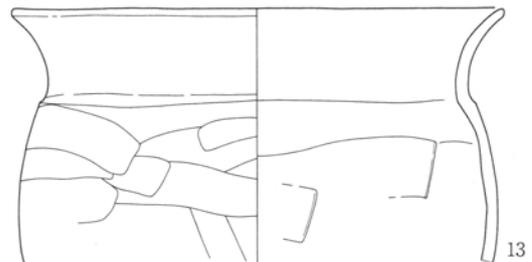
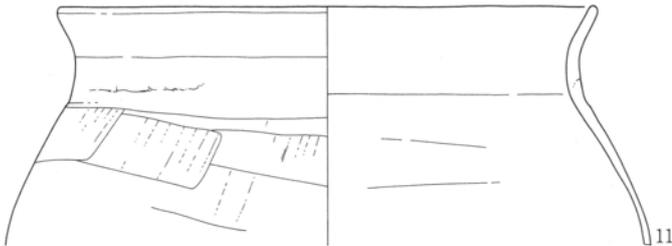
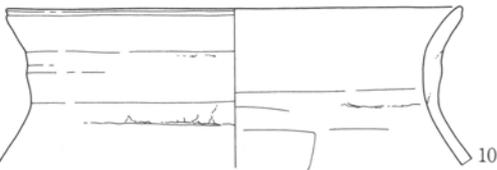
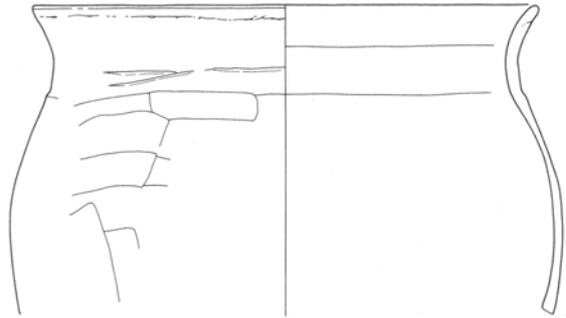
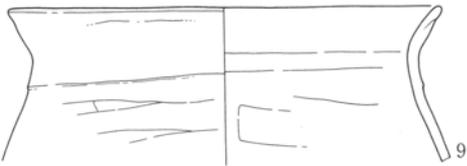
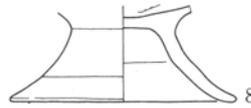
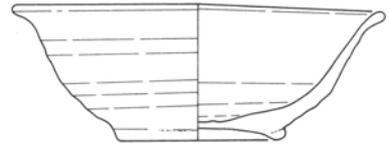
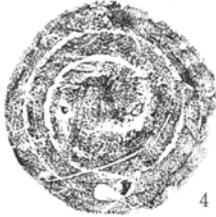
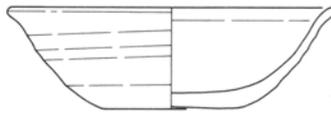
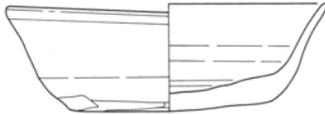
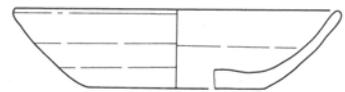
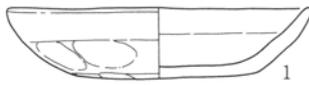
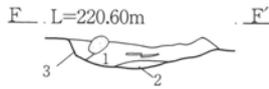
- 1 黒褐色土 Hr-FP、Hr-FAを少量含む。粘性があり、締まる。
- 2 褐色土 黄褐色粒、Hr-FA、Hr-FPを僅かに含む。砂質で固く締まる。
- 3 褐色土 黄褐色粒、Hr-FA、Hr-FPを含む。砂質。締まる。
- 4 黒褐色土 粘性があり、固く締まる。
- 5 黒褐色土 Hr-FAブロック、Hr-FPを多量に含む。固く締まる。(掘り方)

竈

- 1 暗褐色土 被熱したHr-FAブロック、Hr-FAブロック、Hr-FPを含む。
- 2 暗褐色土 被熱したHr-FAを含む。
- 3 暗褐色土 1層よりも被熱したHr-FAブロック、Hr-FAブロックを含む。

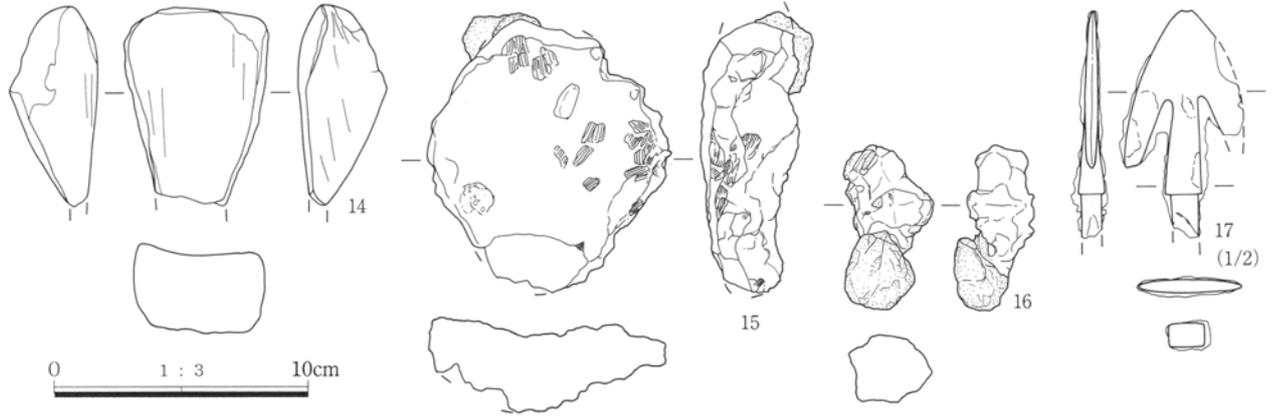
貯蔵穴

- 1 暗褐色土 Hr-FAを僅かに、Hr-FPをごく僅かに含む。締まる。
- 2 黒褐色土 1層より暗い。Hr-FAを僅かに、Hr-FPをごく僅かに含む。締まり弱い。



第28図 2区13号住居竈平面・断面図、出土遺物図(1)

第4章 遺構と遺物



第29図 2区13号住居出土遺物図(2)

2区13号住居出土遺物観察表

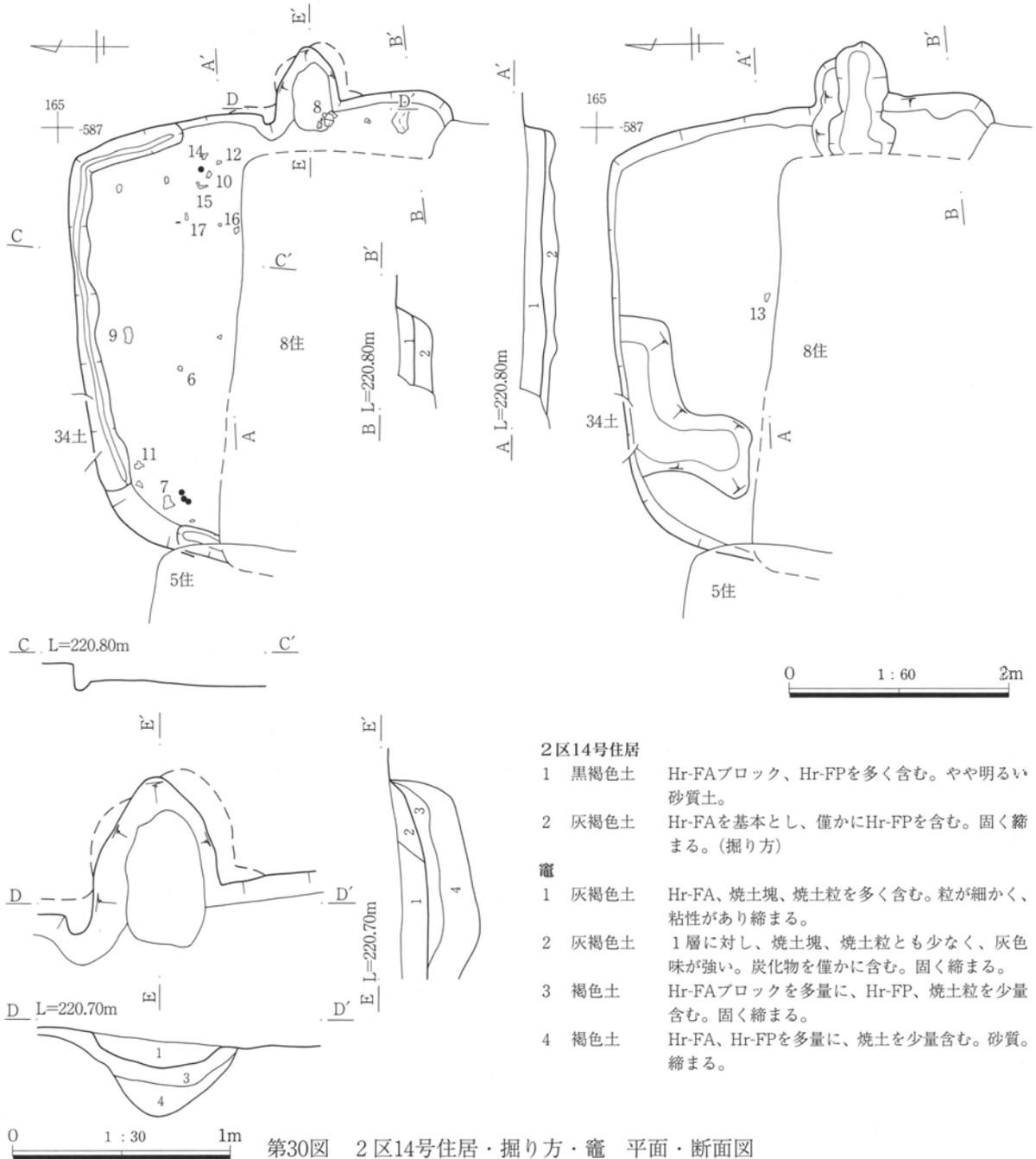
No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第28図 PL-33	土師器 坏	+11 ほぼ完形	口12.0 高2.8 底-	①砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上半が横ナデ。底部はヘラ削り。体部に指頭痕あり。
2	第28図 PL-33	土師器 坏	+16 1/6	口(12.1) 高3.6 底(6.0)	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。外面ヘラ削り。
3	第28図 PL-33	須恵器 坏	床直 1/3	口(12.9) 高3.1 底(7.0)	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。
4	第28図 PL-33	須恵器 坏	+30 1/2	口(12.6) 高4.2 底8.0	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。ヘラ起こし後、底部周辺を削り調整。
5	第28図 PL-33	須恵器 椀	床直 2/3	口(13.0) 高4.0 底5.6	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。
6	第28図 PL-33	須恵器 椀	貯蔵穴 4/5	口14.4 高5.4 底6.4 高台6.6	①細砂粒②酸化 焰ざみ ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
7	第28図 PL-33	灰釉陶器 皿	+3 底部	口- 高1.8残 底5.6 高台5.8	①細砂粒②還元 焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。高台は貼付。施釉方法は刷毛塗り、釉調は緑色をおびた灰色。光ヶ丘1号窯式期。
8	第28図 PL-33	土師器 小型甕	床直 底~脚部片	口- 高3.8残 底4.1 脚(8.9)	①砂粒 ②良好 ③灰褐色	脚部。内外面横ナデ。
9	第28図 PL-33	土師器 甕	竈 口~胴部1/4	口(17.0)高6.0残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
10	第28図 PL-33	土師器 甕	竈 口縁部1/3	口(18.0)高6.3残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
11	第28図 PL-33	土師器 甕	床直 口~肩部1/2	口(21.2)高10.1残 底-	①粗砂粒 ②良 好③にぶい褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
12	第28図 PL-34	土師器 甕	竈 口~胴部1/6	口(19.9)高12.2残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
13	第28図 PL-34	土師器 甕	竈 口~胴部1/4	口(19.3)高10.0残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
14	第29図 PL-34	砥石	床直	長7.9 幅5.5 厚3.4 重162.0g	砥沢石(石材)	軟質で3面に砥面を持つ砥石の端部破片。上手側の側部が自然面。砥面は左右の側部と上面に残る。下面は節理面からの欠落部。左右の砥面は平坦きみで、上面は浅い楕状となる。短軸方向の砥痕を持つ。仕上げ砥か。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
15	第29図 PL-34	椀形鍛冶滓 (中、含鉄)	①384.6 ②3 ③M(◎)	床直 長11.2 幅9.6 厚4.5	平面、不整楕円形をした密度の高い椀形鍛冶滓。肩部が立ちきみで、表面には木炭痕が連続する。上手側の側部が主破面。下面左側も表面が欠落している。上面は短軸方向に向かうきわめて緩やかな楕状で、それに対応するように下面が突出する。下面の凹凸が激しい。上面の磁着は全体に強い。	
16	第29図 PL-34	椀形鍛冶滓 (極小、含鉄)	①43.9 ②4 ③H(○)	+23 長6.5 幅3.6 厚3.2	下手側の側面に軽石の固着した極小の椀形鍛冶滓。表面には酸化土砂が厚く、不明点が多い。上下面の一部が生き、側面は破面の可能性大。含鉄部は中央よりやや上手側の上半部。	
17	第29図 PL-34	鉄製品 (鍛造品) 鎌	①15.8 ②4 ③特L(☆)	+26 長6.0 幅3.0 厚0.5	茎部の先端と刃部や右側の逆刺部の一部が欠けた、大型の腸挟有茎三角形式の鎌。頸部と茎部の断面形は長方形で、中間部に関を持つ。逆刺部は「八」の字状。頸部は扁平で身厚があり、関側に向かい厚くなる。2区14号住居-16もほぼ同形態の鎌。	

①重量(g)②磁着度③メタル度

2区14号住居 (第30・31図、P L 4・34)

位置 165-587 方位 E-5°-N 形状 長軸4.09m・短軸3.54mで長軸を東西にもつ方形である。面積(12.36) m² 壁高 34cm 重複 5、8号住居と重複。5、8号住居に切られる調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ20cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。竈 確認でき

なかった。遺物 床直付近から椀形鍛冶滓、鍛冶滓、鉄鏃等の鍛冶関連遺物が出土した。その他埋土から土師器坏、甕が出土した。実測可能な遺物が17個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より7世紀後半に比定される。住居の大部分が8号住居に切られる。鍛冶関連遺物はほとんど床面付近から出土しており、鍛冶工房の可能性も考えられる。



2区14号住居

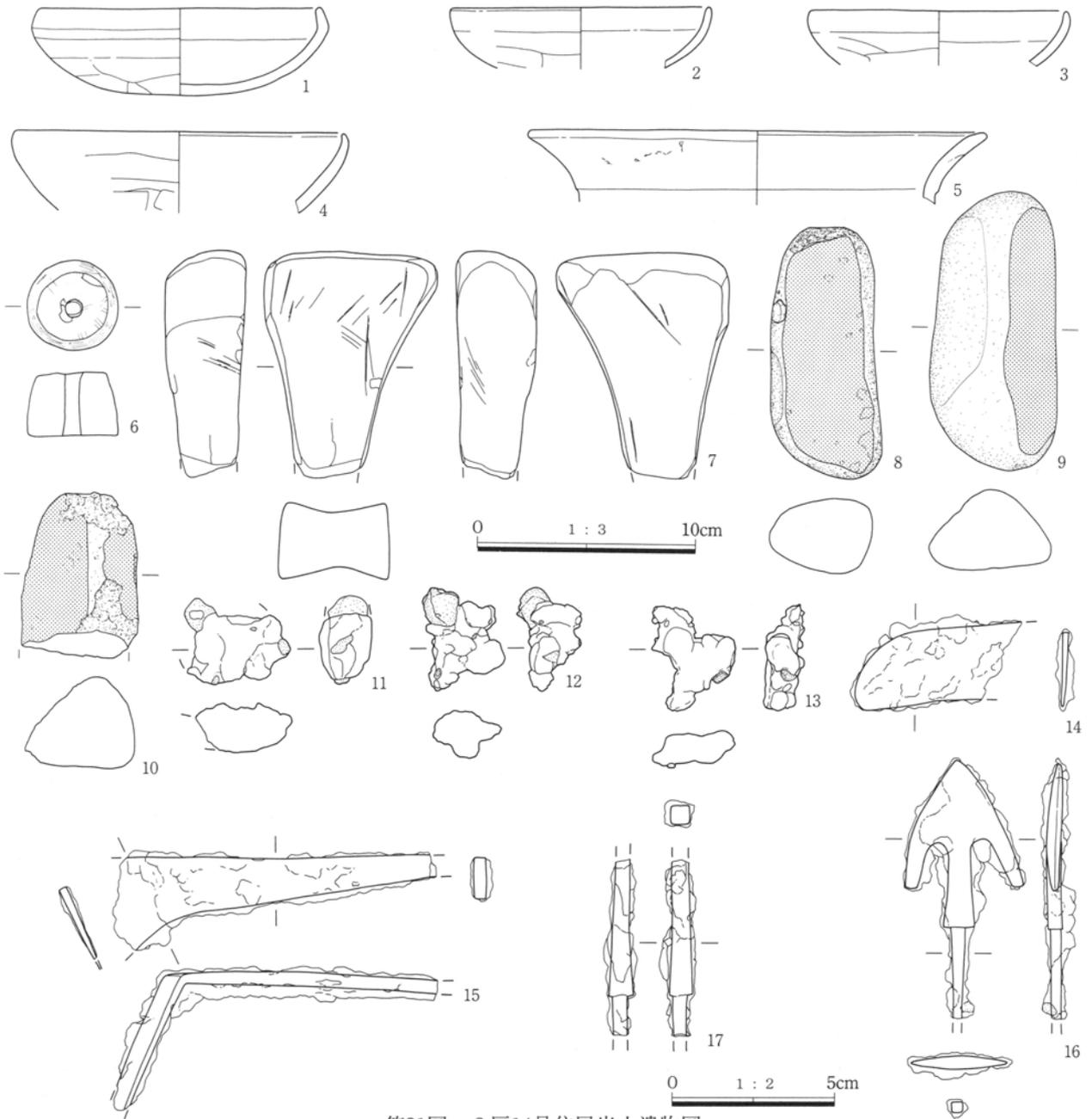
- 1 黒褐色土 Hr-FAブロック、Hr-FPを多く含む。やや明るい砂質土。
- 2 灰褐色土 Hr-FAを基本とし、僅かにHr-FPを含む。固く締まる。(掘り方)

竈

- 1 灰褐色土 Hr-FA、焼土塊、焼土粒を多く含む。粒が細かく、粘性があり締まる。
- 2 灰褐色土 1層に対し、焼土塊、焼土粒とも少なく、灰色味が強い。炭化物を僅かに含む。固く締まる。
- 3 褐色土 Hr-FAブロックを多量に、Hr-FP、焼土粒を少量含む。固く締まる。
- 4 褐色土 Hr-FA、Hr-FPを多量に、焼土を少量含む。砂質。締まる。

第30図 2区14号住居・掘り方・竈 平面・断面図

第4章 遺構と遺物



第31図 2区14号住居出土遺物図

2区14号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第31図 PL-34	土師器 坏	埋土 1/4	口(13.0) 高3.9 底-	①砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上半が横ナデ。下半~底部はヘラ削り。
2	第31図 PL-34	土師器 坏	埋土 口~体部片	口(12.0) 高2.3残 底-	①砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上半が横ナデ。外面ヘラ削り。
3	第31図 PL-34	土師器 坏	埋土 口~体部片	口(11.8) 高(2.5) 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部上半が横ナデ。下半~底部はヘラ削り。
4	第31図 PL-34	土師器 坏	埋土 口~体部片	口(15.0) 高(3.8) 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。外面ヘラ削り。
5	第31図 PL-34	土師器 甕	埋土 1/4	口(20.8) 高3.0残 底-	①砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部から頸部横ナデ。
6	第31図 PL-34	石製品 紡錘車	床直 完形	長4.1 幅4.1 厚4.9 重67.0g	砥沢石 (石材)	広面平坦に整形後、磨き。側面磨き、回転方向の擦痕は使用時のものか。狭面平坦に整形後、磨き。
7	第31図 PL-34	石製品 砥石	+11	長10.4 幅7.9 厚3.7 重340.9g	砥沢石 (石材)	上手側を除き側部4面が砥面となる砥石の端部破片。下手側は破面。上下面の砥面は短軸方向に向かう浅い樋状に研ぎ減りする。左右の砥面は平坦で、下手側に向かい弧状の面をなす。軟質で、仕上げ砥か。

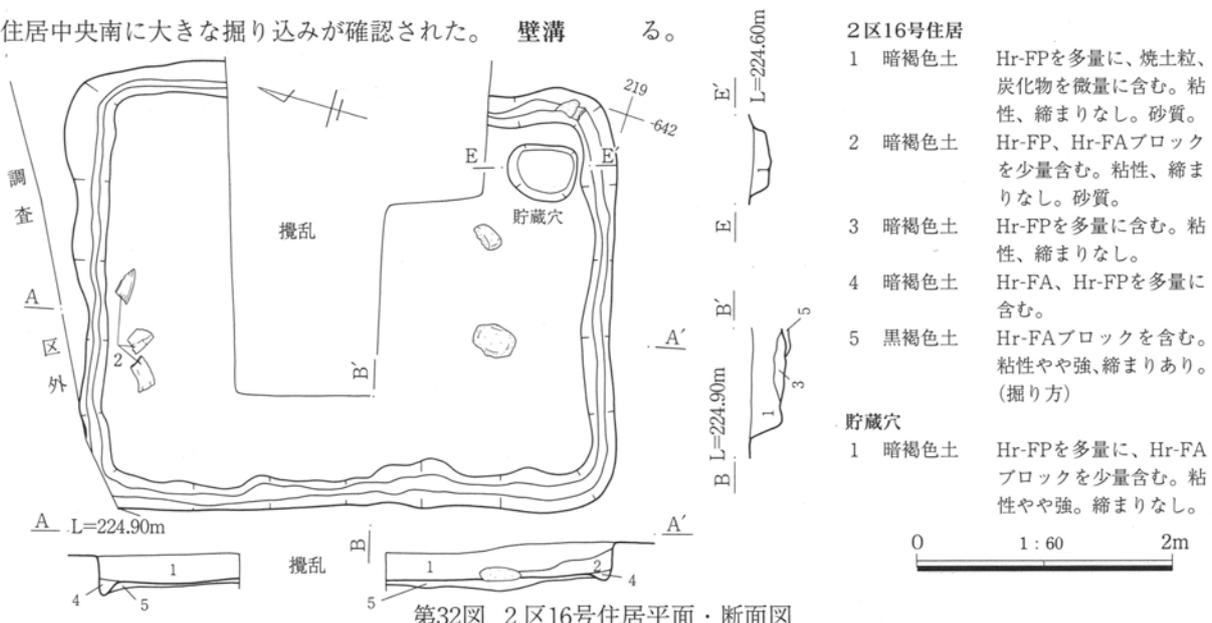
8	第31図 PL-34	棒状礫	竈	長 11.5 幅 5.1 厚 3.5 重 316.8g	ひん岩 (石材)	摩耗痕あり。
9	第31図 PL-34	棒状礫	+9	長 14.9 幅 5.8 厚 3.7 重 409.2g	ひん岩 (石材)	摩耗痕あり。
10	第31図 PL-34	棒状礫	床直	長 7.7 幅 5.4 厚 4.2 重 238.9g	石英閃緑岩 (石材)	摩耗痕あり。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
11	第31図 PL-34	椀形鍛冶滓 (小、含鉄)	① 45.5 ② 5 ③ L(●)	床直 長 3.9 幅 4.9 厚 2.3	上手側の側部が欠落した小型の椀形鍛冶滓。上下面は平坦きみで、破面には黒錆が目立つ。見かけの割には比重が高く、放射割れも生じている。含鉄部は中核部に広がる。	
12	第31図 PL-34	鍛冶滓	① 24.1 ② 5 ③ なし	+7 長 4.8 幅 3.8 厚 3.0	酸化土砂に覆われた鍛冶滓片。表面は凹凸が激しく、内部にも隙間を持つ。酸化土砂中には軽石が目立つ。上手側の側部がやや磁着する。	
13	第31図 PL-34	鍛冶滓 (含鉄)	① 28.9 ② 4 ③ L(●)	床直 長 4.8 幅 3.8 厚 1.7	平面、不整三角形をした含鉄の鍛冶滓。左側部が破面の可能性を持つが、はっきりしない。上面は平坦きみで浅い木炭痕あり。下面は不規則な椀形となる。含鉄部は上半主体で範囲は広い。鉄部主体の鍛冶滓。	
14	第31図 PL-34	鉄製品 (鍛造品) 板状 鎌か	① 10.6 ② 3 ③ 錆化(△)	+9 長 5.3 幅 2.2 厚 0.1	薄板状の鎌の先端部破片。刃部は僅かに弧状で背側は直線状となり、先端部はきれいな弧状を示す。刃部刃半ばで欠落する薄身の鎌である。	
15	第31図 PL-34	鉄製品 (鍛造品) 鎌か	① 37.2 ② 4 ③ L(●)	床直 長 10.0 幅 2.4 厚 0.3	刃部側が下方に折り曲げられた鉄製品破片。扁平な直線状の茎部を持ち、茎部の断面形は長方形で目釘孔はなし。刃部と茎部の先端は欠落する。鎌の可能性が高い。折り曲げは故鉄としての意図的なものか。	
16	第31図 PL-34	鉄製品 (鍛造品) 鎌	① 16.6 ② 5 ③ 錆化(△)	床直 長 8.0 幅 3.5 厚 0.4	大型の腸挟有茎三角形式の鎌。頭部と茎部の断面形は長方形で、中間に関を持ち、茎部の先端のみ小さく欠落する。逆刺部は「八」字状で、2区13号住居-17とはほぼ同形態。刃部から頭部に向かって厚みを増し、しっかりした形態の茎部を持つ。透過X線像で見ると腸挟は幅広い。	
17	第31図 PL-34	鉄製品 (鍛造品) 鎌	① 8.0 ② 3 ③ 錆化(△)	+11 長 5.5 幅 0.6 厚 0.5	長茎鎌の頭部から茎部の鉄製品破片。横断面形は方形で四方が関となる。長軸方向の両端部が欠落する。長軸方向に向かうひび割れが目立つ。	

①重量(g)②磁着度③メタル度

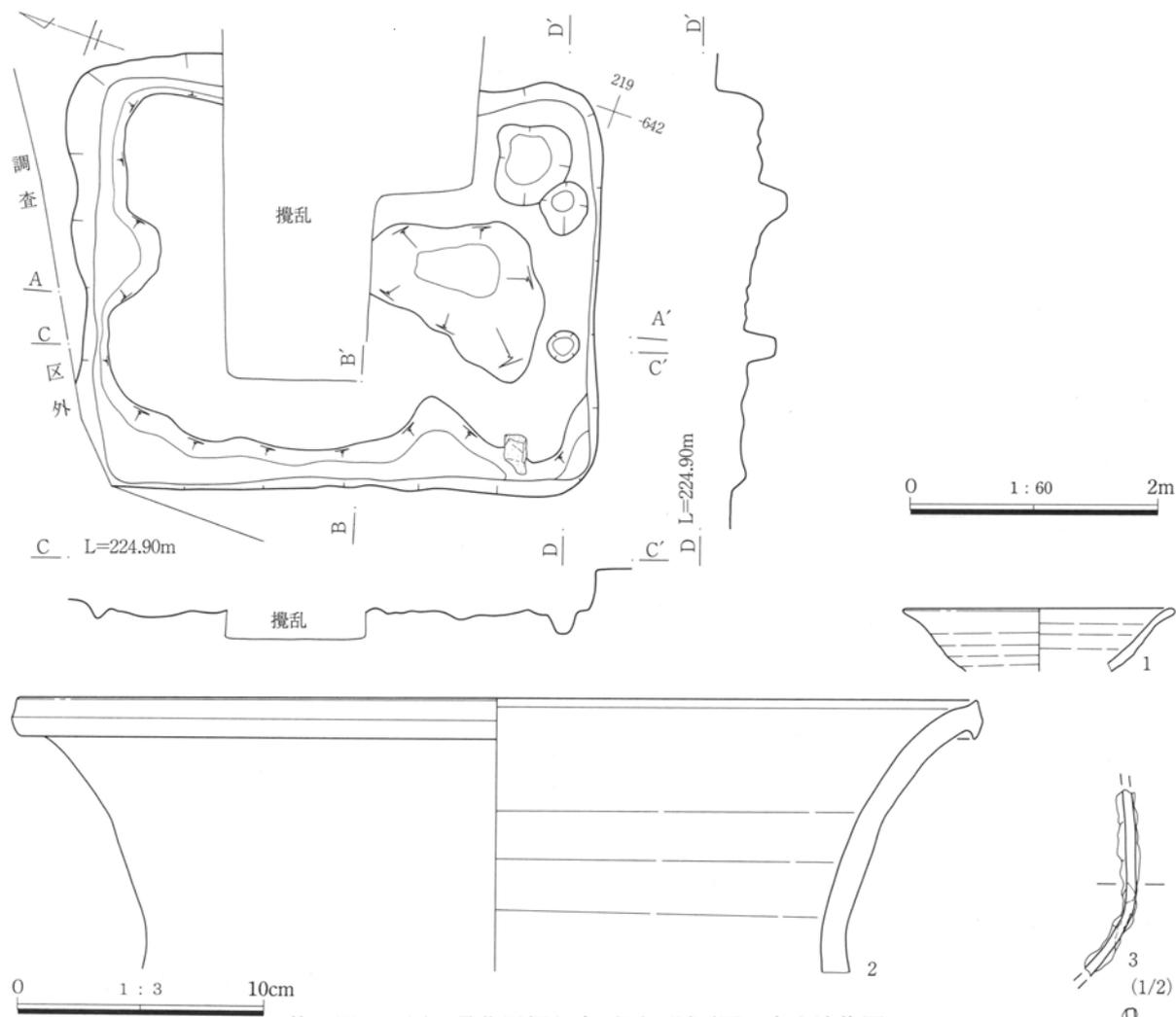
2区16号住居 (第32・33図、P L 5・35)

位置 219-642 方位 N-71°-E 形状 長軸4.26m・短軸3.52mで長軸を南北にもつ長方形である。住居の中央部分が、攪乱に切られる。面積12.70m² 壁高 25cm 重複 なし 床面 掘り方面から厚さ5cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。掘り方面では、住居中央南に大きな掘り込みが確認された。壁溝

確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。長軸55cm・短軸44cm・深さ14cmの隅丸方形を呈す。竈 確認できなかった。遺物 床直から須恵器大甕、埋土から須恵器椀、棒状鉄製品が出土した。所見 本住居の時期は、出土遺物より10世紀前半に比定される。



第4章 遺構と遺物



第33図 2区16号住居掘り方平面・断面図、出土遺物図

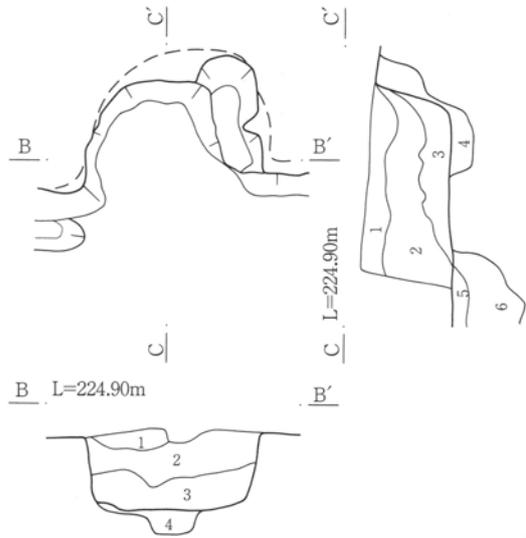
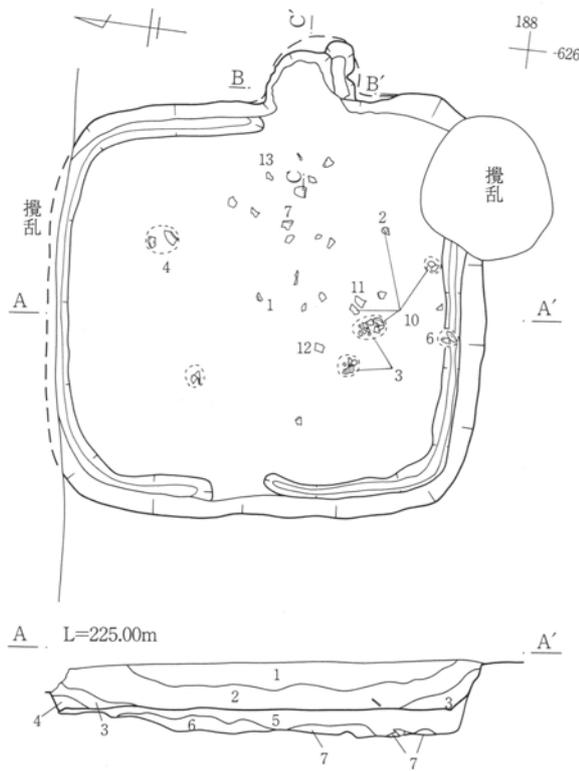
2区16号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第33図 PL-35	須恵器 椀	埋土 口縁部片	口(11.0)高 2.5残 底 - 高台 -	①砂粒②酸化焰 ③にぶい黄橙色	ロクロ成形、右回り回転。
2	第33図 PL-35	須恵器 大甕	床直 口縁部3/4	口(38.8)高 10.7残 底 -	①砂粒②還元焰 ③灰黄色	やや硬質。口縁部ロクロ整形か。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
3	第33図 PL-35	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明	① 8.3 ② 2 ③ L(●)	埋土 長 5.0 幅 0.2 厚 0.2	弧状に折れ曲った棒状不明品。断面形は上手側が丸棒状で、下手側の端部が方形ぎみに見える。ただし全体観は環状の鉄製品の一部分か。短軸の両端部は破面となり、筋状のひび割れが目立つ。	

①重量(g)②磁着度③メタル度

2区17号住居 (第34・35図、P L 5・6・35)
位置 188-626 方位 N-80°-E 形状 長軸3.44
m・短軸3.26mで長軸を南北にもつ方形である。住
居の南壁東側部分が、攪乱に切られる。面積
9.15㎡ 壁高 42cm 重複 なし 床面 掘り方
面から厚さ15cmの埋め土を施して平坦な面を造る。
床面は凹凸なく、平坦で整っている。掘り方面では、

大きな掘り込みが確認された。壁溝 幅10～
15cm・深さ約7cm前後で全周。柱穴 確認でき
なかつた。貯蔵穴 確認できなかった。竈 東
壁中央やや南に設置。燃烧部は幅55cm・奥行き
40cm。遺物 床直から土師器坏、甕が出土した。
実測可能な遺物が13個体ある。所見 本遺構は出
土遺物から7世紀後半に比定される。

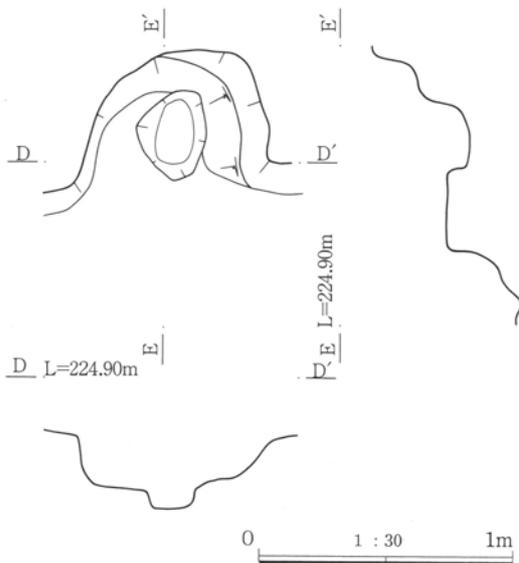
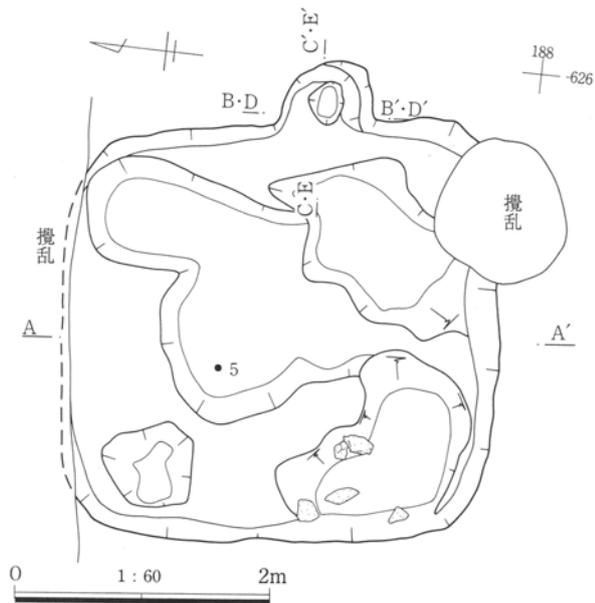


竈

- | | |
|--------|---|
| 1 暗褐色土 | Hr-FPを多量、Hr-FAブロックを少量含む。砂質。粘性なし。締まりなし。 |
| 2 暗褐色土 | Hr-FP、Hr-FAブロックを多量。焼土粒、少量含む。粘性、締まりやや強。 |
| 3 暗褐色土 | Hr-FP少量、Hr-FAブロック、炭化物、焼土粒を少量含む。粘性、締まりやや強。 |
| 4 暗褐色土 | Hr-FP少量含む。粘性、締まりなし。(掘り方) |
| 5 黄橙色土 | 焼土を少量含む。(掘り方) |
| 6 黄橙色土 | Hr-FAを多量に、Hr-FP、焼土ブロックを少量含む。(掘り方) |

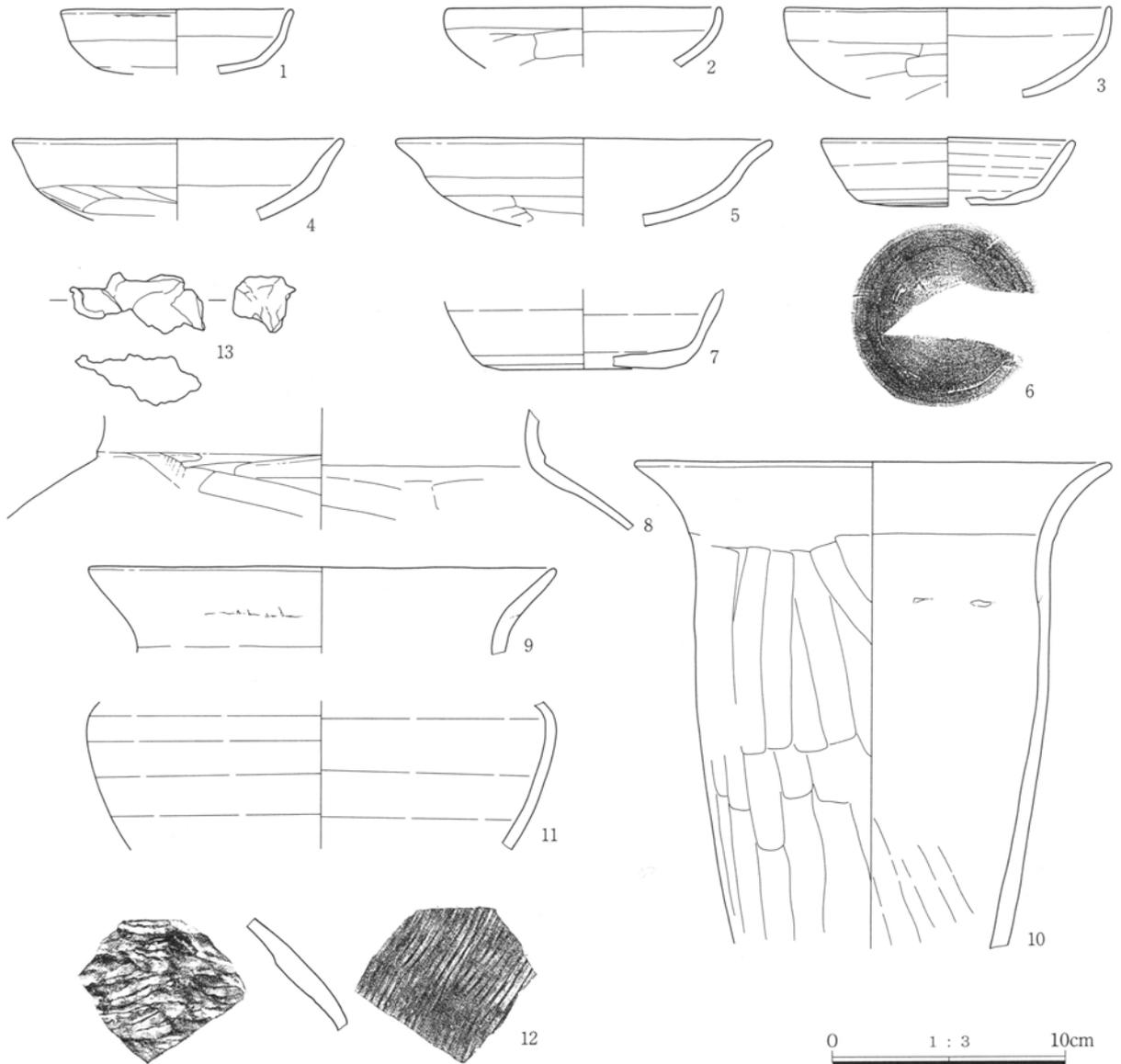
2区17号住居

- | | |
|---------|---|
| 1 暗褐色土 | Hr-FPを多量、Hr-FAブロックを少量含む。砂質。粘性、締まりなし。 |
| 2 暗褐色土 | 1層より明るい。Hr-FPを多量、Hr-FAブロックを少量含む。粘性、締まりなし。 |
| 3 暗褐色土 | 地山のHr-FPの崩落が多量に混じる。粘性、締まりなし。 |
| 4 暗褐色土 | 砂質。粘性、締まりなし。 |
| 5 黄橙色土 | Hr-FPを少量含む。Hr-FAブロックを多量に含む。(掘り方) |
| 6 暗灰褐色土 | Hr-FAブロック(直径4.0cm以下)を少量含む。粘性やや強。締まりなし。(掘り方) |
| 7 黒褐色土 | Hr-FAブロック(直径5.0cm以下)を少量含む。粘性やや強。締まりなし。(掘り方) |



第34図 2区17号住居・掘り方・竈 平面・断面図

第4章 遺構と遺物



第35図 2区17号住居出土遺物図

2区17号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第35図 PL-35	土師器 坏	+36 口縁部片	口(10.0) 高 2.8 底 丸底	①砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上半が横ナデ。底部は不定方向のヘラ削りか。
2	第35図 PL-35	土師器 坏	+12 口縁部片	口(11.8) 高 2.6残 底 -	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。外面ヘラ削り。
3	第35図 PL-35	土師器 坏	床直 口~体部片	口(14.0) 高 3.8 底 -	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部横ナデ。下半~底部はヘラ削り。
4	第35図 PL-35	土師器 坏か高坏	+20 1/4	口(14.2) 高 3.5残 底 -	①砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上半が横ナデ。下半~底部はヘラ削り。
5	第35図 PL-35	土師器 高坏か	掘り方 口~底部片	口(16.0) 高 3.9残 底 -	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。下半~底部はヘラ削り。
6	第35図 PL-35	須恵器 坏	+10 ほぼ完形	口 10.9 高 9.5 底 7.5	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離しは、ヘラ起こし技法。
7	第35図 PL-35	須恵器 坏	+33 体~底部片	口 - 高 3.0残 底(8.0)	①砂粒②酸化焰 ③暗灰黄色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離しは、ヘラ起こし技法。
8	第35図 PL-35	土師器 甕	竈埋土 頸部片	口 - 高 5.2残 底 - 頸部(19.2)	①砂粒 ②良好 ③にぶい黄橙色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
9	第35図 PL-35	土師器 甕	竈埋土 口縁片	口(20.0) 高 3.7残 底 -	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部横ナデ。

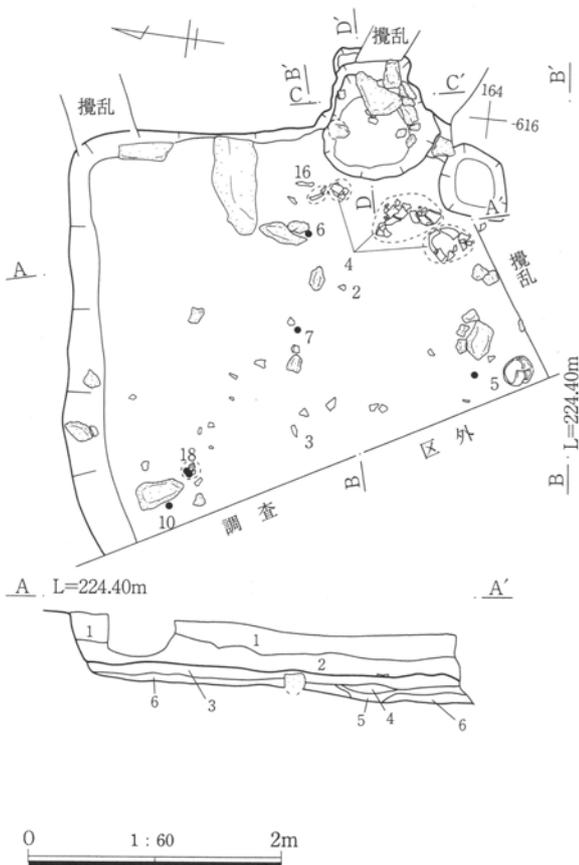
10	第35図 PL-35	土師器 甕	床直 口~胴部1/3	口(20.4)高20.7残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
11	第35図 PL-35	須恵器 甕	+27 胴部片	口- 高6.3残 底- 最大(20.0)	①細砂粒②還元 焰③灰色	やや硬質。外面肩部に刺突文。内面に当て具痕あり。
12	第35図 PL-35	須恵器 甕	+29 胴部片	口- 高- 底-	①砂粒②還元 焰③灰黄色	やや軟質。外面に叩き痕。内面に当て具痕あり。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
13	第35図 PL-35	鍛冶滓 (含鉄)	① 24.5 ② 5 ③ H(O)	+13 長2.4 幅5.9 厚2.6	酸化土砂に覆われた含鉄の鍛冶滓片。上手側の側部は全面破面の可能性が高い。上面がやや窪み下面が突出することから、椀形鍛冶滓の肩部片の可能性もあり、含鉄部は左側部主体。	

①重量(g)②磁着度③メタル度

2区19号住居 (第36~38図、P L 6・35・36)

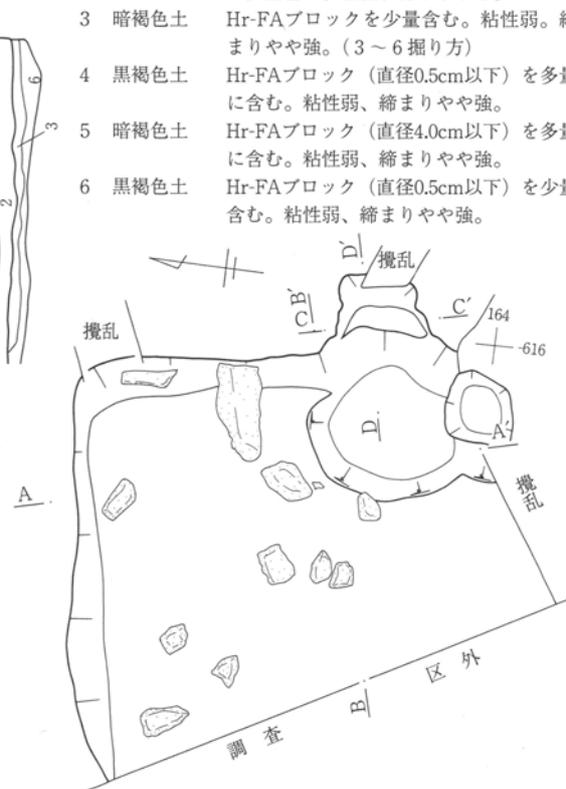
位置 164-616 方位 N-82°E 形状 住居南壁が攪乱に切られ、西壁が調査区外になるため、全景を確認することができなかった。面積 測定不可能 壁高 47cm 重複 南壁が攪乱に切られる。床面 掘り方面から厚さ19cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。長軸67cm・短軸53cm・深さ22cmの楕円形を呈す。竈 東壁

に設置。燃烧部は幅55cm・奥行き55cmで、検出された。燃烧部の補強用の礫が設置した状態で残存していた。遺物 床直から土師器甕、石製紡錘車が出土した。実測可能な遺物が19個体ある。埋土から鎌や刀子などの鉄製品、椀形鍛冶滓、鍛冶滓といった鍛冶関連遺物が出土した。所見 本遺構は出土遺物から9世紀中頃に比定される。鍛冶関連の遺物が埋土から出土しており、周辺で鍛冶が行われていたと推定される。



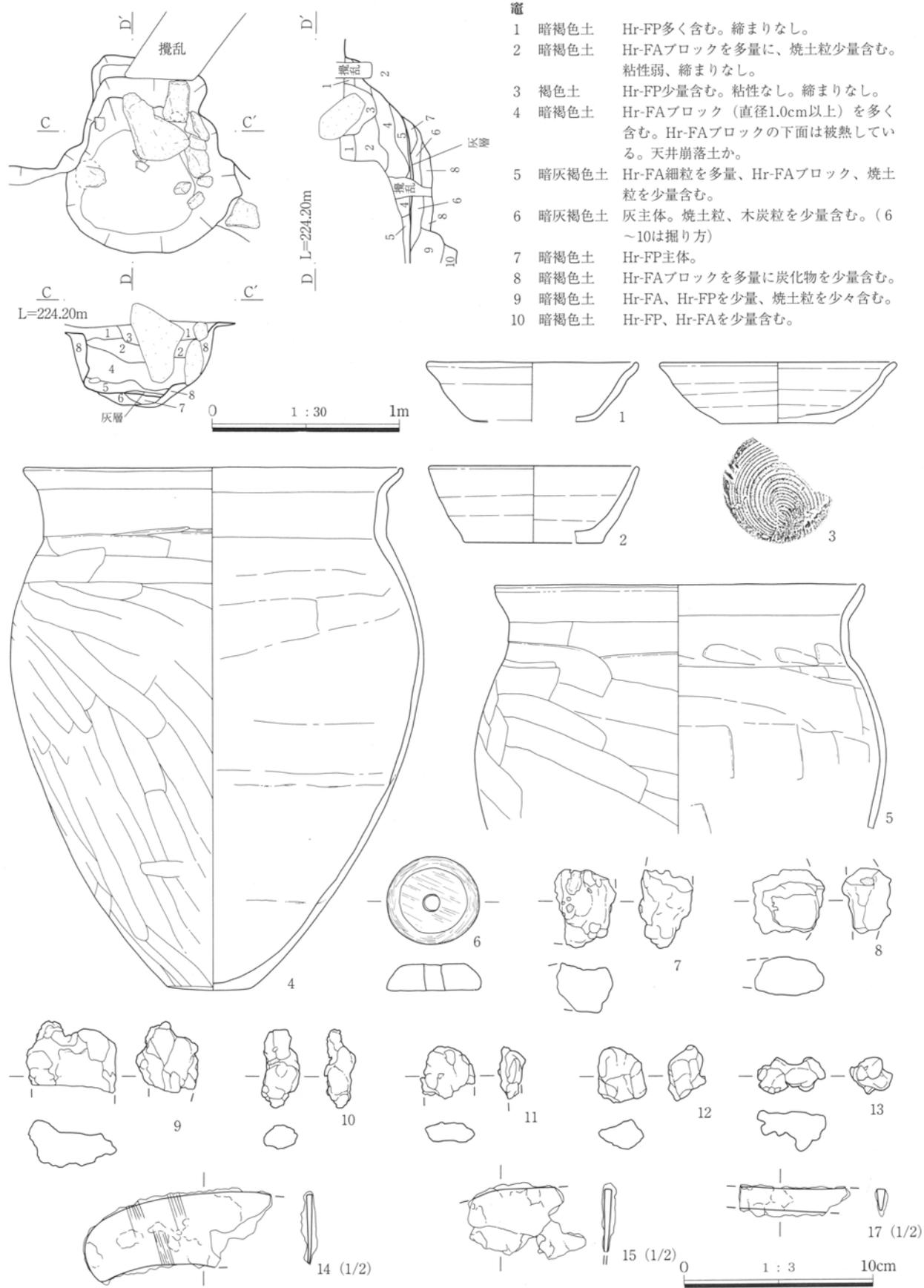
2区19号住居

- 1 暗褐色土 Hr-FPを多量に含む。粘性、締まりなし。
- 2 暗褐色土 Hr-FP、Hr-FAブロック(直径1.0cm以下)を少量含む。粘性、締まりなし。
- 3 暗褐色土 Hr-FAブロックを少量含む。粘性弱。締まりやや強。(3~6掘り方)
- 4 黒褐色土 Hr-FAブロック(直径0.5cm以下)を多量に含む。粘性弱、締まりやや強。
- 5 暗褐色土 Hr-FAブロック(直径4.0cm以下)を多量に含む。粘性弱、締まりやや強。
- 6 黒褐色土 Hr-FAブロック(直径0.5cm以下)を少量含む。粘性弱、締まりやや強。



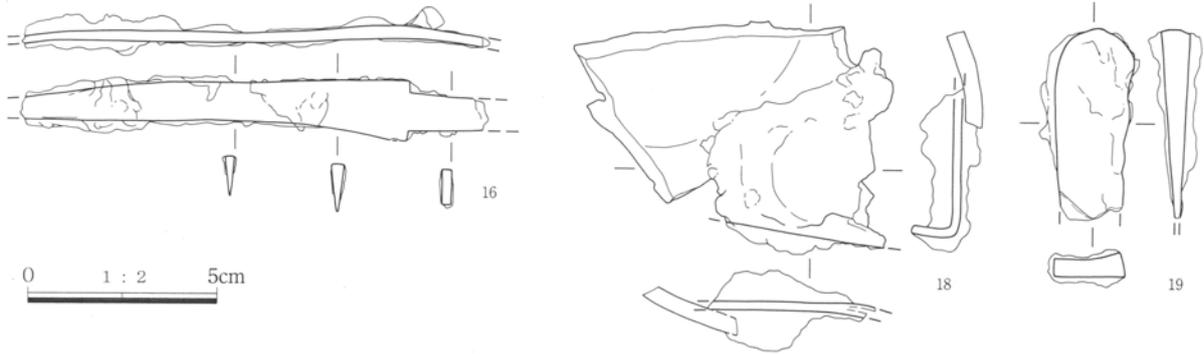
第36図 2区19号住居・掘り方 平面・断面図

第4章 遺構と遺物



- 竈
- 1 暗褐色土 Hr-FP多く含む。締まりなし。
 - 2 暗褐色土 Hr-FAブロックを多量に、焼土粒少量含む。粘性弱、締まりなし。
 - 3 褐色土 Hr-FP少量含む。粘性なし。締まりなし。
 - 4 暗褐色土 Hr-FAブロック（直径1.0cm以上）を多く含む。Hr-FAブロックの下面は被熱している。天井崩落土か。
 - 5 暗灰褐色土 Hr-FA細粒を多量、Hr-FAブロック、焼土粒を少量含む。
 - 6 暗灰褐色土 灰主体。焼土粒、木炭粒を少量含む。（6～10は掘り方）
 - 7 暗褐色土 Hr-FP主体。
 - 8 暗褐色土 Hr-FAブロックを多量に炭化物を少量含む。
 - 9 暗褐色土 Hr-FA、Hr-FPを少量、焼土粒を少々含む。
 - 10 暗褐色土 Hr-FP、Hr-FAを少量含む。

第37図 2区19号住居竈平面・断面図、出土遺物図（1）



第38図 2区19号住居出土遺物図(2)

2区19号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第37図 PL-35	土師器 坏	埋土 口~底部片	口(11.2) 高 3.2 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。外面ヘラ削り。
2	第37図 PL-35	須恵器 坏	+4 1/4	口(11.2) 高 4.1 底(7.4)	①砂粒②酸化焙ぎ み③灰オリープ色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
3	第37図 PL-35	須恵器 坏	+32 口~底部片	口(12.6) 高 3.3 底(6.0)	①砂粒②酸化焙ぎ み③灰黄褐色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
4	第37図 PL-36	土師器 甕	床直 ほぼ完形	口 20.2 高 27.8 底 4.5	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
5	第37図 PL-36	土師器 甕	床直 口~胴部	口 19.6 高 13.0 底-	①砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
6	第37図 PL-36	石製品 紡錘車	-15 完形	長 4.7 幅 4.9 厚 1.4 重 55.0g	滑石 (石材)	広面磨き。一部欠損。側面回転方向に擦条痕。狭面荒砥削りで表面は粗い。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
7	第37図 PL-36	腕形鍛冶滓 (小、含鉄)	① 41.2 ② 5 ③ L(●)	+ 29 長 4.2 幅 3.2 厚 2.9	含鉄の腕形鍛冶滓の端部破片。上手側は全面破面となる。短軸方向に長手の歪んだ腕形で、上手側の破面には黒錆がにじむ。上面右上手には小さな平坦面があり、何かに接していた可能性大。含鉄部は上手側の側部寄り。	
8	第37図 PL-36	腕形鍛冶滓 (小、含鉄)	① 56.5 ② 6 ③ L(●)	埋土 長 3.5 幅 3.8 厚 2.5	比重の高い小型の腕形鍛冶滓。上下面と側部の半分程が生きており、左側部と下手側が小破面となる。上面は平坦で黒錆がにじみ、下面が腕形に突出する。含鉄部は上皮寄り。一回り大きな腕形鍛冶滓の側部寄りの破片か。	
9	第37図 PL-36	腕形鍛冶滓 (極小)	① 48.5 ② 3 ③ なし	埋土 長 3.9 残 幅 4.8 厚さ 3.3	上面が流動状となった粘土質の強い腕形鍛冶滓。下手側の半分が欠落する。上面の流動状の表皮は紫紅色で、左側部寄りには黒色ガラス質の滓が盛り上がっている。羽口先の垂れを示すものか。下面は木炭痕の残る不規則な腕形。	
10	第37図 PL-36	鍛冶滓 (含鉄)	① 18.3 ② 5 ③ L(●)	+ 15 長 4.2 幅 1.8 厚 1.7	扁平な含鉄の鍛冶滓。左側部のみが破面で、極小の腕形鍛冶滓の側部片の可能性を持つ。発達は弱い。含鉄部は広がりを持つが上手側主体。	
11	第37図 PL-36	鍛冶滓 (含鉄)	① 14.6 ② 2 ③ L(●)	埋土 長 2.9 幅 2.9 厚 1.5	扁平な小塊状の含鉄の鍛冶滓。下手側に小破面を持つ以外は完形品。上下面とも平坦で、側部は立ち上がり急となる。平坦化しているのは、軽く鍛打されているのかもしれない。含鉄部は下手寄りの中核部。	
12	第37図 PL-36	鍛冶滓 (含鉄)	① 16.5 ② 3 ③ L(●)	埋土 長 2.9 幅 2.0 厚 1.5	放射割れの目立つ含鉄の鍛冶滓。完形品で下面が浅い腕形に突出する。含鉄部は上手側の中核部。下面の中央部は小さく突出する。	
13	第37図 PL-36	鍛冶滓 (含鉄)	① 13.6 ② 5 ③ L(●)	埋土 長 2.0 幅 3.6 厚 1.9	表面の凹凸が目立つ小振りの鍛冶滓。下面の左側が破面で、表面全体に不規則な木炭痕を残す。上面のみが平坦で、含鉄部は薄手となる左側主体。鍛冶素材の遊離品か。	
14	第37図 PL-36	鉄製品 (鍛造品) 鎌	① 14.5 ② 4 ③ H(○)	埋土 長 6.6 幅 2.7 厚 0.2	緩やかな弧状に曲がっている鎌の先端部破片。背側、刃部側とも弧状に曲がり、先端部は平頭ぎみとなる。右側部が破面となり、芯部は中空化している。上面の中央部に短軸方向に向かう植物質の巻き付け痕が確認される。15と同一個体の可能性あり。	
15	第37図 PL-36	鉄製品 (鍛造品) 鎌か	① 6.7 ② 3 ③ 錆化(△)	埋土 長 6.2 幅 2.4 厚 0.2	鎌の可能性を持つ薄板状の鉄製品破片。上下面と背側のみが生きており、それ以外の側面は全面破面となる。内部が中空化している点や、裏面に短軸方向の植物質の巻き付けが残る点から、同一遺構出土品である14の鎌と同一個体である可能性が高い。	
16	第38図 PL-36	鉄製品 (鍛造品) 刀子	① 16.4 ② 3 ③ L(●)	+ 19 長 12.3 幅 1.2 厚 0.35	茎の先端部が欠けた刀子破片。両側で刃部はやや研ぎ減りしている。背側は直線状で、切先側は瘤状の酸化土砂に覆われている。透過X線像で見ると、先端部は生きている可能性大。表面の酸化土砂中には角閃石を主体とした鉱物粒子が多量に含まれている。	

第4章 遺構と遺物

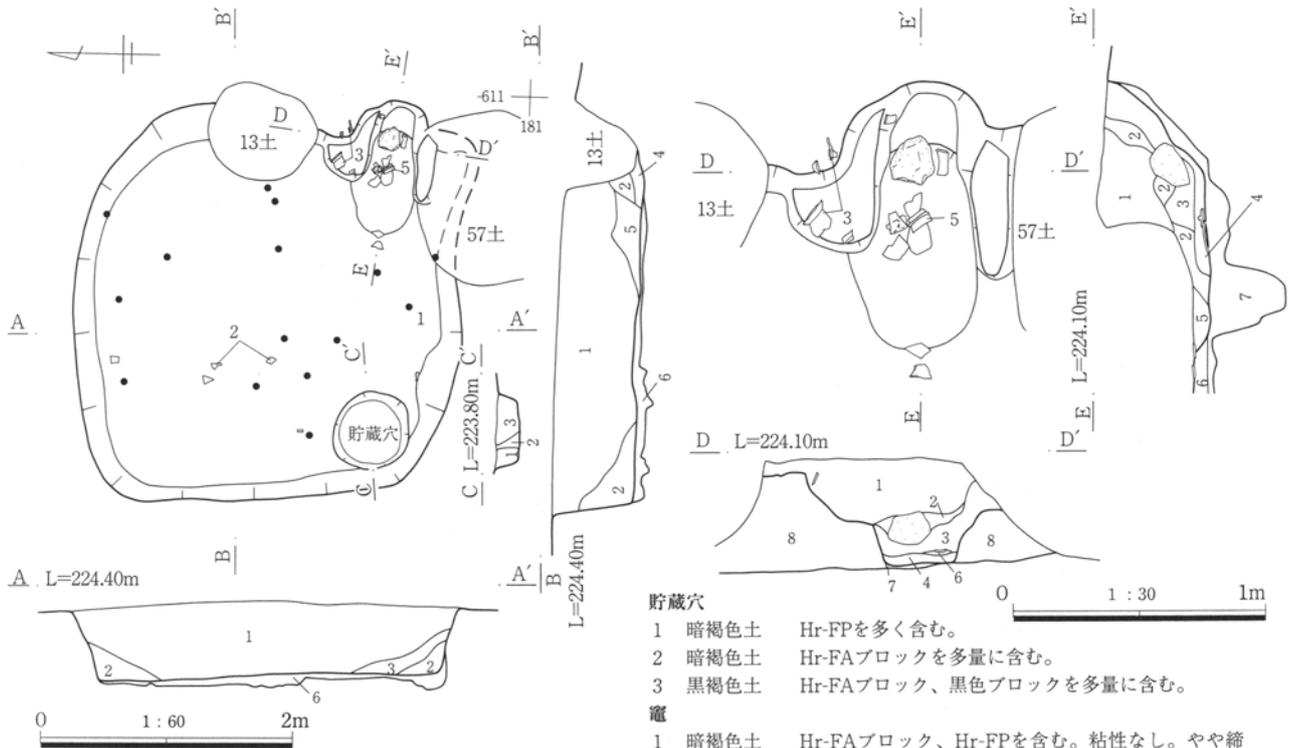
17	第37図 PL-36	鉄製品 (鍛造品) 刀子	① 4.6 ② 3 ③ L(●)	埋土 長3.9 幅0.8 厚0.3	研ぎ減りした刀子と推定される刃部破片。左右の側部が破面となる。背側は平坦で3mmと厚く、刃部幅は研ぎ減りしているためか9mmと狭い。
18	第38図 PL-36	鉄製品 (鍛造品) 板状不明 須恵器坏付	① 64.6 ② 3 ③ 錆化(△)	+9 長4.1 幅4.4 厚0.25	高台付きの須恵器の坏が酸化土砂と共に固着した、不明鉄製品破片。坏は底部に糸切り痕を持ち、胎土は緻密。鉄製品は幅5.2cm以上の薄板状で、厚さは2mm弱。主体は板状で、下手側が反り返り袋状となる。やや幅広い袋状鉄斧の破片か。芯部が錆化して中空となる。
19	第38図 PL-36	鉄製品 (鍛造品) 板状不明	① 21.6 ② 4 ③ L(●)	埋土 長4.9 幅1.9 厚0.7	撥形の平面形を持つ板状の不明鉄製品。上下面と左右の側面ならびに上手側は平坦に成形されており、下手側のみが小破面となる。両側面寄りの上下面が立ち上がりきみなのは、側面が粗く鍛打されている為か。透過X線像では錆化状態や鍛造痕が粗く、未製品または契状となる。表面には酸化土砂が厚い。

①重量(g)②磁着度③メタル度

2区20号住居 (第39・40図、P L 6・7・36)

位置 181-611 方位 E-8°S 形状 長軸3.15m・短軸3.06mで長軸を東西にもつ方形である。面積 6.35m² 壁高 66cm 重複 13、57号土坑と重複。13、57号土坑に切られる調査所見を得た。床面掘り方面から厚さ7cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 確認できなかつた。柱穴 確認できなかつた。貯蔵穴 住居の南西隅に設置。直径60cm、深さ

20cmのほぼ円形を呈す。竈 東壁南側に設置。燃焼部は幅50cm・奥行き68cmで検出。掘り方面で竈袖石と支脚の設置痕の可能性のある窪みを検出した。遺物 床直から羽釜、土師器甕、竈から羽釜、土師器甕、椀形鍛冶滓、埋土から椀形鍛冶滓、鍛冶滓が出土した。実測可能な遺物が8個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より10世紀後半に比定される。



2区20号住居

- 1 暗褐色土 Hr-FPを多く含む。
- 2 暗褐色土 Hr-FP、Hr-FAブロックを多量に含む。
- 3 暗褐色土 Hr-FPを多量に、Hr-FAブロックを少量含む。
- 4 Hr-FA 二次堆積。
- 5 褐色土 Hr-FAの二次堆積を多量に含む。
- 6 黒褐色土 Hr-FA、Hr-FP、炭化物を少量含む。(掘り方)

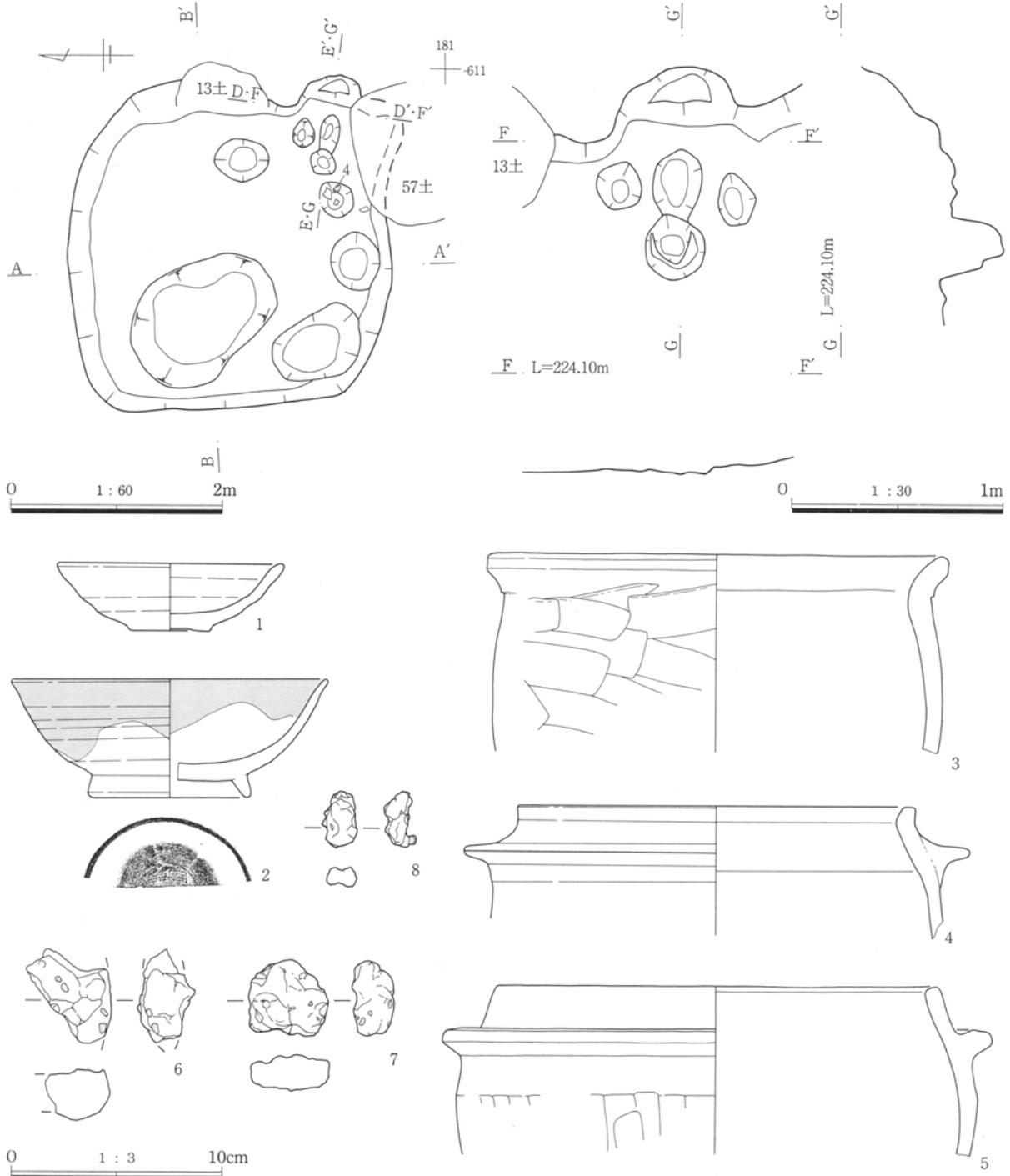
貯蔵穴

- 1 暗褐色土 Hr-FPを多く含む。
- 2 暗褐色土 Hr-FAブロックを多量に含む。
- 3 黒褐色土 Hr-FAブロック、黒色ブロックを多量に含む。

竈

- 1 暗褐色土 Hr-FAブロック、Hr-FPを含む。粘性なし。やや締まる。
- 2 暗褐色土 Hr-FAブロックを多く含む。やや粘質。やや締まる。
- 3 褐色土 Hr-FAを多量に含む。粘質土。粘性あり、締まる。
- 4 灰褐色土 灰層。焼土粒、炭化物粒含む。
- 5 暗褐色土 Hr-FPを多量に、Hr-FAブロックを少量含む。
- 6 暗褐色土 焼土ブロック主体
- 7 黒色土 焼土、炭化物粒を多く含む。やや締まる。(掘り方)
- 8 褐色土 Hr-FPを多く含む。粘性あり、締まる。

第39図 2区20号住居・竈 平面・断面図



第40図 2区20号住居掘り方・竈 平面・断面図、出土遺物図

2区20号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第40図 PL-36	須恵器 坏	+13 1/6	口(10.8) 高3.2 底(3.8)	①砂粒②酸化焰 ③にぶい赤褐色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
2	第40図 PL-36	灰釉陶器 椀	+23 1/2	口(15.0) 高5.6 底(7.3) 高台(7.7)	①細砂粒②還元 焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。釉調は透明感のある緑色をおびた灰色。大原2号窯式期。
3	第40図 PL-36	土師器 甕	竈 口~胴上1/4	口(21.7) 高(9.9) 底-	①砂粒 ②良好 ③灰黄褐色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
4	第40図 PL-36	羽釜	床直 口~鏝部片	口(18.7) 高6.0残 底- 鏝(23.8)	①粗砂粒②酸化 焰③明赤褐色	鏝は貼付。内面ナデ。口縁部のみロクロ整形か。

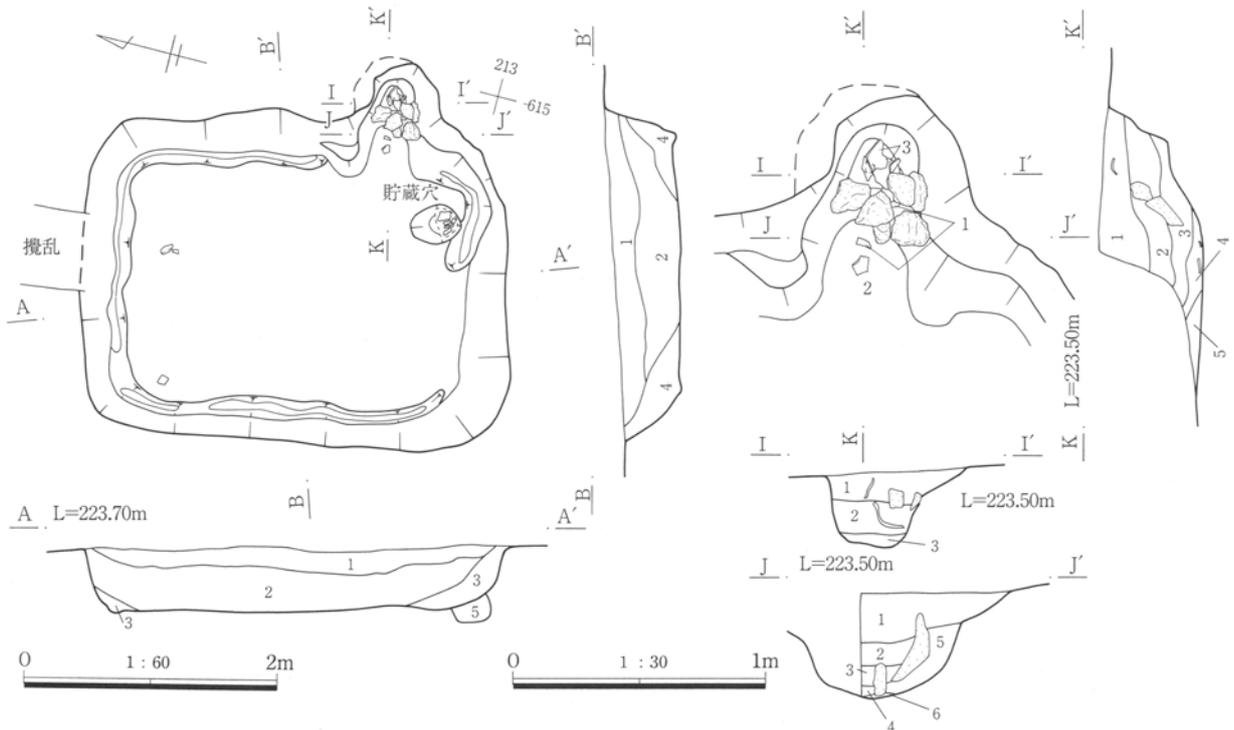
5	第40図 PL-36	羽釜	竈 口～胴部1/8	口(20.8)高8.2残 底- 鏝(26.0)	①粗砂粒②酸化 鏝③にぶい橙色	鏝は貼付。胴部外面、斜め方向のヘラ削り。内面ナデ。口 縁部のみロクロ整形か。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
6	第40図 PL-36	椀形鍛冶滓 (極小、含鉄)	① 51.3 ② 3 ③ 特L(☆)	埋土 長 4.4 幅 4.0 厚 2.7	比重の高い含鉄の椀形鍛冶滓。上下面と右側面が生きており、それ以外の側 面は破面となる。上面は平坦きみで下面是強い椀形となる。含鉄部の広がり が広い為か、磁着が全体に強い。上面の一部に鏽彫れの欠けが生じ、下面に は放射割れが発達する。鉄部主体の椀形鍛冶滓。	
7	第40図 PL-36	椀形鍛冶滓 (極小、含鉄)	① 39.6 ② 6 ③ L(●)	埋土 長 3.6 幅 3.7 厚 2.1	やや扁平な極小の椀形鍛冶滓。左側部と下手側の側部が破面となる。上面は 浅く窪み下面是椀形に突出する。黒錆がにじみ、放射割れも進む。磁着は広 範囲で、全体に鉄部が散らばっている可能性大。	
8	第40図 PL-36	鍛冶滓 (含鉄)	① 5.4 ② 3 ③ 鏽化(△)	埋土 長 2.6 幅 1.7 厚 1.6	含鉄の鍛冶滓の小片。左右の側面に小破面を持ち、さらに大きな鍛冶滓の端 部破片か。含鉄部は上手寄りの下半部。	

①重量(g)②磁着度③メタル度

2区21号住居 (第41・42図、P L 7・37)

位置 213-615 方位 N-87°-E 形状 長軸3.34
m・短軸2.62mで長軸を南北にもつ長方形である。
面積 5.52m² 壁高 53cm 重複 なし 床面
掘り方面から厚さ0～7cmの埋め土を施して平坦
な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。
掘り方面に床下土坑を5基検出した。壁溝 幅10
～18cm・深さ約5～8cm前後で全周。柱穴 確

認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。
長径40cm・短径32cmの楕円形を呈す。竈 東壁
南側に設置。燃烧部は幅39cm・奥行き75cmで検出
された。燃烧部からは、竈構築材として使用された
二ツ岳石が出土した。遺物 竈から羽釜、土師器
甕が出土した。実測可能な遺物が3個体ある。所
見 本住居の時期は、出土遺物より10世紀に比定さ
れる。



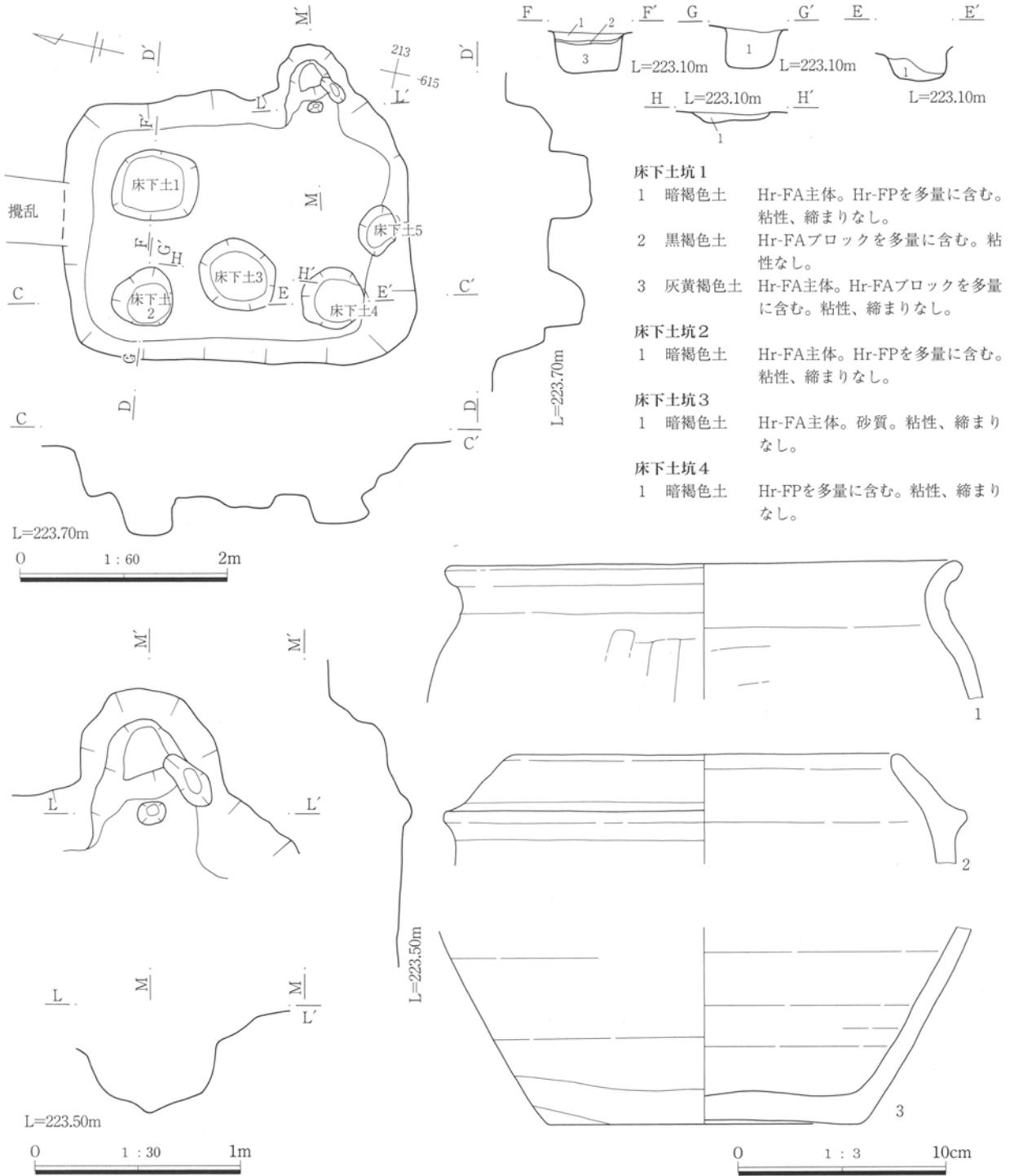
2区21号住居

- 1 暗褐色土 Hr-FPを少量含む。
- 2 暗褐色土 Hr-FPを多量に含む。
- 3 暗褐色土 Hr-FP、Hr-FAを多量に含む。
- 4 暗褐色土 Hr-FA主体。Hr-FPを少量含む。
- 5 暗褐色土 Hr-FA主体。Hr-FAブロックを多
量に含む。(掘り方)

竈

- 1 暗褐色土 Hr-FA主体。Hr-FAブロック(直径1.0cm以下)、Hr-FPを少量含む。
- 2 暗褐色土 Hr-FPを多量に含む。
- 3 暗褐色土 Hr-FA主体。Hr-FAブロックを少量含む。砂質。天井崩落土か。
- 4 暗灰褐色土 灰層。焼土粒、焼土ブロック、炭化物を少量含む。
- 5 黒褐色土 木炭層。黒色の灰を含む。
- 6 暗褐色土 Hr-FA主体。Hr-FPを少量含む。

第41図 2区21号住居・竈 平面・断面図



第42図 2区21号住居掘り方・竈 平面・断面図、出土遺物図

2区21号住居出土遺物観察表

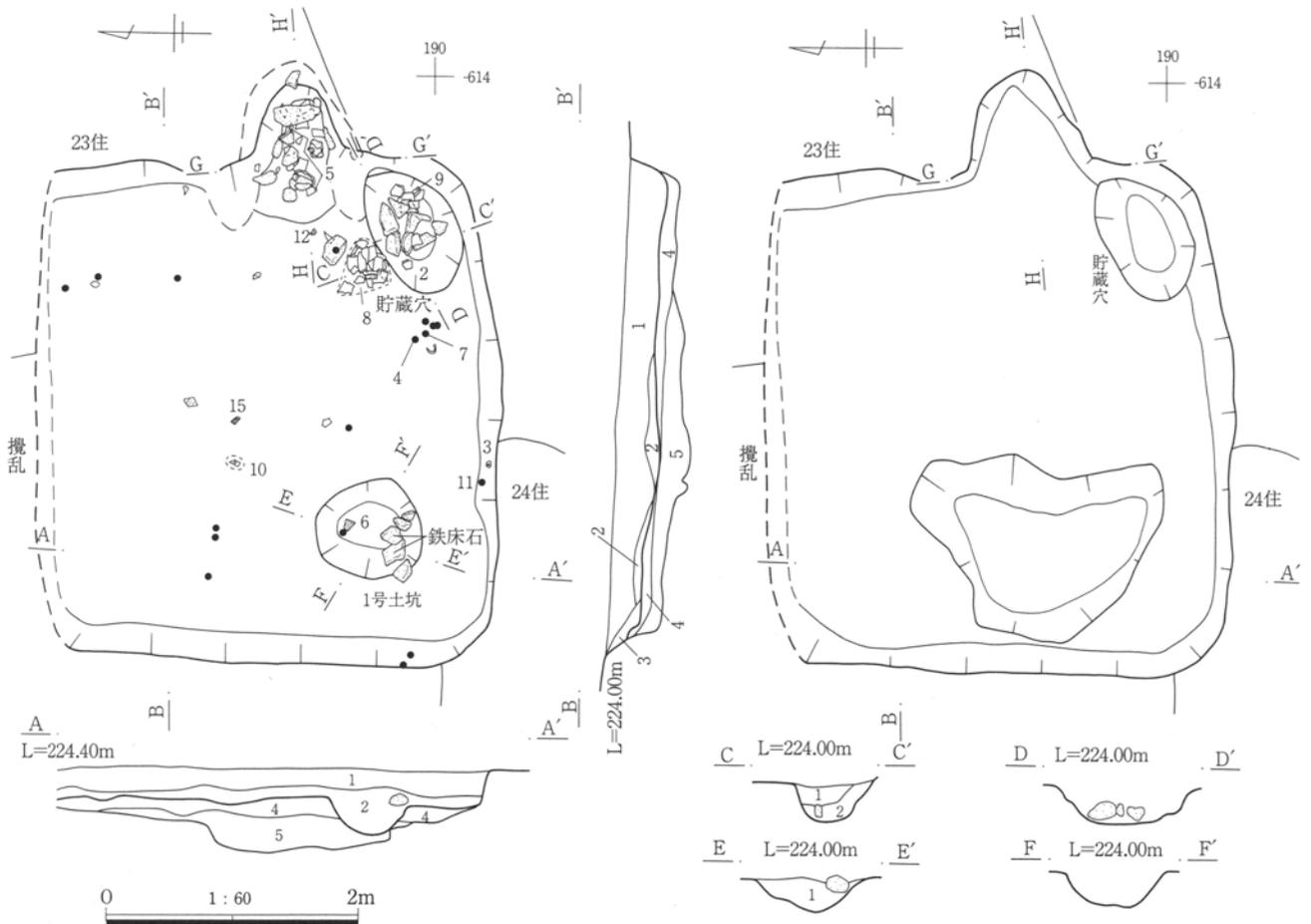
No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第42図 PL-37	土師器 甕	竈 口縁部片	口(25.0) 高 6.6 残底 -	①粗砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部～頸部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
2	第42図 PL-37	羽釜	竈 口～鏝部片	口(18.7) 高 6.0 残底 - 鏝(25.2)	①粗砂粒 ②酸化 ③橙色	鏝は貼付。胴部外面ヘラ削り。内面ナデ。
3	第42図 PL-37	羽釜か須恵 器甕	竈 胴～底部片	口 - 高 9.5 残底(15.0)	①粗砂粒 ②酸化 ③橙色	ロクロ整形。底部はヘラ削り。

第4章 遺構と遺物

2区22号住居 (第43~45図、P L 7・8・37・38)

位置 190-614 方位 N-89°E 形状 長軸3.9m・短軸(3.6)mで長軸を東西にもつ方形である。面積(11.85)m² 壁高 30cm 重複 23、24号住居と重複。23、24号住居を切る調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ12cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。住居南西に長径90cm・短径70cm・深さ34cmの楕円形を呈す土坑が検出された。1号土坑からは、羽釜、鉄床石(粗粒輝石安山岩)が出土した。壁溝 確認できなかつた。柱穴 確認できなかつた。

貯蔵穴 住居の南東隅に設置。長径110cm・短径65cmの楕円形を呈す。竈 東壁南側に設置。燃烧部は幅63cm・奥行き84cmで検出された。燃烧部からは、竈構築材として使用された二ツ岳石が出土した。遺物 床直から羽釜、灰釉陶器椀、壺、竈から須恵器椀、羽釜、貯蔵穴から羽釜、埋土から、須恵器椀、羽釜、石製の紡錘車、鉄製品などが出土した。実測可能な遺物が15個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より10世紀前半に比定される。



2区22号住居

- | | | |
|---|------|-----------------------------------|
| 1 | 黒褐色土 | Hr-FPを多量に含む。粘性、締まりなし。 |
| 2 | 暗褐色土 | Hr-FPを多量に含む。粘性、締まりなし。 |
| 3 | 暗褐色土 | Hr-FPを多量に含む。Hr-FAブロック含む。粘性、締まりなし。 |
| 4 | 褐色土 | Hr-FP、Hr-FAを多量に含む。やや粘質。締まりあり。 |
| 5 | 褐色土 | Hr-FP、Hr-FAを多量に含む。粘質。締まりあり。 |

貯蔵穴

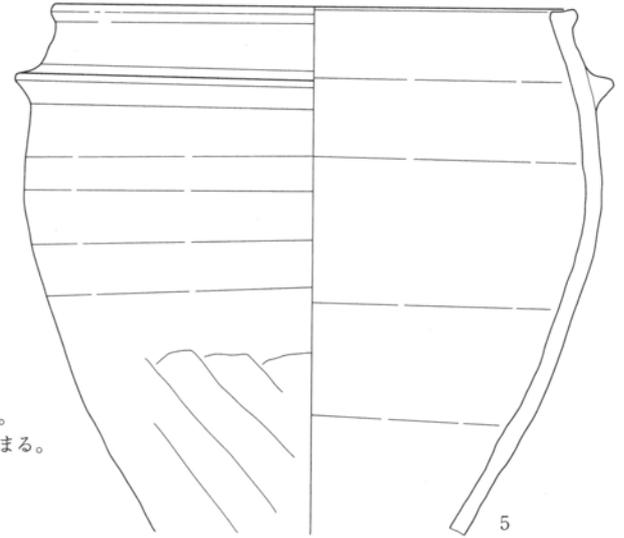
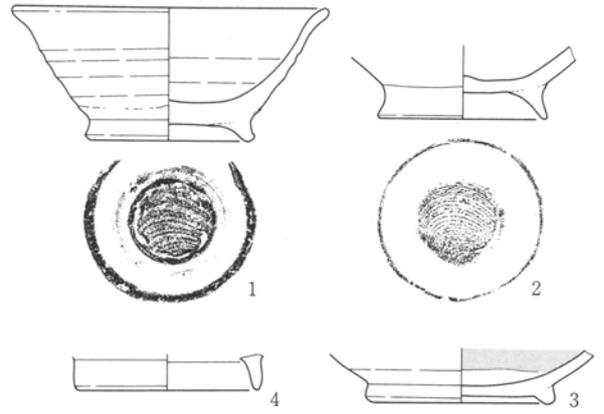
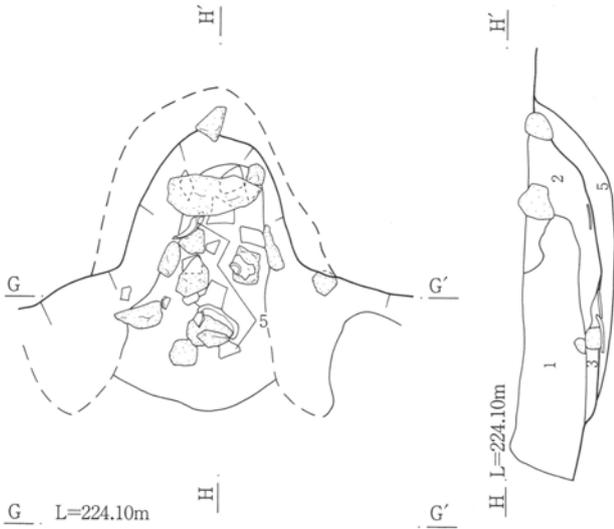
- | | | |
|---|------|-------------------------------------|
| 1 | 黒褐色土 | Hr-FPを多く含む。粘性、締まりなし。 |
| 2 | 黒褐色土 | Hr-FP、Hr-FAブロックを多量に含む。粘性ややあり。やや締まる。 |

1号土坑

- | | | |
|---|------|----------------------|
| 1 | 黒褐色土 | Hr-FPを多く含む。粘性、締まりなし。 |
|---|------|----------------------|

第43図 2区22号住居・掘り方 平面・断面図

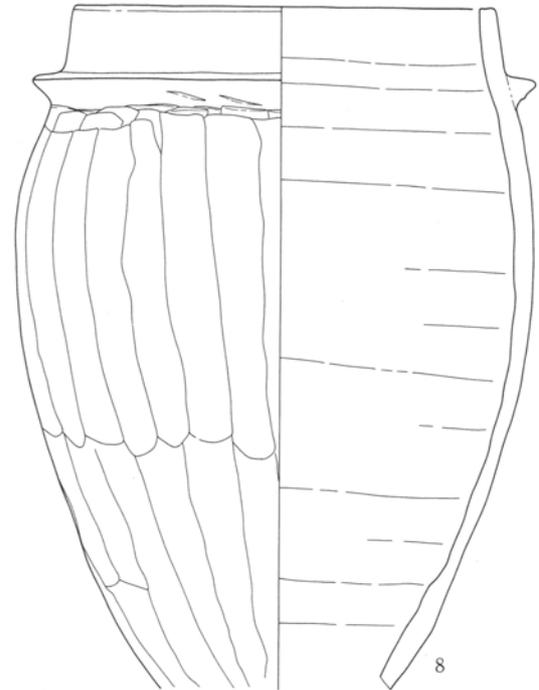
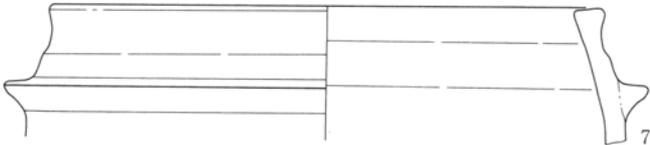
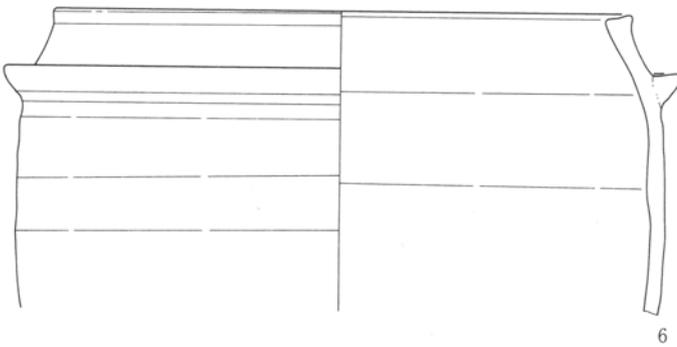
[1] 竪穴住居



0 1 : 30 1m

竈

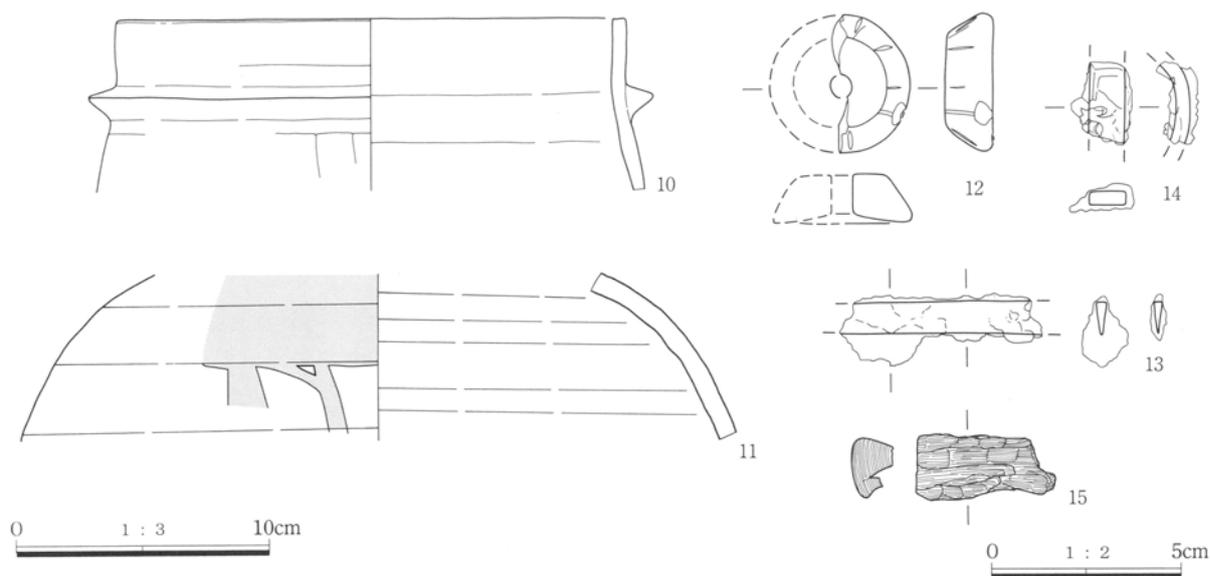
- 1 黒褐色土 Hr-FPを多く、炭化物を少量含む。
- 2 暗褐色土 Hr-FPを少量含む。粘性あり、やや締まる。
- 3 黒褐色土 Hr-FPを少量、炭化物粒、焼土粒を多く含む。
- 4 黄色土 Hr-FP、焼土粒を含む。粘性ややあり。締まりややあり。
- 5 黒褐色土 Hr-FPを多量に、炭化物を少量含む。粘性なし。やや締まる。



0 1 : 3 10cm

第44図 2区22号住居竈平面・断面図、出土遺物図(1)

第4章 遺構と遺物



第45図 2区22号住居出土遺物図(2)

2区22号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第44図 PL-37	須恵器 椀	埋土 1/2	口(12.6) 高 5.3 底 6.4 高台 6.8	①砂粒②酸化焰 ぎみ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
2	第44図 PL-37	須恵器 椀	貯蔵穴 底部	口 - 高 2.9残 底 6.4 高台 6.7	①砂粒②酸化焰 ③橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
3	第44図 PL-37	灰釉陶器 椀	床直 底部1/4	口 - 高 2.2残 底(7.0) 高台(7.4)	①細砂粒②還元 焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。釉調は透明感のある緑色をおびた灰色。大原2号窯式期。
4	第44図 PL-37	灰釉陶器 椀	床直 高台部1/2	口 - 高 1.3残 底 - 高台(7.4)	①細砂粒②還元 焰 ③灰白色	高台は貼付。大原2号窯式期。
5	第44図 PL-37	羽釜	竈 口~胴下1/5	口(20.8)高 20.8残 底 - 鏝(23.5)	①砂粒②酸化焰 ぎみ ③灰黄色	ロクロ整形。鏝は貼付。胴部下位ヘラ削り。
6	第44図 PL-37	羽釜	1号土坑 口~胴部片	口(23.0)高 11.8残 底 - 鏝(26.4)	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ整形。鏝は貼付。
7	第44図 PL-37	羽釜	+16 口縁部片	口(22.0)高 5.4残 底 - 鏝(25.5)	①砂粒②酸化焰 ③にぶい黄橙色	ロクロ整形。鏝は貼付。
8	第44図 PL-37	羽釜	床直 口~胴部3/5	口(16.4) 高 27.0 底 - 鏝(19.7)	①砂粒②還元焰 ③灰白色	鏝は貼付。胴部外面、下位から鏝に向けて縦方向のヘラ削り。口縁部のみロクロ整形か。
9	第44図 PL-37	羽釜	貯蔵穴 口~胴部片	口(19.0)高 10.2残 鏝(20.9) 胴(21.9)	①砂粒②還元焰 ③灰黄色	鏝は貼付。胴部外面、下位から鏝に向けて縦方向のヘラ削り。口縁部のみロクロ整形か。
10	第45図 PL-37	羽釜	床直 口縁部片	口(20.0)高 6.7残 底 - 鏝(22.2)	①粗砂粒②還元 焰 ③灰色	鏝は貼付。胴部外面、下位から鏝に向けて縦方向のヘラ削り。口縁部横ナデ。
11	第45図 PL-37	灰釉陶器 壺	床直 肩部片	口 - 高 - 底 -	①細砂粒②還元 焰 ③灰白色	釉調は透明感のある緑色をおびた灰色。
12	第45図 PL-37	紡錘車	+24 1/2	縦 5.5 横(5.5) 厚 1.9	①砂粒 ②良好 ③にぶい褐色	外面に等間隔の刻み痕あり。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
13	第45図 PL-37	鉄製品 (鍛造品) 刀子か	① 10.2 ② 3 ③ 錆化(△)	埋土 長 5.3 幅 0.8 厚 0.25	刀子の可能性を持つ鉄製品破片。2片に分かれており、刃部片と茎部の端部片か。背側は平坦で2mmの厚さを持ち、身幅は9mmと細身となる。研ぎ減りしているためか。長軸の両端部が欠ける。茎部は平坦に成形された薄板状となる。外周部にはやや厚い酸化物が発達している。	
14	第45図 PL-37	鉄製品 (鍛造品) 環状	① 3.5 ② 3 ③ 錆化(△)	埋土 長 2.2 幅 1.0 厚 0.45	1cm前後の幅を持つ環状の鉄製品破片。本来の厚さは1.5mm程と推定される。外周部に酸化物が厚く発達する。各面共平坦に成形されており、上手側も平坦に塗切れている。下手側は破面となる。刀子あるいは工具などの糞具か。	
15	第45図 PL-37	木炭	① 7.4 ② 1 ③ なし	床直 長 2.7 幅 5.4 厚 1.6	広葉樹の環孔材を用いた黒炭。芯部を僅かに欠き、29本の年輪数を数える。表皮なし。木取りは縦ミカン割り1/5。炭化はやや不良。菊割れあり。	

①重量(g)②磁着度③メタル度

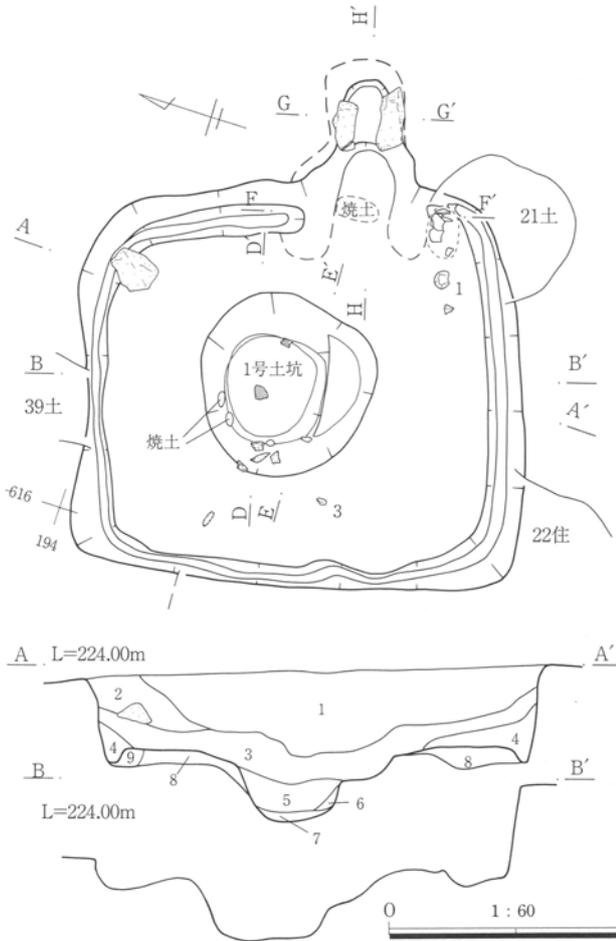
2区23号住居 (第46・47図、P L 8・9・38)
 位置 194-616 方位 N-73°-E 形状 長軸3.50m・短軸3.18mで長軸を東西にもつ方形である。
 面積 8.90m² 壁高 66cm 重複 22号住居、21、39号土坑と重複。23号住居が22号住居、21、39号土坑に切られる調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ11cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。床面中央に外径140cm、内径60~75cmの円形土坑が検出された。断面形状は台形で底面は平坦である。底面に近い土坑の壁面は被熱し、堅く灰褐色に還元化している。土坑の中には細かい炭化材が残存し、焼土が混じる。壁溝 幅10~20cm・深さ約10~12cm前後で全周。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。竈 東壁南側に設置。燃烧部が幅43cm・奥行き100cm、煙道部が幅18cm・奥行き94cmで検出された。煙道部を構築する際に用いられた礫が設

置された状態で検出された。遺物 床直から土師器坏が出土した。実測可能な遺物が3個体ある。椀形鍛冶滓など大型の鍛冶滓は出土しなかったが、住居床面近くから、鍛造剥片が僅かに出土した。分類・計測した鍛造剥片は比較的后出的な鍛打工程を示唆するものである。

2区23号住居出土 鍛造剥片計測値

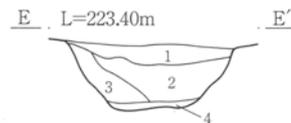
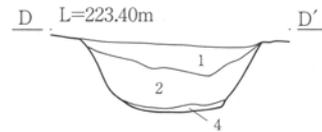
類	大きさ	厚さ	平均厚さ	出土総重量	1個の重量	個体数	割合
1	4.1mm以上	0.2~2.7mm	0mm	0g	0g	0	0.0%
2	3.1~4.0mm	0.2~1.2mm	0.15mm	0.007g	0.007g	1	4.7%
3	2.1~3.0mm	0.2~0.4mm	0.256mm	0.035g	0.0039g	9	42.9%
4	1.1~2.0mm	0.1~0.3mm	0.208mm	0.027g	0.0045g	6	28.6%
5	1mm以下	0.05~0.25mm	0.20mm	0.001g	0.0002g	5	23.8%

所見 住居中央の土坑壁面は被熱し、細かい炭化材・焼土が検出された。土坑は埋没途中の住居に構築されており、廃絶された竪穴住居に掘られた炭窯の可能性が高い。鍛冶関連遺物がまとめて出土しており、炭窯構築前は竪穴住居内で鍛冶を行っていたか、周辺に鍛冶工房があったと推定される。本住居の時期は、出土遺物より8世紀後半に比定される。



2区23号住居

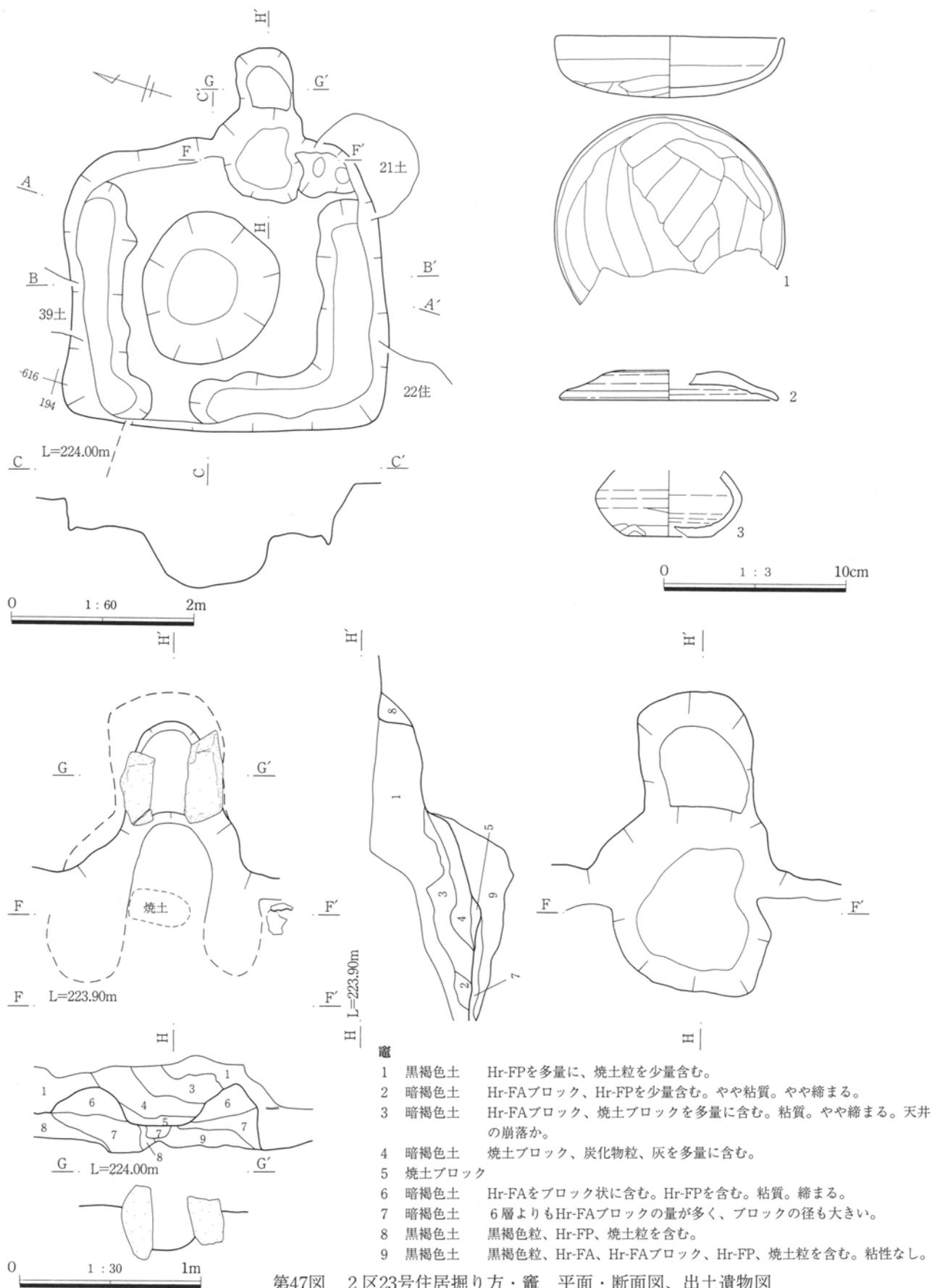
- 1 暗褐色土 Hr-FPを多量に含む。
- 2 暗褐色土 Hr-FP、Hr-FAを含む。
- 3 暗褐色土 Hr-FPを少量含む。
- 4 灰黄褐色土 Hr-FPが多量に混入。
- 5 暗褐色土 Hr-FP、炭化物を多量に、Hr-FAブロックを少量含む。粘性ややあり。
- 6 褐色土 Hr-FPを多量に含む。
- 7 黒色土 炭化物を多量に、焼土を少量含む。
- 8 黒褐色土 黒色土、Hr-FP、焼土粒を少量含む。
- 9 黄褐色土 Hr-FA、Hr-FP混土。



1号土坑

- 1 暗褐色土 Hr-FPを含む。
- 2 暗褐色土 Hr-FP、炭化物、Hr-FAブロックを少量含む。やや締まり、粘性ややあり。
- 3 暗褐色土 Hr-FPを多量に含む。
- 4 黒色土 炭化物の土層。多量に焼土を含む。

第46図 2区23号住居平面・断面図



- 竈
- 1 黒褐色土 Hr-FPを多量に、焼土粒を少量含む。
 - 2 暗褐色土 Hr-FAブロック、Hr-FPを少量含む。やや粘質。やや締まる。
 - 3 暗褐色土 Hr-FAブロック、焼土ブロックを多量に含む。粘質。やや締まる。天井の崩落か。
 - 4 暗褐色土 焼土ブロック、炭化物粒、灰を多量に含む。
 - 5 焼土ブロック
 - 6 暗褐色土 Hr-FAをブロック状に含む。Hr-FPを含む。粘質。締まる。
 - 7 暗褐色土 6層よりもHr-FAブロックの量が多く、ブロックの径も大きい。
 - 8 黒褐色土 黒褐色粒、Hr-FP、焼土粒を含む。
 - 9 黒褐色土 黒褐色粒、Hr-FA、Hr-FAブロック、Hr-FP、焼土粒を含む。粘性なし。

第47図 2区23号住居掘り方・竈 平面・断面図、出土遺物図

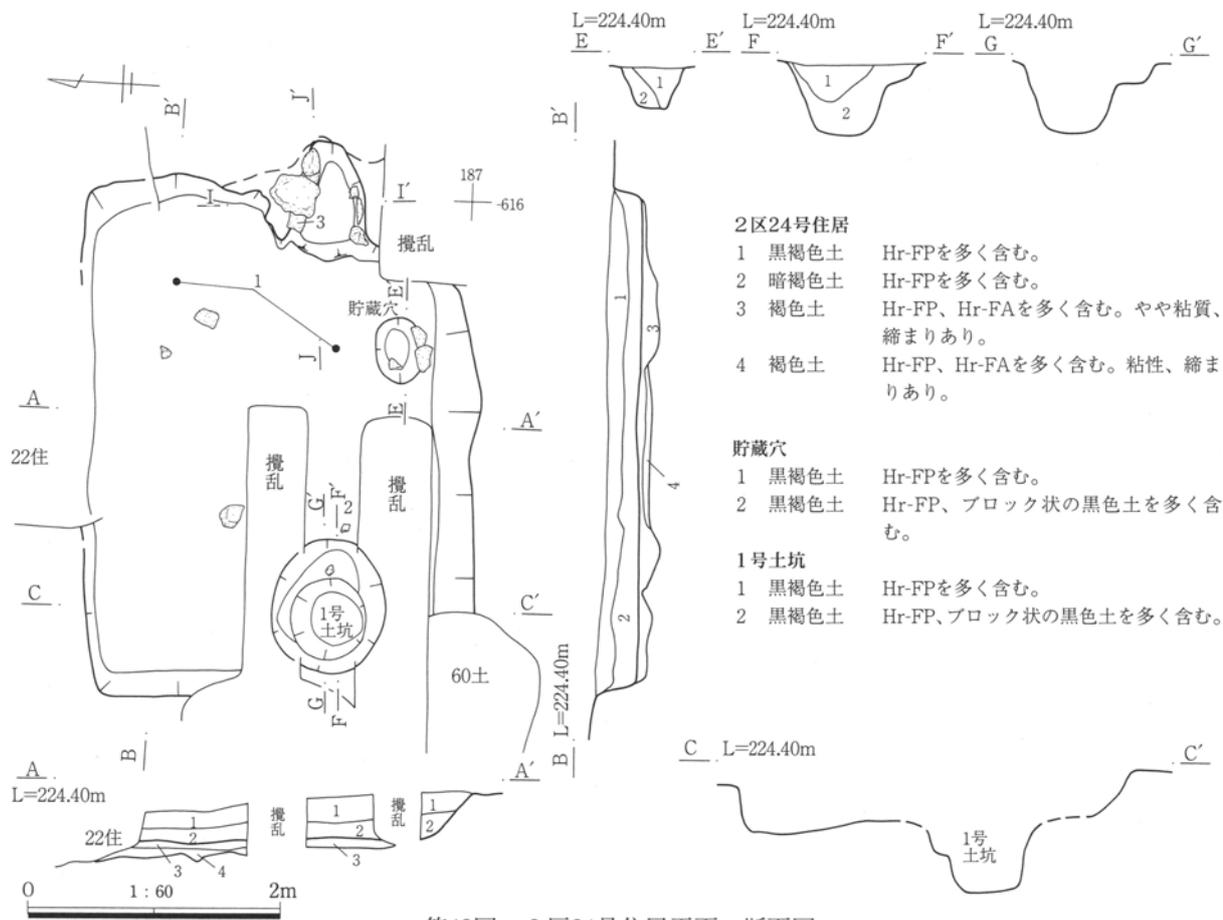
2区23号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第47図 PL-38	土師器 坏	床直 3/4	口12.5 高3.3 底-	①砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部上半が横ナデ。底部はヘラ削り。
2	第47図 PL-38	須恵器 蓋	埋土 1/6	口(12.0)高1.6残	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。天井部は回転ヘラ削り。
3	第47図 PL-38	須恵器 甕	+28 体部1/3	口- 高3.7残 底(4.2)最大(8.0)	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形。底部ヘラ削り。

2区24号住居 (第48・49図、P L9・10・38)

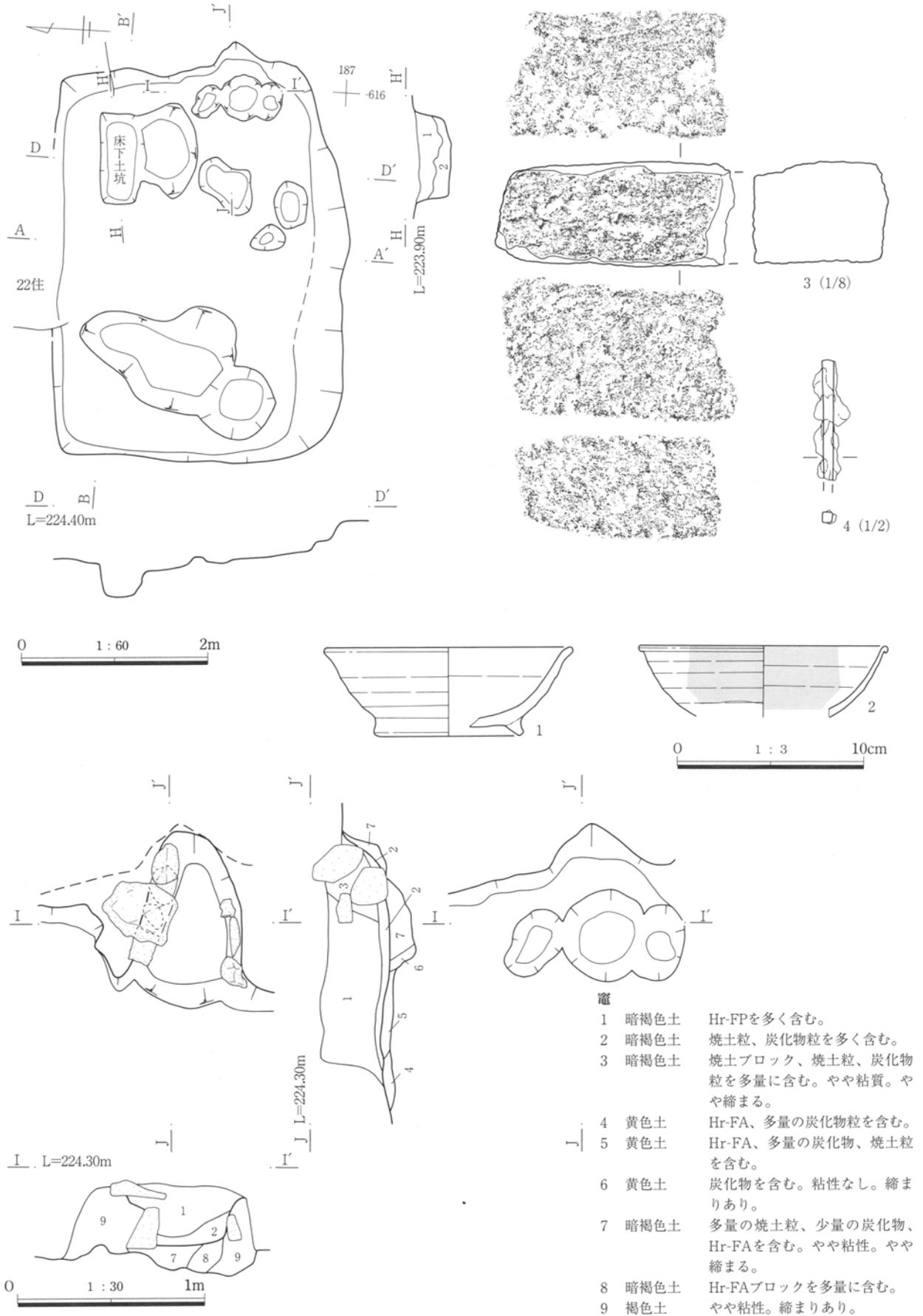
位置 187-616 方位 E-0° 形状 長軸4.12m・短軸3.00mで長軸を東西にもつ長方形である。面積 9.31m² 壁高 41cm 重複 22号住居、60号土坑と重複。22号住居、60号土坑が24号住居を切つて構築する調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ12cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘り方面はほぼ平坦である。北東壁と西壁際に床下土坑。床面は凹凸なく、平坦で整っている。住居西側で、長軸105cm・短軸90cm・深さ55cmの楕円形を呈す1号土坑が検出された。1号土坑は、Hr-FPを少量含む黒色土層と、住居埋土第2層によって埋没している。壁面に被熱痕はない。壁溝 確認できなかつた。

柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。長軸52cm・短軸38cm・深さ33cmの楕円形を呈す。貯蔵穴内から粗粒輝石安山岩が出土した。竈 東壁南側に設置。燃烧部は幅40cm・奥行き59cmで検出。竈袖部周辺から竈構築材として用いられた被熱痕のある二ツ岳起源の加工礫が、設置した状態で検出された。遺物 床直から須恵器碗、灰釉陶器碗、埋土から棒状の鍛造鉄製品が出土した。実測可能な遺物が4個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より10世紀前半に比定される。



第48図 2区24号住居平面・断面図

第4章 遺構と遺物



第49図 2区24号住居掘り方・竈 平面・断面図、出土遺物図

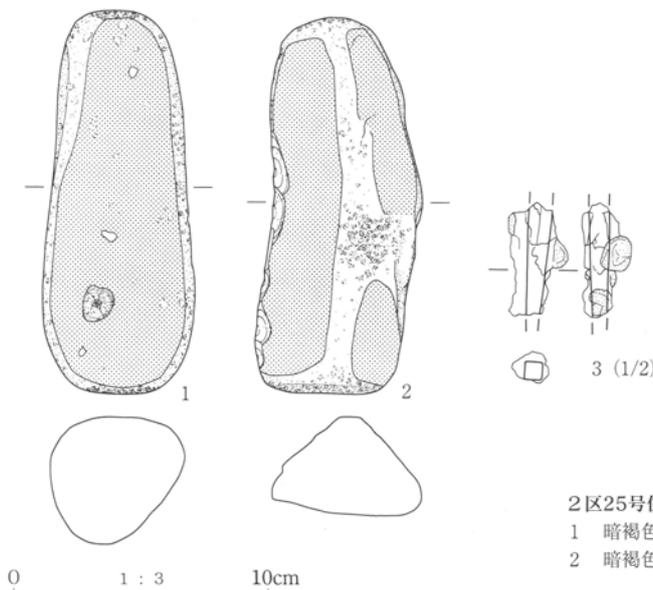
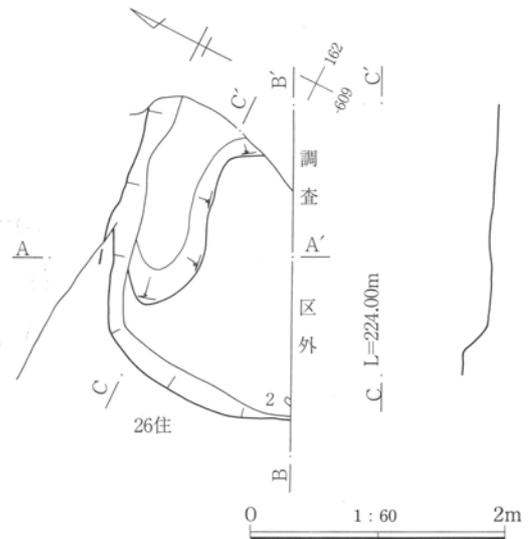
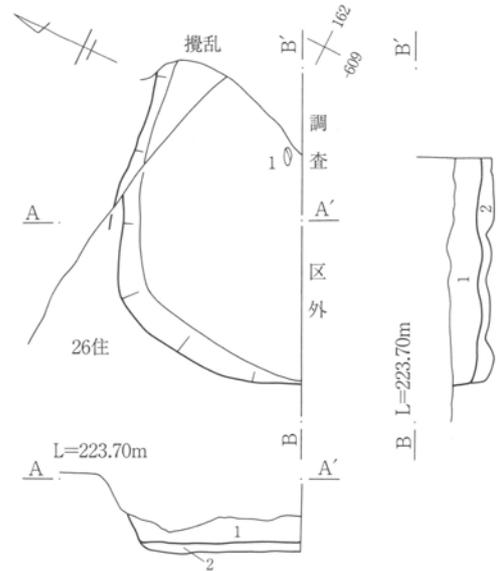
2区24号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第49図 PL-38	須恵器 椀	床直 1/4	口(13.3) 高 4.7 底(7.7) 高台(8.0)	①砂粒②酸化焙ぎ み③にぶい黄橙色	ロクロ成形、右回り回転。高台は貼付。
2	第49図 PL-38	灰釉陶器 椀	床直 口縁部片	口(13.2) 高 3.8残 底 - 高台 -	①細砂粒②還元 焙③灰白色	ロクロ成形。施釉方法は刷毛塗り、釉調は緑色をおびた灰色。光ヶ丘1号窯式。
3	第49図 PL-38	竈構築材	竈	長32.3 幅15.1 厚19.2 重10.38kg	二ツ岳石(石材)	5面加工面、1面破面。被熱痕のある面1面。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
4	第49図 PL-38	鉄製品 (鍛造品) 棒状釘か	① 3.6 ② 2 ③ 錆化(△)	埋土 長 4.3 幅 0.3 厚 0.2	角棒状の不明鉄製品。下手側に向かい徐々に細くなっており、釘の可能性大。頭部は広がりを持たず、僅かに山形に成形されている。側部側が弧状に曲がる。	

①重量(g)②磁着度③メタル度

2区25号住居 (第50図、P L 10・38)

位置 162-609 方位 測定不可能 形状 住居の南部分が調査区外、東部分が攪乱により切られているため、全形は確認できなかった。壁高 19cm 重複 26号住居と重複。25号住居が26号住居に切られる調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ10cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。竈 確認できなかった。遺物 埋土から棒状鉄製品、棒状礫が2点出土した。実測可能な遺物が3個体ある。所見 出土遺物から遺構の時期を比定することが出来なかった。



2区25号住居

- 1 暗褐色土 Hr-FPを多量に、Hr-FAを少量含む。
- 2 暗褐色土 Hr-FAブロックを少量含む。粘性、締まりあり。(掘り方)

第50図 2区25号住居・掘り方 平面・断面図、出土遺物図

第4章 遺構と遺物

2区25号住居出土遺物観察表

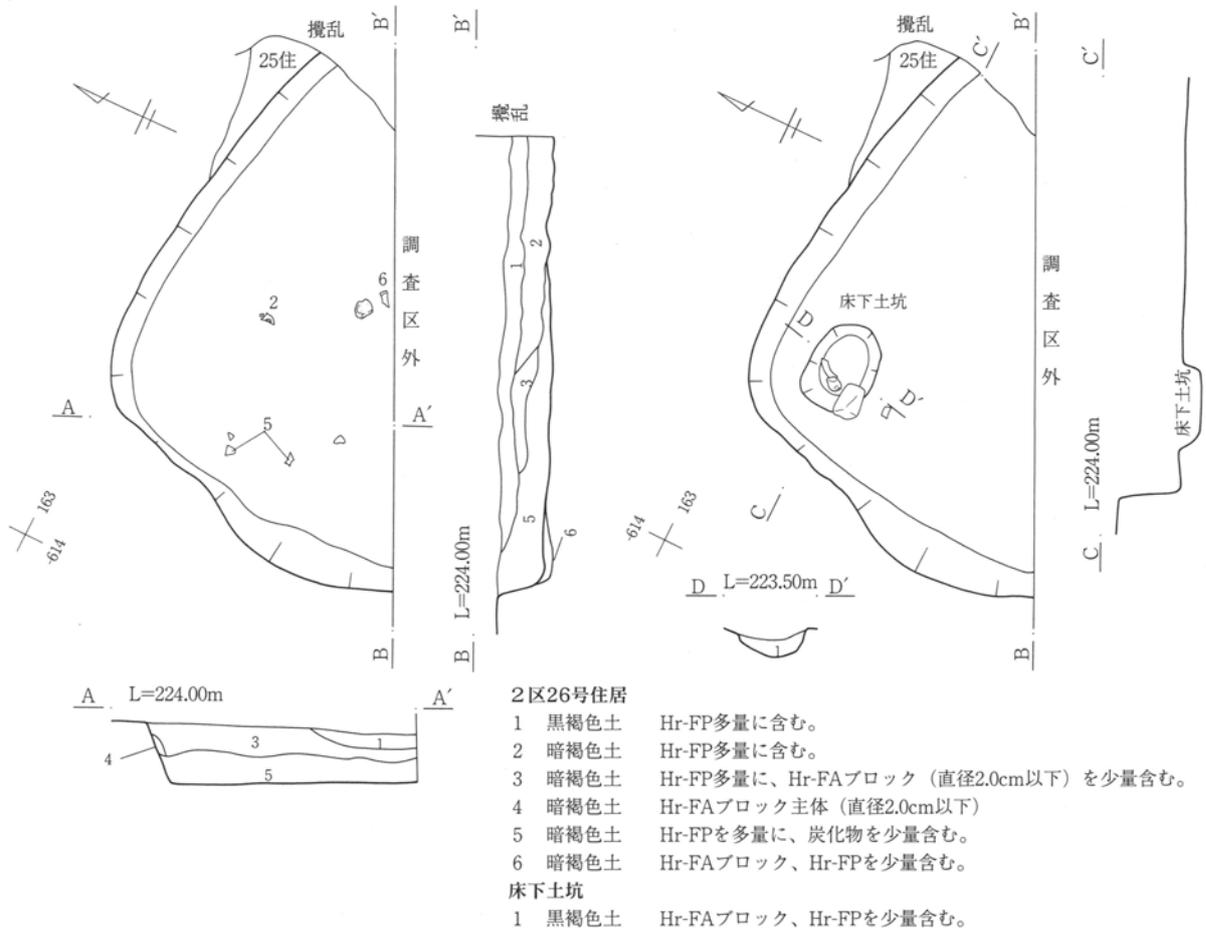
No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第50図 PL-38	棒状礫	+14 完形	長 15.2 幅6.0 厚 5.0 重 722.2g	粗粒輝石安山岩 (石材)	摩耗痕あり。
2	第50図 PL-38	棒状礫	床直 完形	長 14.8 幅6.6 厚 3.9 重 535.4g	粗粒輝石安山岩 (石材)	摩耗痕あり。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
3	第50図 PL-38	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明	① 4.1 ② 3 ③ 錆化(△)	埋土 長 3.0 幅 0.45 厚 0.45	酸化土砂に覆われた棒状の不明鉄製品。上手側に破面が露出する。やや角棒状で釘の体部から側部片か。錆化が進んでいる。	

①重量(g)②磁着度③メタル度

2区26号住居 (第51・52図、P L 10・38)

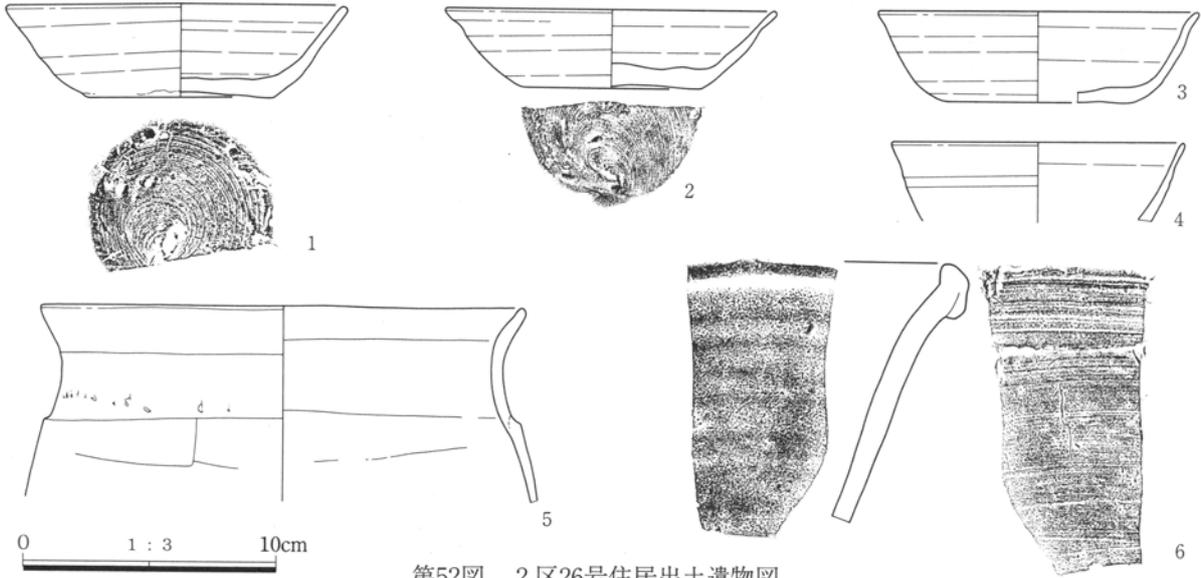
位置 163-614 方位 測定不可能 形状 住居の南部分が調査区外であるため、全形は確認できなかった。面積 測定不可能 壁高 40cm 重複 25号住居と重複。26号住居が25号住居を切る調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ0~10cmの埋め土を施して平坦な面を造る。住居北西角に床下

土坑。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。竈 確認できなかった。遺物 埋土から須恵器坏、碗、大甕、土師器甕が出土した。実測可能な遺物が6個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より9世紀前半に比定される。



第51図 2区26号住居・掘り方 平面・断面図

[1] 竪穴住居



第52図 2区26号住居出土遺物図

2区26号住居出土遺物観察表

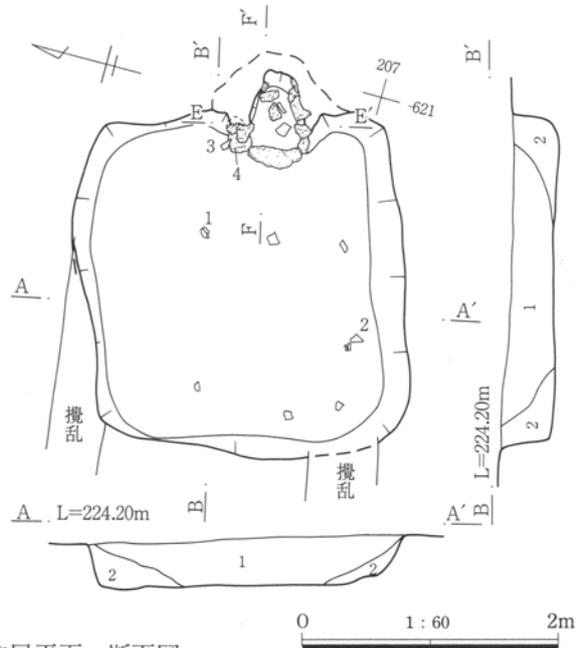
No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第52図 PL-38	須恵器 坏	埋土 1/2	口(13.2) 高 3.7 底 7.4	①砂粒②酸化焰 ぎみ③灰黄色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
2	第52図 PL-38	須恵器 坏	+22 1/2	口(13.0) 高 3.1 底(7.0)	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
3	第52図 PL-38	須恵器 坏	埋土 1/4	口(12.6) 高 3.6 底(7.1)	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。
4	第52図 PL-38	須恵器 碗	埋土 口縁部片	口(11.4) 高 3.2残 底-	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。
5	第52図 PL-38	土師器 甕	+33 口縁1/4	口(19.0) 高 7.7残 底-	①砂粒 ②良好 ③灰褐色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
6	第52図 PL-38	須恵器 大甕	+31 口縁部片	口- 高 10.5残 底-	①細砂粒②還元 焰③灰色	硬質。頸部内外面横ナデ。内面自然釉付着。

2区27号住居 (第53~55図、P L 10・38)

位置 207-621 方位 N-74°-E 形状 長軸2.63m・短軸2.57mで長軸を東西にもつほぼ方形である。面積 4.90m² 壁高 38cm 重複 なし 床面 掘り方面から厚さ15cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。住居中央に床下土坑。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できな

2区27号住居

- 1 黒褐色土 Hr-FPを多く含む。粘性、締まりなし。
- 2 暗褐色土 Hr-FPを多く含む(1層より多い)。粘性、締まりなし。

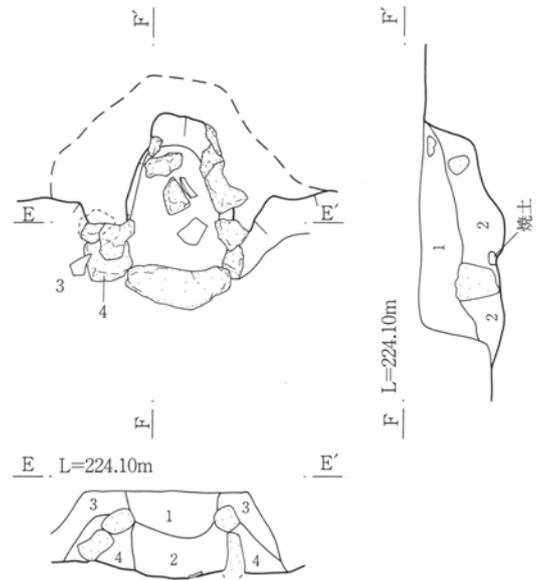
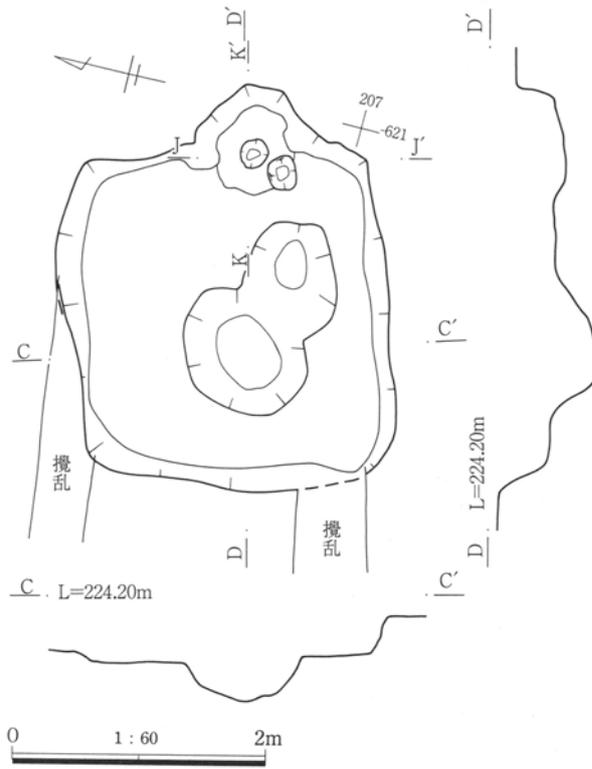


第53図 2区27号住居平面・断面図

第4章 遺構と遺物

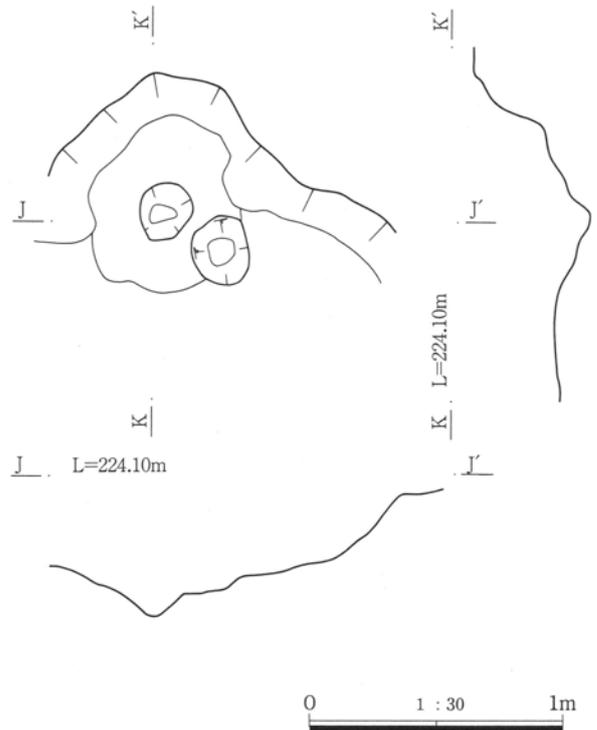
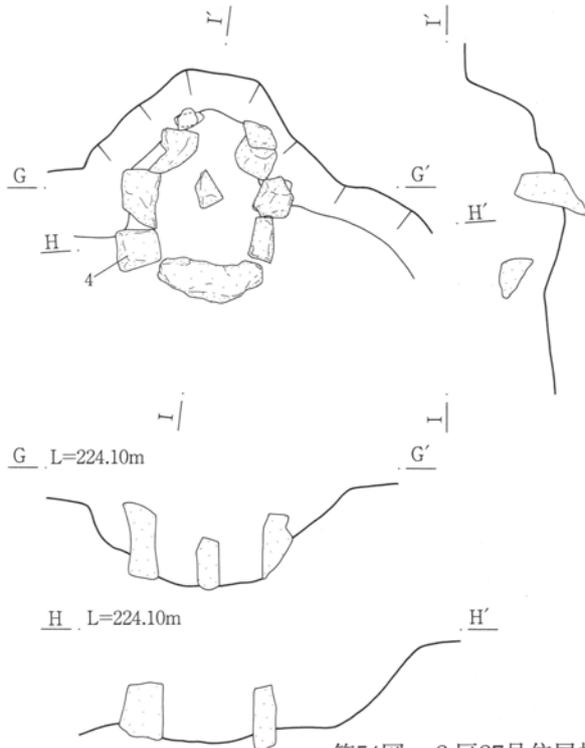
った。竈 東壁に設置。燃烧部は幅38cm・奥行き48cmで検出。竈焚き口から燃烧部にかけて、竈構築材として用いられた被熱痕のある二ツ岳起源の加工礫が、設置した状態で検出された。遺物 床

直から灰釉陶器碗、埋土から須恵器碗、灰釉陶器碗が出土した。実測可能な遺物が4個体ある。所見本住居の時期は、出土遺物より10世紀前半に比定される。

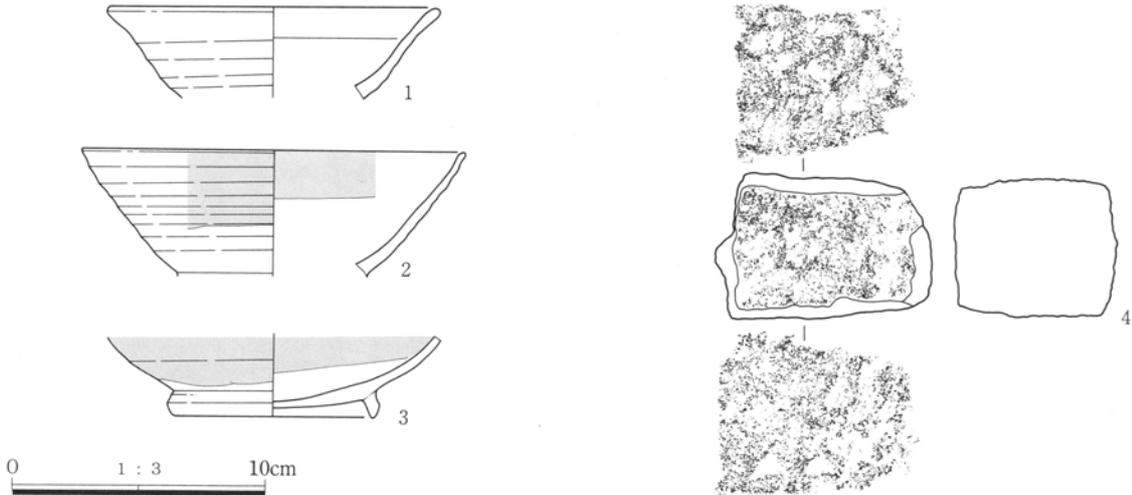


竈

- 1 暗褐色土 Hr-FPを多量に、炭化物、炭化粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 Hr-FA、Hr-FPを多量に含む。
- 3 暗褐色土 2層より褐色がやや強く、Hr-FPの径が小さい。
- 4 灰黄褐色土 大径のHr-FPを多量に含む。



第54図 2区27号住居掘り方・竈 平面・断面図



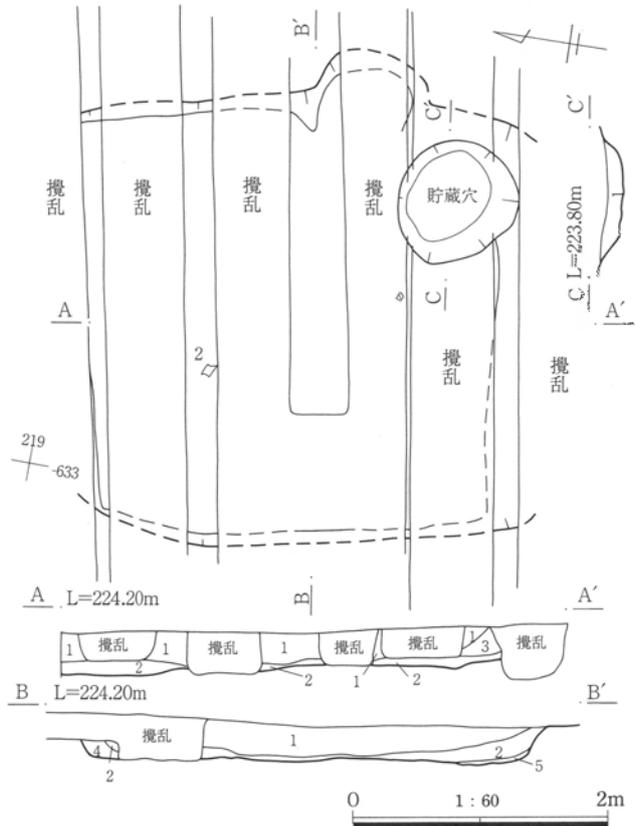
第55図 2区27号住居出土遺物図

2区27号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第55図 PL-38	須恵器 碗	+17 口~体1/6	口(13.1) 高 3.5 底- 高台-	①砂粒②酸化焙 ぎみ③灰黄褐色	ロクロ成形、右回り回転。
2	第55図 PL-38	灰釉陶器 碗	+17 口縁部片	口(15.0) 高 4.9 底-	①細砂粒②還元 焙③灰白色	ロクロ成形。釉調は透明感のない灰色。施釉方法は漬け掛け。大原2号窯式期。
3	第55図 PL-38	灰釉陶器 碗	床直 体~底1/4	口- 高 3.2 底(8.0) 高台(8.4)	①細砂粒②還元 焙③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り難し技法はヘラナデで不明。高台は貼付。施釉方法は漬け掛け、釉調は透明感のない緑色をおびた灰色。大原2号窯式期。
4	第55図 PL-38	竈構築材	竈	長22.5 幅15.4 厚16.8 重5.56kg	二ツ岳石(石材)	4面加工面、1面破面、1面自然面。被熱痕のある面1面。

2区28号住居 (第56・57図、P L 10・38)

位置 219-633 方位 N-76°-E 形状 東西軸3.51m・南北軸(3.35)mの方形に推測される。東西方向の攪乱によって、南壁と北壁が検出できなかった。面積 (10.08) m² 壁高 34cm 重複 なし 床面 掘り方を床面とする。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。長軸100cm・短軸93cm・深さ15cmの不定円形を呈



2区28号住居

- 1 暗褐色土 Hr-FPを多量に含む。
- 2 暗褐色土 Hr-FPを多量に、Hr-FAブロック、黒色土ブロックを少量含む。
- 3 暗褐色土 Hr-FP、Hr-FAブロックを含む。
- 4 黒褐色土 Hr-FA下の黒色土ブロック主体。
- 5 暗褐色土 Hr-FPを多量に、Hr-FAブロック、黒色土ブロック、焼土ブロック、灰を少量含む。

貯蔵穴

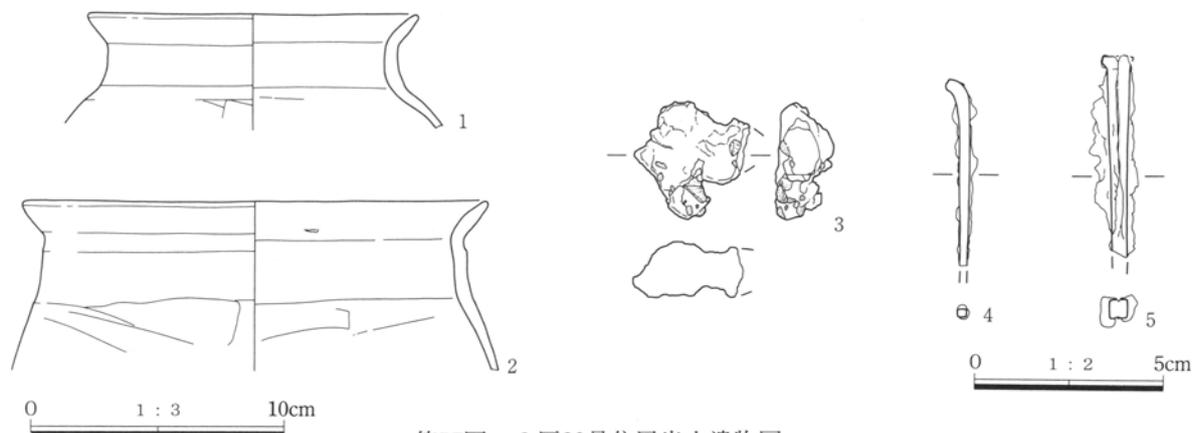
- 1 暗褐色土 Hr-FPを多量に含む。

第56図 2区28号住居平面・断面図

第4章 遺構と遺物

す。竈 東壁南側に設置。燃焼部は幅67cm・奥行き45cmに推測される。遺物 埋土から土師器甕、小型甕、鉄製品釘、鍛冶滓が出土した。実測可

能な遺物が5個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より9世紀前半に比定される。



第57図 2区28号住居出土遺物図

2区28号住居出土遺物観察表

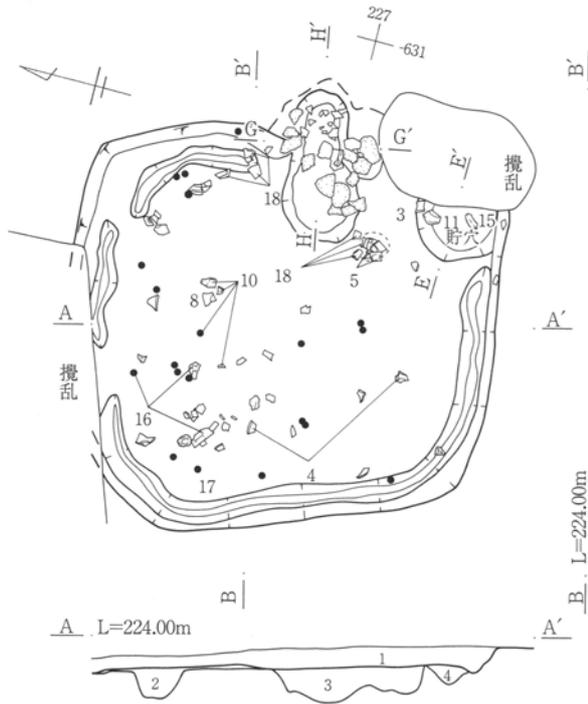
No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第57図 PL-38	土師器 小型甕	埋土 口縁片	口(13.0)高4.6 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
2	第57図 PL-38	土師器 甕	+12 口~肩1/4	口(18.3)高6.7 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
3	第57図 PL-38	鍛冶滓 (含鉄)	①29.3 ②3 ③ 錆化(△)	埋土 長4.6 幅4.6 厚2.3	酸化土砂に覆われた鍛冶滓片。内部にやや隙間を持つ滓で、左右の側部が破面となる。上面が平坦で下面が楕形に突出する。極小の楕形鍛冶滓の破片か。含鉄部は左側の芯部。	
4	第57図 PL-38	鉄製品 (鍛造品) 釘	①2.3 ②2 ③ 錆化(△)	埋土 長4.9 幅0.4 厚0.2	頭部を残す釘。足部先端側は小さく欠落する。頭部は片側にせり出す形で、体部にかけてが僅かに弧状となる。	
5	第57図 PL-38	鉄製品 (鍛造品) 釘	①6.5 ②3 ③ L(●)	埋土 長4.6 幅0.35 厚0.35	僅かに頭部の痕跡を残す角釘。頭部は8割以上が欠落する。体部には直線状の割れが数多く走る。外周部の酸化土砂が厚い。	

①重量(g)②磁着度③メタル度

2区29号住居 (第58・59図、P L 11・39)

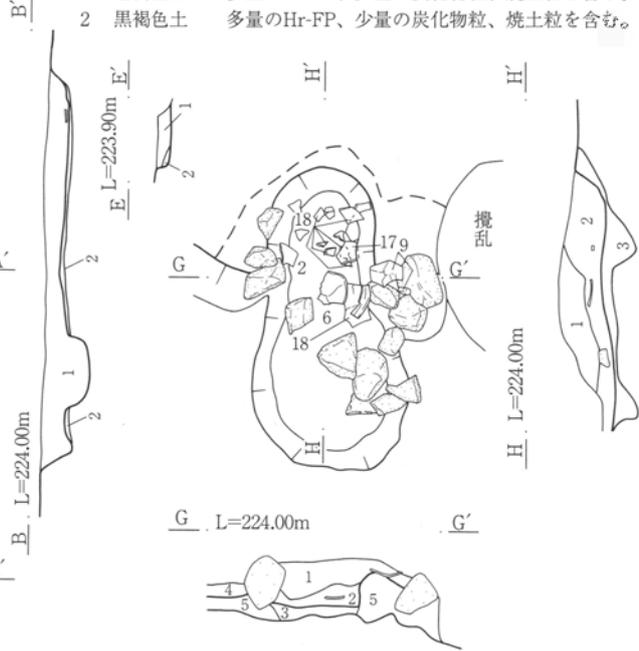
位置 227-631 方位 N-76°E 形状 長軸3.36m・短軸3.18mで長軸を南北にもつ長方形である。面積 8.416㎡ 壁高 21cm 重複 なし 床面掘り方面から厚さ3~30cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 幅7~18cm・深さ7cmでほぼ全周する。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。長軸63cm・短軸43cm・深さ10cmの円形を呈す。東側が攪乱に切られ、全景を検出すること

は出来なかった。竈 東壁に設置。燃焼部は幅40cm・奥行き50cmで検出。竈焚き口周辺で、竈構築材として用いられた被熱痕のある粗粒輝石安山岩が、設置した状態で検出された。遺物 床直から須恵器坏、椀、土師器甕、竈から須恵器坏、椀、土師器甕、貯蔵穴から須恵器坏、椀、土師器甕、埋土から須恵器坏、椀、土師器甕、小型甕が出土した。実測可能な遺物が18個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より9世紀後半に比定される。



貯蔵穴

- 1 暗褐色土 多量のHr-FP、少量の炭化物粒、焼土粒を含む。
- 2 黒褐色土 多量のHr-FP、少量の炭化物粒、焼土粒を含む。

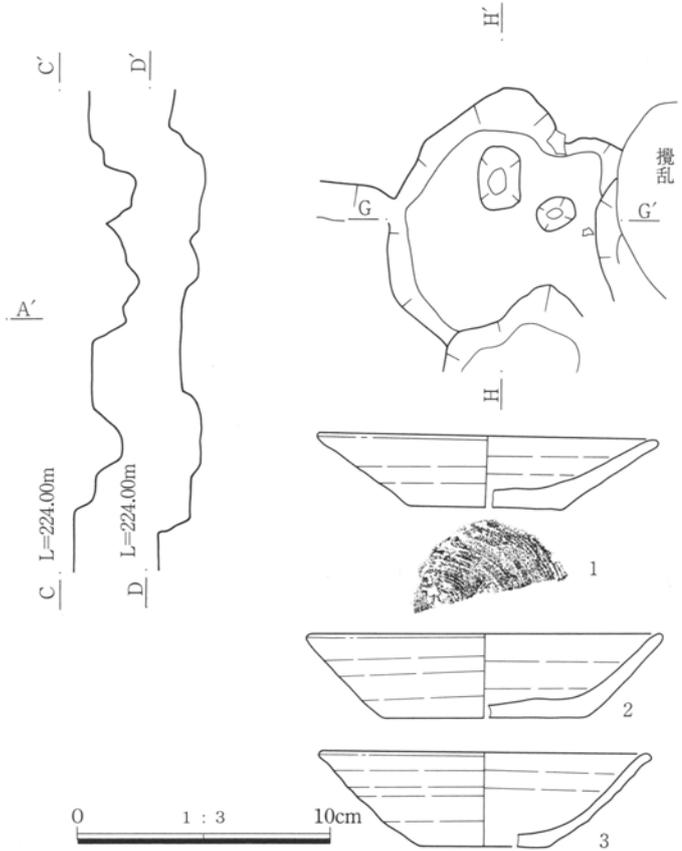
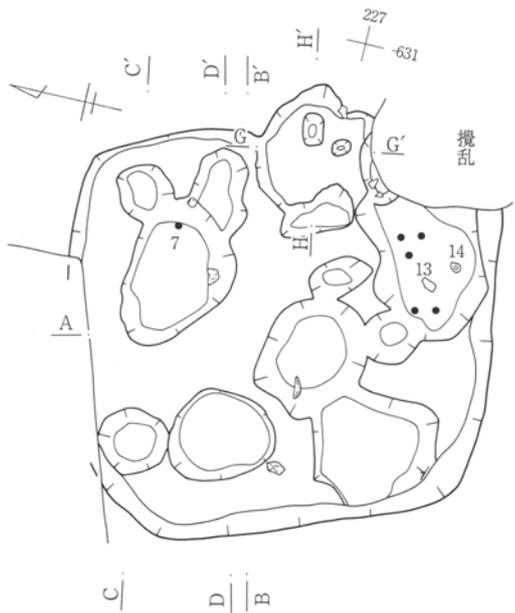


2区29号住居

- 1 暗褐色土 Hr-FP多量に含む。粘性、締まり弱。
- 2 暗褐色土 Hr-FA、Hr-FPを少量含む。締まりやや硬。(掘り方)
- 3 暗褐色土 Hr-FA主体。Hr-FPを少量含む。(掘り方)
- 4 暗褐色土 Hr-FPを少量含む。締まりなし。(掘り方)

竈

- 1 暗褐色土 Hr-FPを少量含む。粘性、締まりなし。
- 2 灰黄褐色土 Hr-FA、Hr-FP、焼土粒を少量含む。粘性なし。
- 3 暗褐色土 Hr-FP、焼土を少量含む。粘性、締まりなし。
- 4 暗褐色土 暗褐色土主体のブロック土。
- 5 暗褐色土 Hr-FA主体。粘性、締まり強い。

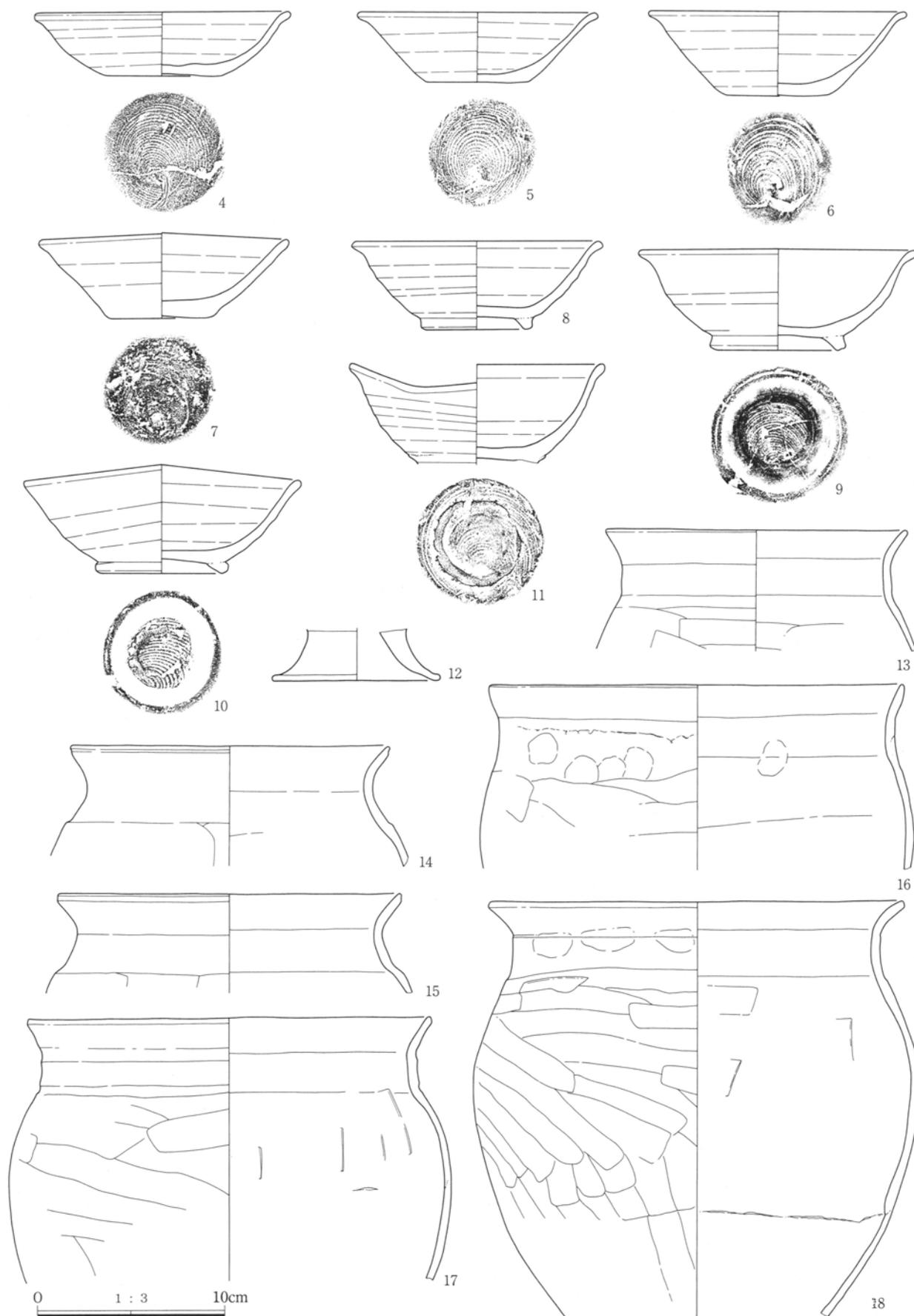


0 1:60 2m

0 1:30 1m

0 1:3 10cm

第58図 2区29号住居・掘り方・竈 平面・断面図、出土遺物図(1)



第59図 2区29号住居出土遺物図(2)

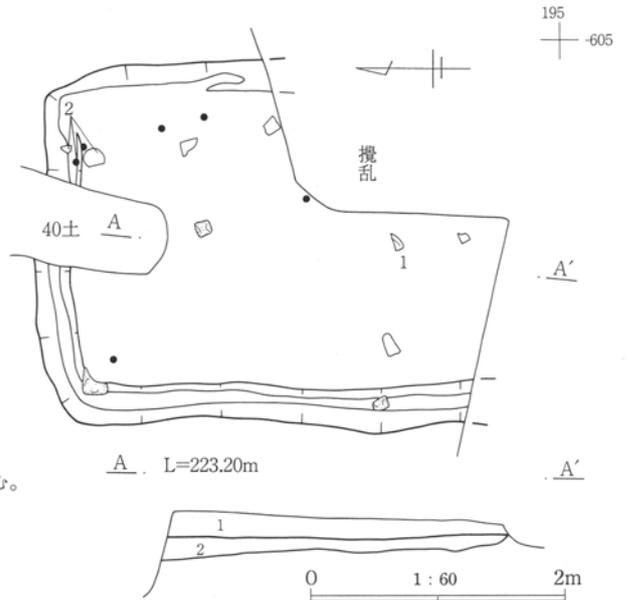
2区29号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第58図 PL-39	須恵器 坏	埋土 1/5	口(13.6) 高 2.8 底(6.0)	①砂粒②酸化焙ぎ み③にぶい黄色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
2	第58図 PL-39	須恵器 坏	竈 1/4	口(14.0) 高 3.3 底(8.0)	①砂粒②酸化焙ぎ み③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
3	第58図 PL-39	須恵器 坏	貯蔵穴 口～底部片	口(13.0) 高 3.7 底(5.0)	①砂粒②酸化焙ぎ み③にぶい黄橙色	ロクロ成形、右回り回転。
4	第59図 PL-39	須恵器 坏	+15 2/3	口 13.7 高 3.4 底 6.2	①砂粒②酸化焙 ぎみ③暗灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
5	第59図 PL-39	須恵器 坏	床直 1/4	口(12.6) 高 3.7 底(5.6)	①砂粒②酸化焙 ぎみ③灰黄色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
6	第59図 PL-39	須恵器 坏	竈 1/2	口(13.9) 高 4.6 底 5.3	①砂粒②酸化焙 ぎみ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
7	第59図 PL-39	須恵器 坏	+13 2/3	口 13.2 高 4.5 底 5.4	①砂粒②酸化焙 ぎみ③灰黄色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。内外面摩滅。
8	第59図 PL-39	須恵器 椀	床直 1/4	口(13.4) 高 4.7 底(6.0) 高台(5.9)	①砂粒②酸化焙 ぎみ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
9	第59図 PL-39	須恵器 椀	竈 1/2	口(14.9) 高 5.4 底 6.9 高台 7.2	①砂粒②酸化焙 ③にぶい橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
10	第59図 PL-39	須恵器 椀	+15 1/2	口(14.8) 高 5.8 底 6.6 高台 6.8	①砂粒②酸化焙 ぎみ③灰黄色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
11	第59図 PL-39	須恵器 椀	貯蔵穴 1/2	口(13.6) 高 5.2残 底(6.4) 高台 -	①砂粒②酸化焙 ぎみ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付 であるが剥落。
12	第59図 PL-39	土師器 小型甕	埋土 脚1/4	口 - 高 2.7残 底(5.2) 脚(8.9)	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	内外面横ナデ。
13	第59図 PL-39	土師器 甕	床直 口～胴上1/6	口(16.0) 高 6.4残 底 -	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
14	第59図 PL-39	土師器 甕	床直 口～頸部片	口(17.0) 高 6.4残 底 -	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
15	第59図 PL-39	土師器 甕	貯蔵穴 口～頸部片	口(18.2) 高 5.3残 底 -	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
16	第59図 PL-39	土師器 甕	床直 口～胴部1/4	口(22.1) 高 9.9残 底 -	①砂粒 ②良好 ③にぶい褐色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。頸部に 指頭痕あり。
17	第59図 PL-39	土師器 甕	竈 口～胴部1/4	口(21.4) 高 14.1残 底 -	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
18	第59図 PL-39	土師器 甕	竈 口～胴部2/3	口(22.2) 高 22.0残 底 -	①砂粒 ②良好 ③黄橙色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。頸部に 指頭痕あり。

2区32号住居 (第60・61図、P L 11・40)
 位置 195-605 方位 N-80°E 形状 長軸 (3.58)
 m・短軸2.82mで長軸を南北にもつ長方形である。
 面積 8.72m² 壁高 48cm 重複 40号土坑と重
 複。本遺構が40号土坑に切られる調査所見を得た。
 床面 掘り方面から厚さ8cmの埋め土を施して平
 坦な面を造る。床面は凹凸がある。住居北東隅で床
 下土坑を検出した。 壁溝 幅10～18cm・深さ4

2区32号住居

- 1 暗褐色土 多量のHr-FP軽石、少量のHr-FAブロック、炭化物粒を含む。
- 2 暗褐色土 多量のHr-FP軽石、Hr-FA、黒色粒を含む。(掘り方)

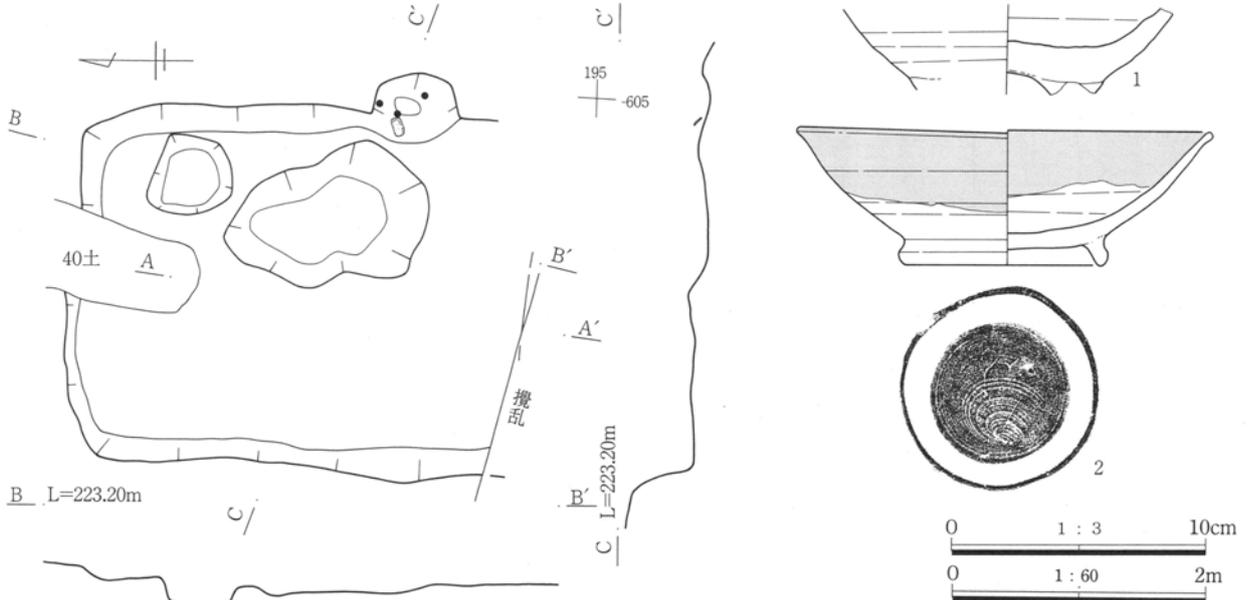


第60図 2区32号住居平面・断面図

第4章 遺構と遺物

～10cmで西壁、北壁際で検出された。柱穴 確認できなかつた。貯蔵穴 確認できなかつた。竈 東壁に設置。竈は攪乱に切れられ、掘り方面を検出した。燃焼部の掘り込みは、幅67cm・奥行き

48cmで検出された。遺物 床直から須恵器碗、灰釉陶器碗が出土した。実測可能な遺物が2個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より10世紀後半に比定される。



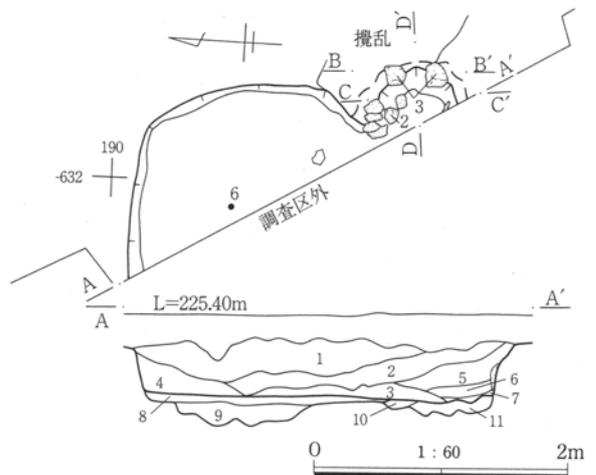
第61図 2区32号住居掘り方平面・断面図、出土遺物図

2区32号住居出土遺物観察表

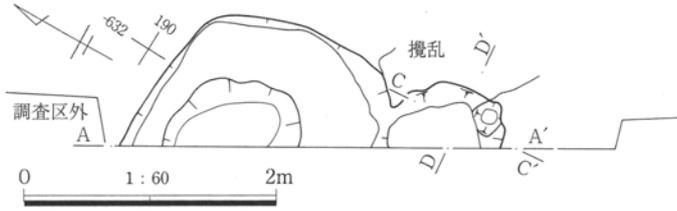
No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第61図 PL-40	須恵器 碗	床直 体～底1/2	口- 高3.5残 底(7.6)	①砂粒②酸化焰 ③にぶい橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付であるが剥落。
2	第61図 PL-40	灰釉陶器 碗	床直 完形	口16.4 高5.3 底7.8 高台8.2	①細砂粒②還元 焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。回転糸切り。高台は貼付。釉調は透明感のない緑色をおびた灰色。施釉方法は刷毛塗り。光ヶ丘1号窯式期。底部内面に重ね焼き痕あり。

2区33号住居 (第62・63図、P L 11・12・40)
位置 190-632 方位 E-0° 形状 遺構の大部分が調査区外であるため、形状は不明。面積 測定不可能 壁高 40cm 重複 なし 床面 掘り方面から厚さ7cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 確認できなかつた。柱穴 確認できなかつた。貯蔵穴 確認できなかつた。竈 東壁に設置。燃焼部は幅46cm・奥行き38cmで検出された。竈焚き口部から燃焼部にかけて、竈構築材として用いられた被熱痕のある二ツ岳石が、設置した状態で検出された。袖石など構築材として使用されている二ツ岳石には工具で整形した加工痕が確認できる。燃焼部奥に長軸中央で2分割された加工痕のある二ツ岳石が破面を下に設置した状態で検出された。No.2は、側面から上面にかけて先端を細く加工した二ツ岳石製の

支脚石である。支脚石は燃焼部左側に設置された状態で出土した。遺物 床直から棒状鉄製品(鍛造品)、埋土から環状鉄製品、鍛冶滓、土師器坏が出土した。所見 本住居の時期は、出土遺物より9世紀前半に比定される。

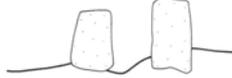
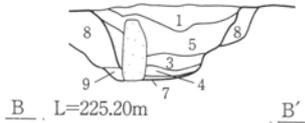
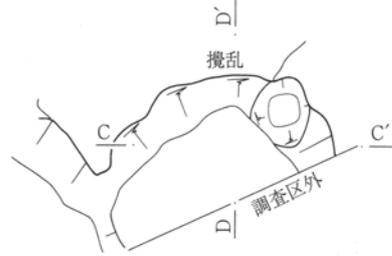
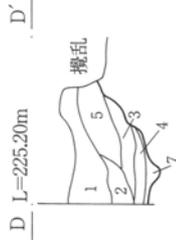
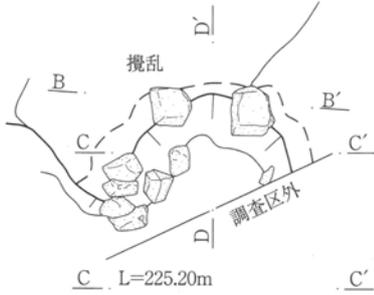


第62図 2区33号住居平面・断面図



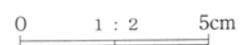
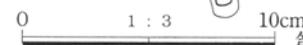
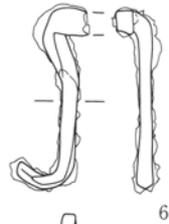
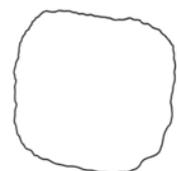
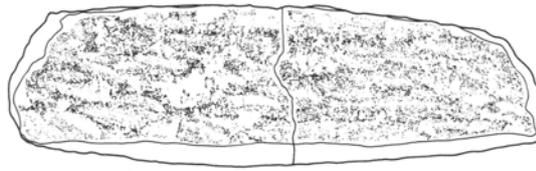
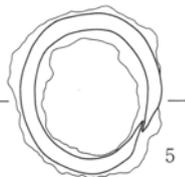
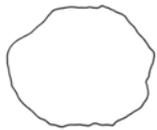
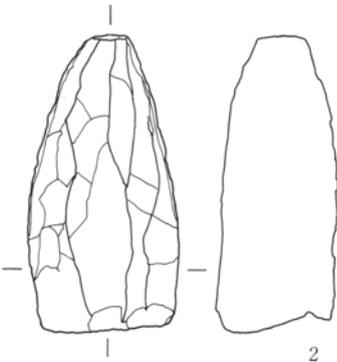
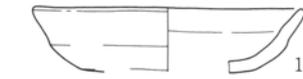
2区33号住居

- | | |
|---------|-----------------------------|
| 1 暗褐色土 | Hr-FPを多量に含む。粘性、締まりなし。 |
| 2 暗褐色土 | Hr-FPを多量に含む。やや締まる。 |
| 3 暗褐色土 | Hr-FAブロックを少量、Hr-FPを多量に含む。 |
| 4 暗褐色土 | やや黒色強い。Hr-FPを少量含む。 |
| 5 暗褐色土 | Hr-FPを多量に、Hr-FAブロックを少量含む。 |
| 6 黒灰色土 | Hr-FPを多量に含む。粘性、締まりなし。 |
| 7 黒褐色土 | 木炭主体。焼土粒、焼土ブロックを少量含む。 |
| 8 暗褐色土 | 黄色ブロック土を多量に含む。貼床か。締まりあり。 |
| 9 黒褐色土 | 黄色ブロック土を多量に含む。貼床か。締まりなし。 |
| 10 暗褐色土 | 焼土粒を少量含む。粘性、締まりなし。 |
| 11 暗褐色土 | Hr-FP、焼土粒、焼土ブロック、炭化物粒を少量含む。 |
- (8~11は掘り方)



竈

- | | |
|--------|------------------------------------|
| 1 暗褐色土 | Hr-FPを多量に、Hr-FAブロックを少量含む。粘性、締まりなし。 |
| 2 黒灰色土 | Hr-FPを多量に含む。粘性、締まりなし。 |
| 3 暗褐色土 | Hr-FAブロック主体。3層下面是被熱している。 |
| 4 黒褐色土 | 木炭主体。焼土粒、焼土ブロックを少量含む。粘性、締まりなし。 |
| 5 暗褐色土 | Hr-FAブロック、焼土ブロックを少量含む。粘性、締まりなし。 |
| 6 暗褐色土 | Hr-FPを少量含む。粘性、締まりなし。 |
| 7 暗褐色土 | 焼土粒、炭化物、Hr-FPを少量含む。締まりなし。 |
| 8 暗褐色土 | Hr-FA主体。Hr-FPを少量含む。締まりややあり。 |
| 9 暗褐色土 | 焼土粒、炭化物を少量含む。締まりややなし。 |



第63図 2区33号住居掘り方・竈 平面・断面図、出土遺物図

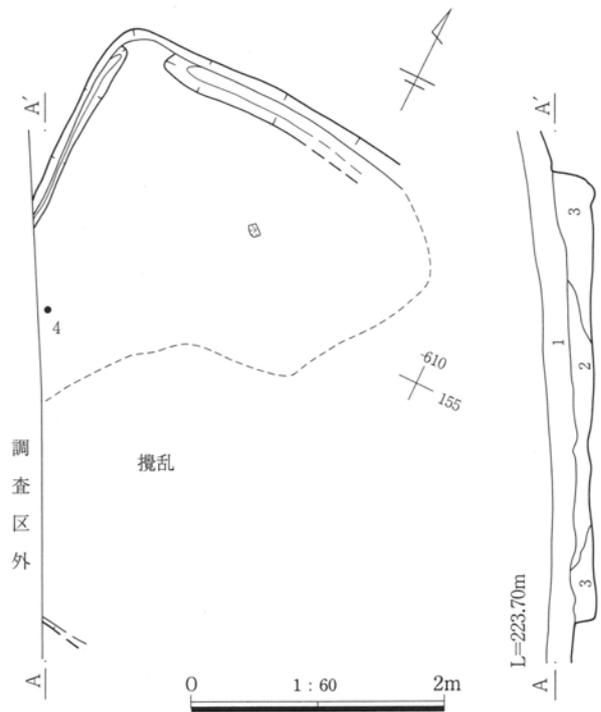
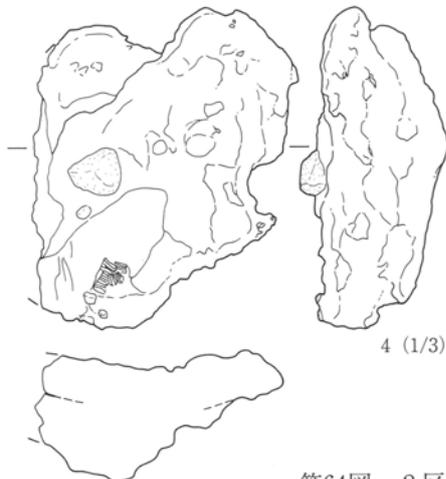
2区33号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第63図 PL-40	土師器 坏	埋土 口~底部片	口(10.8) 高 2.5 残底 -	①砂粒②良好 ③橙色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部は不定方向のヘラ削り。
2	第63図 PL-40	支脚	竈 燃烧部左側	長23.5 最大幅10.5 最大厚9.6 重2.2kg	二ツ岳石(石材)	工具で面取り加工された二ツ岳石製の支脚。破面下に設置。
3	第63図 PL-40	竈構築材	竈 煙道部手前	長56.3 幅17.0 厚16.9 重12.36kg	二ツ岳石(石材)	4面加工面、2面自然面の二ツ岳石を長軸中央で2分割。破面を下に設置。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
4	第63図 PL-40	鍛冶滓 (含鉄)	① 18.4 ② 4 ③ 錆化(△)	埋土 長 3.3 幅 3.8 厚 2.5	やや楕状をした含鉄の鍛冶滓。上面右側は大きく窪み、外周部には小破面が残る。滓としては異形。下面の右側に径3.5mm、長さ1.5cm程の棒状の鉄製品破片をかみこんでいる。楕状の外形からみて工具付着滓の可能性を持つ。	
5	第63図 PL-40	鉄製品 (鍛造品) 環状鉄製品、 馬具か	① 25.0 ② 4 ③ 特L(☆)	埋土 長 4.2 幅 3.8 厚 0.4	3.5~5mm程の径を持つ鉄棒を加工した環状鉄製品。環状に成形され、左側部で斜めに圧着している。工具または農具の責具または馬具などの部品か。全体形状は不整形円形で内径は3.1×2.5cmとなる。外周部にはやや厚い酸化土砂が発達する。	
6	第63図 PL-40	鉄製品 (鍛造品) 棒状釘か又は 掛け金	① 6.2 ② 3 ③ L(●)	床直 長 4.8 幅 1.2 厚 0.9	S字状に成形された掛け金状の鉄製品破片。上手側の端部は小さな破面となる。全体に上手側が太く、下手側に向かい細くなる角棒状。きれいなS字状ではなくねじられている。環状鉄製品の5と何らかの関係を持つ可能性あり。	

①重量(g)②磁着度③メタル度

2区34号住居 (第64・65図、P L 12・40)

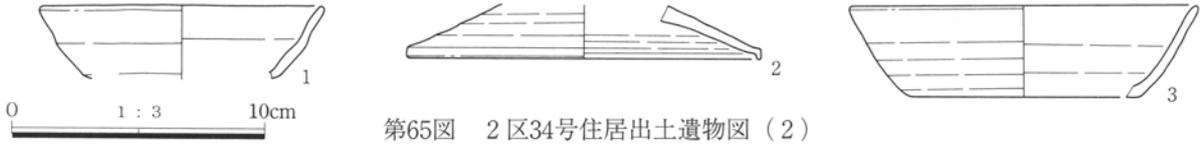
位置 155-610 方位 E-0° 形状 遺構の大部分が削平され、形状は不明である。面積 測定不可能 壁高28cm 重複 なし 床面 掘り方面を床面とする。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 深さ5~8cm・幅15~19cmで検出された。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。竈 確認できなかった。遺物 埋土から土師器坏、須恵器蓋、坏、椀形鍛冶滓が出土した。実測可能な遺物が4個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より8世紀後半に比定される。



2区34号住居

- 1 黒褐色土 Hr-FPを多量に含む。粘性、締まりなし。
- 2 暗褐色土 Hr-FPを多量に含む。粘性、締まりなし。
- 3 褐色土 Hr-FPを多量に含む。粘性、締まりなし。

第64図 2区34号住居平面・断面図、出土遺物図(1)



第65図 2区34号住居出土遺物図(2)

2区34号住居出土遺物観察表

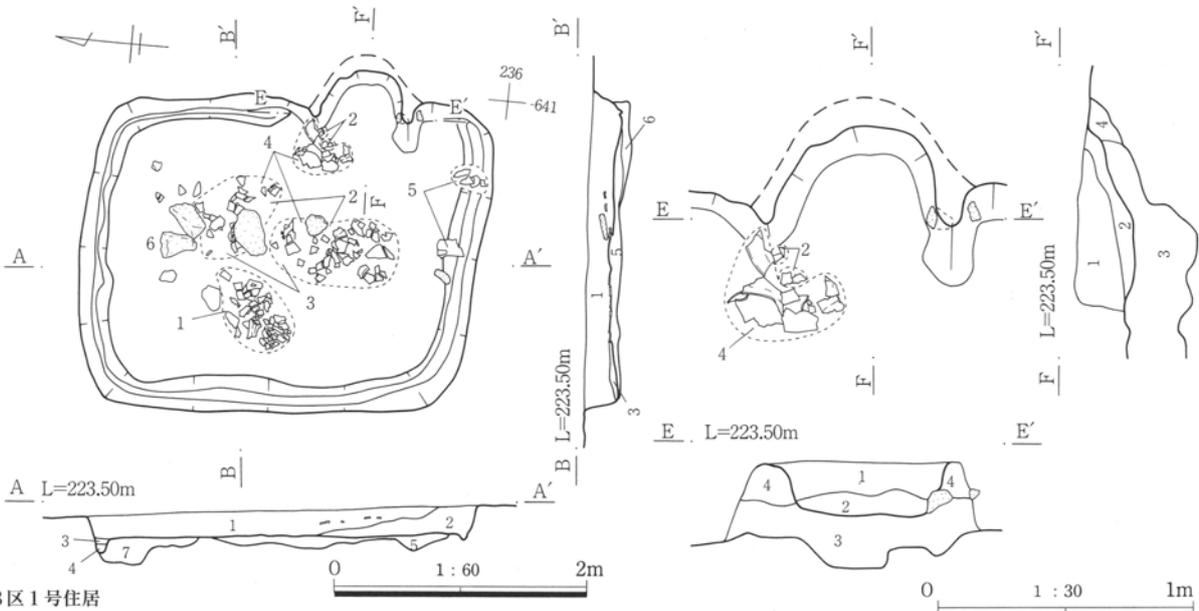
No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第65図 PL-40	土師器 坏	埋土 口~底部片	口(11.1)高2.4残 底-	①砂粒②良好 ③明褐色	口縁部上半が横ナデ。底部は不定方向のヘラ削り。
2	第65図 PL-40	須恵器 蓋	埋土 口縁部片	口(14.0)高2.1残	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。内面自然釉。
3	第65図 PL-40	須恵器 坏	埋土 1/8	口(13.7)高3.6 底(9.0)	①細砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
4	第64図 PL-40	椀形鍛冶滓 (大・含鉄)	① 581.6 ② 3 ③ 錆化(△)	+9 長 12.7 幅 10.5 厚 5.9	部分的に二段ぎみとなった大型の椀形鍛冶滓。左側部と上手側の上半部が主破面で、それ以外の肩部にも小破面が残る。上面は浅く窪み、流動状の滓が部分的に盛り上がっている。上下の滓が密接しており、上手側の左側と右側部の下手寄りには浅い段を生じている。下面は緩やかな椀形で白色の炉床粘土が点在する。上面中央には黒錆がにじむ。	

①重量(g)②磁着度③メタル度

3区1号住居 (第66~68図、P L 12・40・41)

位置 236-641 方位 N-86°-E 形状 長軸3.10m・短軸2.47mで長軸を南北にもつ長方形である。面積 6.23m² 壁高 25cm 重複 なし 床面掘り方面から厚さ7cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 深さ4~12cm・幅9~22cmでほぼ全周検出された。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認

できなかった。竈 東壁南側に設置。燃焼部は幅58cm・奥行き42cmで検出。遺物 床直から土師器甕、床面中央から加工痕のある二ツ岳石、被熱痕のある粗粒輝石安山岩、竈から土師器甕が出土した。土師器甕4個体はほぼ完形である。実測可能な遺物が6個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より8世紀後半に比定される。



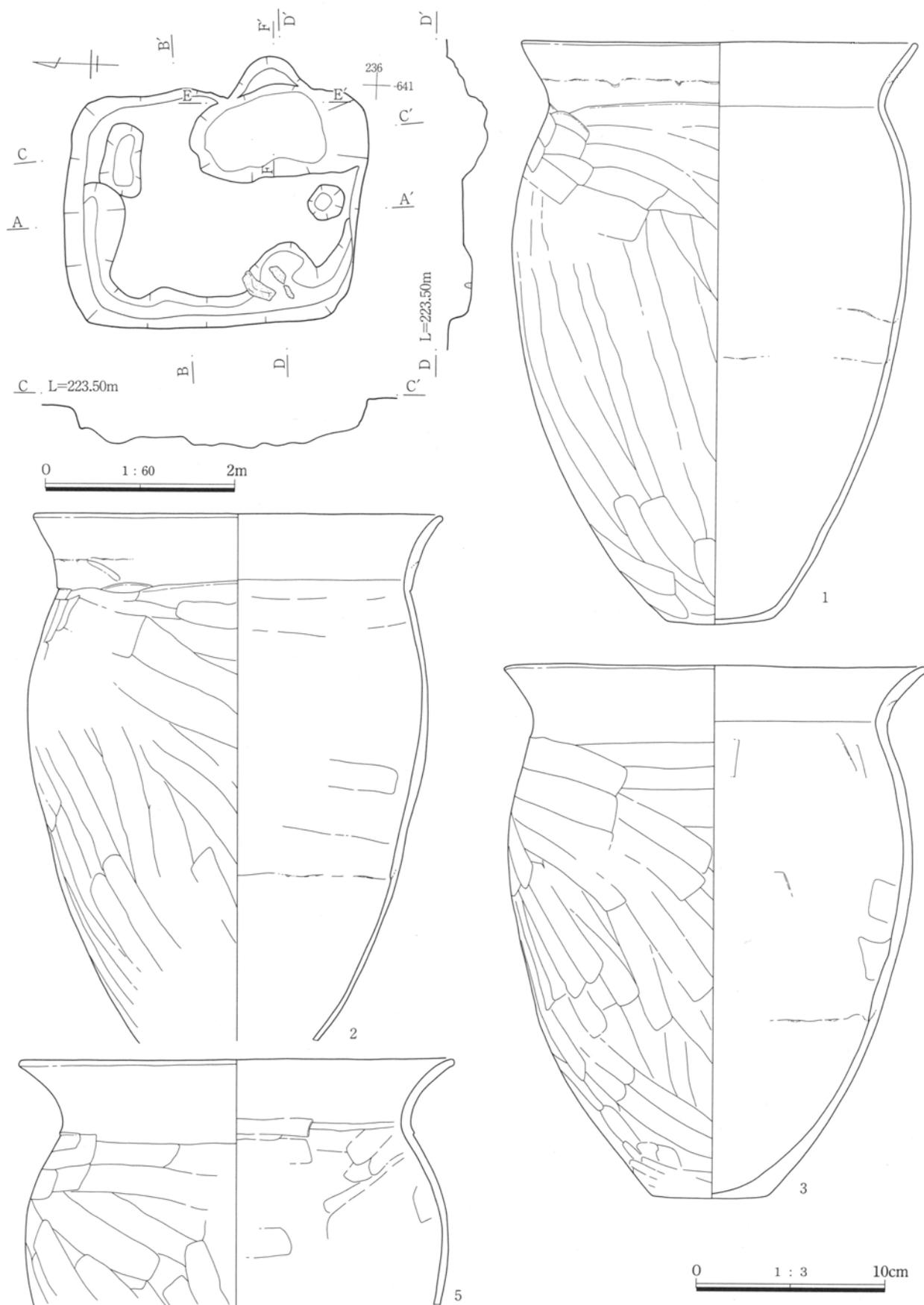
3区1号住居

- 1 暗褐色土 Hr-FPを多量に含む。
- 2 暗褐色土 Hr-FPを多量に含む。締まりややなし。
- 3 暗褐色土 Hr-FAブロックを少量含む。粘性、締まりあり。
- 4 暗褐色土 Hr-FPを少量含む。粘性、締まりなし。
- 5 暗褐色土 Hr-FAブロック、Hr-FPを少量含む。粘性、締まりあり。
- 6 黒褐色土 Hr-FAブロック、Hr-FPを少量含む。粘性、締まりあり。
- 7 灰色土 Hr-FAブロックを多量に含む。砂質。粘性、締まりなし。(5~7は掘り方)

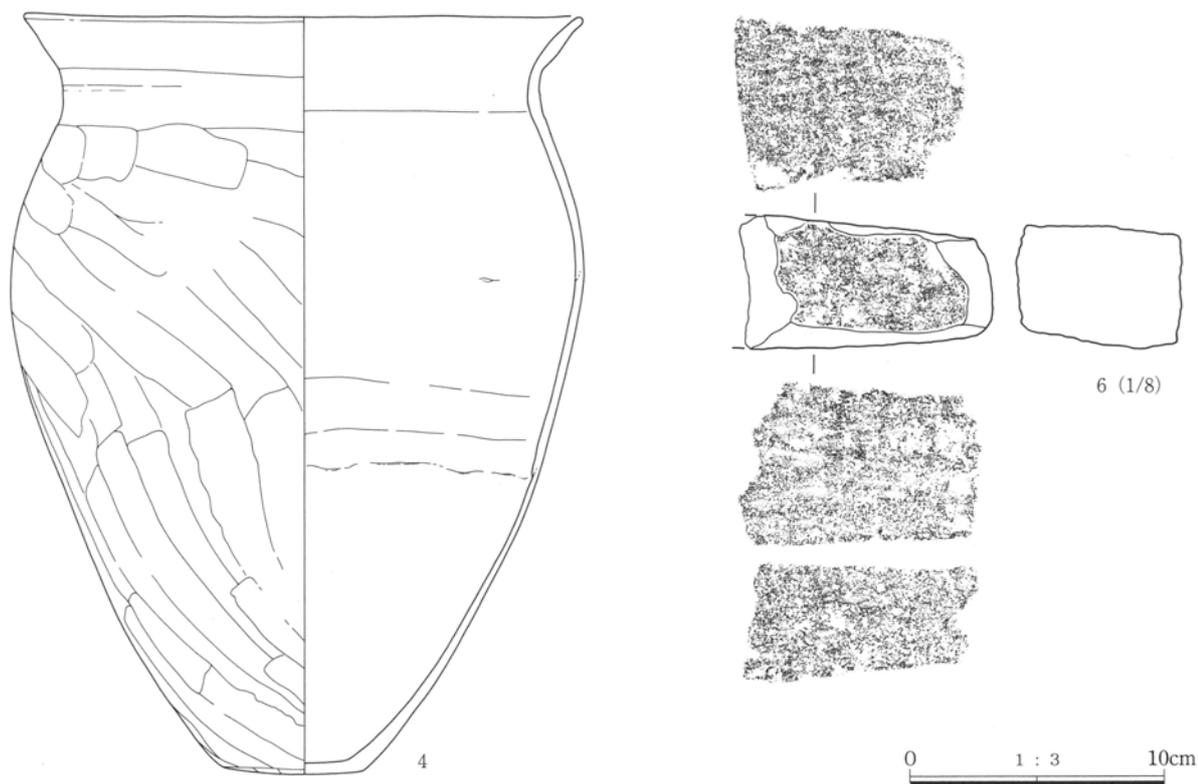
竈

- 1 暗褐色土 Hr-FPを多く含む。粘性、締まりなし。
- 2 暗褐色土 Hr-FAブロック、焼土ブロック少量含む。
- 3 暗褐色土 Hr-FPを多量に、Hr-FAブロック、黒色土ブロックを少量含む。
- 4 灰褐色土 Hr-FAを多量に、Hr-FPを少量含む。

第66図 3区1号住居・竈 平面・断面図



第67図 3区1号住居掘り方平面・断面図、出土遺物図(1)



第68図 3区1号住居出土遺物図(2)

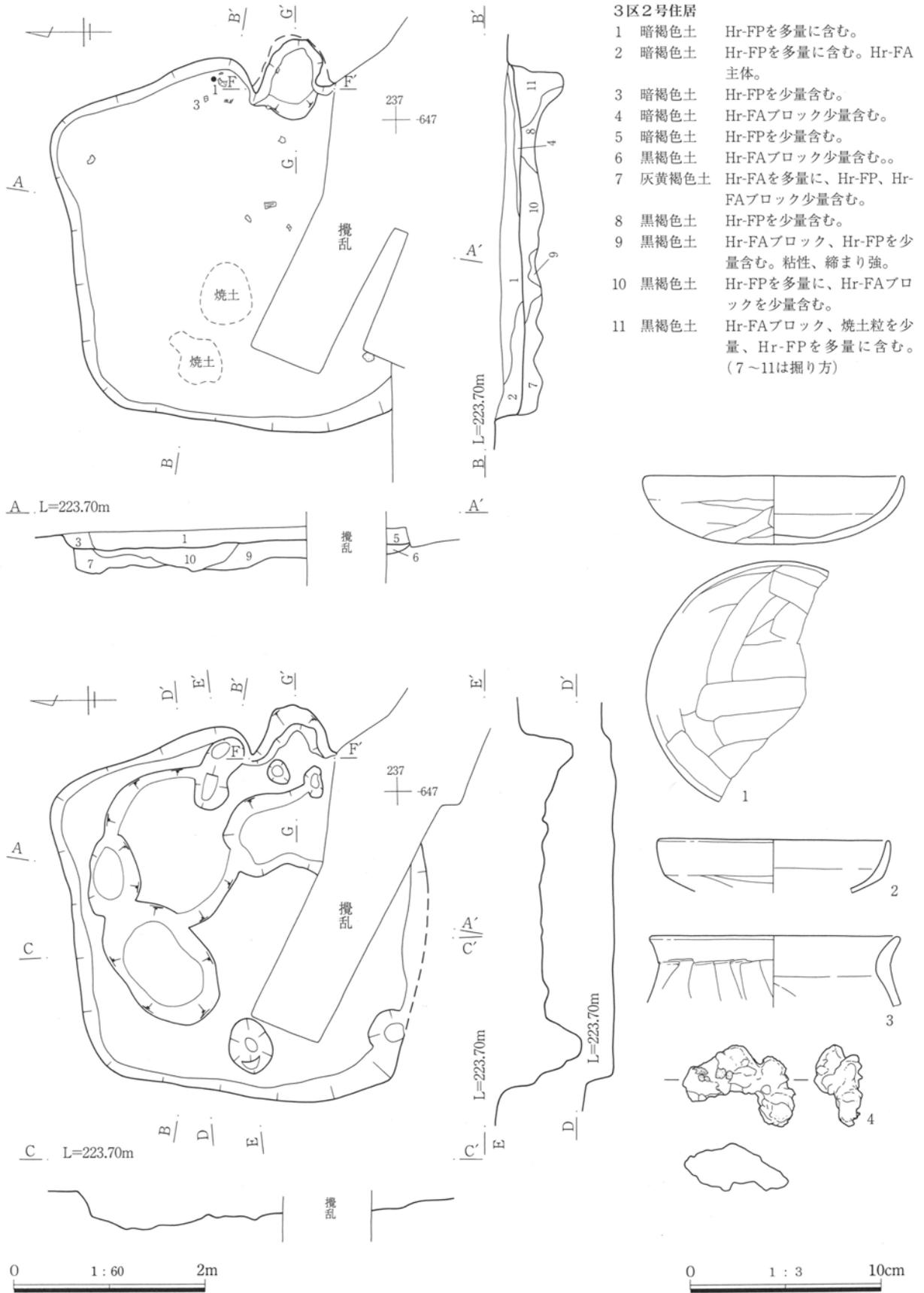
3区1号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第67図 PL-40	土師器 甕	床直 ほぼ完形	口20.9 高30.9 底5.7	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
2	第67図 PL-40	土師器 甕	竈埋土 ほぼ完形	口21.5 高28.0残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
3	第67図 PL-41	土師器 甕	床直 ほぼ完形	口22.3 高28.1 底6.2	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
4	第68図 PL-41	土師器 甕	床直 ほぼ完形	口21.9 高29.8 底5.5	①砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
5	第67図 PL-41	土師器 甕	床直 口~胴1/2	口(23.0)高15.0残 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
6	第68図 PL-41	竈構築材	床直	長26.5 幅14.0 厚17.3 重6.98kg	ニツ岳石(石材)	4面加工面、1面自然面、1面破面のニツ岳石。

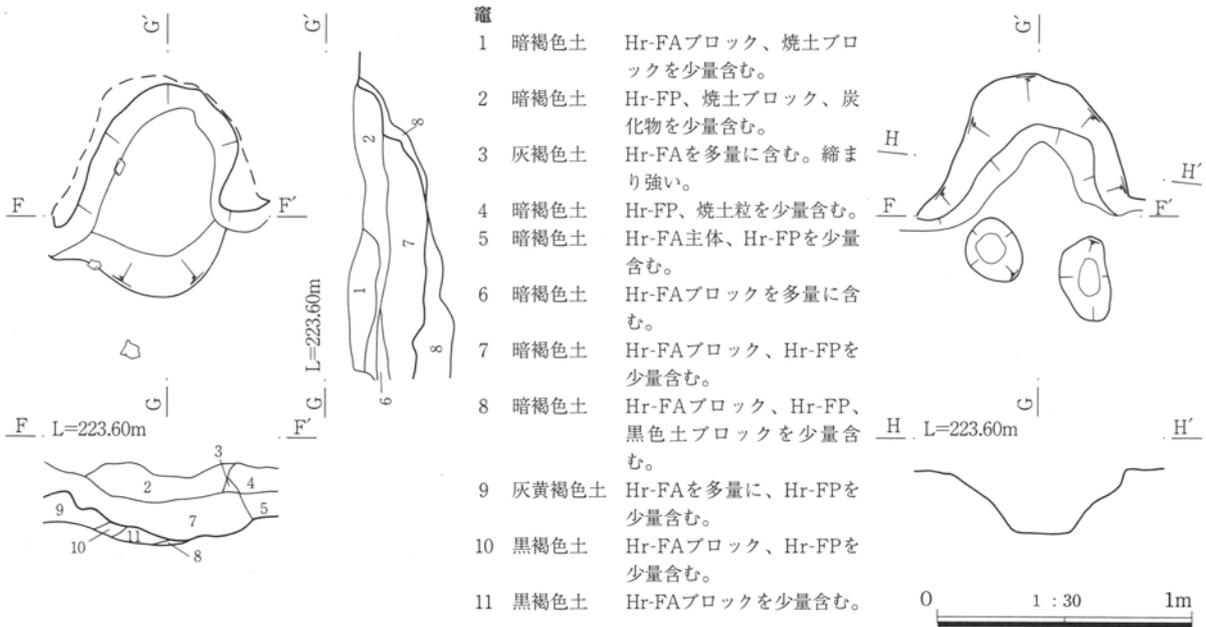
3区2号住居 (第69・70図、P L 13・41)

位置 237-647 方位 E-0° 形状 長軸3.92m・短軸3.74mで長軸を東西にもつ長方形である。面積 9.12m² 壁高 26cm 重複 なし 床面 掘り方面から厚さ17cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。住居北西の床面から焼土範囲が2ヶ所確認された。壁溝確認できなかった。柱穴 確認できなかった。

貯蔵穴 確認できなかった。竈 東壁南側に設置。燃焼部は幅48cm・奥行き45cmで検出。遺物 埋土から土師器坏、甕、鉄塊系遺物が出土した。実測可能な遺物が4個体ある。所見 床面で検出された焼土範囲は不明瞭で、鍛冶炉と認定することは出来なかった。本住居の時期は、出土遺物より8世紀前半に比定される。



第69図 3区2号住居・掘り方 平面・断面図、出土遺物図



第70図 3区2号住居竈 平面・断面図

3区2号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第69図 PL-41	土師器 坏	+11 1/2	口(13.7) 高3.5 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部はヘラ削り。
2	第69図 PL-41	土師器 坏	埋土 口~底部片	口(12.0) 高2.8残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部はヘラ削り。
3	第69図 PL-41	土師器 甕	+12 口縁部1/6	口(13.0) 高3.8残 底-	①粗砂粒②良好 ③褐色	口縁部横ナデ。胴部外面下位から頸部ヘラ削り。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
4	第69図 PL-41	鉄塊系遺物	① 55.7 ② 6 ③ 特L(☆)	埋土 長4.3 幅5.7 厚2.5	小塊状の含鉄部が弧状に連なった鉄塊系遺物。透過X線像から見ると全体が半流動状の鉄部で、外周部には軽石主体の酸化土砂が付着する。左側部のみが小破面の可能性を持ち、ほぼ完形品。製錬鉄塊系遺物または、鍛冶鉄塊系遺物。	

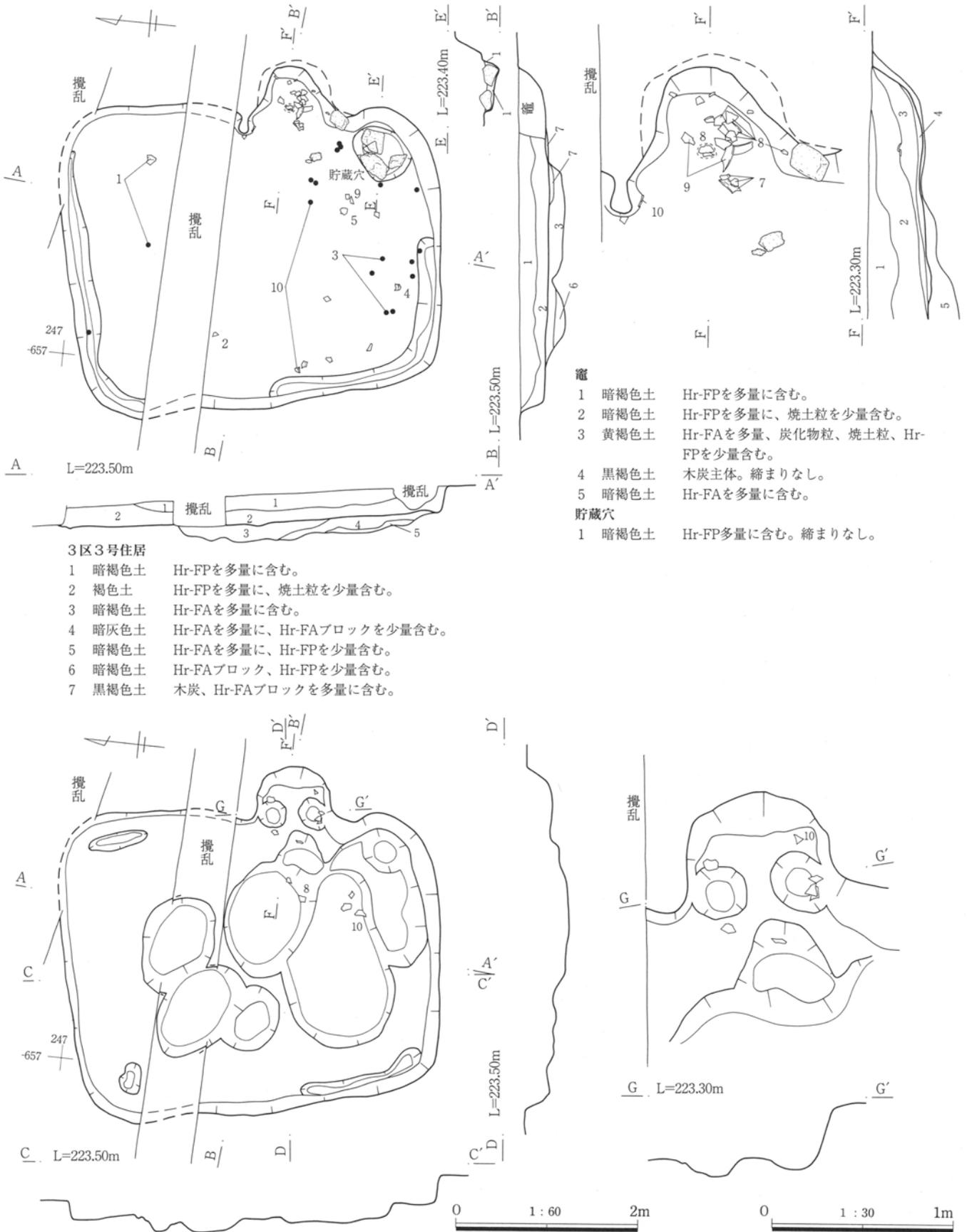
①重量(g)②磁着度③メタル度

3区3号住居 (第71・72図、P L 13・41・42)

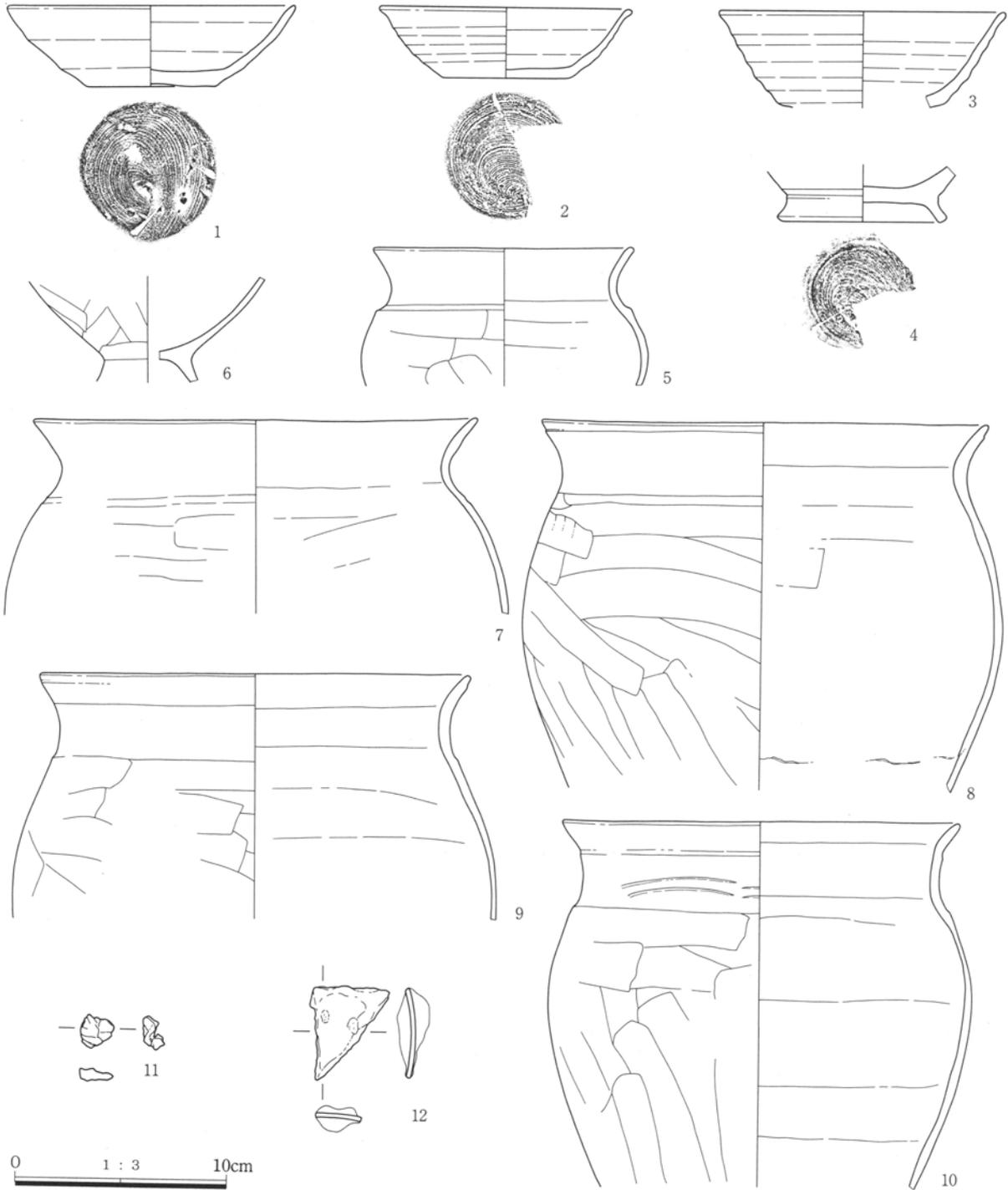
位置 247-657 方位 N-85°-E 形状 長軸4.15m・短軸3.38mで長軸を南北にもつ長方形である。面積 11.28m² 壁高 33cm 重複 なし 床面掘り方面から厚さ10cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。床面は強く締まっていた。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。長軸66cm・短軸53cm・深さ49cmの楕円形を呈す。竈 東壁南側に設置。燃烧部は幅80cm・奥行き50cmで検出された。遺物 床直か

ら須恵器坏、土師器甕、貯蔵穴から粗粒輝石安山岩3点、竈から土師器甕が出土した。埋土からは須恵器坏、椀、土師器甕、鍛冶滓、鉄片などが出土した。実測可能な遺物が12個体ある。

所見 本住居の時期は、出土遺物より9世紀第3四半期に比定される。



第71図 3区3号住居・掘り方・竈 平面・断面図



第72図 3区3号住居出土遺物図

3区3号住居出土遺物観察表

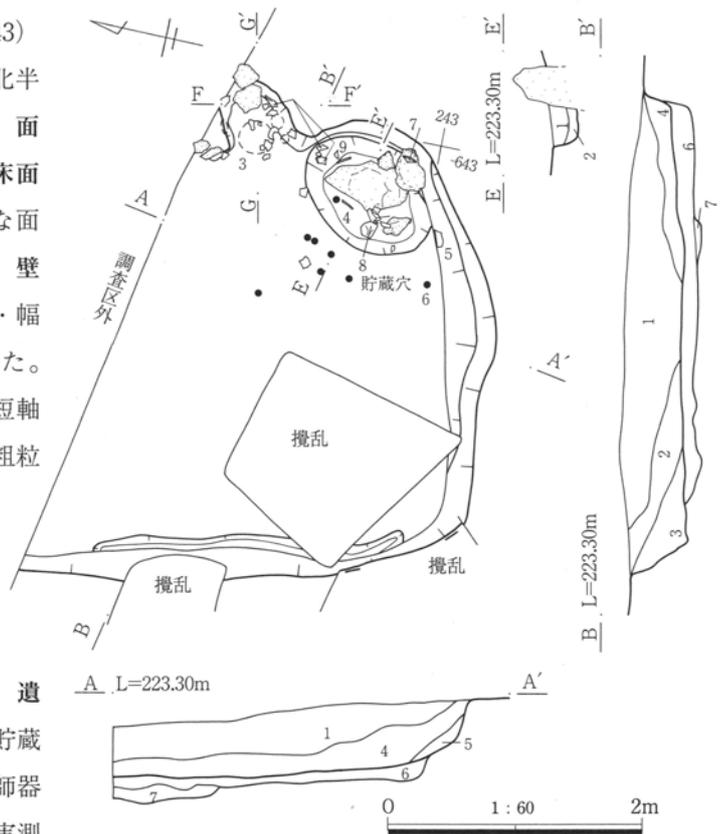
No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第72図 PL-41	須恵器 坏	床直 1/3	口(13.6) 高 3.8 底 6.2	①砂粒②酸化焰 ぎみ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
2	第72図 PL-41	須恵器 坏	+12 1/4	口(12.0) 高 3.2 底(6.0)	①粗砂②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
3	第72図 PL-41	須恵器 坏	床直 口~体部1/5	口(13.4) 高 4.6残 底 -	①砂粒②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。
4	第72図 PL-41	須恵器 椀	+23 底部1/3	口 - 高 2.2残 底(7.4) 高台(8.0)	①砂粒②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。

第4章 遺構と遺物

5	第72図 PL-42	土師器 小型甕	+11 口~胴部片	口(12.0)高6.5残 底-	①砂粒 ②良好 ③赤褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
6	第72図 PL-42	土師器 小型台付甕	埋土 底部片	口- 高5.0残 底(4.0)	①砂粒 ②良好 ③褐色	内面横ナデ。外面ヘラ削り。
7	第72図 PL-42	土師器 甕	竈 口~胴部1/6	口(20.5)高9.4残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
8	第72図 PL-42	土師器 甕	竈 口~胴部1/4	口(21.0)高17.4残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
9	第72図 PL-42	土師器 甕	竈 口~胴部1/4	口(20.2)高11.5残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
10	第72図 PL-42	土師器 甕	竈 口~胴部1/5	口(18.6)高17.2残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。口縁部にヘラの当たり痕あり。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
11	第72図 PL-42	鍛冶滓 (含鉄)	①2.1 ②2 ③錆化(△)	埋土 長1.7 幅1.6 厚1.0	小塊状の含鉄の鍛冶滓。表面は滓のみで芯部に錆化した含鉄部を持つ。下手側の側面には黒錆がにじみ、表面の大半は木炭痕に覆われている。	
12	第72図 PL-42	切り剥 三角形鉄片	①3.4 ②1 ③錆化(△)	埋土 長3.0 幅2.5 厚1.0	上面が反り返った三角形鉄片。上下面はきれいに鍛造されており、上手側と左側面は鋳切りのためか直角にとぎれている。本来の厚みは1mm程度と薄い。	

①重量(g)②磁着度③メタル度

3区4号住居(第73~75図、P L 13・14・42・43)
位置 243-643 方位 N-78°E 形状 遺構の北半分が調査区外であるため、形状は不明である。面積 測定不可能 壁高 50cm 重複 なし 床面 掘り方面から厚さ14cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 住居西壁部で検出された。深さ2~4cm・幅7~9cmを測る。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。長軸112cm・短軸80cm・深さ55cmの楕円形を呈す。貯蔵穴内に粗粒輝石安山岩が確認された。粗粒輝石安山岩は、貯蔵穴内に廃棄されたものではなく、地山から突出しているとの調査所見である。竈 南壁に設置。燃烧部の石組みの一部が残存している。幅54cm・奥行き45cmで検出された。遺物 床直から須恵器長頸壺、土師器甕、刀子、貯蔵穴から須恵器坏、長頸壺、土師器甕、竈から土師器甕、埋土から須恵器坏、土師器甕が出土した。実測可能な遺物が9個体ある。所見 竈掘り方面で検出された袖部2ヶ所の窪みは、袖石の設置跡の可能性が高い。本住居の時期は、出土遺物より9世紀中頃に比定される。



3区4号住居

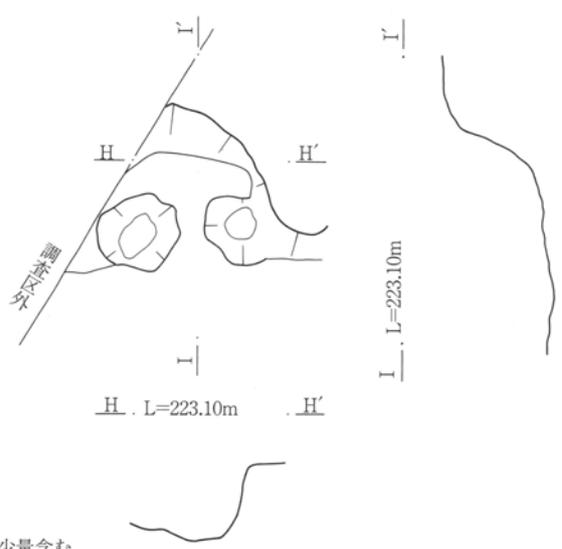
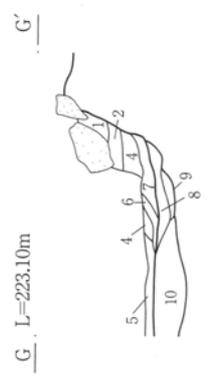
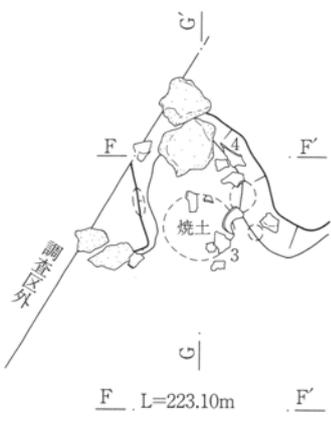
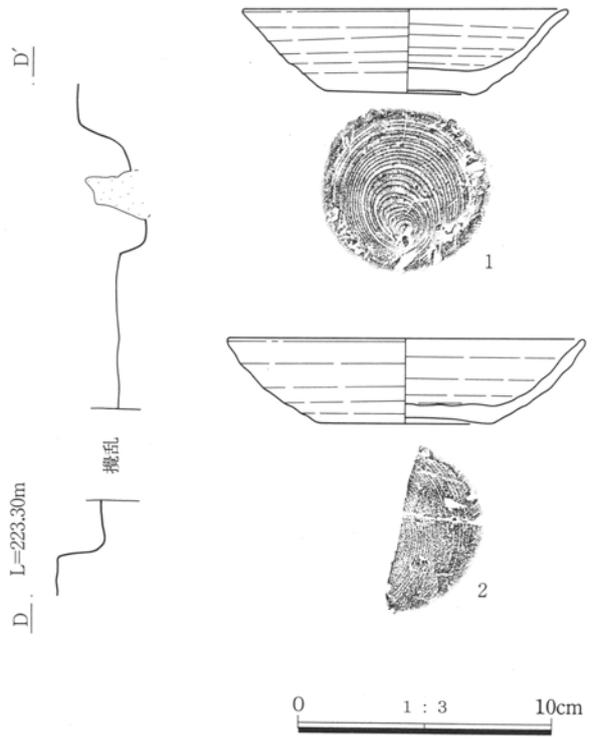
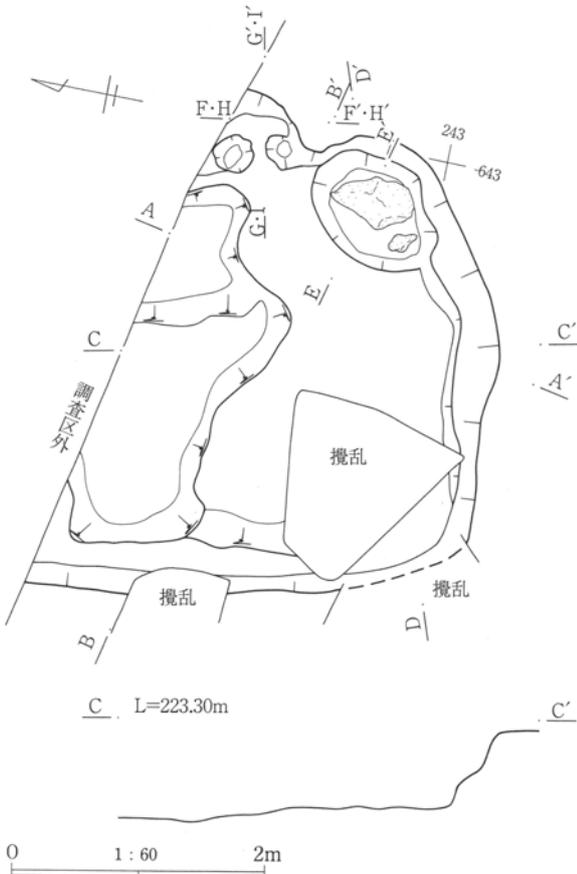
- 1 暗褐色土 Hr-FPを多量に含む。粘性、締まりなし。
- 2 暗褐色土 Hr-FPを少量含む。粘性、締まりなし。
- 3 黒褐色土 Hr-FPを多量に含む。粘性、締まりなし。
- 4 暗褐色土 2層よりやや色調暗い。Hr-FPを多量に含む。
- 5 灰黄褐色土 Hr-FAを多量に含む。
- 6 暗褐色土 Hr-FAブロックを多量に含む。
- 7 黒褐色土 Hr-FAブロックを少量含む。

貯蔵穴

- 1 暗褐色土 Hr-FP、焼土ブロック、炭化物を少量含む。
- 2 暗褐色土 Hr-FPを少量、Hr-FAを微量に含む。

第73図 3区4号住居平面・断面図

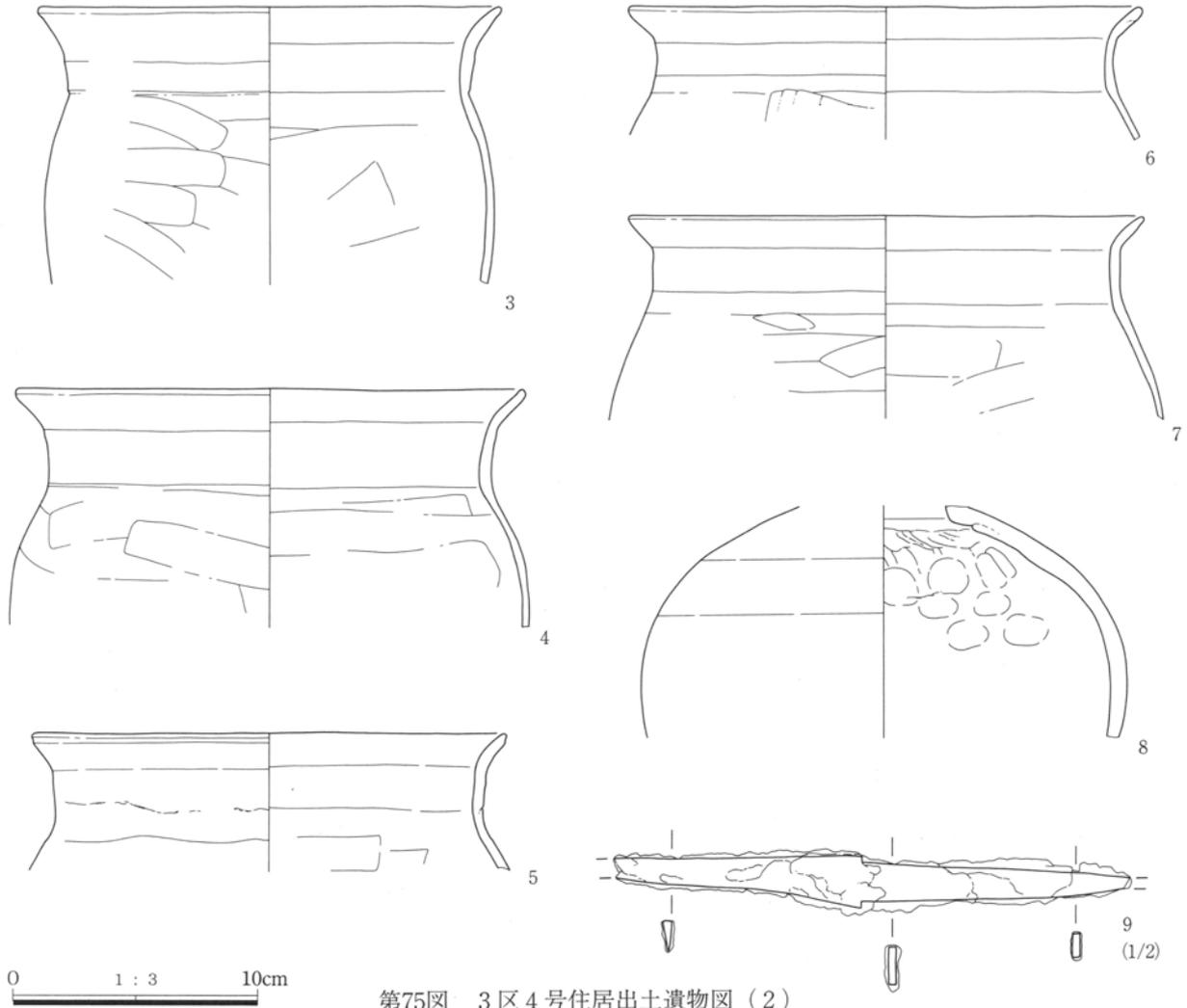
[1] 竪穴住居



- 竈
- 1 暗褐色土 Hr-FPを少量含む。
 - 2 黒褐色土 Hr-FPを少量含む。
 - 3 暗褐色土 Hr-FAブロック主体。焼土粒、焼土ブロックを少量含む。
 - 4 暗褐色土 Hr-FP、焼土粒を少量含む。
 - 5 黒褐色土 木炭、灰を多量に含む。
 - 6 淡青灰色土 灰層。
 - 7 暗褐色土 Hr-FAブロックを多量に、焼土粒、炭化物を少量含む。
 - 8 褐灰色土 Hr-FAを多量に含む。一部被熱。
 - 9 灰褐色土 Hr-FAを多量にHr-FPを少量含む。
 - 10 灰黄褐色土 Hr-FA、Hr-FPを含む。

第74図 3区4号住居掘り方・竈 平面・断面図、出土遺物図(1)

第4章 遺構と遺物



第75図 3区4号住居出土遺物図(2)

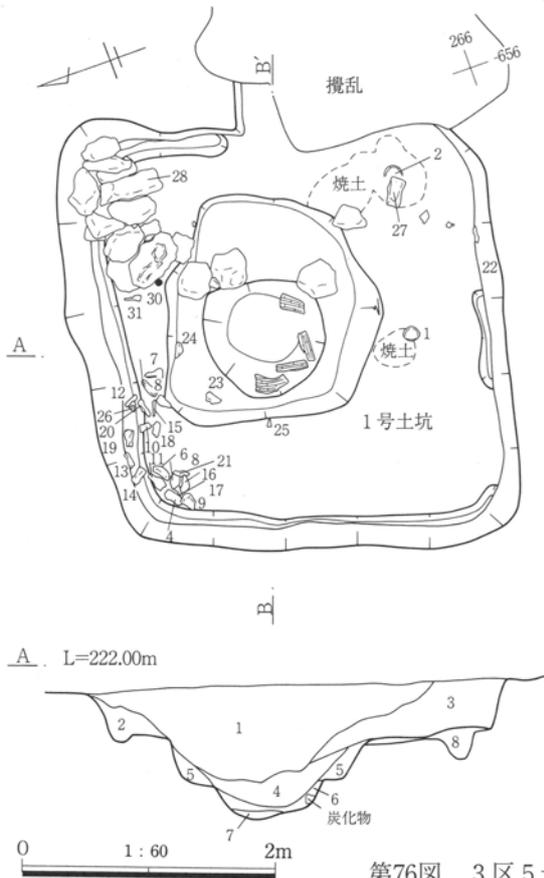
3区4号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第74図 PL-42	須恵器 坏	貯蔵穴 完形	口12.8 高3.3 底6.0	①砂粒②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
2	第74図 PL-42	須恵器 坏	埋土 口~底部片	口(14.2) 高3.2 底(6.7)	①砂粒②酸化焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。外面吸炭。
3	第75図 PL-42	土師器 甕	竈 口~胴1/4	口(18.9)高11.3残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい赤褐色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
4	第75図 PL-42	土師器 甕	竈・貯蔵穴 口~胴上1/2	口(20.8)高9.8残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
5	第75図 PL-42	土師器 甕	+22 口~肩1/4	口(19.3)高5.6残 底-	①砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
6	第75図 PL-42	土師器 甕	床直 口~頸部片	口(21.0)高5.3残 底-	①砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
7	第75図 PL-42	土師器 甕	貯蔵穴 口~胴上1/6	口(21.0)高8.2残 底-	①砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
8	第75図 PL-43	須恵器 長頸壺	貯蔵穴 肩~胴1/4	口- 高9.4残 底- 最大(19.8)	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ整形。頸部内面絞り込み、接合痕あり。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
9	第75図 PL-43	鉄製品 (鍛造品) 刀子	①22.7 ②3 ③L(●)	貯蔵穴 長14.0 幅1.3 厚0.2	長い基部を持つ研ぎ減りした刀子片。切っ先側、基部とも端部が欠落している。背側の関は明瞭で刃部側はやや不明瞭となる。研ぎ減りしたためか細身の刃部となっている。外周部には厚い酸化土砂が固着する。	

①重量(g)②磁着度③メタル度

3区5号住居（第76～79図、P L14・15・43・44）
 位置 266-656 方位 E-17°-S 形状 長軸3.43m・短軸3.32mの方形である。面積 9.08m² 壁高 44cm 重複 なし 床面 掘り方面から厚さ15cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。床面中央に長軸172cm・短軸165cm・深さ61cmの方形土坑（1号土坑）が検出された。方形土坑は深さ30cm付近にテラス状の段があり、西よりに長軸94cm・短軸91cm・深さ31cmを測る隅丸方形を呈する掘り込みがある。土層断面から、西よりの隅丸方形土坑が埋没した後に、テラス状の段と住居が同時に埋没していることが確認できる。西よりの隅丸方形土坑の断面形状は台形で底面は平坦である。底面に近い土層には炭化物層が確認できる。土坑の壁面は被熱痕がなく、2区23号住居のような灰褐色に還元化している部分はない。壁溝 幅5～15cm・深さ約4～12cm前後で検出された。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。竈 東壁に設

置。燃烧部が幅42cm・奥行き45cmで検出された。
 遺物 床直から土師器坏、鍔などの鉄製品（鍛造品）、砥石、住居北西角の埋土から大量の棒状礫、北東角の埋土から二ツ岳石、粗粒輝石安山岩、再結合滓、埋土から粒状滓、鍛造剥片が出土した。取り上げられた鍛造剥片は4類から5類が主体である。二ツ岳石は加工痕がある竈構築材、粗粒輝石安山岩は打痕がある鉄床石である。所見 住居中央の土坑から炭化物層が検出された。土坑は2区23号住居と同様に廃絶された竪穴住居に掘られた炭窯の可能性が高い。住居角の埋土から出土した棒状礫や二ツ岳石、粗粒輝石安山岩は、炭窯遺構廃絶時に、周辺から同時に廃棄された遺物である可能性が高い。鍛冶関連遺物がまとまって出土しており、炭窯構築前は竪穴住居内で鍛冶を行っていたか、周辺に鍛冶工房があったと推定される。本住居の時期は、出土遺物より8世紀中葉に比定される。



第76図 3区5号住居平面・断面図

3区5号住居出土 粒状滓計測値

類	大きさ	出土総重量	1個の重量	個体数	割合
1	4.1mm以上	0g	0g	0	0.0%
2	3.1～4.0mm	0g	0g	0	0.0%
3	2.1～3.0mm	0g	0g	0	0.0%
4	2.0mm以下	0.482g	0.0155g	31	100.0%

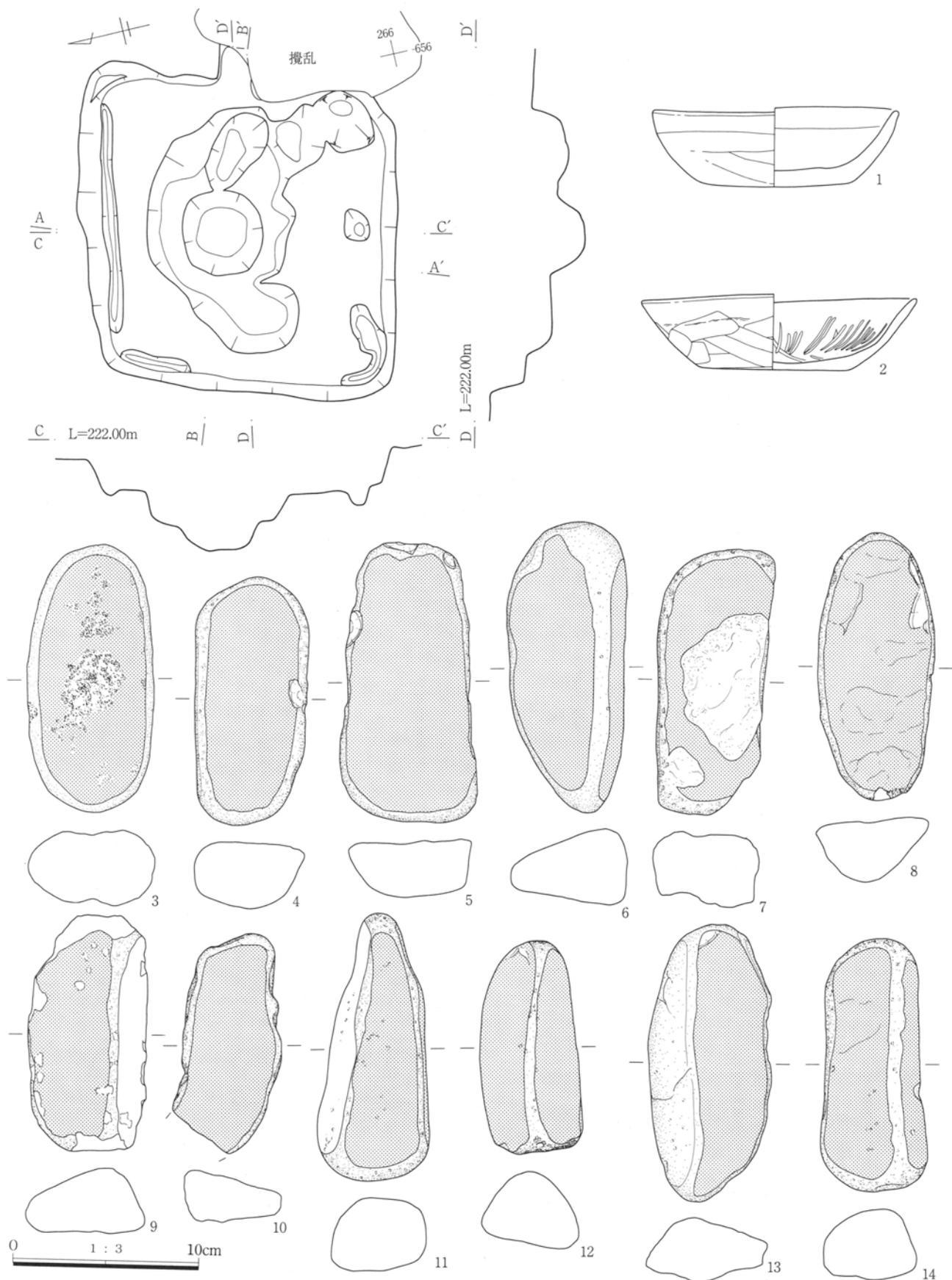
3区5号住居

- 1 黒褐色土 Hr-FPを多量に含む。
- 2 褐色土 Hr-FPを多量に含む。
- 3 黒褐色土 直径1.5cm以上のHr-FPを多量に含む。
- 4 黒褐色土 炭化物を多量に含む。
- 5 褐色土 Hr-FPを少量、黒色土(Hr-FA)をブロック状に含む。
- 6 黒色土 炭化物主体。
- 7 黒色土 Hr-FA、Hr-FPを少量含む。やや締まり、やや粘質。
- 8 褐色土 Hr-FPを含む。Hr-FAを多量に含む。ほとんどがHr-FA。
- 9 Hr-FP 二次堆積。
- 10 褐色土 Hr-FPを多量に、黒色粘質土をブロック状に含む。

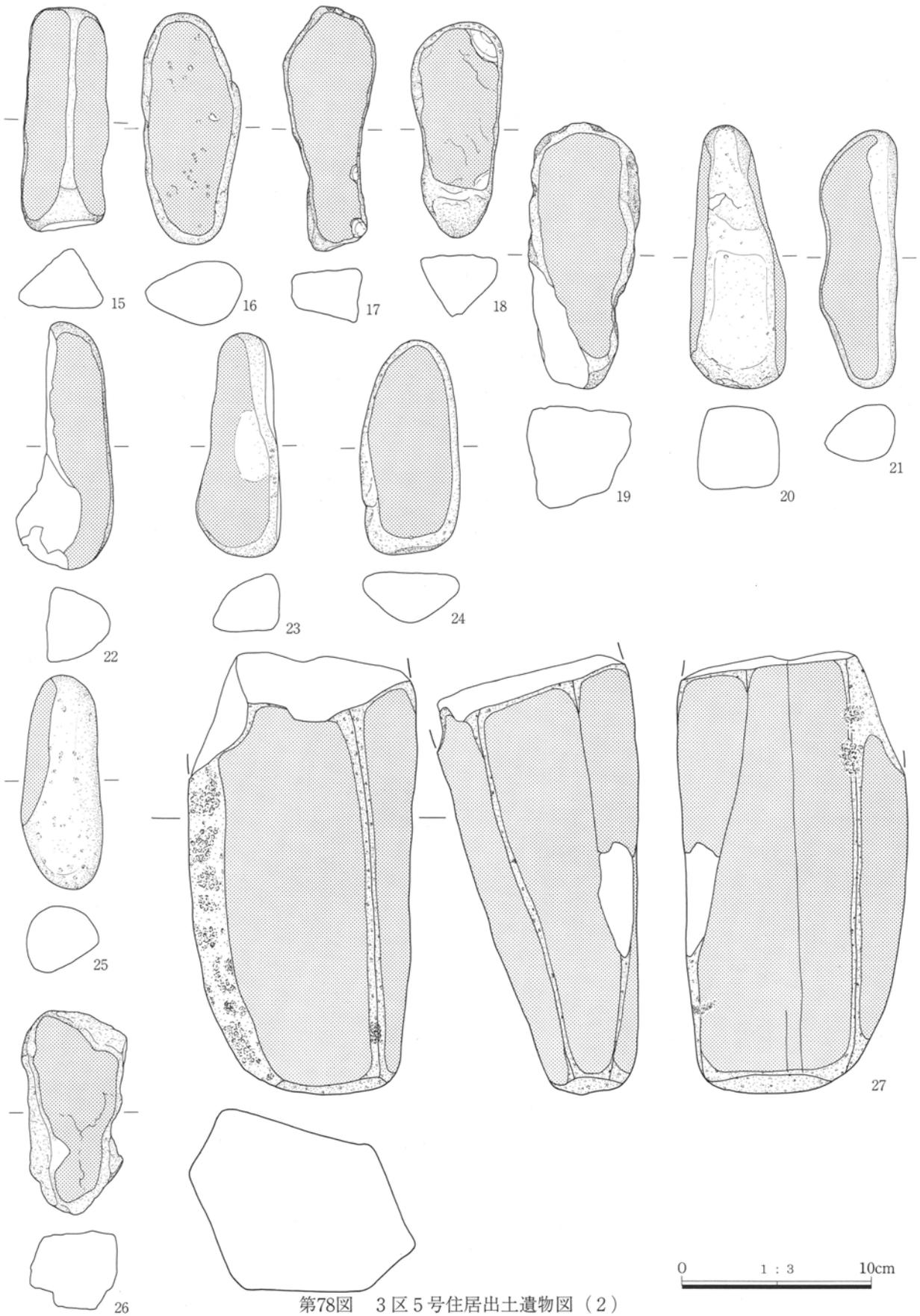
3区5号住居出土 鍛造剥片計測値

類	大きさ	厚さ	平均厚さ	出土総重量	1個の重量	個体数	割合
1	4.1mm以上	0.2～2.7mm	0.46mm	0.669g	0.0223g	30	1.3%
2	3.1～4.0mm	0.2～1.2mm	0.34mm	0.367g	0.0082g	50	2.1%
3	2.1～3.0mm	0.2～0.4mm	0.25mm	0.482g	0.0063g	76	3.3%
4	1.1～2.0mm	0.1～0.3mm	0.20mm	1.372g	0.0024g	539	23.2%
5	1mm以下	0.05～0.25mm	0.17mm	0.158g	0.00071g	1,630	70.1%

第4章 遺構と遺物

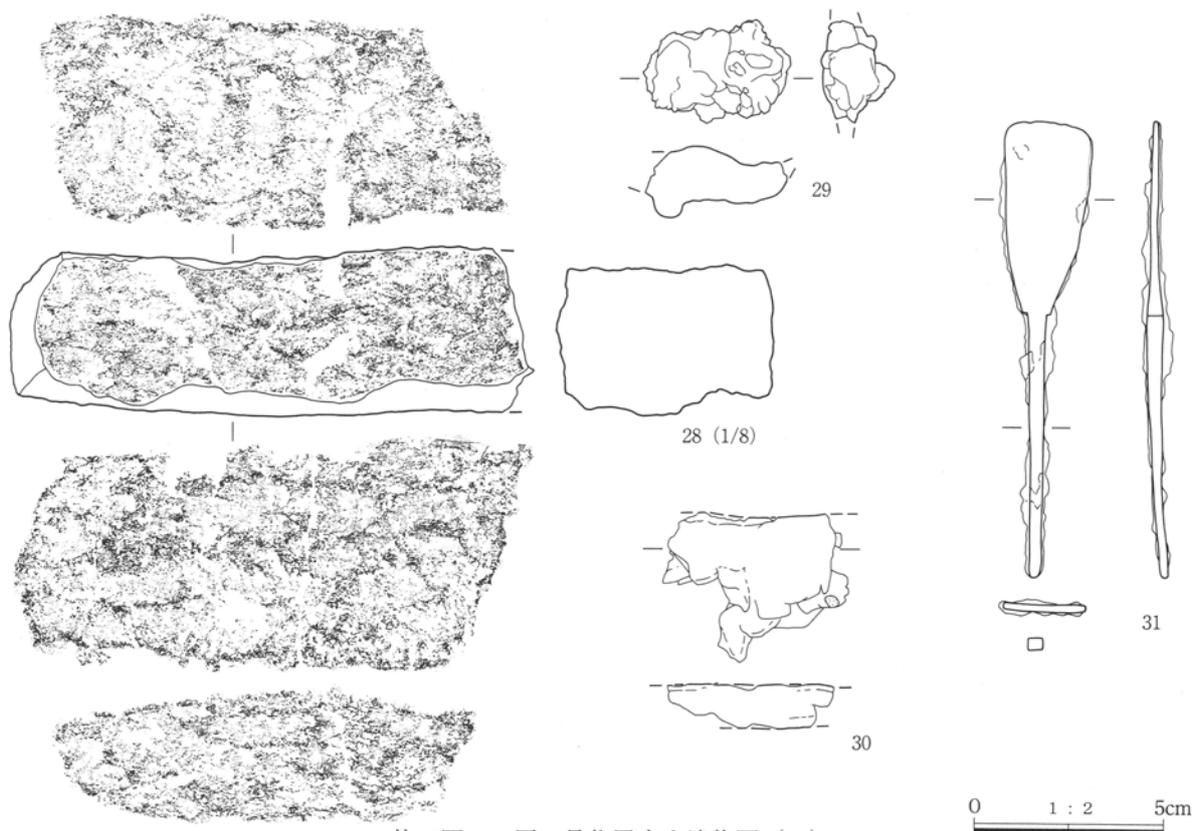


第77図 3区5号住居掘り方平面・断面図、出土遺物図(1)



第78图 3区5号住居出土遺物图(2)

第4章 遺構と遺物



第79図 3区5号住居出土遺物図(3)

3区5号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第77図 PL-43	土師器 坏	+35 ほぼ完形	口13 高4.1 底8.0	①砂粒 ②良好 ③橙色	口縁部が横ナデ。底部はヘラ削り。
2	第77図 PL-43	土師器 坏	床直 ほぼ完形	口14.7 高4.1 底8.0	①砂粒 ②良好 ③明赤褐色	口縁部上半が横ナデ。下半～底部はヘラ削りか。内面は斜放射状暗文。
3	第77図 PL-43	石製品 敲石か	床直	長14.4 幅6.8 厚4.0 重547.0g	粗粒輝石安山岩 (石材)	中央に打痕のある面が2面ある。
4	第77図 PL-43	棒状礫	床直	長13.3 幅6.0 厚3.5 重443.0g	粗粒輝石安山岩 (石材)	摩耗痕あり。
5	第77図 PL-43	棒状礫	埋土	長14.7 幅7.2 厚3.0 重548.0g	粗粒輝石安山岩 (石材)	摩耗痕あり。
6	第77図 PL-43	棒状礫	床直	長15.6 幅6.5 厚4.1 重677.0g	変質安山岩 (石材)	摩耗痕あり。
7	第77図 PL-43	棒状礫	床直	長14.0 幅5.9 厚3.8 重498.0g	粗粒輝石安山岩 (石材)	摩耗痕あり。
8	第77図 PL-43	棒状礫	床直	長14.3 幅6.1 厚3.2 重375.0g	粗粒輝石安山岩 (石材)	摩耗痕あり。
9	第77図 PL-43	棒状礫	床直	長12.6 幅6.4 厚3.5 重459.0g	石英閃緑岩 (石材)	摩耗痕あり。
10	第77図 PL-43	棒状礫	床直	長11.5 幅5.3 厚2.7 重229.0g	石英閃緑岩 (石材)	摩耗痕あり。
11	第77図 PL-43	棒状礫	床直	長14.3 幅6.0 厚3.9 重531.0g	変質安山岩 (石材)	摩耗痕あり。
12	第77図 PL-43	棒状礫	床直	長11.4 幅5.2 厚3.9 重376.0g	変質安山岩 (石材)	摩耗痕あり。
13	第77図 PL-43	棒状礫	+7	長14.8 幅6.4 厚3.4 重468.0g	粗粒輝石安山岩 (石材)	摩耗痕あり。
14	第77図 PL-43	棒状礫	床直	長13.7 幅5.7 厚3.8 重438.0g	変質安山岩 (石材)	摩耗痕あり。
15	第78図 PL-43	棒状礫	床直	長11.7 幅4.4 厚3.1 重244.0g	粗粒輝石安山岩 (石材)	摩耗痕あり。

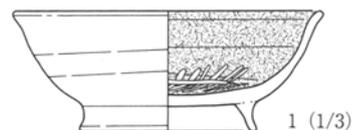
16	第78図 PL-43	石製品 砥石か	床直	長 12.2 幅 5.2 厚 3.4 重 278.0g	変質安山岩 (石材)	摩耗痕あり。
17	第78図 PL-43	棒状礫	床直	長 13.1 幅 4.8 厚 2.3 重 222.0g	粗粒輝石安山岩 (石材)	摩耗痕あり。
18	第78図 PL-43	棒状礫	床直	長 11.4 幅 4.8 厚 3.2 重 256.0g	粗粒輝石安山岩 (石材)	摩耗痕あり。
19	第78図 PL-44	棒状礫	+6	長 14.1 幅 5.8 厚 5.4 重 596.0g	粗粒輝石安山岩 (石材)	摩耗痕あり。
20	第78図 PL-44	棒状礫	床直	長 14.0 幅 5.0 厚 4.4 重 416.0g	変質安山岩 (石材)	摩耗痕あり。
21	第78図 PL-44	棒状礫	床直	長 13.6 幅 4.0 厚 2.9 重 272.0g	粗粒輝石安山岩 (石材)	摩耗痕あり。
22	第78図 PL-44	棒状礫	+16	長 13.1 幅 5.1 厚 3.9 重 287.0g	粗粒輝石安山岩 (石材)	摩耗痕あり。
23	第78図 PL-44	棒状礫	床直	長 11.9 幅 4.5 厚 3.0 重 266.0g	粗粒輝石安山岩 (石材)	摩耗痕あり。
24	第78図 PL-44	棒状礫	+14	長 11.1 幅 5.2 厚 2.6 重 246.0g	粗粒輝石安山岩 (石材)	摩耗痕あり。
25	第78図 PL-44	棒状礫	床直	長 11.4 幅 4.3 厚 3.3 重 253.0g	粗粒輝石安山岩 (石材)	摩耗痕あり。
26	第78図 PL-44	棒状礫	床直	長 10.7 幅 5.4 厚 4.1 重 347.0g	粗粒輝石安山岩 (石材)	摩耗痕あり。
27	第78図 PL-44	石製品 砥石	床直	長 23.2 幅 12.0 厚 10.5 重 3.80kg	粗粒輝石安山岩 (石材)	6面砥面。砥面はほぼ平坦。
28	第79図 PL-44	竈構築材	床直	長54.7 幅18.0 厚22.7 重23.06kg	二ツ岳石 (石材)	4面加工面、1面自然面、1面破面の二ツ岳石。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
29	第79図 PL-44	再結合滓	① 51.1 ② 3 ③ なし	埋土 長 4.1 幅 5.8 厚 2.9	一見、小型の碗形鍛冶滓のような外観を持つ再結合滓。上面は平坦ぎみで下面は碗形鍛冶滓に突出する。側面は全面破面。鍛造剥片や鍛冶滓片主体で、粒状滓も一部に含まれている。鍛造剥片には光沢を持つ薄手のものが目立つ。厚み方向は生きており、浅い窪みの中で再結合したものか。	
30	第79図 PL-44	鉄製品 (鍛造品) 板状不明	① 23.0 ② 5 ③ L(●)	+15 長 4.0 幅 4.9 厚 1.7	板状の鉄製品破片。上下面と側面のごく一部が生きており、芯部は中空となっている。すでに保存処理がなされており、はっきりした遺物名は不明。袋状鉄斧などの可能性あり。側部は大半が破面となる。	
31	第79図 PL-44	鉄製品 (鍛造品) 鎌	① 18.4 ② 4 ③ 特L(☆)	床直 長 12.0 幅 2.3 厚 0.4	薄手の方頭平根鎌である。刃部は薄手で、先端のみに刃を有する。関部に向かい、幅が狭くなり、やや厚みを増す。関は基部との間に段状を成す。基部断面は長方形。	

①重量(g)②磁着度③メタル度

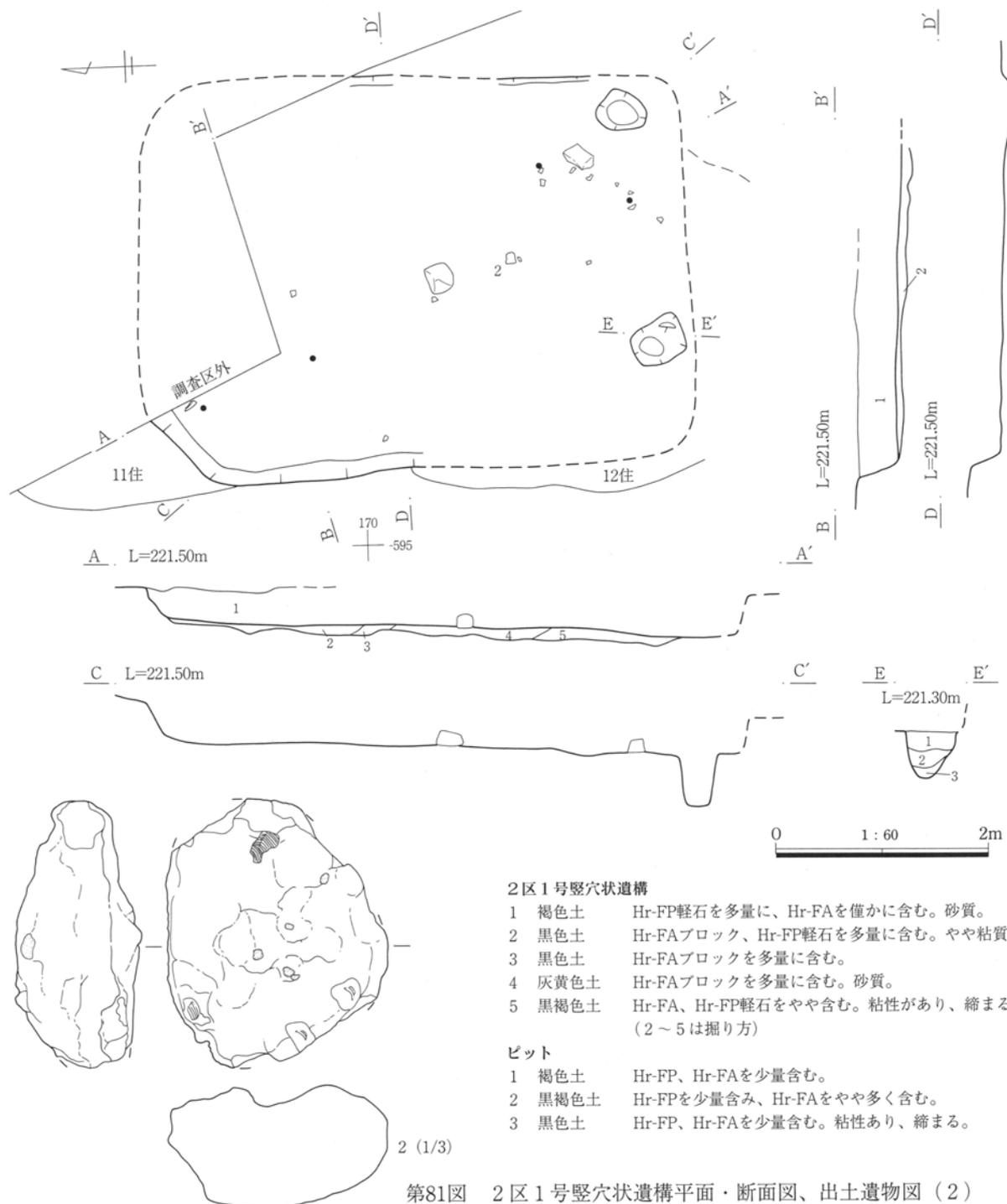
2区1号竪穴状遺構 (第80・81図、P L 15・44)

位置 170-595 方位 測定不可能 形状 長軸 (5.50) m・短軸3.64mで長軸を南北にもつ長方形である。面積 (19.98) m² 壁高 39cm 重複 11、12号住居と重複。1号竪穴状遺構が、11号住居を切り、12号住居に切られる調査所見を得た。床面 掘り方面から厚さ10cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。壁溝 確認できなかった。柱穴 床面から掘り込まれた柱穴の可能性のあるピットを住居の南壁際に2個を確認した。柱穴であれば調査区北壁際に2個確認される可能性がある。貯蔵穴 確認できなかった。竈 確認できなかった。遺物 床直から

碗形鍛冶滓、北西隅から黒色土器碗が出土した。実測可能な遺物が2個体ある。所見 本遺構は出土遺物から10世紀後半に比定される。



第80図 2区1号竪穴状遺構出土遺物図 (1)



2区1号竪穴状遺構出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第80図 PL-44	黒色土器 椀	+10 1/2	□(12.0) 高4.7 底6.8 高台7.0	①砂粒②酸化焙 ③におい黄橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。内面ミガキ、黒色処理。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
2	第81図 PL-44	椀形鍛冶滓 (特大、含 鉄)	①948.8 ②4 ③H(O)	床直 長12.6 幅10.4 厚5.9	完形に近い特大の椀形鍛冶滓。側部の3ヶ所に破面を持つ。上面は緩やかな波状で、下面は短軸方向に長手の椀形。側面や破面に浅い段を持つ。滓は緻密で比重が高い。	

①重量(g)②磁着度③メタル度

[2] 鍛冶関連遺構

諏訪ノ木VI遺跡1区では、鍛冶炉2基、土坑4基、谷部排滓場1地点の鍛冶に関する遺構が検出され、多量の鉄関連遺物が出土した。

1区は諏訪ノ木VI遺跡の南端に位置する。発掘調査開始の時点では、1区の地形は削平と埋め土により水平に整地され、南端にはU字溝内を流れる水路があった。1区の調査を開始すると、小河川により開析された埋没谷が検出された。埋没谷は幅20~30m、深さ4m程あり、傾斜角度は左岸が比較的緩やかで、右岸は垂直に近い。埋没谷の左岸が諏訪ノ木VI遺跡1区で、右岸が諏訪ノ木V遺跡3区となる。

1区で検出された鍛冶炉2基、土坑4基は、埋没谷の底面から1.5~2.5m高い南斜面で検出された。また、埋没谷の底部からは総量3,723点(319.4kg)もの鉄関連遺物が出土した。これらの遺物は鉄関連の生産作業に伴い廃棄された遺物であると判断されることから、遺物が大量に出土した埋没谷の底部を谷部排滓場とした。1区から出土した鉄関連遺物の99%(重量)は、谷部排滓場からの出土品である。

出土した鉄関連遺物については、その作業内容を明らかにするために、すべての遺物に対して外観的な検討を行い、遺物の名称をつけた上で分類し、磁着度、メタル度、重量を計測した。出土遺物を代表する遺物は構成図によって表し、一覧表作成と図化を行った。次いで分類を代表し、分析が必要と判断される遺物については、分析資料一覧表と分析資料詳細観察カードを作成した上で、金属学的調査を行った。鉄関連遺物の整理と分類作業は、たたら研究会委員 穴澤義功氏の指導を受けて行い、以下資料の検討は、津野 仁1993~1995『金山遺跡I~IV』(財団法人 栃木県文化振興事業団)、穴澤義功2005『鉄関連遺物の発掘調査から遺物整理・分析資料抽出への指針案』『鉄関連遺物の分析評価に関する研究報告』(社団法人 日本鉄鋼協会 社会鉄鋼工学会)などを参考に笹澤が行った。

鉄関連遺物の種類と整理方法については、以下の通りである。

椀形鍛冶滓 椀形鍛冶滓とは鍛冶炉中の赤熱した木炭層中や炉底部で、溶解した滓が椀形に固化したものを指し、鍛冶工程で排出される滓の大半を占めている。

本遺跡では椀形鍛冶滓を重量比により5分類した。資料が破片の場合には、残存1/2の椀形鍛冶滓の重さを2倍にするといったような操作をして、推定される完存時の重量比によって分類を行った。また、大型磁石(TAJIMA PUP-M)に強力に反応するものは含鉄に分類し、(小、含鉄)のように表記した。さらに付着物などで細分した。

磁着度は、「標準磁石」を用い、磁石と資料の反応単位により計測し、メタル度は文化財用の特殊金属探知器により評価した。メタル度は、資料中に残存する金属鉄の量を示す。

諏訪ノ木VI遺跡 椀形鍛冶滓 重量による分類基準

椀形鍛冶滓(特大)	1,000g以上
椀形鍛冶滓(大)	1,000g未満
椀形鍛冶滓(中)	500g未満
椀形鍛冶滓(小)	250g未満
椀形鍛冶滓(極小)	125g未満

鍛冶滓 本遺跡では椀形鍛冶滓や粒状滓、鍛造剥片などに分類出来ない不定形な塊状の滓を鍛冶滓とした。なお、鍛冶滓は鍛冶作業で排出される滓の総称を指すこともあり、椀形鍛冶滓や粒状滓、鍛造剥片も鍛冶滓の一種とされる場合もある。

鉄塊系遺物 鉄塊系遺物とは製鉄炉で作られた鉄塊や滓混じりの小鉄塊、あるいは鍛冶炉で滓分を分離した未鍛造の鉄塊を指し、前者を製錬鉄塊系遺物、後者を鍛冶鉄塊系遺物と呼んでいる。

再結合滓 再結合滓とは、製錬や鍛冶・ casting などの際に発生した滓片や粒状滓・鍛造剥片などの滓が、鉄錆・水分・圧縮などの影響により二次的に結合したものを指す。

第4章 遺構と遺物

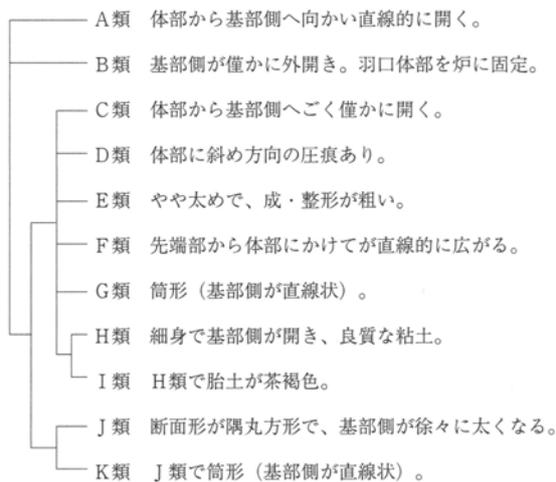
粘土質溶解物 粘土質溶解物とは、炉壁や羽口などが溶解した粘土質の遺物である。一部、ガラス質に滓化していることが多い。

羽口 羽口とは炉内に挿入して用いられる土製の送風管のことである。内外径の大小や、先端部や基部の形状、成・整形方法、胎土などの違いで様々なものがある。

本遺跡では体部の成・整形方法や胎土、外径など製作時の特徴で、A類からK類の11種類に分類した。A～K類の主な特徴はチャート図のとおりである。

A、B類は、スサを混入する共通の特色を有するが、それ以外に共通した特徴が見られず、それぞれ独立した特徴を有する。C～K類までは細身で、直線的、スサをほとんど混入しない緻密な胎土という共通の特徴を持つ。C～K類が本遺跡の代表的な羽口で、分類可能な羽口30.6kgの内、28.3kg (92%)を占める。さらに、C～I類は横断面形が円形でJ、K類は横断面形が隅丸方形という特徴で分類される。またC～G類の胎土が緻密であることに対して、H、I類はさらに緻密できめ細かい胎土を用いるという特徴で分類される。

羽口の分類 チャート図



鉄床石 鉄床石とは鍛打作業をする際、被加工物をのせる台石である。ハンマーストーンや鉄鎚とセットになる。

粒状滓 粒状滓とは鍛冶作業の際、赤熱した鉄素材の酸化を防止するために塗布された粘土汁などが滓化し

て、鍛打時に空中で球状になった微細遺物である。

粒状滓は鍛錬鍛冶工程の前半段階を示すものとされる。本遺跡では鍛冶作業の実体を明らかにするために、再結合滓から粒状滓を分離し⁽¹⁾、計測・統計処理をおこなった。

粒状滓は径の大きさ（篩い目）によって4種類に分類した。分類に際してはスケールルーペ（peak scale lupe 10×）を用いた⁽²⁾。各類とも30個のサンプルによって1個の重量を算出した。その後、各種の総重量を1個あたり重量で割り、それぞれの類の個体数を算出した⁽³⁾。

諏訪ノ木VI遺跡 粒状滓 直径による分類基準

1類	4.1mm以上
2類	3.1～4.0mm
3類	2.1～3.0mm
4類	2.0mm以下

鍛造剥片 鍛造剥片とは鉄塊や鉄板を加熱鍛打する際に鉄素材の表面から鉄中の不純物が薄い酸化皮膜として薄板状に剥離したものを指す。黒褐色から青銀色で光沢を持つものもある。長軸の長さは5mm以下が多く、厚さは0.1～2mm程度となり、鍛錬鍛冶段階を証明する有力な遺物の一つである。鍛造剥片の厚さは、工程の進行により厚いものから薄いものへ、色調も黒褐色から青みを帯びた色へと変化してゆく傾向がある⁽⁴⁾。

本遺跡では、鍛造剥片を大きさ（篩い目）によって5種類に分類した。分類に際しては、粒状滓と同じ手法で行った⁽⁵⁾。各類の厚さは、スタンドマイクロスコプ（peak stand microscope 75×）を使用して⁽⁶⁾、代表化したサンプル30点を計測した。

諏訪ノ木VI遺跡 鍛造剥片 大きさによる分類基準

1類	4.1mm以上
2類	3.1～4.0mm
3類	2.1～3.0mm
4類	1.1～2.0mm
5類	1.0mm以下



第82図 鍛冶関連遺構全体図

1号鍛冶炉（第83図、P L16）

1) 遺構

本遺構は118-577グリッド、1区南の谷部左岸の南斜面に位置する。

調査区は後世の攪乱が著しく、鍛冶炉の平面形は明かではない。鍛冶関連遺物の集中地点から焼土ブロックや部分的に還元した地山などが検出されたことなどから、その部分を鍛冶炉とした。鍛冶炉とした部分には長軸29.8×短軸18.9cm、最大深さ9.8cmの楕円形状の窪みがあり、炉の痕跡と判断した。その炉を中心に69～135cmの範囲に掘り方があり、残存厚さ10.1cmの埋め土（3～7層）を施している。炉は3層を掘り込んで構築されている。

炉の覆土1層には鍛冶滓が少量含まれていた。炉の南壁では、灰褐色に還元した土層が5.4cmの厚さで確認された。同様に還元した土は2層中の覆土内で、1～2cm程のブロック状で確認された。

地山となるHr-FA下の黒褐色土層は、湿気を帯びており、掘り方の構築後に埋め土（3～7層）を施すことによって湿気を避けようとしていた可能性も考えられる。また、2層中に含まれる還元したブロック状の土は、鍛冶炉内で熱を受け還元した土が崩れて入り込んだものと思われる。

2) 出土遺物

出土遺物はすべて鍛冶関連の遺物で、土器類は出土しなかった。鍛冶関連遺物は、総数158点（2,075.3g）、楕形鍛冶滓13点（754.9g、36%）、鍛冶滓102点（692.7g、33%）、鍛冶鉄塊系遺物1点（7g、0.3%）、鉄製品（未製品含む）2点（77.9g、4%）、再結合滓11点（33.3g、2%）、粘土質溶解物4点（68.9g、3%）、羽口12点（328.9g、16%）、鉄床石2点（52.1g、3%）などが出土した。

1. 楕形鍛冶滓 本遺構からは楕形鍛冶滓が、13点（754.9g）出土した。出土した楕形鍛冶滓は、楕形鍛冶滓（中）1点（96.3g、13%）、楕形鍛冶滓（小）4点（334.1g、44%）、楕形鍛冶滓（極小）8点（324.8g、43%）に分類できる。楕形鍛冶滓（特大）や楕形鍛冶滓（大）のものはなく、小型の

ものが主体となる。

滓の密度は、緻密なものが中心である。完形の楕形鍛冶滓（No.7）は、平面楕円形で、下面は船底形に突出する。

磁着度は2～6を測り、4～6が中心である。メタル度は、なし～特L（☆）で構成され、なし～錆化（△）が中心となる。

酸化土砂に覆われたものが多く、酸化土砂中に鍛造剥片や粒状滓が含まれるもの（No.12、13）があり、鍛造剥片は厚いものから極めて薄いものまでが確認できる。

2. 鍛冶滓 本遺構からは102点（692.7g、33%）の鍛冶滓が出土した。

鍛冶滓は丸みを持った小塊状のものが主体で、一部には放射割れや黒錆のにじみが確認できる。磁着度は3～5を測り、4～5が中心となる。メタル度は、なし～L（●）が確認され、偏りなく分布する。酸化土砂に覆われたものが多く、鍛冶滓の酸化土砂中に鍛造剥片を含むもの（No.10）や金属鉄を多く残す鍛冶滓（含鉄）類が出土した。

3. 鉄塊系遺物

本遺構からは鉄塊系遺物が1点（No.19）出土した。No.19は、平面、不整楕円形、長径2.0×短径1.6cm、厚さ1.8cmのごく小さな鍛冶鉄塊系遺物である。酸化土砂中には鍛造剥片を2点含む。内部には気孔が散在し、メタル部の集かが確認できない。メタル度は、M（◎）と低い。No.19は、自然科学分析を行った。

4. 鉄製品 本遺構からは角棒状の未製品（鍛造品、No.23）と、釘（鍛造品、No.24）2点の鉄製品が出土した。角棒状の未製品は、分厚い酸化土砂に覆われ、小型の刀の茎部の可能性が考えられる。釘は横断面3mm程度の頭部を残す小型のものである。断面形状は隅丸方形となる。

5. 再結合滓 本遺構で出土した再結合滓は11点（33.3g）と少量である。粉炭や鍛造剥片、微細な滓片を含み、鍛冶炉の周辺で鍛打作業が行われたこ

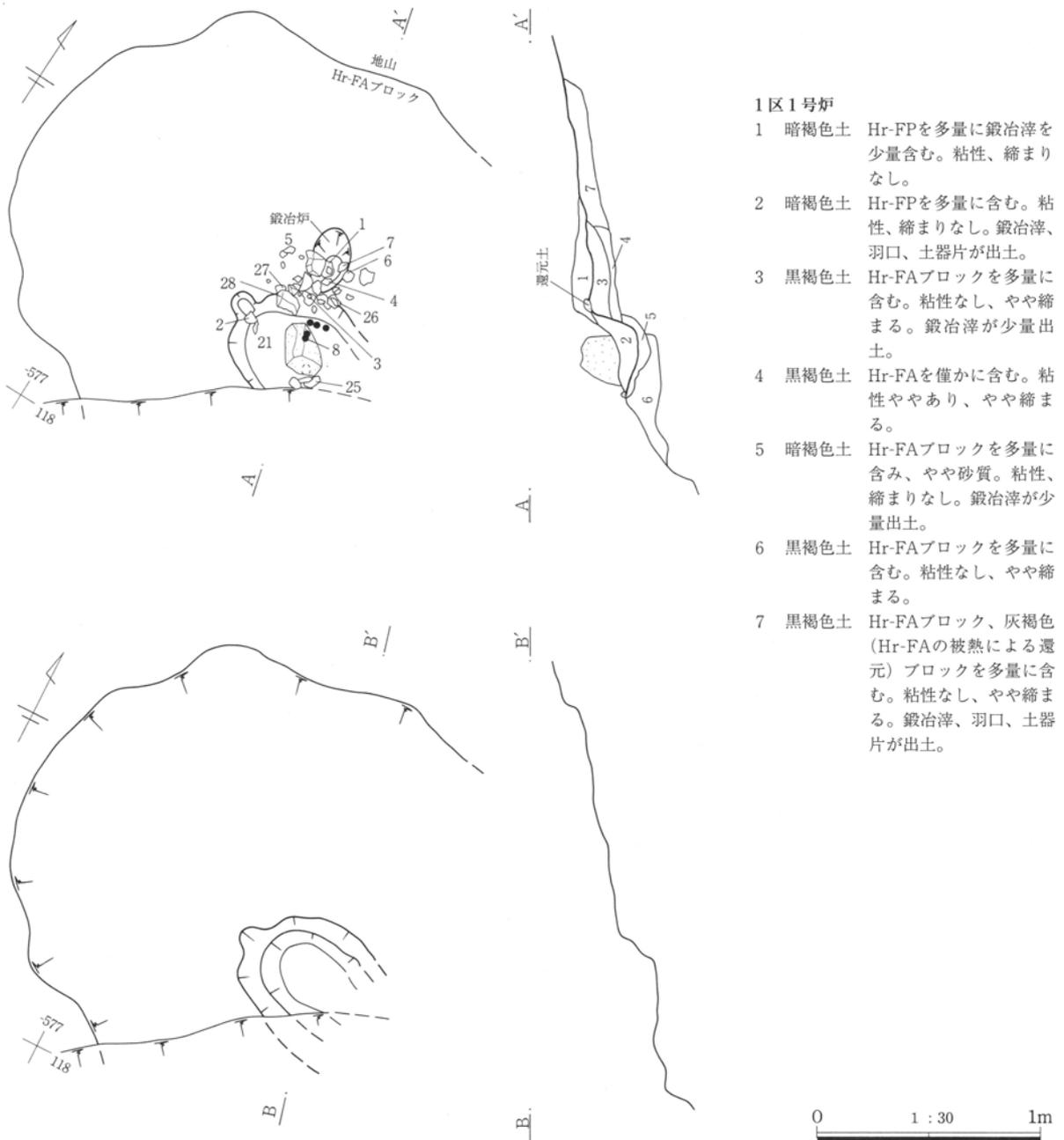
とを示唆している。

6. 粘土質溶解物 本遺構では、4点(68.9g)の粘土質溶解物が出土した。No.21は、やや椀形で、谷部排滓場で分類した羽口A類の頸部が溶解した可能性の高い粘土質溶解物である。軽石の半溶解物も確認できる。

7. 羽口 本遺構では、12点(328.9g)の羽口が出土した。いずれの羽口も先端部や体部の小破片で、

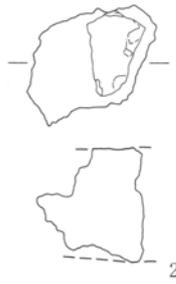
A類~K類に細分することは出来なかった。羽口内径は2.4~2.9cmを測る。

8. 鉄床石 本遺構では、2点(52.1g)の鉄床石の破片が出土した。いずれの石材も花崗岩で、表面に鍛造剥片や再結合滓が付着し、被熱痕のあるもの(No.28)も認められる。鉄床石の破片は本遺構周辺で鍛打作業が行われていたことを示唆する遺物である。

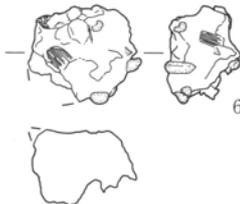
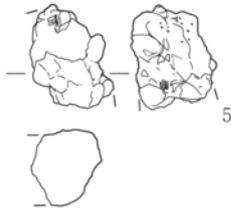


第83図 1号鍛冶炉平面・断面図

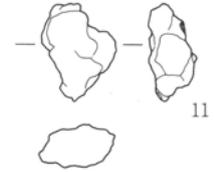
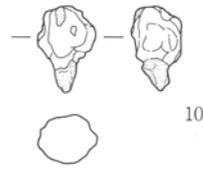
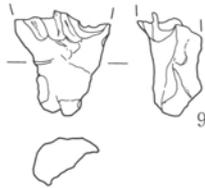
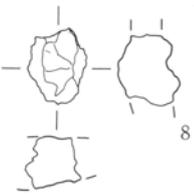
腕形鍛冶滓 (小)



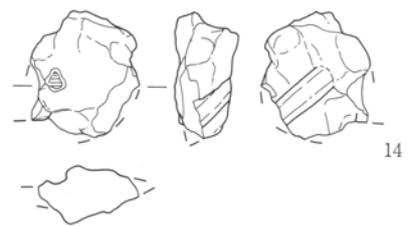
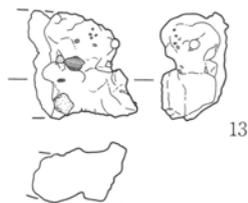
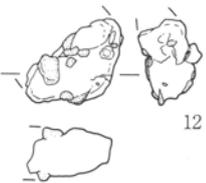
腕形鍛冶滓 (極小)



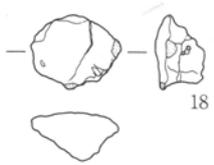
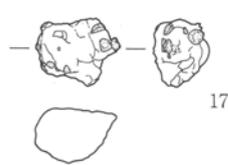
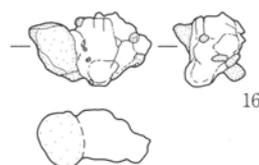
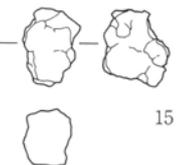
鍛冶滓



腕形鍛冶滓 (小、含鉄)



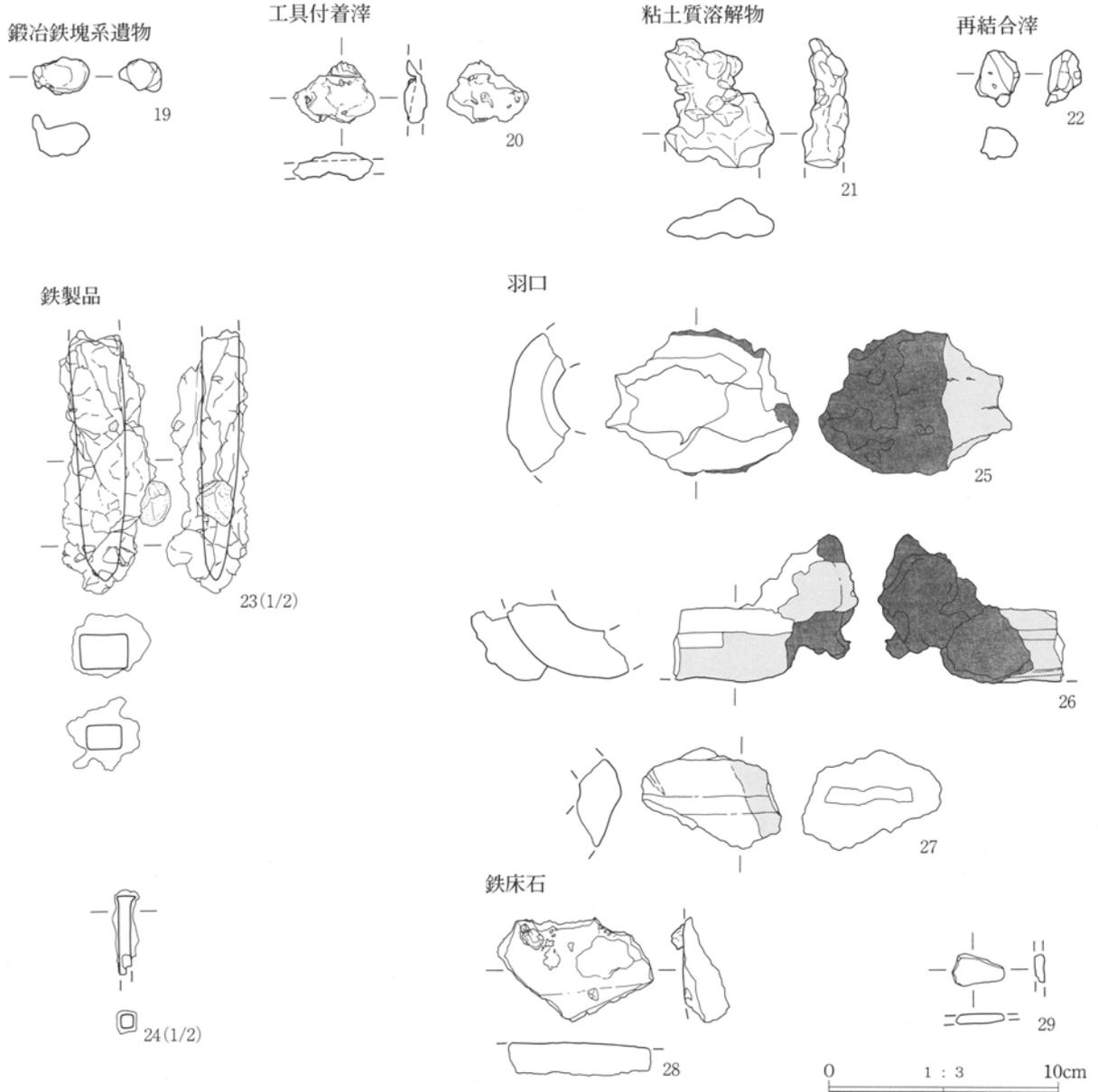
鍛冶滓 (含鉄)



0 1 : 3 10cm

第85図 1区1号鍛冶炉出土遺物図(1)

第4章 遺構と遺物



第86図 1区1号鍛冶炉出土遺物図(2)

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
1	椀形鍛冶滓(小)	1号鍛冶炉	6.2	4.4	3.1	94.5	4	なし	小型の椀形鍛冶滓の中核部から側部破片。側面3面はシャープな破面で、気孔の一部が上方に伸びる。下面は炉床土の剥離面。滓はやや緻密。
2	椀形鍛冶滓(小、含鉄)	1号鍛冶炉	4.4	5.0	4.5	96	5	錆化(△)	分析資料No.1 詳細観察表参照
3	椀形鍛冶滓(小)	1号鍛冶炉	4.6	6.7	3.7	102.5	2	なし	分析資料No.2 詳細観察表参照
4	椀形鍛冶滓(極小)	1号鍛冶炉	4.3	3.8	2.3	27.4	4	なし	やや扁平な極小の椀形鍛冶滓の肩部破片。上面から側面の一部には粘土質の滓が残る。気孔が中間層で発達する。滓自体の密度は低い。
5	椀形鍛冶滓(極小)	1号鍛冶炉	4.1	3.3	3.0	45.6	3	なし	極小の椀形鍛冶滓の肩部破片。側面2面がシャープな破面で、下半分の密度が高い。側面は青黒い光沢を持ち、やや二段きみとなる。原料投入の単位が二回に分かれるためか、下面の一部には炉床土の小片が固着する。
6	椀形鍛冶滓(極小)	1号鍛冶炉	3.8	4.4	3.0	36.8	3	なし	極小の椀形鍛冶滓の中核部から肩部にかけての破片。木炭痕や中間層の気孔の発達により側面の形状が乱れている。また軽石を含んだ酸化土砂も目立つ。

[2] 鍛冶関連遺構

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
7	椀形鍛冶滓 (極小)	1号鍛冶炉	6.2	4.0	2.5	69.5	3	なし	極小の完形に近い椀形鍛冶滓。平面形は楕円形で、下面は舟底状に突出する。滓の密度はやや高い。表面に薄く固着する酸化土砂中には、鍛造剥片がかなり含まれている。大きさや厚みはまちまちで、極めて薄いものも確認される。右側面に粒状滓も固着する。
8	鍛冶滓	1号鍛冶炉	3.1	2.3	2.8	16	3	なし	側面が破面に囲まれた鍛冶滓片。上下面は凹凸を持つが全体的には板状となる。微細な気孔が数多く、滓の緻密は低めとなる。極小の椀形鍛冶滓の中核部片の可能性もあり。
9	鍛冶滓	1号鍛冶炉	4.1	3.7	2.0	19.6	4	なし	不定形な鍛冶滓片。上手側の側面のみが破面で、下面の中央部が筋状に突出する。上面は平坦さみで、右側に向かいひだ状に広がる。滓の密度は低い。
10	鍛冶滓 (含鉄)	1号鍛冶炉	2.3	2.0	1.9	12.8	4	錆化 (△)	丸みを持った小塊状の含鉄の鍛冶滓。酸化土砂が厚く、1cm大の石片や、6mm大の黒色の鍛造剥片が含まれている。一部には放射割れや黒錆のにじみが確認される。
11	鍛冶滓 (含鉄)	1号鍛冶炉	3.9	2.9	1.7	15.6	4	錆化 (△)	酸化土砂に覆われた含鉄の鍛冶滓。上面はやや平坦さみで、下面は小さな椀形に突出する。下手側には放射割れが生じている。酸化土砂中には薄手の鍛造剥片が僅かに含まれている。
12	椀形鍛冶滓 (小、含鉄)	1号鍛冶炉	3.4	3.8	2.5	12	5	L (●)	酸化土砂に覆われた椀形鍛冶滓の側部破片。左側面が主破面。表面の酸化土砂中には多量の軽石が混じっている。また鍛冶滓片、粒状滓、木炭、鉄床石破片などが含まれている。放射割れが進む。
13	椀形鍛冶滓 (小、含鉄)	1号鍛冶炉	4.3	4.3	2.6	50	6	L (●)	8割方が酸化土砂に覆われた椀形鍛冶滓片。上面は短軸方向に大きく窪み、下手側の側面が破面となる。含鉄部の範囲が広い。酸化土砂中には粒状滓様の遺物が一点含まれている。
14	椀形鍛冶滓 (小、含鉄、羽口付き)	1号鍛冶炉	5.0	3.8	2.7	87	8	特L (☆)	含鉄の椀形鍛冶滓の中核部から側部破片。右側破面はV字状に突出し、鍛冶炉底面の工具痕を示すものか。左側部下手には羽口先端部の小片が遺存する。短軸側の両肩部は破面。含鉄部が広く下面の突出部は磁着が強い。
15	鍛冶滓 (含鉄)	1号鍛冶炉	3.1	2.3	2.6	20	5	M (◎)	分析資料No.3 詳細観察表参照
16	鍛冶滓 (含鉄)	1号鍛冶炉	2.9	4.7	2.8	23	4	M (◎)	放射割れの目立つ含鉄の鍛冶滓。表面には軽石や滓片を含む。酸化土砂が厚い。
17	鍛冶滓 (含鉄)	1号鍛冶炉	2.7	3.4	2.2	22	5	L (●)	酸化土砂に覆われた小塊状の鍛冶滓。上面は平坦気味で下面は突出する。左側部と短軸側の側面が破面の可能性が高い。酸化土砂中には滓片や鍛造剥片が含まれている。
18	含鉄鉄滓	1号鍛冶炉	2.9	3.4	1.9	22	4	L (●)	再結合滓に覆われた扁平な含鉄鉄滓。上面は平坦気味で下面は突出する。再結合滓中には、滓片に加えて粉末状の鍛造剥片が多量に含まれている。
19	鍛冶鉄塊系遺物	1号鍛冶炉	1.6	2.0	1.8	7	4	M (◎)	分析資料No.4 詳細観察表参照
20	工具付着滓	1号鍛冶炉	2.7	3.5	1.3	9	3	なし	上面に工具痕を残す扁平な工具痕付着滓。上下面が生きており、側面は全周が破面となる。左右方向に延びる工具痕は上手側が立ち上がる。現状の工具痕の幅は約2cmを測り、面は平坦となっている。下面は微細な木炭痕を残す滓層となる。極めて薄い鍛造剥片が固着している。
21	粘土質溶解物	1号鍛冶炉	5.6	4.7	2.0	37.4	5	なし	やや椀形となった粘土質溶解物。下手側の側面のみが破面で、上下面や側面は生きている。左側部が緩やかに窪み、右側部は立ち上がり急となる。上下面や側面共に不規則な窪みを持ち、軽石の半溶解物が多量に含まれている。下手右側の下面には鍛冶滓も確認される。A類の羽口先の頸部の滓か。
22	再結合滓	1号鍛冶炉	2.4	1.9	1.4	5.4	2	なし	酸化土砂に覆われた小塊状の再結合滓。粉炭や鍛造剥片に加えて微細な滓片を含み軽量である。左側部は破面の可能性あり。
23	鉄製品 (鍛造品) 未製品	1号鍛冶炉	7.0	1.5	1.3	59	5	L (●)	分厚い酸化土砂に覆われた角棒状の未製品。鉄部の長さは7.1cm、幅は上手側で1.4cm、下手側で1.1cmを測る。厚みは8~9mm。透過X線像では上手側が不規則に折れた様な形状を示し、下手側の端部は山形に成形されている。単純な角棒状ではなく、小型の刀の基部の未製品か。破片の可能性を持つ。
24	鉄製品 (鍛造品) 釘	1号鍛冶炉	2.5	0.7	0.7	19	2	錆化 (△)	頭部を残す小型の釘。側面が2片に割れており側部先端は欠落する。横断面径は3mm前後か。きれいな方形断面とはならず隅丸方形さみ。
25	羽口 (先端部)	1号鍛冶炉	8.3	6.3	2.7	109	5	なし	羽口先端部の半欠品。通風孔部の径は2.9cmを測る。外面は先端部から5.5cm程が滓化。溶損して表皮は紫紅色さみ。体部外面は還元色で青黒い。光沢面や銀色の光沢面となる。胎土は粘土質で微細なササや初殻の混和が確認される。
26	羽口 (先端部)	1号鍛冶炉	8.0	6.4	6.8	149	2	なし	先端部下面から頸部にかけて、不定形な鍛冶滓が固着した羽口先端部破片。胎土や被熱状態は構成No.25と似るが接合せず、別個体。先端部の左下が欠落したまま用いられたために破面も滓化している。通風孔部の径は現状で2.4cm以上を測る。外面は長軸方向に向かう削りとナデにより成・整形されている。頸部の滓の下面は炉壁の剥離痕となる。

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
27	羽口 (体部)	1号 鍛冶炉	6.1	4.4	2.0	31.7	1	なし	羽口の体部破片。僅かに通風孔部の壁面を残すが、径の算出は不可能。外面には軸方向に向う粗い削りとナデによる成・整形痕あり。外面右寄りには灰色に被熱し、僅かに滓が固着する。胎土は石粒や滓片に加えて細い繊維痕が確認される。
28	鉄床石	1号 鍛冶炉	4.6	6.8	2.5	49	1	なし	表面に鍛造剥片や再結合滓の固着した鉄床石破片。石材は花崗岩で全体に被熱している。上面が打面となり黒褐色の鍛造剥片が広く固着している。打面の一部にはねが生じて窪んでいる。下手側の肩部は緩やかな傾斜面で、はねが残される。側面や下面はシャープな破面となる。
29	鉄床石	1号 鍛冶炉	1.4	2.3	0.4	1.8	1	なし	厚さ3～5mmを測る鉄床石の表面破面。赤色に被熱しており、表面は荒れている。裏面には黒色の滓が僅かに固着する。石質は花崗岩質。

2号鍛冶炉 (第87図、P L17)

1) 遺構

本遺構は119-577グリッド、1号鍛冶炉の西約2mに位置する。調査ではドーナツ状に還元された被熱面が検出された。検出されたドーナツ状に還元された被熱面は外径18～23cm、内径11～13cmを測り、鍛冶炉の炉底部と考えられる。調査区は後世の攪乱が著しく鍛冶炉の炉底部以外、明瞭な遺構は確認できなかった。鍛冶関連の遺物は殆ど鍛冶炉の東側で出土した。

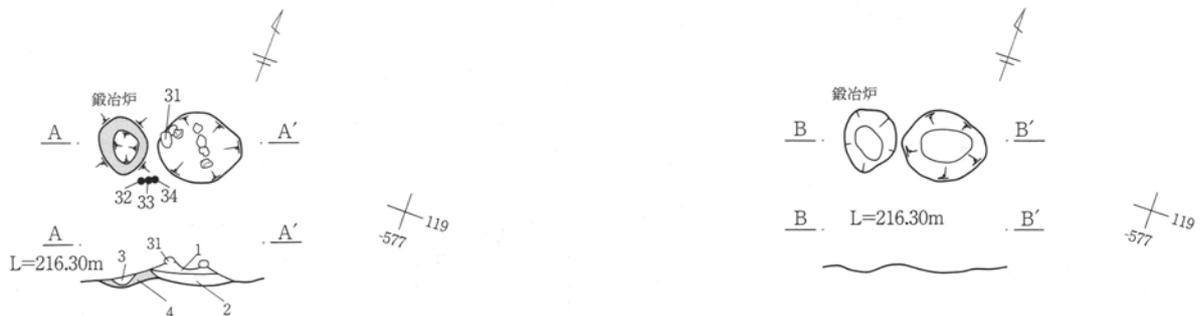
2) 出土遺物

出土遺物はすべて鍛冶関連の遺物で、土器類は出土しなかった。鍛冶関連遺物は、総数16点 (102.8

g)、鍛冶滓2点 (13.3g、13%)、再結合滓11点 (69.4g、68%)、自然石3点 (20.1g、19%) である。

1. 鍛冶滓 本遺構では2点 (13.3g) と、ごく僅かな鍛冶滓が出土した。No.30は薄く微細な鍛造剥片を多く含む酸化土砂に覆われており、鍛錬鍛冶工程が本遺構周辺で行われていたことを示唆する遺物である。

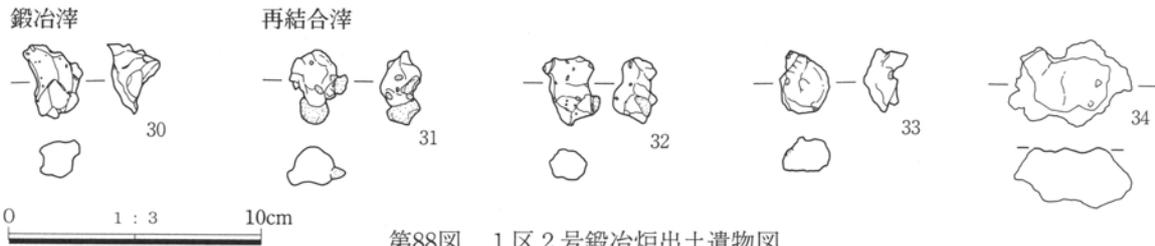
2. 再結合滓 本遺構から出土した再結合滓は11点 (69.4g) である。再結合滓は粉炭、鍛造剥片、微細な滓片を含み、鍛冶炉の周辺で鍛打工程が行われたことを示唆している。



1区2号炉

- 1 暗褐色土 Hr-FPを少量含む。鍛冶滓が出土。
- 2 黒褐色土 Hr-FAブロック、炭化物を少量含む。粘性強、締まりやや軟。
- 3 暗褐色土 Hr-FPを少量含む。粘性なし、締まり軟。鍛冶滓が出土。
- 4 黒褐色土 被熱により灰色に還元された土層。粘性、締まりなし。

第87図 1区2号鍛冶炉・掘り方 平面・断面図



第88図 1区2号鍛冶炉出土遺物図

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
30	鍛冶滓 (含鉄)	2号鍛冶炉	2.9	2.3	2.1	12	4	M (◎)	黒錆が吹き、鍛造剥片を多量に含む酸化土砂に覆われた鍛冶滓。右側部は放射割れから欠落した新しい破面となる。破面には錆化した鉄部と白色の酸化物が認められる。酸化土砂中の微細遺物は青黒い滓片や流動状の滓表皮も含まれているが、鍛造剥片が主体となる。厚みや色調はまちまち。
31	再結合滓	2号鍛冶炉	2.9	2.3	1.6	7.2	1	なし	酸化土砂に覆われた小塊状の再結合滓。下手寄りには軽石や火山噴出物とみられる石粒が固着する。鍛造剥片や滓片も含まれているが量はごく僅か。
32	再結合滓	2号鍛冶炉	2.7	2.3	1.8	7.3	2	なし	放射割れの目立つ小塊状の再結合滓。外面には軽石や鍛造剥片を含む酸化土砂が厚く固着する。内部に含鉄部を持つものか。
33	再結合滓	2号鍛冶炉	2.4	1.9	1.7	7.5	3	なし	前者と似た酸化土砂に覆われた再結合滓。小さな放射割れが生じ、表面の酸化土砂中には滓片や粉炭が含まれている。鍛造剥片が確認されるが、量は少なめ。
34	再結合滓	2号鍛冶炉	3.4	4.8	2.4	25.6	5	なし	分析資料No.11 詳細観察表参照

1号土坑 (第89図、P L17)

1) 遺構

本遺構は118-580グリッド、2号鍛冶炉の南西に位置する。2号土坑に接するが、切り合い関係は明かではない。

規模は、長軸75cm、推定短軸62cm、最大残存深さ28cmを測る。平面形は円形と推定され、底部は整っていない。

2) 出土遺物

出土遺物はほとんどなく、埋土に焼土粒、焼土ブロック、炭化物を多量に含む。

2号土坑 (第89図、P L17)

1) 遺構

本遺構は118-578グリッド、2号鍛冶炉の南西に位置する。1、3号土坑に接している。1号土坑との切り合い関係は明かではない。3号土坑とは重複し、2号土坑が3号土坑に切られる。

規模は、長軸68cm・短軸61cm・最大残存深さ16cmを測る。平面形はほぼ円形で、底部は平底と

なる。

2) 出土遺物

出土遺物はすべて鍛冶関連の遺物で、土器類は出土しなかった。明らかに2号土坑とわかる鍛冶関連遺物は35点 (668g) で、その他に2、3号土坑扱いの出土遺物として158点 (4,010.5g) の鍛冶関連遺物を取り上げられた。

明らかに2号土坑とわかる鍛冶関連の遺物35点 (668g) の内訳は、椀形鍛冶滓 (極小) 5点 (259g)、鍛冶滓29点 (344.8g)、粘土質溶解物1点 (64.2g) で、2、3号土坑出土遺物158点 (4,010.5g) の内訳は、椀形鍛冶滓 (中) 2点 (552g)、椀形鍛冶滓 (小) 3点 (378.1g)、椀形鍛冶滓 (極小) 22点 (754.3g)、鍛冶滓47点 (678.3g)、流動滓2点 (8.7g)、再結合滓51点、(320.5g)、粘土質溶解物12点 (83.5g)、被熱した自然石7点 (900.7g) である。

1. 椀形鍛冶滓 明らかに本遺構から出土した椀形鍛冶滓は、椀形鍛冶滓 (極小) 5点 (259g) である。椀形鍛冶滓5点中3点は鍛造剥片が付着してい

第4章 遺構と遺物

る。滓量の少ない工程の椀形鍛冶滓で、鍛造剥片が付着していることから、鍛錬鍛冶工程で発生したと推定される。

2. 鍛冶滓 明らかに本遺構から出土した鍛冶滓は、29点(344.8g)である。磁着度は2～5を測り、5が比較的多い。本遺跡内の鍛冶関連遺物で、磁着度5は大きめの数値となる。鍛冶滓のほとんどに、鍛造剥片が付着している。

3号土坑(第89図、P L17)

1) 遺構

本遺構は117-578グリッド、2号鍛冶炉南西に位置する。2号土坑と重複し、3号土坑が2号土坑を切る土層断面である。

規模は、推定長軸95cm、推定短軸85cm、最大残存深さ28cmを測る。平面形はほぼ円形で、底部は平底となる。

2) 出土遺物

出土遺物はすべて鍛冶関連の遺物で、土器類は出土しなかった。明らかに3号土坑とわかる鍛冶関連遺物は椀形鍛冶滓(中)1点(181g)と直径62～81cmの平面形状はほぼ円形の再結合滓で、その他に2、3号土坑からの出土遺物として158点(4,010.5g)の鍛冶関連遺物を取り上げられた。再結合滓は、粒状滓、鍛造剥片、微細な滓片から成る。

1. 椀形鍛冶滓 明らかに本遺構から出土した椀形鍛冶滓は、椀形鍛冶滓(中)1点(181g)である。椀形鍛冶滓(中)は、全体的に緻密で、肩部にのみ気孔が目立ち、大きさに比べ重量感がある。

2. 再結合滓 3号土坑から出土した再結合滓(No.60)は直径60～80cmの平面形が円形の大きな塊状で、粒状滓、鍛造剥片、微細な滓片から成り、鍛錬鍛冶工程で派生する微細遺物が廃棄された後に、3号土坑の底面で再結合したものである。

再結合滓中の粒状滓 再結合滓から分離した粒状滓を分類すると、径4.1mm以上の1類の割合が38.9%と最も多いものの、1類から4類までの粒状滓が混在していることが判明した。

1区3号土坑出土再結合滓内 粒状滓計測値

類	大きさ	出土総重量	1個の重量	個体数	割合
1	4.1mm以上	262.7g	0.3753g	723	38.9%
2	3.1～4.0mm	6.18g	0.1236g	524	27.8%
3	2.1～3.0mm	3.6g	0.018g	212	11.1%
4	2.0mm以下	2.8g	0.007g	443	22.2%

再結合滓中の鍛造剥片 再結合滓から分離した鍛造剥片は、4類36.7%、5類23.2%と、長軸の長さが2mm以下の小さなものが60%を占めるものの、1類から5類までの鍛造剥片が混在していることが判明した。

1区3号土坑出土再結合滓内 鍛造剥片計測値

類	大きさ	厚さ	平均厚さ	出土総重量	1個の重量	個体数	割合
1	4.1mm以上	0.2～2.7mm	0.367mm	8.6g	0.0287g	312	10.0%
2	3.1～4.0mm	0.2～1.2mm	0.325mm	2.5g	0.0083g	314	10.0%
3	2.1～3.0mm	0.2～0.4mm	0.30mm	4.3g	0.0067g	629	20.0%
4	1.1～2.0mm	0.1～0.3mm	0.286mm	2.3g	0.0021g	1,135	36.7%
5	1mm以下	0.05～0.25mm	0.229mm	0.6g	0.00086g	714	23.3%

4号土坑(第90図、P L17)

1) 遺構

本遺構は117-580グリッド、1号土坑の西に位置する。本遺構は他の遺構と重複せず単独で検出された。

規模は、長軸137cm、短軸125cm、最大残存深さ62cmを測る。平面形はほぼ円形である。底部は丸底で整っていない。

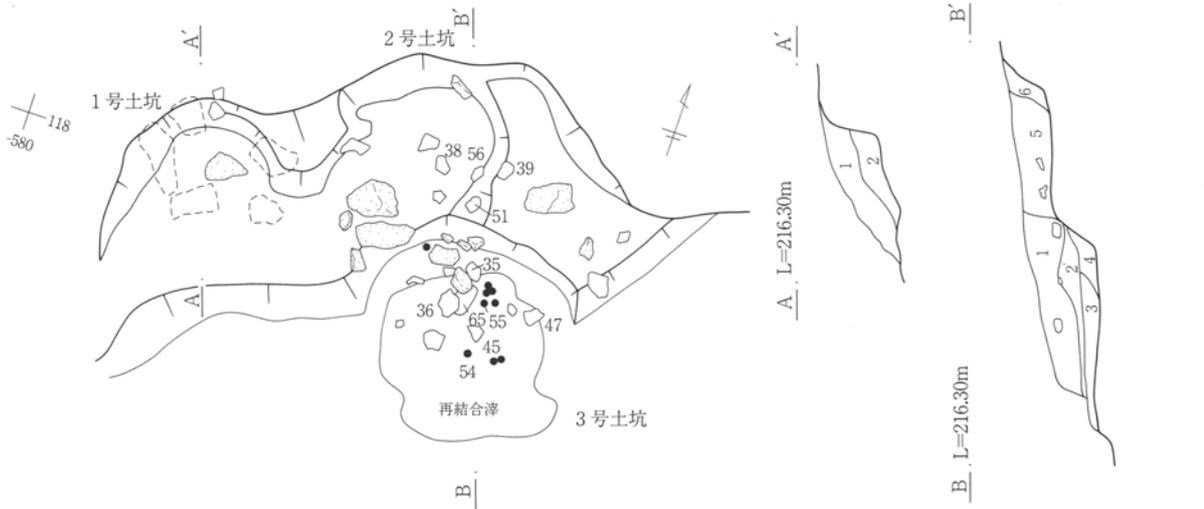
2) 出土遺物

出土遺物はすべて鍛冶関連の遺物で、土器類は出土しなかった。鍛冶関連の遺物は総数2点(268.5g)のみで、椀形鍛冶滓(中)1点(257g、96%)、再結合滓1点(11.5g、4%)となる。

1. 椀形鍛冶滓 本遺構出土の椀形鍛冶滓は、(中)257g1点である。滓は重量感があり、全体的に緻密で、肩部にのみ気孔が目立つ。

2. 再結合滓 本遺構から再結合滓11.5g1点が出土した。再結合滓は鍛造剥片が主体で、中厚から薄手のものまでを含んでいる。

[2] 鍛冶関連遺構



1区1号土坑

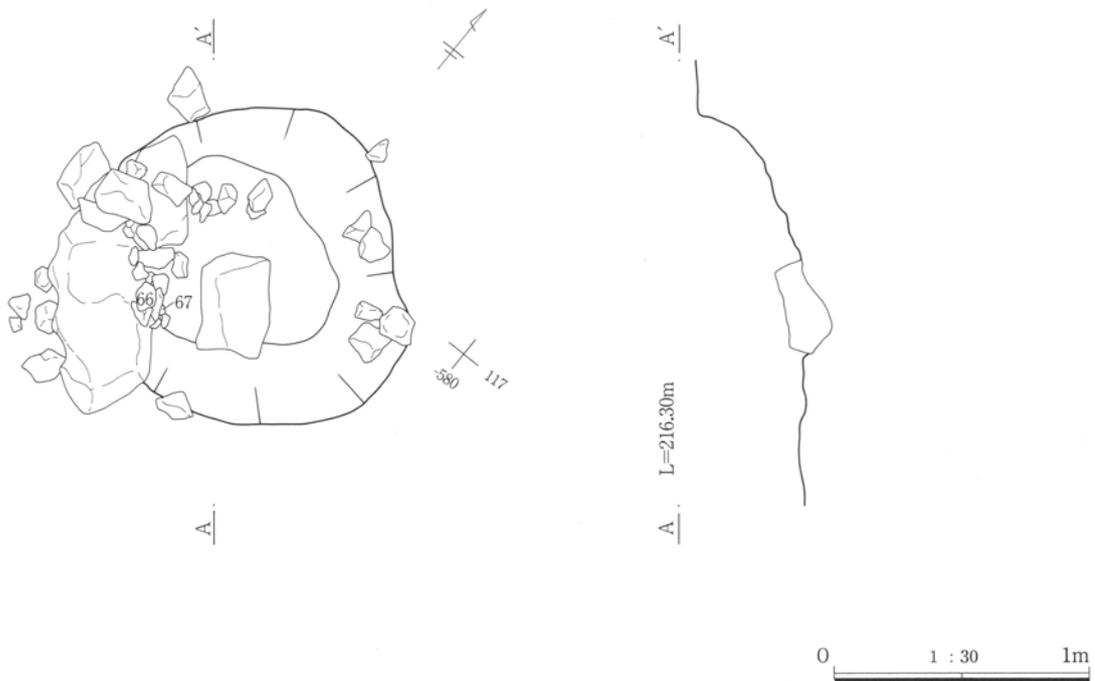
- 1 暗褐色土 焼土ブロックを多量に含む。粘性強、締まり軟。
- 2 黒褐色土 焼土粒を少量含む。

1区2・3号土坑

- 1 暗褐色土 Hr-FPを少量、炭化物、鍛冶滓、鍛造剥片を多量に含む。粘性やや強、締まり軟、やや砂質。
- 2 黄褐色 再結合滓。微細な鍛冶滓、鍛造剥片などが層状に再結合した土層。2層と3層の間に薄い暗褐色砂質土を挟み、3層とは不連続。
- 3 黄褐色 再結合滓。微細な鍛冶滓、鍛造剥片などが層状に再結合した土層。
- 4 暗褐色土 砂質。締まりなく、粘性強。鍛造剥片が多量に出土。
- 5 暗褐色土 Hr-FP、焼土粒、炭化物を含む。粘性やや強、締まりなし。鍛冶滓、鍛造剥片が少量出土。
- 6 黒褐色土 Hr-FA下の黒色ブロックを多量に含む。鍛造剥片が少量出土。

0 1 : 30 1m

第89図 1区1～3号土坑平面・断面図

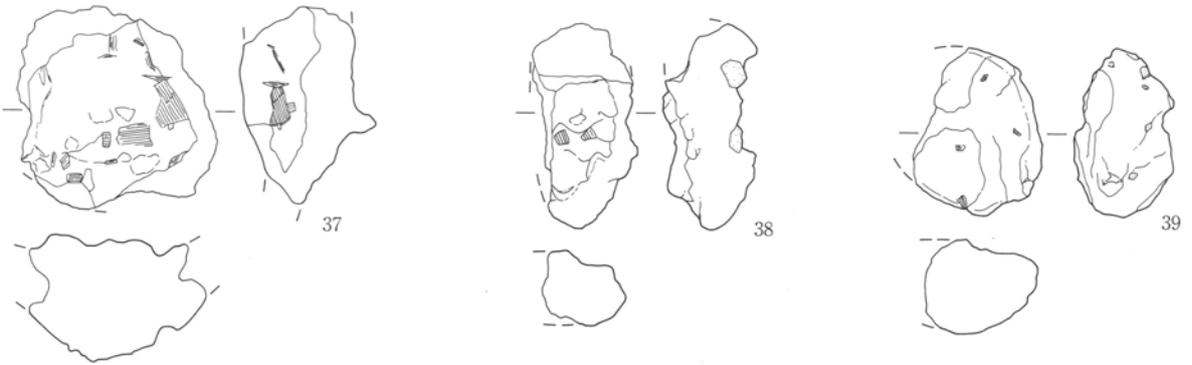


第90図 1区4号土坑平面・断面図

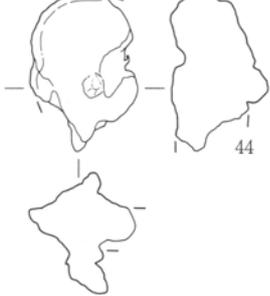
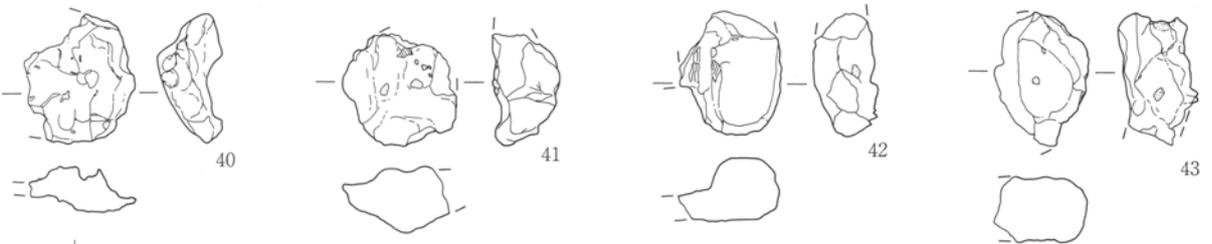
腕形鍛冶滓 (中)



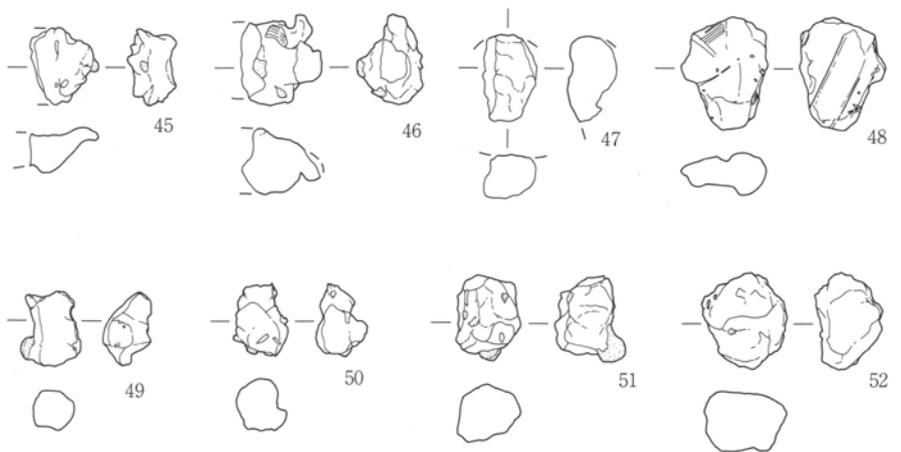
腕形鍛冶滓 (小)



腕形鍛冶滓 (極小)



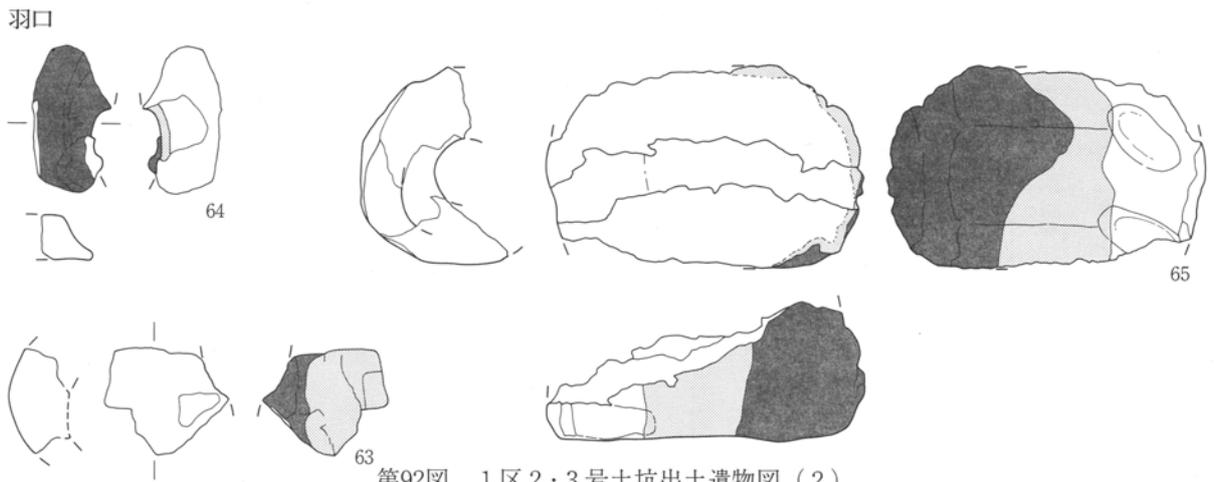
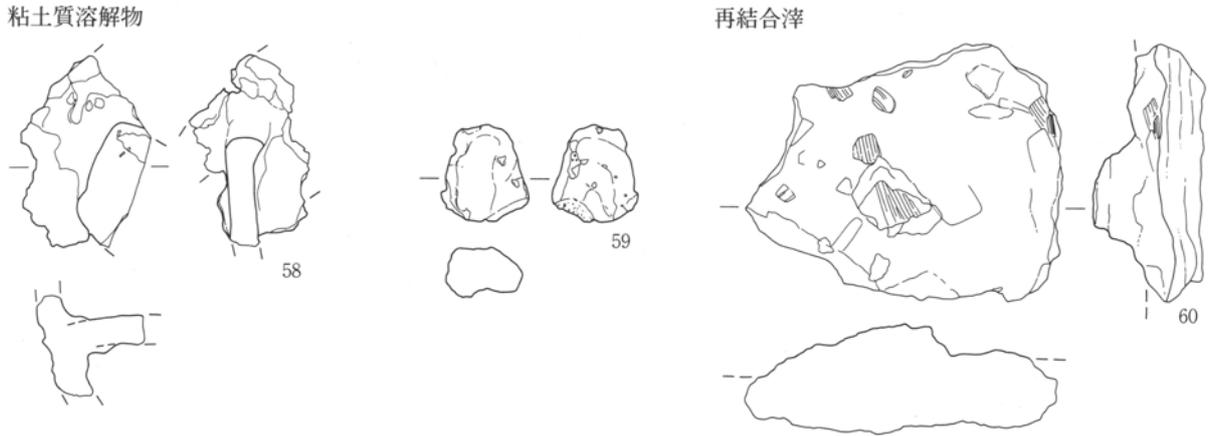
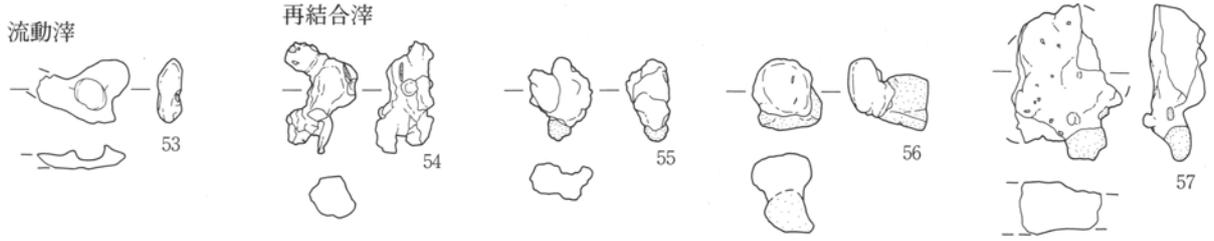
鍛冶滓



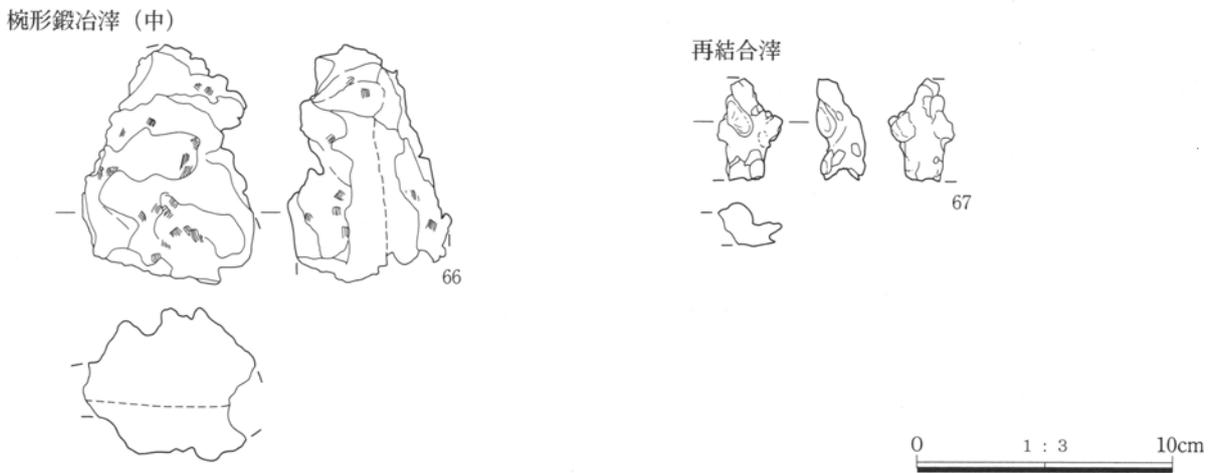
0 1 : 3 10cm

第91図 1区2・3号土坑出土遺物図(1)

[2] 鍛冶関連遺構



第92図 1区2・3号土坑出土遺物図(2)



第93図 1区4号土坑出土遺物図

第4章 遺構と遺物

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
35	腕形鍛冶滓 (中)	2・3号土坑	5.7	7.2	5.5	121	2	なし	中型の腕形鍛冶滓の肩部破片。右側面は緩やかに傾斜した腕形鍛冶滓の底面から側面で、灰色の炉床土が薄く固着する。左側と下手側はシャープな破面となる。上面は緩やかな皿状で、瘤状に酸化土砂や軽石が固着している。滓は全体に緻密で、肩部のみ気孔が目立つ。酸化土砂中に鍛造剥片あり。
36	腕形鍛冶滓 (中、含鉄)	2・3号土坑	9.6	11.4	5.3	431	5	錆化 (△)	分析資料No.7 詳細観察表参照
37	腕形鍛冶滓 (小)	2・3号土坑	8.0	7.9	5.4	215	2	なし	木炭片を多量にかみこんだややガス質の腕形鍛冶滓。上下面が生きており、肩部は全周に渡り欠落する。木炭には針葉樹材と広葉樹材が混在するが後者が主体。下面は全面が炉床土の剥離面で、手前寄りに低い突出部を持つ。炉床の傷を写したものであろう。
38	腕形鍛冶滓 (小、含鉄)	2・3号土坑	8.1	4.2	3.8	118	5	L (●)	分析資料No.8 詳細観察表参照
39	腕形鍛冶滓 (小、含鉄、鍛造剥片付き)	2・3号土坑	6.7	5.0	3.9	181	5	L (●)	分析資料No.10 詳細観察表参照
40	腕形鍛冶滓 (極小)	2号土坑	5.1	4.4	1.9	34.6	3	なし	極小の腕形鍛冶滓。上手側の側面が主破面で、肩部にも小破面が点在する。滓は密度が低く、上下面はきれいな腕形にはならない。下面の上手寄りには僅かに腕形となり、表面には灰色の炉床土が斑点状に固着する。滓量の少ないおりの腕形鍛冶滓である。
41	腕形鍛冶滓 (極小)	2・3号土坑	4.3	4.5	4.6	39.4	4	なし	茶褐色の酸化土砂に覆われた極小の腕形鍛冶滓。短軸側の肩部に小破面を持つ以外はほぼ完形となる。全体に上手右寄りが厚く、左側が薄くなっている。表面の酸化土砂中には僅かに鍛造剥片が散見する。
42	腕形鍛冶滓 (極小、含鉄)	2号土坑	4.8	4.0	2.5	45.4	6	錆化 (△)	平面、不整楕円形をした極小の腕形鍛冶滓片。上下面が生きており、上手側と左側面が破面となる。底面は浅い皿状で、灰色の炉床土が点々と固着する。左側の肩部は直線状に途切れており、木炭痕の可能性を持つ。部分的に放射割れを生じ、酸化土砂中にも鍛造剥片が含まれている。
43	腕形鍛冶滓 (極小、含鉄)	2号土坑	5.3	3.6	3.2	57.9	5	錆化 (△)	薄い酸化土砂に覆われた極小の腕形鍛冶滓または小型の腕形鍛冶滓の肩部破片。上下面は皿状で、側面の立ち上がり強い。含鉄部は手前側の中核部。酸化土砂中には青光りする鍛造剥片を含んでいる。
44	腕形鍛冶滓 (極小、含鉄、鍛造剥片付き)	2号土坑	6.1	4.2	5.0	84.7	5	H (○)	分析資料No.5 詳細観察表参照
45	鍛冶滓	2・3号土坑	3.0	2.7	1.9	9.3	2	なし	左側面が破面となった鍛冶滓片。上面の一部と下面に突出する滓部は粘土質で、もとの滓量の少なさを窺わせる。破面は緻密で錆色が強い。酸化土砂中には僅かな鍛造剥片を含む。
46	鍛冶滓	2号土坑	3.6	3.2	2.6	26	2	なし	木炭痕や小さな凹凸が目立つ鍛冶滓片。左側部と右中央部の突出部の一部が破面となる。木炭痕は1cm大以下で滓の突出部は木炭の隙間で形成されている。表面の酸化土砂中には粉末状の鍛造剥片を含む。
47	鍛冶滓	2号土坑	3.5	2.2	2.1	17.7	3	なし	左側面が主破面となった、小さくまとまった鍛冶滓片。右側面から上手側の肩部が破面となる。下面は強い腕形で、立ち上がりは急。滓はやや緻密が低く、かすかに放射割れが生じてる。
48	鍛冶滓 (工具痕付き)	2・3号土坑	4.4	3.4	1.7	23.4	4	なし	流動状の鍛冶滓。半流動状で内部には中小の気孔が目立つ。表皮の一部は紫紅色で地は黒色の滓となる。下面には短軸方向に向かう幅1.2cm程の角棒状の工具痕を残す。工具痕は2単位が重層し、同じ場所を突いていることがわかる。
49	鍛冶滓 (含鉄)	2号土坑	2.9	2.4	1.9	15.2	5	錆化 (△)	不定形小塊状の含鉄の鍛冶滓。上手には2ヶ所の突出部を持ち、下手側は抉られたような滓の自然面となる。酸化土砂に囲まれているが磁着は強めで、鉄部主体の鍛冶滓か。表面の酸化土砂中には鍛造剥片が確認できる。
50	鍛冶滓 (含鉄)	2・3号土坑	2.8	2.0	2.1	13.6	5	錆化 (△)	再結合滓に覆われた含鉄の鍛冶滓。表面には滓部が全く確認できないが、磁着傾向は構成No.49と類似する。表面の再結合滓中には多量の滓片や鍛造剥片を含んでいる。一部に工具付着滓の可能性を持つ薄手の滓も認められる。
51	鍛冶滓 (含鉄)	2・3号土坑	3.3	2.5	2.7	20.4	5	錆化 (△)	再結合滓に覆われた小塊状の含鉄の鍛冶滓。下面を中心に放射割れが強く、磁着傾向も上面より下面の方が強い。再結合滓中には多量の滓片や鍛造剥片に加えて粉炭も目立つ。鍛造剥片が極めて薄いことも特色である。

[2] 鍛冶関連遺構

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
52	鍛冶滓 (含鉄)	2号土坑	3.2	3.8	2.6	41.5	4	錆化(△)	分析資料No.6 詳細観察表参照
53	流動滓	2・3号土坑	2.5	3.6	0.9	6.9	2	なし	扁平な流動滓片。左手が破面で右側は二又に分かれている。上面中央部の窪みは大型の気孔痕。下面には粉炭痕がまばらに残る。鍛冶滓の流動滓か。
54	再結合滓	2・3号土坑	4.4	2.8	1.9	14.1	2	なし	扁平な滓片を含む再結合滓。典型的な再結合滓で、粒状滓や鍛造剥片に加えて、滓片や粉炭も多量に含まれている。側面から見ると、上下方向に層状に見え、種類の異なった遺物を含む再結合滓であることがわかる。
55	再結合滓	2・3号土坑	3.3	2.5	1.5	8.1	2	なし	やや扁平で小振りの再結合滓。外周部には軽石を含む酸化土砂が瘤状に突出している。再結合滓部は粉炭や鍛造剥片が主体で、下面側は粉末状の鍛造剥片が目立つ。
56	再結合滓 (含鉄)	2・3号土坑	2.8	2.7	3.1	18.3	5	錆化(△)	扁平な塊状の再結合滓。下面の手前寄りには2cm大の軽石が固着している。表面の酸化土砂中には鍛造剥片が目立つ。形状や磁着の強さから含鉄の鍛冶滓の可能性も残されている。
57	再結合滓 (含鉄)	2・3号土坑	6.1	3.9	2.1	45.1	5	錆化(△)	表面が鍛造剥片を含む再結合滓。上下面は平坦なもので、左右の側面は破面となっている。側面から下面を中心に放射割れも生じている。再結合滓中には滓片や粉炭に加えて1.5mm大の粒状滓や、光沢を持った鍛造剥片から黒色の鍛造剥片まで、種々のものが極めて多量に含まれている。
58	粘土質溶解物 (土器付き)	2号土坑	7.5	5.1	4.7	64	1	なし	側面に厚さ1cm前後の土器片をかみこんだ粘土質溶解物。滓化した部分は黒色ガラス質で、左側面下手側一部は灰白色に発泡している。羽口先の部分が滓化したものか。かみこんでいる土器片は須恵質で、もとの外面が上面となり、内面が下面となっている。本来の内面には横方向のナデが連続して残されている。表面が灰軸状にガラス化しているが、本来のものかどうか不明。瓶の体部下端の破片か。
59	粘土質溶解物	2号土坑	3.8	3.4	1.9	23.5	2	なし	上面が黒色ガラス質滓となった粘土質溶解物。左側面が小破面となり、それ以外の面は生きている。側面は立ち上がり急で、粘りの強い粘土質の滓部が垂れ落ち気味となる。下面は一見して鍛冶滓を思わせる質感で、粉炭痕に覆われている。内部に軽石を含んでいるかもしれない。ガラス質の滓部は微細な気孔を持つ。
60	再結合滓	3号土坑	10.1	12.2	4.4	371.0	3	なし	分析資料No.20 詳細観察表参照
61	粒状滓	3号土坑	-	-	-	-	-	なし	分析資料No.22 詳細観察表参照
62	鍛造剥片	3号土坑	-	-	-	-	-	なし	分析資料No.23 詳細観察表参照
63	羽口 (先端部)	2・3号土坑	4.9	4.2	2.3	28.9	2	なし	羽口先端部の小片。羽口の肉厚は2.2cm前後で先端部はやや平坦なみに溶損し、体部との境の部分の3.2cm程が発泡なみに滓化している。体部外面は長軸方向に向かう削り痕が残る。胎土はスサと初殻を含むもので、やや粘土質となる。
64	羽口 (先端部)	2・3号土坑	3.9	5.9	1.9	36.2	1	なし	砂質の胎土を用いた羽口先端部破片。先端部は斜め上に向かいきれいに溶損して、通風孔部の壁面沿いが突出する。顎部にかけては黒色ガラス質の滓が粒状に固着する。体部外面は灰色の発泡状態となる。通風孔部の径は2.1cmを測る。胎土は砂質で石英質の粒子や角閃石を多量に含む。
65	羽口 (鍛冶)	2・3号土坑	12.3	11.0	5.5	267.0	3	なし	分析資料No.9 詳細観察表参照
66	椀形鍛冶滓 (中)	4号土坑	9.5	6.7	6.4	257.0	3	なし	側面から下面が粉炭痕に覆われた中型の椀形鍛冶滓。二段椀形鍛冶滓なみに、中間層に隙間を持っている。上面は中央部が左右方向に窪み、全体に半流動状の滓部となっている。上下面、側面とも定形の椀形鍛冶滓とはならない。密度は低め。
67	再結合滓 (含鉄)	4号土坑	4.0	2.6	1.9	11.5	5	錆化(△)	大振りの滓片や鍛造剥片主体の再結合滓。含鉄部は僅かですべて完全に錆化している。滓は流動状のものが目立つ。鍛造剥片は青黒く、中厚なものから青光りする薄手のものまでを含んでいる。

第4章 遺構と遺物

谷部排滓場（第82図、P L 18・19）

1) 遺構

谷部排滓場は、1区南端の埋没谷の左岸から底部に広がる。谷部は平成13年度に東側、平成14年度に西側が調査された。平成13年度に行った東側のトレンチ調査では遺物が検出されなかったものの、平成14年に行った1区西側の調査では大量の椀形鍛冶滓、羽口を中心とする鍛冶関連遺物が出土した。そのため平成14年度は、全面調査に切り替えて調査範囲を広げ、遺物を取り上げた。

鍛冶関連遺物の総数（総重量）は3,723点（319.4kg）に上る。鍛冶関連遺物以外には土師器坏6点、甕2点、須恵器坏2点、椀3点、蓋1点、皿1点、高坏1点、木製品10点が出土した。出土土器は、概ね8世紀中頃に集中し、9世紀代のものまで含む。

これらの遺物は全て谷部排滓場の土層断面第6層中から出土した。6層より下の7～9層からは遺物が出土しなかった。6～9層で埋没した谷は、後世に3～5層さらに1、2層で埋没している谷に開析されている。

2) 出土遺物

谷部排滓場からは鉄関連遺物3,723点（319.4kg）、土器16点、木製品11点が出土した。

鉄関連遺物はすべて鍛冶に関連するもので、椀形鍛冶滓2,188点（252.05kg、81%）、鍛冶滓519点（5.38kg、2%）、再結合滓2点（0.52kg、0.2%）、炉壁6点（0.54kg、0.2%）、粘土質溶解物246点（5.13kg、1.6%）、流動滓4点（0.12kg、1%）、羽口322点（46.23kg、15%）、鉄製品3点（0.15kg、0.04%）、鉄床石、砥石、木炭などに分類される。

1. 椀形鍛冶滓 本遺構からは2,188点（252.05kg）の椀形鍛冶滓が出土した。出土した鍛冶関連遺物の81%は椀形鍛冶滓である。椀形鍛冶滓は、椀形鍛冶滓（特大）6点（7.4kg、3%）、椀形鍛冶滓（大）91点（49.3kg、20%）、椀形鍛冶滓（中）340点（85.9kg、34%）、椀形鍛冶滓（小）451点（52.3kg、20%）、椀形鍛冶滓（極小）1,300点（57.1kg、23%）に分類された。

椀形鍛冶滓の磁着度は1～9を測り、2～3が69%を占める。メタル度は、なし～L（●）を測り、なしが81%である。

谷部排滓場出土椀形鍛冶滓 磁着度一覧表

磁着度	重量（g）	割合
1	10,343.1	4%
2	82,543.0	32%
3	96,792.3	37%
4	41,256.6	16%
5	18,472.0	7%
6	5,749.7	2%
7	2,001.2	1%
8	1,440.5	1%
9	113.0	0.04%

谷部排滓場出土椀形鍛冶滓 メタル度一覧表

メタル度	重量（g）	割合
なし	209,971.3	81%
錆化（△）	40,106.0	16%
H（○）	7,814.4	3%
M（◎）	316.0	0.12%
L（●）	416.0	0.16%
特L（☆）	87.1	0.03%

椀形鍛冶滓（特大） 椀形鍛冶滓（特大）は、6点（7.4kg）が出土した。これは椀形鍛冶滓の3%（重量比）を占める。

6点は、炉床土、酸化土砂、羽口などの付着物が伴うものが多く、滓自体の大きさは椀形鍛冶滓（大）と大差がない。平面形は不整楕円形や楕円形で、長軸17～18×短軸13～15cmである。滓の上面中央部は浅く窪み、木炭痕が点在する。滓は比較的結晶が発達して、気孔は中小のものがやや多い。椀形鍛冶滓の下面には灰色の石英質の石粒を含む炉床土が貼り付くものが多い。磁着度は2～3、メタル度は全てがなしである。以下に椀形鍛冶滓（特大）の内で、

特徴的な個体を示す。

No.69は、ほぼ完形に近い羽口が付着した椀形鍛冶滓である。羽口の顎部には黒色ガラス質の滓が垂れ落ちて椀形鍛冶滓側に溶着している。No.69は、これまで明らかではなかった古代の鍛冶炉で使用される羽口の挿入角度を推定できる貴重な資料である。但し、羽口先端部の溶損角度に比べると通風孔部が基部側に向かって下がりぎみで、本来の使用時の角度より基部側が下がってしまっている可能性もある。椀形鍛冶滓は炉床全体に薄く広がる形状である。羽口は、A類やB類のように短い形式ではなく、本遺跡の主体となるE類またはG類の羽口と推定できる。羽口上部には13.7×10.0×4.2cmを測る板状の軽石が乗せられたままで、表面の一部が滓化している。

No.68の椀形鍛冶滓は、滓の周辺に炉床土から炉壁までが残存しており、椀形鍛冶滓と鍛冶炉の関係が推定できる好資料である。推定される鍛冶炉の内径は18cm強と推定される。高さはおよそ6～8cmが残存する。平面形は円形から楕円形となる。下面には鍛冶炉の炉床土が分厚く貼り付いており、最大厚みは3.3cmである。下面の中央部はやや平坦ぎみで、立ち上がりは強い椀形を示す。炉床土は粉炭に加えて滓片や軽石が混入し、灰色に被熱している。僅かにひび割れも確認できる。

No.75の椀形鍛冶滓は、平面楕円形で、上面は3cm大以下の木炭痕と木炭そのものが散在し、やや凹凸がある。下面全体には鍛冶炉の炉床土が貼り付いている。炉床土は僅かに細かいスサや初殻状の混和物を含むもので、灰色に被熱している。下手側の側部寄りには、幅3.5cm程の工具痕の可能性が極めて強い樋状の窪みが残されている。肩部は厚さ1cm程の幅で発泡している。滓の破面は緻密で、上半部ほど小さな気孔が多めとなる。下半部の滓は結晶が発達している。

椀形鍛冶滓 (大) 椀形鍛冶滓 (大) は、91点(49.3kg)が出土した。これは椀形鍛冶滓の20% (重量比) を占める。

椀形鍛冶滓 (大) の磁着度は1～6を測る。磁着度の中心は2～3である。磁着度4以上は少ない。他の大きさの椀形鍛冶滓と比較すると、磁着度2が3より上回るのは椀形鍛冶滓 (大) だけで、最も遺存する鉄酸化物や金属鉄が少ない。

メタル度は、なし～H (○) を測る。大部分がなしである。他の大きさの椀形鍛冶滓と比較すると、なしの割合が最も高い。

完形の椀形鍛冶滓 (大) を観察すると、平面形は不整楕円形や楕円形で、長軸15～18×短軸10～14cmのものが主体である。滓に緻密さがなく、大きさの割には軽量の傾向がある。1.5cm大以下の広葉樹主体の木炭痕や木炭をかみこむ滓が多く、ガス質である。炉床土、炉壁ごと剥離した椀形鍛冶滓も多い。

椀形鍛冶滓 (中) 椀形鍛冶滓 (中) は、340点(85.9kg)が出土した。これは椀形鍛冶滓の34% (重量比) を占める。

完形の椀形鍛冶滓 (中) を観察すると、平面形は不整楕円形や楕円形で長軸11～12×短軸9～10cmのものが主体である。1.5cm大以下の広葉樹主体の木炭痕や木炭をかみこむ滓が多く、ガス質である。木炭は最大でも4.5cm以下である。椀形鍛冶滓 (大) ・ (特大) と同様に、滓に緻密さがなく、大きさの割に軽量である。炉床土の付着したものも数点認められる。

椀形鍛冶滓 (中) の磁着度は1～9を測る。磁着度の中心は2～4である。他の大きさの椀形鍛冶滓と比較すると、遺存する鉄酸化物や金属鉄が多い。メタル度は、なし～L (●) を測り、大部分がなしとなる。

椀形鍛冶滓 (小) 椀形鍛冶滓 (小) は、451点(52.3kg)が出土した。これは椀形鍛冶滓の20% (重量比) を占める。

完形の椀形鍛冶滓 (小) を観察すると、ガス質、スポンジ状で比重が低いものが大部分であるが、滓が緻密で、大きさの割に比較的重量感があるものが数点ある。重量感のある椀形鍛冶滓 (小) は、磁着

第4章 遺構と遺物

度、メタル度とも高い傾向があるが、全体の中では数少ない。本遺構出土の典型的な椀形鍛冶滓（小）は、平面不整楕円形や楕円形で長軸8～10×短軸6～10cmを測り、広葉樹主体の木炭痕や木炭をかみこむ滓が多く、ガス質で、椀形鍛冶滓（大）から椀形鍛冶滓（中）を小ぶりにした様なものが多い。

滓の密度も椀形鍛冶滓（特大）・（大）・（中）と同様に、滓に緻密さがなく、大きさの割に軽量である。

椀形鍛冶滓（小）の磁着度は1～8を測る。磁着度の中心は2～3である。メタル度は、なし～特L（☆）を測り、大部分が、なしとなる。

椀形鍛冶滓（極小） 椀形鍛冶滓（極小）は、1,300点（57.1kg）が出土した。これは椀形鍛冶滓の23%（重量比）を占める。

大部分の滓はガス質のスポンジ状で、椀形鍛冶滓（小）と同様に椀形鍛冶滓（特大）～椀形鍛冶滓（中）を小さくしたものであるが、中には滓が緻密で、大きさの割に重量感がある椀形鍛冶滓（極小）も少量ある。重量感のある椀形鍛冶滓（極小）はメタル度、磁着度とも高い傾向があり、付着する酸化土砂中に鍛造剥片が付着するものも見られる。

本遺構出土の典型的な椀形鍛冶滓（極小）は、平面不整楕円形や楕円形で長軸5～7×短軸4～5cmを測り、広葉樹主体の木炭痕や木炭をかみこむ滓が多く、ガス質で椀形鍛冶滓（大）から椀形鍛冶滓（中）を小ぶりにした様なものである。

椀形鍛冶滓（極小）の磁着度は1～9を測る。磁着度の中心は2～3である。メタル度は、なし～L（●）を測り、大部分が、なしである。

2. 鍛冶滓 本遺構からは519点（5.38kg）の鍛冶滓が出土した。出土した鍛冶関連遺物の2%が鍛冶滓となる。大部分の鍛冶滓が2.5×3.0cmほどの小型の滓で、長径1cm大の木炭あるいは木炭痕を残す。側面部には木炭痕や不規則な突出部が見られる。その他に表面の酸化土砂中に鍛造剥片を含む鍛冶滓が、数点確認できる。

3. 再結合滓 本遺構からは5点（0.52kg）の再結

合滓が出土した。出土した鍛冶関連遺物の0.2%が再結合滓である。

4. 炉壁 本遺構からは6点（0.54kg）の鍛冶炉の炉壁片が出土した。出土した鍛冶関連遺物の0.2%を占める。本遺構出土の典型的な炉壁片は、内面が淡い赤褐色に被熱し、滓化・発泡している。炉壁胎土は粘土質で、スサや軽石を多量に含む。

5. 粘土質溶解物 本遺構からは246点（5.13kg）の粘土質溶解物が出土した。出土した鍛冶関連遺物の1.6%を占める。本遺構出土の典型的な粘土質溶解物は、ガラス質に滓化したもので、灰白色から黒色となる。3～6×2～4cmの小型の粘土質溶解物がほとんどで、木炭や軽石を含むものも含まれている。

6. 羽口 本遺構からは322点（46.23kg）というまとまった量の羽口が出土した。出土した鍛冶関連遺物の15%が羽口となる。322点中240点是小破片であったが、残り82点は製作時の特徴で11種類に分類した。A類が4点（1.48kg、3.2%）、B類が2点（0.65kg、1.4%）、C類が7点（3.07kg、6.6%）、D類が11点（5.37kg、11.6%）、E類が9点（5.34kg、11.6%）、F類が10点（4.47kg、9.7%）、G類が11点（4.84kg、10.5%）、H類が5点（1.83kg、4.0%）、I類が4点（0.86kg、1.9%）、J類が18点（2.13kg、4.6%）、K類が1点（0.59kg、1.3%）となる。分類した82点中の54個体を報告書に掲載した。出土した羽口を分類すると、200点を超える個体数が確認できる。

A、B類の6点（2.13kg、4.6%）は他のC～K類76点（44.10kg、95.4%）と胎土や成・整形などが異なる特徴をもつ。C～K類の羽口では内径、外径などの大きさや胎土や成・整形などの点で共通した要素が多く見られる。

掲載羽口計測値一覧表

No.	類	先端部内径(cm)	中心部内径	中心部外径	基部内径	基部外径	残存長
147	A類	2.2	2.6	(7.5)	(4.9)	(7.7)	10.7
148	A類	2.5	3.1	8.0	(4.6) ~ (5.0)	8.5~9.0	12.7
149	A類	2.2~2.6	2.2~2.9	6.6~7.8	—	—	9.3残
150	B類	2.3	3.2	6.6	4.3~4.7	6.3~6.6	9.6
151	B類	2.3	2.8	6.1	(3.5)	(6.5)	9.3
152	C類	(2.1)	2.1	6.0	4.8~5.0	7.3~7.7	13.9
153	C類	2.0	2.1	5.8	3.6~3.8	6.0	15.0
154	C類	2.4~2.7	2.4	6.4	—	—	13.2残
155	C類	2.4	2.4	6.8	5.0	7.5	13.5
156	C類	2.2~2.5	2.5	7.8	(4.8)	7.6~8.5	15.7
157	D類	2.2	2.2	4.6	5.1	6.5~7.0	10.6
158	D類	2.3~2.4	2.4	6.2	5.1~5.5	7.0	12.6
159	D類	2.1~2.3	2.4	6.1	4.6	6.7~7.3	12.4
160	D類	2.2	2.2	6.6	4.0	7.0	13.5
161	D類	2.2~2.3	2.3	6.3	4.4~4.6	6.7~7.2	13.4
162	D類	2.1	2.1	6.6	5.0~5.4	7.0	13.8
163	D類	2.0	2.2	6.5	—	—	14.0残
164	D類	2.2	2.4	6.5	—	—	19.2残
165	E類	2.5	2.7	6.4	(4.7) ~5.6	(6.4) ~7.5	12.5
166	E類	2.3	2.3	6.4	4.1~5.0	6.3~7.0	14.0
167	E類	2.5~2.6	2.6	7.4	4.5~5.2	7.0~7.5	11.9
168	E類	2.3~2.5	2.3	6.6	4.5~5.0	6.9~7.4	14.4
169	E類	2.5	2.1×2.6	7.7	4.7	7.5	12.4
170	E類	2.2	2.3	7.0	4.7~ (5.2)	7.3~ (7.7)	14.7
171	E類	2.5~2.6	2.6	6.8	4.9~5.5	6.8~7.5	13.4
172	E類	2.6	2.6	7.7	(3.5) ~ (4.5)	7.0~ (7.8)	14.0
173	E類	2.5	2.6	7.5	4.8~5.2	7.5	13.2
174	F類	2.2	2.2	5.7	4.1~4.5	(5.9) ~6.5	12.8
175	F類	2.5	2.6	6.5	—	(7.0)	13.3
176	F類	2.4	2.8	6.2	5.0~5.4	7.0~7.2	12.8
177	F類	2.4	2.5	6.7	5.0	7.7	14.4
178	F類	2.3	2.3	6.8	3.8~4.0	7.0~7.5	12.3
179	F類	2.4	2.4	7.3	—	—	11.5残
180	F類	—	2.5	7.3	(5.4)	(8.0)	11.8残
181	G類	2.1~2.2	2.2	6.3	4.3~4.7	5.5~6.3	13.0
182	G類	2.3	2.5	6.6	(3.5) ~4.5	(5.6) ~6.5	12.1
183	G類	2.2	2.6	6.5	4.0	6.3	11.9
184	G類	2.4~2.5	2.5	6.5	3.0~4.1	5.5~6.0	11.8
185	G類	2.2~2.3	2.4	6.6	3.1~3.4	5.7~6.4	11.8
186	G類	2.2~2.3	2.3	6.6	3.5~3.7	6.3	15.6
187	G類	2.4	2.7	6.9	3.8~4.5	7.0~7.3	12.5
188	G類	2.4	2.4	6.7	4.0~4.5	6.2	13.7
189	H類	2.2	2.2	(6.2)	—	—	16.5残
190	H類	2.5	2.2	6.3	—	—	14.0
191	H類	2.3	2.3	6.0	(4.3)	(5.7)	12.7
192	H類	2.1~2.3	2.3	6.0	—	—	12.8残
193	H類	2.2~2.3	2.3	6.1	(4.5)	(7.0)	14.7
194	I類	—	2.2	5.8	—	—	10.6残
195	I類	—	2.1	5.7	(4.5)	(7.0)	11.2残
196	J類	2.0	(2.0)	(5.7)	—	—	9.7残
197	J類	(1.9)	1.9	(5.0)	—	—	9.8残
198	J類	2.0	2.0	5.5	—	—	11.1残
199	J類	(2.0)	2.0	5.8	—	—	16.5残
200	J類	2.0	2.3	6.0	—	—	10.7残
201	J類	2.0	2.3	6.3	—	—	10.9残
202	K類	2.4~2.5	2.4	5.7~6.4	(3.0) ~3.6	(6.7) ~7.2	18.4

第4章 遺構と遺物

A類 4点 (1.48kg) の羽口をA類に分類した。羽口全体の3.2% (重量比) がA類の羽口である。

A類の羽口は、体部が基部側に向かい直線的に開き、横断面形は多角形になる特徴を持つ。通風孔部は基部に向かい直線的に開き、溶損による変形のない先端部付近で内径2.2~2.5cmを測る。基部は平坦で、胎土は粘土質で、多量のスサや微細な白色軽石を含む。外面の整形は長軸方向の削りとナデによる。残存長は9.3~12.7cmを測る。



A類

B類 2点 (0.65kg) の羽口をB類に分類した。羽口全体の1.4% (重量比) がB類の羽口である。

B類の羽口は、体部が基部側に向かい直線的に開き、横断面形は、長軸方向に向かう帯状の削りによって、多角形ぎみになる。通風孔部は基部に向かって緩やかにラップ状に開き、溶損による変形のない先端部付近で内径3.0cmを測る。基部はやや甘い平坦面である。胎土は多量のスサが混入した粘土質で、石粒が極めて少ない。外面の整形は帯状の削りにより丁寧に仕上げられている。残存長は9.3~9.6cmを測る。



B類

C類 7点 (3.07kg) の羽口をC類に分類した。羽口全体の6.6% (重量比) がC類の羽口である。

C類の羽口は、体部外面が基部に向かいほぼ直線的で、基部側の端部が3cm程短く外開きになるという特徴を持つ。通風孔部は先端部から基部側にかけて直孔し、端部で外開き。溶損による変形のない先端部付近で内径2.0~2.4cmを測る。基部は平坦で、胎土はスサをまばらに含む緻密な粘土質である。外

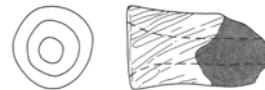
面の整形は長軸方向に向かう削りの後、細かいナデによって仕上げられている。残存長は13.2~15.7cmを測る。



C類

D類 11点 (5.37kg) の羽口をD類に分類した。羽口全体の11.6% (重量比) がD類の羽口である。

D類の羽口は、体部外面が基部に向かいほぼ直線的で、基部の端部が短く外開きになるという特徴を持つ。通風孔部は先端部から基部側にかけて直孔し、端部で外開き。溶損による変形のない先端部付近で内径2.0~2.2cmを測る。基部は、外周部のみ平坦で、胎土は極僅かなスサと石粒を含む緻密な粘土質である。最大の特徴は外面の整形で、長軸方向に向かう削りの後、斜め方向に並ぶ筋状の圧痕が全周する点である。残存長は10.6~19.2cmを測る。



D類

E類 9点 (5.34kg) の羽口をE類に分類した。羽口全体の11.6% (重量比) がE類の羽口である。

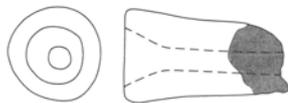
E類の羽口はやや太めの形態で、体部外面が基部に向かいほぼ直線的で、基部の端部が短く外開きになるという特徴を持つ。通風孔部は先端部から基部側にかけて直孔し、基部端部で外開き。溶損による変形のない先端部付近で内径2.0~2.5cmを測る。基部の先端は外側に広げられているが、成形は粗い。胎土はスサを僅かに含み、軽石を多量に含む粘土質である。整形は粗く、最大の特徴は体部に残る長軸方向の粗い削り。残存長は11.9~14.7cmを測る。



E類

F類 10点 (4.47kg) の羽口をF類に分類した。羽口全体の9.7% (重量比) がF類の羽口である。

F類の羽口は細身で、先端部から基部に向かって徐々に広がる形態となる。通風孔部は先端部から基部にかけて直孔し、基部端部で外開き。溶損による変形のない先端部付近で内径2.0~2.7cmを測る。基部の先端は整形が丁寧で、外側に開かず直線的。胎土は直径1cm大以下の軽石や僅かなスサを含む粘土質である。整形は丁寧な長軸方向のヘラ削りで、ナデや指頭痕も基部側を中心に見られる。ワラの圧痕が外面に観察できるものが多い。残存長は11.5~14.4cmを測る。



F類

G類 11点 (4.84kg) の羽口をG類に分類した。羽口全体の10.5% (重量比) がG類の羽口である。

G類の羽口は筒状で基部が外側に広がらない特徴を持つ。通風孔部は先端部から基部にかけて直孔し、基部端部で外開きとなる。溶損による変形のない先端部付近で内径2.1~2.7cmを測る。基部の先端は幅1.0cm~1.7cmの平坦面を形成し、外側に開かず直線的。胎土は僅かなスサを含む密度の高い粘土質である。整形は長軸方向の幅1~2cmの帯状の削り痕がきれいに残されている。残存長は11.8~15.6cmを測る。

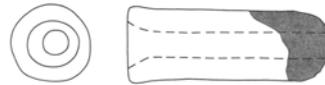


G類

H類 5点 (1.83kg) の羽口をH類に分類した。羽口全体の4.0% (重量比) がH類の羽口である。

H類の羽口は細身で、基部側が開く特徴を持つ。通風孔部は先端部から基部にかけて直孔し、基部端部で外開きとなる。溶損による変形のない先端部付近で内径2.0~2.4cmを測る。基部の先端は幅1.0cm未満の細い平坦面を形成する。胎土は混和物が少な

く、きめの細かい粘土質である。整形は最も丁寧で、ナデにより削り痕を丁寧に消し、表面が整っている。残存長は12.7~16.5cmを測る。



H類

I類 4点 (0.86kg) の羽口をI類に分類した。羽口全体の1.9% (重量比) がI類の羽口である。

I類の羽口は細身で、基部側が開くH類と共通の特徴を持つ。通風孔部は先端部から基部にかけて直孔し、基部端部で外開きとなる。溶損による変形のない先端部付近で内径2.1cmを測る。基部の先端は幅1.5cm程の平坦面を形成する。胎土は混和物が少なく、茶褐色でやや粗い。整形は、ナデにより削り痕を消すが、やや粗い。残存長は10.6~11.2cmを測る。



I類

J類 18点 (2.13kg) の羽口をJ類に分類した。羽口全体の4.6% (重量比) がJ類の羽口である。

J類の羽口は横断面形が隅丸方形の細身で、基部側に向かって徐々に太くなる特徴を持つ。通風孔部は先端部から基部にかけて直孔し、基部端部で外開きとなる。溶損による変形のない先端部付近で内径2.0cmを測る。基部の先端は欠落して不明である。胎土は僅かに細いスサを含む粘土質である。残存長は9.7~16.5cmを測る。



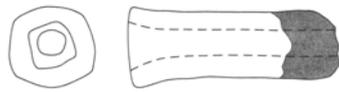
J類

K類 1点 (0.59kg) の羽口をK類に分類した。羽口全体の1.3% (重量比) がK類の羽口である。

K類の羽口は横断面形が隅丸長方形の細身で、筒状で基部側が外側に開く。通風孔部は先端部から基

第4章 遺構と遺物

部にかけて直孔し、基部端部で外開きとなる。溶損による変形のない先端部付近で内径2.0cmを測る。基部の先端は指頭痕が残存する。胎土は細いササが目立つ緻密な粘土質である。整形は長軸方向やや斜めに、幅1.2cm程の削り痕がある。残存長は18.4cmを測る。



K類

7. 鉄製品 本遺構からは3点(0.15kg)の鉄製品が出土した。出土した鍛冶関連遺物の0.04%が鉄製品である。

出土した鉄製品は3点のいずれもが鍛造品である。錆が進み詳細は不明である。

鉄製品の磁着度は5~8を測り、メタル度は、なし~L(●)となる。

8. 土器類 本遺構からは土器が16点出土した。土器類16点は土師器6点、甕2点、須恵器2点、椀3点、蓋1点、皿1点、高坏の可能性のある遺物1点に分類される。

出土した土器は、概ね8世紀中頃に11点、9世紀中頃に4点、9世紀後半に1点が比定され、すべて谷部排滓場の土層断面第6層中から出土した。

9. 木製品 本遺構からは加工痕の認められる木製品10点が出土した。木製品の分類及び名称は、『木器集成図録 近畿古代編』(1985 奈文研)に準じて笹澤が行った。樹種同定は、株式会社パレオラボに依頼した。同定された樹種は、観察表に記載してある。同定に使用したプレパラートは、当事業団で作成した。プレパラートや光学顕微鏡写真などは、当事業団に保管してある。

用途が推測できた木製品は10点中2点で、鈍の柄、斧の柄といった工具の柄である。用途不明の加工材の大部分は端部に加工が施された棒状のものである。

工具類 鈍(第114図、P L56)

D1区遺物包含層から出土した加工痕のある木製品10点の内、2点を工具の柄に分類した。工具の柄2点は、用途の比定を試みたが、鉄身をつけた状態の出土ではないため、当然のことながら誤認しているものも有り得る。

鈍の鉄身はしばしば発見されるが、柄の出土例は少ない。

本遺構出土の1点(No.209)を茎孔と柄の形状から鈍の柄に分類した。No.1は、柄元に剝込みをめぐらす加工痕がある。これは柄に縦割れが生じたために紐などで緊縛するために加工したと思われる。柄元は斜め方向に削られ、刃が当たりやすいように加工している。茎孔の断面は長方形で、柄元の斜め方向の加工と平行して刃をつけている。また、この加工方法や茎孔の大きさが『木器集成 近畿古代編』にある鈍の柄に共通することから本遺物を鈍とした。また、柄の中程から柄頭にかけて刃側を浅く削り込み、柄頭を細くしている点は、柄元付近と柄頭部分を両手で握りやすくするために施された加工と推測できる。材はモミ属。柾目。



鈍の使用例：『春日権現験記』

工具類 斧(第114図、P L56)

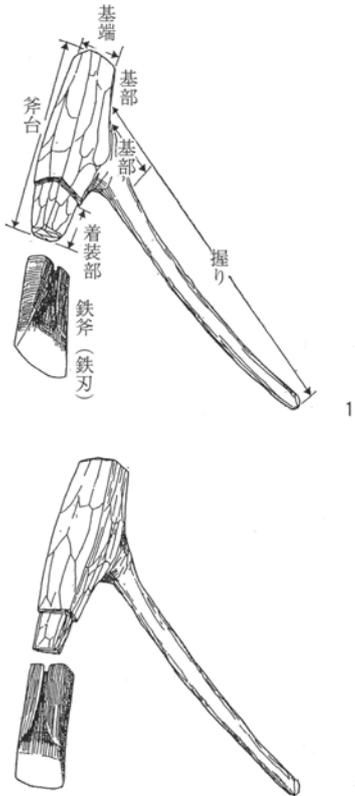
本遺構出土の1点(No.210)を木の幹と枝の股を利用して加工している形状から斧の柄とした。斧は縦斧と横斧があり、袋状鉄斧の取り付け方向により分類されている。

本遺構出土のNo.210は、斧台から基部にかけて残存している。装着部と握りのほとんどは欠損しており、縦斧であるのか横斧であるのかは不明である。

基部には明瞭な加工面があり、握りの基部側には樹皮が残存する部分もある。材はニレ属。芯持ち材。

ケヤキ、アワブキ、クヌギと樹種は、多種ある。

No.218は板材で、側面はすべて欠損している。材はクリ。板目。



1. 縦斧 2. 横斧：『木器集成録 近畿古代編』
(1985 奈文研)

註

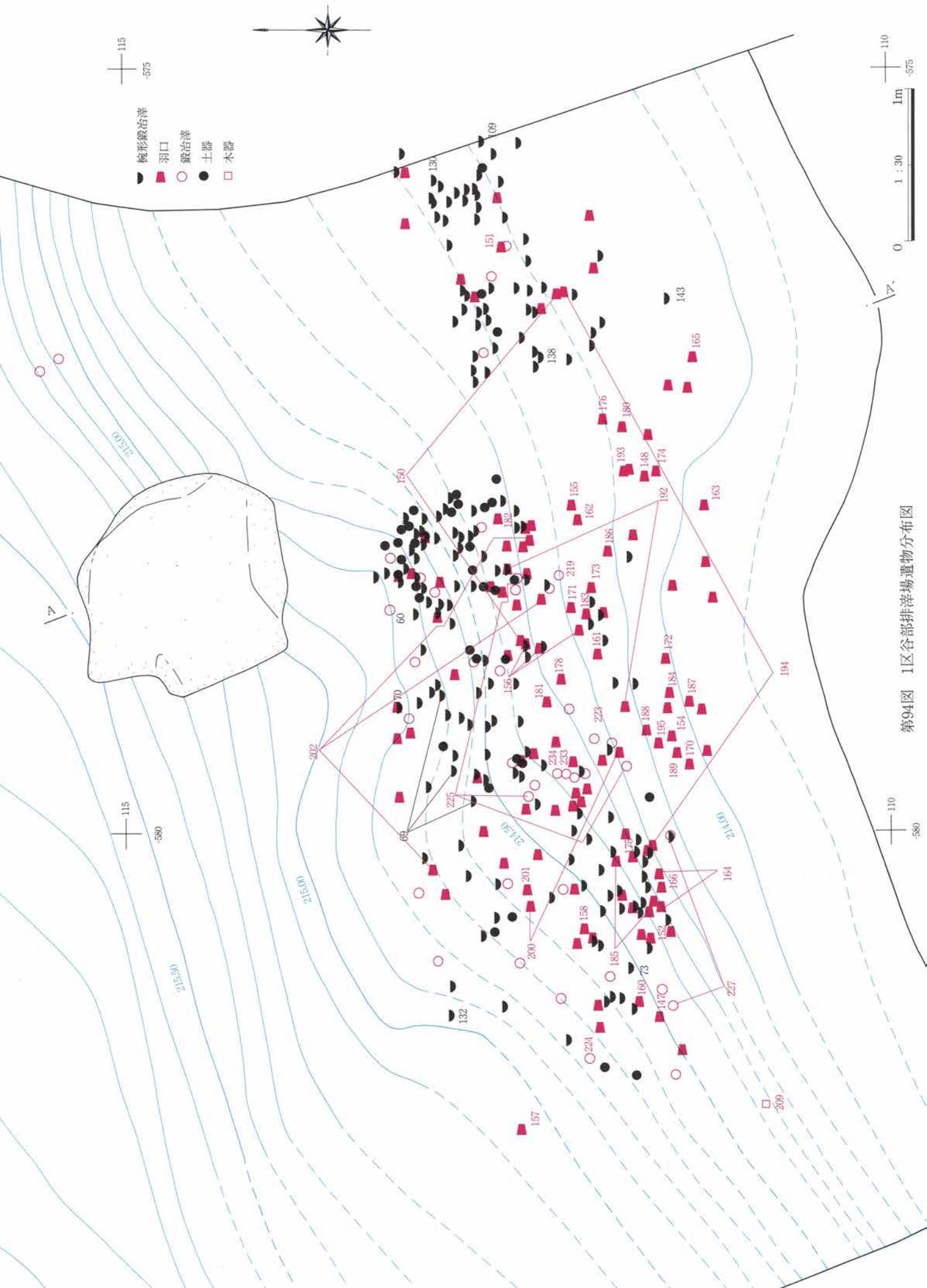
- (1) 本来すべて数えるべきであるが、再結合滓の1/20を取り出し計測した。
- (2) 磁化しない竹串を用い分類した上で、スケールルーペで粒状滓の直径を計測した。
- (3) 津野 仁1995『金山遺跡Ⅳ』財団法人 栃木県文化振興事業団と同様の手法を用いた。
- (4) 津野 仁1995『金山遺跡Ⅳ』財団法人 栃木県文化振興事業団
- (5) 磁化しない竹串を用い分類した上で、スケールルーペで鍛造薄片の長軸を計測した。個体数の算出の仕方も粒状滓同様、各類とも30個のサンプルによって1個の重量を算出した。その後、各種の総重量を1個あたり重量で割り、それぞれの類の個体数を算出した。
- (6) peak stand microscope 75×は、被検物の厚さを最小メモリ0.01mmで計測可能。凹凸のある鍛造薄片は接地面により厚く計測されるおそれがあるため、少しずつずらしながら最小厚を計測するように努めた。

用途不明の加工材 (第114・115図、P L56)

8点が用途不明の加工材であった。用途不明の加工材は、孔のあるもの、棒状、柱状、板状のものがあつた。棒状、柱状のものは端部に加工が施されている。

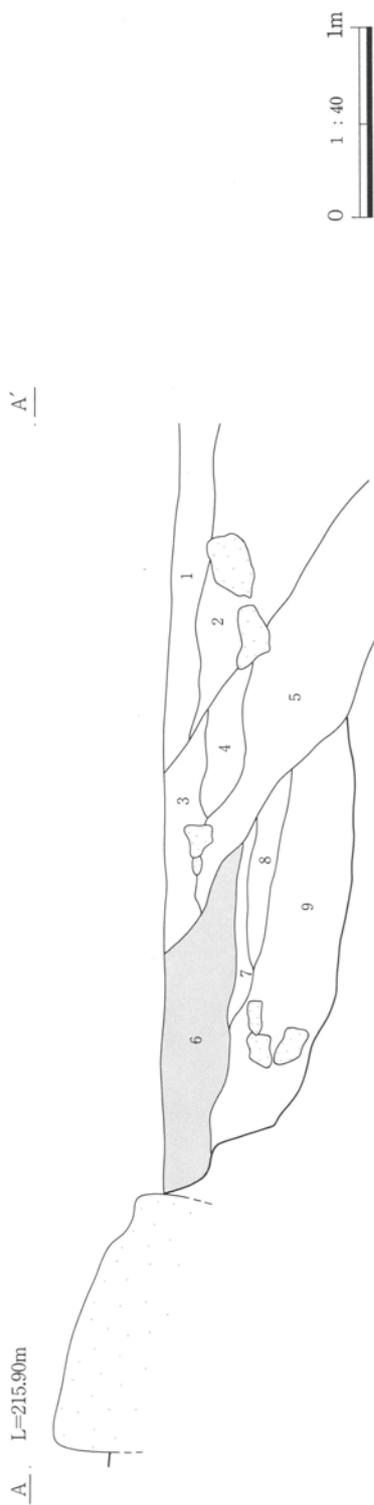
No.211は、板材に孔のある加工材である。孔は9個あり、板材の短軸中央に一列に列んでいる。孔は板材の長軸方向に対して斜め方向と、垂直方向に穿孔されており、板材の端部から、斜め、垂直、斜めと、交互に並んでいる。孔に紐のようなものを通したと推定されるが、材の用途は不明である。材はモミ属。板目。

No.212からNo.217は端部に加工が施された棒状、柱状の加工材である。No.212からNo.214は端部を斜め方向に切断した加工材で、No.215からNo.217は端部先端を尖らした加工材である。ニレ、モミ、



- 碗形鍛冶滓
- 羽口
- 鍛冶滓
- 土器
- 木器

第94図 1区谷部排滓場遺物分布図



1区排滓場

- 1 暗褐色土 Hr-FPを多量に含む。
- 2 黒褐色土 Hr-FPを多量に含む。5層よりやや明るい。
- 3 黒褐色土 Hr-FPを多量に含む。やや粘性、やや締まる。
- 4 赤色礫層 赤く錆ついた礫層。黒色粘質土を含む。
- 5 黒褐色土 Hr-FPを多く含む黒泥。
- 6 暗褐色土 炭化物を多量に含む。Hr-FPやHr-FAブロックが少量混入。粘性、締まりなし。礫などが赤く錆びついている。谷部排滓場出土の遺物が出土した土層。
- 7 黒褐色土 Hr-FP、炭化物を僅かに含む黒泥土。礫などが赤く錆びついている。粘性あり、やや締まる。
- 8 黒褐色土 黒泥土。Hr-FPを含む。粘性、締まりあり。
- 9 黒褐色土 黒泥土。Hr-FPを含む。砂質。やや粘性、やや締まる。

第95図 1区谷部排滓場 断面図

1 区 谷 部 排 滓 場										
橢形鍛冶滓 (特大、含鉄、炉壁・炉床土付き)	橢形鍛冶滓 (大)	橢形鍛冶滓 (大、粘土質溶解物付き)	橢形鍛冶滓 (大、含鉄、工具痕付き)	橢形鍛冶滓 (羽口付き)	橢形鍛冶滓 (如床土付き、粘土質溶解物付き)	橢形鍛冶滓 (中、二段、含鉄)	橢形鍛冶滓 (小)	橢形鍛冶滓 (小、含鉄)	橢形鍛冶滓 (極小)	鍛冶滓 (含鉄)
H (○)						H (○)	H (○)	H (○)	M (○)	M (○)
68	71 72 73 74 75 76 77 78	79 80 81 82 83	84 85 86 87	88 89 90 91	93 94 95 96 97	98 99 100 101 102	103 104 105 106 107	108 109 110 111 112	113 114 115 116 117	118 119 120 121
分析資料No.13	分析資料No.14	分析資料No.15	分析資料No.16	分析資料No.17	分析資料No.18	分析資料No.19				
71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81
84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94
98	99	100	101	102	103	104	105	106	107	108
113	114	115	116	117	118	119	120	121	122	123
127	128	129	130	131	132	133	134	135	136	137
138	139									
分析	2	1	1	1	1	1	1	2	1	1

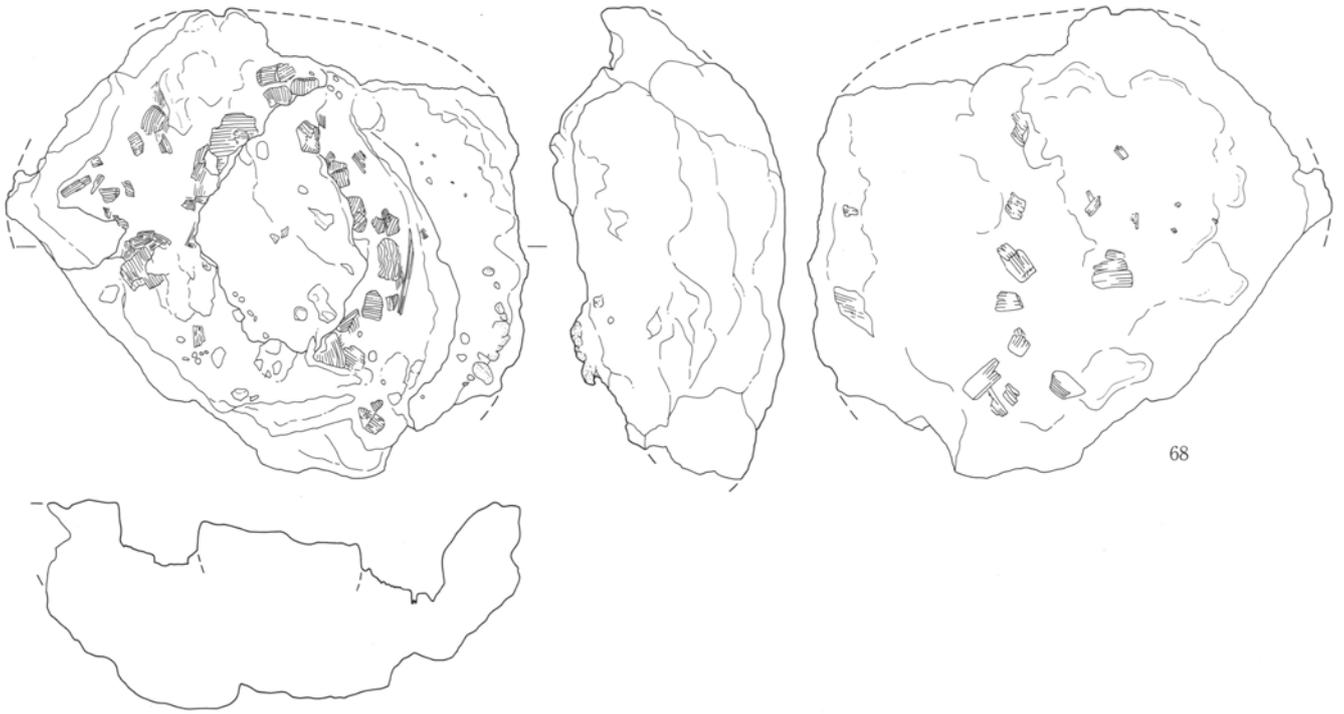
第96図 1区谷部排滓場 鉄関連遺物構成図



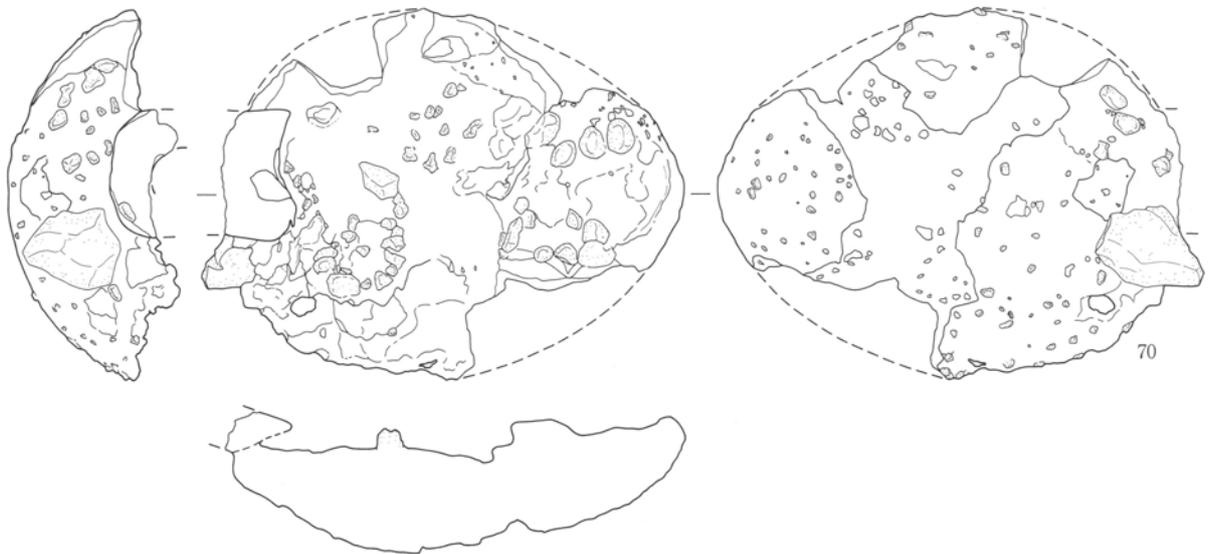
第98図 1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図(1)

69

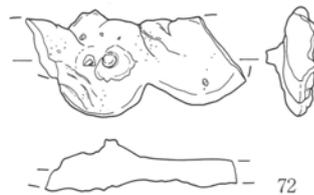
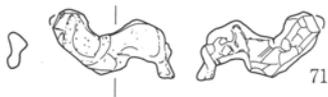
腕形鍛冶滓 (特大、炉壁、炉床土付き)



腕形鍛冶滓 (特大、羽口、粘土質溶解物、炉床土付き)



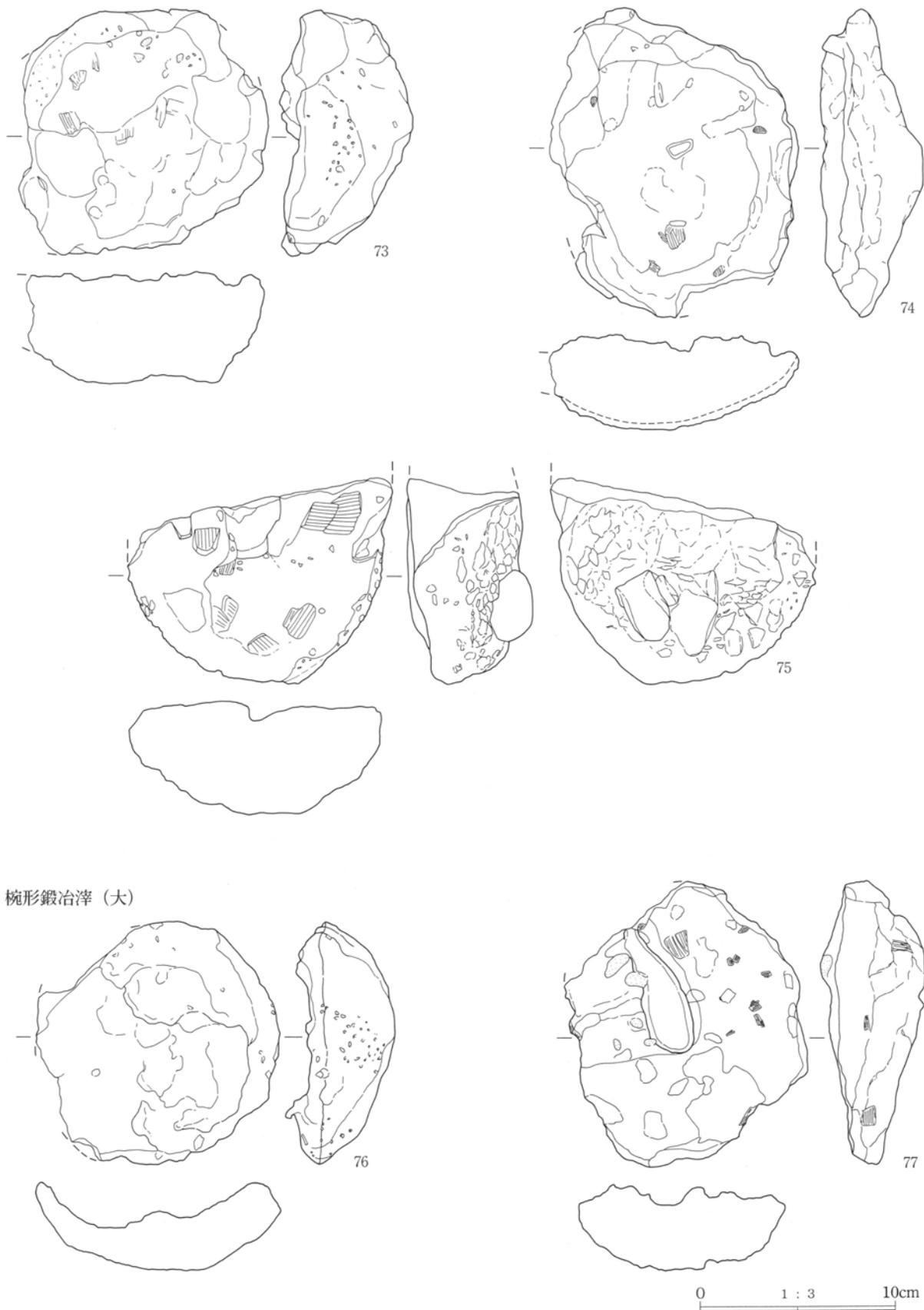
流動滓



0 1 : 3 10cm

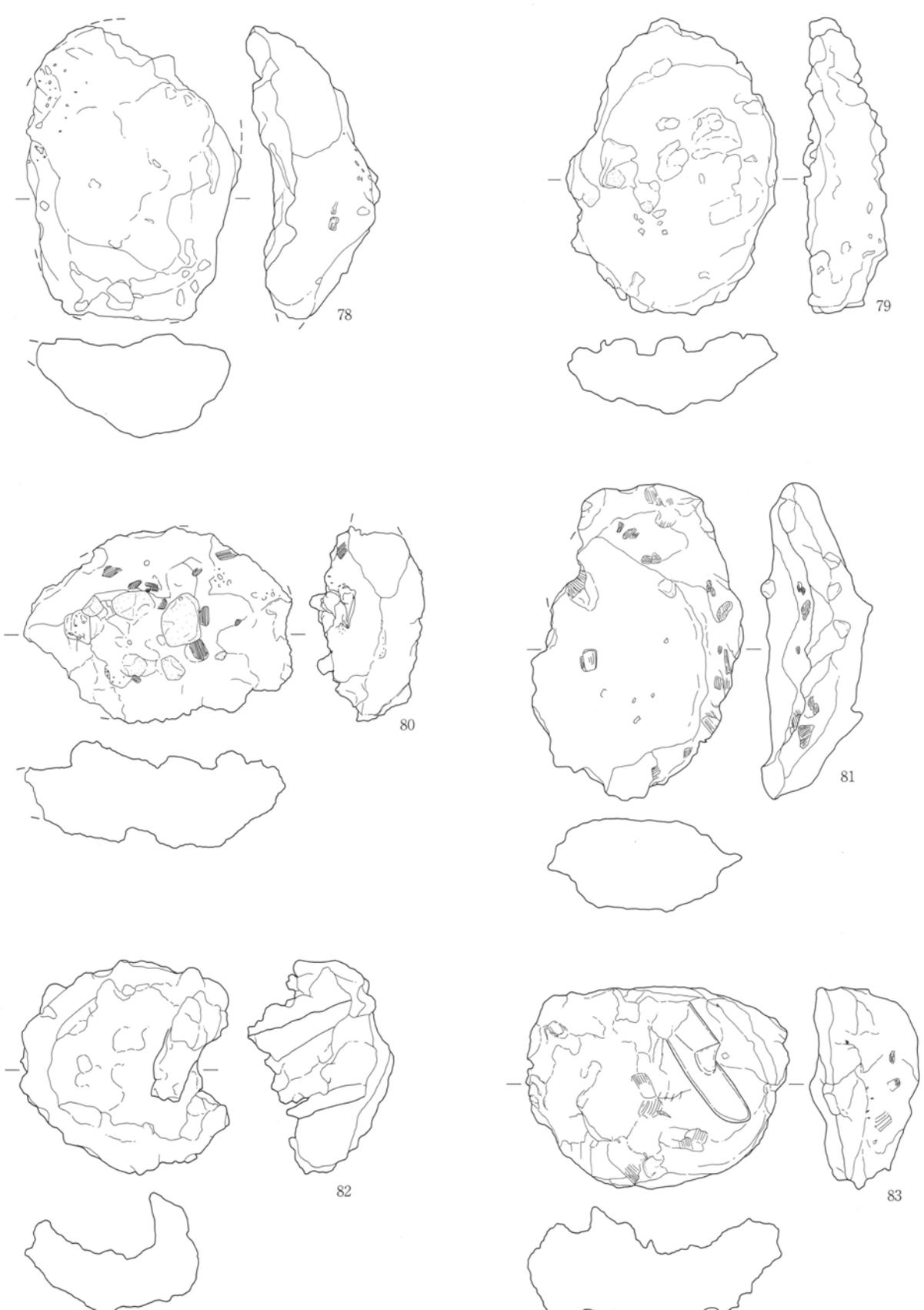
第99図 1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図 (2)

碗形鍛冶滓 (特大)



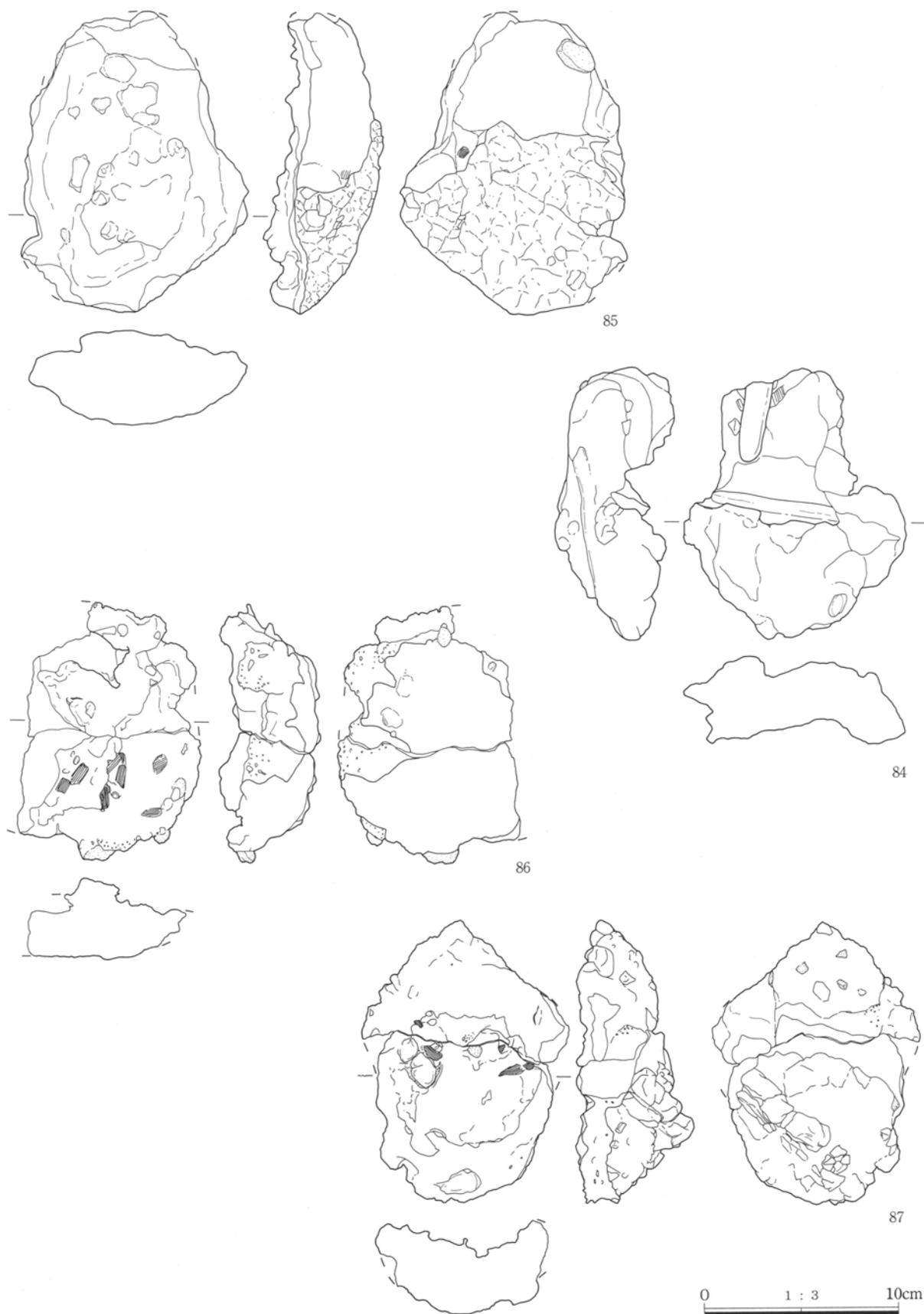
碗形鍛冶滓 (大)

第100図 1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図 (3)

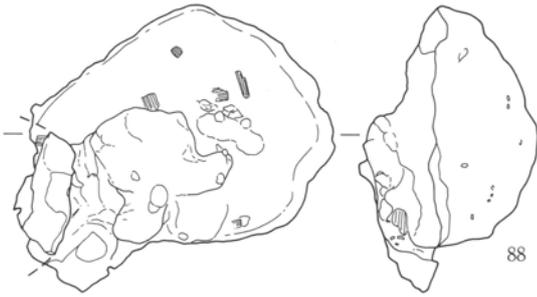


第101図 1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図(4)

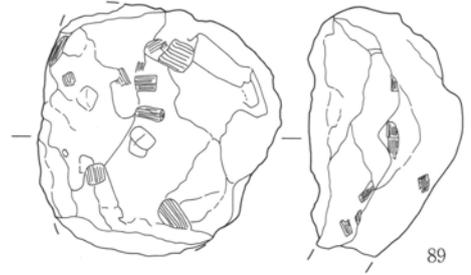
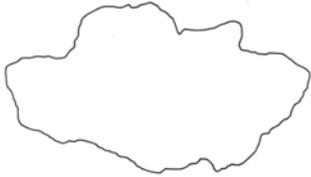
0 1:3 10cm



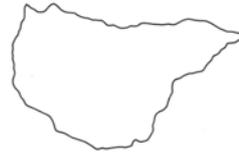
第102図 1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図(5)



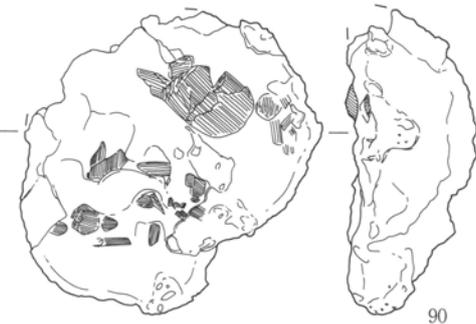
88



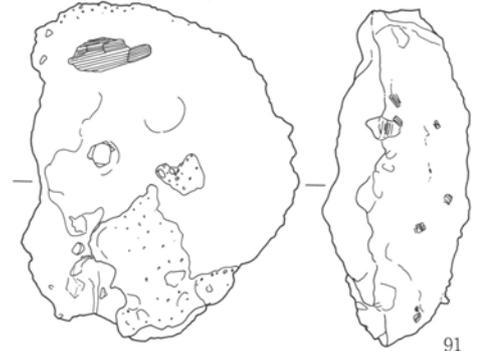
89



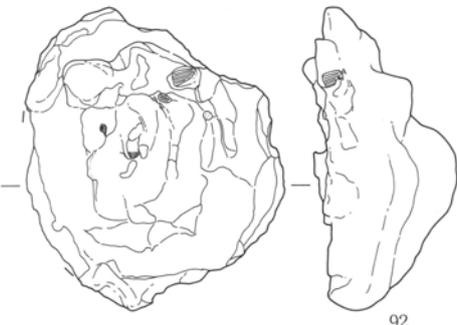
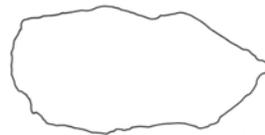
碗形鍛冶滓 (中)



90



91



92

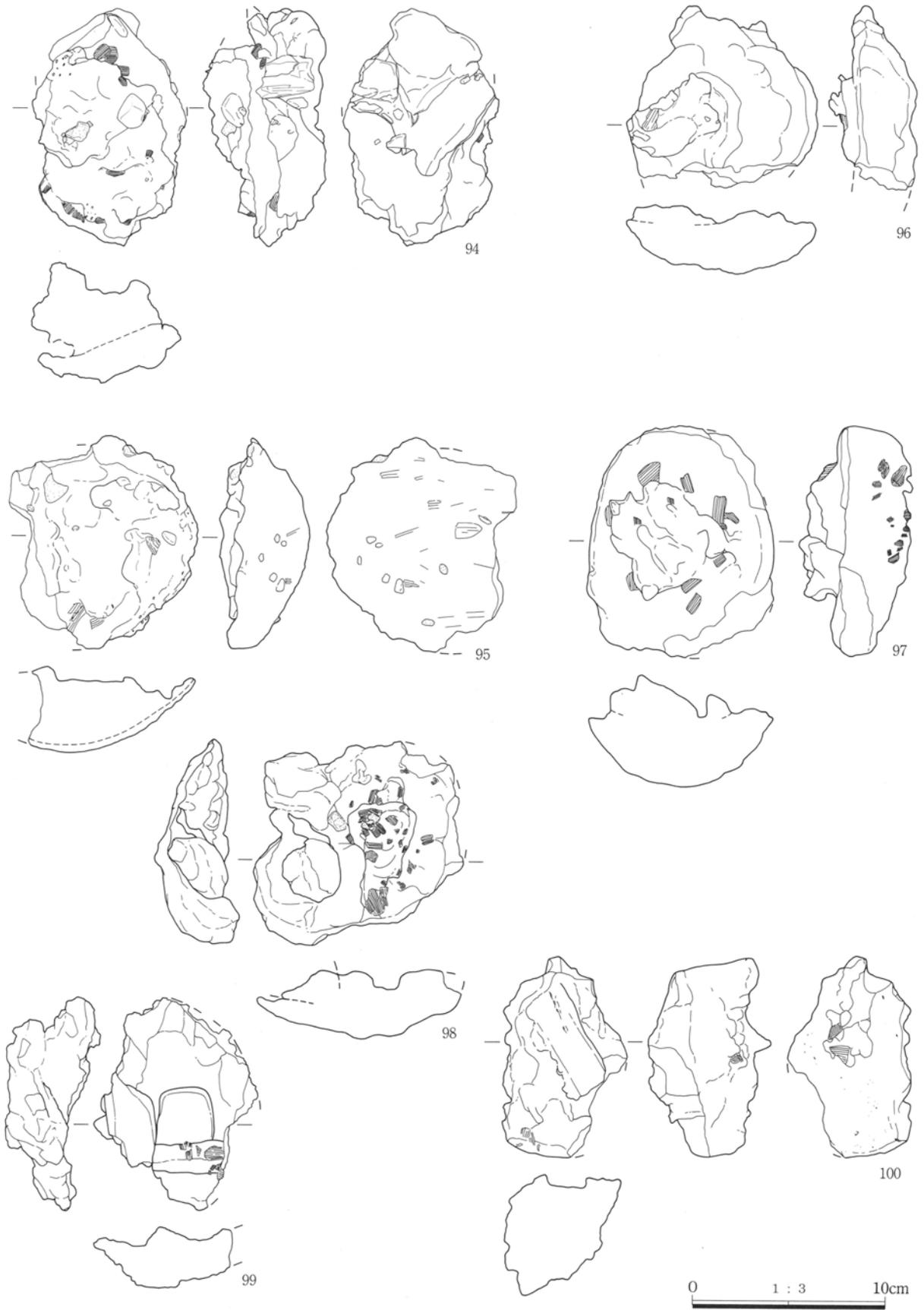


93

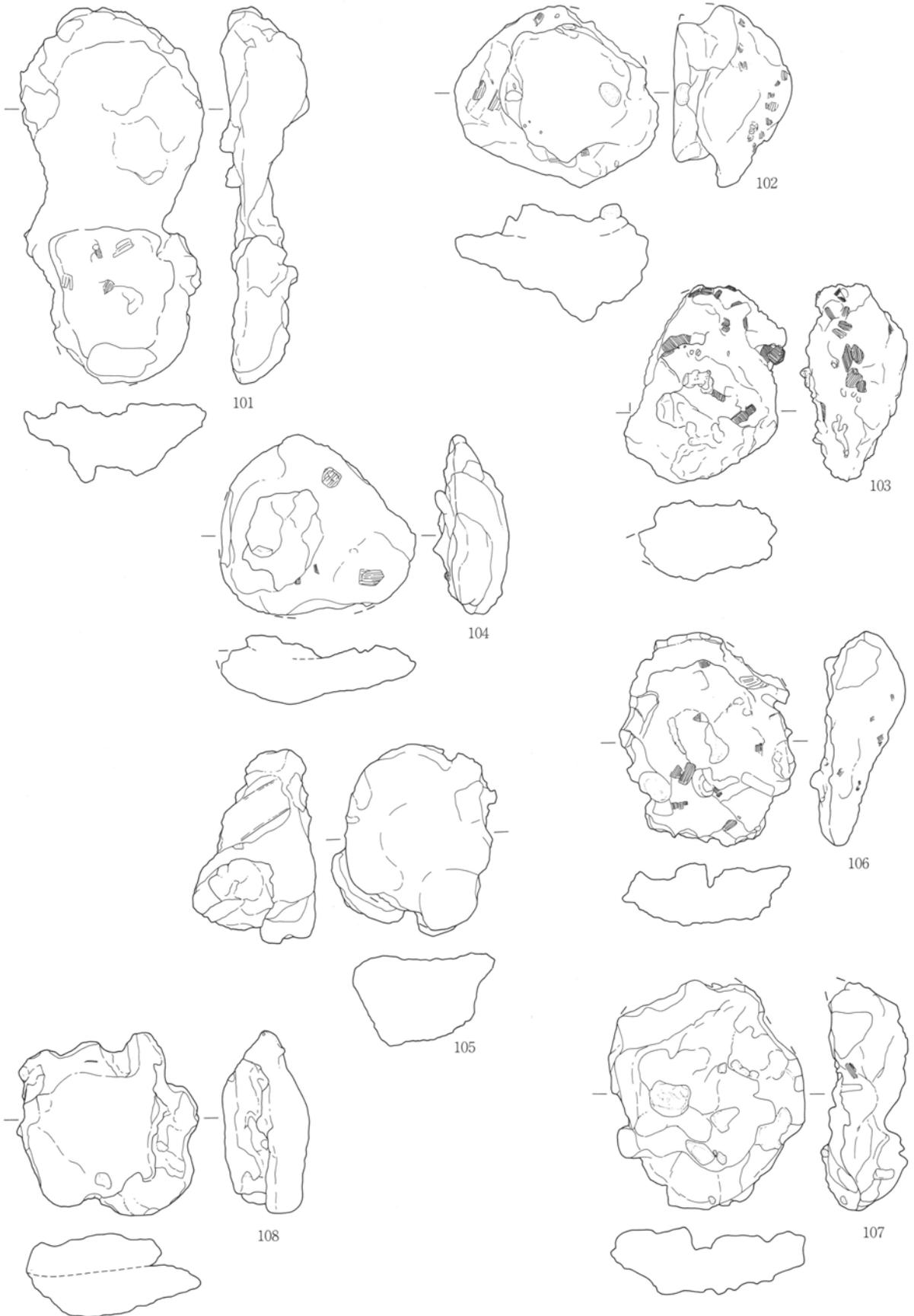


0 1 : 3 10cm

第103図 1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図(6)

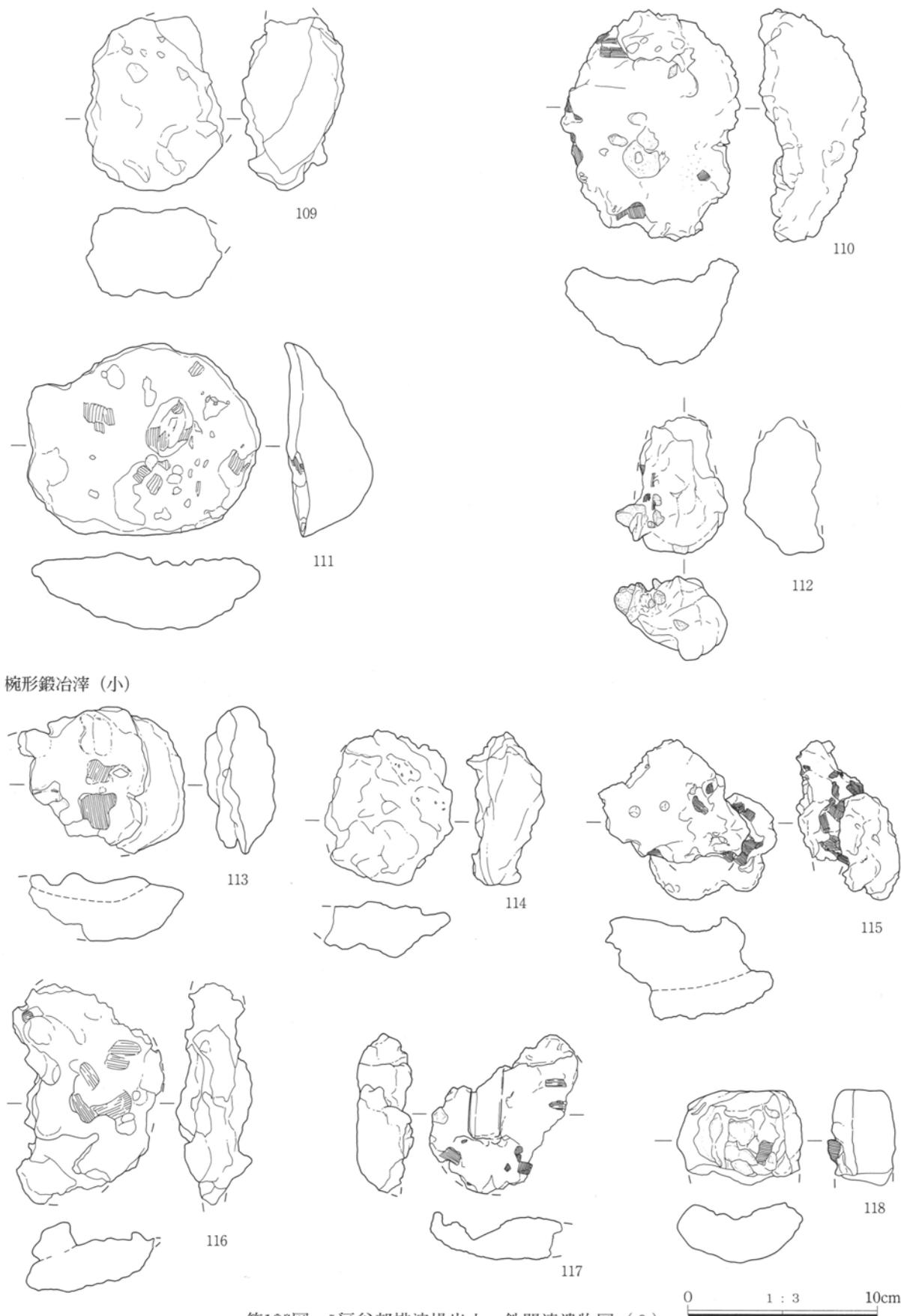


第104図 1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図(7)



第105図 1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図(8)

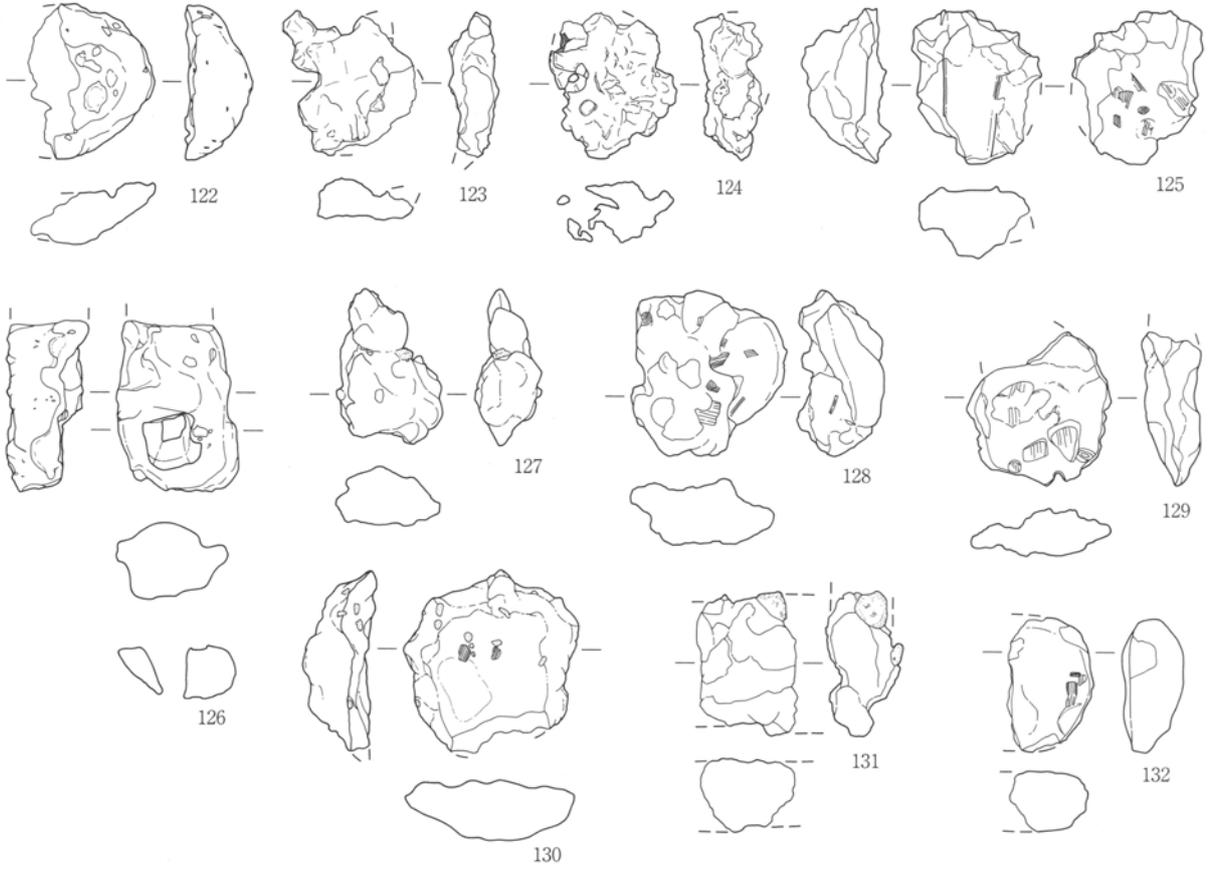
0 1:3 10cm



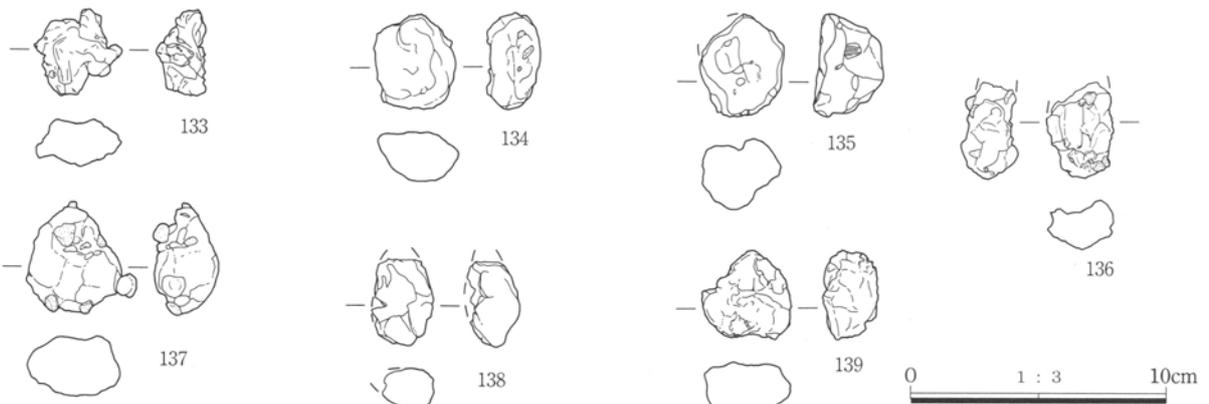
第106図 1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図 (9)



椀形鍛冶滓 (極小)



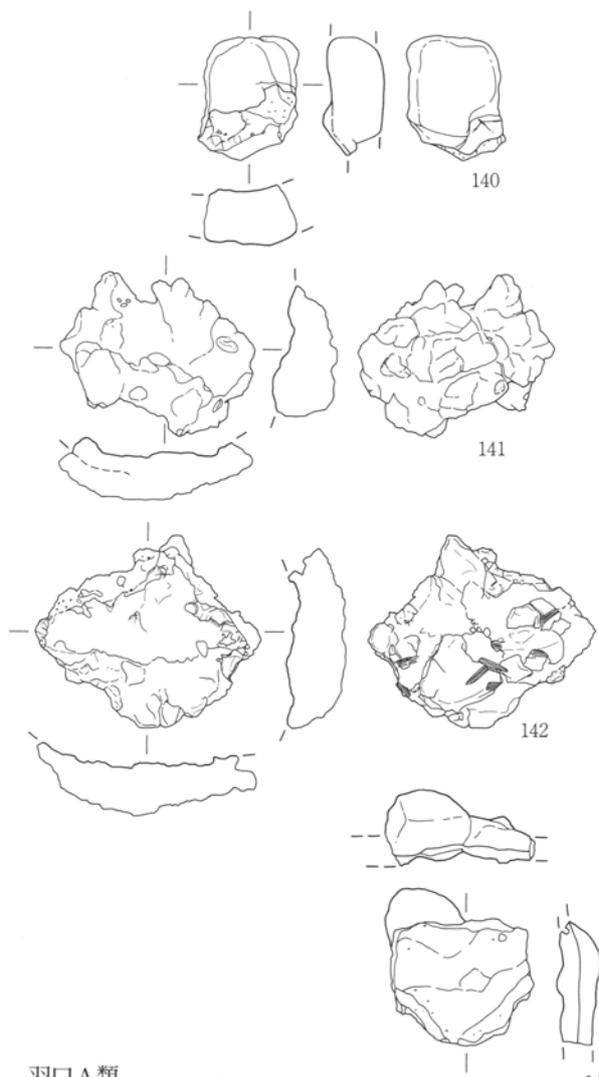
鍛冶滓



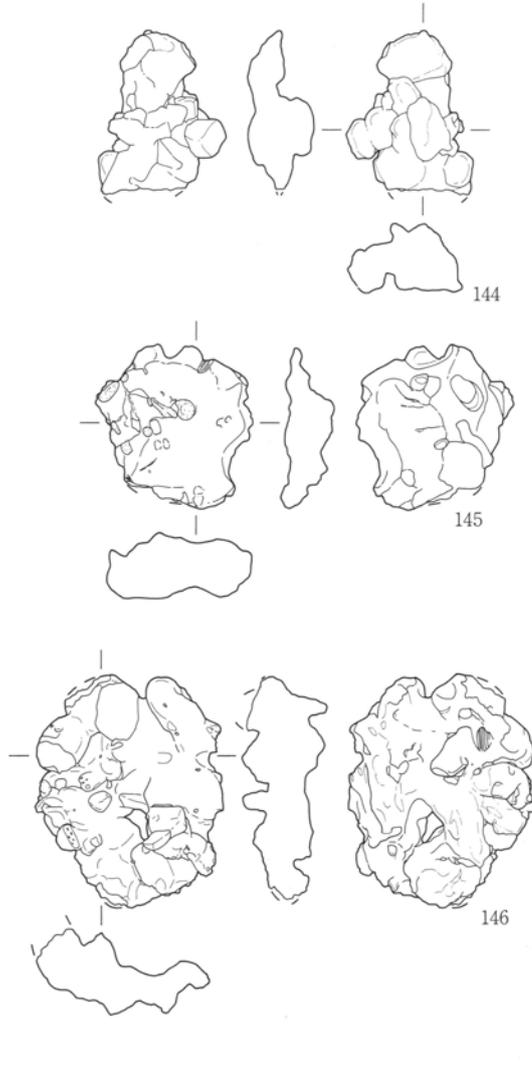
0 1 : 3 10cm

第107図 1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図 (10)

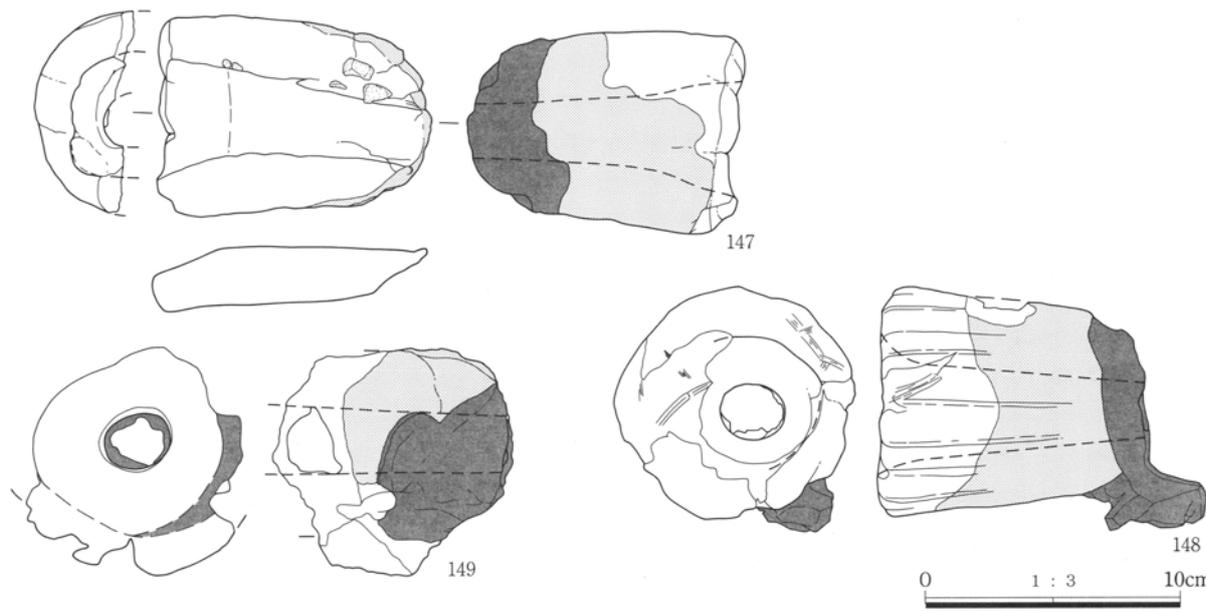
炉壁（鍛冶炉）



粘土質溶解物

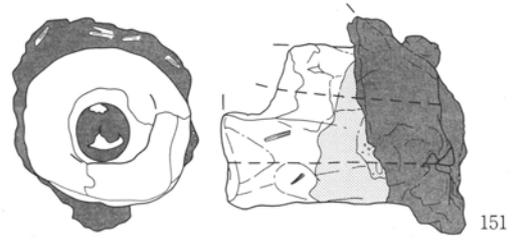
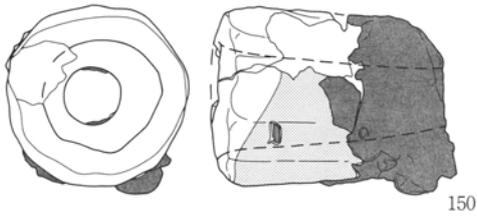


羽口A類

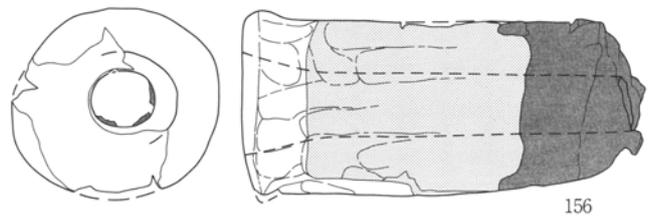
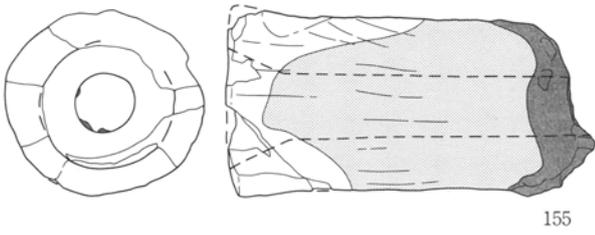
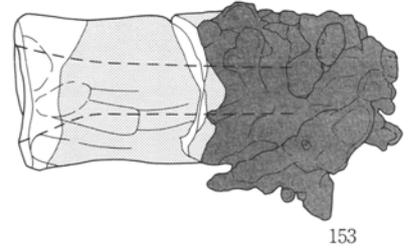
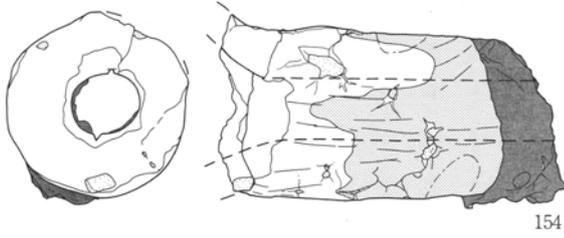
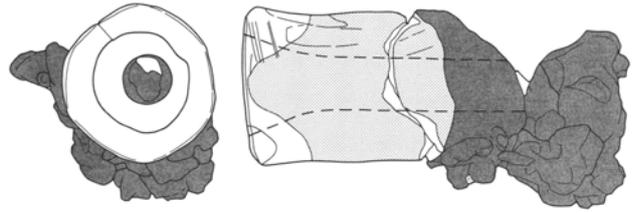
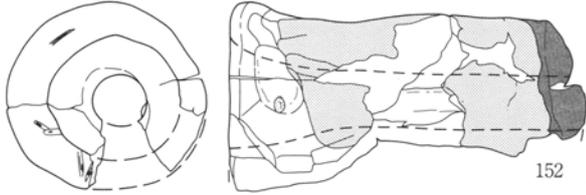


第108図 1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図 (11)

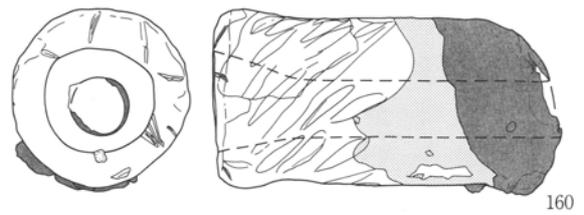
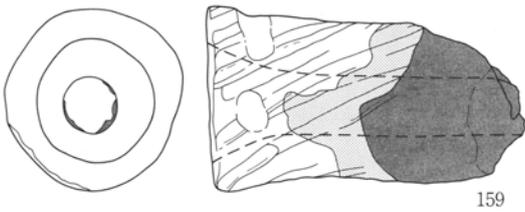
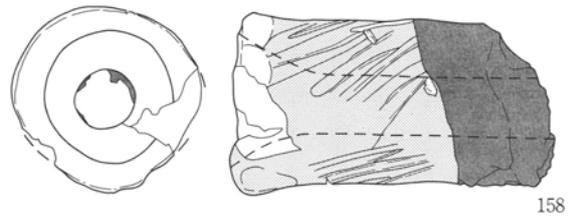
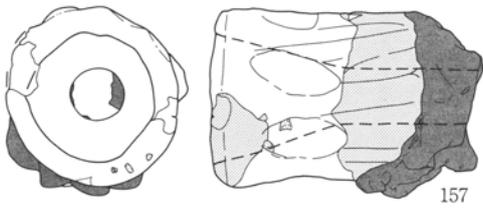
羽口B類



羽口C類

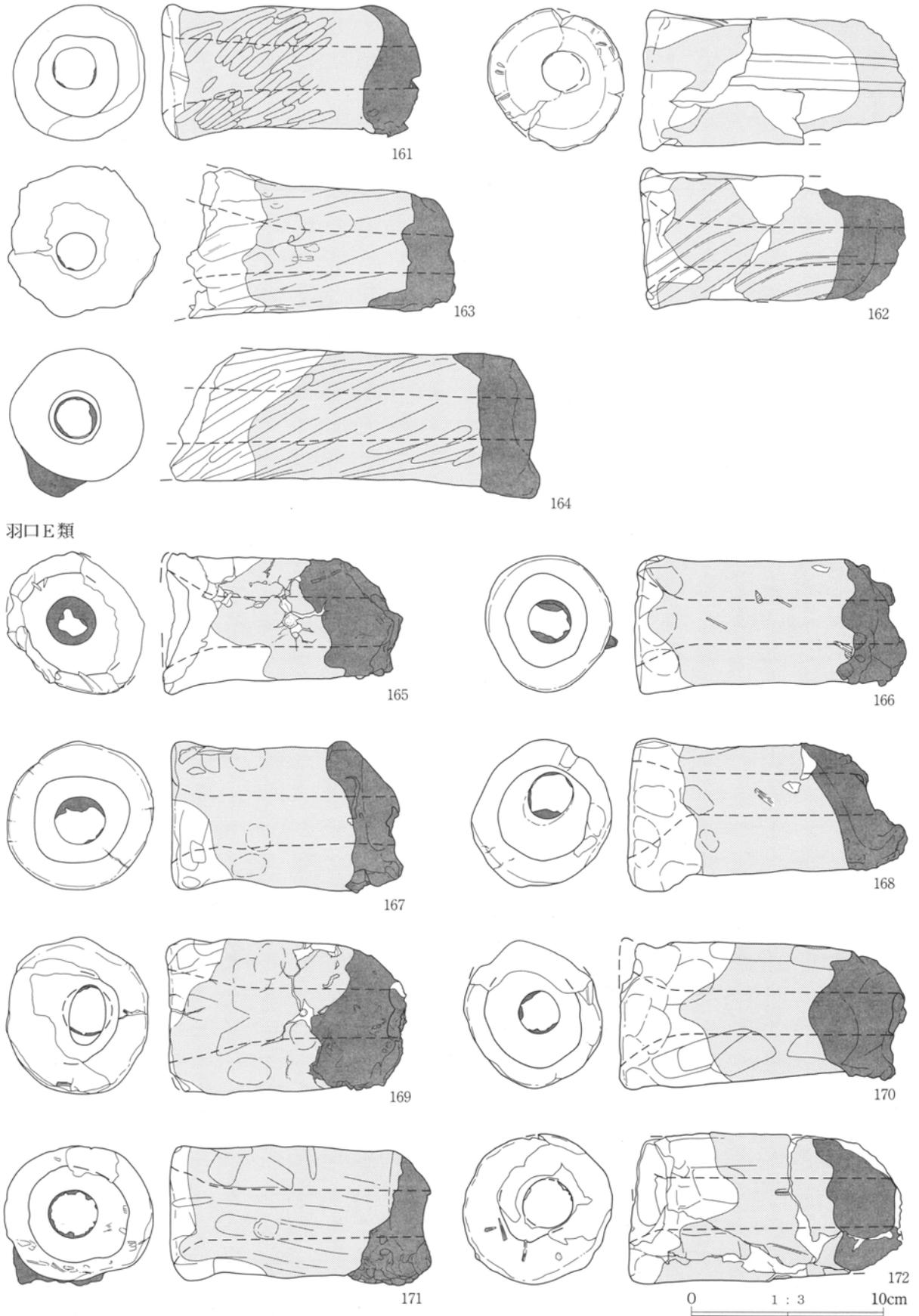


羽口D類

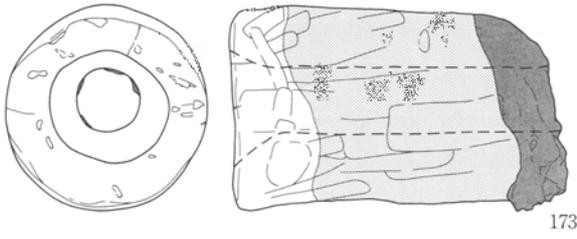


0 1 : 3 10cm

第109図 1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図 (12)

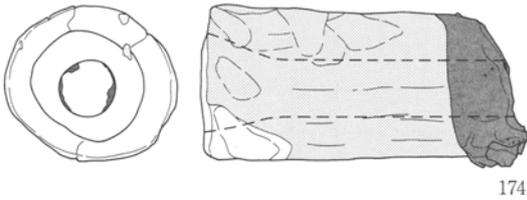


第110図 1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図 (13)

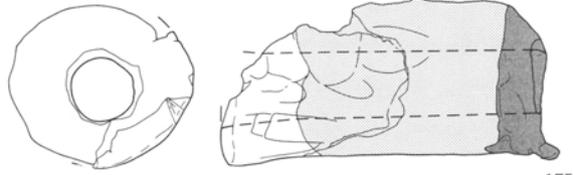


173

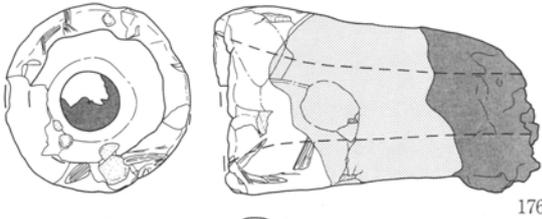
羽口F類



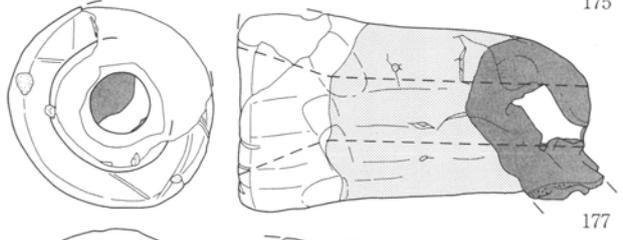
174



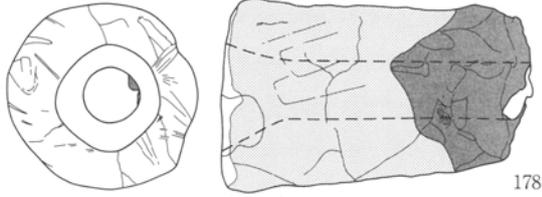
175



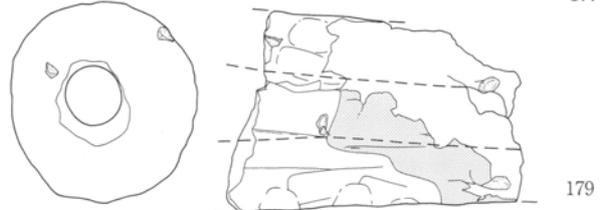
176



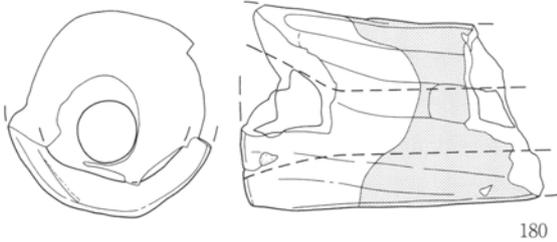
177



178

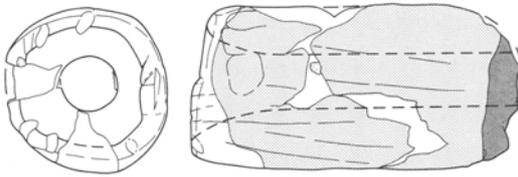


179

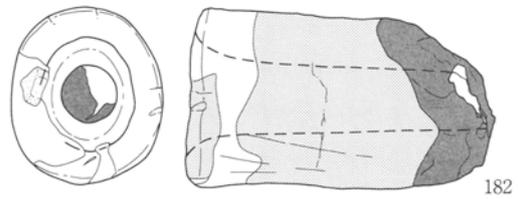


180

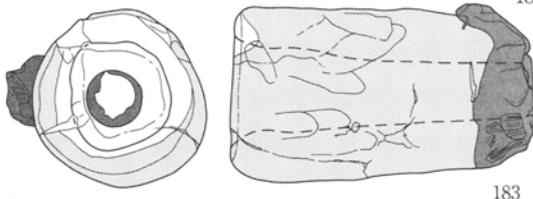
羽口G類



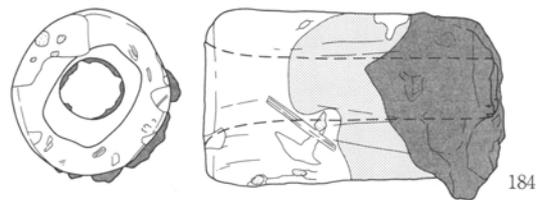
181



182



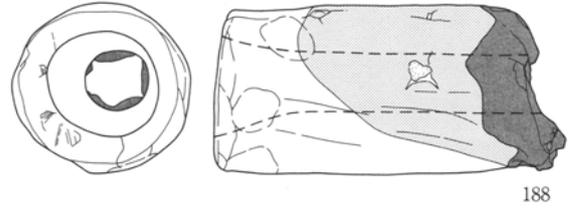
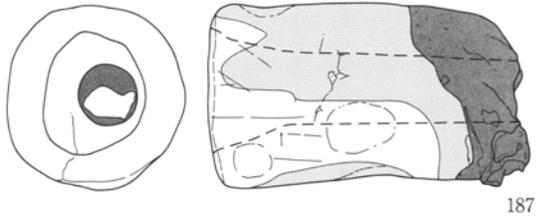
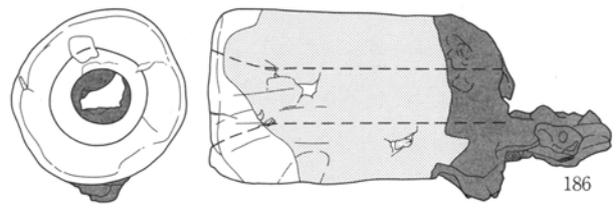
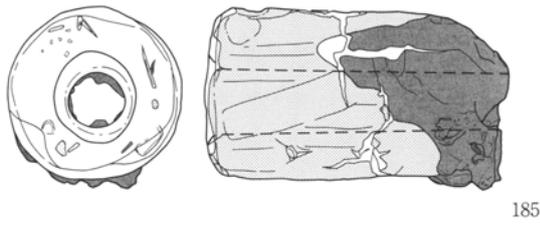
183



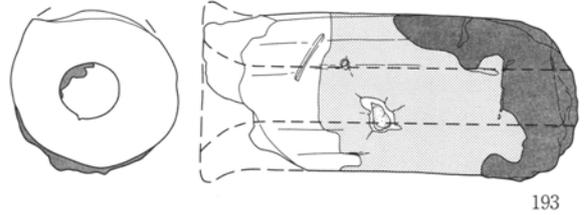
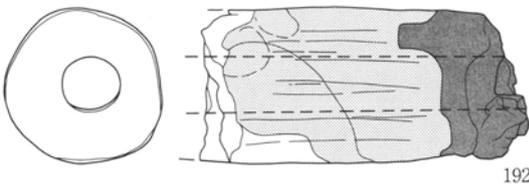
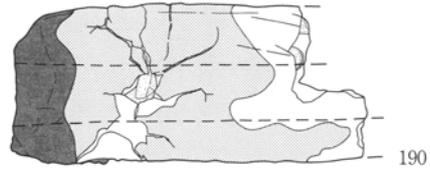
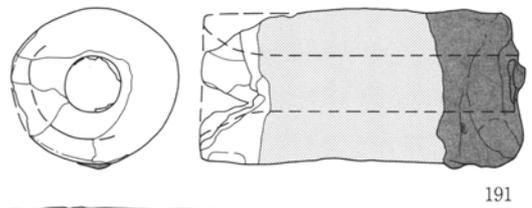
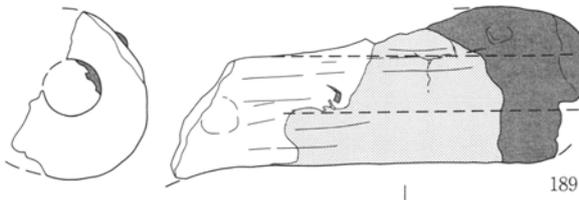
184

第111図 1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図 (14)

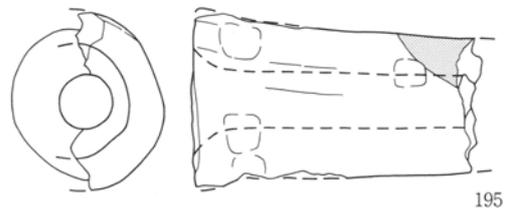
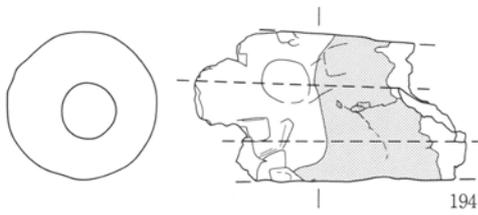
0 1 : 3 10cm



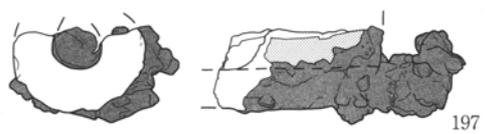
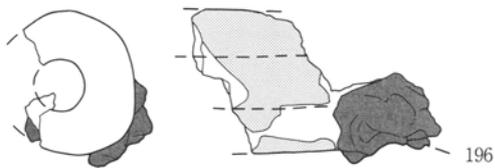
羽口H類



羽口I類



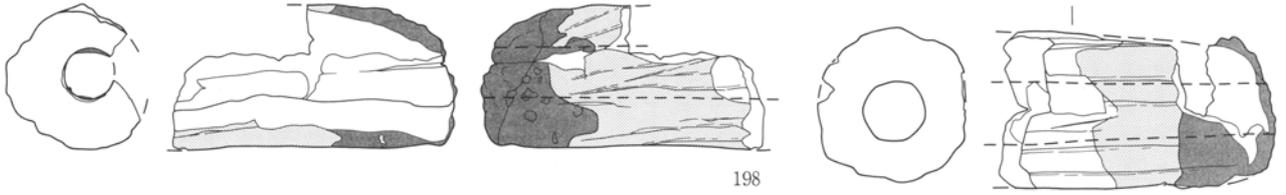
羽口J類



第112図 1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図 (15)

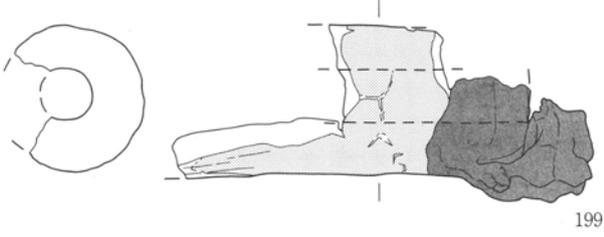
0 1:3 10cm

[2] 鍛冶関連遺構

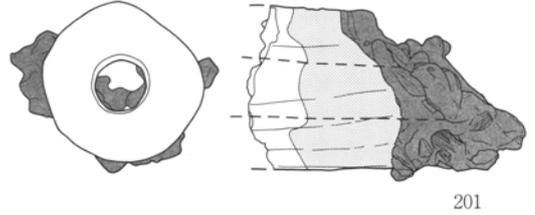


198

200

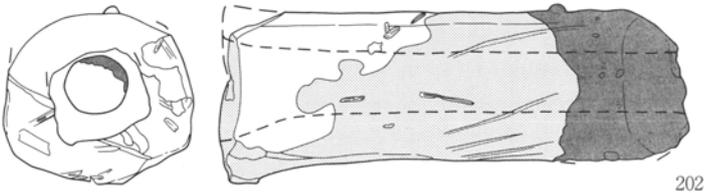


199



201

羽口K類



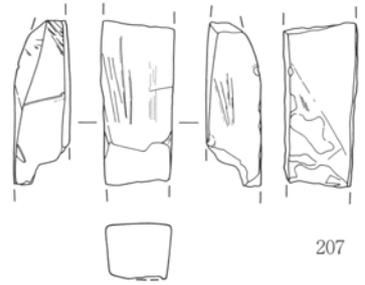
202

粘土質溶解物



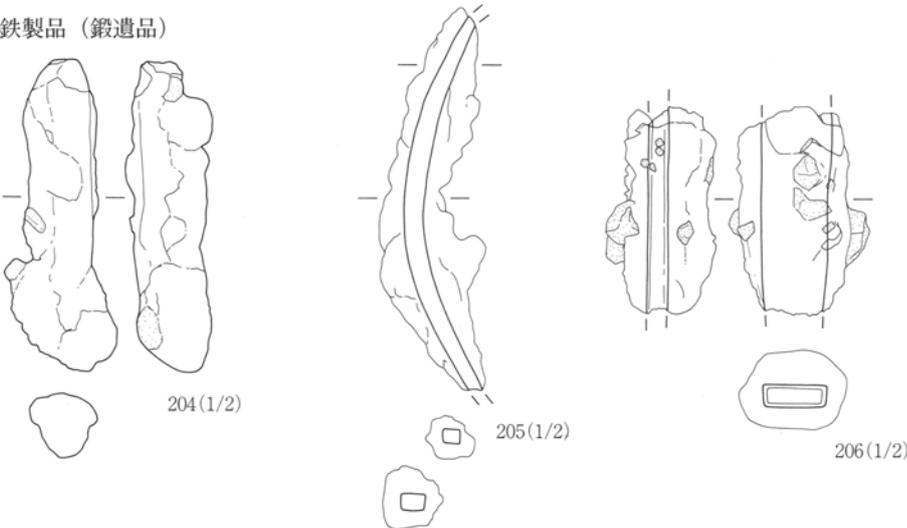
203

砥石



207

鉄製品 (鍛遺品)

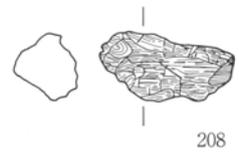


204(1/2)

205(1/2)

206(1/2)

炭



208

0 1 : 3 10cm

第113図 1区谷部排滓場出土 鉄関連遺物図 (16)

第4章 遺構と遺物

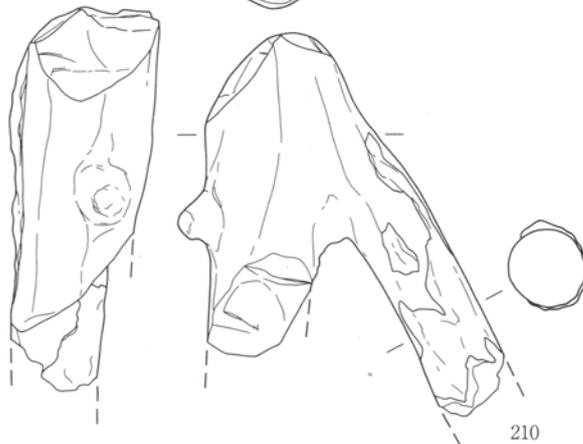
やりがんな
鉈



209

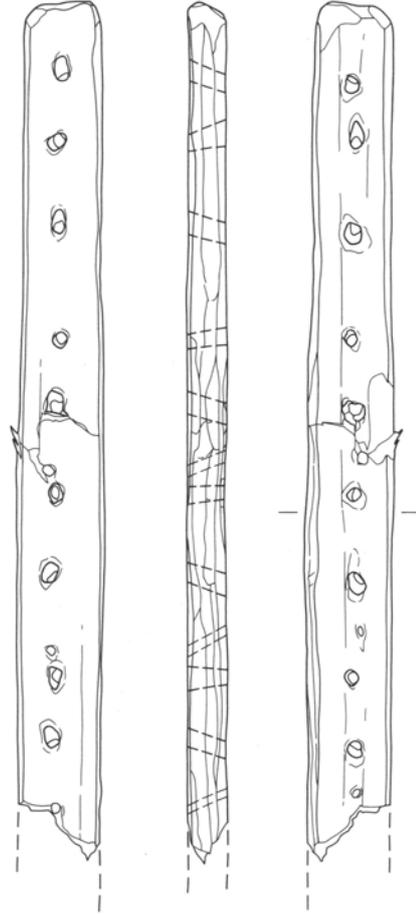


斧



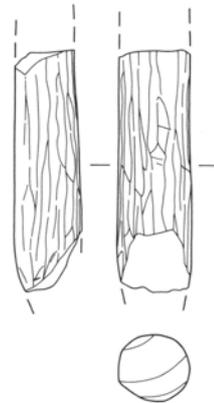
210

加工材 (孔あり)



211

加工材 (端部加工)



212

0 1 : 3 10cm

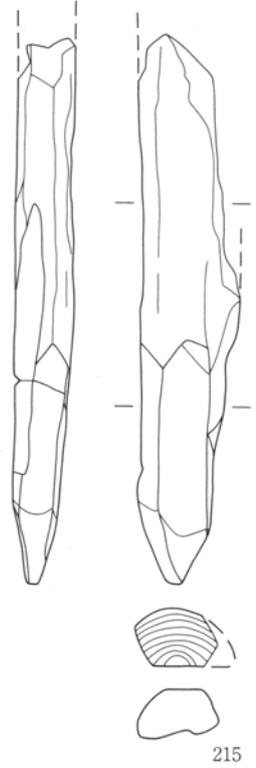
第114図 1区谷部排滓場出土 木器 (1)



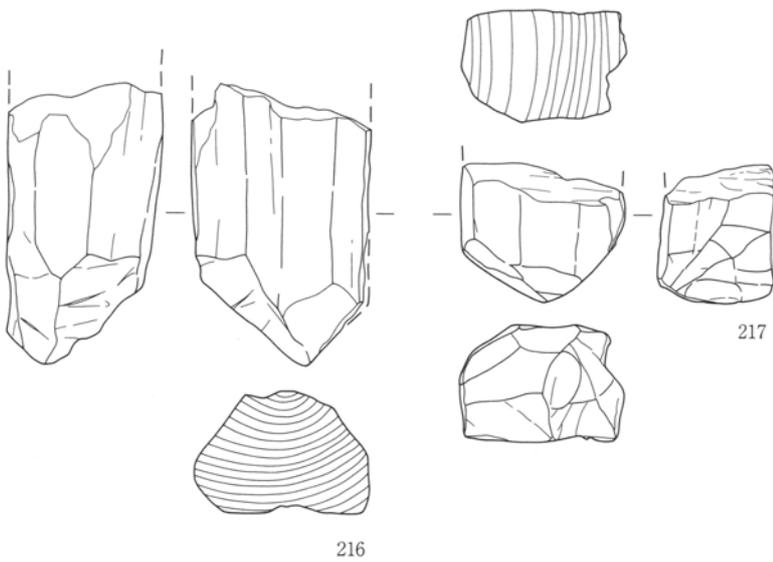
213



214



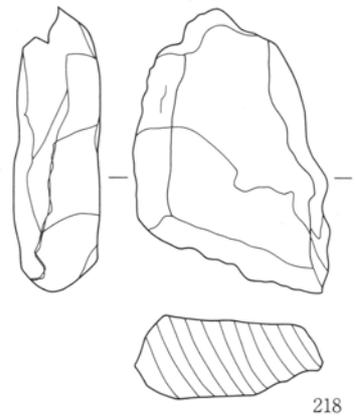
215



216

217

加工材 (板材)

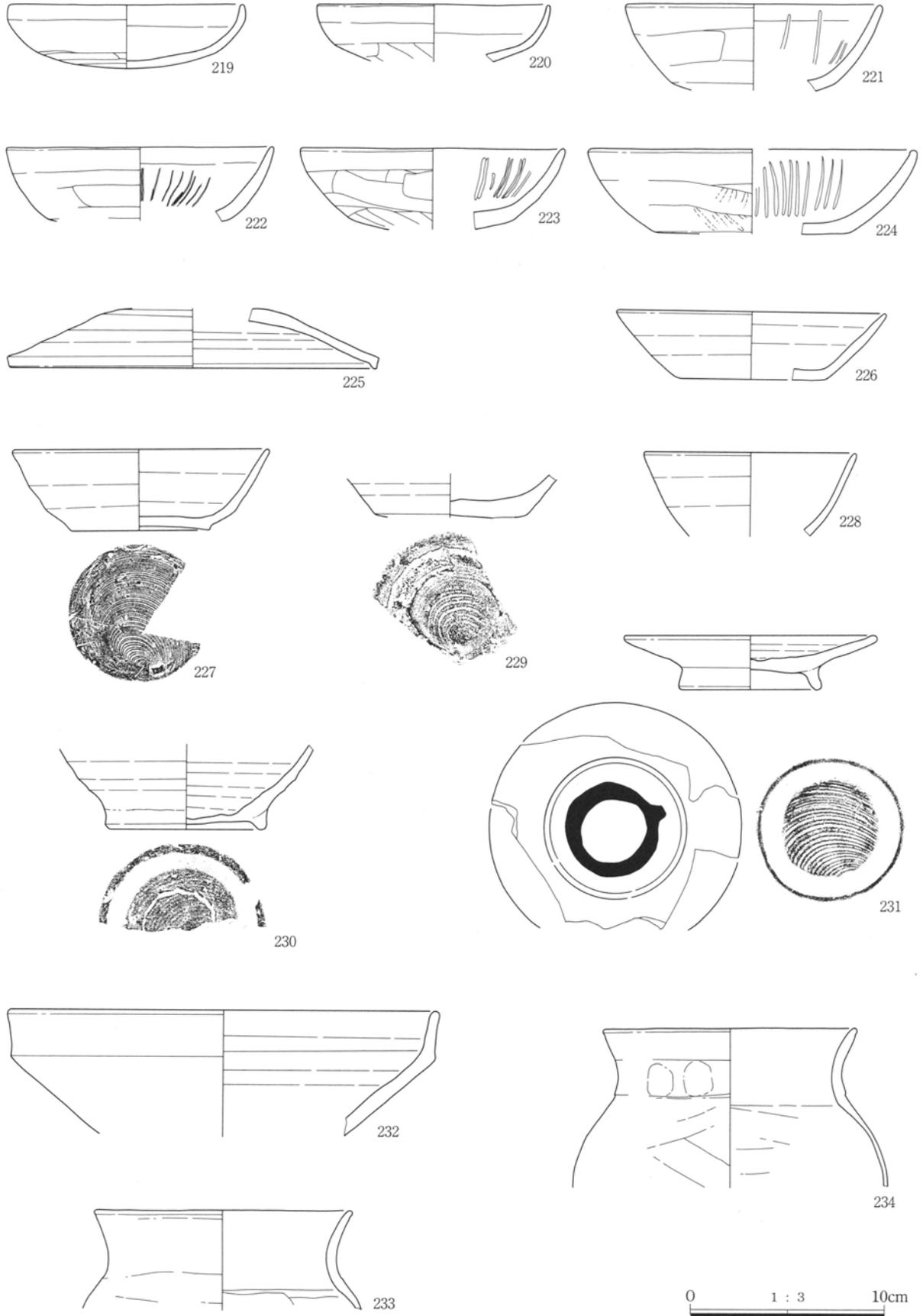


218

0 1 : 3 10cm

第115図 1区谷部排滓場出土 木器 (2)

第4章 遺構と遺物



第116図 1区谷部排滓場出土 土器

1 区谷部排滓場出土鉄関連遺物観察表

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
68	梘形鍛冶滓 (特大、含鉄・炉壁・炉床土付き)	排滓場	18.6	20.4	9.3	1575.0	5	H (○)	鍛冶炉の炉床に滓を残したまま炉床土、炉壁ごと剥離した梘形鍛冶滓。上面はほぼ全面が生きており、左下手寄りの側面が主破面となる。下面から上手寄りの側面は、全面が炉床掘り方からの剥離面となる。右側の炉壁が立ち上がったまま残されている。左側にも立ち上がり部があるが、この部分は羽口の頸部に成長した梘形鍛冶滓の側面端部である。上面下手側には2.5cm程の範囲で小さな破面が生じており、この部分が羽口の頸部との接点と推定される。右側の立ち上がった壁内面は薄く滓化発泡して、上手寄りでは僅かに垂れが生じている。炉底全体に充満した形の滓は二段梘形鍛冶滓となっており、中間部分には段がある。上段の梘形鍛冶滓の平面形は不整形で長軸方向が6.7cm、短軸方向が10cm前後を測る。下段の梘形鍛冶滓は、左側の羽口頸部に接すると考えられる部分が一段高い以外は、炉床に沿って広がっている。全体に左右が薄く短軸方向が厚みを持っている。現状で左右方向が16cm、短軸方向がおよそ14.5cm程を測る。下段の梘形鍛冶滓の外周部には1.5cm大以下の細かい木炭が多量に遺存する。推定される鍛冶炉の内径は18cm強と推定され、高さはおおよそ6~8cmと考えられる。平面形は円形から楕円形となる。下面には鍛冶炉の炉床土が分厚く貼り付いており、最大厚みは3.3cm程となる。下面中央部はやや平坦きみで、立ち上がりは強い楕円形を示す。炉床土は粉炭や滓片をまばらに混じえ、軽石混じりの灰色に被熱したものである。粘性にはやや欠けるためか僅かにひび割れが確認される。土質的には構成No.69の下面に固着する炉床土と似ている。
69	梘形鍛冶滓 (特大、羽口・炉床土・石付き)	排滓場	22.1	24.8	15.1	1300.0	3	なし	上面左側に羽口の7割程度が遺存している大型の梘形鍛冶滓。羽口上面から下手寄りには板状の軽石が乗せられたままで、表面の一部が滓化している。羽口の押さえを目的とするものと推定される。梘形鍛冶滓は炉床全体に薄く広がる形状で、中央部から右手がややまとまった滓部となっている。右側面から見ると炉床に貼り付いた0.7~1.5mm程の滓部とその上に乗る最大厚みが2cm程の梘形鍛冶滓部分に分かれており、1cm近い隙間を生じている。羽口は長さ11cmで先端部は黒色ガラス化して斜め上に向かい溶損している。先端部が部分的に脱落しながら用いられたために、凹凸のある不規則な滓化状態を示す。通風孔部の径は2.2cm、頸部には黒色ガラス質滓が垂れ落ちて梘形鍛冶滓側に癒着している。羽口基部の一部も残っている。胎土はスコリアを混える粘土質で、僅かにスサの混和が確認される。通風孔部の整形は斜め回転方向の削り、外面は長軸方向に向かう削りが連続する。基部寄りと中間部分に段があり、粘土単位の接合部の可能性もあり、梘形鍛冶滓の密度はやや低く内部にも木炭痕や、やや発達した気孔を残している。下面に固着する炉床土は、明瞭なスサを混えたもので、軽石や角閃石混じりのものである。灰白色に被熱している。羽口の先端部寄りの上面に乗せられた軽石は、不整形板状の13.7×10.0×4.2cm程のものである。上面や側面は自然面、下面は不自然な破面となっている。あるいは意図的に打ち欠かれているのかもしれない。なお、羽口先端部の溶損角度に比べると通風孔部が基部側に向かって下がりきみで、本来の使用時の角度より基部側が下がってしまっている可能性がある。当然ながら、羽口上面に乗せられた押さえを目的とする軽石の重みの影響も考えられる。また鍛冶炉は炉床全体が薄く滓化した上に、10cm大強の梘形鍛冶滓が生成していることも留意点である。羽口先の滓上面には1.7cm大前後の軽石、または羽口先端部破片が滓化して2片固着している。羽口本体はA類やB類のように短い形式の羽口ではなく、本遺跡の主体となるG類またはE類の羽口と推定される。先端部が不規則に欠落しつつ使用されているために最終的には短くなってしまっている。
70	梘形鍛冶滓 (特大、羽口・粘土質溶解物・炉床土付き)	排滓場	19.0	14.7	6.7	1260.0	3	なし	上面左上側に、羽口の頸部を残す梘形鍛冶滓。3片に割れているものを接合している。肩部3面に破面を残すが、全体的にはもとの形状を良く残している。破面数は5面を数え、肩部にも小破面が確認される。上面に半溶解の軽石を数多く固着する点と、下手側左寄りに鍛冶炉の炉壁滓の滓化部分を残すことも特色である。上面は全体に滓化して流動状になる。中央付近が僅かに窪み、下手側の側面が立ち上がる。上側に乗る軽石の半溶解物は、0.5cm大から2.4cm大と様々で、おおよそ30個以上が確認される。そのほとんどが滓上面に乗っている。羽口部分は頸部の小破片で、先端部の2.5cm程の長さのみが残る。通風孔部の壁面の一部と、外面を残している。羽口の外径は現状で5.1cmを測り、身厚は1.0cmから1.9cmである。細身の羽口といえる。頸部は、滓上面と接したり、左端部はやや滓にもぐり込んでいる。梘形鍛冶滓の部分は緻密で、下面の7割以上に鍛冶炉の炉床土が薄く固着している。炉床土は小さな軽石やスサを僅かに含むシルト質で、灰色に被熱している。下手側左半分は、梘形鍛冶滓の肩部から鍛冶炉の炉壁に沿って梘形に立ち上がっており、内面は紫紅色から灰褐色に滓化・発泡している。羽口の頸部に近い滓外面には5cm大の軽石が突出している。この部分は鍛冶炉の掘り方の地山部分を示すものであろう。羽口の胎土はスサを多めに混える粘土質。装着角度は弱い。なお、滓上面の半溶解の軽石の上面や周辺に、1.5cm大前後の黒色で粒状の滓が点在している。ただし、通常の粒状滓とは色調が異なり、軽石の半溶解物を覆うガラス質滓由来の可能性が大きい。

第4章 遺構と遺物

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
71	流動滓	排滓場	2.7	4.7	0.9	14.8	1	なし	S字状にうねった流動滓破片。側面や下面には細かい木炭痕が目立ち、上面の流動滓の表皮には微細な気孔が数多い。左側面に小破面あり。表皮の風化が進み光沢はなし。
72	流動滓	排滓場	4.2	8.1	2.0	65.0	1	なし	分析資料No.13 詳細観察表参照
73	椀形鍛冶滓 (特大)	排滓場	12.5	12.2	5.7	1033.0	3	なし	平面、楕円形をした特大の椀形鍛冶滓。上手側を中心に二次的な酸化土砂が厚い。上面は中央部が浅い窪みとなる。左側面は直線状に塗切れるが、破面かどうかは不明。下面は左右方向に長手の椀形で、右側部の立ち上がりは急。
74	椀形鍛冶滓 (特大、炉床土付き)	排滓場	15.9	12.3	5.2	1059.0	2	なし	平面、不整楕円形をした炉床土付きの特大の椀形鍛冶滓。左手側部と下手側の側部が破面で、右側の肩部は二段気味となる。上面中央部は浅く窪み、木炭痕が点在する。滓は大型化しているためか、結晶が発達して、破面の風化が激しい。気孔は中小のものがやや多い。側面から下面は浅い椀形で、灰色の石英質の石粒を交える炉床土が貼り付く。
75	椀形鍛冶滓 (特大、炉床土付き)	排滓場	10.5	13.5	6.2	809.0	3	なし	分析資料No.14 詳細観察表参照
76	椀形鍛冶滓 (大)	排滓場	12.5	12.5	4.5	621.0	2	なし	平面、不整楕円形をした完形に近い椀形鍛冶滓。上面の中央部から左肩部寄りが、大きく窪んだ流動状の滓部となっている。その壁面には小さな垂れが生じている。上手側から右側部にかけての肩部はしっかりしており、きれいな形態をなす。側面から下面は長手の椀形で、下手側の方が傾斜が緩やか。上手側には砂質の炉床土が薄く貼り付く。
77	椀形鍛冶滓 (大)	排滓場	14.6	12.2	5.3	633.0	2	なし	肩部に小破面を持つものの、ほぼ完形の椀形鍛冶滓。上面はほぼ平坦で左手寄りには粘土質溶解物が乗っている。右側は木炭痕や木炭をかみこむ滓表面となる。中央付近から斜め左上寄りか、幅1.7cm程、帯状に窪んでおり、工具痕の可能性を持つ。下面は浅い皿状で、上手側の炉床の荒れが窺える。部分的に木炭を多量にかみこむ。
78	椀形鍛冶滓 (大)	排滓場	15.0	11.0	5.5	929.0	4	なし	平面、不整楕円形をした大型の椀形鍛冶滓。上面の上手右寄りが主破面で、左側の肩部にも小破面が残る。上面は全体に窪んだ流動状の滓部となる。側面から下面は椀形で、炉床の一部の荒れが読みとれる。破面から見ると中核部の滓は密度が高く、下面沿いの気孔が目立つ。
79	椀形鍛冶滓 (大、粘土質溶解物付き)	排滓場	15.2	10.8	4.2	552.0	2	なし	平面、不整楕円形をした完形品に近い椀形鍛冶滓。上手から左側の肩部が小破面となる。上面は全体が大きく窪む流動状の滓表面となり、中央部にまとまって軽石の半溶解物が残されている。この半溶解物は構成No.80などとも共通する。滓は下半部の密度がやや低く、ガサガサしている。側面から下面は浅い皿形で、炉床土の剥離痕と炉床土の残存部が混在する。
80	椀形鍛冶滓 (大、粘土質溶解物付き)	排滓場	13.9	10.0	5.5	534.0	1	なし	平面、不整楕円形をした大型の椀形鍛冶滓。左側面2面と、右上手側の肩部が破面となる。上面の中央部にはまとまった軽石の溶解物が乗っている。羽口片や2cm大の軽石が主体で、表面が溶解してガラス質滓となる。破面には軽石自体が露出している。鳥羽遺跡の連房式鍛冶工房からの出土品とも共通した要素で、滓を素早く硬化させる目的か。また官営工房の技術ともいわれており、諏訪ノ木VI遺跡の鍛冶作業の性格を裏付ける可能性もある。
81	椀形鍛冶滓 (大、粘土質溶解物付き)	排滓場	16.2	10.9	5.7	739.0	2	なし	平面、長不整楕円形をした完形に近い大型の椀形鍛冶滓。左側面の肩部寄りと右側の肩部が破面となる。上面は粘土質の溶解物が短軸方向に向かい緩やかに盛り上がっている。本来の滓の上面は浅い椀形で、その上に粘土質の滓がかぶる形となっている。下面は短軸方向に長い椀形で、木炭のかみこみの残る炉床土の剥離面と、灰色の炉床部が混在する。
82	椀形鍛冶滓 (大、工具痕付き)	排滓場	11.0	10.8	5.5	531.0	1	なし	平面、不整形をした工具痕付きで完形の椀形鍛冶滓。上面の中央部が大きく窪み、肩部は2cm前後の幅できれいに廻っている。右側面は斜め手前上方に向かう径4cm程の丸棒状の工具によりねじ曲げられている。下面はきれいな椀形で立ち上がりが比較的急となる。灰色の炉床土が僅かに固着する。工具痕寄りの下面は炉床土と反応したガス質の滓層が残留せず、半流動状の滓皮が露出する。
83	椀形鍛冶滓 (大、工具痕付き)	排滓場	10.4	13.4	5.6	695.0	2	なし	平面、不整楕円形をした完形に近い椀形鍛冶滓。上面は大きく窪み波状の不定形な滓が残っている。上面右側に幅2.3cm前後の棒状の工具痕が、右手前側から差し込まれた形で残されている。下面は長手の椀形で左側部のみが荒れており、その周辺の滓表皮が紫紅色となる。
84	椀形鍛冶滓 (大、含鉄、工具痕付き)	排滓場	14.0	11.3	4.8	535.0	6	錆化 (△)	異形の工具痕付きの大型の椀形鍛冶滓。左右方向に幅広い楕状で、右側部は工具による変形のためか、上面中央部と上手側に向かう角度の異なる工具痕が残されている。左右方向のものは幅1cm以下の深い溝状で、上手側のは幅2cm以下のやや太い棒状となる。酸化土砂のために主破面を読み取りにくい、上手側の肩部と右側面の半分以上が破面と推定される。左側の側部は二段きみとなる。酸化土砂中には鍛造剥片を含む。含鉄部は右下手寄りの下半部か。

[2] 鍛冶関連遺構

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
85	椀形鍛冶滓 (大、炉床土付き、粘土質溶解物付き)	排滓場	15.5	11.7	6.1	908.0	3	なし	下面の3/5程度に灰色の炉床土の固着した、完形に近い椀形鍛冶滓。上面は半流動状のほぼ平坦な滓部で、中央手前寄りには軽石まじりの粘土質溶解物がまとまって残っている。短軸側の両肩部が小破面となる。下面の炉床土は灰色に被熱した砂質土で、5mm大以下の軽石を含んでいる。滓はやや緻密。
86	椀形鍛冶滓 (大、炉床土付き)	排滓場	13.3	9.4	5.1	465.0	4	なし	2片が接合して下面には炉床土が全面に残る大型の椀形鍛冶滓。左側部がシャープな破面で、椀形鍛冶滓としては7割方が遺存する。肩部が粘土質溶解物でせり上がる傾向を持つ。上面はほぼ平坦で中央部寄りに不定形な流動状の滓が重層する。上手寄りがやや楕状に窪んでおり、工具痕の可能性あり。下面は緩やかな皿状で立ち上がりが急。炉床土は灰色に被熱したシルト質。
87	椀形鍛冶滓 (大、炉床土付き)	排滓場	14.5	10.6	6.0	629.0	2	なし	平面、不整楕円形をした炉床土付きの椀形鍛冶滓。中央部が大きく窪み、左寄りに羽口の頸部から垂れた粘土質の滓が残る。右側の肩部が小破面となる。炉床土は最大厚さ2.1cmで下面から見ると帯状又は層状となる。この理由としては地山のシルト質の土砂が、炉床として用いられている部分があるからかも知れない。
88	椀形鍛冶滓 (大、羽口付き)	排滓場	11.3	12.6	7.0	584.0	3	なし	分析資料No.15 詳細観察表参照
89	椀形鍛冶滓 (中)	排滓場	10.0	9.0	6.1	298.0	4	なし	やや厚みを持った中型の椀形鍛冶滓。平面形は不整円形で、下面が長楕円形に突出する。立ち上がりは深いU字状。滓質はガス質で見かけの割には軽量。上半分には1cm大の木炭を大量にかみこんでいる。材は広葉樹材が主体。
90	椀形鍛冶滓 (中)	排滓場	11.5	11.9	5.1	361.0	3	なし	平面形状は異なるが、構成No.89とよく似た中型の椀形鍛冶滓。平面形は不整楕円形。上面の左手がやや窪む。右側面に不規則な窪みを残すが炉床の荒れか工具痕かは判別不能。上半部や上面に木炭を多量にかみこんでいる。最大の木炭は4.5cm大。炭材は広葉樹主体。
91	椀形鍛冶滓 (中)	排滓場	13.4	10.8	5.7	439.0	3	なし	平面、不整半円形した中型の椀形鍛冶滓。ほぼ完形品で破面は下手側の側部の小破面のみ。左側部が直線状となるのは炉壁の一部が直線状のためか。見かけの割には軽量で、内部がガス質の可能性が高い。下面は皿上で、立ち上がりのみが急となる。底面の上手寄りに幅3.5cm程の浅い窪みを持つ。工具痕か。
92	椀形鍛冶滓 (中)	排滓場	11.9	10.2	6.5	487.0	2	なし	平面、不整楕円形をした、大きき的には中型の椀形鍛冶滓。上面は中央部が小範囲で窪み、外周部に軽石を含む粘土質の溶解物が乗る。左側の肩部に小破面が伸び、やや重層的な滓であることを示す。下面は左側中央部と左側が突出し、部分的に丸棒状を示す。鍛冶具による炉床の傷に流入した滓部と判断される。
93	椀形鍛冶滓 (大、炉床土付き、粘土質溶解物付き)	排滓場	14.8	9.7	4.0	640.0	2	なし	平面、長楕円形をした扁平な椀形鍛冶滓。4片が接合する。ほぼ完形品で肩部には小破面が僅かに残る。上面は全体に大きく窪み、左上手寄りには粘土質の滓が残されている。羽口由来の粘土質の滓に加えて、軽石の二次的な投入があった可能性が高い。下面は浅い皿状で立ち上がりが急。部分的に灰色の軽石を混えた炉床土が残されている。
94	椀形鍛冶滓 (中、炉床土付き、粘土質溶解物付き)	排滓場	12.4	8.0	6.3	423.0	2	なし	下面にしっかりと鍛冶炉の炉床土の残る椀形鍛冶滓。左上手側部を中心に破面が残り、右側の肩部にも小破面が認められる。滓は二段ぎみで、上手寄りにさらに粘土質溶解物が乗っている。一部は2cm以下の小塊状で軽石等の熱変化した物である可能性が高い。滓はやや緻密。炉床土は混和物のない灰色の火山灰質で、部分的に層状のブロックが確認される。
95	椀形鍛冶滓 (中、炉床土付き、粘土質溶解物付き)	排滓場	11.1	9.8	4.6	380.0	4	なし	平面、不整円形をした中型の椀形鍛冶滓。左側部と短軸方向の肩部が破面で、それ以外はきれいな椀形をなす。上面には中央部を除いて、2cm以下の小塊状の粘土質溶解物が環状に取り巻いている。この溶解物は、破面を見ると明らかに軽石である。滓は緻密できれいな椀形を示す。下面には灰色のスサ混じりの炉床土が点々と残っている。
96	椀形鍛冶滓 (中、粘土質溶解物付き)	排滓場	9.5	9.9	3.3	303.0	3	なし	上面左側に黒色ガラスの粘土質溶解物が乗る椀形鍛冶滓。下手側の側面が破面でそれ以外は生きている。平面形は不整円形で左側部の弧状が弱い。滓は扁平で、破面の気孔は横方向に連続するものが目立つ。下面は皿状で、立ち上がりがやや急となる。全面が炉床土の剥離面である。上面の黒色ガラス質の溶解物は羽口先由来か。
97	椀形鍛冶滓 (中、粘土質溶解物付き)	排滓場	12.0	9.8	5.8	306.0	3	なし	平面、不整楕円形をしたガス質の椀形鍛冶滓。上面の中央部にまとまった流動状の滓部が残り、右寄りの肩部に小破面が確認される。上下面や滓内部にも1.5cm大以下の木炭を多量にかみこんでいる。炭材は広葉樹主体。上面の黒色ガラス質の滓は軽石由来ではなく、羽口先由来と推定される。
98	椀形鍛冶滓 (中、羽口あご付き)	排滓場	10.7	10.7	4.4	297.0	3	なし	上面左側の肩部が大きく窪み、羽口先の一部と羽口の頸部を支えた炉床土が残る椀形鍛冶滓。上面はほぼ平坦で肩部の小破面以外は破面が認められず、ほぼ完形品である。左右方向にやや長手で、羽口の頸部の窪みと共にやや異形の椀形鍛冶滓となる。滓は下半部が緻密で、上半部の中心部には木炭片や羽口片が目立つ。下面は皿状で軽石を含む炉床土の剥離面となる。

第4章 遺構と遺物

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
99	腕形鍛冶滓 (中、工具痕付き)	排滓場	11.0	8.5	3.2	260.0	2	なし	上面2ヶ所に工具痕を残す中型の腕形鍛冶滓破片。右側部と左側の肩部が主破面で、付着物の少ないイガイガした腕形鍛冶滓である。工具痕は上面に二段残されており、斜め右手前方向から差し込まれている可能性が高い。上段の工具痕は幅2.3cm程のヘラ状又は角棒状で、下手寄り下段の平坦面も3番目の工具痕かも知れない。下面は乱れた腕形で上手側に左右方向の段を持つ。表面は粉炭痕主体。
100	腕形鍛冶滓 (中、工具痕付き)	排滓場	10.4	6.5	6.3	310.0	3	なし	上面に幅2.0cm程のヘラ状又は角棒状の工具痕を持つ異形の腕形鍛冶滓。定形の腕形鍛冶滓の形態を持たず、外形や下面の形状も乱れている。滓の色調は黒褐色で、上面左上手を中心に紫紅色が強い。上面やや下手寄りの側面にはやや浅い樋状の工具痕が残されている。下面は半流動状で、部分的に突出部を持つ。
101	腕形鍛冶滓 (中、二連)	排滓場	19.5	6.4	4.1	619.0	4	なし	中型の腕形鍛冶滓が二個、接続したような形状を持つ資料。上面はほぼ平坦で、一体のように見えるが、下手側のやや小振りの滓との間に低い段が生じており、滓自体に前後がある可能性強い。あえて言えば下手側の方が新しそうである。側面から底面は通常の腕形鍛冶滓で、きれいな腕形の断面形を持つが、下手側の滓の側部がやや乱れている。大型の鍛冶炉の炉床で、先行する腕形鍛冶滓を横にずらしたまま、次の鍛冶作業を行ったものか。二段腕形鍛冶滓の生成条件と近く、ただ横にずれているだけか。
102	腕形鍛冶滓 (中、二段、含鉄)	排滓場	9.4	10.5	6.5	293.0	3	銹化(△)	中型の腕形鍛冶滓が上下に重層した二段腕形鍛冶滓。破面はごく小範囲で、本来の形状を残している。滓質はガス質で、上下の滓とも良く似ている。上面の滓の右側には1.5cm大の軽石の半溶解物が乗っている。下面の滓の側部には、下手方向から上手方向に向かう突出部があり、炉床に残された工具痕由来か。二段腕形鍛冶滓は上下の滓質が似ていても滓量が上段の方が少ないことが一般的で、精錬鍛冶の前後を示すと共に、連続作業を証明するものと考えられる。その意味では構成No.101と重なり方は違うが同類の二段腕形鍛冶滓である。
103	腕形鍛冶滓 (中、含鉄、粘土質溶解物付き)	排滓場	10.3	8.4	5.5	291.0	5	銹化(△)	平面、やや乱れた不整形をした中型の腕形鍛冶滓。上面の中央部は僅かに窪み、軽石由来の溶解物が残されている。肩部は左側部を除いて破面となる。滓質はややガス質で、細かい木炭を多量にかみこんでいる。下面は腕形とならず、左側部寄りが舟底状に突出し、含鉄部は下手側の下半部。
104	腕形鍛冶滓 (中、含鉄、粘土質溶解物付き)	排滓場	9.3	10.0	3.5	305.0	5	銹化(△)	平面、不整形をした扁平な腕形鍛冶滓。上面左手には軽石の半溶解物が乗っている。破面は左側と手前側の肩部に残されている。下面は浅い皿状で立ち上がりやや急となる。灰黒色の炉床土が点々と貼り付いている。
105	腕形鍛冶滓 (中、含鉄、炉床土付き)	排滓場	10.0	7.9	6.4	442.0	4	銹化(△)	やや厚みのある炉床土付きの腕形鍛冶滓。ほぼ完形品で下手側の側部のみ小破面が残る。上面は中央部が僅かに窪むものの平坦さみで、下面はかなり乱れた形態を示す。下面左寄りの下手が特に突出し、その外周部には鍛冶炉の炉床土が5mm程の厚さで固着している。炉壁部分は立ちさみで、滓の突出が錐状となることから、鍛冶具により炉床や炉壁が傷付いた可能性が高い。含鉄部は下手寄りの中核部。表面の酸化土砂中には鍛造剥片が含まれている。
106	腕形鍛冶滓 (中、含鉄)	排滓場	11.1	9.1	4.9	284.0	4	銹化(△)	付着物の少ない中型の腕形鍛冶滓。肩部に僅かな破面を持つが完形に近い。上面は波状で木炭に混って1.5~2cm大の突出部が散在する。突出部の内、左側部寄りのものはやや塊状で、鍛冶素材の形状を残している。下面は滓表面が全体に露出し、浅い腕形となっている。上面の各所に1.8cm大以下の木炭をかみこんでいる。材は広葉樹材主体。ガス質の滓。含鉄部は上手寄りの上半分。
107	腕形鍛冶滓 (中、含鉄)	排滓場	11.8	10.0	4.4	426.0	6	銹化(△)	平面、不整形をした中型の腕形鍛冶滓。上手側と右側部に小破面を持ち、含鉄部が上手寄りの残る完形品。上面は中央左側が窪み、それ以外は木炭痕の並ぶ平坦面。下面は上手側と下手側の二方に離れて突出部となる。全体的には上手側の方がひとまわり大きい。下手側の突出部の表面には軽石を数多く含む酸化土砂が固着する。含鉄部は上手側の滓の中核部。
108	腕形鍛冶滓 (中、二段、含鉄)	排滓場	9.4	9.4	4.5	383.0	8	H(○)	上下二段となった含鉄の腕形鍛冶滓。上下の滓のいずれもが扁平で、上半の滓が左上寄り2cm以上ずれている。破面は上面の滓の右下寄りに少々で、両者の中間の部分には木炭痕が強く、左上寄りにかけて一体化している。下面の滓は底面が浅い腕形で、鍛冶炉の炉床土が点々としている。炉床土は灰色に被熱したシルト質。含鉄部は上半のみで、磁着は強い。
109	腕形鍛冶滓 (中、含鉄)	排滓場	9.2	7.1	4.7	372.0	8	H(○)	右側面と上手側の側面が被熱となった中型の腕形鍛冶滓。上面は上手側が一段高い平坦面。下手側の部分は一段広がっている。左側面は直立さみで短軸方向に突出する底面に連なっている。下面の中央部から右下寄りに浅い樋状に窪んでおり、工具痕の可能性をもつ。含鉄部は上面上手側に広い。

[2] 鍛冶関連遺構

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
110	腕形鍛冶滓 (中、含鉄)	排滓場	12.1	9.4	5.7	377.0	5	H (○)	平面、不整形円形をした、まとまりのよい腕形鍛冶滓。肩部に小破面を持つ以外はほぼ完形品。短軸方向に長めで、上面が中央に向かい窪み、それに対応するように下面が突出している。上面は流動性が高い。滓の最大厚みは上手側となる。側面から下面は全体が粉炭痕に覆われており、粉炭そのものが一部に残る。含鉄部は滓の中核付近か。
111	腕形鍛冶滓 (中、含鉄)	排滓場	10.0	12.3	4.0	457.0	5	H (○)	分析資料No.16 詳細観察表参照
112	腕形鍛冶滓 (中、含鉄)	排滓場	7.2	5.8	4.4	111.0	4	M (◎)	部分的に酸化土砂が厚い含鉄の腕形鍛冶滓。上下面や側面は自然面と破面が混在している。滓部分は下手側に露出しており、鏝の吹いたガサガサした滓となっている。外面の酸化土砂中には軽石や粉炭が含まれている。含鉄部は中核部。
113	腕形鍛冶滓 (小)	排滓場	7.7	8.8	3.7	168.0	3	なし	平面、不整形円形をした二段ぎみの小型の腕形鍛冶滓。上下面の滓の間は5mm程度で、右上手側では一体化している。上下の滓とも左側部が破面となっているが、下半の滓の方が割れ口が大きい。上面は波状で小振りの滓にしては木炭痕が強い。下面の滓の底面は浅い腕形で、粉炭痕に覆われている。滓質は上下とも似たガス質。下面の滓の右側部に工具痕の窪みあり。
114	腕形鍛冶滓 (小)	排滓場	8.1	6.7	3.7	125.0	3	なし	左側部に小さな破面を残す小型の腕形鍛冶滓。上面はやや波状で、左下手側が窪み、面が平滑となっている。上手側は下面の腕形が強く、最大の肥厚部となる。滓は内部に微細な気孔を持ち、上面の表皮直下には隙間が生じている。上下面の一部は紫紅色が強い。
115	腕形鍛冶滓 (小、二段)	排滓場	8.4	9.4	5.4	174.0	3	なし	小形の腕形鍛冶滓が上下二段に重なった二段腕形鍛冶滓。上面の滓の下手側と下面の滓の右上手側は肩部が破面となる。下面の滓はほぼ完形に近い。上下の滓は中心位置がずれており、上面の滓は上手側にずれている。上下の滓の間には7mm大以下の木炭をかみこんでいる。腕形鍛冶滓としては上面の滓側が大きめとなる。
116	腕形鍛冶滓 (小、粘土質溶解物付き)	排滓場	11.6	7.9	4.0	198.0	2	なし	上面が粘土質溶解物に覆われた腕形鍛冶滓。側面は7割方が破面で、下面は鍛冶炉の炉壁と接していた剥離面となる。上面は流動状で垂れも生じている。羽口周辺の炉壁溶解物の一種でもある。滓質は大半が粘土質で、鍛冶滓の部分は比較的少ない。
117	腕形鍛冶滓 (小、工具痕付き)	排滓場	7.8	8.4	2.9	111.0	3	なし	上面の上手側に斜め下に向かう工具痕を残す腕形鍛冶滓。左右の側面と下手側は破面となる。工具痕は2.1cm前後の隅丸長方形の断面形を持つ棒状の工具によるものである。滓上面はほぼ平坦で、表皮直下に発達した大型の気孔の破面が露出している。気孔に混じっては中央にもう1ヶ所、平坦な工具の当たり痕を残す。滓質はガス質。上手側が変形しているのは工具痕による。
118	腕形鍛冶滓 (小、含鉄)	排滓場	(5.0)	6.6	3.5	96.0	7	H (○)	下手側の側部が破面となった小型の腕形鍛冶滓の半欠品。厚さは2cm強で肩部まで厚い。上面の窪みと下面の突出傾向が一致している。上手側の側部は直線状で、破面の可能性を持つ。含鉄部は分散ぎみ。下面には粉炭痕が認められる。
119	腕形鍛冶滓 (小、含鉄)	排滓場	7.1	5.3	3.3	161.0	7	H (○)	比重の高い小型の腕形鍛冶滓。上下面と左側部の一部が生きており、側部の9割方が破面となる。上面は平坦でシャープな木炭痕が残されている。下面は短軸方向に向かう弱い楯状の突出部を持ち、上手側の中央部が瘤状に膨らんでいる。側面の下面は浅い窪みとなり、工具痕の可能性を持つ。含鉄部は上面右寄りが主体。
120	腕形鍛冶滓 (小、含鉄)	排滓場	9.3	7.4	3.1	167.0	6	H (○)	平面、不整形半円形をした小型の腕形鍛冶滓。右側部に小破面を持つがほぼ完形品。横断面形が厚板状で、上下面が全体に平坦ぎみとなる。上面は小さな波状が連続し、左側の中央部が浅く窪んでいる。側部の立ち上がり急となる。左側部中央が全体に窪む。下面は皿状で、炉床土の圧痕と粉炭痕。含鉄部は下手寄りの上半部。
121	腕形鍛冶滓 (小、含鉄)	排滓場	6.2	5.0	3.0	126.0	5	M (◎)	やや鏝の強い含鉄の腕形鍛冶滓。上下面と右側部が生きており、他は破面となる。全体に厚板状で、右側面から下面は短軸方向に伸びる逆楯状。上面や側面には木炭痕による窪みが目立つ。含鉄部は広めで、右側部寄りを除いて全体に磁着が強い。
122	腕形鍛冶滓 (極小)	排滓場	6.1	5.0	2.6	34.2	2	なし	平面、不整形半円形をした極小の腕形鍛冶滓。左側が破面で右半分は生きている。全体にガス質のスポンジ状で比重も低い。上面は浅く窪み、下面はきれいな腕形に突出する。平面がきれいな丸みを持ち、典型的な腕形鍛冶滓となる。
123	腕形鍛冶滓 (極小)	排滓場	5.7	5.2	2.9	31.5	3	なし	左側が流動状となった極小の腕形鍛冶滓。右側部には小破面が連続する。扁平で左側から上手にかけてが不定方向に流動ぎみ。上下面には浅い木炭痕が残る。滓の左側が乱れているのは羽口先の通風の影響か。
124	腕形鍛冶滓 (極小)	排滓場	5.8	5.0	2.7	48.4	2	なし	内外面に木炭痕が目立つ極小の腕形鍛冶滓片。下手側を除く側面や下面の一部が破面となる。上面は平坦ぎみで側面や下面にシャープな木炭痕が認められる。上面の上手側から側部にかけては滓の風化が進み顆粒状となっている。腕形鍛冶滓としてはやや特異な外観を持ち、さらに大きな腕形鍛冶滓の端部破片の可能性あり。

第4章 遺構と遺物

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
125	椀形鍛冶滓 (極小、工具痕付き)	排滓場	6.1	5.1	3.5	83.2	2	なし	上面に帯状の工具痕を残す極小の椀形鍛冶滓片。下手側の側面に小破面を残す以外は外面が生きているが、きれいな椀形とはならない。表面の7割方が半流動状で黒みが強い。窪んだ部分は紫紅色となる。上面に残る工具痕は2cm前後の幅を持つ。工具痕からみて、工具そのものは幅広い平坦面を持つ角棒状か。下面の上手側に羽口先由来の滓も認められる。
126	椀形鍛冶滓 (極小、工具痕付き)	排滓場	6.8	4.8	3.2	91.2	2	なし	下手寄りに突き刺したような工具痕を残すやや異形の椀形鍛冶滓。上手側の側部のみが破面となり、全体的には短軸方向に長い楕状の椀形鍛冶滓となる。右側部中央は窪んでいる。あるいは工具痕かもしれない。下手寄りに残る上下方向の工具痕は下側に向かって僅かに細くなり、底面にまで突き抜けている。径1cm弱の歪んだ角棒状。工具そのものは先細りの方形断面を持つものか。
127	椀形鍛冶滓 (極小、含鉄)	排滓場	6.1	4.1	2.4	40.5	7	錆化 (△)	平面、不整形三角形をした発達した弱い極小の椀形鍛冶滓。上下面は通常の椀形鍛冶滓の表面観と似ているが、側部3面が直線状で、滓量の少なさを窺わせる。ほぼ完形品。各面には浅い木炭痕が残り、酸化土砂が目立つ下面は椀形で、粉炭痕が残される。含鉄部は中核部にやや広めと推定される。
128	椀形鍛冶滓 (極小、含鉄)	排滓場	6.5	6.2	3.0	77.0	4	錆化 (△)	下手寄りの上面に盛り上がった滓部を持つ極小の椀形鍛冶滓。肩部に小破面を残すがほぼ完形品。盛り上がりを除く下半の滓部分は扁平で、比較的まとまりがよい。上面には粉炭痕や粉炭のかみ込みがあり、下面は浅い凹凸を持つ椀形となる。一部は鍛冶炉の炉床の荒れを写したのものか。滓は緻密が低くやや軽量。含鉄部は下半全体に広がり気味。
129	椀形鍛冶滓 (極小、含鉄)	排滓場	6.1	5.6	2.3	40.0	5	H (○)	左側面が破面となった極小の椀形鍛冶滓。扁平で右方向の肩部に向かい薄くなっている。上面は大きな気孔の表皮が脱落した破面で、やや凹凸が激しい。下面は全体的には椀形となるが木炭痕がやや不規則で、部分的に波状となる。滓質は緻密で、破面を中心に風化が進んでいる。含鉄部は上手側の側部の肥厚部主体。
130	椀形鍛冶滓 (極小、含鉄)	排滓場	7.1	6.8	2.9	113.0	9	H (○)	酸化土砂に覆われた極小の椀形鍛冶滓。左側部下手寄りが破面で、他にも肩部に破面が推定される。上面は中央が全体に窪み、その上に滓片を含む酸化土砂が厚く乗っている。下面は椀形となり部分的に突出部を持つ。含鉄部の範囲は芯部に広がりが、まとまっているのは下面上手寄りか。
131	椀形鍛冶滓 (極小、含鉄)	排滓場	5.7	3.9	3.0	79.0	7	M (◎)	分析資料No.18 詳細観察表参照
132	椀形鍛冶滓 (極小、含鉄)	排滓場	5.1	3.3	2.3	41.0	6	L (●)	分析資料No.17 詳細観察表参照
133	鍛冶滓	排滓場	3.4	3.4	1.9	15.0	2	なし	各面に木炭痕が残る小振りの鍛冶滓片。ほぼ完形品。木炭痕は1cm大前後で、側面の一部が木炭痕の隙間に流れ込んだような形をしている。色調は黒褐色で付着物はない。側面や下面に不定形な突出部を持つ。表面には僅かに軽石片が固着する。
134	鍛冶滓	排滓場	3.8	3.1	2.0	17.2	3	なし	扁平で丸みを持った鍛冶滓。左側部に破面が残るがほぼ完形品。上面から右側面は半流動状。下面は椀形で丸みを持っている。表面には酸化土砂が部分的に強い。
135	鍛冶滓 (含鉄)	排滓場	4.1	3.3	2.8	21.2	4	H (○)	表面に中小の気孔が多量に露出した含鉄の鍛冶滓。全体に磨れてしまっており側面には小破面が点在する。上面は浅く窪み、下面は強く突出する。右側面には広葉樹材の木炭をかみこんでいる。含鉄部は左上半寄りの中核部。
136	鍛冶滓 (含鉄)	排滓場	3.8	2.6	2.2	24.0	6	M (◎)	軽石を多量に含む酸化土砂に覆われた鍛冶滓。錆の滲みや放射射れも生じている。短軸方向に長めの不整形楕円形で、上手側が破面となる。磁着は見かけより強い。酸化土砂が厚いのは含鉄部の影響による。酸化土砂中には鍛造剥片が複数含まれている。
137	鍛冶滓 (含鉄)	排滓場	4.4	4.3	2.4	41.0	6	M (◎)	分析資料No.19 詳細観察表参照
138	鍛冶滓 (含鉄)	排滓場	3.5	2.4	1.9	15.8	8	錆化 (△)	平面、不整形楕円形をした丸みをもった鍛冶滓。右側から下面の一部が生きており、左半分は表皮が脱落している。内部には隙間が多く、粉炭をかみこんでいる。下面には粉炭が面的に固着する。含鉄部は芯部全体で、鍛冶原料となった鉄塊の表皮のみが滓化したものか。磁着度は8と強い。
139	鍛冶滓 (含鉄)	排滓場	3.5	3.5	2.2	23.8	6	錆化 (△)	前者とやや似た外観を持つ含鉄の鍛冶滓。横断面形は小振りの椀形できわめて小さな椀形滓のような外形を持つ。下手側の側面は破面の可能性を持つ。上面には酸化土砂が厚く、含鉄部は下手寄り。本資料も鍛冶素材の表面が滓化したものと考えられる。
140	炉壁 (鍛冶炉)	排滓場	4.9	3.9	2.4	44.9	1	なし	厚さ2.3cm程の鍛冶炉の炉壁片。内外面は緩やかな皿状で、内面下端には鍛冶滓が固着している。滓部は結晶が発達し、炉壁表面は発泡している。炉壁内面は被熱して淡赤褐色となる。部位としては羽口下で、羽口の頸部が接していた可能性が高い。炉壁胎土は僅かにスサや粉殻を含み灰白色に被熱したシルト質。側面4面が破面で、破面には内外面に沿って走る細い筋目が確認される。貼り込んだ単位を示すものか。

[2] 鍛冶関連遺構

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
141	炉壁 (鍛冶炉)	排滓場	6.5	7.7	2.5	65.0	1	なし	内面が滓化・発泡した炉壁片。内面は凹凸が激しく、色調も黒褐色から灰褐色とまちまちである。滓化した部分はガス質。側面には細かい破面が連続し、裏面全体が碗形の剥離面となっている。炉壁胎土は初殻やスサに加えて軽石が多量に含まれている。特に内面寄りの方が軽石の微細片が多い。炉壁胎土自体はシルト質。
142	炉壁 (鍛冶炉)	排滓場	7.6	8.4	2.9	90.9	1	なし	内面に滓が広く貼り付いている炉壁片。側面は全面破面で裏面は炉壁土の剥離面となっている。全体に碗形に反り返っており、鍛冶炉の炉壁内面のカーブを示している。滓部分は上半部の表皮が脱落して結晶の風化した面が露出する。下半部は木炭痕の残る滓化発泡部分。炉壁胎土は短いスサを含むシルト質。
143	炉壁 (鍛冶炉)	排滓場	6.2	5.8	3.0	55.5	1	なし	分析資料No.12 詳細観察表参照
144	粘土質溶解物	排滓場	6.5	5.0	2.6	40.8	2	なし	表面がガラス質に滓化した小塊状の軽石主体の粘土質溶解物。左側面と下手側の側面に小破面が残る。軽石粒と推定される小塊は、1cmから2.5cm大で、およそ13個体が含まれている。表面全体がガラス化して灰白色から黒色となる。裏面下手側には炉壁表面に沿って伸びた流動状の滓が残されている。裏面は緩やかな皿状の剥離面となる。
145	粘土質溶解物	排滓場	6.5	6.2	2.6	62.4	1	なし	軽石粒を混えた黒色ガラス質の粘土質溶解物。上下面と側面の7割方は生きており、下手側左寄りの側部が小破面となる。緩やかに垂れた様な形状で、上面には1cm大の軽石が点々と巻き込んでいる。下面には小さく垂れがあり、部分的に木炭をかみこむ。
146	粘土質溶解物	排滓場	9.2	7.3	3.3	122.0	1	なし	多量の軽石粒が滓化した粘土質溶解物。上下面は自然面主体で側面には点々と破面が認められる。上面中央部は短軸方向に大きく窪み、2.5cm大以下の軽石粒が半溶解となって並んでいる。下面は軽石粒の滓化が進み、炉壁表面の滓化物と区別がつきにくくなる。木炭痕や元の軽石の隙間により凹凸も生じている。軽石の個々の表面は上面が淡緑色、下面では灰黒色主体となる。
147	羽口A類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 10.7			205.0	3	なし	通風孔部で割れた羽口の半欠品。先端部が溶損し、基部側が生きている。基部側に向かい僅かに開きぎみで、基部は部分的に外に開く。先端部は、丸みを持って溶損している。黒色ガラス質に滓化し、紫紅色が強い。外面の成・整形は長軸方向に向かう削りとナデによる。通風孔部は基部側に向かい僅かに開きぎみで、基部の3cm程がさらに広がっている。胎土は僅かにスサを混えた粘土質。1cm大以下の火山性の礫や、細かい軽石を含んでいる。 その他の計測値：中心部内径2.6cm 中心部外径(7.5)cm 基部内径(4.9)cm 基部外径(7.7)cm
148	羽口A類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 12.7			641.0	3	なし	外側に長軸方向に向かう帯状の削り痕が目立つ、ほぼ完形に近い羽口。体部は基部側に向かい直線状に開き、平坦な基部で終わる。先端部はきれいに滓化しており、顎部にはガラス質の滓に上面が覆われた2.5cm大の軽石が残されている。外面の削りは帯状で、その一部が窪んでいる。短軸方向の断面形は多角形になる。通風孔部は基部に向かい直線状に開き、基部の2cm程がさらに外に開く。胎土は多量のスサを混えた粘土質で、小さな軽石粒も数多く含まれる。羽口の溶損角度は弱い。下面が平坦な上半部の身厚が厚いことも特色となる。 その他の計測値：中心部内径3.1cm 中心部外径8.0cm 基部内径(4.6)～(5.0)cm 基部外径8.5～9.0cm
149	羽口A類 (先端部)	排滓場	残存長 9.3残			406.0	2	なし	基部側の欠落した羽口先端部破片。先端部は黒色ガラス質に滓化・溶損し、一部がひしゃげている。顎部には、粘土質溶解物と鍛冶炉の炉壁表面が剥離して残る。体部外面は帯状の削りによる成形。通風孔部は僅かに外開きとなる形状で、基部側では上下方向が潰れている。胎土はスサを僅かに混えた粘土質で、火山性の微細な石粒を含んでいる。外側の長軸方向に向かう削りが構成No.148と類似する。 その他の計測値：中心部内径2.2～2.9cm 中心部外径6.6～7.8cm 基部内径— 基部外径—
150	羽口B類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 9.6			340.0	4	なし	先端が滓化した短い羽口の完形品。先端の顎部には粘土質の滓と鍛冶滓の破片が残されている。体部外面は長軸方向に向かう帯状の削りにより丁寧な仕上げられている。基部はやや甘い平坦面。通風孔部は緩やかなラップ状に広がり、基部寄りのごく僅かな範囲が外開きとなる。胎土は多量のスサを混えた粘土質で石粒がきわめて少ない。外面に比べて通風孔部や基部の成形が粗い羽口である。 その他の計測値：中心部内径3.2cm 中心部外径6.6cm 基部内径4.3～4.7cm 基部外径6.3～6.6cm

第4章 遺構と遺物

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
151	羽口B類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 9.3			310.0	2	なし	構成No.150とやや似た短い羽口。体部から基部側の上半部は破面となる。先端部は黒褐色のガラス質に滓化し、通風孔部を塞ぎぎみ。顎部にも小塊状の滓が残っている。先端部から3.5cm程の体部外側にスカート状に広がる炉壁端部が残るのも特色である。壁は短軸方向に一線をなしてとぎれており、直線状の炉壁に羽口が埋め込まれている。先端部のみが鍛冶炉内に顔を出している装着状態の羽口である。外面はやや粗い削りにより成形され、指頭痕や長軸方向に走る粘土単位のつなぎ目も残されている。基部は平坦度が甘い。通風孔部は長いラッパ状に基部側に広がる。破面の一部は内外二層に分かれる。胎土は細かいスサとスコリアの混在した比較的緻密なもの。羽口B類の内、本例は構成された羽口の中でも装着状態が明瞭にわかるもので、羽口体部を炉壁内に固定していることがポイントである。 その他の計測値：中心部内径 2.8cm 中心部外径 6.1cm 基部内径 (3.5)cm 基部外径 (6.5)cm
152	羽口C類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 13.9			347.0	3	なし	先端部から体部をへて基部側の一部が欠落した羽口。細かく破片化したものを接合している。体部外面は基部に向かい僅かに広がっており、基部側の3cm程が外側に向かい大きく張り出す。先端部は狭い範囲が黒色ガラス質に滓化して、斜め上に向かい溶損する。体部は長軸方向に向かう削りの後、細かいナデにより仕上げられている。基部は平坦な削りの後に、滓片を含む土砂の圧痕が残されている。通風孔部は径2.2cm程の細身で、基部側の3cm程が外側に広がる。胎土はスサをまばらに含む緻密なもので、細かいスコリアも確認される。通風孔部の壁面沿いや基部側の外面のみが赤褐色の酸化色で、全体的には灰白色に被熱している。体部の成形が丁寧で、緻密な胎土を用いており、基部側の端部が外側に向かい広がりぎみのグループである。 その他の計測値：中心部内径 2.1cm 中心部外径 6.0cm 基部内径 4.8～5.0cm 基部外径 7.3～7.7cm
153	羽口C類 (先端部～基部、 粘土質溶解物付き)	排滓場	残存長 15.0			530.0	1	なし	先端部が斜めに溶損して、顎部に軽石を主体とする粘土質溶解物の残る羽口。羽口は短くなっており完形品。羽口体部は直線状で、基部側が僅かに開きぎみとなる。先端部の溶損は、平断面形とも斜め方向を向いている。鍛冶炉に対しても直角ではなく、平面角度がある状態で使用されている可能性を持つ。顎部に残る軽石は2cm大以下で、下面には厚さ1cm程の鍛冶滓が貼り付いている。羽口先端部と滓化した軽石の表面は黒褐色から淡緑色にガラス化している。外面は削りとナデにより丁寧に仕上げられている。基部は平坦な削り後、粘土単位の接合部を示す可能性を持つ筋状の窪みが認められる。通風孔部は細身の直線状で、基部側の2.8cm程は外開きとなる。胎土は微細な石粒を含む緻密なもの。 その他の計測値：中心部内径 2.1cm 中心部外径 5.8cm 基部内径 3.6～3.8cm 基部外径 6.0cm
154	羽口C類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 13.2残			509.0	3	なし	通風孔部の先端部が斜め上に向かい溶損して、基部側の端部が破面となった羽口。体部は丸棒状で、基部側の端部は短く外開きとなる。先端部の上面には低い瘤状の滓部があり、顎部には木炭痕の残る滓部が認められる。外面の成・整形は長軸方向に向かい細かい削りによる。通風孔部は直孔で、基部側のみが外面と同様、外開きとなる。胎土は細かい軽石などを含む緻密なもの。外面にはひび割れが目立ち、被熱による色調の変化が激しい。 その他の計測値：中心部内径 2.4cm 中心部外径 6.4cm 基部内径 — 基部外径 —
155	羽口C類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 13.5			603.0	3	なし	基部側に小破面を持つ以外は、ほぼ完形の羽口。体部は基部側に向かい僅かに太くなっており、基部の1.8cm程が外側に開く。先端部は斜め上に向かい黒色ガラス質に滓化し、顎部には細かい木炭痕の残るガラス質滓が認められる。体部外面の成・整形は丁寧な削りの後、水おきに近いナデ。基部はきれいな平坦に成形されている。通風孔部は直孔で、基部側の2.5cm程が外に開いている。胎土は僅かなスサや細かいスコリアを含む比較的緻密なもの。先端部の表面に軽石の溶解物らしき小片を残す。 その他の計測値：中心部内径 2.4cm 中心部外径 6.8cm 基部内径 5.0cm 基部外径 7.5cm
156	羽口C類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 15.7			686.0	2	なし	先端部がやや面的に溶損して僅かに垂れが生じている完形に近い羽口。体部は直線状で、上下方向に潰れている。基部側の1.5cm程が外側に開く。外面の成・整形は長軸方向に向かう丁寧な削りの後、基部側を中心にナデが強い。基部は2cm近い幅広の平坦面となる。通風孔部は直孔で、外面と同様上下に潰れており、基部側の3cm程が外開きとなる。胎土はスサを僅かに混え、軽石をまばらに含む緻密なもの。外面や内面にひび割れが発達し、部分的に滓が流入している。使用中にひび割れたために上下逆転して用いている。 その他の計測値：中心部内径 2.5cm 中心部外径 7.8cm 基部内径 (4.8)cm 基部外径 7.6～8.5cm

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
157	羽口D類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 10.6			446.0	3	なし	丁寧な作りで基部側が僅かに広がり、外面に斜め方向の筋状の圧痕の並ぶ羽口である。構成No.157・163は細い削りで外面が仕上げられ、削り方向が斜めに併走することから本類に含まれている。体部の中央付近が括れぎみで、通風孔部側はしっかりと広げられている。先端部上下面が溶損して左右が突出する、やや特異な溶損状態を示す。顎部には木炭痕の残る滓部が貼り付いている。長軸方向に向かう幅1cm以下の削りで成形され、斜め方向のナデにより仕上げられている。削りに混在して幅5mm以下の筋状の圧痕も残されている。基部は厚さ幅1cm前後のやや丸みを持ち、平坦部分のごく僅か。通風孔部の先端部寄りの4.5cm程は直孔で、基部側はラップ状に開く。穿孔は回転方向の削りによる成形。胎土は石英質の石粒を含む土器の胎土に類似する粘土質で、僅かにスサ様の混和物が含まれている。先端部の溶損状態が特異である。上下逆転して用いたか、先端の一部が欠落したまま使用されたものであろう。D類は胎土や成・整形の一致度が強い特徴のある羽口である。 その他の計測値：中心部内径2.2cm 中心部外径4.6cm 基部内径5.1cm 基部外径6.5～7.0cm
158	羽口D類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 12.6			487.0	3	なし	細身の棒状の体部から基部側が僅かに広がる羽口。先端部は全体が黒褐色に滓化して斜め上に向かい溶損する。通風孔部の外周部が突出して肩部が全体にやや細っている。先端部から顎部にかけて鍛冶滓が2.2cm大の塊状に固着する。外面の成・整形は長軸方向に向かう丁寧な削りの後、幅5mm以下の細長い筋状の圧痕が斜め方向に併走する。基部は平坦ぎみに成形され、別の削り痕や圧痕も残されている。通風孔部は先端から8.5cm程が直孔で、基部側がラップ状に開いている。穿孔方法は回転方向の削りによる。胎土は細かいスサや、やや多量の石英質の石粒や軽石を含む粘土質。斜めに走る圧痕は細身ながらD類の特色をすべて持っている。 その他の計測値：中心部内径2.4cm 中心部外径6.2cm 基部内径5.1～5.5cm 基部外径7.0cm
159	羽口D類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 12.4			470.0	3	なし	先端部上面が欠落したまま使用されているD類の羽口の完形品。先端側から基部側に向かい僅かに裾広がりがみで、基部側の一部がさらに外側に広がる。先端部は全体が滓化、溶損しており上面が大きく窪む。先端の上顎が4cm程の大きさに欠落した状態で使用されているものか。滓化状態は欠落部もそれ以外の部分も同様に部分的に紫紅色が強い。外面は長軸方向に向かう丁寧な削りの後、斜め方向の筋状の圧痕が全周に残る。上端の基部沿いに指頭痕が4.5cm程連続する。乱れてはいるが指紋も残る。基部を外側に広げたおりの圧痕か。基部は指頭による成形後、回転方向のヘラ削りにより平坦に整えられている。通風孔部は先端部から8.5cm程が直孔で、基部側は回転方向の削りによりラップ状に広げられている。後に長軸方向も削り痕が重なる。胎土は僅かなスサや石英質の角張った石粒を比較的多く含む粘土質。僅かに軽石も確認される。胎土の練りが甘いためか、ひび割れが部分的に目立つ。D類の中では基部がもっとも丁寧に仕上げられている。通風孔部や基部側は2回ないし3回の削りにより成形されており、僅かに段が認められる。構成No.160や161も先端部の一部が欠落したまま用いられており、ひび割れから欠落しやすい胎土であったことが読みとれる。 その他の計測値：中心部内径2.4cm 中心部外径6.1cm 基部内径4.6cm 基部外径6.7～7.3cm
160	羽口D類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 13.5			576.0	3	なし	先端部に新旧2ヶ所の破面を持ち、厚みのあるしっかりした基部を持つ完形に近い羽口。通風孔部の壁面は、基部側で表皮が広範囲に剥離している。先端部は斜め上に向かい溶損しており、顎部には僅かに滓が突出する。正面から見て右側は新旧2つの破面で、羽口のひび割れからの脱落である。他にも脱落に繋がる可能性のあるひび割れが生じている。外面の成・整形は長軸方向に向かう丁寧な削りの後、斜め方向に向かうやや幅広い圧痕が全周に残る。圧痕自体は個々には直線状で、連続している様に見えるものも別単位の圧痕である。基部は幅広くしっかりしている。端部はナデや削りにより仕上げられた平坦面で、長いスサの圧痕が複数残されている。乾燥時にワラの上に立てかけたためか。通風孔部は先端部から9cm程が直孔で、基部側の2.5cm程が僅かな外開きとなる。通風孔部の壁面には長軸方向に向かう削り痕が確認される。胎土は石英質の石粒や微細な石粒が目立つ粘土質。スサもごく僅かながら確認される。外面は丁寧に仕上げられ、斜め方向の叩き痕状の圧痕が目立つ。胎土のしまりには部分的に粗密があり、ひび割れの影響が使用時にも現れている。胎土に混和物が少なく、密度が高すぎるためかも知れない。D類の羽口は胎土や成・整形の一部を除いてよく似ている。 その他の計測値：中心部内径2.2cm 中心部外径6.6cm 基部内径4.0cm 基部外径7.0cm

第4章 遺構と遺物

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
161	羽口D類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 13.4			555.0	4	なし	先端部の片側が欠落したまま用いられている完形の羽口。体部外面は丁寧に仕上げられているが、基部側の成形は粗い。直線状の体部を持ち、基部側の3cm程は外開き。先端は正面から見て右側が4cm以上の範囲で欠落したまま用いられている。左下の部分も僅かに欠落。先端部は黒色ガラス質に滓化して顎部には木炭痕が残る滓部が薄く貼り付いている。左側部の先端と体部の境は発泡して、くすんだ赤褐色の錆色が広がる。外面の成・整形は長軸方向に向かう細かい削りの後、斜め方向に向かう幅5mm以下の細長い圧痕が全周に残されている。基部寄りの表面には指頭痕も見られる。体部外面の被熱は先端部から不規則な帯状で、被熱差は8段階にも及んでいる。外面のきめが細かい。基部は全体的には平坦化されているが、部分的に肩部が削りすぎていたり、端部が窪んでいる部分もある。通風孔部は先端部から10cm程が直孔で、基部側がラッパ状に広げられている。基部側の整形痕は縦方向と横方向の混在。胎土は僅かなスサや石英質の石粒を含む粘土質。外面は緻密に仕上げられている。内面の一部は練りが甘く隙間を生じている。ひび割れも先端寄りでは強い。D類を代表する羽口の一つである。先端部の一部が欠落したまま用いられており、ひび割れから脱落しやすい癖を持つ羽口である。胎土や外面の成・整形が類似した一連の資料。被熱状態が最も複雑である。 その他の計測値：中心部内径2.3cm 中心部外径6.3cm 基部内径4.4～4.6cm 基部外径6.7～7.2cm
162	羽口D類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 13.8			345.0	2	なし	先端部から体部の片側が欠落した羽口。4片に割れているものを接合した。外面が割れていたり、個々の破片の色調が異なるなど、D類としてはやや異質の部分もある。外面に斜め方向の筋状の圧痕がかるうじて読みとれることからD類に含めた。先端部は斜めに溶損しており、細身の筒状の体部をへて、短い特異な基部に至る。先端部は右側のみが残存する。斜め上に向かい溶損し、下半部は発泡。外面の成・整形は長軸方向に向かう削りの後、斜め方向に向かう筋状や帯状の圧痕が残る。基部側の端部1cm程が狭い範囲で広がっており、爪痕も残る。胎土の割れも生じている。基部は通風孔部の直線状の部分から短く開く。基部側の平坦面は外周部沿いの1cm程と狭い。基部の荒れも目立ち、表皮の半分以上が剥離している。3片に割れた色調も個々に異なっており、破片化した後の埋土の条件差を読み取れる。通風孔部は先端部から12.5cm程が直孔で基部側の開きは急である。幅も狭い。そのためか基部側の平坦面が狭くなってしまっている。胎土は微細な石粒を含み、きわめて少量のスサも混和されている。内外面の風化や破片化した後の埋土条件が異なっているためか色調もまちまちである。出土位置も個々の破片が微妙に異なる。 その他の計測値：中心部内径2.1cm 中心部外径6.6cm 基部内径5.0～5.4cm 基部外径7.0cm
163	羽口D類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 14.0残			568.0	3	なし	全体に作りの悪い歪んだ羽口。先端部は平面的に溶損し、基部側に向かって徐々に開いていく形態を持つ。基部側の端部は全面破面となる。外面の削り痕や浅い圧痕が斜め方向に走っていることからD類に含めているが、全体の作りや通風孔部の成形などはかなり異なっている。先端部は平面的にほとんど突出部を持たず滓化・溶損している。外面の成・整形は1cm強の幅を持つ削りや、細かい筋状の圧痕が斜め方向に残されている。整然とした感じではなく、削りやナデの練習に近い感じを持つ。長軸方向に全体が歪んでおり、特に基部側はその傾向が強い。基部そのものは欠落して存在せず、僅かに基部寄りを窺わせる角度の変化のみが残る。通風孔部の先端部は丸みを持ってしっかりしているものの、基部側に向かい徐々に太くなっている。工具痕も粗く、壁面には筋状の傷が残る。胎土はやや長めのスサをまばらに含み粘土質が強い。スサの一部は炭化して、まわりの胎土が吸炭している。羽口としては形態が乱れている。外面の削りや筋状の圧痕は一応、斜め方向にはなっているが、D類の大半とは違いが大きい。構成No.200やNo.202の外面の成形痕と類似した点もあり、J類またはK類と類似した、特異な個体かもしれない。 その他の計測値：中心部内径2.2cm 中心部外径6.5cm 基部内径— 基部外径—
164	羽口D類 (先端部～体部)	排滓場	残存長 19.2残			879.0	4	なし	きれいに滓化した先端部から丸棒状の長い体部を残す羽口。基部側が完全に欠落しているが、外面の斜め方向に走る筋状の圧痕はD類特有のものである。中間部分でひび割れて別個体になっていたものを接合している。先端部は黒色ガラス質に滓化して、やや面的に溶損している。顎部分には3.5cm大の滓が貼り付き、先端部は突出している。通風孔部は先端の一部が垂れて塞がり。外面の成・整形は長軸方向に向かう丁寧な削りの後、斜め方向に向かう筋状の圧痕が全周に残る。ひび割れから左右の色調が異なり、破損したためまばらに投棄している可能性が高い。基部側が欠落しており基部の形状は不明。外周部が部分的に広がりぎみとなっていることが確認される。通風孔部は長い羽口全体が直孔で、残存部分には基部側の広がりは確認されない。胎土は石英質の石粒や赤っぽい石粒が破面に目立つ粘土質。外面はきれいに成形されているが、基部側の破面には多量の石粒を含んだ粘土質の胎土が露出している。基部が欠けているものの、D類の中では最大の長さを持つ。使用の途中で割れて投棄されたものとすれば、他のD類も本来はかなり長かったことが推定される。 その他の計測値：中心部内径2.4cm 中心部外径6.5cm 基部内径— 基部外径—

[2] 鍛冶関連遺構

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
165	羽口E類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 12.5			415.0	5	なし	<p>やや太身のほてつとした形態を持ち、基部側の端部付近が外開きとなる成・整形の粗いE類の羽口。本資料は先端部から体部にかけて生きており、基部側の半分近くが欠落している。外面の成・整形が粗く、基部そのものも歪んでいる。先端部は黒色ガラス質に溶化・溶損しており、通風孔部周辺には凹凸が生じている。通風孔部そのものも外周部から潰れぎみで変形している。外面の成・整形は外周部に沿った短軸方向の削りで仕上げられている。1cm大の石を含んでいるためか、その部分からひび割れが生ずる。基部側の2cm程の範囲が外側に向かい指頭により押し広げられている。基部は狭い平坦面を作り出しているが歪んでしまっており、部分的に厚みが異なる。歪みは何かに接してしまったためか。通風孔部は先端部から8cm程が直孔で、基部側の3cm程が外開きとなる。基部が歪んでしまっているため通風孔部は楕円形となる。胎土はさまざまな大きさの軽石を含んでおり、細かい植物質のササが僅かに混和されている。ひび割れは軽石に起因している場合が多い。E類の羽口は作りが洗練されておらず、各所に歪みが生じている傾向が強い。胎土にHr-FA由来の軽石を多量に含んでおり、在地産の可能性が高い。F類やG類の一部も胎土には軽石が目立つ。</p> <p>その他の計測値：中心部内径 2.7cm 中心部外径 6.4cm 基部内径 (4.7)～5.6cm 基部外径 (6.4)～7.5cm</p>
166	羽口E類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 14.0			546.0	2	なし	<p>先端部が斜め上に溶損している完形の羽口。体部は筒棒状で、基部側の3cm程は僅かに外開きとなる。E類の中では比較的素直な形状で、G類の一部とも類似点を持つ。先端部は上顎が垂れ、下顎には黒色ガラス質の滓が盛り上がっている。正面から見て左上に1cm大の軽石粒が半溶解で2ヶ所に残る。外面の成・整形は長軸方向の帯状の削りの後、基部側は短軸方向に粗く削られている。指頭痕も残る。基部は内外面から伸びる肩部が傾斜し、狭い平坦面を作り出している。通風孔部は先端部から10.5cm程が直孔で、基部側の2cm強が外開きとなる。壁面に軸方向に向かう成形痕が目立つ。胎土は僅かにササを混えており、微細な軽石が多量に含まれた粘土質。先端部に軽石の半溶解物が残存している点は、構成No.144～146の粘土質溶解物や、構成No.153の羽口先下に半溶解物の軽石を多量に固着する資料と共通点を持ち、意図的に軽石を用いていることがわかる。</p> <p>その他の計測値：中心部内径 2.3cm 中心部外径 6.4cm 基部内径 4.1～5.0cm 基部外径 6.3～7.0cm</p>
167	羽口E類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 11.9			572.0	2	なし	<p>先端部が黒色ガラス質に溶化した中太で短い羽口完形品。先端の通風孔部は斜め上に向かい溶損し、上顎が通風孔部の上部を塞ぐように垂れている。先端部下半から顎部にかけては黒色ガラス質の滓が溜まっており、表面には2cm大以下の木炭痕が目立つ。外面の成・整形は長軸方向に向かう帯状の削りの後、基部側では短軸方向に向かう削りや指頭痕が混在する。基部寄りの外面には一旦削り取った削りかすが固着している。基部は幅広い平坦面を作り出しており、表面には粗い削りの後、土砂の圧痕が残る。基部の最大厚みは1.8cm。通風孔部の内面は凹凸が激しい。特に体部半ばから先端寄りにかけては大きく窪んでいる部分もある。羽口の成形時に粘土板を芯棒に巻き付けるのが甘い上に、穿孔具の方向がずれているためか。先端部から9cm程が直孔ぎみで、基部側は二段にラッパ状に開いている。削り幅が小さいため、より基部側の厚みがあることになる。胎土は僅かにササを含み、微細な軽石を含む粘土質。上面肩部から先端部にかけて小塊状の滓の塊が認められる。軽石の溶化物の可能性もあり、またそれに接するように短軸方向に向かうひび割れも生じている。</p> <p>その他の計測値：中心部内径 2.6cm 中心部外径 7.4cm 基部内径 4.5～5.2cm 基部外径 7.0～7.5cm</p>
168	羽口E類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 14.4			588.0	4	なし	<p>先端部がやや急角度で溶損し、上下が潰れているために横方向の外観が細くなっている羽口。基部側が約2cm程突出するが、部位により突出の程度が大きく異なる。体部が丁寧な仕上げられているのに比べて基部側の成・整形が粗い。先端部はやや丸みを持って斜め上に溶損している。先端部下半から顎部にかけては2cm大の軽石が溶化・発泡して、粘土質溶解物中に巻き込まれている。下面には木炭痕が残る。体部外面は長軸方向に向かう丁寧な削りの後、基部側は指頭と細かい削りにより外側に広げられている。部分的に突出度が違い、大きく突出した下半分は胎土にひび割れが生じている。基部は平坦に形作られているが、混和物中の軽石の脱落やひび割れにより下半分の変形が激しい。通風孔部は先端部から9cm程が直孔で、基部側3cm程がラッパ状に広げられている。羽口全体が上下方向に潰れており、先端側のみが比較的健全である。基部側の方が扁平度が高い。胎土は僅かにササを含み微細な軽石粒が目立つ粘土質。1cm大の石粒も含まれており、ひび割れの原因の一つとなっている。顎部に突出する粘土質溶解物中には軽石の半溶解物が含まれている。体部の成・整形が丁寧なのに対して基部側は乱雑な作りとなっている。</p> <p>その他の計測値：中心部内径 2.3cm 中心部外径 6.6cm 基部内径 4.5～5.0cm 基部外径 6.9～7.4cm</p>

第4章 遺構と遺物

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
169	羽口E類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 12.4			618.0	2	なし	<p>中太のやや細長い羽口。先端部は幅広く黒色ガラス質に溶化している。基部が半分程欠落しており、構成No.168やNo.170と同様、通風孔部の基部側が潰れて扁平になっている。先端部は全体が黒色ガラス質に溶化して、表皮は紫紅色が強い。下半部には凹凸が目立ち、その大半は木炭痕による。通風孔部がやや上に位置しており、顎側の肉厚が2.6cmと厚い。体部は長軸方向に向かう削りで成形されているが、基部は削りを浅くすることにより膨らみを持たせようとしている。突出の度合は弱い。基部は複数の削りによりほぼ平坦に仕上げられている。通風孔部は先端部から8.8cm程が直孔で、基部側の3cm程が外側に向かいラッパ状に広がっている。ただし、全周に渡り同じ様な削り方ではなく、片側は僅かな広がり、もう一方が極端に広がっている。また体部中程から基部側の横断面形も扁平になる。胎土はスサを僅かに含み、軽石や角閃石の目立つ粘土質。体部や基部の一部にひび割れが発達している。通風孔部が中心位置ではなく片側にずれているためか、先端部の溶損状態がやや特異である。通風孔部の横断面形が扁平化している羽口がE類には目立ち、通風孔部の軸のずれが目立つという点からも、雑な作りのグループといえる。ただし実用上はそう問題はないかもしれない。</p> <p>その他の計測値：中心部内径 2.1×2.6cm 中心部外径 7.7cm 基部内径 4.7cm 基部外径 7.5cm</p>
170	羽口E類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 14.7			614.0	3	なし	<p>先端部がやや細身で、体部が上下方向に潰れているやや長めの羽口。基部の1/3程が欠落しており、基部側の2cm程が雑な外開きとなる。先端部はやや丸みを持って黒褐色のガラス質に溶化しており、先端部下端にはガラス質の滓が小さく突出している。顎部には木炭痕が浅く残る。平面的には片側がやや強く溶損している。外面の成・整形は長軸方向に向かう幅広い削りや指頭痕が混在しており、表面状態は部位による変化が激しい。基部側は指頭により押し広げられた後に、小さく段をなす様な削りが加えられている。ただし雑である。基部は一応平坦化されているが、削りすぎの部分もあり部分的に波状となる。通風孔部は先端部から10.5cm程が僅かに外開きの直孔で、基部側がラッパ状に広がっている。通風孔部の壁面の整形は粗い。通風孔部の横断面形は基部側に向かい扁平となっている。胎土は僅かにスサを混じえ、微細な軽石を含む粘土質。破面にはスサの炭化物が露出している。やや長いまま使用を中断している羽口。通風孔部の扁平度が高く、先端部の溶損角度が斜め上でなく片側に寄っている</p> <p>その他の計測値：中心部内径 2.3cm 中心部外径 7.0cm 基部内径 4.7～(5.2)cm 基部外径 7.3～(7.7)cm</p>
171	羽口E類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 13.4			614.0	3	なし	<p>先端部が全周にわたり黒色ガラス化して、顎部にガラス質の滓が目立つ中太の羽口。体部は筒状で基部側の1.5cm程が雑に広がっている。半周程、明らかな段をなす様な削り痕を残す。先端部は溶損角度がはっきりせず左右の溶損が強い。先端部下半から顎部にかけては、ごつごつしたガラス質滓が溜まっている。凹凸の大半は木炭痕で顎部には木炭もかみこんでいる。体部外面は比較的きれいな削りが施されている。体部の中間付近には幅5mm程の帯状の圧痕が外面に沿って残される。基部側は部分的に段をなしており、突出部は削り残しにより形作られている。ただし雑な作りで、部位による変化が激しい。基部は平坦化はされているが全体に傾斜しており、小破面や混和されたスサ痕も目立つ。通風孔部は先端部から11cm程が直孔でラッパ状に広がる。直孔部分の壁面は丁寧な作りとなる。基部側は雑な削りとナデ。胎土は僅かにスサを含み、小さな軽石を混じえる粘土質。石粒もやや多めである。先端部が斜め上に溶損せず、左右方向が溶損がみなのは使用角度が弱いことを示しているものか。顎部のガラス質滓の下面も全体的に平坦きみである。体部外面に残る細い帯状の平坦面は、一部が削り痕で一部が圧痕である。羽口製作時の置き方にかかわる可能性もある。</p> <p>その他の計測値：中心部内径 2.6cm 中心部外径 6.8cm 基部内径 4.9～5.5cm 基部外径 6.8～7.5cm</p>

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
172	羽口E類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 14.0			668.0	3	なし	先端部の一部と基部側の端部が欠落している中太の羽口。体部が直線状で基部側が厚みを持つ。先端部に欠落部はあるが全体的にはきれいに滓化している。先端右側の溶損が強く、下顎部分には木炭痕の残る黒色ガラス質滓がやや突出する。左寄りには7mm大の軽石の半溶解物が固着する。通風孔部はやや上寄りに設けられている。外面の成・整形は長軸方向に向かう丁寧な削りにより仕上げられているが、実測側のみが粗削りのまま放置されている。そのためにヘラ削りの端部がはっきりと読みとれる。基部側の2cm程が半周程突出し、もう一方は体部の延長状態のまま直線状に成形されている。基部は平坦に整えられており、最大厚みは2.2cmにも達する。雑な削り痕の上に4mm大以下の多量の鉄滓や粒状滓に加えて鍛造剥片を咬み込んでいるのは、羽口の制作時に鍛冶関連遺物の散っている面に立て置かれたことを示している。通風孔部は先端部から11.5cm程が直孔で、基部側が僅かにラッパ状に広げられている。通風孔部が片側に寄っているために削りは身の厚い方が大きい。胎土はスサや滓片を含んでおり軽石も確認される粘土質。粉炭が破面には目立つ。体部の仕上げに精粗がある点や、通風孔部が片側に寄っているために基部側の削りを調整していることが読み取れる。また胎土中には滓片や粉炭が混在しており、基部の平坦面に滓片や粒状滓・鍛造剥片などの鍛冶関連遺物を含む点が注目点となる。鍛冶工房内で本羽口が作られ、床面上に立てて乾燥されている可能性が高い。構成No.173もこうした条件は似ている。 その他の計測値：中心部内径2.6cm 中心部外径7.7cm 基部内径(3.5)～(4.5)cm 基部外径7.0～(7.8)cm
173	羽口E類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 13.2			708.0	3	なし	先端部が素直に斜め上に向かい溶損した完形の羽口。体部はきれいな中太の筒状で、基部もしっかりと外開きに整えられている。基部の平坦面や通風孔部の仕上げも良好。先端部は全体が均等に黒色ガラス質に滓化して、斜め上に向かう溶損も典型的である。先端部から顎部にかけて黒色ガラス滓が溜まっており、顎部には木炭痕が残る。外面の成・整形は長軸方向に向かう丁寧な削りの後、ナデも全体に加えられている。基部側の1.5cm程が削り残された形で、指頭により広げられている。基部は幅1.7cmが平坦化され、その全面に鍛冶滓片や粒状滓、さらには粉炭や軽石粒などが圧着している。構成No.172と同様、羽口の製作時に生乾きの状態で鍛冶関連遺物の広がる面に立て置きされていたことを示している。通風孔部は先端部から11.2cm程が直孔で2cmが外開きとなる。通風孔部は全体が丁寧な作りで孔の位置も中心に近い。胎土はスサや軽石を含む粘土質。外面の成形が丁寧に軽石粒も微細である。外観や作りも丁寧な完形の羽口である。構成No.172と同様、羽口の製作が鍛冶関連遺物の広がる鍛冶工房の床面等で行われたことを物語る資料として注目される。 その他の計測値：中心部内径2.6cm 中心部外径7.5cm 基部内径4.8～5.2cm 基部外径7.5cm
174	羽口F類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 12.8			431.0	3	なし	先端部から基部側に向かい体部が直線状に広がっている一群をF類の羽口としている。このグループの羽口は基部が端正で作りは全般に良い。体部は基部側に向かい僅かに広がりながら伸びている。基部は膨らみを持たず素直に平坦化して終わっている。先端部は黒色ガラス質に滓化して斜め上に向かい溶損する。顎部には黒色ガラス質の滓が突出し、右寄りの肩部には1.5cm大の軽石の滓化物が突出するように固着している。体部からは長軸方向に向かう丁寧な削りが併行しており、基部側の3cm程は削りと指頭痕が共存する。基部はやや丸みを持った断面形を持ち、端部が平坦に整えられている。ヘラ削りの痕跡はなく、ナデと僅かな土砂の厚痕が残る。通風孔部は先端部から9cm程が直孔で、基部側の2cm程が外開きとなる。基部側の通風孔部は中心位置がずれている。外開きの傾斜は強弱がある。胎土は7mm大の軽石をやや多めに含む粘土質。外側には軽石から発達したひび割れが数多く、僅かにスサも含まれている。細身のきれいな羽口である。先端部の右側肩部には半溶解の軽石が固着している。通風孔部の壁面の一部は混入している軽石の影響か、小さな窪みが複数生じている。 その他の計測値：中心部内径2.2cm 中心部外径5.7cm 基部内径4.1～4.5cm 基部外径(5.9)～6.5cm
175	羽口F類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 13.3			380.0	3	なし	溶損角度の少ない細身の羽口。先端部から基部にかけて徐々に広がり、体部から基部の8割方が欠落している。内外面の成・整形は丁寧である。先端部は全周に渡りやや丸みを持って溶損しており、上顎の溶損が少ない。下顎部には小さく黒色ガラス質滓が突出している。先端部からみて左下が僅かに窪んでおり欠落部か。外面の成・整形は長軸方向に向かい削り幅が目立たない程丁寧に整形されている。基部寄りの4cm程の範囲は僅かに裾広がり、幅1～2cmの削り痕が部分的に明瞭に残る。僅かに残る基部は横断面形が丸みを持ち、平坦部は幅5mm程の頂部となる。通風孔部は先端から9cm程が直孔で、僅かに外開きになる部分がほとんど欠落している。先端部径が2.7cm前後に対して後端部の径は2.3cmと絞られている。胎土は僅かなスサや多量の軽石・石粒を含む粘土質。先端部径が細く基部側に向かい徐々に広がっている羽口。内外面が平滑に仕上げられている。破面が多く胎土の様子が良くわかる。 その他の計測値：中心部内径2.6cm 中心部外径6.5cm 基部内径— 基部外径(7.0)cm

第4章 遺構と遺物

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
176	羽口F類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 12.8			440.0	3	なし	<p>通風孔部の先端下半が滓に覆われ、体部は基部に向かって目立って広がりを持つ羽口。基部寄りの端部がやや脹らみぎみで、基部側の肩部が丸みを持っている。通風孔部全体も基部側に向かって広がる。先端部は黒色ガラス質に斜め上に向かい溶損し、通風孔部の半ばから顎部にかけては発泡したガラス質滓が覆っている。顎部にはやや垂れが伸びる。外面の成・整形は丁寧なヘラ削りで、基部寄りには削りが入り混じっている。またその上に指頭痕やスサ痕も散在する。基部は狭い範囲で平坦化されており、ワラ痕の圧痕が目立つ。乾燥時にワラの上に立て置かれた可能性が高い。通風孔部は先端部から後端部に向かい全体がラッパ状に広げられており、基部側2cm程が一段と広がる。通風孔部の整形痕は丁寧である。胎土は僅かにスサを含み、中小の軽石粒が目立っている。ひび割れの中心部や削り痕の一部には軽石が認められる。軽石や火山性の礫の一部は1cm大を越える。細身の羽口で、先端部から基部側に向かい角度を持って広がっており、通風孔部全体が細身のラッパ状に後端部に広がっている。構成No.177より一回り小振りであるが全体観が似ている。</p> <p>その他の計測値：中心部内径2.8cm 中心部外径6.2cm 基部内径5.0～5.4cm 基部外径7.0～7.2cm</p>
177	羽口F類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 14.4			590.0	1	なし	<p>先端部が急角度で溶損して、直線状に基部側に向かう形態を持つ羽口。基部側の上部は大きく欠落する。先端部は斜め上に向かって溶損しており、先端部からみて左上が大きく窪み、右上からはガラス質の滓が垂れ下がっている。左上の部分がひび割れから脱落したまま用いられているためか。顎部分にはガラス質滓が伸び小さな破面が巡る。外形の成・整形は丁寧にヘラ削りされており、きれいな丸みを持った横断面形となる。基部寄りの3cm程は削り痕の端部が並ぶ。基部寄りにはヘラ削りされているが削り方は緩やかで、肩部には回転方向の削り痕あり。基部は僅かに削り痕を持つ平坦面となり、ワラ痕がさまざまな方向に伸びている。乾燥時にワラの上に立て置きされたことを示す。通風孔部は先端部から基部側に向かい徐々に広がっている。基部側では表面が剥落して、胎土中の軽石が露出してしまっている。胎土は僅かにスサを含み1cm大以下の軽石が目立つ。ひび割れの一部は軽石を基点とする。細身で先端部から基部側に向かい徐々に広がる形態を持つ羽口。体部の基部寄りが僅かに脹らんでおり、肩部は丸みが目立つ。羽口先の一部が大きく窪んでいるのは、ひび割れから欠落したまま羽口が用いられているためか。</p> <p>その他の計測値：中心部内径2.5cm 中心部外径6.7cm 基部内径5.0cm 基部外径7.7cm</p>
178	羽口F類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 12.3			569.0	2	なし	<p>先端部に傾斜角がなく、上顎部分が前に突出している特異な羽口。羽口を回転させて用いている可能性を持つ。細身で先端部から基部側に向かい徐々に広がっており、基部側の端部は僅かに盛り上がる形態を持つ。先端部は黒色ガラス質に滓化しているが、上顎が溶損せず下顎部分が傾斜している。肩部に残る小さく突出した滓部が、少なくとも三方に見られるため、3回程回転させて用いられた可能性が高い。垂れや顎部の突出も複数残される。外面の成・整形は長軸方向の削りと、回転方向の削り痕が混在している。先端部の肩部の滓化の範囲には凹凸があり一様ではない。基部寄りの3cm程が僅かに外開きで、丸みを持った肩部となっている。基部は最大幅2cmを超える幅広いしっかりした平坦となる。表面には、ワラの圧痕が不定方向に無数に走る。通風孔部は先端部から9cm程が直孔で、基部側が二段に開いている。開き角度が小さいため基部側の厚みがある。胎土は1cm大以下の軽石を含み、僅かにスサの混在した粘土質。肉厚があるためか、ずっしりとした印象を持つ。先端部や顎部のガラス質滓が複数残されていることが注目される。そのため最終使用時には上端部が溶損まで至っていない。少なくとも2回以上回転に使用されており、先端部の溶損そのものよりも、12cmと短くなって使用を止めている可能性が高い。11～12cmがD類からG類の使用限界かもしれない。</p> <p>その他の計測値：中心部内径2.3cm 中心部外径6.8cm 基部内径3.8～4.0cm 基部外径7.0～7.5cm</p>
179	羽口F類 (体部～基部)	排滓場	残存長 11.5残			448.0	1	なし	<p>先端部と後端部の欠落した羽口体部破片。先端側から基部側に向かい徐々に広がる形態からF類としている。先端部は欠落してなし。外面の成・整形は長軸方向に向かう削りやナデが、小単位で連続的に残されている。基部寄りには指頭痕が認められる。基部は欠落してなし。通風孔部は現状の先端部側から約9cmが直孔で、基部側は段をなして開いている。欠落部が多くそれ以外は不明。通風孔部の壁面には斜めの回転方向の傷が残っている。胎土は僅かにスサを混え多量の軽石や火山性の小礫を含む粘土質。表面の軽石粒はナデにより見えにくい破面には数多く観察される。外面のナデや全体観は構成No.180と比較的近い。</p> <p>その他の計測値：中心部内径2.4cm 中心部外径7.3cm 基部内径 — 基部外径 —</p>

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
180	羽口F類 (体部～基部)	排滓場	残存長 11.8残			477.0	2	なし	先端部と後端部の6割以上が欠落した羽口片。先端側から基部側に向かい、徐々に広がっており、体部外面の削り痕が目立つ。先端部そのものが欠落しているが被熱痕は縞状で、良く使用されている。外面の成・整形は幅1cm前後の削り痕が長軸方向に併走しており、指頭痕やナデも混在する。基部寄りには僅かな開きや指頭痕により膨らみがある。先端側上面が一定の範囲で薄く滓化しているのは、欠落部を持ちながら使用されているためか。基部は幅1cm程の平坦面が数単位の前りにより作り出されている。通風孔部は現状の先端側から7.5cm程が直孔で、基部側に向かい緩やかに開いている。表面の剥離範囲が広く詳細は不明。通風孔部がやや扁平で基部側の開きに影響を与えている。胎土は1cm以下の軽石や火山性の小礫を含む粘土質。スサも僅かながら確認される。先端部が欠落しているので不明点も多い。全体観や胎土は構成No.179に似る。軽石や火山性の小礫から見て、在地の粘土と軽石とを混和しているものと考えられる。 その他の計測値：中心部内径2.5cm 中心部外径7.3cm 基部内径(5.4)cm 基部外径(8.0)cm
181	羽口G類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 13.0			402.0	2	なし	全体が筒状で基部が特段膨らまないグループをG類としている。胎土には軽石を含みE・F類とも共通点を持つ。棒状の形態のためか外面の削りやナデがきれいな直線状に伸びている。先端部上半が欠落しており、体部や基部も小さな欠けが生じている。先端部から基部にかけて直線状に伸びており、基部寄りの一部が僅かに外側に盛り上がっている。先端部は下半のみが残存しており、頸部の滓の出は殆ど認められない。頸部右側に1cm大の軽石の半溶解物が一ヶ所突出している。それ以外は丸みを持った黒色ガラス質に滓化。外面の成・整形は長軸方向に向かう細かい削り、体部の丸みが作られている。基部寄りには削りが粗く、一ヶ所削り残りが突出している。先端側と比べて基部側の成・整形は明らかに粗い。基部は幅5mm前後の一定しない平坦面となっている。表面にはワラ痕が数多く残る。通風孔部は先端部から9.5cm程が直孔で、細身のわりには基部側の開きが大きい。そのためか基部幅が狭くなっている。胎土はややスサを多めに含み、軽石も数多く確認される粘土質。ひび割れは大半が軽石を基点としている。細身で基部以外は丁寧に作られている羽口。基部側は厚みも不均一で高低差を持つ。 その他の計測値：中心部内径2.2cm 中心部外径6.3cm 基部内径4.3～4.7cm 基部外径5.5～6.3cm
182	羽口G類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 12.1			447.0	4	なし	先端部の上半が大きく窪んだまま滓化している羽口。体部は筒状で基部側の一部が僅かに膨らんでいる。通風孔の後端部が上下方向の楕円形となるのも特徴である。先端部は通風孔部の右側から下側が、薄皮状の滓に覆われている。上半左側は3cm強の長さで大きく窪んでおり、ひび割れから脱落したまま使用されているものか。逆に右下方向は丸みを持って全体に滓化する。外面の成・整形は長軸方向に向かう丁寧な削りとナデにより仕上がりは良い。基部寄り2cm程の所に浅い段を持っている。直線状に見える部分にも指頭痕が目立つ。基部は全体的に平坦化されており、内外面の肩部が狭い範囲で削られているためやや丸みを持って見える。全面が土砂の圧痕と僅かなワラ痕となる。通風孔部は先端部から僅かに基部側に向かい開ききざみで、4つ程の稜をへて基部に達している。見かけ上は細長いラッパ状になる。基部側の開きは横方向の削りによる。上下方向は楕円形の断面。胎土は僅かなスサや多量の軽石などを含む。基部側には2cm大を越える火山礫が露出しており、ひび割れの原因となっている。先端部上半の窪みは、通風自体に影響を与えている可能性が高い。またこれは通風孔部の片側が滓により塞がれていることから、風が横方向に漏れることにも繋がる。 その他の計測値：中心部内径2.5cm 中心部外径6.6cm 基部内径(3.5)～4.5cm 基部外径(5.6)～6.5cm
183	羽口G類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 11.9			472.0	3	なし	先端部の溶損角度が弱く、肩部や頸部に突出部を持つ完形の羽口。体部表面に凹凸があり、基部側にはひび割れも目立つ。外面の被熱が強く羽口自体の変形も考えられる。先端部は全体が黒色ガラス化し、左右の肩部や上面に突出部を持っている。頸部は木炭痕が並び特有の状態となる。右側の突出部は裏面に木炭痕を残し、かつては頸部であったことを窺わせる。少なくとも一回は回転して用いられている。そのためか溶損角度がほとんどない。体部は全体に緩やかに基部側に向かい曲っており、表面には長軸方向に向かう削り痕やナデが連続する。ひび割れも目立ち変形の原因ともなる。基部側はナデ主体で指頭痕が目立つ。基部は幅1cm程の平坦面となっているが、削り痕は僅かで短いワラの圧痕主体。通風孔部は先端部から基部側に向かい緩やかに曲っており、後端部の広がりほとんどない。後端部から2.5cmの所で帯状に窪んでおり、ひも作りの可能性もある。胎土は僅かにスサを含み、微細な軽石や砂粒の混在する粘土質。複数回用いられた可能性のある羽口である。先端側の頸部の滓や体部全体の被熱が強く、歪んでいる特色を持つ。 その他の計測値：中心部内径2.6cm 中心部外径6.5cm 基部内径4.0cm 基部外径6.3cm

第4章 遺構と遺物

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
184	羽口G類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 11.8			478.0	4	なし	先端部が面的に黒色ガラス化して筒状の体部を持つ完形の羽口。基部の上半部が小さく欠落する。軽石の混和が多いためか、ひび割れがやや目立つ。先端部の溶損角度はきわめて弱く、先端部全体が面的に黒色ガラス化している。顎部には木炭痕を残すガラス質滓が突出する。表面やガラス質滓の内部に細かい軽石の半溶解物が残されている。外面の成・整形は直線状の丁寧な削りとナデが残り、胎土に含まれる1cm大以下の軽石のため、ひび割れが発達した荒れた状態となる。基部は1cm強の幅を持つ平坦面を作り出しており、全面に短いスサや滓片の圧痕が残されている。通風孔部は先端部から徐々に広がっており、基部側の1.5cm程が下半部では開く。基部側の断面形は上下方向に長い楕円形で、通風孔部の位置がやや上に寄っている。胎土はやや多めの短いスサや多量の軽石と滓片を含む粘土質。軽石はひび割れの原因ともなっているが、粘土の収縮をおさえる意図で混和されている可能性もある。先端部の黒色ガラス滓部分は強い黒色で、顎部分から体部の中程までも全体に黒味が強い。その他の計測値：中心部内径2.5cm 中心部外径6.5cm 基部内径3.0～4.1cm 基部外径5.5～6.0cm
185	羽口G類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 11.8			496.0	3	なし	先端部が斜め上に溶損し、大きなひび割れを持つ体部から、切り落とされた様な基部を持つ羽口。通風孔部の基部側の開きが小さく、僅かに削られている程度となる。先端部は全体が斜め上に向かい溶損し、先端下半部から顎部にかけてはイガイガしたガラス質滓が突出する。顎部には木炭痕が連続する。外面の成・整形は長軸方向に向かう整然とした削り痕やナデが併走して、きれいな仕上がりのようになる。使用時に短軸方向と長軸方向に向かう大きなひび割れが生じたまま用いられている。基部は幅2cm近い竹輪状。表面にはワラの痕跡や滓片に加えて粉炭をかみこんでいる。通風孔部は先端部から11cm以上が直孔で基部側の狭い範囲が面取りされている。そのため後端部の肉厚が厚い。胎土は数少ないながらも大きな軽石や火山性の礫を含んだ粘土質。スサも確認される。混入している石類はひび割れの基点となっており、ひび割れの内側も滓化している。筒状で竹輪のような後端部を持つ羽口である。先端部の溶損状態は他と変わらない。ひび割れから脱落寸前まで使用されている。その他の計測値：中心部内径2.4cm 中心部外径6.6cm 基部内径3.1～3.4cm 基部外径5.7～6.4cm
186	羽口G類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 15.6			501.0	4	なし	羽口先の下半部に4.5cm程の長さを持つガラス質滓が突出した筒状の羽口完形品。表面には小さなひび割れが数多く、表皮がやや荒れている。基部側が僅かに外開きで幅広い平坦部を持つ。先端部は斜め上に溶損し、上顎が薄皮状に垂れ下がっている。下顎には黒色ガラス質の滓が板状に突出する。顎下と突出した滓の下面は1cm大以下の木炭痕が連続し、一ヶ所に木炭をかみこんでいる。右側には1.5cm大の軽石の半溶解物が確認され、顎部に伸びる滓中にも軽石が認められる。外面の成・整形は長軸方向に向かう丁寧な削りの後、基部寄りには回転方向の削りが残る。小さなひび割れが数多く、一部軽石が顔を出している所もある。基部側の端部は僅かに裾が広がり削り出されている。基部は最大幅1.7cm程の幅広い平坦面となる。削り痕は僅かで、土砂や粉炭の圧痕が主体。通風孔部は先端部から9.5cm程が直孔で、基部側は緩やかに削られて広がっている。そのため基部側は肉厚である。胎土は1cm大以下の軽石を多量に含みスサを僅かに含む粘土質。破面には様々な石粒が目立ち、外面に見られる以上に混和量は多い。竹輪状の基部を持つ羽口である。下顎の前面に伸びるガラス質滓は通常の腕形鍛冶滓とは異なる羽口先の粘土質溶解物主体で、軽石の半溶解物も混存している。このガラス質滓の水平方向から見て、羽口自体の使用角度はきわめて緩いことがわかる。構成No.69に類似した低角度である。その他の計測値：中心部内径2.3cm 中心部外径6.6cm 基部内径3.5～3.7cm 基部外径6.3cm
187	羽口G類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 12.5			522.0	3	なし	先端部がきれいな黒色ガラス質に滓化して斜め上に溶損した完形の羽口。僅かに基部側に向かい開がりきざみでF類の一部と重複する要素を持つ。先端部は全体が黒色ガラス化し上顎が垂れきみとなる。下顎はガラス質滓の破面となり、構成No.186の様な突出部の可能性が高い。顎部には僅かに木炭痕を残す。外面の成・整形は長軸方向に向かうやや雑な削りを残し、体部の中間付近では短軸方向に向かうひび割れを生じている。ひも作りによる粘土単位のつなぎ目を反映するものか。基部寄りには削り方向が一定しないが、僅かに裾が開く程度に仕上がっている。外面の被熱状態にはむらがある。基部は幅1.5cm程の平坦きみの端部となる。全面に短いワラの圧痕が残り、胎土に混和する目的のスサの上に乾燥時に縦に並べられたものか。通風孔部は先端部から9cm程が直孔で基部側の3cm程が大きく広がられている。特に下側の削りが強い。これは通風孔の位置が後端部では上側に寄ってしまうために調整する意図であろう。胎土はやや多めのスサと微細な軽石を含む粘土質。外面にもスサ痕がやや多く、通風孔部の壁面には長さ6.5cmを越えるワラ痕を残している。先端部の黒色ガラス質滓化が目立ち、顎部には前に突き出すように伸びている。外面の作りはやや雑となっているが、特に問題にはならない程度である。その他の計測値：中心部内径2.7cm 中心部外径6.9cm 基部内径3.8～4.5cm 基部外径7.0～7.3cm

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
188	羽口G類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 13.7			547.0	4	なし	<p>先端右側が斜めに溶損したやや長めの羽口。体部は筒状で基部寄りの一部が突出する。軽石の混和によりひび割れもかなり発達する。先端部は全体に黒色ガラス質に滓化しており、右側部が抉れて上顎には垂れが生じる。下顎の前面にはガラス質滓の破面があり、構成No.186やNo.187の様に前方に伸びていた可能性がある。顎部には木炭痕あり。外面の成・整形は長軸方向に向かい丁寧な削りとナデにより仕上げられている。基部寄りの上面の部分が1.5cm程盛り上がり、この部分から見ればE類的である。基部は幅1cm程の平坦面を作り出しており、表面にはスサ様の圧痕が残る。通風孔部は先端部から11cm程が直孔で、上下半は幅3cm程が大きく抉られている。後端部の通風孔位置がずれているために片側を大きく抉っているためであろう。胎土は1cm大以下の軽石を多量に含んだ粘土質で、スサも僅かに確認される。大半のひび割れは軽石を基点にしているが、使用には耐えている。先端右側が大きく溶損しているのはひび割れからの欠損か、上顎の垂れによる通風方向の変化によるものであろう。やや後者の可能性が強そうである。</p> <p>その他の計測値：中心部内径2.4cm 中心部外径6.7cm 基部内径4.0～4.5cm 基部外径6.2cm</p>
189	羽口H類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 16.5残			270.0	4	なし	<p>細身で全長が長く、基部側が開くグループをH類としている。基本的には胎土の混和物が少なく、内外面の成・整形が本遺跡では最も丁寧な一群である。体部の片側と基部側の端部が欠落している羽口の半欠品。先端部の1/4程が残存している。半欠品ではあるがH類のすべての要素をそなえている。先端部は溶損が弱く、やや平面的に滓化している。外面の成・整形は長軸方向に向かう非常に細かい削りの後、ナデにより削り痕も消されている。表面のきれいな羽口。基部側は幅広い酸化色を示している。先端部から12.6cm程が直線状で、基部側の4cm程が外開きとなる。基部は欠落して不明。通風孔部は径2.2cm程の完全な直孔である。丸棒状の髓抜棒のまわりに粘土を巻き付けて成形されたものと推定される。胎土は僅かなスサや軽石に加えて滓片を含む密度の高い粘土質。混和物は数えるほどで、良質の粘土を用いている。髓抜棒で通風孔部が形作られており、密度の高い精良な粘土を用いている点で、他の羽口のグループと一線を画する資料である。</p> <p>その他の計測値：中心部内径2.2cm 中心部外径(6.2)cm 基部内径— 基部外径—</p>
190	羽口H類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 14.0			292.0	3	なし	<p>先端部から体部片側の残る半欠品。体部が筒状で基部は不明ながらH類の特色を持っている。胎土が緻密で混和物が少ないためか、溶損角度がきわめて緩やかとなる。先端部は表面のみが僅かに滓化している程度である。顎部には黒色ガラス質の滓が薄く貼り付いている。外面の成・整形は基本的には削りで、密度の高い胎土と丁寧なナデにより外面の平滑度が極めて高い。基部側の色調は酸化色が強い。僅かに混入している軽石のためにシャープなひび割れが生じている。基部は欠落して不明。通風孔部は径2.2cm程の直孔ながら先端部側が壁面のひび割れにより3mm程太くなっている。穿孔は髓抜棒による。壁面は平滑。胎土にはややスサが目立ち、1cm大の軽石や石粒が含まれているが数は少ない。胎土自体は緻密な粘土質。石粒を基点にひび割れが生じる。混和物の少ない胎土を用いているため、ひび割れは発生しているが溶損は極めて少ない。なおE類の羽口は全長が長く、持ちも良く、量産型の羽口と考えられる。</p> <p>その他の計測値：中心部内径2.2cm 中心部外径6.3cm 基部内径— 基部外径—</p>
191	羽口H類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 12.7			398.0	2	なし	<p>外面の仕上げが良く筒状で細身の羽口ということからE類に含めているが、胎土には軽石がやや多い。体部から基部側の7割方が欠落している。先端部は平坦ぎみに滓化して垂れも少ない。右側には1.5cm大の軽石の半溶解物が固着している。顎部はややごつごつして、ガラス質滓の厚みがやや厚い。外面の成・整形は丁寧な削りとナデで平滑度は高い。小さい単位で削っているためか部分的にやや波状となる。基部側の酸化色はH類の5点の中では強い。基部は幅8mm程の狭い平坦面をなす。残存部位が小範囲で不明点が多い。通風孔部の径は2.2cm程で髓抜棒製の可能性が高い。先端部から10cm程が直孔で基部側がラッパ状に開いている。胎土には1cm大の軽石がやや多く、僅かにスサも含まれている。胎土の面から見ればH類にするにはやや問題があるかもしれないが、内外面の仕上げりはH類と共通する。</p> <p>その他の計測値：中心部内径2.3cm 中心部外径6.0cm 基部内径(4.3)cm 基部外径(5.7)cm</p>

第4章 遺構と遺物

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
192	羽口H類 (先端部～体部)	排滓場	残存長 12.8残			400.0	2	なし	全体が細身でスマートな羽口破片。先端部から体部途中までが残存する。先端部は正面から見て右上部に小破面があり、左側は大きく窪んでいる。顎部には木炭痕が残る黒色ガラス滓が僅かに突出する。1cm以下の滓化しつつある軽石も含まれている。通風方向の変化による滓化範囲の極めて狭い羽口先である。外面の成・整形は細いナデが長軸方向に走る以外は平滑度が高い。シャープなひび割れが生じており、一部ひび割れに沿って酸化色が広がっている。基部寄りには明るい酸化色。基部は欠落して不明。通風孔部は径2.2cm程の極めてきれいな直孔で髓抜棒製を窺わせる。壁面に残る回転方向の擦痕もそれを傍証する。胎土は僅かに軽石や滓片、さらにはスサを含んでいるが、基本的には密度の高い粘土質。土器に近い質感を持っている。溶損の程度は弱く、耐火性の高さを窺わせる。通風孔部・外面共に作りの良さが目立つ。 その他の計測値：中心部内径2.3cm 中心部外径6.0cm 基部内径— 基部外径—
193	羽口H類 (先端部～体部)	排滓場	残存長 14.7			470.0	3	なし	構成No.189と同様H類の典型的な羽口である。細身の筒状で内外面の作りが極めて良い。先端部から12cm強が直線状で、基部側の3cm程が外開きとなる。ひび割れの状態や被熱色は構成No.189やNo.192にきわめて似ている。先端部全体が黒褐色にガラス化しており、下顎が大きく窪んでいる。この部分は体部のひび割れと繋がっており、ひび割れからの溶損と判断される。顎部に残るガラス質滓は僅かで、滓化しにくい胎土を物語る。外面の成・整形は長軸方向に向かうきわめて細い削りやナデ痕が併走する。全体に平滑度が高く、基部側の被熱状態やひび割れが直線状となる点などH類と共通する。基部側は外側に広がっているが丁寧な仕上がっている。基部は5mm幅程度の僅かな平坦面がある以外は不明。僅かに圧痕が認められる。通風孔部の径は2cmを測る直孔。壁面には長軸方向に擦痕が残る。胎土は僅かにスサや軽石に加えて石粒を含んでいる。胎土としては精良で密度の高い粘土質。溶損角度が極めて弱く、側面の被熱色も先端部の黒色ガラス化、中間部の灰色の被熱、さらには明るい酸化色を経て、褐色の胎土と同質の色調に整然と変化している。側面に布目痕の可能性のある微細な傷を持つ。 その他の計測値：中心部内径2.3cm 中心部外径6.1cm 基部内径(4.5)cm 基部外径(7.0)cm
194	羽口I類 (体部)	排滓場	残存長 10.6残			271.0	2	なし	細身で胎土や基部側の色調が茶褐色となる羽口がI類である。僅か2点と構成品としては少ない。先端部と基部側の欠落した体部破片。先端部から基部側に向かい僅かに径が広がっている。通風孔部の径は2.2cm前後で、H類とやや似た要素を持つ。胎土の混和物も少ない。先端部は欠落して不明。外面の成・整形は基本的に長軸方向に向かう削りやナデによる。乱雑な削りや指頭痕が混在し、中にはワラ束に接した様な圧痕を持つ。平滑度は比較的高い。基部は欠落して不明。通風孔部の径は2.2cm程の直孔で壁面の仕上がりが平滑。髓抜棒製の可能性強い。胎土は僅かにスサを含み無数の微細な軽石の混入が認められる。くすんだ茶褐色の被熱はローム由来の胎土の可能性もある。構成No.195に比べれば、より先端部寄りの体部片か。先端側の外面に細かいひび割れが生じている。 その他の計測値：中心部内径2.2cm 中心部外径5.8cm 基部内径— 基部外径—
195	羽口I類 (体部～基部)	排滓場	残存長 11.2残			320.0	2	なし	先端部の欠落したI類の羽口。体部から基部までが残存する。体部は基部側に向かい僅かに開きぎみで、基部寄りの1.8cm程がスカート状に外に開いている。基部は幅広い平坦面となる。全体にくすんだ茶褐色に被熱しており、灰色に被熱しているのは先端側の側面の一部のみである。先端部は欠落して不明。外面の成・整形は長軸方向に向かう削りと細かいナデにより平滑に仕上げられている。基部側も開いた部分には横方向のナデが加えられている。灰色に被熱した部分にはひび割れが激しく、使用時には問題が生じた可能性もある。基部は幅1.5cm程の幅広い平坦面となる。部分的にスサ状の圧痕が残されている。通風孔部は径2.2cm程の直孔で基部側から3cm程の範囲が二段に削り取られている。基本的には髓抜棒製と推定される。胎土は僅かに微細な軽石やスサを含む緻密なもの。くすんだ茶褐色の被熱範囲が広く、ロームが母体となっている可能性がある。ひび割れが生じやすいのが欠点でもある。通風孔部の髓抜棒の径はH類と共通するが、基部側の開き具合は特異である。あまり長時間使われた形跡がなく臨時的な製作目的か。出土個体数の少なさもこうした要素を窺わせる。 その他の計測値：中心部内径2.1cm 中心部外径5.7cm 基部内径(4.5)cm 基部外径(7.0)cm

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
196	羽口J類 (先端部～体部)	排滓場	残存長 9.7残			123.0	3	なし	細身で長軸方向が長く、基部側に向かって徐々に太くなる一群をJ類としている。体部の横断面形状が隅丸方形に成形されているものが目立ち、表面には削り痕が粗く残されている。また、顎部に粘土質溶解物が前方に向かい広がっている例が多い。先端部から体部にかけての破片。基部側は完全に欠落する。顎部には軽石の溶解物を含む黒色ガラス質滓が残されている。先端部は羽口前面から見て下顎の部分と体部の左側が部分的に残る。顎部から前方に2cm程度の厚みの黒色ガラス質滓が張り出して、先端部は破面となる。ガラス質滓中にはほとんど滓化した軽石やまだ外形をとどめる軽石が含まれている。通風孔部の先端部が細いのもJ類の特色である。外面の成・整形は長軸方向に向かう幅1～2cmの削り痕がきれいに残されている。それぞれの削り面は平坦で使用時にひび割れが生じている。基部は欠落して不明。通風孔部は1.9cm程度の径を持ち、基部側に向かい僅かに太くなっていく。穿孔は先端部に向かって徐々に細くなる髓抜棒によるものか。胎土は僅かに細い植物質の繊維を含み緻密な粘土質。軽石はほとんど含まれておらず、微細な濃い茶褐色に発色する粒子が目立つ。通風孔部・外面とも先細りで、本遺跡出土品の中では先端部径が最も細いグループである。顎部に伸びる黒色ガラス質滓中には軽石由来のものが7割方含まれている。 その他の計測値：中心部内径(2.0)cm 中心部外径(5.7)cm 基部内径— 基部外径—
197	羽口J類 (先端部～体部)	排滓場	残存長 9.8残			131.0	2	なし	構成No.196と極めて似た状態の羽口。接合はせず、顎部の前方にはごつごつした軽石の滓化物が塊状に残り、基部側と先端部上半を欠いている。先端部の上半は欠落して不明。下半部の前方には長さ4cm、幅6.5cm程度の小塊状の軽石の滓化物が遺存している。軽石の粒径は1.5cm大から4mm大と細かく、数にすると数十個にもなる。先端部は平面的にやや斜めに溶損しており、軽石の滓化物もそれに沿って傾いている。先端部は急角度で立ち上がり、軽石が何かに接していた可能性もある。下面には木炭痕が残り、滓質は鍛冶滓的。外面の成・整形は長軸方向に向かう帯状の削りによる。先端部は破面のため表面の滓化発泡の範囲が広く、不明点が多い。基部は欠落して不明。通風孔部の径は1.8cmを測る。遺存する範囲では完全な直孔で、基部側への開きは認められない。壁面には直線状の筋が多数走っている。胎土は僅かに細い繊維状のすさを含み、密度の高い粘土質。濃い茶褐色に発色する微細な粒子が数多い。羽口先下半の破片で、前方に張り出す軽石混じりの滓化物が特色である。細かい軽石粒が塊状に投入されたものか。なお、鍛冶炉中の羽口先に軽石を投入する行為は滓の硬化を早める目的ではないかと推定される。同様の事例は国府に関連し、連房式鍛冶工房を持つ鳥羽遺跡でも確認されており、注目される。 その他の計測値：中心部内径1.9cm 中心部外径(5.0)cm 基部内径— 基部外径—
198	羽口J類 (先端部～体部)	排滓場	残存長 11.1残			170.0	2	なし	顎部にガラス質滓や軽石の滓化物は残されていないが、J類の特色を残す羽口片。先端部の径の2/3程を残し、体部側は下半部のみとなっている。先端部は斜め上にやや溶損し、顎部には僅かに黒色ガラス質滓が垂れている。長軸方向に向かうひび割れが数多く、ひび割れから割れた破片を接合している。外面の成・整形は長軸方向に向かう帯状の削りが残り、深い筋状の傷が多数走っている。この傷は羽口成形時のもので、その後には表面の整形が行われていない。顎部寄りには発泡している。基部は欠落して不明。通風孔部の径は現状で約2cmを測るが、ひび割れから大きく開いており、体部側の通風孔径である1.7cmが本来の径ではないかと推定される。ほぼ直孔で直線状の髓抜棒製か。胎土は僅かにすさを含み粘土質。黒色ガラス質の滓も含まれている。使用時のひび割れが数多い。先端部は小範囲で滓化して横断面形状はやや隅丸方形。表面の削り痕とそれに伴う傷は構成No.200と似る。 その他の計測値：中心部内径2.0cm 中心部外径5.5cm 基部内径— 基部外径—
199	羽口J類 (先端部～体部)	排滓場	残存長 16.5			253.0	2	なし	羽口先の顎部に粘土質溶解物が張り出している細身の羽口。先端部の下半から体部の片側が遺存する。全体形状は先端部から僅かに裾広がりの形態となる。先端部は丸みを持って黒色ガラス質に滓化している。顎部から前方に幅4.5cm前後の粘土質溶解物が突出している。端部には破面があり、さらに大きな粘土質溶解物の肩部破片の可能性を持つ。構成No.203の粘土質溶解物が参考になる。外面の成・整形は長軸方向に向かう幅1cm前後の丁寧な削りにより整えられている。削り痕の一部には深い傷状の部分もあるが、構成No.198やNo.200程ではない。被熱範囲が広く、体部の7割以上が灰色に熱変化している。ひび割れも目立つ。基部は欠落して不明。通風孔部は径1.9cm前後の直孔で、僅かに基部側に向かい太くなっている。壁面は平滑で髓抜棒製か。胎土は僅かに細かいすさを混えた緻密な粘土質。2mm大以下の軽石らしきものも含まれているがはっきりしない。濃い茶褐色に発色する微細な粒子が数多い。J類は細身で基部に向かい僅かに太くなる形態ながら、外面の成・整形については丁寧なもの粗いものがある。両者の違いは粗削りのものと、粗削りのち表面をさらに平滑に整えたものの違いの可能性もあろう。胎土や使用によるひび割れの状態は両者ともほぼ同一である。 その他の計測値：中心部内径2.0cm 中心部外径5.8cm 基部内径— 基部外径—

第4章 遺構と遺物

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
200	羽口J類 (先端部～体部)	排滓場	残存長 10.7残			247.0	4	なし	<p>先端部が平坦ぎみに滓化した小ぶりの羽口。先端部から体部中ばにかけての破片で、基部側は欠落している。先端部寄りの縁部も部分的に失われている。基部側に向かってやや太くなる。外面の削り痕が平坦ぎみで横断面形は多角柱状となる。先端部は全体が黒色ガラス質に滓化して、垂れはごく僅かである。溶損角度も弱い。外面の成・整形は幅1.2cm前後の削り痕が長軸方向に乱雑に伸びており、それぞれの削り幅の端部が深い傷状の窪みとなっている。粗削りのままで、多角柱状の横断面形が特色となる。先端側の被熱の範囲はやや狭い。基部は欠落して不明。通風孔部の先端部径は1.9cmで、体部中ばで後端部径は2.5cm前後である。僅かに基部側に向かって膨れている。壁面は平滑で髄抜棒か。胎土は僅かにスサや粉殻を混える粘土質。1cm大の石粒も破面には露出しているが、例外的なものである。すっきりした先端部を持つ被熱範囲の狭い羽口である。ひび割れが長軸方向と短軸方向の二方に走る癖を持ち、ひび割れの影響から使用を途中で中断したのか。事実、接合されている6片のうち、前後の3片づつの色調が大きく異なっている。外面の成形の粗さは構成No.198と似る。また部分的には構成No.202に類似した削り具の癖を持つ。</p> <p>その他の計測値：中心部内径 2.3cm 中心部外径 6.0cm 基部内径 — 基部外径 —</p>
201	羽口J類 (体部～基部)	排滓場	残存長 10.9残			305.0	2	なし	<p>先端部が斜めに強く溶損し、通風孔部の上面付近まで軽石の半溶解物が大きく発達している羽口先端部破片。体部は帯状の削り痕を持ち、側面の一部がやや平坦化している。基部側は全て欠落する。先端部は上顎が強く溶損して、下顎側には厚さ2.5cmにも達する粘土質溶解物が固着している。粘土質溶解物は内部や上面に1cm大以下の軽石を含み、一部木炭も巻き込んでいる。全体に通風孔部は上端部を除き塞がれぎみ。溶解物の下面は1cm大前後の木炭痕と小破面が混在する。外面の成・整形は全体的にきれいな筒状に仕上げられているが、側面を中心に幅1.3cm前後の削り痕が長軸方向に向かい残されている。粗削りと仕上げ削りの混在した様な外面となる。滓化した範囲は先端部の溶損した表面のみで、側部の滓化は殆ど認められない。灰色基調の被熱である。軽石主体の粘土質溶解物が先端部に目立つことから、J類の中にも含めているが、被熱状態は生焼けに近い。単独の種類の可能性もある。基部は完全に欠落して不明。通風孔部の径は2.2cm程。通風孔部の壁面は平滑で、長軸方向に向かう筋目が目立つ。先端部は羽口先の溶損と軽石を含む粘土質溶解物で塞がれつつある。胎土は僅かに細いスサを含む粘土質。火山性の小礫を含んでいるが、はっきりとした軽石ではない。濃い茶褐色の微小な粒子が目立つ。被熱の甘さから基部側の破面は生粘土に戻りぎみ。先端部の溶損の強さと側部や胎土の被熱の弱さが際立っている。未焼成で使用されている可能性もあり、鍛冶炉の壁に埋め込まれて用いられたのかもしれない。羽口先の粘土質溶解物には軽石が含まれており、軽石を用いる点のみが他の羽口との共通点である。使用状態が特異であると言える。</p> <p>その他の計測値：中心部内径 2.3cm 中心部外径 6.3cm 基部内径 — 基部外径 —</p>
202	羽口K類 (先端部～基部)	排滓場	残存長 18.4			593.0	3	なし	<p>部分的に欠落部はあるが全体形状のよくわかる羽口。横断面形が隅丸長方形ぎみで、基部側の3cm程が外開き。胎土や外面の成・整形痕はJ類のうちの一部と共通点を持つ。ただし、J類は全形が不明で、あえて本資料をK類とした。細身で直線状の体部を経て基部側が開く。外面の粗い削り痕も特色である。先端部は丸みを持って斜めに溶損し、肩部は発泡している。肩部二方に僅かに滓の突出部を持ち、使用時の顎部が二ヶ所ではないかと推定される。先行する顎部は上手側の側面か。外面の成・整形は長軸方向でやや斜めに残る幅1.2cmの削り痕が特色である。削り具の刃部に傷があるためか、あるいは刃部がL字状に折り曲げられているためか、側部が筋状に窪むという特色となっている。全く同一の工具の癖を持つ個体が構成No.198やNo.200である。基部側はやや手捏ね状で明瞭に指紋が残されている部分もある。基部は幅1.8cm程の広い平坦部を作り出しているが削り痕はなく、全面がワラの圧痕となる。平面性は弱く凹凸が生じている。通風孔部の径は2.4cmを測るがひび割れが広がっている数値で、実際は4mm以上小ぶりなものと推定される。基部側に向かい僅かに広がる直孔で、先端部から15.5cm程の部分から外開き。通風孔部の軸がやや片側に寄っており、壁面はやや荒れている。胎土は細いスサがやや目立つ緻密な粘土質。2mm大以下の軽石がまばらに含まれている。濃茶褐色の微細な粒子も数多い。胎土の性質のためかひび割れが大きく発達して、使用時にひび割れの一部が滓化している。J類の一部と共通要素を持つ比較的全形のわかる羽口である。横断面形が隅丸長方形ぎみとなるのは意図的かどうか不明。使用時にひび割れが発達して、部分的に空気が漏れていることがわかる。また破片化したのちに埋土の条件が違う場所に廃棄されたためか、接合しながらも色調が一致しない部分もある。</p> <p>その他の計測値：中心部内径 2.4cm 中心部外径 5.7～6.4cm 基部内径 (3.0)～3.6cm 基部外径 (6.7)～7.2cm</p>

No.	遺物名	遺構名	計測値 (cm)			重量	磁着度	メタル度	特徴など
			長	幅	厚さ				
203	粘土質溶解物 (含鉄、炉床土付き)	排滓場	11.9	10.3	2.9	98.3	5	錆化 (△)	1.5cm程の厚みを持ち、皿状に広がった粘土質溶解物。上面のみが生きており、側部は大小の破面に囲まれている。下面は鍛冶炉の炉床土から剥離した面で1.5cm以下の灰色に被熱したシルト質の炉壁土を点々と固着している。上面は黒色ガラス質の滓が盛り上がり、上手側は灰褐色から灰白色のガラス質滓の風化色となる。上面右下手側には、右方向からの幅1.2cm前後の丸棒状の工具痕が残されている。含鉄部は上手側の上面寄り。
204	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明	排滓場	8.3	2.9	2.3	67.0	8	L (●)	分析資料No.21 詳細観察表参照
205	鉄製品 (鍛造品)	排滓場	9.9	0.7	0.6	45.0	6	H (○)	弧状に折れ曲がった酸化土砂に覆われた鉄製品。短軸側の両端部に幅4.5mm前後の長方形の鉄製品の破面が露出している。外面に分厚く固着する酸化土砂中には、0.4mm前後の厚手の鍛造剥片や滓片などが含まれている。
206	鉄製品 (鍛造品)	排滓場	5.6	3.6	3.2	41.2	2	なし	外周部が厚い酸化土砂に覆われた鉄製品の錆化物。鉄製品そのものは完全に錆びきってしまい幅1.4cm、厚さ0.4cm程の中空部となっている。層状に錆化している点から鍛造品と推定される。
207	砥石	排滓場	6.5	2.6	2.1	58.8	1	なし	側面4面が砥面となった小ぶりの砥石破片。下手側がはっきりとした破面となる。砥痕は2面が短軸方向主体で、残る2面が斜め長軸方向となる。きめはやや細かく、仕上砥の一種であろうか。短軸方向に刃先の当たった筋目が走る。
208	木炭(黒炭)	排滓場	5.2	2.8	2.5	5.0	炭	なし	広葉樹の環孔材。表皮は残らず木取りは縦ミカン割り。左側は枝痕が残る。3cmの厚みに年輪数37本を数える。炭化はほぼ良好。黒炭。楕材または櫟材か。

1 区谷部排滓場 出土木器観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別	樹種 木取り	計測値 (cm)	特徴など
209	第114図 PL-56	工具の柄 鉈の柄	モミ属 椎目	長 30.6 幅 4.1 厚 3.4	柄元に刃込みをめぐらし、縦割れが生じたため紐などで緊縛したようである。縦割れは下面に8.5cm、右側面に12.0cm生じている。柄元を斜め方向に加工し、刃が当たりやすいようにしている。茎孔の断面は長方形。柄元の斜め方向の加工と平行して刃をつけている。中程から柄頭にかけて刃側を浅く削り込み、柄頭を細くしている。茎孔と柄の形状から鉈の柄とした。
210	第114図 PL-56	加工材 斧の柄	ニレ属 芯持ち材	長 15.1 幅 12.7 厚 5.9	斧台から基部にかけての斧の柄か。装着部と握りのほとんどは欠損している。基部には明瞭な加工面がある。握りの基部側には樹皮が残存する部分もある。
211	第114図 PL-56	加工材 孔あり	モミ属 板目	長 33.8 幅 3.5 厚 1.6	孔のある加工材。板状の加工材に9個の孔がある。孔は板材長軸方向に対して斜め方向のものと、垂直方向のものがあり、板材端部から、斜め、垂直、斜めと、交互に規則的に並んでいる。
212	第114図 PL-56	加工材 端部加工	ニレ属 板目	長 9.5 幅 2.9 厚 2.6	端部に斜め方向の切断面を持つ加工材。
213	第115図 PL-56	加工材 端部加工	モミ属 追椎目	長 31.8 幅 3.9 厚 2.1	端部に斜め方向の切断面を持つ加工材。
214	第115図 PL-56	加工材 端部加工	ケヤキ 芯持ち材	長 31.8 幅 3.9 厚 2.1	端部に斜め方向の切断面を持つ加工材。
215	第115図 PL-56	加工材 端部加工	アワブキ 板目	長 21.6 幅 4.1 厚 2.3	端部に加工痕のある棒状の加工材。
216	第115図 PL-56	加工材 端部加工	クヌギ節 板目	長 11.1 幅 7.0 厚 6.0	端部に加工痕のある棒状の加工材。
217	第115図 PL-56	加工材 端部加工	クヌギ節 板目	長 6.6 幅 5.5 厚 4.6	端部に加工痕のある棒状の加工材。
218	第115図 PL-56	加工材 板材	クリ 板目	長 11.2 幅 7.7 厚 3.3	上下面加工面。側面はすべて破面の板材。

第4章 遺構と遺物

1 区谷部排滓場出土土器観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
219	第116図 PL-57	土師器 坏	埋土 口～底部片	口(12.0) 高 3.3 底 -	①砂粒 ②良好 ③にぶい褐色	口縁部上半が横ナデ。底部から体部は不定方向のヘラ削り。
220	第116図 PL-57	土師器 坏	埋土 口～底部片	口(12.0) 高 2.9残 底(10.0)	①砂粒 ②良好 ③にぶい褐色	口縁部上半が横ナデ。下半～底部はヘラ削り。内面は斜放射状暗文か。
221	第116図 PL-57	土師器 坏	埋土 口～底部片	口(13.0) 高 3.9 底(7.0)	①細砂粒 ②良 好 ③明褐色	口縁部上半が横ナデ。下半～底部はヘラ削り。内面は斜放射状暗文か。
222	第116図 PL-57	土師器 坏	埋土 口～体部片	口(13.9) 高 4.0残 底 -	①細砂粒 ②良 好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。下半～底部はヘラ削り。内面は斜放射状暗文。
223	第116図 PL-57	土師器 坏	埋土 1/2	口(13.6) 高 4.1残 底 -	①砂粒 ②良好 ③にぶい褐色	口縁部上半が横ナデ。底部から体部は不定方向のヘラ削り。
224	第116図 PL-57	土師器 坏	埋土 口～底部片	口(17.0) 高 4.4 底(5.3)	①細砂粒 ②良 好 ③明褐色	口縁部上半が横ナデ。下半～底部はヘラ削り。内面は斜放射状暗文か。
225	第116図 PL-57	須恵器 蓋	埋土 1/3	口(18.8) 高 3.1残 底 -	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。天井部ヘラ削り。
226	第116図 PL-57	須恵器 坏	埋土 1/6	口(13.9) 高 3.5 底(7.6)	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。
227	第116図 PL-57	須恵器 坏	埋土 3/4	口(13.8) 高 4.2 底 7.1	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
228	第116図 PL-57	須恵器 椀	埋土 口～体部片	口(11.0) 高 4.0残 底 -	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形。内外面に自然釉付着。
229	第116図 PL-57	須恵器 椀	埋土 底3/4	口 - 高 2.0残 底 7.9	①粗砂粒②還元 焰 ③灰黄色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付であるが剥落。
230	第116図 PL-57	須恵器 椀	埋土 体～底1/3	口 - 高 4.4残 底(8.0)	①砂粒②酸化焰 ぎみ ③灰黄色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
231	第116図 PL-57	須恵器 皿	埋土 1/3	口 13.0 高 2.9 底 7.0	①砂粒②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。自然釉あり。底部外面に墨書「〇」。
232	第116図 PL-57	須恵器 高坏か	埋土 口～体部片	口(22.2) 高 6.5残 底 -	①砂粒②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形。
233	第116図 PL-57	土師器 甕	埋土 口～肩部片	口(13.2) 高 5.1残 底 -	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。頸部は剥落し、指頭痕が確認できないが234と同一個体の可能性が高い。
234	第116図 PL-57	土師器 甕	埋土 口～胴部片	口(13.1) 高 8.2残 底 -	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。頸部に指頭痕あり。内面はヘラナデ。233と同一個体か。

[3] 土坑 (第117~127図、PL21~29・57)

諏訪ノ木Ⅵ遺跡では、奈良・平安時代の土坑3基、中世以降の土坑66基が検出された。人骨や銭貨が出土したものを土坑墓とし、それ以外を土坑とした。

土坑の多くは時期判別の決め手になる遺物が含まれていなかったため、埋土や形状、周辺遺構の様相から時期を判別した。

奈良・平安時代の土坑

諏訪ノ木Ⅵ遺跡で検出された奈良・平安時代の土坑は、3基である。

3基の土坑は出土遺物、埋土や形状、周辺遺構の様相から時期を判別した。

2区66号土坑 (第117図、PL28・57)

本遺構は、144-588に位置する。形態は隅丸方形を呈し、規模は長軸141cm、短軸110cm、確認深51cmを測る。出土した遺物は鏡の釣手金具1点である。

2区67号土坑 (第118図、PL57)

本遺構は、231-625に位置する。中世に比定される41号土坑と重複し、41号土坑に切られる。本遺構

は土坑としたが、形状から住居掘り方の一部である可能性が高い。出土した遺物は須恵器杯1点である。

2区68号土坑 (第118図、PL28)

本遺構は、166-593に位置する。形態は楕円形を呈し、長軸293cm・短軸224cm・確認深26cmを測る。本遺構は9世紀後半に比定される12号住居と重複し、12号住居を切る。出土した遺物は大型の礫、焼土、鍛造剥片、粒状滓で、本遺構は排滓土坑などの鍛冶に関連する遺構である可能性が高い。

本遺構埋土中から取り上げられた鍛造剥片を分類すると以下の表の通りになる。出土した鍛造剥片は、4類を主体とし3類から4類で90%近くを占めることから、本遺構周辺で行われていた鍛錬作業は、最終仕上げ段階が主に行われていたと考えることができる。

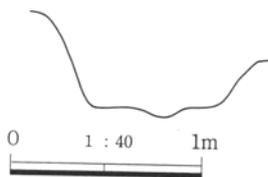
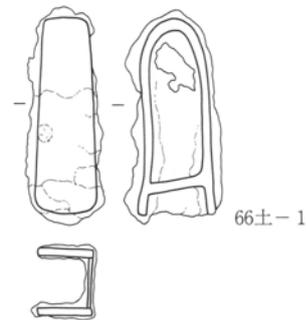
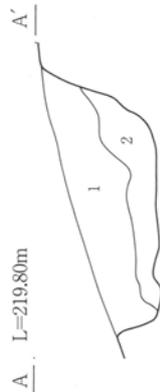
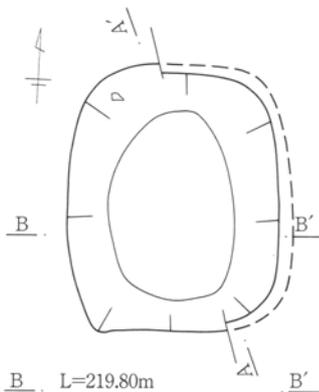
2区68号土坑 粒状滓計測値

類	大きさ	出土総重量	1個の重量	個体数	割合
1	4.1mm以上	3.103 g	0.163 g	19	35.9%
2	3.1~4.0mm	0.998 g	0.0587 g	17	32.1%
3	2.1~3.0mm	0.342 g	0.0228 g	15	28.3%
4	2.0mm以下	0.014 g	0.007 g	2	3.7%

2区68号土坑 鍛造剥片計測値

類	大きさ	厚さ	平均厚さ	出土総重量	1個の重量	個体数	割合
1	4.1mm以上	0.2~2.7mm	0.86mm	7.6 g	0.127 g	60	3.7%
2	3.1~4.0mm	0.2~1.2mm	0.585mm	3.768 g	0.044 g	87	5.3%
3	2.1~3.0mm	0.2~0.4mm	0.473mm	13.106 g	0.0253 g	518	31.6%
4	1.1~2.0mm	0.1~0.3mm	0.281mm	5.645 g	0.00597 g	946	57.8%
5	1mm以下	0.05~0.25mm	0.142mm	0.006 g	0.00023 g	26	1.6%

2区66号土坑



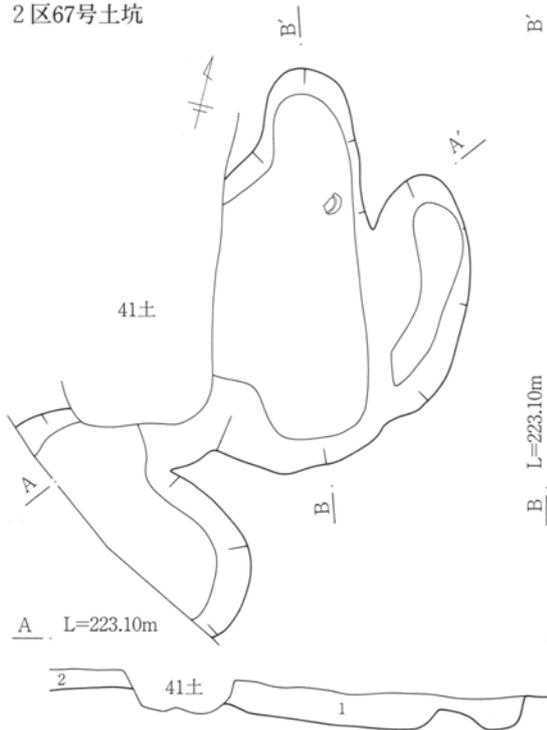
2区66号土坑

- 1 黒褐色土 Hr-FPを多量に、Hr-FAブロック、Hr-FAを少量含む。砂質。固く締まる。
- 2 暗褐色土 Hr-FA、Hr-FPを少量含む。粘性があり、締まる。

第117図 2区66号土坑平面・断面図、出土遺物図

第4章 遺構と遺物

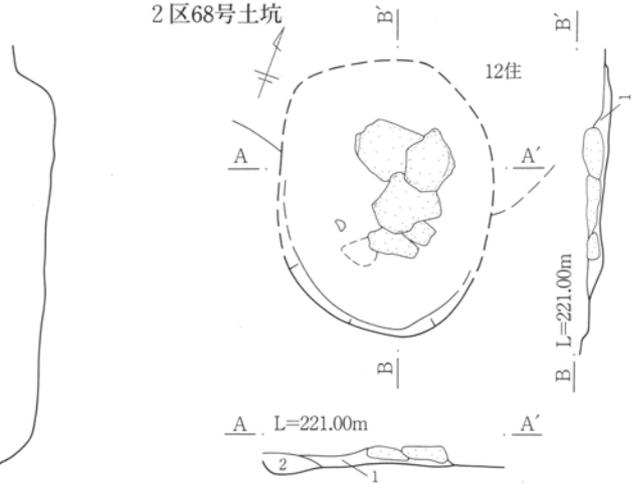
2区67号土坑



2区67号土坑

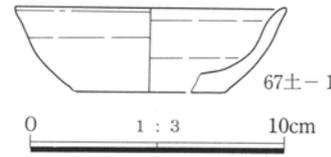
- 1 暗褐色土 Hr-FA主体。粘性、縮まりなし。
2 暗褐色土 Hr-FAブロックを少量含む。粘性、縮まりなし。

2区68号土坑



2区68号土坑

- 1 灰褐色土 Hr-FAを多量に、Hr-FPを僅かに含む。僅かに砂質。やや締まる。
2 褐色土 Hr-FA、Hr-FPを僅かに含み、焼土粒、炭化粒を含む。粘性があり、やや締まる。



0 1 : 3 10cm

0 1 : 40 1m

第118図 2区67・68号土坑 平面・断面図、出土遺物図

奈良・平安時代 土坑一覧表

区	遺構名称	位置	平面形状	主軸方向	規模			備考	
					長軸	短軸	深さ		
1	2	66号土坑	144-588	隅丸方形	N-0°	141	110	51	
2	2	67号土坑	231-625	不定形	N-11°-W	210	134残	21	41土に切られる。住居の掘り方か
3	2	68号土坑	166-593	不定形	N-12°-W	293	224	26	12号住居を切る。鍛冶排滓土坑か

2区66号土坑出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など
1	第117図 PL-57	鉄製品 (鍛造品) 逆U字鉄製品、馬具か	① 32.5 ② 3 ③ M(◎)	埋土 長 5.7 幅 2.1 厚 2.5	薄板状の鉄部を上端部で折り返し、先端部寄りを径2.5mm程の円柱状の金具で止めた鉄製品。右側の側部には薄板状の鉄板が添えられている。馬具の一部である鐙の釣り手金具かと推定される複雑な作りの鉄製品。やや弧状に反っているのは二次的な変形か。

①重量(g)②磁着度③メタル度

2区67号土坑出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第118図 PL-57	須恵器 坏	埋土 2/5	口(10.6) 高 3.4 底(6.0)	①砂粒②酸化焙 ③にぶい黄橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部は静止糸切り。

中世以降の土坑

本遺跡で検出された土坑はその形状から①円形、②隅丸方形、③隅丸長方形、④不定形に分類した。

円形土坑は、24基ある。円形土坑のほとんどは、底部が平坦である。隅丸方形の土坑は2基、隅丸長方形の土坑は18基ある。隅丸方形、隅丸長方形はそ

の規模・形状から土坑墓の可能性も考えられるものもある。不定形に分類した土坑は22基である。

土坑の位置、形態、重複関係、規模などについては次頁に掲載してある。遺物が出土した2区50号土坑については、以下に記載する。

2区50号土坑 (第126図、PL26)

本遺構は、154-590に位置する。形態は不定形を呈し、規模は長軸140cm・短軸134cm・確認深

17cmを測る。出土した遺物は棒状鉄製品1点である。

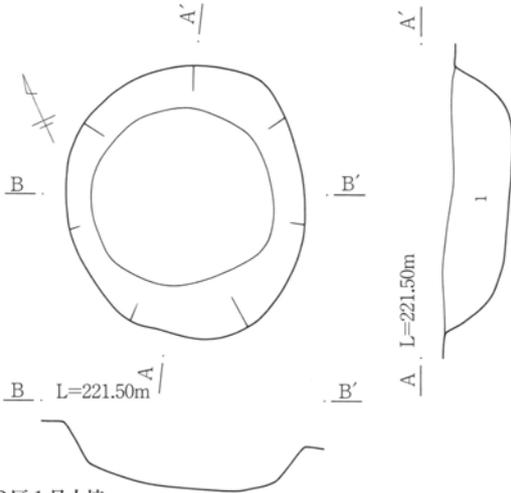
中世以降 土坑一覧表

	区	遺構名称	位置	平面形状	主軸方向	規模			備考
						長軸	短軸	深さ	
1	2	1号土坑	155-595	円形	-	140	130	31	
2	2	2号土坑	156-596	円形	-	126	117	40	3土を切る。
3	2	3号土坑	156-597	円形	-	130	128	24	2土に切られる。
4	2	4号土坑	157-595	円形	-	130	129	23	13住を切る。
5	2	5号土坑	158-598	円形	-	122	121	24	
6	2	6号土坑	159-597	円形	-	120	118	20	63土(墓)に切られる。
7	2	7号土坑	160-593	円形	-	68	61	38	
8	2	8号土坑	163-595	円形	-	(78)	(75)	48	9土を切る。
9	2	9号土坑	163-595	円形	-	(80)	(84)	-	8土に切られる。
10	2	10号土坑	164-597	円形	-	135	125	44	53土に切られる。
11	2	11号土坑	167-597	円形	-	120	118	34	3住を切る。
12	2	12号土坑	175-596	円形	-	150	130	20	54土を切る。
13	2	13号土坑	183-611	円形	-	83	80	36	
14	2	14号土坑	184-623	円形	-	133	132	38	
15	2	15号土坑	185-613	円形	-	115	112	22	1溝を切る。
16	2	16号土坑	185-614	円形	-	98	93	33	1溝を切る。
17	2	17号土坑	185-617	円形	-	103	102	40	1溝を切る。
18	2	18号土坑	185-629	円形	-	111	109	27	
19	2	19号土坑	187-619	円形	-	110	109	46	1溝を切る。
20	2	20号土坑	189-622	円形	-	81	80	29	
21	2	21号土坑	191-612	円形	-	120	117	46	23住を切る。
22	3	1号土坑	286-649	円形	-	110	100	30	
23	3	2号土坑	287-646	円形	-	131	-	29	
24	3	3号土坑	287-653	円形	-	69	54	25	
25	2	22号土坑	140-587	隅丸方形	N-14°-W	134	121	18	
26	2	23号土坑	163-593	隅丸方形	N-89°-E	118	110	37	5住を切る。
27	2	24号土坑	136-587	隅丸長方形	N-61°-E	167	118	14	62土(墓)を切る。
28	2	25号土坑	138-589	隅丸長方形	N-24°-W	253	147	62	42土と45土と62土(墓)を切る。
29	2	26号土坑	139-578	隅丸長方形	N-70°-E	217	98	27	
30	2	27号土坑	139-582	隅丸長方形	N-23°-W	156	104	20	28土と46土を切る。
31	2	28号土坑	140-580	隅丸長方形	N-25°-W	165残	94残	36	27土と46土に切られる。
32	2	29号土坑	140-597	隅丸長方形	N-70°-E	215	157	63	
33	2	30号土坑	144-578	隅丸長方形	N-18°-W	230	152	54	
34	2	31号土坑	148-594	隅丸長方形	N-72°-E	177	55	39	
35	2	32号土坑	160-588	隅丸長方形	N-90°-E	99	68	55	8住を切り33土に切られる。
36	2	33号土坑	160-590	隅丸長方形	N-10°-W	133	88	58	32土と8住を切る。
37	2	34号土坑	165-590	隅丸長方形	N-25°-W	159	83	33	14住を切る。
38	2	35号土坑	171-596	隅丸長方形	N-4°-E	156	134	38	3住を切る。
39	2	36号土坑	174-600	隅丸長方形	N-0°	145	82	54	
40	2	37号土坑	175-596	隅丸長方形	N-7°-E	222	78	23	64土(墓)を切る。
41	2	38号土坑	180-596	隅丸長方形	N-13°-E	138	85	16	
42	2	39号土坑	195-617	隅丸長方形	N-0°	277残	73	59	23住を切る。
43	2	40号土坑	198-607	隅丸長方形	N-13°-E	225	69	94	32住を切る。
44	2	41号土坑	232-625	隅丸長方形	N-3°-W	216	75	27	67土を切る。
45	2	42号土坑	138-589	不定形	-	-	-	-	25土と62土(墓)に切られる。
46	2	43号土坑	139-576	不定形	-	83残	55残	55	
47	2	44号土坑	140-585	不定形	N-0°	124	99	9	
48	2	45号土坑	140-590	不定形	-	158	(135)	28	25土に切られる。
49	2	46号土坑	141-580	不定形	N-70°-E	161	110	24	27土に切られ28土を切る。
50	2	47号土坑	144-590	不定形	N-0°	130	117	28	
51	2	48号土坑	146-592	不定形	N-24°-W	(114)	(92)	14	

第4章 遺構と遺物

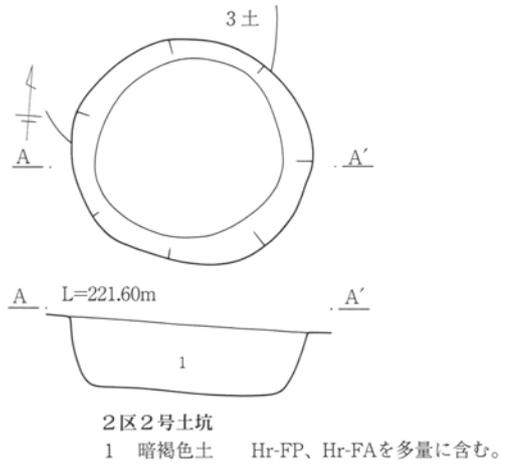
	区	遺構名称	位置	平面形状	主軸方向	規模			備考
						長軸	短軸	深さ	
52	2	49号土坑	150-591	不定形	N-43°-E	166	120	20	
53	2	50号土坑	154-590	不定形	N-78°-E	140	134	17	
54	2	51号土坑	154-596	不定形	N-4°-E	112	97	16	
55	2	52号土坑	162-608	不定形	N-0°	205	124	40	
56	2	53号土坑	164-597	不定形	N-0°	70	53	17	10土を切る。
57	2	54号土坑	174-594	不定形	N-61°-W	135	91	11	12土に切られる。
58	2	55号土坑	174-597	不定形	N-0°	89	74	17	
59	2	56号土坑	179-613	不定形	N-63°-E	125	102	25	
60	2	57号土坑	182-611	不定形	N-82°-E	138	120	38	20住を切る。
61	2	58号土坑	184-627	不定形	N-20°-W	138	90	48	
62	2	59号土坑	185-627	不定形	N-68°-E	118	96	47	
63	2	60号土坑	186-620	不定形	N-82°-W	163	83残	30	24住を切る。
64	2	61号土坑	236-630	不定形	N-43°-E	(157)	56残	62	
65	3	4号土坑	291-646	不定形	N-49°-W	122	56	31	5土を切る。
66	3	5号土坑	291-646	不定形	N-81°-E	96	(46)	18	4土に切られる。

2区1号土坑



2区1号土坑
1 暗褐色土 Hr-FPを多量に含み、Hr-FAを少量含む。

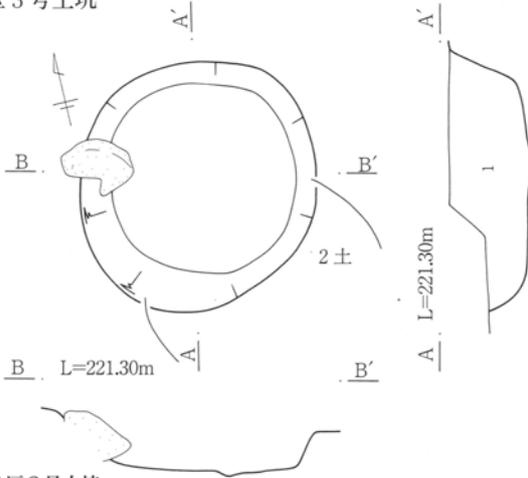
2区2号土坑



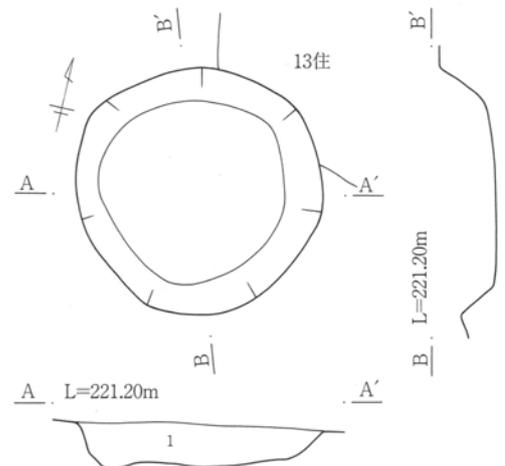
2区2号土坑

1 暗褐色土 Hr-FP、Hr-FAを多量に含む。

2区3号土坑



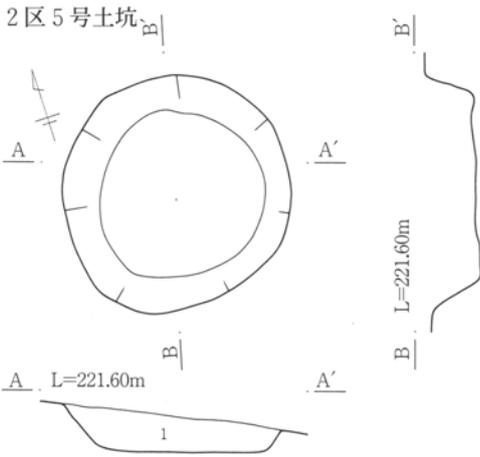
2区3号土坑
1 暗褐色土 Hr-FPを多量に、Hr-FAを少量含む。



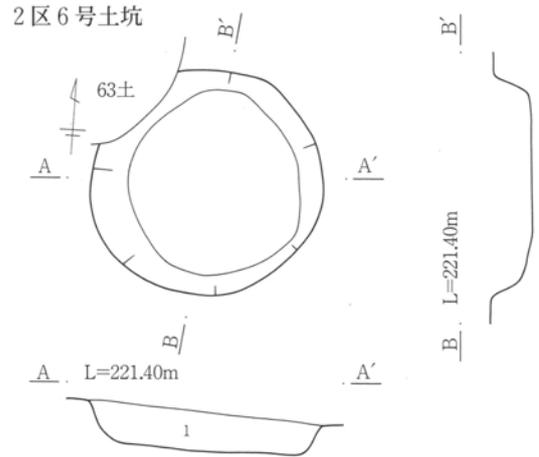
2区4号土坑
1 暗褐色土 Hr-FPを多量に、Hr-FAを少量含む。



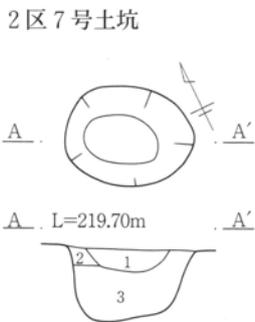
第119図 2区1～4号土坑平面・断面図



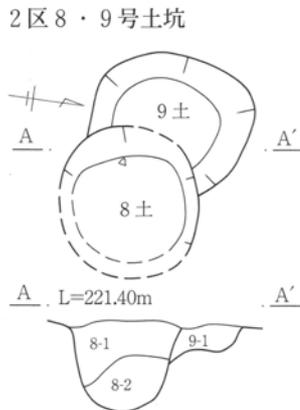
2区5号土坑
1 暗褐色土 Hr-FPを多量に、Hr-FAを少量含む。



2区6号土坑
1 暗褐色土 Hr-FPを多量に、黄褐色粒、炭化物を少量含む。

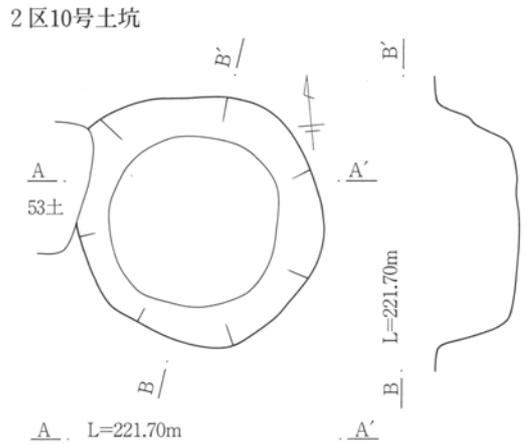


2区7号土坑
1 灰褐色土 Hr-FAを多量に、Hr-FPを少量含む。
2 灰褐色土 Hr-FAを多量に、Hr-FP、黒色土を少量含む。
3 黒色土 Hr-FP、Hr-FAを僅かに含む。

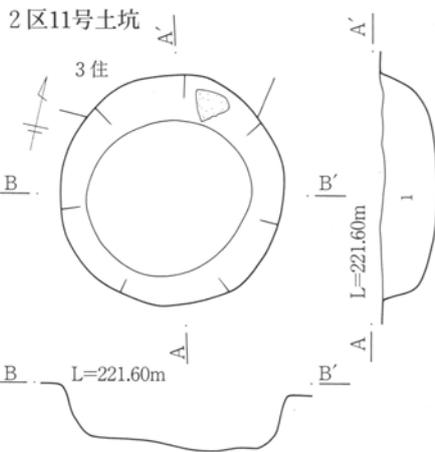


2区8号土坑
1 黒褐色土 Hr-FPを少量含み、1cm以下小礫を多く含む。
2 黒褐色土 黄褐色粒、Hr-FPを少量含む。

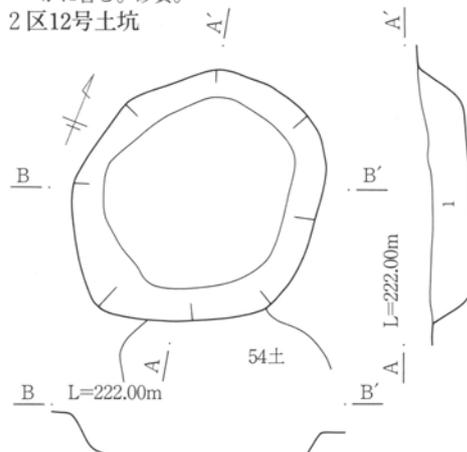
2区9号土坑
1 褐色土 指頭大の小礫を少量含み、Hr-FA、Hr-FPを僅かに含む。砂質。



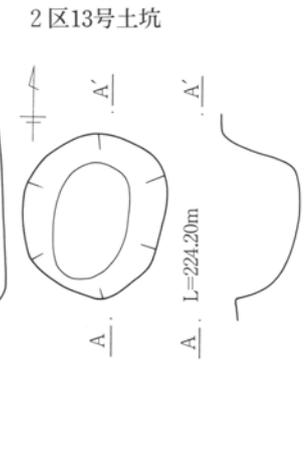
2区10号土坑
1 暗褐色土 多量のHr-FP、Hr-FAブロック、黒褐色ブロックを含む。



2区11号土坑
1 暗褐色土 Hr-FP多量、Hr-FAを少量含む。

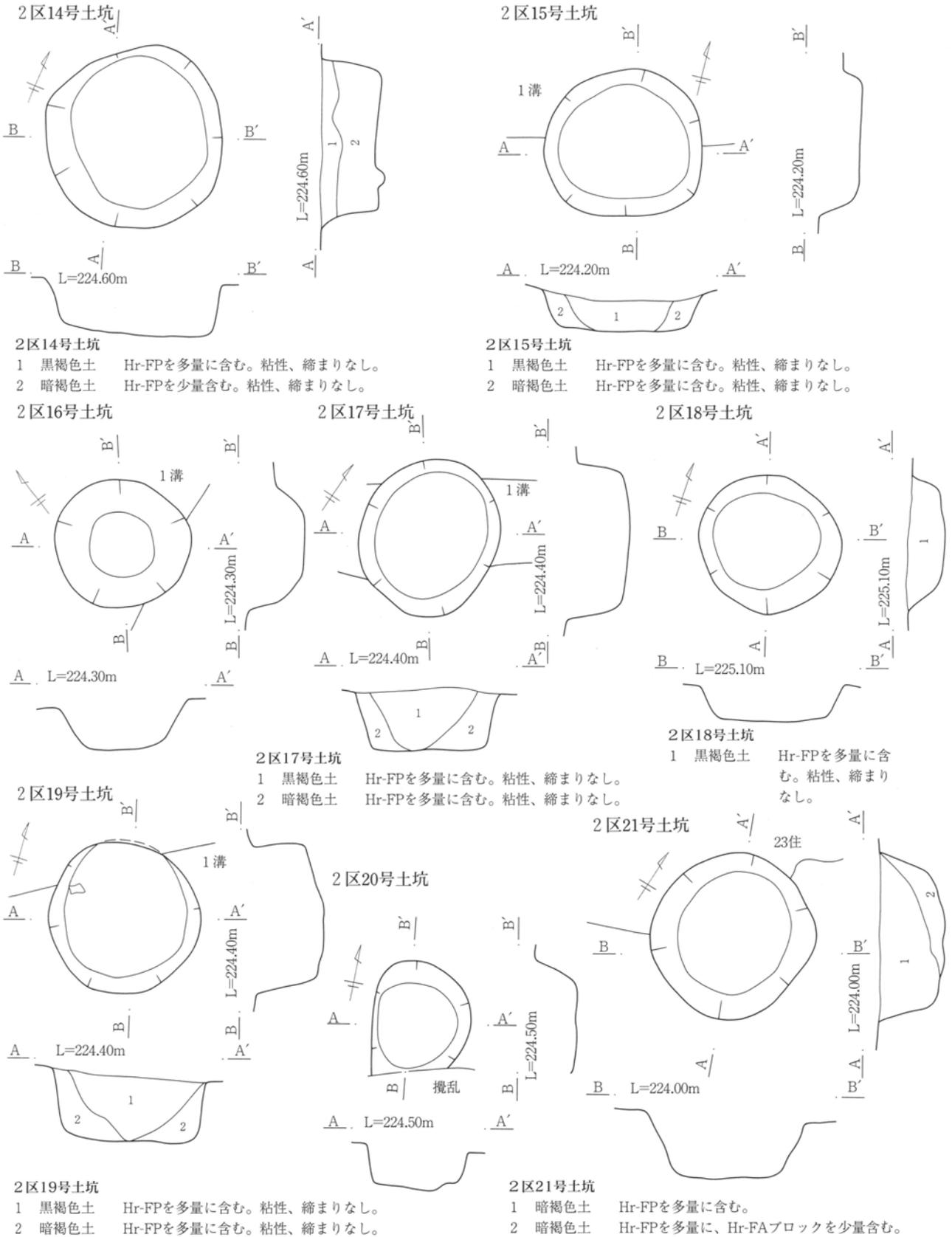


2区12号土坑
1 褐色土 Hr-FPを少量含む。やや締まる。



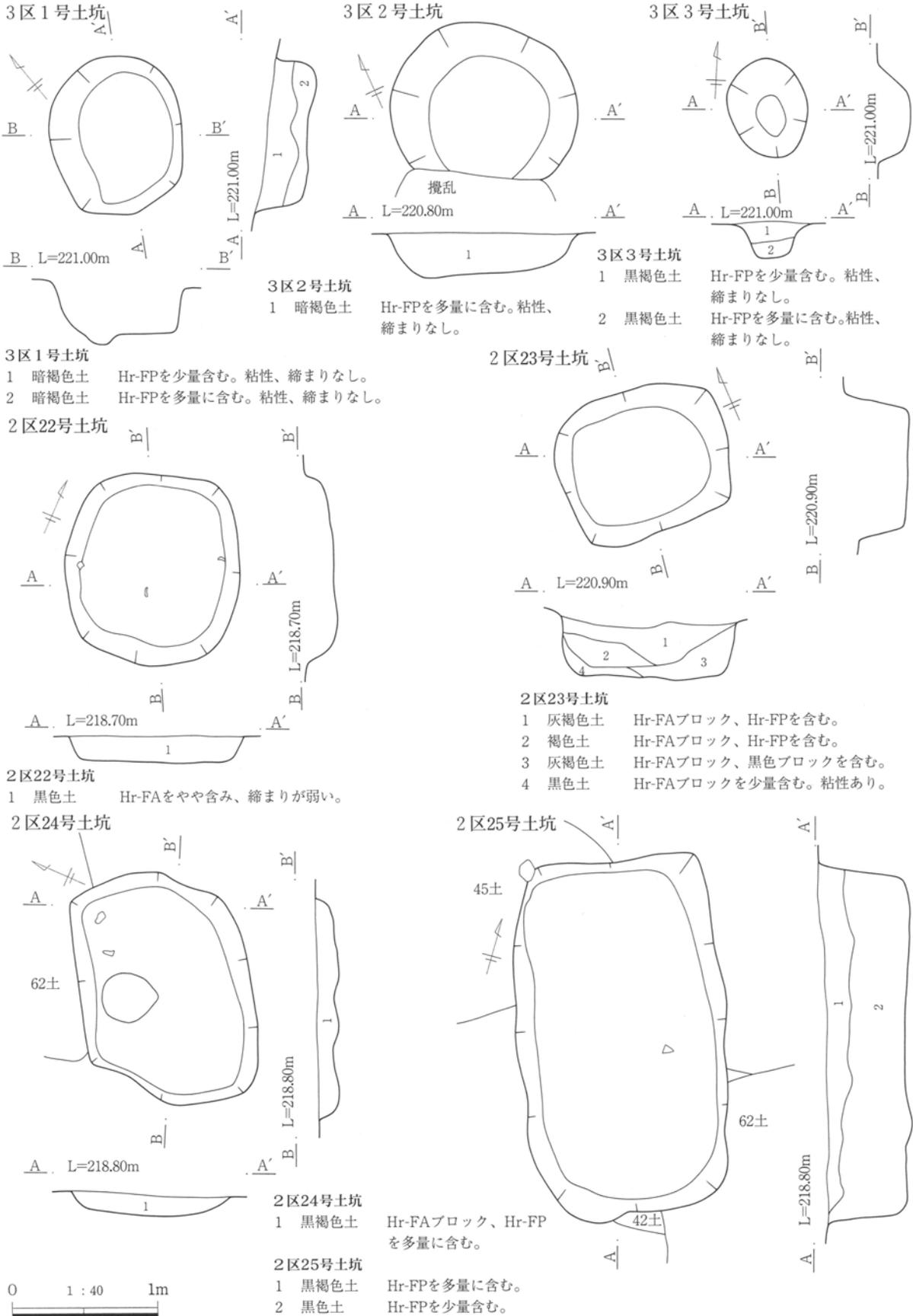
第120図 2区5～13号土坑平面・断面図

第4章 遺構と遺物



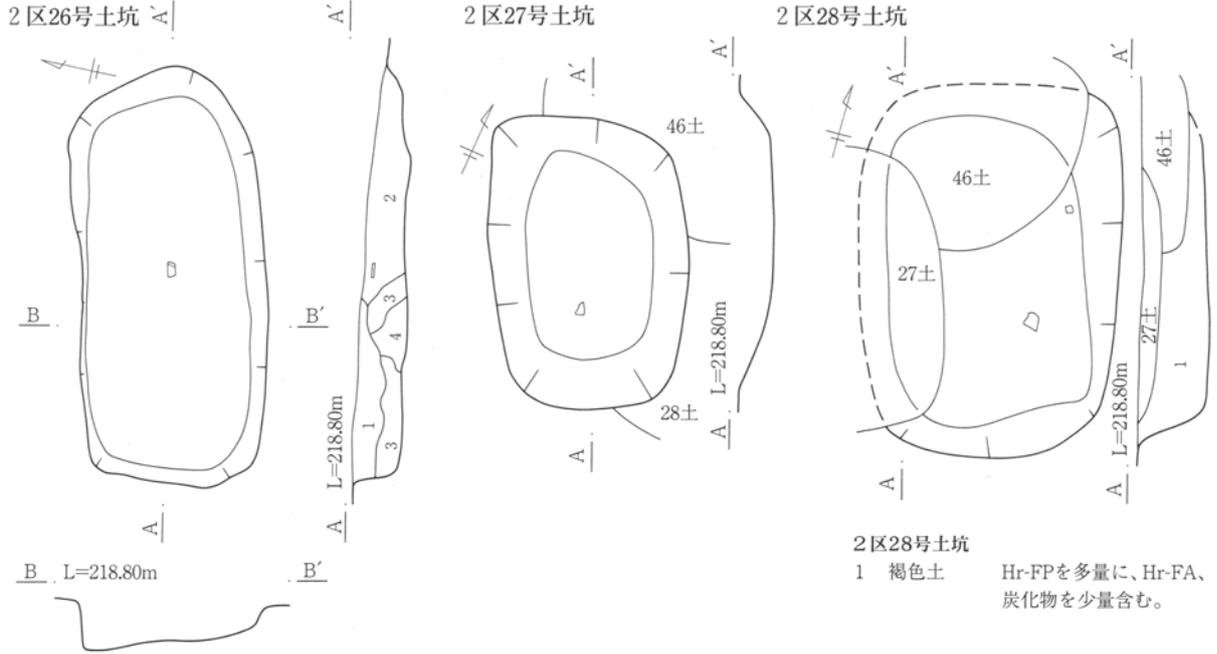
0 1 : 40 1m

第121図 2区14~21号土坑平面・断面図



第122図 3区1～3・2区22～25号土坑平面・断面図

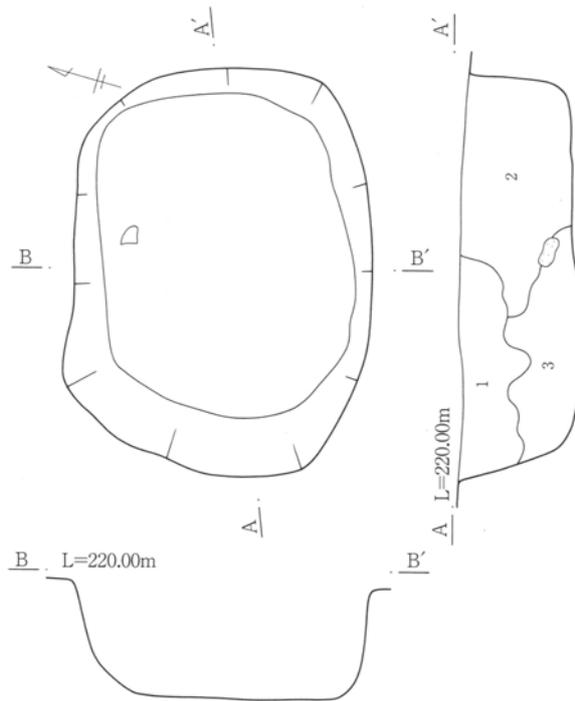
第4章 遺構と遺物



2区26号土坑

- 1 黒褐色土 Hr-FAブロック、Hr-FPを多量に含む。
- 2 黒褐色土 1層よりも明るく、Hr-FAを多量に含む。やや粘性があり、固く締まる。
- 3 褐色土 Hr-FAブロックを多量に含み、Hr-FPを少量含む。粘性があり、固く締まる。
- 4 褐色土 Hr-FAブロック主体。Hr-FPを少量含む。粘性があり、固く締まる。

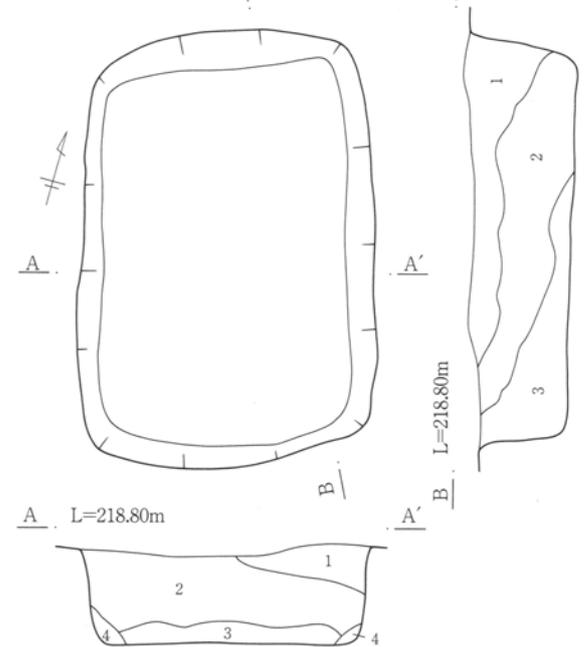
2区29号土坑



2区29号土坑

- 1 黒褐色土 Hr-FAブロック、Hr-FA、Hr-FPを多量に含む。
- 2 暗褐色土 Hr-FA、Hr-FPブロックを少量含む。砂質。固く締まる。
- 3 暗褐色土 Hr-FAを多量に含む。砂質。固く締まる。

2区30号土坑

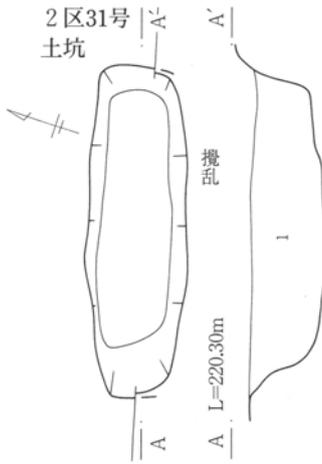


2区30号土坑

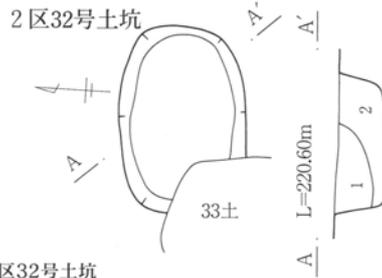
- 1 褐色土 Hr-FAブロック、Hr-FAをやや多く含む。砂質。固く締まる。
- 2 褐色土 Hr-FAブロック、Hr-FPを含む。砂質。締まりなし。
- 3 黒褐色土 Hr-FAを多量に、Hr-FPを少量含む。締まる。
- 4 褐色土 Hr-FAブロック、Hr-FPを含む。締まる。



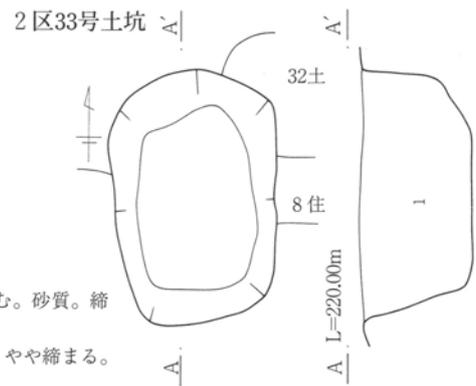
第123図 2区26~30号土坑平面・断面図



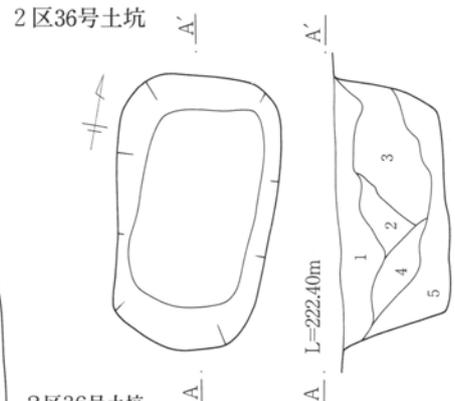
2区31号土坑
1 黒褐色土 Hr-FAブロック、Hr-FPを少量含む。粘性あり、締まる。



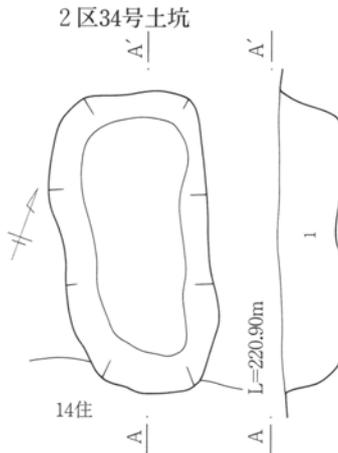
2区32号土坑
1 褐色土 Hr-FPを多量に、Hr-FAを少量含む。砂質。締まりなし。
2 黒褐色土 Hr-FP、Hr-FAを少量含む。砂質。やや締まる。



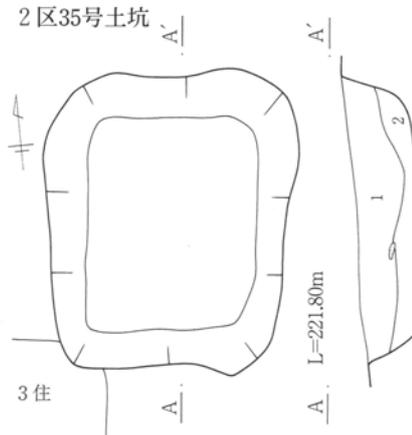
2区33号土坑
1 黒褐色土 Hr-FA、Hr-FPを少量含む。粘性あり、締まる。



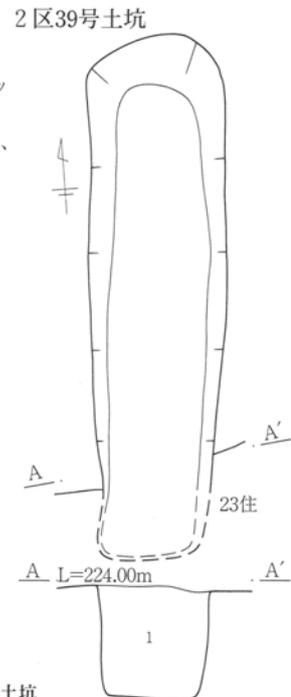
2区36号土坑
1 褐色土 Hr-FAブロック、Hr-FPを少量含む。
2 暗褐色土 Hr-FAブロック、Hr-FPを少量含む。
3 黒褐色土 Hr-FA、Hr-FPを少量含む。
4 暗褐色土 Hr-FA、Hr-FPを少量含む。
5 黒褐色土 Hr-FAブロック、Hr-FPを少量含む。



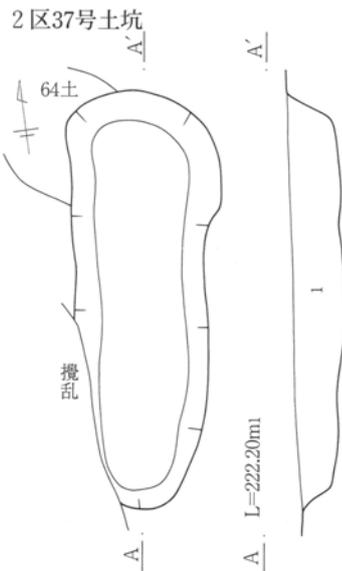
2区34号土坑
1 褐色土 Hr-FAを少量含む。砂質。締まる。



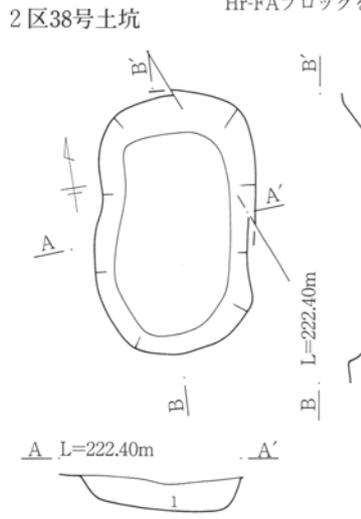
2区35号土坑
1 暗褐色土 Hr-FPを多量に、Hr-FAブロックを少量含む。
2 暗褐色土 黒色ブロック、Hr-FPを多量に、Hr-FAブロックを少量含む。



2区39号土坑
1 黒褐色土 Hr-FPを多量に、Hr-FAブロックを少量含む。

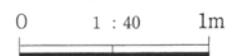


2区37号土坑
1 褐色土 褐色土中に黒褐色土が斑状に混じり、Hr-FPを少量含む。固く締まる。

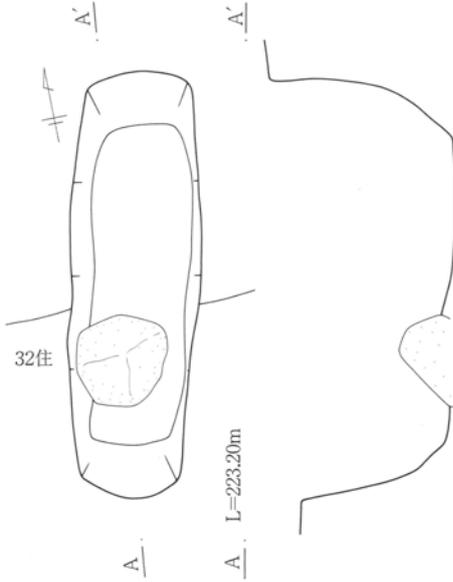


2区38号土坑
1 暗褐色土 Hr-FPを多量に、Hr-FAを少量含む。

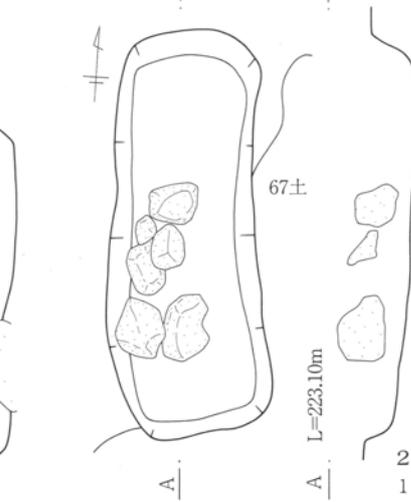
第124図 2区31~39号土坑平面・断面図



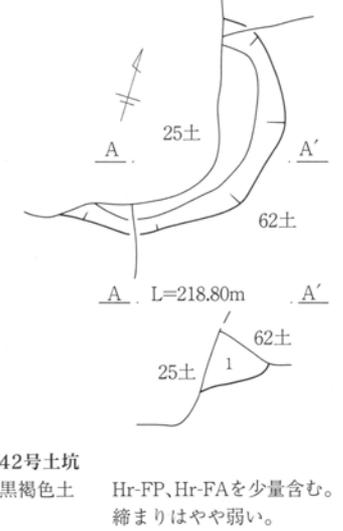
2区40号土坑



2区41号土坑



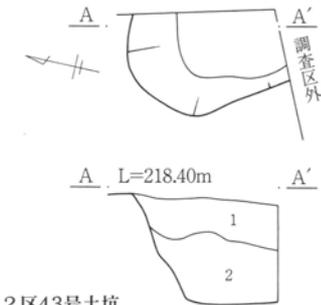
2区42号土坑



2区42号土坑

1 黒褐色土 Hr-FP、Hr-FAを少量含む。締まりはやや弱い。

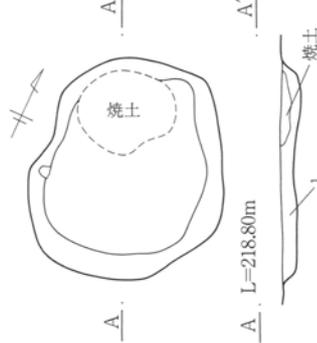
2区43号土坑



2区43号土坑

1 黒褐色土 Hr-FPを多量に含む。
2 黒褐色土 Hr-FAブロック、黒色粘質ブロックを多量に含む。

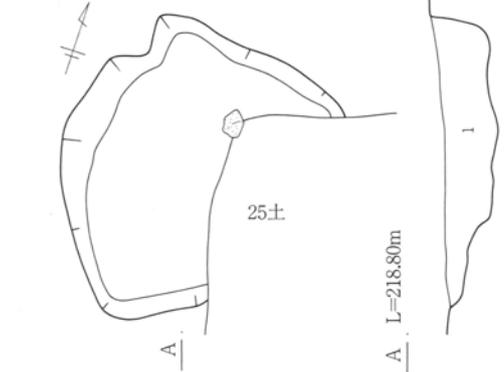
2区44号土坑



2区44号土坑

1 黒褐色土 Hr-FA、Hr-FPを僅かに含む、やや粘質。締まる。

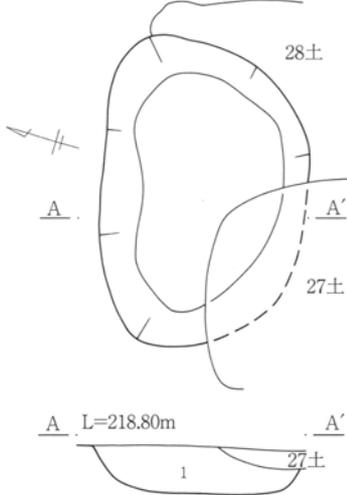
2区45号土坑



2区45号土坑

1 黒色土 Hr-FA、Hr-FPを少量含む。粘性があり締まる。

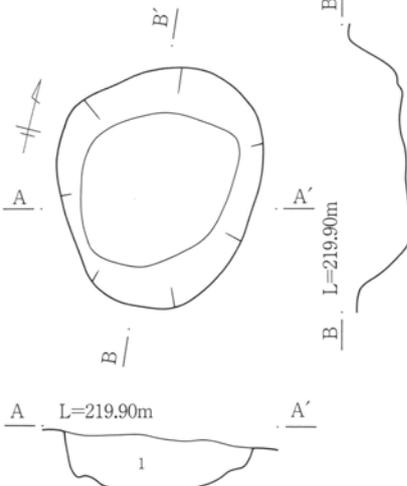
2区46号土坑



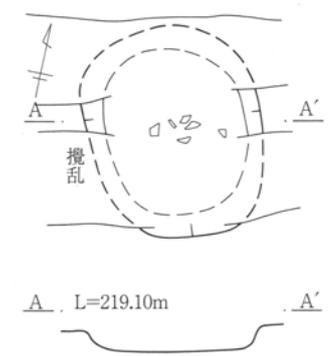
2区46号土坑

1 黒褐色土 Hr-FA、Hr-FPを少量含む。固く締まる。

2区47号土坑

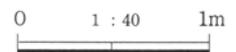


2区48号土坑

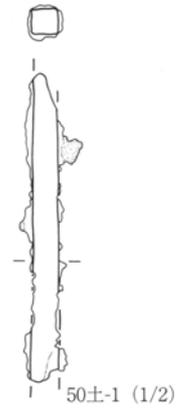
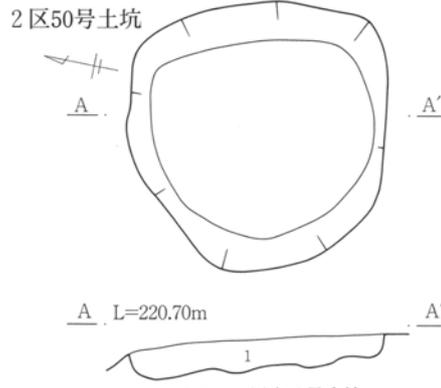


2区47号土坑

1 黒褐色土 Hr-FA、Hr-FPを少量含む。砂質。固く締まる。



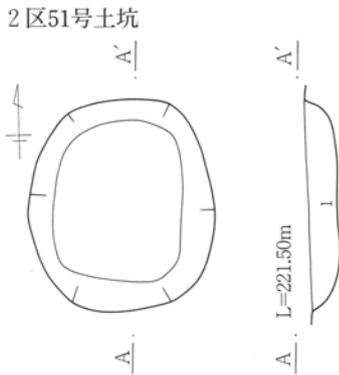
第125図 2区40～48号土坑平面・断面図



2区50号土坑出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など
1	第126図 PL-57	鉄製品 (鍛造品) 棒状不明	① 18.4 ② 3 ③ L(●)	埋土 長 8.2 幅 1.2 厚 1.2	方形の断面形を持つ棒状不明品。両端部は欠落している。表面には細かいひび割れが数多く走り、外周部には酸化土砂が固着する。全体形状は釘とは考えにくい。

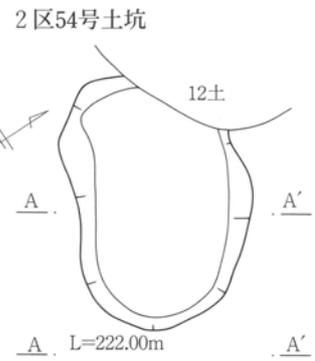
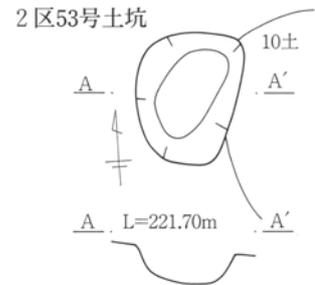
①重量(g)②磁着度③メタル度



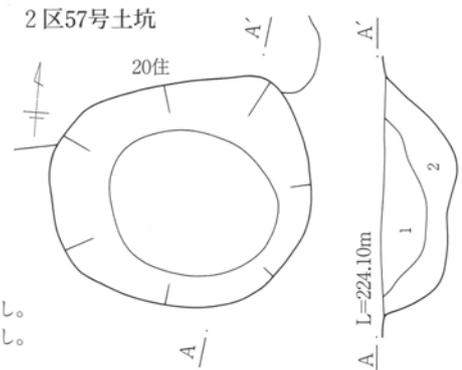
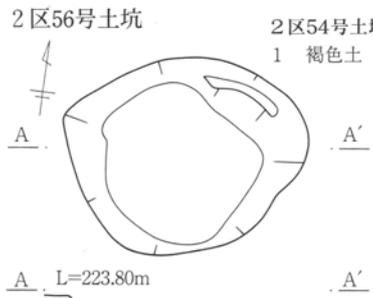
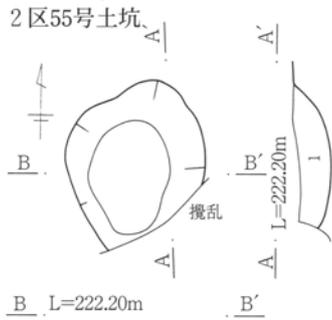
2区51号土坑
1 褐色土 Hr-FA、Hr-FPを少量含む。砂質。締まる。

2区52号土坑
1 黒褐色土 少量のHr-FP、Hr-FAブロックを含む。やや粘性。やや締まる。

2区55号土坑
1 褐色土 Hr-FPを多量に含む。砂質。



2区54号土坑
1 褐色土 Hr-FPを含む。締まる。



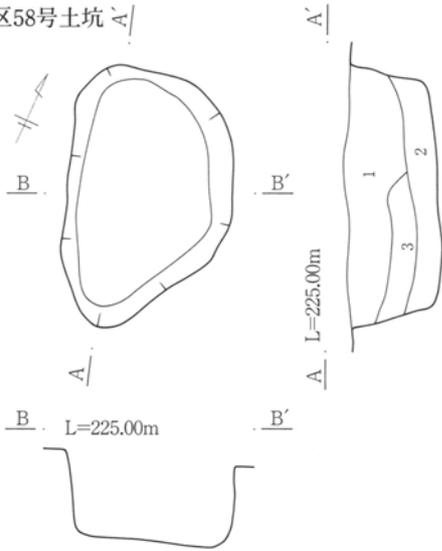
2区57号土坑
1 暗褐色土 Hr-FPを多量に含む。粘性、締まりなし。
2 黒褐色土 Hr-FPを多量に含む。粘性、締まりなし。



第126図 2区49～57号土坑平面・断面図、出土遺物図

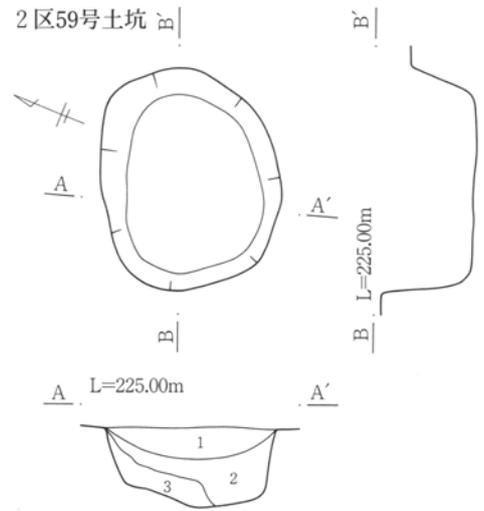
第4章 遺構と遺物

2区58号土坑 A'



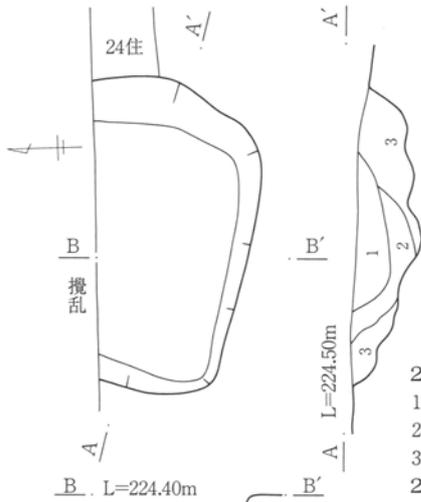
- 2区58号土坑
 1 暗褐色土 Hr-FPを多量に含む。粘性、締まりなし。
 2 黒褐色土 Hr-FPを多量に含む。粘性、締まりなし。
 3 Hr-FP 地山の崩れ

2区59号土坑 B'



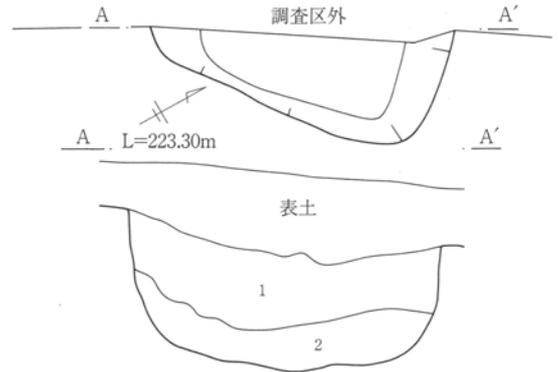
- 2区59号土坑
 1 暗褐色土 Hr-FPを多量に含む。粘性、締まりなし。
 2 黒褐色土 Hr-FPを多量に含む。粘性、締まりなし。
 3 Hr-FP 地山の崩れ

2区60号土坑



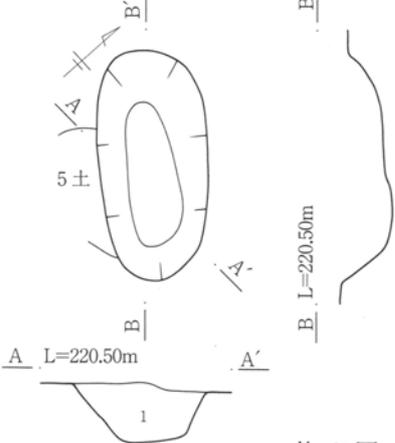
- 2区60号土坑
 1 黒褐色土 Hr-FPを非常に多く含む。粘性、締まりなし。
 2 黒褐色土 Hr-FPを多量に、Hr-FAをブロック状に含む。粘性、締まりなし。
 3 黒褐色土 Hr-FPを少量含む。粘性、締まりなし。

2区61号土坑



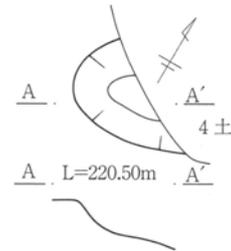
- 2区61号土坑
 1 暗褐色土 Hr-FPを多量に含む。粘性、締まりなし。
 2 暗褐色土 Hr-FPを多量に含む。下層にHr-FAブロックを少量含む。粘性、締まりなし。

3区4号土坑



- 3区4号土坑
 1 黒褐色土 Hr-FPを多量に含む。粘性、締まりなし。

3区5号土坑



第127図 2区58~61・3区4・5号土坑平面・断面図

[4] 土坑墓

諏訪ノ木VI遺跡では、4基の土坑墓が検出された。土坑の内、人骨・銭貨が出土した4基を土坑墓とした。

2区62号土坑（墓）（第128図）

本遺構は137-587グリッドに位置する。24、25、42号土坑と重複し、42号土坑を切り、24、25土坑に切られる調査所見を得た。

形態は隅丸長方形を呈す。規模は長径254cm・短径212cm・深さ22cmを測る。主軸方向はN-19°Wを指す。

土坑内から銭貨と砥石が出土した。出土した銭貨は永楽通宝である。

2区63号土坑（墓）（第129図、PL27）

本遺構は160-597グリッドに位置する。6号土坑と重複し、6号土坑を切る調査所見を得た。

形態は隅丸長方形を呈す。規模は長径218cm・短径157cm・深さ48cmを測る。主軸方向はN-0°を指

す。

土坑内から銭貨が出土した。出土した銭貨は天禧通宝である。

2区64号土坑（墓）（第129図、PL27・28）

本遺構は175-597グリッドに位置する。37号土坑と重複し、37号土坑を切る調査所見を得た。

形態は隅丸長方形を呈す。規模は長径92cm・短径60cm・深さ33cmを測る。主軸方向はN-51°Wを指す。

土坑内から人骨、銭貨が出土した。出土した銭貨は祥符通宝、永楽通宝である。出土人骨については、第5章[3]を参照していただきたい。

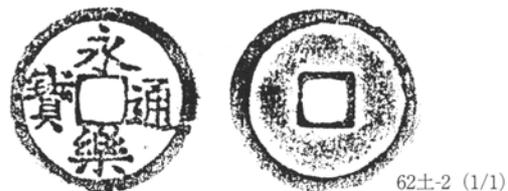
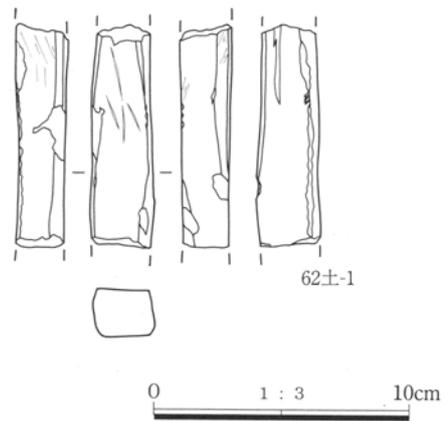
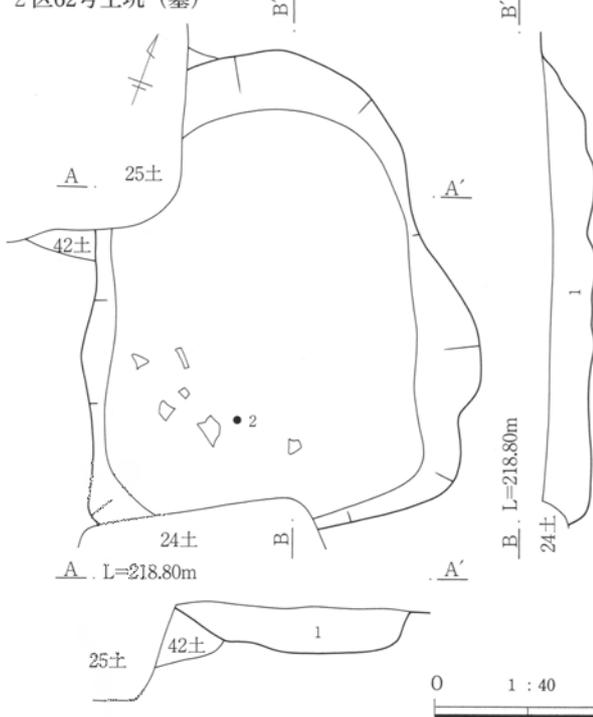
2区65号土坑（墓）（第129図、PL28）

本遺構は163-591グリッドに位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。

形態は不定形。規模は長径65cm・短径40cm・深さ38cmを測る。主軸方向はN-79°Wを指す。

土坑内から銭貨が出土した。出土した銭貨は聖宋元宝である。

2区62号土坑（墓）

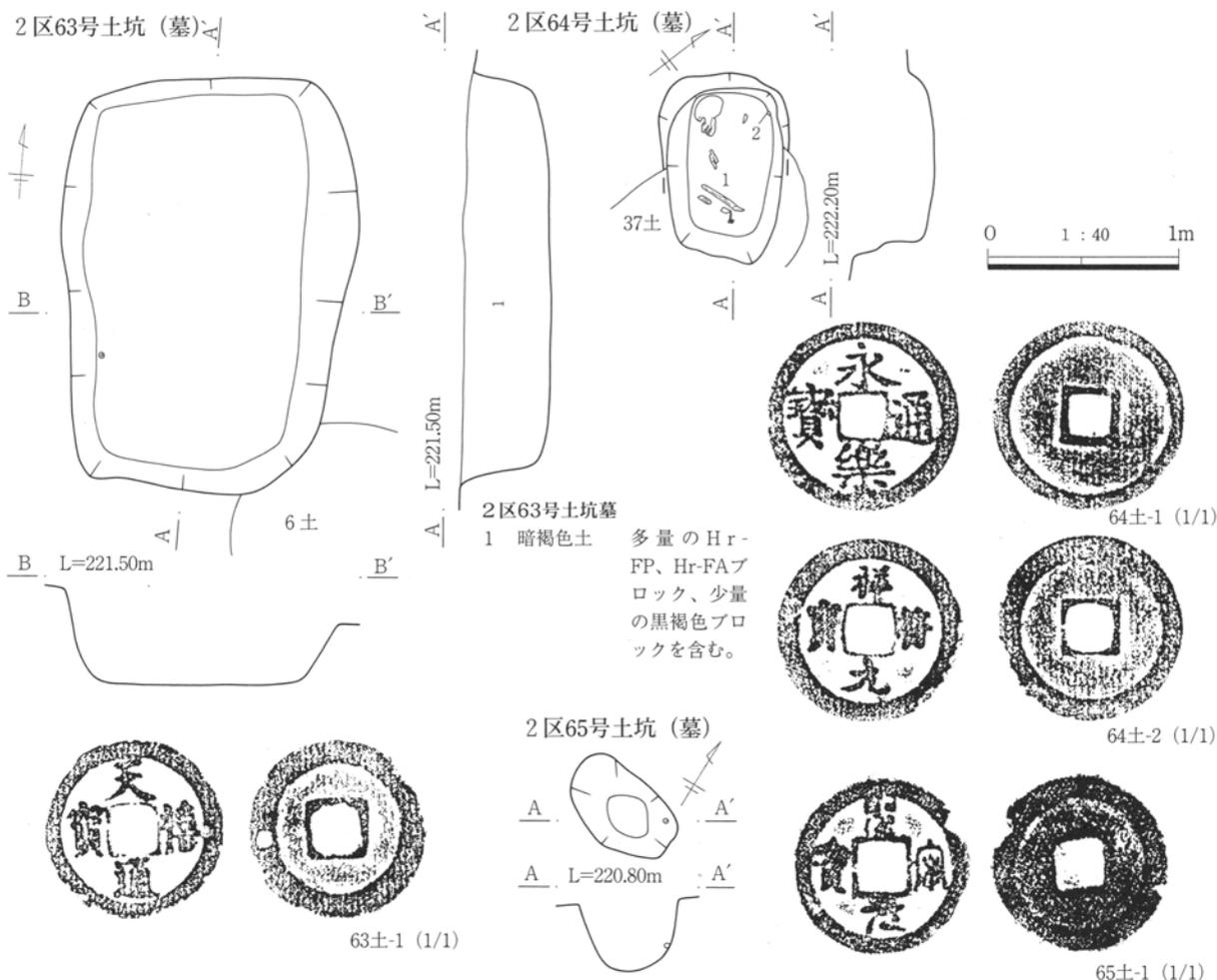


2区62号土坑墓

1 黒褐色土 Hr-FPを多量に、Hr-FAを少量含む。非常に固く締まり、粘性もある。

第128図 2区62号土坑（墓）平面・断面図、出土遺物図

第4章 遺構と遺物



第129図 2区63～65号土坑(墓)平面・断面図、出土遺物図

2区62号土坑(墓)出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値(cm)・特徴など
1	第127図 PL-57	砥石 下げ砥	埋土	2cm前後の径を持つ角柱状で細身の砥石破片。側面4面と肩部の一部に砥面を持つ。各砥面はきれいな面をなし、下げ砥の可能性あり。短軸の両端部は破面。部分的に被熱して吸炭している。長8.8cm、幅2.5cm、厚2.0cm、重71.1g。
2	第127図 PL-57	銭貨 永樂通寶	0 完形	外縁銭径24.50～24.60mm、外縁内径20.65～20.85mm、銭厚1.20～1.25mm、量目2.29g。 铸造年 1587年

2区63号土坑(墓)出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値(cm)・特徴など
1	第129図 PL-57	銭貨 天福通寶	+23 完形	外縁銭径24.10～24.15mm、外縁内径19.05～19.20mm、銭厚1.05～1.10mm、量目2.69g。 铸造年 1017年

2区64号土坑(墓)出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値(cm)・特徴など
1	第129図 PL-57	銭貨 永樂通寶	+5 完形	外縁銭径25.75～25.80mm、外縁内径20.85～20.90mm、銭厚1.20～1.30mm、量目3.29g。 铸造年 1587年
2	第129図 PL-57	銭貨 祥符元寶	埋土 完形	外縁銭径24.95～25.00mm、外縁内径18.80～19.10mm、銭厚1.10～1.15mm、量目2.92g。 铸造年 1008年

2区65号土坑(墓)出土遺物観察表

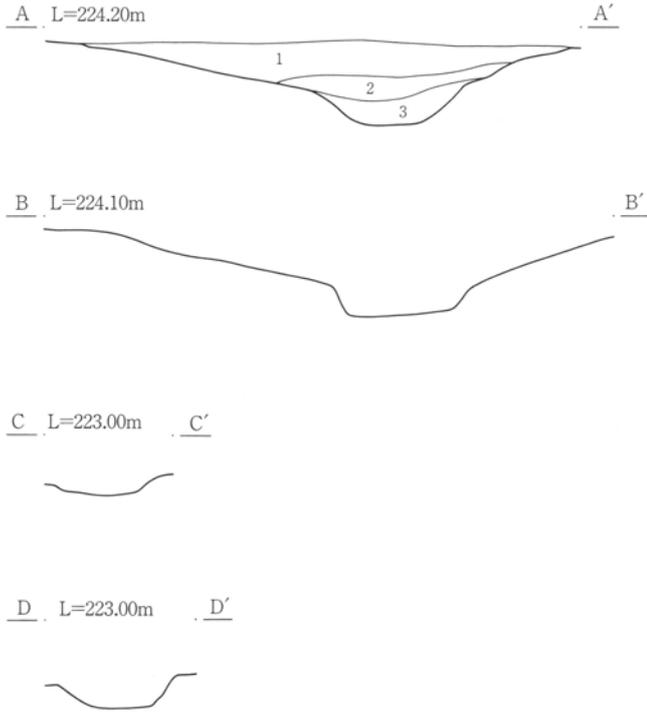
No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値(cm)・特徴など
1	第129図 PL-57	銭貨 聖宋元寶	+5 完形	外縁銭径23.45～23.50mm、外縁内径18.40～18.45mm、銭厚1.15～1.20mm、量目2.78g。 铸造年 1101年

[5] 溝

溝は、2区で1条検出された。検出された2区1号溝は時期を比定できる出土遺物がない。15~17号土坑、19号土坑と重複し、本遺構がそれらに切られる調査所見を得た。

2区1号溝 (第130図、PL29)

2区中央に位置し、ほぼ東西に走行する。確認全長21.2m・最大深54cm、比高差は181cmを測る。土師器片、須恵器片が出土した。本遺構は、傾斜方向に走向しているため比高差が大きい。東側は、削平されており、溝の底部のみが検出された。

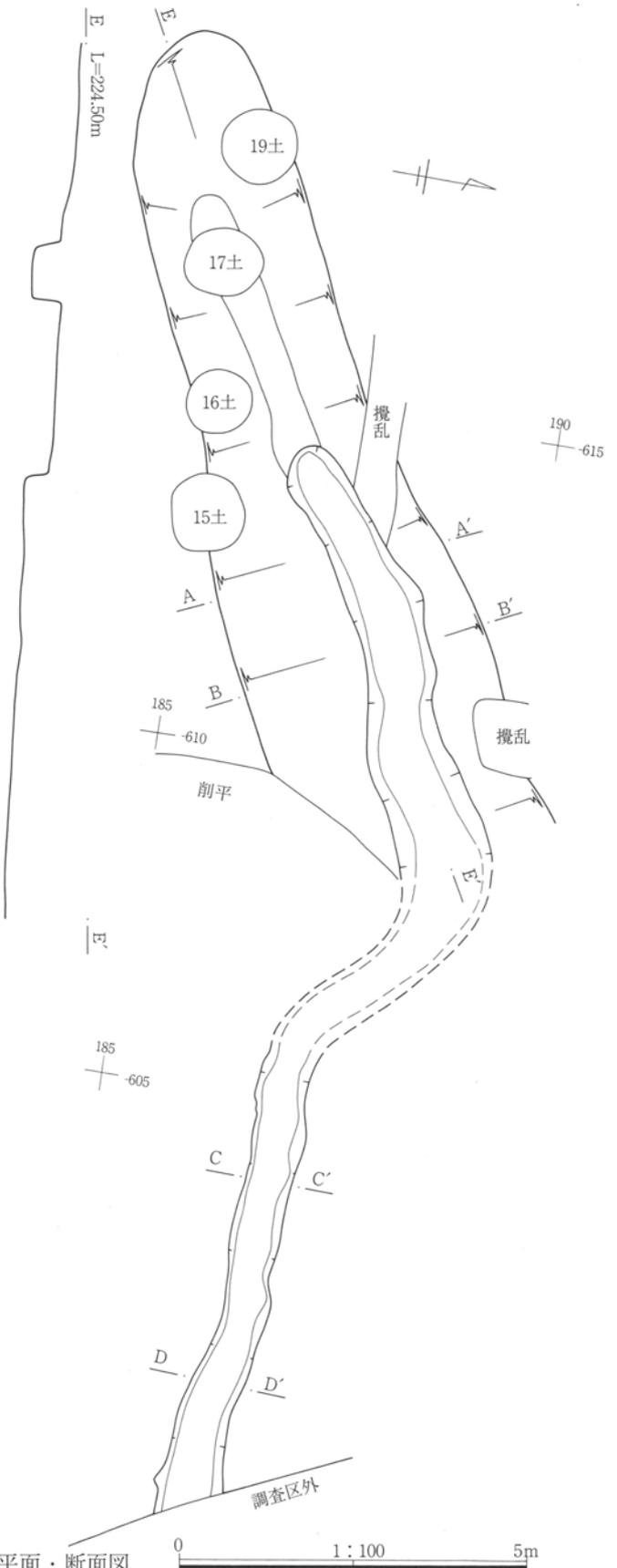


2区1号溝

- 1 暗褐色土 Hr-FPを多量に含む。粘性、締まりなし。
- 2 黒褐色土 Hr-FPを多量に含む。粘性、締まりなし。
- 3 黄褐色土 Hr-FPを多量に含む。粘性なし、やや締まる。



第130図 2区1号溝平面・断面図



[6] 柱穴列

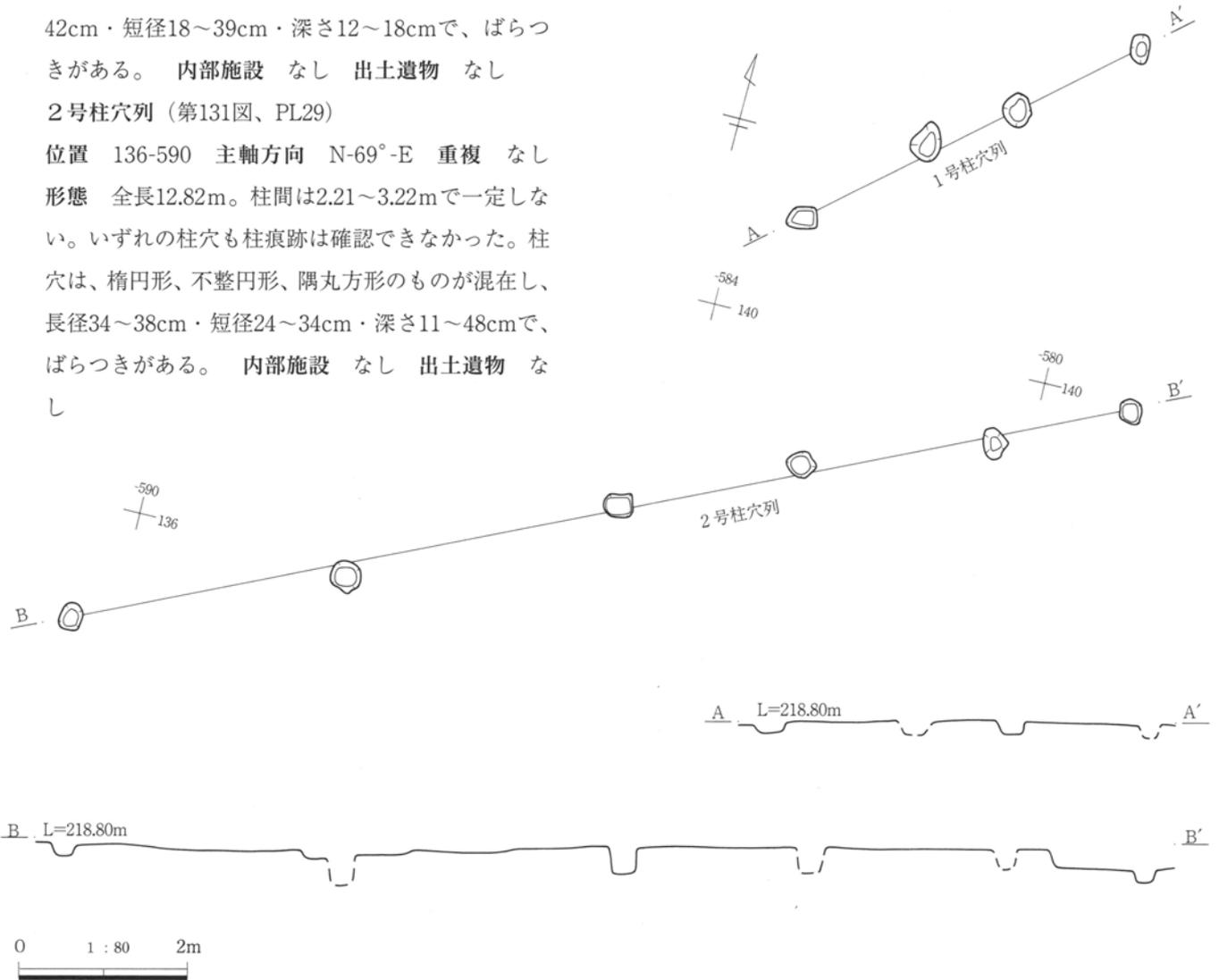
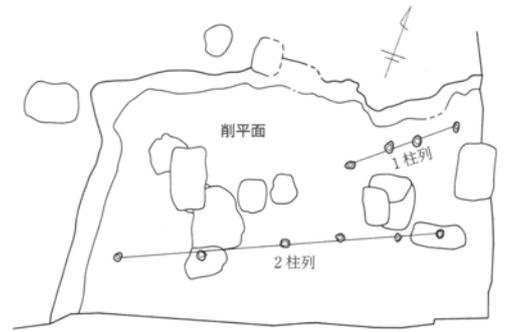
2区南端の削平された区画内に、2列の柱穴列が検出された。検出された柱穴列は、削平された区画に関連する可能性もある。柱穴列や削平面周辺からは、石器、石臼、錢貨などの遺物が出土した（遺構外No.95、99、101、122、127、129）。削平面の北辺際には自然石が多く見られ、石積の可能性が有る。

1号柱穴列（第131図、PL29）

位置 145-580 主軸方向 N-51°-E 重複 なし
 形態 全長4.82m。柱間は1.22~1.78mで一定しない。いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴は、楕円形、不整円形のもの混在し、長径38~42cm・短径18~39cm・深さ12~18cmで、ばらつきがある。 内部施設 なし 出土遺物 なし

2号柱穴列（第131図、PL29）

位置 136-590 主軸方向 N-69°-E 重複 なし
 形態 全長12.82m。柱間は2.21~3.22mで一定しない。いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴は、楕円形、不整円形、隅丸方形のもの混在し、長径34~38cm・短径24~34cm・深さ11~48cmで、ばらつきがある。 内部施設 なし 出土遺物 なし

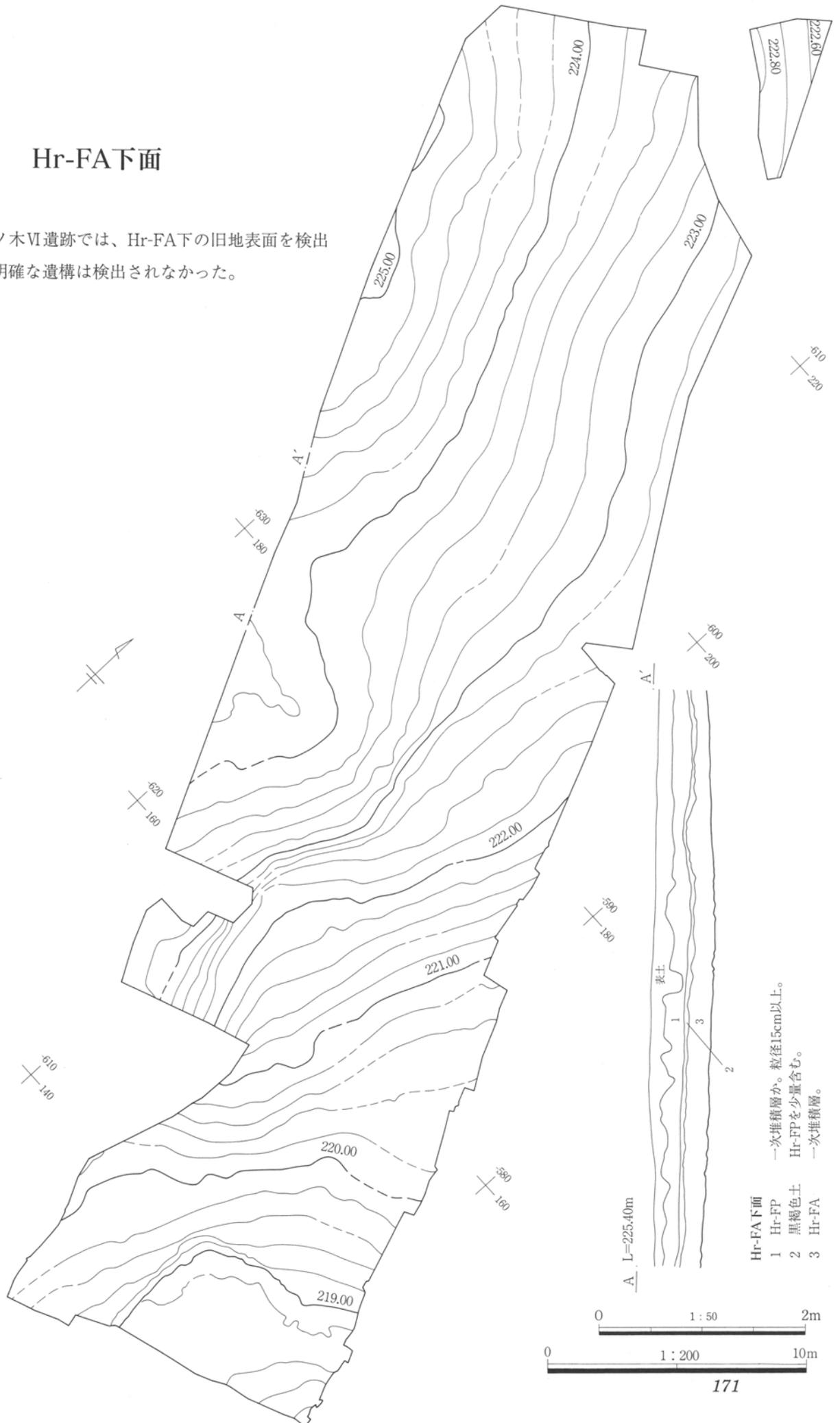


第131図 柱穴列 平面・断面図

[7] Hr-FA下面

概要

諏訪ノ木VI遺跡では、Hr-FA下の旧地表面を検出した。明確な遺構は検出されなかった。



第132図 2区Hr-FA下面

第4章 遺構と遺物

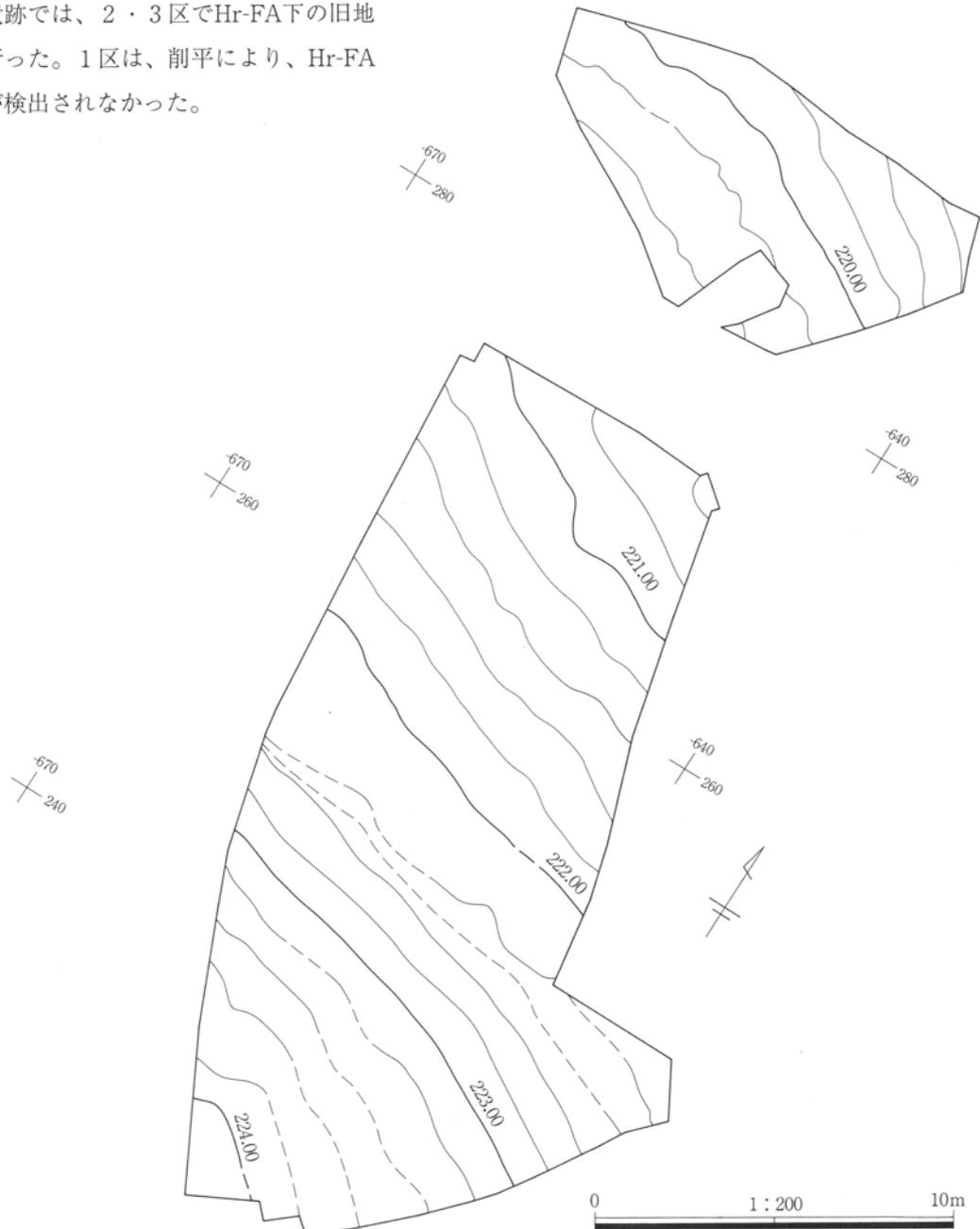
Hr-FPは、谷地のみが残存であり、平坦地にはほとんどない。対してHr-FAは、厚さ30~120cmと遺跡全体に厚く残存している。Hr-FA直下の面はHr-FA降下時の様子をそのまま保存している。

(1) Hr-FA下面 (第132・133図、PL20)

Hr-FA直下の面は、Hr-FAが厚く堆積したために後の攪拌の影響を受けていない。Hr-FA下は、火山災害当時がそのままバックされた、所謂旧地表面である。

諏訪ノ木VI遺跡では、2・3区でHr-FA下の旧地表面の調査を行った。1区は、削平により、Hr-FA下の旧地表面が検出されなかった。

現在の遺跡地周辺では、大きな樹木が生える雑木林も見られる。発掘調査では堅穴住居や土坑などの遺構や、木の根の痕も検出されなかったことから、樹木が取り除かれ、畠作などを行っていた可能性も考えられる。畝などが検出できなかったことから、放置され、草地になっていた可能性も考えられる。

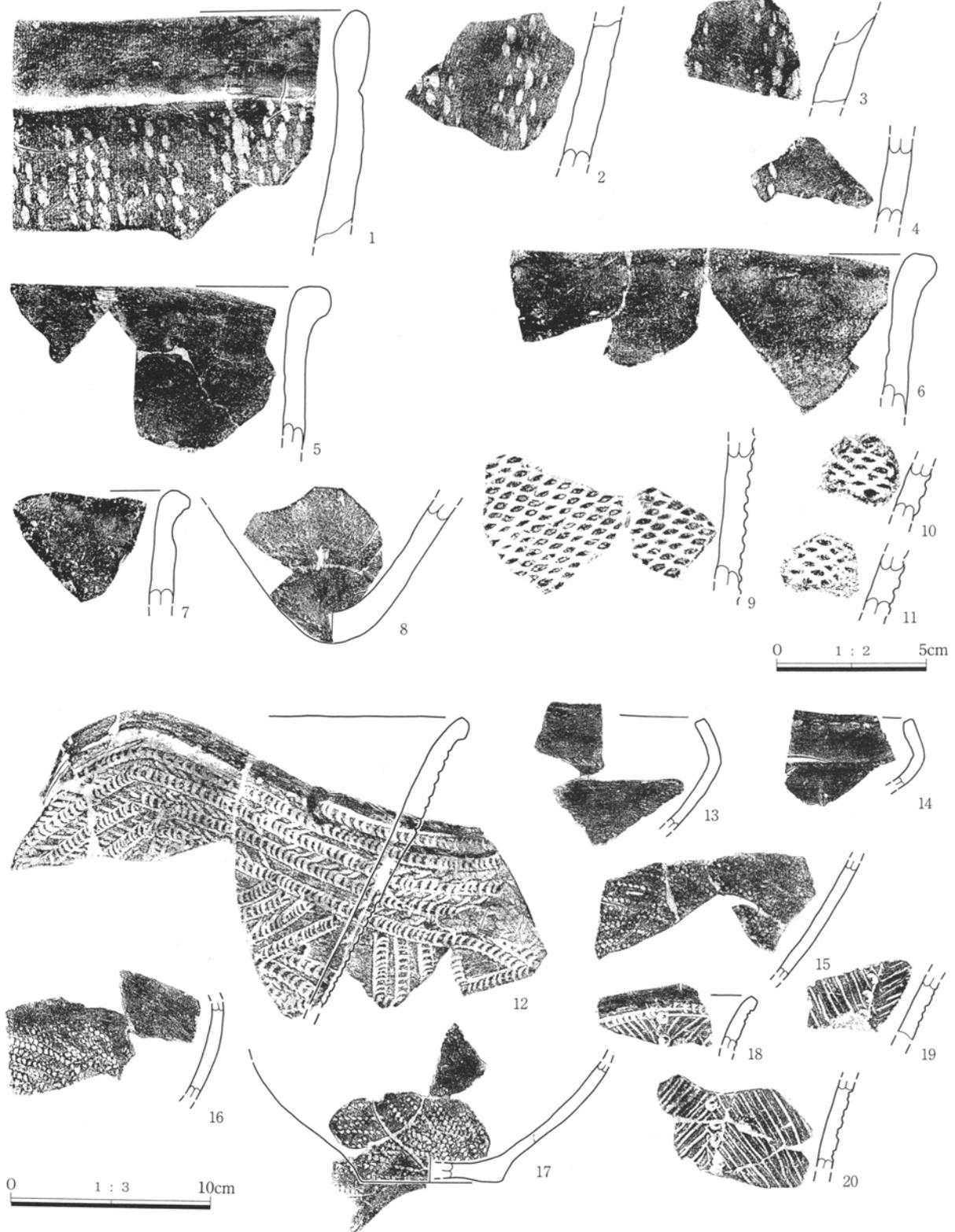


第133図 3区Hr-FA下面

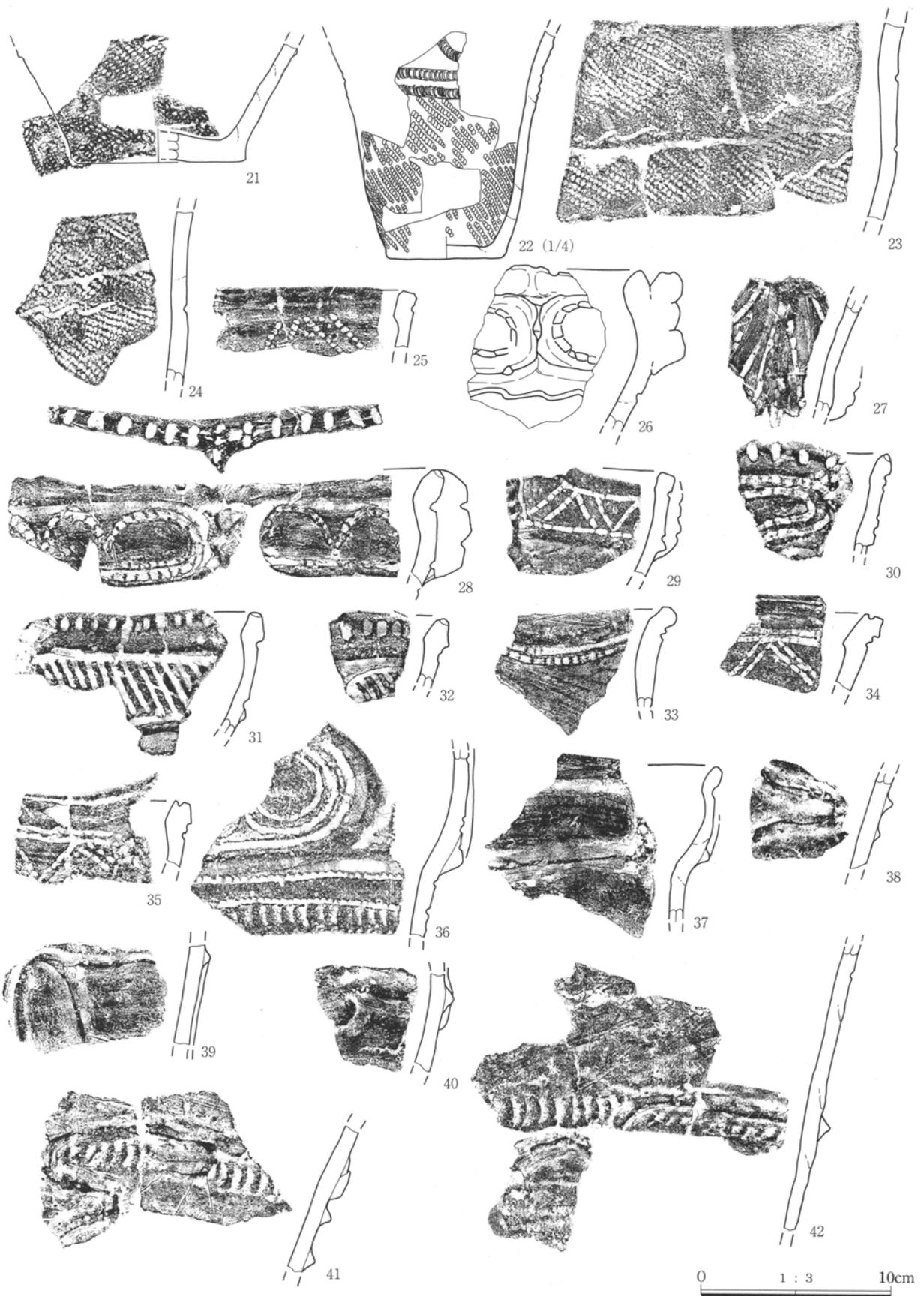
[8] 遺構外出土遺物 (第134~141図、PL58~62)

本遺跡では、遺構に伴って出土した遺物については、それぞれの遺構ごとに掲載した。遺構外出土遺

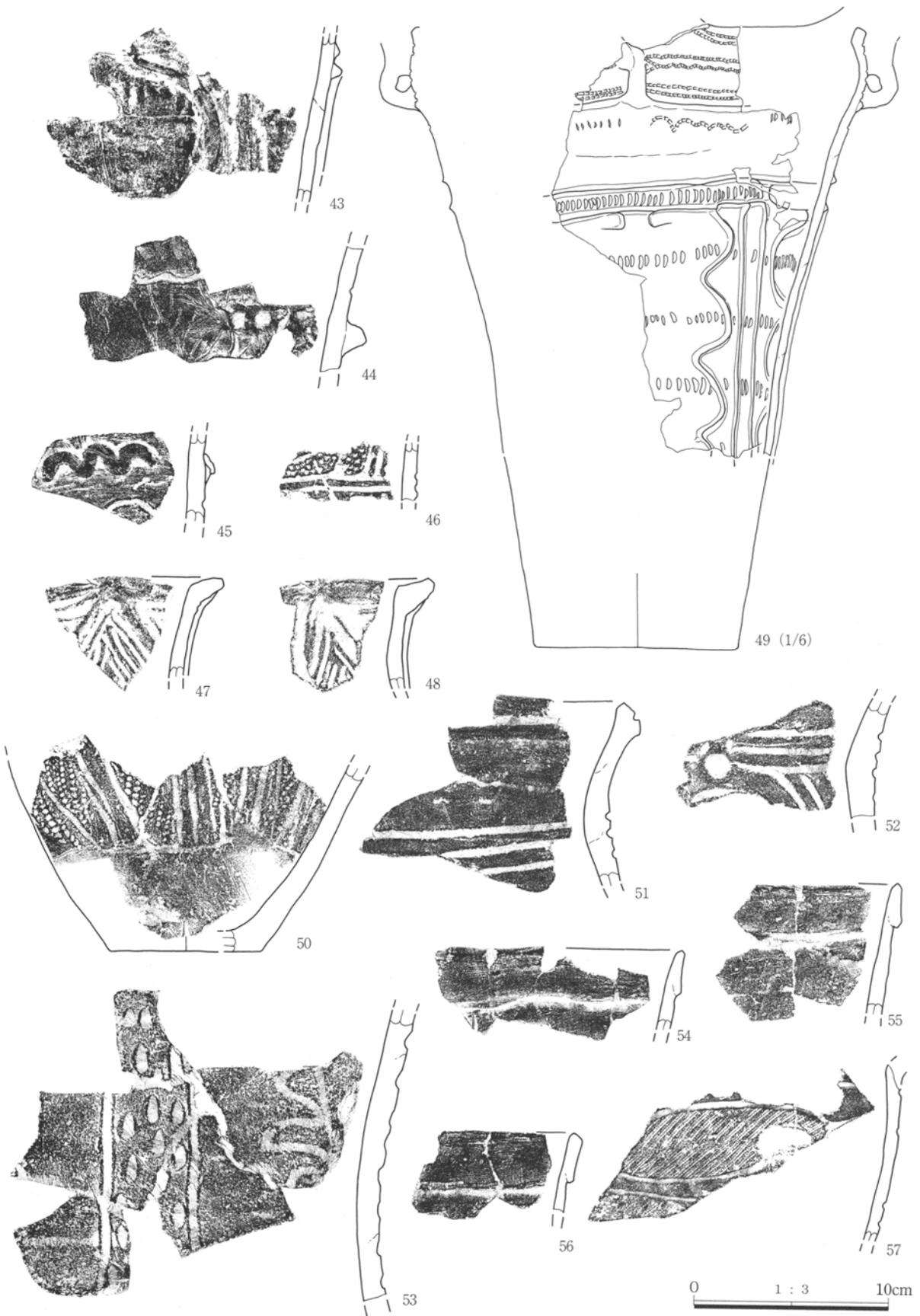
物の掲載は、遺構で出土した遺物より残存率のよいものを選択することを基本とした。



第134図 遺構外出土遺物図(1)



第135図 遺構外出土遺物図(2)



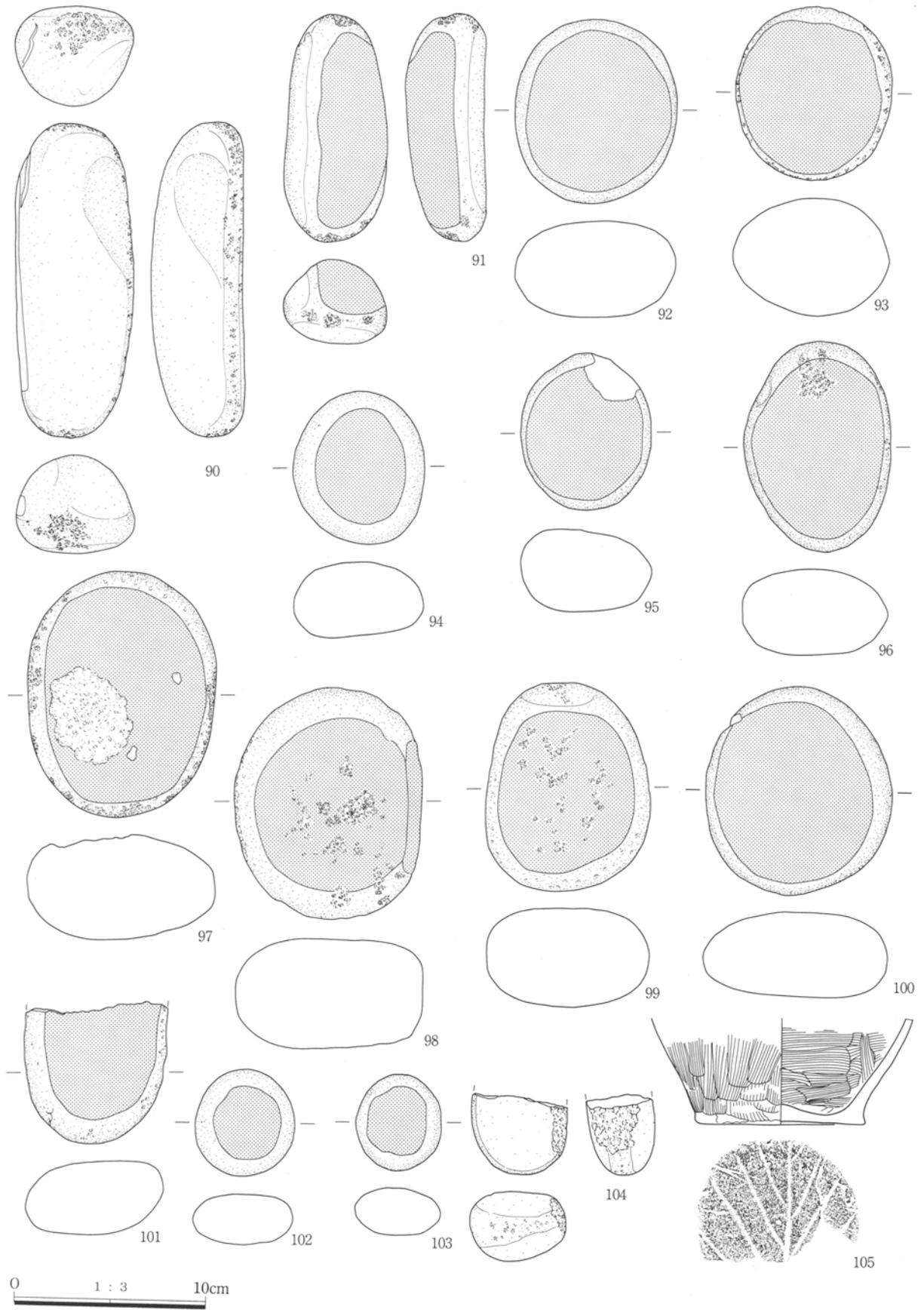
第136图 遺構外出土遺物图(3)



第137図 遺構外出土遺物図(4)

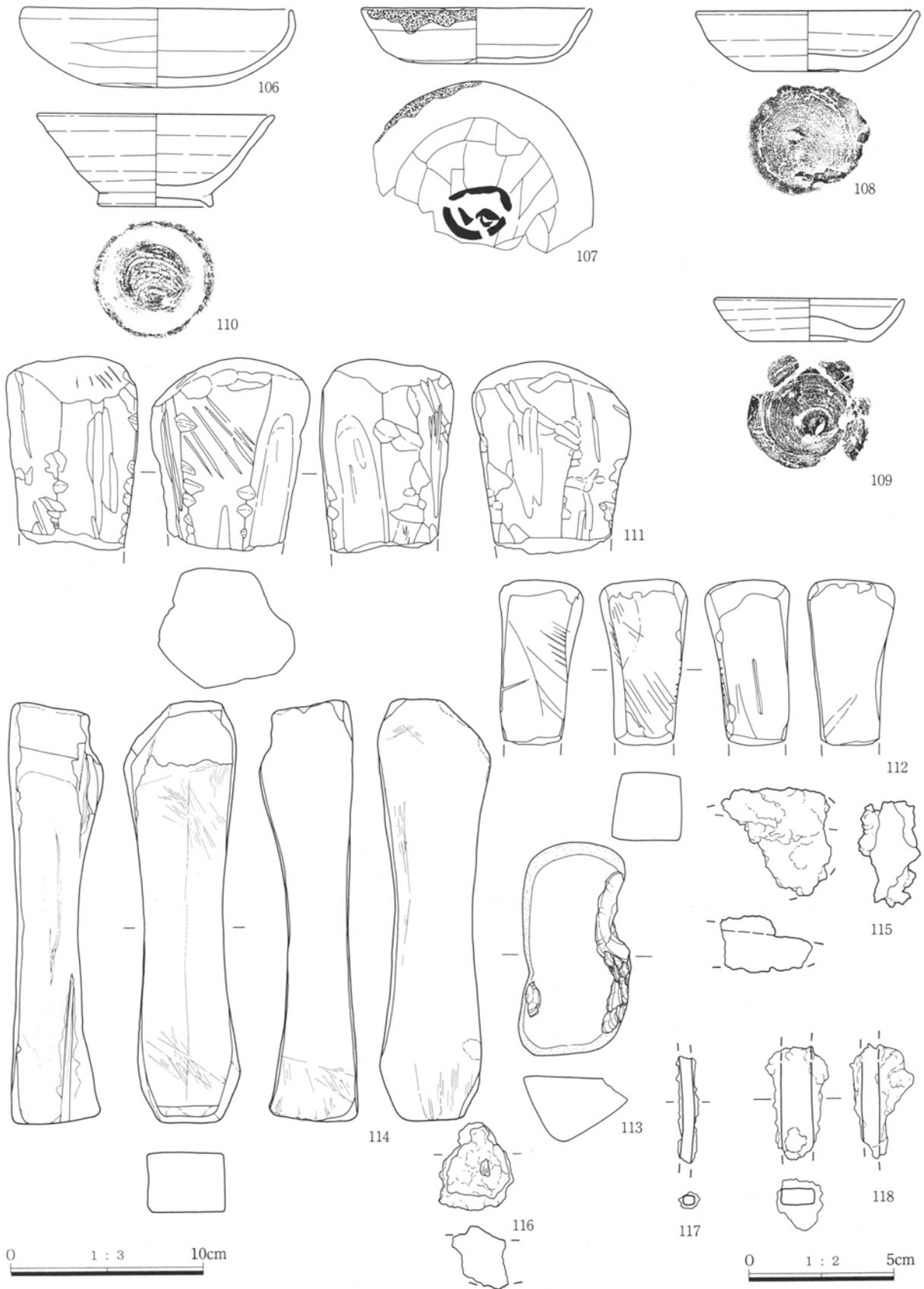


第138図 遺構外出土遺物図(5)

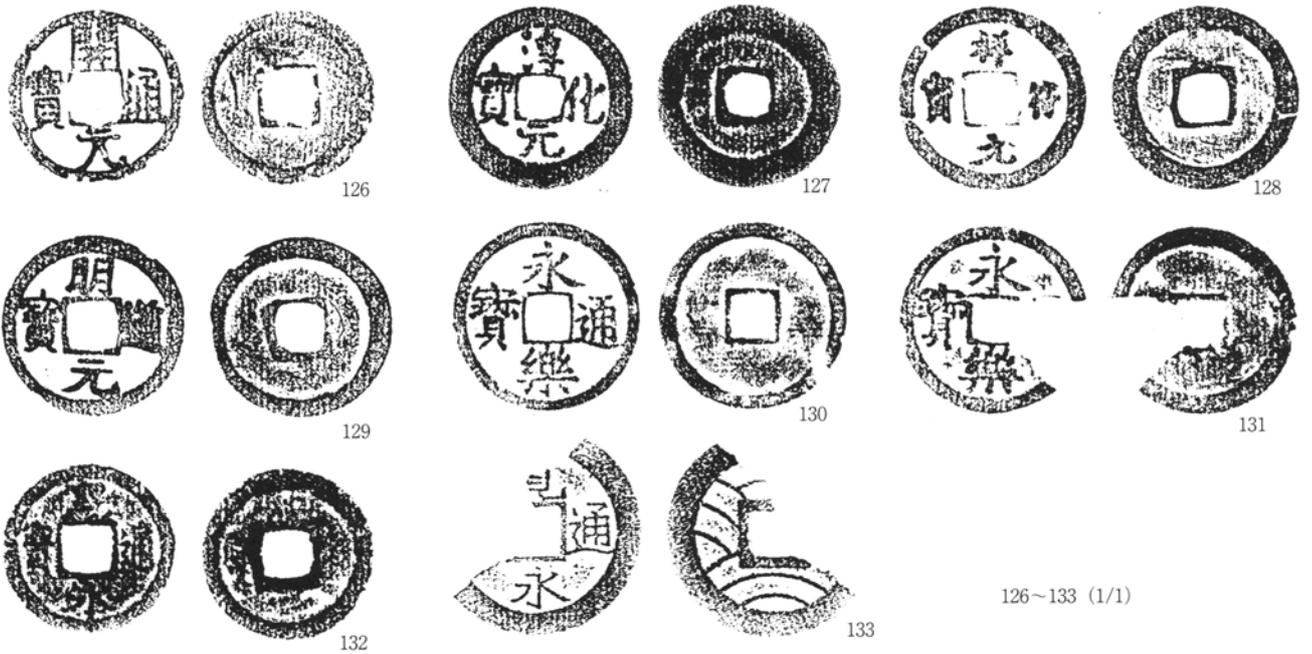
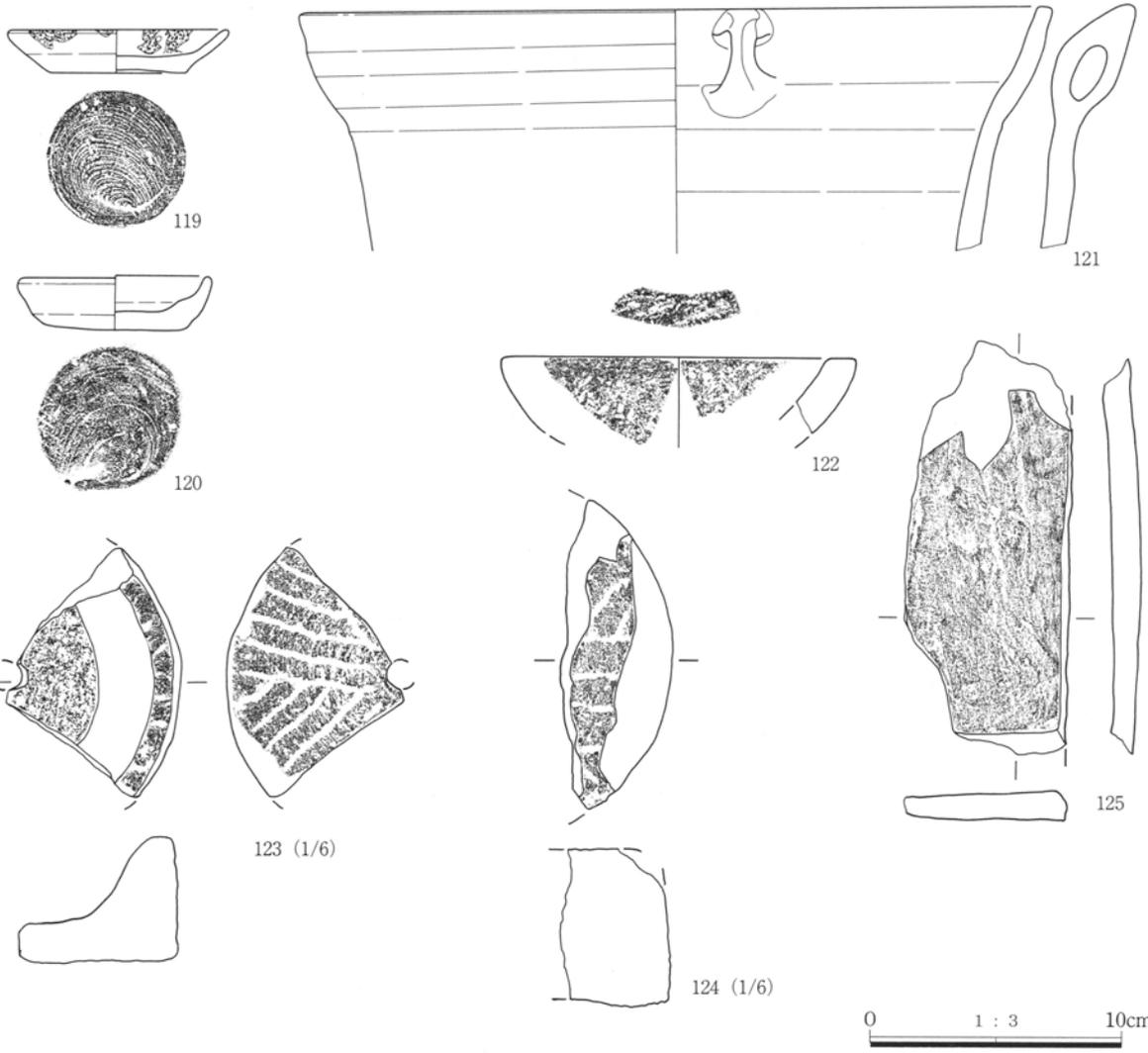


第139図 遺構外出土遺物図(6)

[8] 遺構外出土遺物



第140図 遺構外出土遺物図(7)



第141図 遺構外出土遺物図(8)